

破滅フラグしかない悪役国家に転生してしまった…

ハンバーグ男爵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生先が滅亡の決まったト変態宗教国家だった件

※オリジナル設定、オリジナル名称、独自展開あり、嫌いな人はブラウザバックしてください

目次

1	破滅フラグしかない特殊部隊に所属してしまった…【挿絵あり】	1
2	破滅フラグしかない議会のおじさんたち…	16
3	破滅フラグしかない悪役国家の令嬢に転生してしまった…	27
4	破滅フラグの立ちそうな国に派遣されてしまった…	50
5	破滅フラグしかない国で戦ってしまった…	63
6	破滅フラグは立たなさそうな冒険者グループと接触してしまった…	78
7	破滅フラグを乗り越えた国に遊びに来てしまった…	108
8	破滅フラグしかないワーカーチームと仕事してしまった…上	132
	【挿絵あり】	
9	破滅フラグしかないワーカーチームと仕事してしまった…	156
	下	
10	破滅フラグより毛根が心配な皇帝と会談してしまった…	180
11	破滅フラグどころじゃないフラグだらけになってしまった…	201
12	破滅フラグの塊みたいな奴と相見えてしまった…	230
13	破滅フラグを打ち破るべく策を講じてしまった…	250
14	破滅フラグしかない特殊部隊に背中を任せてしまった…	272
15	破滅フラグを踏み倒してしまった…!	291

1 6	破滅フラグしかない鎧がやって来てしまった…	313
1 7	破滅フラグしかない対談に臨んでしまった…(上)	328
1 8	破滅フラグしかない対談に臨んでしまった…(下)	356
1 9	破滅フラグしかない国へ潜入してしまった…	385
2 0	Side OPS：聖王女でも○○がしたい！	417
2 1	破滅フラグしかないお姫様に会いに来てしまった…	444
2 2	破滅フラグしかない姫様を取り込んでしまった…	464
2 3	破滅フラグしかない国がゴタゴタしてしまってる…	490
2 4	破滅フラグしかない国に衝撃が走ってしまった…	516
2 5	破滅フラグしかない組織を崩壊させてしまった…	545
2 6	破滅フラグしかないお家騒動が起こってしまった…	
574		
2 7	破滅フラグ？しかない王国編エピローグ…	595
2 8	破滅フラグしかない原作開始前小話集 上	622
2 9	破滅フラグしかない原作開始前小話集 下	645
	破滅フラグしかない原作が始まってしまった…	
3 0	異世界生活は極悪ギルドホームとともに	682
3 1	いつものアレ	703
3 2	鈴木悟の憂鬱	716
3 3	ウィッチクラフト・ワーカホリック！	726
3 4	ノーゲーム・ノーアンデッドライフ	758

1 破滅フラグしかない特殊部隊に所属してしまつた…【挿絵あり】

《汝らの信仰を捧げよ…》

とある国、とある建物の薄暗い大広間、荘厳な雰囲気と共に12人の男女が跪き、目の前に鎮座する己が神を模した石像に向かって祈りを捧げていた。

服装は様々、西洋甲冑に身を包んだ騎士風の男も居れば布製の学生服：俗に言う『ブレザー』に近い服装をした女性も見受けられる、更には下着姿にローブ1枚というだらけた服装の者も居るし、なんとも統一感のない格好をした集団だった。だがその行動に一切の迷いはなく、片膝を突き祈る姿は彼等の清廉な信仰心の表れだ。

彼等の願いはただ1つ、「人類存続の為」

しばらくの間祈りを捧げていた彼等は先頭で跪く隊長らしき軽装備の青年に従ってそれぞれの椅子へと戻っていく。

大きな漆黒の丸卓に並ぶ14席の椅子へ全員が着席し、青年は口を開いた。

「おはよう。」

早朝の招集にも関わらず全員揃っているようで何よりだ。」

その口ぶりはやや皮肉っぽく、それを聞き呆れた笑みを浮かべる者もちらほらといる。

視線の先にあるのは2つの空席、片方はほぼ居ないものとして扱われる為本来誰も座ることはない「番外」の席なのだが、隣のもう1つ…13番目の空席だ。

「隊長、あの小娘は何処行ってる？」

「僕に聞かないでくれ《人間最強》、彼女の行方はいつも分からないん

だ。

招集の事は屋敷の執事に伝えたハズなんだがな…」

上半身半裸のガタイのいい大男が茶化すように隊長へと問い掛け、隊長は自嘲気味に笑った。

《人間最強》、とは偽名である。彼等には本来の名前とは別に最高神官長により与えられたコードネームを名乗る事が許されており、相応の実力者である証明。

この国では最高の榮譽に当たる事だ。

「遅刻だなんて、信仰心の足りていない証拠です。」

後で説教をしてやらなくては。」

「いやあ、今更でしょ。ていうかあの人に説教なんて意味無いって、時間のムダく…」

まるで聖女か天使の様な神々しい風貌をした女性が憤慨する横で、下着姿で机に突っ伏している少女がひらひらと手を振っている。

《神聖呪歌》と《無限魔力》は居場所を知らないのか？」

「知りません（知らなーい）」

「というか、彼女の行方ならば《一人師団》か《疾風走破》に聞くのが一番早かろう。」

「それもそうだ。なあ、旦那様よ？」

「……僕は知らない。」

そう小脇をつつかれた《一人師団》と呼ばれた彼は心底居心地悪そうにしている。

それを見て、件の彼女に関して彼には頼れないなど直感し隣のブレー姿の少女に目を向けた。

《占星千里》、予言は…」

「あるわけないでしょ。」

「……だろうな。」

予言を行える異能を持つ少女に一縷の望みを掛けてみたが取り付く島もないとはこの事か、そろそろ隊長は頭痛がしてきた。

「義姉ねーちゃんなら一昨日の夜から行方不明だよん。」

部屋に書置きがあったから、大方いつもの放浪癖なんじゃない

？」

「《疾風走破》、書置きにはなんと？」

「アツポウペエが食べたいのですわ！」だってさ。」

金髪猫目に軽装の少女《疾風走破》の微妙に本人に似せた声真似に
なんのこつちやと首を傾げ、本日何度目か分からないほど皆が呆れる
中、唐突に広間の扉が凄まじい勢いで蹴り開けられた。

皆が身構え、静まり返る堂内に淑女の声が響き渡る。

「ごっつきげんようですよ皆の衆!!!」

かの大国、スレイン王国には一部の者しか知り得ない秘密の特殊部隊が存在しているらしい。

六色に分けられたその部隊は、日々亜人達から虐げられている人類を救う為日夜奔走している。その中でも特に秘密性の高く、人智を超越した戦闘力を持つ者だけが選ばれた《漆黒》を冠する組織。

部隊名は《漆黒聖典》

死の神を崇拝し、国宝を護る為組織された特殊部隊だ。

ただし、問題が1つ。

神の子孫たる神人のみが入隊できるこの聖典は国中から集められ

た信仰厚い面々、色々ときゃらが濃い。

宗教によつて国をまとめ、人々の意志を強くするのがスレイン王国の組織形態であるが故なのか、入隊してくる漆黒聖典の面々は如何せん扱いが非常に難しいのだ。特に此処には居ない番外席次なんかがいい例である。

そうでなくても特殊部隊という立場なので先述した他の部署聖典や外部との積極的なコミュニケーションも取りづらく、組織内でも浮いている。

まあぶつちやけ皆人間辞めちゃった超人集団でなんでもありなんだから人格面はほつといても仕事に差し障りないだろう。とはこの部隊の指揮官であるレイモン・ザーグ・ローランサンの言であった。彼も今は引退した身ではあるが過去に漆黒聖典に所属しており、この部隊の扱いを充分に心得ている。

そんな中、隊長である歳若い彼はそんなメンツをよく纏めている方だと思う。

だがしかし、この女！

第13席次はワケが違った！

その容姿は世の男達が振り向くであろう長身でスタイル抜群のボディに太ももまで届く銀の髪、そして法国でも珍しい黄金の瞳が印象的な美女。礼服のように真っ黒なドレスの上から雪のように白く輝くストールを首に掛け、これまた真っ黒な軍靴に似たブーツを履き、両手にはワインレッドの薄手袋。

彼女こそ本来存在しないはずの十三番目インピジブル、その名を……

「第13席次」《獄界絶凍》、レイラ・ドウレム・ブラッドレイ」

早朝から華麗に参☆上☆ですわ！」

バアアアアアアアンツ!!

広間に響き渡る突然の大声に寝落ちしかけていた《無限魔力》はビ

クツと身体を震わせる。

他のみんなは一瞬ぎよつとしてポカーンだ、もしくは虚無だ。約1名「殺せ…殺してくれ…」と頭を抱えて呻いていたが。

「本日もお日柄よく、雁首揃えてご苦労様ですわね！早朝会議と聞いて私、アゼルリシアの山間から飛んで来ましたわ！

ええ！文字通り《飛行》^{フライ}を使って！」

おーっほっほっほっほー！と閑静な議事堂内に高笑いが響き渡る。隊長は白目を剥いていた。

そんな彼の気も知らずにタイルをかつん、かつんとブーツが鳴らし片手に巨大な銀の御盆を載せたレイラが自分の席へ歩いていく。同時に甘くいい香りが起き抜けで朝食も取れていない面々の鼻腔を擦り、胃袋がアップを始めたようだ。

絶対中に美味しいもん入ってるだろ。食欲旺盛な男性陣は食い入るように御盆を凝視している。

「あー…《獄界絶凍》。言いたい事は色々あるんですが取り敢えず礼拝を済ませて…」

「っ！オットそうでしたわね私とした事が！」

正気に戻った隊長に指摘され、御盆を机に置く直前でくるつと踵を返し、それに従って男達の視線もぐるつと一回転。

先程まで隊長達も拝んでいた石像の前へうやうやしく御盆を置き、軽くカーテシーをするレイラ。

「……」

そして何故かもう一度カーテシーを行うレイラ

ぱんっ！ぱんっ！

柏手を2回鳴らし最後にもう一度石像へ向かいカーテシーでめた。

そして何事も無かったかのように再び御盆を手にもう一度はちやんと机に載せ、呆気に取られる他の面々も気にせず悠々と自分の椅子へと座るのだった。

「さあ隊長、本日の議題はなんでしょう？」

早朝からこの私を呼び出す程の事ですが、余程の事態が…」

「いやちよつと待て（待ちなさい）!?!?」

思わず叫ぶ《神聖呪歌》と隊長の声が重なった。

「……………はい?」

「いや貴女…なんつ…何なんですか今の礼拝は!?!」

「なんもかんもありませんわ、我が家に古くから伝わる礼拝の作法でしてよ。たしかお母様は『ニレーニ・ハック・シユイツチレー』と呼んでましたわ。人の名前みたいですわよね。」

「はあつ?!?聞いた事ありませんよそんな作法!!!」

「そういうえば皆様の前で礼拝するの初めてですものねえ…私としては最後のカーテシーでスカート捲る高さに拘っていて…」

「いやいやいや!拘りを聞いてるんじゃないのよ《獄界絶凍》!貴女の礼拝絶対おかしいわ!?!」

「むっ!我が家の礼拝にケチ付ける気ですのナツちゃん、いくら共にお紅茶を嗜む仲とはいえ貴女に我が家の伝統をどうこう言われる筋合いはありませんわよ?」

「貴女のお家は昔からそれなの…?（驚愕）」

あと職場で『ナツちゃん』は止めなさい!《神聖呪歌》で呼んで!」

やいのやいのと2人が捲し立てるもレイラは何処吹く風、5分くらい口論になった後最終的に「用意したお菓子が冷めますわよ?」という彼女の一言により渋々2人は引き下がり、事なきを得た。

「はア…はア…朝から無駄な労力を使った気がする…」

「気張り過ぎは身体壊しますわよ隊長?」

誰のせいだと思ってるんだこの女ア…と口から漏れかけたのをすんでのところで飲み込んで、代わりに特大の溜息を吐く隊長。

気を取り直して、早朝に集まって貰った理由と、レイモンから賜った仕事内容を記した羊皮紙を配布し説明するのだった。

なおレイラは同じタイミングで御盆の中身（巨大なアップルパイ）を公開し切り分け他の隊員に与えていた。勿論隊長の説明など頭に入るわけも無い。

「……以上が漆黒聖典の今後の活動方針となる。

トブの大森林奥で観測された魔力の歪みの正体もふまえ《占星千里》の予言は近いうちに必ずやってくる、とレイモン様はお考えだ。

巫人共の動向にも注意し、人類の存続の為奮闘する必要がある。いいね?」

「予言が起きる事を予言するって、これもう分かんねえですわね。」

「……では今日はここまでにしよう、各自解散してくれ。」

レイラのツツコミは綺麗に無視された

「~~~~♪」

巨大なアップルパイは漆黒聖典全員により無事完食され、上機嫌で皿を片付けるレイラのもとに駆け寄ってくるのは《疾風走破》と呼ばれた猫目の女の子。名前はクレマンティヌという。

「ねーちゃん!」

「あらあらあらあ、甘えん坊ですわねクレマンティヌ。」

胸に飛び込んでくるクレマンティヌを抱きしめ、頭を撫でる。甘えてくるその姿は本物の猫のようだ。(そんな事本人の前で言えば串刺しにされるのは目に見えているので誰も何も言わないが)

「2日も何処行つてたのさ、一緒に訓練できなくて寂しかったんだよー?」

「ふふ、急に食べたくなつたものですから。書き置きだけして屋敷を飛び出してしまいましたの。」

でも苦勞して採ってきた甲斐がありましたわ、美味しかったですよ

う?」

「うん、チョー美味しかったよお。アツポウペエ…?だっけ?」
「ええ、ええ。」

アゼルリシア山脈の森の奥地で見つけた林檎で作ったアツポウペエですわ! レシピを考えましたので、ちよつと作ってみましたかっただすの。

採れた林檎はちよつと金ピカで眩しかったですけど、皮ア剥いて生地に入れちまえば同じですわね!」

「えっ金ピカ…? その林檎金ピカだったの?」

クレマンティーヌの知る林檎の皮は赤だ、それは漆黒聖典…いやスレイン法国の者なら誰でも知っている常識。なのにそれが金…?

急に顔色を変えた第三席次、黒のフードを被った魔法詠唱者らしき風貌の男がレイラに詰め寄っていく。

「おいっ 《獄界絶凍》! いいいい今の話本当か!？」

今しがた我々の食った菓子の中には金色的林檎が使われていたと…」

「ん…? どうなさいましたのクロ…んんっ 《四大精霊》。」

確かに、金色的林檎でしたわねえ。アルゼシリアの山奥の…よく分からない遺跡の奥に生えてた木に成っていましたの。道中で森妖精^{ドレイド}やらゴーレムやらが邪魔してきたので処理が面倒でしたわ。」

まっ、最終的に遺跡ごと纏めて全部氷漬けにしてやりましたけれど! おーっほっほっほっほ!」

と、自慢げに語るレイラとは裏腹に 《四大精霊》の顔から感情がみるみる抜け落ちていく。

「あらあらア…? どーなさいました?」

困惑するレイラに気の毒そうな面持ちで下着姿の 《無限魔力》がふわふわと漂ってきて、ぽんつと肩に手を置いた。

「《獄界絶凍》ちゃん。その林檎ね、多分だけど 《四大精霊》^{おっさん}がずっと探してた素材アイテムだと思っの。」

「……ほわあい?」

『知恵の実』って言ってね、六大神様が遺した資料にあったよ。持つ

者に更なる叡智を授ける魔法の果実なんだって。

魔法の素材としても貴重で六大神様も所持していたらしい文字通り「神の果実」。それを切り刻んで焼き菓子にしちゃうなんて…」

「あらあくそおだったんですの。」

「ち、因みに貴様が林檎を採ったというその遺跡は…」

「脱出した時に谷底へ遺跡ごと真っ逆さまでしたわね。」

今度こそ《四大精霊》の魂が抜けていくさまが見えた

「《四大精霊》が死んだ!」

『この人でなしっ!』

一生を懸けてでも得ようとしていたマジックアイテムを知らない間に菓子に混ぜて食わされていた。

可哀想な彼を哀れんだのか隊長含めた他の男達が悲痛な表情で叫ぶ。

流石に気の毒に思ったのか、レイラも取り繕うように白くなって意気消沈した《四大精霊》に向かって笑顔を向けた。

「ご、御安心なさいな!」

皮…そう!皮なら切った後のものが残ってますわ!」

「…何ッ!?それは本当か!」

「ええ!今でも我が家のゴミ箱に皮が残って…あつ、でも行きがけにメイド長がゴミを纏めているのを見ましたわね…もしかしたら手遅れかもしれないですけど…」

「ツツツ〜!!!《飛行》っ!」

大声で叫ぶ《四大精霊》、魔法で浮力を得た彼は一目散に広間を飛び出し空の彼方へ消えていった。目的地は…大体察せるだろう。

「…まさかあの人、他人の家のゴミ箱を漁る気じゃないですよね…?」

「さ、流石にそれはねえだろあの人に限って。ハハハ…大丈夫だよな?」

「ははははは…」

第二席次と第六席次が顔を見合せ乾いた笑いを浮かべる。

「つていうか私達、そんなモノが入ったお菓子を食べさせられてたの

…？確かにものすんごく美味しかったんだケド。」

「まあ皆様に毒や呪いの類は付与されていないようですし問題ないかと…寧ろ調子が良くなっただけです。」

「食った後妙に身体が軽いと思ってたら、そういう事だったのか。」

…まあ偶然にも神の供物を賜ったという事で、納得しよう。」

ひそひそと《占星千里》と《神聖呪歌》が話す横で眉間に指を当て呻く隊長はもはや色々諦めている。

この部隊の隊長を勤めてから結構経つが、この女の奇行には毎度毎度頭を悩まされていた。

何処から捕まえてきたのか、自身の管理する領地の警備にフロストドラゴンを起用したり…

領内に巨大な工廠を建てたと思ったら、これまた何処からか連れてきたドワーフ達をそこで働かせ、武器や装備を開発したり…

「奴隷エルフメイドとか属性盛り盛りで最っ高にc o o r ですわね！」と言って自身の屋敷にエルフの奴隷を連れてきてメイドとして教育していたり…

何かと奇行の目立つ彼女であった。

（またレイモン様に報告しなければならない事が…全く対応に困る人だ。

だが、フロストドラゴンを連れだした衛兵が国境付近の領地で警備をする事で亜人達への牽制を行い、国の負担が減っているのもまた事実。

工廠から提供されるドワーフ産の武器も他とは比べ物にならないほど頑丈で、性能も良い。何より彼女の音頭と酒を提供すれば喜んで働いてくれるのが奴隷にして無理矢理従えるより手間も掛からず楽だ。

そして俺など優に越え、《絶死絶命》に匹敵する程の実力を持つ《獄界絶凍》…国としても俺個人としても頭が上がらないんだがな。）

スレイン法国は「人類主義」を国是とする宗教国家だ。弱い人類は団結しなければ亜人や異形種に対抗出来ないとし、国民には潜在的な亜人種への排除意識が存在している。

隊長自身も亜人やビーストマンには嫌な思い出しかないし、彼らが自分達人間を『餌』としか認識していないであろうことも理解していた。だから排除を掲げ、今まで多くの亜人種をこの手で葬ってきた。しかし、レイラは違った。

『人類は生き残るため、あらゆる手段を講じて強く在らねばなりません。』

個としての強さだけでなく群れとしての強さが今の私達には必要なのです。故に排除のみを掲げるのではなく、手を結べる相手とは種族問わず手を結び、共に歩むべきですわ。

人類だけではどうにもならない問題もエルフやドワーフの知識、ドラゴンの手助けがあれば解決するかもしれません。選択肢は多い程良いのです。

腕力ではなく頭で、考えて行動しなければ。

排除する事ばかり考えていては中央政府のクソジジイ共みたいになつてしまいますわよ？

それに私まだ死にたく無いのです、私達のような中途半端な強者なら尚更頭ア使つて生き残るんですわよ！』

これがエルフ達をメイドに雇った際、流石にやり過ぎだと隊長がレイラを問い詰めた時に放った言葉である。因みにこの後口論の末アームロックをかけられた隊長は屋敷の窓から放り投げられた。

その日から漆黒聖典隊長の任を務める彼にも、今のフランスの管理体制について疑問を抱く事が日に日に多くなつている。

(潰してばかりでは新しいものは生まれない、ということか。)

だが彼女の最後の台詞、どうしてああも必死だったんだろうか。)

自分やあの番外席次と並ぶフランスで数少ない神の血を完全に覚醒させた強者、その余りある強さから派遣先の竜王国では『銀の戦女神』と比喩されるような彼女が自分を「中途半端」と言い、「死にたくない」とあそこまで必死になるのは何か理由があるのではないか。

そう思わずにはいらなかった。

(それにしても、彼女が来てから漆黒聖典も賑やかになったな。)

法国最強の特殊部隊、《漆黑聖典》。

外部からほぼ隔絶されたこの組織は本来ならもつと陰鬱で、今日のような会議終わりに無駄話をするような者はいなかった。居れば背教者の謗りを免れない。人類を護るという大役を引き受けた身である彼等には仲間内で冗談を言い合うだけの心の余裕すら無かったのだ。

清廉な信徒なのはいい事だが、人間として最低限のコミュニケーションも必要だし部隊の雰囲気も大事である。彼も心の片隅ではそう考えていたが、なまじ隊長という立場である為易々と口に出すこともできず内心歯痒い思いをしていた。

そこにやってきたのがレイラ、《獄界絶凍》という爆弾である。

部隊統括者レイモンからその実力を認められ、満を持して本来存在しないはずの13席次という地位に就いた彼女は着任早々「親睦会ですわ!」と豪語しこの荘厳な広間であろう事か綺麗な飾り付けを施して、料理で隊員達をもてなしたのだ。全員参加を強要され、来ない者は彼女が直々に連行してきたりとかかなり強引だったが彼女の料理の腕も相まって結果は好評だった。特に男性陣は隊長を含め胃袋を掴まれてしまったのか、彼女が出席する報告会には必ず顔を出すようになり、メンバーのコミュニケーション向上に繋がっている。聞くところによると女性陣には定期的に「女子会」と称して自分の屋敷に招待しお茶を振る舞うなど、心を砕いているそう。

そして彼女の登場で最も変わったのは誰だろう、クインティア兄妹だ。

第5席次《一人師団》、本名クアイエツセ・ハイゼア・クインティア。第九席次《疾風走破》クレマンティーヌ・ハイゼア・クインティアの2人は家族ぐるみでレイラと付き合いがあるらしい。というかレイラは名義上はクアイエツセの許嫁だ、クレマンティーヌは義妹にあたる。

クアイエツセは《一人師団》の名を持つ程優秀なビーストテイマー、だがレイラの前だと普段の聡明で厳格な彼が想像もつかない程大人

しくなり、彼女の言動に振り回され言葉少なになってしまふ。あれはきつと俗に言う「嫁の尻に敷かれる」というやつなのだ。隊長は察した。クアイエツセには強く生きて欲しい。

《疾風走破》、クレマンティーヌは普段の残虐性がなりを潜め、借りてきてた猫の様に大人しく義姉に甘える素振りを見せる。これがレイラを前にした普段の姿なのだろう。ただただ仕事をこなす装置ではなく彼等も人間なのだ、隊長は安心していった。

「隊長、そろそろ私も失礼致します。

ほらクレマンティーヌ行きますわよ。クアイエツセ様も。」

「はーい。」

「う…む、分かった…」

「……？クアイエツセ様お腹でも下しまして？」

「違う！」

「クソ兄貴はねーちゃんの前だと未だに恥ずかしいんだよねえ、童貞だから。」

「ええい黙れ愚妹！」

僕は自分の許嫁がいつ他所様に失礼を働かないかと気が気で無いだけだ、ただでさえ問題ばかり起こすからなレイラは！

あと誰が童貞だ！」

「えっ、じゃあもう姉ちゃん抱いたの？この前1人だけ泊まりに行つてたもんねえ？」

ニヤついたクレマンティーヌの爆弾発言に《神聖呪歌》と《占星千里》が顔を赤らめ、《無限魔力》も机に突つ伏したままだが魔法で聞き耳を立て興味津々。男性陣からヒューヒューと囁し立てる声がかかる。如何に厳格な宗教国家の特殊部隊とはいえ、彼らも年頃の男女である。何時の時代も他人の恋路は世間話のネタだ。

「ぐっ……！？それ…は……だな…」

「その日、クアイエツセ様なら一晩中私の部屋に居ましたわよ？」

頬を染め吃るクアイエツセの横で再びレイラが爆弾を投下した。

どうせ手も出せなかつたんだろ、と高を括っていたクレマンティーヌ

ヌも呆氣に取られ、目が点になる。

「ぶふおっ!?れ、レイラ!?!」

「えっマジで!?マジで遂に抱かれちゃったのねーちゃん!!!!」

「クアイエッセ様、とっても激しかったですわ。」

主に遅延発動を提唱した魔法論文への批評が一番…」

「「「はあ?」」」

「夜が更けても私の部屋で書物を漁り、激しく知識を求めるクアイエッセ様。」

とても勤勉で良い事だと思えますが?」

「「「論文の話かよっ!!!」」」

「でもお…私もクアイエッセ様も寝巻きでしたし、ベッドだってスグ横にありましたのに…」

一転、妙に艶かしい声でクアイエッセの方を向くレイラの指が彼の顎に触れる。

「ちっ近い…!顔が近いぞレイラ!」

「押し倒しても良かったんですのよ♡」

「くっくっく?!?!」

耳元でそつとそんな台詞を囁かれた。

レイラの顔面偏差値は法国でも最高クラス、そんな顔が至近距離まで迫ってクアイエッセの赤い顔が更に茹でた蛸のように真っ赤にのぼせ上がり、頭から湯気が上がり始めた。

《神聖呪歌》、鼻息が荒いから落ち着きなさい。《占星千里》は手元の羊皮紙にいったい何を描いているんだい?凄い速度でペンが動いているよ?

「まっ、未だに手を繋いで2人で街を歩く事すら恥ずかしがってできないクアイエッセ様に私を押し倒す度胸なんてあるわきやねーんですけど!ですわ!」

「ち…ちつくしよおおおおおツツツ!!!」

一転、半笑いのレイラにペちペちと頬を叩かれたクアイエッセは悲痛な叫びと共に《四大精霊》が開きつぱなしにした扉から脱兎のごとく飛び出し、あつという間に見えなくなつた。男のプライドとかズツ

タズタだろうこれは。隊長は哀れな彼を見送るしかできない自分を密かに恥じた。クアイエツセ、強く生きて。

その後、クレマンティーヌと共に家路に就いたレイラは自宅の庭で必死にゴミを漁る第3席次を見なかつた事にした。戸惑う使用人達に事情を説明し、彼が満足するまでそつとしておいたのだとか：

此処はスレイン法国。六柱の神によって創設され、彼等亡き後も600年間人間種を守り続けてきた人類守護の要の地。

そして、敗北の定められたやられ役国家

この物語はそんな国に産まれた1人の淑女が自身の破滅を全力で回避する為に色んな方向に奮闘して、周りが振り回されるお話。

2 破滅フラグしかない議会のおじさんたち：

スレイン法国神都、大聖堂内会議室。

漆黒聖典隊員達が和氣藹々とした朝の報告会を行っていた頃、時を同じくしてこちらの会議も早朝から喧騒の一途を辿っていた。

「…王国への対応は折を見て陽光聖典へ通達する事にする。

さて、次の議題だが…風花聖典よりエルフ軍に動きが見られたと情報があつた、急ぎ火滅聖典より応援の人員を送ってもらいたい。」

「先ずは水明聖典を送って様子見するべきでは？」

火滅は漆黒にも劣らぬ精鋭揃い、故においそれと戦線に放り込む訳にもいかない。」

「おや、それはまるで水明^{ウチ}の部隊に捨て石になれと言つてるように聞こえるけれど？」

「そうは言っていない。」

火滅の得意とするのは戦闘だが、馬鹿正直に突っ込んで成果は上げられん。それに比べて野戦と生存戦略に關せば水明は人員豊富だろう？彼等に斥候を任せ、相手の出方を見るとするのはどうだ。と言っているんだ。」

「そう言つて、火滅はいつも美味しい所だけ持っていくじゃないか。大体ねえ……」

「……！」

「!!……」

ここにおおすはスレイン法国の中央政治を司る12人の賢者達。

メンバーは各六式聖典の神官長6名と司法、立法、行政を司る3人の機関長、そして魔法開発を行う研究館長と軍事機関を統率する大元帥。最後に彼らのトップとして取り纏める最高神官長。

彼等の手腕により、今日のスレイン法国における政は成っている。

しかし、頭の固い議員が侃々諤々の言い争いを繰り返し、話が一向に前に進まないのは何処の世界でも同じらしい。

それを見かねた漆黒聖典神官長、レイモン・ザーグ・ローランサンは白熱する火と水の神官長達を宥めるように口を開いた。

「お二人共冷静に、火滅も水明も人類を守護する大切な部隊だ。優劣など付けられるものですか。」

裏切り者のエルフ王は高慢だが策略家だ、今回の出兵も何らかの罫を用意している可能性も十分有り得る。」

嘗てスレイン法国と協力関係にあったエルフの国、今から約1000年ほど先王が退位し突如現れた新王は今までの友好関係を一切断ち切り、唐突に法国へ宣戦布告を行った。戦いは泥沼化し今でも続くエルフとの戦争はスレイン法国の目の上のたんこぶとなっている。

「幸いアベリオン丘陵に隣接する領地は『彼ら』の働きもあり亜人の襲撃も落ち着いている。」

武器や防具が必要ならまた注文すればいい、だが人的資源は簡単には取り戻せない。大切なのは被害を少なくし、人類の損失を如何に抑えられるかだ。そうは思いませんか？

必要ならば漆黒聖典の派遣も視野にいれるつもりだが…

レイモンの言いかけた言葉に大元帥と火滅の神官長の顔が一瞬喜色に染まるが、直ぐに何かを思い出し沈痛な面持ちになった。

「ありがたいが…それには及ばんよレイモン。」

「そうですね。既に『絶死絶命』という前例がある以上、これ以上あの国へ神人を投入するべきではない。」

この国の最高戦力、漆黒聖典番外席次《絶死絶命》。エルフと人間のハーフである彼女はエルフ王が当時の漆黒聖典第1席次を強姦し孕ませた結果生まれた子だ。彼女を巡ってはスレイン法国とエルフ国にとどまらず、竜王の居るアークランド評議国とすら話が拗れに拗れ、結果彼女はその存在を悟られぬよう聖堂の地下へ軟禁状態になっている。

「それこそがあの男の狙いかもしれないねえ…戦争を泥沼化させて神人を誘き出す。」

「あんの淫売王がアツ…!!」

他の者達が渋い顔をする中、我慢できなくなった火の神官長が苛立ち紛れに円卓を殴りつけた。その怒りを分かっているからこそ誰も彼を咎める者はいない。

「…神人は出せない。

《絶死絶命》は勿論、漆黒聖典の隊長もだ。

となると必然、彼女も。」

「《獄界絶凍》か…」

この場にいる全員がその名と共に彼女の顔を脳裏に浮かべた。

トレードマークである銀の髪と金の瞳、真つ黒なドレスで元気に走り回り時折わざとらしい高笑いをあげる問題児…もとい問題令嬢の姿。

『はあ〜〜〜…』

満場一致でクソデカ溜め息が皆から漏れた

「駄目だ、あの娘は駄目だ。」

絶対に戦争に巻き込んではいカン。」

「負けてエルフ王に孕ませられる危険もそうだが…あの女が関わるとロクな事にならないのが火を見るより明らかだ。色んな方面に迷惑がかかる。」

「本人は嬉々として出兵しそうですが…」

「か、彼女には竜王国を任せてあるから…（震え声）」

「それなんです、先日彼女1人で都市を1つ奪還したそうですよ…」

「おおう…戦闘能力だけは流石だな《獄界絶凍》。」

「容姿は完璧なのにどうしてああなった？ “血塗れ”は一体どんな教育しているんだ…」

「だが彼を初めとした元漆黒聖典のOB達がいなければ国境付近の安全は見込めんだろう。あの辺境周辺の放任主義を認めたのは我々だ。後の祭りよ。」

「最近彼女がアゼルリシア山脈から霜フロスト・ドラゴンの竜を連れて来て国境警備に当たらせているというのは本当かね？」

「ええ…現在2匹の霜の竜が彼女の領地を巡回し警備しているようです。他にもドラゴンによる空輸で物資を運んでいる姿を目撃したとの報告も。」

あの娘は行動に実益が伴ってますからこちらで文句を付ける訳にもいかず、ドワーフの工廠建設やエルフの手芸商品製作所創設に続き

黙認するしか無いですな。」

「し、手芸商品……」

「確か……若年層向けのアクセサリーや小物を作らせているんじゃない。エルフは手先が器用だとかで。」

「ウチの若い衆も愛用してるよ、それ。」

全く、破天荒な娘よねえ……」

レイラの連れてきた30人程のドワーフで創設された工廠は武器から日用品まで多数の金属器を取り扱っており今や法国で一二を争う生産数を誇っている。

依頼料は現金の他に『酒払い』が採用されており、珍しい酒、酒豪で有名なドワーフ達のお眼鏡に適う物であれば格安で受注してくれる。その為近年は神都含む各首都で彼等の舌を唸らせんと造酒が盛んに行われるようになったそうなの。

そしてエルフ。

スレイン法国ではエルフは皆戦争奴隷として捕え心を折り、労働力とされているのだがレイラの治める領地では真つ当な従業員としての扱いを受けている。それどころか彼女の独断でメイドとして自身の屋敷に仕えさせたりと結構やりたい放題だ。

当初はレイモンを通して注意喚起を行ったものの、今度はエルフ達の器用さに目を付け小物やアクセサリーを製作させ周辺の領地に売り込むようになった。これが娯楽に飢えた神都の若者達に爆発的大ヒットを生み出し、値段は格安ながら総合的に莫大な利益を稼ぎ出す結果となる。

戦争以外で国の金回りが潤滑になり、国庫も潤う。それに加え清廉なスルシャーナ信徒であるレイラはこれらとドワーフ工廠の一部売り上げ金を中央政府へ『寄付』という形で納めているのだから上層部も迂闊に文句を言えなくなってしまうた。

差別意識の激しい国民達にもアクセサリーや武器は浸透し、「エルフやドワーフも悪くないね」と主に若者や騎士達の間でそのような風潮が広まり始めている。

「これだけやって既存の武器屋が食いつぱぐれないように市場の流れ

も読んで行動しているのだから、彼女の経営手腕には舌を巻くよ。」
「金の流れは全てこちらで把握できるように手配もした上でな：彼女の作った産業は今や完全にスレイン法国に浸透している。」
「どうか儂の孫娘がアレの大ファンなんじゃ：こうして神都に赴く度に土産に「いやりんぐ」やら「ぺんだんと」を買ってくるようせがまれる。」

「奇遇ですね土の神官長、私の妻と娘も神都へ来る度同行するようになりましたよ。」

いやはや、女性のお洒落は我々には理解しかねる。」

さつきまでの殺伐とした雰囲気とはまた毛色の違う和やかな空気になっていく。

漆黒聖典レイラ・ドウレム・ブラッドレイの表の顔は国境付近を守護する領主であり、興業主であり工廠の責任者で自称スルシャーナ様の巫女：なんかもう設定過剰でむせそう。

何度も彼女の奇行を聞かされるうちに、中央政府のお偉いがたも「まああの女なら仕方ないか」となあなあで片付けてしまえるほど慣れてしまっていた。要はもう諦めてる。ちゃんと人類繁栄の一助になっているのだから問題ないよね？よし解散！帰って麦酒と枝豆で一杯やろうぜ、神への祈りは忘れずにな！

：正直な話、レイラの行っている事は法国の規律的にギリギリの線をいっていた。

人類を守護する為、宗教による意志統一を図り、一致団結しなければならぬと考えている法国は亜人や準人類種の排除に積極的だ。なのにレイラはエルフやドワーフといった他種族をも「家族」として扱い、友好を示している。国是に反するこの行為に対し当時の中央政府はレイラの処分に向けて動き出そうとし：すんでの所で踏みとどまった。

何故ならば彼女の行う事全てに法国の利益が伴っているからだ。

ドワーフの工廠は良質な武具を作り出し、エルフの小物販売は国民の消費を加速させ中央政府に莫大な利益を生み出した。この結果として「無理やり従わせるより対等な契約で手を結んだ方がお互いに得

をする」という国民感情が法国内で生まれ始めている。

最近連れてきた二頭の霜の竜に至ってはレイラの命令で国境付近の警備を任されている、その影響は計り知れないだろう。難度は100を優に超え、伝説でしか語られないような巨竜が亜人との国境線を守っているのだ。周辺領民や衛兵達にとってこれ程心強いものは無い。

そして何より、彼女の存在は失うに惜しい価値がある。

潤沢な魔力とかの《絶死絶命》に匹敵する戦闘能力は、かの『プレイヤー』を彷彿とさせる。

魔法研究にも尽力し、今日も出席している開発局の館長とは何度も魔法について議論を交わす馴染みの間柄だ。

それに加え領民を率いる圧倒的なカリスマ、経営力、あの胡散臭いお嬢様言葉に恥じぬ貴族として目覚しい働きぶり。彼女の影響か他の貴族達も身が引き締まり、各領地の犯罪率が極端に低くなっているのが何よりの証だ。

議論に議論を重ねた結果、「人類を救うに足る器量」をここまでまざまざと見せつけられては、最早暗殺などを考える愚かな不信心者はこの議場には誰一人居なかった。

だが問題が1つ

彼女は熱心なスルシャーナ教信者である。スルシャーナは異形のプレイヤーにして、他の神達が滅ぶなか最期までスレイン法国を守護した神の1柱。異形種でありながら他の神と協力し、スレイン法国を支えた偉大な神だ。

信心深いレイラはその意志を継ぎ、エルフ、ドワーフ問わず共に暮らす領民を護り他種族との共存を是としているのだろう。

しかし他種族平等の救済を掲げるスルシャーナ教は「人類主義」のスレイン法国にとって些か都合が悪い。彼女の勝手を許せばスレイン法国の根幹を揺るがしかねない事態を生むかもしれない。

ならばと彼らは考えた。

番外席次を除き、本来12名しか在籍しないハズの特殊部隊、《漆黑聖典》に13番目として彼女を組み込むのはどうか？

国の運営する特殊部隊でなら彼女をある程度コントロールし、かつ人類の為に使える戦力にできる。

そこを落とし所とし、彼女に組織という名の首輪を付けるべきだと判断された。

決まるや否や彼等は早速レイモンを通してレイラに接触し、トントンの拍子で事は進んだ。そうしてめでたくレイラ・ドウレム・ブラッドレイは《獄界絶凍》のコードネームを以て漆黒聖典に所属する運びとなったのである。

これには最高神官長もニツコリ

だ　　つ　　た　　の　　だ　　が

『竜王国から受ける寄付金の額なのですが、なんですかこの法外な額は!!』

今すぐ減額なさい! 法国の経済状況なら差額を引いてもこちらの額で十分でしょう?

それとも: 相手が竜の女王だからってワザと金額を引き上げてるとかそんな事、無いですわよねえ...?』

竜王国からスレイン法国へ贈られる上納金の額を聞いた彼女が中央政府の議事堂に飛び込んで来て放ったセリフである。右手には気を失った漆黒聖典隊長がポロポロの姿で首根っこを掴まれ引き摺られていた、恐らく最後まで彼女を押しとどめようと努力したのだろう。

その勢いでレイラは最高神官長含む中央政府のお歴々全員の前で恫喝: もとい寄付額引き下げの交渉を行う。持参した資料と懇切丁寧な説明、元々この高額設定は一部の亜人を蔑む議員が亜人軽視の感情に流され半ば一方的に取り付けた金額だった為、理詰めで不要な理由を説かれてしまえばぐうの音も出ない。

正論の上から更にド正論を重ね、金額を決めた議員達が泣き出すまで説教した結果、最終的な落とし所としてレイラが行う中央政府への

売上金寄付を2割から3割に引き上げると引き換えに竜王国の負担を減らす事に成功した。

余りの気迫に当時の会計担当者は恐怖で下着を濡らす羽目になったとか。

『敵将、討ち取ったりイイイ！』

たとえ素手だろうと私の勝利は揺るぎはしないッ！

さあさあ残りの下っ端ビーストマン共、貴方達のボスはこの通り使い古されたカーペットみたいになっちまいましたわ。これを見ても尚向かってくるのなら止めはしません、相応の覚悟を持って挑みなさいな！

今宵の我が魔剣ちゃんは血に飢えてましてよオ！

オラア！ビビつとらんで掛かってこんかアい！』

派遣先の竜王国にて、奪われた都市を取り戻す為に都市を統括していたビーストマンの族長と決闘をし打ち勝ったらしい。

邪魔の入らないように氷の結界で覆われたリングの中、素手同士の殺し合い。

種族の身体能力差などもとせずレイラが圧倒的な勝利を収めたのだとか。

既にレイラによってその7割ほどを殺されていたビーストマン達は這う這うの体で都市から逃げ出した。すかさず別働隊が都市を制圧し、竜王国は悲願の都市奪還を果たしたのだった。

他にもレイラが何やら怪しい格好（変装だと思われる）をして自身の領地から食料や武器を荷馬車に積み込んで戦火の街々を定期的に往来しているとの情報も密かにレイラを監視する任を授かった風の巫女から上げられている。彼女曰く「絶対あの人が監視してるの氣付いてますよ、こっちは向かってダブルピースキメましたもん。」との事で担当者は恐れ慄いた。

『ねえ、あの新しい隊員。』

《獄界絶凍》だっけ？面白そうじゃない。会いたいわ、まさか断るなんて言わないわよね？』

ああ、なんと恐ろしいことか。

この台詞を聞いた神官長の面々は気が気でなかっただろう。

その生まれゆえ人目を避け、神都奥にて育てられ半ば幽閉扱いとなつている漆黒聖典番外席次にして我が国の最高戦力《絶死絶命》が放つた一言は議員達を震え上がらせた。

会議中の護衛という名目で偶に同席させる事はあるものの、いつも議場の隅でつまらなさそうに玩具を弄っている彼女だったが何処から聞きつけたのかレイラに興味を持ったらしい。

神官長達は兎に角考えた、問題児と問題児を付き合わせたら一体どうなってしまうのか目に見えているからである。具体的に言うとなら国がやべー、物理的に。

徹底した議論を行い、最終的にどちらに自重を促しても意味無いならもうぶっつけ本番で対応するしかない？との結論に落ち着く。

この結論を捻り出すまでに既に5徹を迎えていた神官長一同、考えるのをやめた。

その後“特殊な戦闘訓練”という体で彼女を呼び出し、絶死絶命と獄界絶凍は相見える事となった。

絶死絶命に関しては竜王との密かな盟約がある為細心の注意を払い、風と水の聖典から巫女を動員し幾重にも結界を張らせて秘匿したうえで密会だった。

その結果は案の定…

『あはははははははははははっ!!』

良いわあ、最高じゃない貴女！もっと遊びましょうよ！ほらほらほ

らア!!』

『ちよつ待つ…死ぬ!』

レイモン様!レイモン様!?流石に30人分の結界維持しながら戦うのキツツツいんですが!!あの子止めてくださいませんか?!?え?神官長一同議場で爆睡中?

あのお排泄物老人ども全くもって役に立ちませんわね!後で全員寝てる背中に氷柱差し込んでやりますわ!ああああああもう《極地の爪》っっ!!』

『何その魔法、さっきの氷のゴーレムといい初めて見たわ!もつと見せてよ!』

『隊長おおおっ!恨みますからねええええっ!!!』

私知ってるんですから!昔貴方が番外ちゃんにボロクソやられて馬の小便で顔洗つてるところ現場で見ましたの!映像記録もバツチり保存してるんですから!

次の定例報告会で鑑賞会開いてやりますわ!』

『こつちにまで飛び火するの止めてくれませんかねえ?!?!?』

神都中心部、大聖堂内に設えられた特設の大広間。生半可な攻撃では傷一つつかないように魔法で補助もしながら行われた訓練だったのだが途中で巫女達が魔力切れで力尽き、代わりにレイラが肩代わりするという方法で維持していたのだがそれでも舞台は半壊し、レイラが魔力切れで降参するまで戦いは続いた。またあれだけの攻撃魔法と斬撃が飛び交い、巫女を含めた50人以上が観戦していたにもかかわらず死者ゼロ人という奇跡的な被害報告はあとから目覚めた神官長一同目を疑ったとか。

(冷たかったなあ、氷…)

力尽きて寝てた我々が悪かったので甘んじて受け入れたが、それでもキンツキンに冷えた氷柱を背中に生み出されるのはくるものがあ

る。

おもわず全員情けない悲鳴をあげながら寝起きでわけも分からず床を転げ回った、火の神官長などは腰をやってしまうほど背筋を伸ばし過ぎて声にならない嗚咽を漏らす羽目になったのは記憶に新しい。それをレイラはぶんすこ腕組みしながら眺め、隊長は白目を剥き、番外席次は笑い転げた。

その一件以来時たまレイラは大聖堂内に菓子を持参し遊びに来たりしており、二人の仲は悪くない模様。

「広場は半壊したけど法国最強の実力者2人が仲良くなつて結果オーライやな！人類バンザイ！」とは当時の最高神官長の意見である。ただ番外席次が時々行方不明になっている事をレイモン以外の神官達は知らない、行先は見当が付くが軟禁中の身なのだからおいそれと外に出られるのは困る。いつ竜王に察知されるか気が気でなかった。

(そういうえば今朝《獄界絶凍》から貰った林檎酒、瓶越しでも分かるほど良い香りがした、美味そうだったな。今夜妻と一緒に飲もう。)

そのお酒、金の林檎使われてますよレイモンさん。知らぬが仏というやつか。

密かにウキウキするレイモンのよそこに会議は続く。

朝の殺伐とした報告会が愚痴吐き大会に変わり、レイラが領内にスルシャーナ様を祀る為の社を建てようとしているなど彼女の近状が語られたのを最後に今日の会議はお開きとなった。火と水の神官長はこの後大元帥と今後のエルフ国への対応について協議するため会食に行くらしい。それでいいのか中央政府。

3 破滅フラグしかない悪役国家の令嬢に転生してしまっただい

ごきげんよう皆の衆、私ですわ!!

初めましてですわねえ、ええ!

わたくし私の名前はレイラ・ドウレム・ブラッドレイ、宗教国家スレイン王国の辺境に領地を頂く領主の娘ですわ。

お父様はゲバルト・レーム・ブラッドレイ、お母様はカナミ・ブラッドレイと言いますの。お母様は私が幼い頃に病で亡くなってしまいましたが：お父様は今日も元気に領地に近寄る侵略者を真っ二つにできるくらいには元気ですわ!

我が領土はアベリオン丘陵付近に土地を持ち、丘陵から流れてくる亜人種の侵略者やモンスターを討伐し、人類の境界線を護る防人としての役割も務めています。他にも王国ほどではないですが肥沃な土のおかげで農業も盛んですわね。

何より食べ物美味しい!空気がうまい!高地なので夏でも涼しい!

私の心の軽井沢は此処に有りましたの!

そんな優良物件に貴族として生まれ落ちた私

恵まれた才を持ち、容姿も完璧!まさに勝ち組お嬢様ライフを満喫しているのです!

オーツホツホツホツホツホ!!!

……なあーんて言うと思ってましたかばかちゃんがあ!!!!

私に『前世の記憶』がある事に気付いたのは5歳の頃、テンプレよ

ろしく庭で遊んでいた時に転んで頭をぶつけた時でした。

前世の私は社会という身体を動かすために働く社畜さいぼう、可もなく不可もなくド平民の労働階級でしたの。恋人も作らず漫画やアニメを読み漁って残りの人生を消費するだけだった私は病で斃れ、今こうして新しい人生を歩んでいるのです。よくある転生モノですが、実際味わってみると不思議な気分ですわね。

そして前世の記憶を取り戻した今、この世界がどんな場所なのかをハッキリと理解してしまいました！

く『OVER LOAD』く

この世界ではアンデッドの最上位個体を意味する言葉。

大元はWeb小説でしたか？書籍化されてアニメにもなった前世では超有名小説です。

主人公はゲームのアバターのままギルド拠点ごと転移してしまい、異世界とゲームの差異に戸惑いながら愉快的仲間たちと気まま（）な異世界ライフを満喫するダークファンタジー物語：そんな世界に私は令嬢として生まれ変わりました。

破滅フラグしか建たない人間国家の令嬢として

私の住む国、スレイン法国。

亜人によって虐げられる人類を守る為作られた宗教国家。人類が生存圏を得てから600年もの間守護し続け、人類を守る為なら虐殺さえ厭わない、そんな国。

亜人死すべし！異形種滅ぼすべし！と日夜叫んで神に拝み倒す変人の集まりですの（ド偏見）

…ここまで聞いて

「人類側の強国家に転生したなら人生安泰やん」とか考えちゃってる転生初心者のソコの貴方！そのお花畑の脳みそに口から手エ突っ込んで《内部爆散・氷》喰らわしますわよ？

この『OVERLOAD』という作品、主人公のアバターはなんと異形種なのです。部下も勿論異形種、更にカルマ値という人間に対す

る好感度みたいな数値が最低に設定されていて、それこそ人類をゴミのようにしか思っていない集団。破滅を回避しようと直接接触しても私の国は異形種抹殺が当たり前の人類第一主義宗教国家、相性は最悪！絶対マトモに取り合って貰えるはずがありません！下手したらその場で首が飛びます、物理的に。

更に絶望的な事に主人公勢の強さもインフレしていて、私の国は他の国と比べて国力も高く、神の血を覚醒させた神人が居るにもかかわらず大概の人間は主人公の幹部の下っ端の下っ端にも勝てません。

数値化した感じ主人公のLvが100なら法国最強集団漆黒聖典の平均が35〜40前後ですかね：因みに原作はレベル差10あると力の差があり過ぎて勝負にならないと言われていますので、察して下さいまし。これでも法国は軍事力だと周辺国最強レベルなんですけどね：

主人公の部下も当たり前のように100揃いの上、スレイン法国より遥かに強力なマジックアイテムで武装している為、例えば国宝で完全武装した私や《絶死絶命》ちゃんも組んでも守護者全員に勝てる見込みは絶望的：ていうか全体的には0です、物量が違い過ぎます。奇跡も魔法ありませんわ。

更に更に、私の記憶が正しければ原作ではこの国、愚かにも物語の最序盤で主人公の仲間を喧嘩を売ってしまうのです！

私の国、上層部の人間は「人類を守護」する為ならなりふり構わないといった過激な思考をした老人ばかりで、どうも最近自分達の宗教観に合わない人間まで害を加え始めましたの。

私が目を光らせているからか、まだ実行には起こしていないようですが

← 人類守るために腐敗した王国を矯正したい

← 麻薬が国中に蔓延しててこの国はもう駄目だ

← そうだ、王国には死んでもらおう

←

国力落とすために王国戦士長殺すわ

という考えに行き着く時点でかなり頭がアレですけれど：確かシャルティアでしたっけ？遭遇戦で仕方ないとはいえ洗脳を：配下を家族のように大事にしている主人公にとつてある意味殺すより酷い事をやらかしてしまうのですわ。

これにより転移して間もない主人公と完全に対立関係に陥ってしまい、「相応の対価を払ってもらおう（凄み）」とか言われちゃうほど！法国は吸血鬼を洗脳しそこねたー残念だったなーくらいにしか思っていないですから救いようがありません。

怒らせちゃったねえ！君たちアインズ様怒らせちゃったねえ！

原作はまだ完結していない為、結末を知らないまま私は此方に転生してしまいましたので詳しいことは存じ上げませんが、十中八九我が国がロクな結末を辿らない事は目に見えています。良くて漆黒聖典含む上層部皆殺し（殺されるならマシな方、生きたまま拷問回復の無限ループとか虫の苗床も充分有り得る）、悪ければ国民皆殺しでそのまま人類文明が崩壊する可能性だつて有り得ますわ。ただでさえ亜人や異形種に種族差で押されて生存圏がマツハですのに。

そしてその中には当然、漆黒聖典である私やお父様、領民の皆様だつて含まれてます。

私を大事に育ててくれたお父様や使用人のみんな、それに領内の国民だつて皆生きています。ある日突然ゲームの世界からやって来た連中の機嫌次第で消されちゃうなんて耐えられません。全力で抵抗する所存ですわ！

その為に私は強かに生きる事を決めましたの。

こちらら毎日必死に生きてるんですわ！畑仕事して領地の切り盛りしてビーストマンや亜人の撃退とかその身でやってみなさい！過去に何度も死にそうな目に会いましたのよ！

100年の揺り返しだかなんだかでゲームの世界からポツとやってきたチートの甘ちゃん連中なんか第2の人生を奪われて堪りま

すか！

破滅フラグなんか絶対負けない……!!

そんな私の意志に呼応するように、亡くなる直前に母様は私にこんな物を託しましたの。

見た目は金の粹淵の付いた豪華な厚手の日記帳、背表紙から4枚の天使の羽が生えていて、お母様がいつも肌身離さず持っていた思い出の品。《記録書》^{ダイアリー}と呼ばれていたマジックアイテムを私は受け取りました。

「貴女が困ったらそれを頼りなさい、きつと力になってくれるから。

……お父様をよろしくね。」

そう言つて若くして病で息を引き取つたお母様の《記録書》、そこには様々な事が書かれていました。

この世界の仕組みについての様々な考察、効率的なレベルアップの方法や位階魔法についての検証結果、そしてお母様の故郷についての記述も事細かに記されていましたわ。

そう、なんと私のお母様、どうやら「プレイヤー」だったらしいのです。

転移してきた時期は主人公^{モモンガ}とはズレていたようですが彼と同じゲームの世界からやって来た住人…：そういうえば2人の出会いの話を興味本位で聞いた時お父様が「空から降ってきた」って真顔で言っていましたわね。

そんな便利アイテムとも呼べる代物を手に入れた私はその資料を参考に魔法の研究と自身のレベルアップを同時に進め、着々と実力を付けていきました。職業も魔法職と近接職をバランス良く取れるよう《記録書》を参考にした結果は上々、コツが分かればあとは速く、20歳にしてくださいたい90レベル前後でしょうか？それくらいまでには成長致しました。お母様曰く『ガチビルド』って奴ですか、前世はゲームあんまりしなかつたのでいまいちピンと来ませんが実力は付いているのは感じるので問題ありませんわ。

なんというかモンスターを討伐していると壁を超える感覚？がありますのよね。

ウチの領地は亜人種の生息地に近くレベル上げの素材には事欠きませんでしたが、慣れちまえばどうって事あねえですわ。レベリングの感想ですが、どうやらプレイヤーの血を濃く受け継いだものほど成長がゲーム寄りになるのか経験値が溜まりやすく、レベルも上がりやすいみたいです。《記録書》を受け取ってから15年間、ひたすらレベリングしていた。つまりゲームでいうと15年ログインしっぱなしでレベルを上げ続けていたと言うことになります。廃人かな？

ユグドラシルでは95から100までの5レベルを上げるのが地獄と言われていた気がしますので、如何にプレイヤーの血を濃く受け継ぐ私でもこの辺りが頭打ちでしょう。法国最強は番外ちゃんが居ますからね。

この世界、ホントにレベルが物を言うようで。どんなに筋肉質で屈強な男でもLvが5とかで、Lv15の華奢な女の子に喧嘩で負けちゃうんですわよね…その辺凄くゲームですわ。そのくせ《武技》の習得はレベルアップとは違い、ひたすら修練が必要で、現実基準で何度も身体に叩き込まないといけない。ゲームと現実がちぐはぐに混ざりあったややこしい世界なのですわ。

『レベル』はひたすらモンスター討伐、『魔法』は《記録書》に書かれているメモに寄るところの『世界との接続』の為法国の教材で勉強、『武技』はひたすら鍛錬、この3つをバランスよく育てる事が大事であるとお母様の《記録書》には記されていました。

前述の通りレベルは侵略者退治で滞り無く上がっていき、武技に関しては法国に教育機関があるのでそれをちよつと齧ってあとは反復練習あるのみ。

一番苦戦したのは魔法の習得でした。『世界への接続』と呼ばれる苦行…前世で言う数学と物理を足して2で割ったような、公式覚えて応用させる前世の私が1番苦手なやつだったので。

それでもレイラ頭脳と才能もあり頑張った結果第九位階の魔法ま

で習得が完了しましたの。

勉強中、突如私の脳裏に存在しない記憶が溢れだして知らないハズの高位の魔法もスッと頭に入ってきましたのよね、これもお母様のマジックアイテムのおかげかも知れません。枠が足りなかったのか回復等の信仰系魔法は流石に無理でしたがオマケに「超位」の魔法も習得に成功しました！

多分習得した魔法が私の異能力のせいであつたのと職業スキルのボーナスによるものでしょうか？主人公もオーバーロードにしか使えないスキルとかありましたし。

兎に角死にたくない一心で私はがんばりました。

来る日も来る日もレベル上げ！魔法習得！武技鍛錬！って感じで。

そうした努力の甲斐あつて、私ことレイラ・ドウレム・ブラッドレイはスレイン国内でも指折りの実力者に数えられるほどになりました。男尊女卑の世界で手っ取り早く成り上がるには強さを証明するしかないんですよ。

ぶっちゃけいくら偉くなつても破滅フラグの塊の前ではなんの意味も成さないんですが…あの連中に敵対するにしろ迎合するにしろ、私自身が強くないと物理的に切り捨てられて終わりですものね。でも飛び抜けて強くても目エ付けられますし、どうすりゃええんですよ。

…それでも私は生きるのを諦めません。

お母様の《記録書》、そこには育成の解説の他にも当時の彼女の手記が記されてました。

日本語だから誰も読めないと思つたんでしょうね、前世日本人の私は読めてしまいました。

そこには腐りきつたりアルの世界から異世界に飛ばされ、混乱しながらも仲間と大冒険を繰り広げた記録、お父様と結ばれ、この領地を割譲されてから二人で奮闘した輝かしい思い出も残されていました。

領民を愛し、夫を愛し、この世界の人類を愛したお母様の赤裸々な手記を拝読して尚更この国を玩具にされたくないと思つたのです。

ならば私は持てる全てをもつて破滅フラグをへし折り、領民を、人類を存続させ続ける！

あわよくばナザリツクに取り入って庇護下に入る！

その為ならプライド捨てます！靴舐めます！そのくらいの覚悟で挑みますのよ！

「ねーちゃんどしたの？ 凄い顔してるけど…」

オットいけない、そういえば私あの報告会が終わった後我が家の庭でクレマンティーヌと鍛錬するんでしたわね。

「失礼、少し考え事をしていただけですわ。」

クレマンティーヌ、いつでも掛かってらっしゃいな。」

「おっけーいくよ… 《流水加速》 ツ!!」

屋敷の庭で向かい合う私とクレマンティーヌ。

クラウチングスタートからぼんっ！と風を切る音がして目の前にいたクレマンティーヌが消えた、あの子お馴染みの『超加速スッと行ってドスツ!!からの急所衝突』だ。

反射的に首を傾けると次の瞬間には首のあった場所をステイレットが通過していた。因みにこれ、私じゃなかったら死んでるんですが！いつも通りですわね！

「更に速くなりましたねえ、クレマンティーヌは強い子ですわ。」

「えへへ〜」

「では、参りますわ…よっ！」

「ツツ!!」

無手の私とステイレット装備のクレマンティーヌの組み手で風が鳴る。レベル差にものを言わせたなんちゃって格闘術、通称《令嬢神拳》が唸りますわ!

この世界は私にとってリアルな現実。ゲームと違って匂いや味もありませんし、気配だって感じます。

現実でしか味わう事ができない体験、経験と実績さえあれば武技などなくともこの速度程度なら反応は可能ですわ。料理なんかスキル無くても経験でできますし、このようになんちゃって格闘術だつてできてしまいますの。寧ろ前世より身体が動くのでイメージを直ぐに形にできますわ! ありがとうブルー○・リー、ありがとう麻婆神父! 線のように流れるクレマンティーヌの剣の軌跡を受け流すこと5分、《流水加速》の反動で動きが鈍った隙を突いて懐に入り込み加減した鉄山靠もどきを打ち込みます。

ぐえッ!? と呻き声が聞こえてクレマンティーヌの身体が後ろに吹き飛び背中から芝に激突しました。

「…7分40秒、前回より30秒以上長くなりました。」

そろそろ《流水加速》の継続時間は人類一になるんじゃないかもしれませんこと?。」

「あいつたたた…ホント?。」

「ええ、負担のかかるこの技をここまで長い間掛け続けられる人間は私の知る限りいません。」

「高速戦闘なら国内に敵は居ませんわね。」

「ねーちゃんと隊長と番外を除けば、でしょ?。」

「私達は数に入れるだけ無駄ですわ。」

「誇りなさい、貴女は強い。見知らぬ誰かの評価など実績で跳ね返してしまえば良いのです。」

「…:…うん!。」

少し考え頷く義妹。

クレマンティーヌ・ハイゼア・クインティア。原作だとサイコパスで殺人鬼だった筈なのですが、クインティア家の許嫁になって幼い頃から私と一緒に居た影響なのか元の破壊的な性格はなりを潜めて、健

全に成長しました。

つかサイコキラージやないクレマンティヌとか唯の正統派美少女なんですが!? 実際お見合いの誘いとかが毎日来てるらしいです、本人にその気は無いと言っていましたけど。

家族が兄のクアイエツセ様にはかり構ったのが原因で性格が拗れてしまったと原作情報で知っていたので、家族の分まで私が構ってあげたら凄く懐かれました。これって原作改編なのでは？

もしかして私、何かやっちゃいました!?

でもスれる前のロリロリクレマンティヌちゃんは猫みたいで可愛かったですし、そんな子が親からネグレクト食らってたら構わずにはいられませんよね？

そのまま組手を何度か繰り返し、太陽も真上に差し掛かった頃。クレマンティヌにも疲れが見え始めたので今日はこの辺で止めにしておきましょうか。

「今日はこの辺りにしておきましょう。」

明日は竜王国ですし、任務に支障が出ては本末転倒ですわ。」

「うん。」

汗掻いちちゃったよ、お風呂貸して〜。」

「ええ、構いませんわ。」

「ついでにお昼も食べていきなさいな、リクエストあります?」

「マジで!?

アレがいい! 『ボンベグウ!』」

「あーハイハイ、ボンベグウですわね。作っててあげますから先に汗を流しておいでなさいな。」

ベル、案内を。」

「畏まりましたお嬢様。」

クレマンティヌ様、此方へどうぞ。」

ボンベグウ、すなわち前世でいうハンバーグの事ですわね。六大神様、即ちこの国を創ったプレイヤー達が伝えたときれています、こつちの世界で伝わるうちに段々訛ってこういう呼び方になったみ

たいです。他にも『アツポウペイ』とか『カウヒイ』なんかそれっぽい食べ物飲み物が存在しています。

メイド達に連れられてルンルン気分です。去っていくクレマンティーンを見送って、私も厨房へ急ぎましょう。



「タオルは此方にございます、何かあれば此方のメイドにお申し出下さいませ。」

ではごゆっくり。」

「ありがとベルちゃん。お風呂お風呂〜♪」

礼儀正しく頭を下げて去っていくメイド長が見えなくなったので扉を閉めて汗でベタベタになったインナーを脱ぎ捨てる。

ねーちゃんの家のお風呂は広くて浴槽もデカイから昔から大好きだ。ウチも実家は結構金持ちだけど、ここまで広い風呂場は作れない。流石領主の娘。

夜になれば夜空を見ながら入浴できるようになっていて、確か六大神様も愛した《ロ・テンブロ》っていう作りだっけねーちゃんと言っていた。お付きのエルフメイド達に背中を流され、身体を洗われた後沸かしてもらった湯船に肩までどっぷりと浸かる。

「あ、あああ〜〜…」

思わず口から情けない声が出てしまったけど、これがロ・テンブロの醍醐味だ。

『湯船に浸かっている間はね、だれにも邪魔されずなんというか…自由で…救われてなきやダメなんですわよ。独りで静かで豊かで…』

ねーちゃんのことを思い出す

私の義姉、レイラ・ドウレム・ブラッドレイ。

出来損ないと言われた私と違い、才気に溢れて両親からもチャホヤされてたクソ兄貴の許嫁としてやって来たブラッドレイ家の一人娘だ。

来たその日にクソ兄貴に勝負を挑み、ボッコボコに打ち負かして鼻っ柱をへし折ってやってるのを見た時は胸がスツキリした。

『わたくし、自分より弱い殿方に身を捧げるほど甘っちょろくありませんの。ごめんあそばせ。』

歳は兄貴より少し上くらいなのに信じられないくらい強かった。

大人たち曰く『神の血を引く子供』。魔法も使えるし槍術も、兄貴のタイムしたモンスターが手も足も出ないくらい強くて…傍目から見ても彼女が規格外な存在なんだって分かった。

領内に侵入した亜人種の侵略者30匹を1人で皆殺しにしたとか、あの歳で基本的な武技を全てマスターしてるとか、見たことの無いような強い魔法を使えるんだとか…

神の血を覚醒させた神人だって大人達はねーちゃんの事を持って囃してた。それがクソ兄貴の姿と重なってイライラして、最初のうちは笑顔で構ってくるねーちゃんをずっと無視してたんだ。

でもねーちゃんは他の奴らとは違った。

『邪ア魔なんですわよ毎日毎日！』

私は義妹とお話がしたいのです、悪質な宗教勧誘は引っ込んでやがれですわ！』

ある日、怒ったねーちゃんは神殿から勧誘にやって来た神官達を力づくで追い出して、扉を氷の魔法で固めてしまった。そうして2人きりになってやっと、本当の彼女を知ることができた。

見向きもされなかった私を、ずっとねーちゃんは見ていた。クインティアの片割れ、出来損ないの妹じゃなくて真っ直ぐクレマンティーヌを見てくれていた。

それに気付いた時は嬉しくて、思わずねーちゃんの胸の中でずっと泣いていた。

ねーちゃんに出会わずにあのまま大きくなっていたら、きっと何処

かで私の心は壊れてしまっていただろう。そう思うと怖くなる。

それからずっと、私は強くなる為に鍛錬に励んだ。ねーちゃんの横に立つに相応しいクレマン自慢の妹になる為に。

自分の価値を決めるのは自分自身だってあの人は教えてくれたから、他の奴からの評価なんてもう気にしない。

「もつと強くなんなきゃなあ……」

ぽつりと吐いた呟きは、湯気と一緒に昼中の空へ溶けていった。



「先ずはナザリックとの接触を避ける事が第一ですわよね……だいたいファーストコンタクトが洗脳から始まるのがいけないんですわち○ちん亭のエロ漫画じゃないんですからちちゃんと挨拶を……って相手吸血鬼ですもんね法国民なら出会って5秒で即殺意ですわよね。」

王国をなんとか出来ればガゼフの暗殺も有耶無耶に……そうすればカルネ村虐殺も無くなり陽光聖典が出張する必要もなくなるハズ……でもベリユース様の動向が最近怪しいんですよねえ、法国が峻そこのかさなくても勝手に離反するんじゃないかしら。」

封印の魔樹はいつ復活するんでしょう、《占星千里》ちゃんの予言は真つ先に私の所へ報告に来るように頼んでもますから心配はしていませんけど、そもそも原作始まるまであとどれくらい経たないといけないのかしら？ 最悪私が独りで空想樹……もといザイトルクワエを伐採してしまえばカイレ様と『傾城傾国』が出張する必要もなくなりますわね。そうすれば吸血鬼洗脳も無くなって……ああでもジジイ共はぜつたいザイトルクワエ欲しがりますわいっそ今のうちにあのなんちやつてゼー○全員暗殺してしましましょうか。使えないなら切り

捨てるしか無い（物理）。これもスレインの未来の為…って何考えてますの救国の前に神都が大混乱になりますわ！

いちばん不味いのはこの国が下手な宗教国家なせいで諸外国への態度が悪いのと、国民の人間種以外への嫌悪感を払拭するのが難しいことですわね。歳を食ってる老人ほど亜人異形への嫌悪感というか殺意はマシマシ。500年以上こびり付いた法国の道徳（）は伊達じゃないというワケか…

私の派遣先である竜王国や帝国との仲は悪くないんですけど、中身腐りかけの王国や宗教の解釈不一致で昔から犬猿の仲である聖王国なんかは見捨てる気満々で草も生えねえのですわ。辞めたら人類の守護者。

宗教思想ガツガチの神都と比べて辺境に領地を構える私の所では防衛力強化つて言つとけば大体の無理は通るので、オラサーダルク様からお借りしてきたヘックんとムンちゃんも国境付近の防衛に当たってくれています。ドワーフ達の工廠やエルフのメイド達も領民達の意識改革の一環で采配したのですが、やはり最初は反応があまりよろしくなく、数年経つてようやくお互いに円滑なコミュニケーションを取れるようになりました。特にフロストドラゴンの2頭は子供に人気ですわね。

辺境でこれですもの。国の中枢に近づけば近付くほど差別意識は強くなる一方で、都市部にはとてもじゃありませんけど連れ出させませんわ。

……？オラサーダルクって誰か？

オラサーダルクはヘイリリアル。アゼルリシア山脈にあるドワーフの廃都に住み着いている霜フロスト・ドラゴンの竜の王様ですわ。レベルは40代後半くらいでしょうか？昔フィールドワークしてたら偶然廃都まで辿り着いて、色々あつて仲良くなりましたの。

なんかクツソ硬くて開けられない扉を開けて欲しいって頼まれました。

ドワーフ製の扉だったんですけど前世の様な電子的なロックでは

なくて変わった形の鍵穴が7つ有るだけの簡素な作りでしたので、水魔法を鍵穴に差し込んで凍らせ、即席の合鍵を作れば簡単に開きました。小さ過ぎて鍵穴見えてなかったみたいです、ドラゴン達は力づくで開ける気しか無かったご様子。

中は宝物庫だったみたいですね、上機嫌のオラサーダルク様と交渉の結果、領地防衛の為にへつくんとムンちゃんを派遣して下さいました。

ムンちゃんは本当はムンウイニアⅡイリススリムというカッコいい名前の雌のフロストドラゴンです。嘗てはオラサーダルク様と領土争いを繰り広げていたらしいのですが負けて子供を孕ませられた挙句家庭内暴力を受けるようになったくっ殺系幸薄人妻ドラゴンですわ。

今回の派遣は自分から立候補したらしく、もう子供も産めない身体になっているのでDV夫から逃げる為のいい口実が作れたと話してくれました。

それでもドラゴンはドラゴンなのでその辺の亜人に負ける訳もなく、立派に仕事をこなしてくれています。

へつくんことヘジンマールは鼻先の眼鏡が印象的な太つちよドラゴン。ドラゴンなのにデブの引きこもりで本ばかり読んでいたから呆れたオラサーダルク様は勘当するつもりでこちらに寄越したらしいです。本を嗜むドラゴンって珍しいですわよね。

警備してもらうには流石に肥え過ぎていたので一緒に運動していたらちやんとシェイプアップしてスリムなドラゴンに変わりました。その激変した見た目にムンちゃんも「痩せた姿は家族の中で一番父に似ている」と驚いてました。

でも中身は引きこもりなので話す時もオドオドしてます、可愛いですわね。

彼はドワーフ族の遺した書物を大量に持っていて、こっちへ派遣される際に全部持ってきたそうです。オラサーダルク様は書物に興

味は無いらしく、私が開けた宝物庫の宝に首っただけだったのですんなり話が纏まりました。今は私の屋敷の離れに保存魔法を掛けて保管して、彼が何時でも取り出せるように整理してありますわ。

故郷の本ですので工廠のドワーフ達に試しに1冊持っていったら、今は廃れたルーン技術が全盛期だった頃の資料もあるらしく、感銘を受けた何名かは工廠で密かに新たな開発を始めたご様子。

私はここで閃いたのです！

アインズ様の大好きなもの、それは「未知」！

自分の知らないマジックアイテム、魔法、技術は彼にとって価値あるもの。コレクターの彼なら尚更のこと！

なら私の領地でしか作れない「価値」を産み出せば、もしバッドエンドで法国が壊滅してもワンチャン生き残れるかもしれない！（技術だけ奪われてポイーされる可能性もあるので安心とは言いきれませんが）

天啓を得た私はすぐさまへっくんとドワーフ達を立ち会わせ、ルーンを用いた新たな技術開発に乗り出しました。ルーン魔法とは位階魔法よりも昔に流行った魔法で現在は魔化技師も減り、廃れてるそうです。しかし工廠の親方達は「施工に時間がかかる分長持ちする息の長いマジックアイテムが作れるぞ！」と意気揚々と開発に乗り出しました。

調べたところによるとルーン魔法はかの竜王が行使するという『最初の魔法』との縁も僅かながらあるんだとか…それ程の歴史を持つ重要フアクターなのです。

まだ表には出しませんが、努力は着実に実を結びつつあります。私が考案したアレももうすぐ完成しますしね。

あとは…羊皮紙に変わる新しいスクロールの素材も考えないと。

これは例の牧場化を回避する為の作戦です。スレイン法国も原作のローブル聖王国のようになってしまう可能性がある以上、羊皮紙（）以上に魔法を込められる力を持った紙を探さなければ…！そしてそれをあの深読み悪魔にそれとなく発信すればあの惨劇は回避出来る

はず：私の領地で牧場経営なんてさせませんわよ！

確かエルフの土地には植物から紙を作る技術があるとメイドの子達が言っていましたし、それをあたってみましょうか。エルフと法国は戦争中なのでおちおち現地まで向かう事はできませんけど。

破滅フラグを回避する為にはとにかく彼の気に入りそうなものを揃えて、極力関わらない様にし、出会っても高圧的な態度を取らないように：ああああ考えれば考えるほど後半は法国には無理な話ですわ！ホンツト宗教国家ってクソですわね！

それと：もう一つ警戒しないといけないものがあつた気がするんですが。何だったかしら？アインズ様関係ではなくて異世界側で：あつたような：

「おつとそろそろいい焼き加減ですわね。」

クレマンティーヌはまだ戻って来ないのかしら。」

「クレマンティーヌ様は先程湯船から上がられたそうですのでもうすぐいらつしやいますよ。」

「そう、じゃあ盛り付けましょう。」

皿をとって頂戴。」

「かしこまりました、お嬢様。」

料理中に深く考え過ぎてしまったようですわね。

メイド長にお皿を取ってもらって盛り付けて、パンと野菜を添えればこれでお昼ご飯として遜色ないでしょう。クレマンティーヌは食べ盛りですからこれくらいペロリですわ。

「お嬢様。」

「あら執事長、どうかしまして？」

「番外席次様がいらつしやっています。お通ししますか？」

「ファツ!？」

あつ…ああそう、お通しして頂戴。」

「承知致しました。」

アイエエエ!?

番外席次!? 番外席次ナンデ!?

神都の奥に軟禁されてるハズじゃなかったんですの!?

まさかあの時のリベンジ…? 確かにこの前老害共に言われて「遊び相手」にはなりましたが、こっちも死にかけましたしおあいこでは?

「よつす、《獄界絶凍》。来たわよ。」

なーんて思ってる間に執事長から案内された番外ちゃんが厨房に入ってきてしまいました。

漆黒聖典最高戦力、番外席次《絶死絶命》。本名はアンティリーネ・ヘラン・フーシエ、スレイン法国の文字通り最終兵器にして聖典一番の問題児ですわ。これでもエルフと人間のハーフらしく100歳越えてるらしいです。

プレイヤーの血を引く神人の中でもとりわけ血が濃く、恐らくレベルは100か限りなくそれに近いと思います。曰く先祖返り、とレイモン様は語ってました。

「あら〜こんな辺境まで良く来ましたわねえ、元老院は許可したんですの?。」

「許すわけないじゃない。」

「抜け出したんですのね…後で小言を言われるの私なんですよ?。」

「そんなときや殴って黙らせればいいのよ。」

どうせこの国で私達を止められる奴なんて居ないんだから。」

監視役の風の巫女ちゃんからは何も聞いてませんし、きつと異能力使って来たんでしょねえ…希少能力の無駄遣いですわよソレ。

なんの悪びれもなくヘラヘラ笑う彼女をとりあえず客間へ案内します。お菓子と紅茶を用意して準備は万端ですわ。

クレマンティーヌのボンベグウはメイド長ベルに持つていくよう頼んでおきますか。

お客様のお相手が優先ですわ。

この子、割と性格が歪んでますのよね。自分を負かした相手の子を産みたいとか素面で言っちゃう系女子で、常に強者を求めています。生まれが複雑らしく、普段は表に出る事ができません。まあ半分エルフですもんね、人間主義の法国じゃ大っぴらに過ごせませんわ。

「それで、本日はどういったご要件ですか？」

「この前の続きなら絶対に嫌ですわよ。」

「え〜つれないなあ。聖堂の中は暇なんだもん、遊び相手がいないと退屈で死んじゃうわ。」

「貴女ねえ…そのナリでもこの国一の長寿なんですからもつと落ち着きを持ちなさいな。」

「歳の話は止めて。」

ねえ、《氷帝重機兵団》レギオン・メビウスまたやってよ。アレ楽しかった。」

「人が必死こいて考えたオリジナル魔法をバカスカ壊される私の気持ちも考えなさい。」

少し前、元老院の命令でやらされた番外席次との戦ルール無用の残虐ファイト闘訓練。

水と風の聖典から術者を集めて強固な結界を張り、被害を最小限に抑えながら他聖典観衆のもと行われたこの子のガス抜きはそれはもう酷いものでした。

私としては試作の魔法を試すのに丁度いいかななんて軽い気持ちで許諾したのですが、非殺傷と決められていたはずなのにハナっから殺しに来る戦闘が激し過ぎて結界が破られそうになったから代わりに私が結界維持しながら戦う羽目になるわ挙句テンションの上がつた番外席次が異能力まで使って仕留めに来るわ、散々でしたわ！結果、私が魔力切れでギブアップしたのでそこで訓練終了となったのですが、あのまま続けていたら確実に腕か首が飛ぶところでした：あんな仕事隊長に投げときゃ良かったんですわよ。

「あくあ、アンタが男なら孕んでやっても良かったのに。なんで女なの？」

「私、今凄い理不尽な事を言われていますわね!？」

「…わりと真面目に嬉しかったんだよ。」

私と同等に戦える相手を生まれて初めて見つけたんだから。」

急にしゅんつとなつてしおらしい態度、上目遣いで寂しそうな表情。この子、普段大物ぶつてる癖にこういう所あるから放っておけないですわよね。ギャップ萌えというやつですわ。

「アンタもそのうちツアーに目を付けられるかもね。」

「…ツアー？どなたですか？」

「調停者気取りのクソトカゲよ。法国とそいつの取り決めのせいで私は自由に動けないの。」

アンタは神人で私と同じ位強いし、そのうち接触してくるんじゃない？」

ツアー…つあー…？

ツアインドルクスⅡヴァイシオン!?

あ、あ、あああツ（クツソ汚い叫び）

そうでしたわ、完全に忘れてました！

白金の竜王、ツアインドルクスⅡヴァイシオン。

アークランド評議国の永久評議員にしてこの世界の仕組みを理解している者の1人。原作でもなんか意味深な発言しながら伽藍堂の鎧を魔法で動かしてましたわね！相当な実力者のようでナザリックの守護者と戦つても引けを取らない強さを持っているのだとか、それに目を付けられると!?

やっべーナザリックに囚われすぎてこの世界の抑止力の事は完全に無視してました。確かツアーも中身がドラゴンだから特別人間を庇護する訳でもなく、ルイラー“世界の調和”を保つ調停者を勝手にやってるんでしたわね。過去にプレイヤーを殺したこともあるんでしたっけ？

そんなのに睨まれたらおちおち夜も眠れせんわ！危険視されて暗殺とかされたらどうしましょう…

「危険と判断されたら評議国と戦争かなあ、それはそれでちよつと楽しみだわ。あのトカゲを殺せば私は自由だもの。」

けっけっけつと可笑しそうにお菓子を摘む番外ちゃんの声も最早

耳に入ってますせん、内心気が気じやないのですわ!

「つづくですわ、破滅フラグが増えましたわ…もう嫌あ…おうち帰る…」

「…?」

結局この後ルビクキューの話で盛り上がり、日も傾いたので番外ちゃんはお土産に用意したクッキー片手に帰って行きました。

…またレイモンおじさまからお小言を言われてしまいますわねこれは（名推理）

自室に戻るとクレマンティーヌがインナー姿で眠っていました、ご飯を食べた後番外ちゃんと会うのが嫌で私の部屋でそのまま寝てしまったらしいです。幸せそうなカオして寝ちゃってまあ…

起こして日が落ちかけているのを見ると慌てて帰っていきました。

その夜

「お嬢様、失礼致します。」

「入りなさい。」

自室で明日の任務の準備をしていた時。

コンコンと自室の扉をノックし、オルターが何やら黒くて長い箱を小脇に抱えてやって来た。

「先程工場にて工場長が“これ”をお嬢様にと。」

「…思ったより早かったですね。」

高級そうな黒い箱を明け中身を確認する。

「図面通りの見事な出来栄えですわ、流石ドワーフはいい仕事をします。お給料を弾んであげないと。お父様のワイナリーから年代物を何本か譲って頂きましょう。」

「お伝えしましょうか?」

「いいえ、こういう事は私が直接お願いしなくては。仮にも彼等の事業主なのですから。」

「…支配者に相応しい振る舞いかと。」

私のお勧めは78年と59年でございませう。」

「あらそう、貴女が勧めるならそれを頼んでみましょうね。」

上機嫌で微笑みながら箱の中の「それ」を優しく撫でた。

「全長39cm、重量16kg、「それ」は最早お嬢様にしか扱えない代物となっております。」

「触媒は？」

「それぞれヘジンマール様とムンウイニア様の生え変わりで抜けた牙を使用しております、誇り高き霜の竜から賜ったものであれば格別の触媒になるかと。」

「綺麗にグリップに嵌ってますわねえ、表面の処理も美しいですわ。」

「牙の加工と金属研磨はエルフのメイド達が行ったそうで。」

「素晴らしい。」

ルーンを刻む為の「核」は何を？見た目はアクアマリンかサファイアですね。」

「お嬢様の魔法に合わせ変種のクリソベリルを取り寄せました。コストパフォーマンスの面でもこれならば軽い衝撃を加えるだけで理論上は発動可能です。」

「フロストドラゴンの触媒、エルフの細工、ドワーフの製鉄技術。すべて…すべてパーフェクトですわオルター。」

「感謝の極み…」

予め作っておいた太腿のホルスターに「それら」がピッタリと収まり、レイラは満足気にうなずいた。

この世界の魔法理論を研究し、エルフ、ドワーフ、フロストドラゴンの協力のもとにできあがった新アイテム。その名も…

「ショットフンド撃杖、完成ですわ。」

実地試験は明日の竜王国で行いましょう。

待ってなさい破滅フラグ、私は絶対に負けませんわよ…!!」

4 破滅フラグの立ちそうな国に派遣されてしまっ た…

とある竜の独白

【監視の任より戻った。

北部の山あいには亜人種の部隊が接近している、数は目視で50程、
“十王”含む警戒対象は確認していない。下つ端が功を焦ったか…

警戒を厳に、防護を固めよ。】

「承知致しました、ムンウイニア殿。

聞いたな諸君、北防壁に部隊を展開せよ。弩部隊は炸裂ボルトを装
填し所定の位置で待機、威嚇射撃の後後退しなければそのまま交戦に
入る。急ぎゲバルト様へお伝えしろ。」

「はっ！」

部隊長の言に応えキビキビと移動する兵士たち、その動きには一切
の乱れはない。みなが戦う者の眼をしていた。此処は国の最端であ
り、亜人との生存競争の最前線でもある。僅かばかりでも気を抜けば
敵は防壁を突破し、領内へと雪崩込んでくるだろう。故に衛兵達は
皆、厳しい訓練を受けた精鋭達だ。

そんな人間達の中に私は混じる。

ムンウイニアIIイリススリム

嘗ては一都市を統治していた誇り高き霜の竜が一頭。それが何故
人間の国で哨戒などを行っているのか、ままならないものだ。

【必要ならば私も出よう、レイラに留守を任された手前何もしない訳
にもいくまい。】

「おお…かの霜フロスト・ドラゴンの竜が背を守って下さるとなれば我々も後顧の憂い
無く戦えるというもの。」

御気持ち有難く頂戴致します。

もしもの際は、頼みますぞ！」

霜わの竜たしという上位存在に頼りきりになるのではなく、あくまで最後の砦として利用する彼ら。しかし自分達が捨て駒であるという諦めは一切感じさせない。

人間とは不思議な生き物だ。

全てはあの娘がオラサーダルクの城へやって来た時から始まった。

『ごきげんよう霜の竜の皆様！』

私、レイラと申します。フィールドワークしてたら道に迷った挙句たまたまこの都市を見つけてしまいましたわ、雨宿りならぬ雪宿りさせて下さいな。

あ、このとおり敵意は無いのでご安心下さいまし。

取り敢えずお近付きの印に…

一発芸でも披露しましょうか！』

変な人間がやって来た、俺達では手に負えん、筋肉モリモリマッチョマンの変態だ、と息子達が連れて来たヒトの雌。(筋肉モリモリマッチョマン…?)

アゼルリシアの豪雪地帯。取り分け今日は寒く、冷寒耐性を持つ我々ですら外に出るのが億劫になる程の悪天候の中、薄着のまま平然と歩いてくるレイラと名乗った人間は開口一番そんな事を宣った。

沈黙の後一同、困惑

直後に彼女が行った一発芸とやらをオラサーダルクがえらく気に入ったせいで天候が回復するまで城への滞在を許された。

…いや確かに氷の塊を削り出してオラサーダルクそっくりの氷像を一瞬で作り上げたのには霜の竜一同感嘆の声を上げてしまったが。財宝達と一緒に城の一角に飾るほど気に入ったのか…【特にこの鼻元の辺りなど俺の凛々しさを的確に再現しているだろう？素晴らしい

出来だ。」アツソウ。

それから時間潰しに学者だと言う彼女の話を聞くに至り、その過程で一緒に聞いていた息子の誰かが「人間ならあの扉を開けられるのではないか」と呟いて、真に受けたオラサーダルクは彼女に依頼する。

元々この都市を治めていたらしいドワーフの一族が遺した大扉。奥に宝物の類があるのは本能で察しているのだが強固過ぎて夫の攻撃ですら傷1つ付かず、開け方も分からないため最近では爪研ぎ様に利用されるのが専らな代物。その解錠を。

【見返りに俺の財宝を求めたら解錠した後には殺してやる。】と意地の悪い笑みを浮かべていたオラサーダルクをよそに、レイラは快くこれを承諾した。

一族総出で扉前に集めていた財宝をどかし、準備を整え綺麗になった謁見の間に立つレイラ。

何度か扉を殴りつけ、傷が付かないと悟ったあいつは表面を調べ始め、カチャカチャという軽い音が響いた後に…あっさりとは扉は開いてしまった。

ええ：

一同再び困惑、オラサーダルクのみ大喜びで扉の向こうへ飛び込んで行ったが

扉の向こうはまさに黄金の山といった絶景で、謁見の間の4割近くを専有していた金庫内にうずたかく積み上げられた財宝の数々に思わず私も声を上げてしまう程だった。

開けた当人は「はえーすつごい」などと間の抜けた声を漏らしている。緊張感死んでるのかお前は。

オラサーダルクなど子供のように財宝の山で嬉しそうに転げ周り、嘗てないほど上機嫌になった奴から願いを聞かれ、暫く考えたあと彼女が出した自国の防衛の為に霜の竜を派遣して欲しいという申し出にみたび一同困惑。あいつ、宝に夢中で簡単に了承しやがった。

財宝馬鹿になった夫は役に立たないので妻同士で話し合った結果取り敢えず2頭派遣するに至り、うち1頭は引きこもりのデブ、ヘジンマールに白羽の矢が立った。【引きこもりは要らん】と事実上の放

逐宣言だったが家長を否定する者もおらず、本人の与り知らぬところで裁定が下る。

そしてもう1頭の梓は自己申告で私が赴く事になった。

ハーレムの中で一番の高齢でもう子供を産むこともできない、巨人共との領土争いが続く中、戦力強化の為多くの子を産むことが務めである雌の竜にとってこれは致命的だ。故に私が抜けてもオラサーダルクが困る事はない。

それに正直領土争いに嫌気が差した、というのも理由の3割ほどを占めていた。

だって独身の頃からオラサーダルクとナワバリ争いを繰り広げ、負けたら孕まされて今度は巨人共と領土争いとかぶっちゃけやってられん。疲れた。

突然の勘当宣告に最初は異を唱えるヘジンマールだったが人間が少し口添えすると手のひらを返して了承し、急いで準備を整えると言って小走りで部屋に戻って行く。

そうして人間の国へとやって来た私達。

任された仕事は敵部隊を空から監視し状況を報告する事、そして可能なら上空から援護する事。

そして初めて目にした、あのヒトの雌。

いや、レイラの本当の実力を。

亜人達を瞬く間に氷砕し、振るう刃で屠っていくさまは正に嵐のよう。なんだ詐欺だろうアレは、オラサーダルクなどより余程強者ではないか。なのに初対面だった我々にも平身低頭を貫き、あくまで「びじねすばあとなあ」としての協力関係を築きたいと申す謙虚な態度。これが分からない。

強ければ己を誇示していいハズだ、ふんぞり返って威張り散らしても文句は言わぬ。

どうしてと困惑する私にレイラは品のある笑顔を浮かべ、言うのだ。

『淑女たるもの、常に余裕を持つて優雅たれ』と

いや、全然意味わからん…なにそれ…怖…

だが彼女の言う『強さ』とは、なにも力に限ったものではないのだと理解できる。

霜の竜には持ち得ぬ強^{したた}かさ、それが私にも備わるのなら…あの暴力夫をギャフンと言わせてやれるのかもしれないな。そう心の中で想像し、久方ぶりに声を出して笑ったのだった。

それからというもの、人間の国での経験は驚きの連続だった。

知らぬ土地、知らぬ種、知らぬ物。

雪山に籠っていては決して得られぬ新たな知見の数々は私に大いなる活気をもたらし、まるで若い頃に戻ったかのよう。

中でもヘジンマールの激瘦せした姿には驚いた、若い頃のオラサーダルクと瓜二つだ。こんな所で血の繋がりを感じるとは思わなんだ。

一番の変化は私自身が強くなった事。

レイラと共に亜人達の討伐を続けた結果、嘗ての頃より私は随分と強くなった。四肢に力が漲り、爪はより鋭利に、牙はより強靱に、身体の変化を感じ取れる。

更には息吹の強化に加え、《凍晶装甲^{アダマンシアライズ}》という新たなスキルまで取得する事になるとは、まさかこの歳になって新たな力に目覚めるなど…楽しくなっちゃうじやないか、ふふふ。

『ムンちゃんも中々の戦闘狂ですわねえ』

ええい嬉しい、お前に言われたくはない。

私は誇り高き霜の竜、常に冷静沈着だとも。

なあヘジンマールよ…何故私から目を逸らす？お？やんのか？

「ゲバルト様がご到着なされたぞ、総員傾注！」

物思いに耽っていたところを部隊長の号令に起こされ、思考の海より舞い戻った。

かの国特有の軍装に身を包んだ威風ある男が私の前に立ち、その整った口髭を撫でながら穏やかな表情で紡ぐ。

「ムンウイニア嬢、此度も空からの情報提供まことに感謝する。おかげで事前にこちらで準備ができる、先手を取れば戦略的にも有利に立てるからな。」

【構わぬ、これも『びじねすぱあとなあ』の務め。】

「ハハハ、これからも娘と仲良くしてやってくれ。」

さて：連中は炸裂ボルトによる牽制射撃にも怯まぬようだ。

先日大部隊を儂とレイラに滅ぼされた後だと言うのに、忙しない事だな。」

「件の『豪王』の姿も見えないとの事で、前回の残党による破れかぶれの特攻作戦かと思われ、公爵閣下。」

「本来群れる事の無い亜人種共だ、一度統制を失ってしまえば戻る事は難しかろう。」

いつまでも学ぶ事を知らん哀れな生き物かと思えば豪王のように短期間で学び変化する者もいる、全く亜人という奴は思い通りにならなくて腹が立つ。」

「違いありません。」

ゲバルト・レーム・ブラッドレイ。

亜人生息域と隣接するこの地を公爵として治めていた男。

今は家督を娘であるレイラに任せ、本人は隠居の身であるがその威光は現役の頃から失われておらず実力は相当なものである。

「門を開けよ、正面から打って出る。」

そして、あのレイラの父親

【一応に問うが、私とヘジンマールは必要か？】

「なに、そこまで気に掛けて頂く程の大事でもないよムンウイニア嬢。普段通り空から援軍の来訪を知らせてくれるだけで事足りる。」

それに…

「先日工廠に依頼していた物が届いてね、試し斬りがしたかった。」
ニコリ、そう穏和に笑みを浮かべるゲバルト。

腰につがう二本のシンプルな作りのカットラスが日を反射し煌めいた。

耐性があるのにもかかわらずヒヤリと冷たいものが背中に走る。

あの眼光、アレは幾多もの戦場を生き延びた強者の眼だ。彼もまた、我々にはない強かさを持つ者である。

「私が神を敬うのは救いを求める為ではない。

人を救うのは神ではなく、いつだって人なのだ。ならば人に仇なす
亜人^{やつら}共に鉄槌を下すのもまた、我々だ。

一匹残らず皆殺しにする、娘のかけた慈悲を無下にする連中に容赦
は要らん。骨も残さず殲滅せよ。」

怒号が響き、呼応するように門が開く。

そこから先は一方的な殺戮だった

これがスレイン法国边境都市の日常である。



遠征任務ですわよ全員集合！

「ハアイ番号くー！ーッ！」

「2イツ!!」

「…ええっ!?き、3ン!」

「4ですぞ!」

「5!!」

「6!」

「7ア!」

よオーっし全員居ますわね!

「点呼ヨシッ!!ですわ。」

早速竜王国へ出発しますわよ〜!!」

オオーツ!!と皆も拳突き上げやる気満々。困惑するニグン様はこの際放っておきましょう、ノリが大事ですよノリが。

本日は別部署である陽光聖典の皆様のお手伝い、竜王国でビーストマンとドンパチしますわ!

人類を餌として食らう亜人、ビーストマン。獣の力を持った蛮族共は隣国である竜王国の住民を狙って昼夜問わず攻め込んで来るのです。成人のビーストマンの筋力は人間の10倍、種としての差があり過ぎる為に国民をバクバク食べられてしまい大きな被害を受けた竜王国のお姫様は困り果て、スレイン法国へ救援を求めました。そして多額の寄付金を法国へ納付する代わりに戦力を派遣してもらおう契約を結びましたの。

「毎度の事ながら、派遣するのはたったの7人って法国もケチですわねえ。」

「竜王国のお姫様はドラゴンだからねー、人間じゃないからお上も渋々ってカンジなんだからね。」

「そのくせ金は糞り取るんですもんねえ、良い商売してますわ。」

クレマンティーヌの言う通り、竜王国の国王は真にして偽りの竜王と呼ばれるドラゴンの血を継いだワンエイスのお姫様。国主が人間ではないので法国的にはポイする流れなんでしょうね。

ただお金もらってるから仕方なく最低限の援助はしてやってるみたいですけど。

マジ汚ねえ守銭奴国家ですわスレイン法国、我が神スルシャーナ様

もこれには激おこですわよまったく…

今回派遣されるのは漆黒聖典から私とクレマンティーン、そして天使による波状攻撃と殲滅戦の得意な陽光聖典の精鋭5名ですわ。

「かの漆黒聖典から2名も出動を許されるとは…」

共に戦える事を神に感謝致します。」

「かの《疾風走破》と《獄界絶凍》のお2人が居てくださればこれ程心強い事はありません、頼りにさせて頂きますぞ！」

ガツハツハと豪快に笑うオジサマはイアン・アルス・ハイム様。その隣で祈り捧げてるのはみんな大好きニグン・グリッド・ルーイン様ですわ。

2人とも声が良い！レアリティ★5はありますわね！

他のモブ聖典さん達も今日は頑張つて下さいまし！

「お任せ下さいー！」

うん、いい返事ですわ！でも左の貴方、スリングショットには注意して下さいね。打ち返されて頭が吹っ飛びそうな声してますわ。

移動中は特筆すべき事もなく、私達を乗せた移動用八足馬スレイパニルは森を抜け、まもなく竜王国へ到着しました。

荒らされた大地、壊され欠けた城壁に静まり返った街の中には負傷して苦しむ騎士や竜王国所属の冒険者達の姿が目立ちます。馬を降りてここからは徒歩で王城まで向かいますでしょうか。

「…：…なんか見られすぎじゃない？」

「私が美し過ぎるからじゃありませんの？」

「ナチュラルに自画自賛するのは相変わらずですか《獄界絶凍》殿…」

「ニグン様は前回の遠征で同じ班でしたもんねえ、懐かしいですわ。その時から戦況は悪かったですけれど…この様子だと前から酷かった物流が更に滞ってるみたいですよ。」

市場らしき一帯には露店はあっても商品は疎ら、食料品だけでなく医療品も不足している模様。

なんというか…前回よりも疲弊してませんか？

中には睨みつけるようにこちらを見つめてくる方もいますわ、「お前ら来んのおっせーなんだよ」って目で訴えられています？！しょうがないですわよお役所仕事なんですから。

あ、諸事情により漆黒聖典である私とクレマンティーヌは外套で顔を隠しています。一応最高機密部隊ですので。手続きがめんどくせえ所為で2人ともフル装備で来れませんでしたし、やはり法国はお排泄物シッコですわね。

法国から神官の派遣と食料品の追加要請を出しときましょう。残り2つの砦を取り戻すまでの辛抱ですわ。

王城付近まで辿り着くと騎士に案内されて、私達は女王陛下の下まで通されました。小さな女王様は精一杯の笑顔で出迎えてくれます。

「ようこそスレイン法国の精鋭たち、待ちわびておったぞ！」

「オッスオッス久しぶりですわねドラちゃん！」

「おお！《獄界絶凍》どのも来てくれたのか。」

これは頼もしい、これでようやく2つ目の砦を奪還する為の算段を立てられるな！」

玉座に座るドラちゃんちゃんの両脇を掴んで持ち上げてぐるぐる振り回すと「やくめくろく！」って慌てる可変型ロリババア、マジ天使ですわ。

ドラウデIRON・オーリウクルス。滅びかけの竜王国の為に健気に頑張るお姫様。やり手の宰相と竜王国唯一のアダマンタイト冒険者チーム『クリスタル・ティア』の助力の成果もあって、今日までビーストマンの侵攻から国を保ち続けています。

現在はスレイン法国から私や陽光聖典の皆様が介入した成果もあって、奪われた都市のうち王都から一番近い都を取り返す事に成功しましたの。

…私、原作でもこの国の結末知らないんですわよねえ。割とガンガン介入しまくってますけど大丈夫でしょうか？あつ、クレマンティーヌでもういい加減やらかしてましたわ。今更今更。

ところで、後ろのクレマンティーヌの顔が真っ青になってんですけどお腹でも下しましたの？ ぽんぽんぺいん？

「《疾風走破》殿、彼女達は初対面でこのやり取りをしていますので大丈夫です。今さらですよ。」

「えー…一応相手は女王陛下なんだけど。」

「宰相殿も無反応でしょう、なら問題ありません。慣れてください。」
「えー…」

ニグン様が悟った表情で何か言ってますけど無視ですわ無視！今はドラちゃんであそびますのよ！

こんなんじや満足出来ねえぜエ！

奥のセラブレイド様が凄く羨ましそうにこっち見てますわね…とりあえずドラちゃん抱き締めてこれみよがしに令嬢スマイルかましますか。

あつ、血の涙を流し始めましたわ！（無邪気）

「ねー、なんで奥のおにーさん目から血い流してんの？」

「心を無になさって下さい 《疾風走破》殿。」

いつものお戯れです。」

「ニグン隊長悟り過ぎでは？ 吾輩少々心配になってきましたぞ。」

暫くロリ女王陛下を撫でくりまわし、サテイスファクシヨ満シ足したので宰相殿と

セラブレイト様からビーストマンの動向を詳しく説明してもらってから作戦会議です。

えーっと前回の襲撃ポイントは此処で、取り戻す都市はこっちだから…

「森の中の前線拠点が厄介ですわね。」

「少なくとも300は下らない数のビーストマンがそこにひしめいています。」

「宰相殿、この拠点はいつ頃から？」

「一週間ほど前ですかな。」

前回、法国の皆様の御助力あって取り戻したこの都市からさほど離れていない。

恐らく次を奪い返される事を恐れて防衛線を敷いたのでしよう。」

森の中での遭遇戦はビーストマンに分があり過ぎるので、迂闊に突っ込むのは自殺行為。連中を天然の要塞から手前の平地に引きずり出す必要がありますわね。なら…

「前線に私が陣取って敵を誘き出しましょう。」

クレマンティーン、クリスタル・ティアの皆様と森の側面から回り込みなさい。正面は騎士達のファランクスと陽光聖典の天使で固めて防御陣を敷いて下さいな。」

「《獄界絶凍》殿が陽動をして下さっている間にクリスタル・ティアと《疾風走破》殿が手薄になった拠点本陣を突くのですな。」

「そういう事ですわ。」

竜王国側も兵の損失は望むところではないでしょう、なので防御に徹して頂きます。手を貸せるうちは私共に頼って下さいまし。」

「うう…すまんの《獄界絶凍》どの。」

「クリスタル・ティアの皆様は如何かしら？」

敵拠点にはきつと都市から連れて来られた「食料」が沢山居ると思うのですが。」

「無論、生きている者は全員回収してみせるとも。任せてくれ。」

仲間と共に力強く頷くセラブレイト様。

決意は堅く、頼もしいですわね。血涙の跡が残っていないければまだ格好がつくのですけど。」

「クレマンティーンもいいですわね？」

万一ビーストマンに囲まれても貴女の強さなら問題なく突破でき

…クレマンティーン？」

「ほえ〜ねーちゃんやんが真面目に会議してるとかめつずらしい〜…」

「ちゃんと聞いてましたの？ア・ナ・タ・はあ!!」

「ごめんなさいごめんなさい聞いてませんでした！」

ぎにやああああグリグリは止めでえええッ!?!」

仕事申なのにぼうっとしてるクレマンティーンに令嬢神拳奥義『妹の顔グリグリ脳天爆砕拳』が炸裂し現実に連れ戻します。力加減間違えるとホントに爆砕しちゃうのでいてねいてねいてね〜いにね。

今のこの子の実力なら5、6匹同時に相手したとしても問題ないで

しよう。後でクアイエツセ様から借りた伝令用の使い魔を渡しておきますか。

私のレベリング中にクレマンティーンもちよくちよく交じっていたので少しづつですがレベルが上がっているみたいです。実は漆黒聖典内でも純粋な近接戦闘でクレマンティーンに勝てるのは私と隊長、それから番外ちゃんくらいなんですよね。

例のブツの実地試験もやりたいですし、ここは私が前に出るしかありませんわ。

番外ちゃんとの戯れに比べればビーストマンなんて貧弱貧弱ウ！ですから。

「それでは拠点制圧戦、始めますわよ！」

5 破滅フラグしかない国で戦ってしまった…

嘗てビーストマンに奪われ、支配されていた竜王国領の3つの都市。

人類救済を掲げるスレイン法国からの助力もあり、なんとか蛮族を押し返す事に成功したが依然として状況は悪く、数でも質でも劣る竜王国は苦戦を強いられていた。

そんな中、事態を重く見たスレイン法国は殲滅戦に特化した特殊部隊、陽光聖典の出撃を決断する。

それと同時に本人の強い要望で本来なら出張ることの無いはずの漆黒聖典から一名、追加で竜王国入りが決定した。

その者は蛮族ひしめく戦場にたった1人で飛び込んで千を超えるビーストマンを狩り尽くし、戦線を立て直して都市1つを取り戻すまで戦い続けた。

赤銀に染まった野に散らばる獣達の残骸のなか、銀の髪と黄金の瞳を持つ彼女はその身の丈程の戦斧を片手で握り締め、優雅に高笑う。まさに一騎当千、女神と見まごうようなその美しい容姿も相まって、共に戦った兵士たちは後に揃って彼女をこう呼んだ。

《銀の戦女神》

と

「ぶええつくしよおおおいッ!!!ですわ。」

「締まりませんなあ。」

「誰かが私の噂でもしているんでしょう、番外ちゃんとか。」

「噂される相手が物騒過ぎやませぬか…?」

「悪い子じゃありませんのよ?」

「この前ルビクキューでマウント取ったらマジで殺しに来ましたけど。」

「ええ……」

「ッ！議事堂前の壁が切り刻まれていたのはそれが原因ですか！あの後修復作業が大変だったんですよ、土の聖典とも協力して!」

「それはそれはご苦労さまですわ!」

「つーかルビクキューくらい30秒以内に六面揃えとか余裕じゃありません?4×4マスとかそれ以上になると流石に私でも全面揃えるのに1分以上かかりますわね。」

「自分にあの玩具は難し過ぎます。過去に一面たりとも揃えた試しがありませんぞ…」

「えーほんとにぶごるか?」

後方には竜王国兵士たちが固めたファランクス陣、陽光聖典は既に天使を召喚し待機させている。そんな中暇そうにしていた《獄界絶凍》ことレイラが話した残念な会話は幸運にもニグンとイアンに聞かされただけだった。

ドラウデイロンから攻撃許可が降り、クレマンティーンが森の側面に辿り着いたと使い魔を通して合図が飛んできたので、レイラは手にもつ《属性付与》^{エンチャント}が付与され青みがかったハルバードの柄を放るように地面に突き刺す。

それだけで蜘蛛の巣状に地面が抉れ凍り付き、急に気温が下がって周囲に靄^{もや}が立ち込め始めた。

彼女が《獄界絶凍》と呼ばれる所以、異能力で強化された絶対零度で全てを凍り付かせるレイラの力を知るニグンはそれだけで身震いするに容易い。

逆にイアンは神の使いとまで呼ばれる漆黒聖典の一員がどんな戦

いをするのか、純粋な興味に心を踊らせていた。

「では、予定通り誘き出して参ります。

殆ど私が殺してしまうかと思いますが、陣が崩れぬよう兵士たちを護つて差しあげなさいな。」

「承知しております、《獄界絶凍》殿もご武運を。」

「ふふふつ、この程度の戦いに運など不要ですわ。

私が真に恐れるのは来るべき『破滅フラグ』のみ、それ以外は全て些事ですもの。」

「?。」

「おっと失礼、お喋りが過ぎましたわね。

では…

《魔法効果範囲拡大》、《吹雪き渡る氷の大地》ツ!!」

思いつきり踏みつけたレイラの足先から放射状にどこまでも伸びる氷の大地、地形のみを凍らす氷結魔法が森の入口まで一直線に伸びていく。

《滑走》

逆脚を軸にし踏み出したレイラはスケートのように氷面を滑り、猛スピードで森の中へと飛び込んで行った。

突然木々が凍り付いた事に驚愕する見張りのビーストマン達はコレが「敵襲」であると素早く気づき、うち一体が伝令のため森の奥へ消えていく。

それを見送ってからさあ警戒するぞと思ったその刹那、1番手前に居た獣の顔面に淑女のおみ足が突き刺さった。

「マイクチェックの時間ですよオラアツ！」

蹴り飛ばしたビーストマンの頭部は既に無く、首の先から大量の血を撒き散らしながら地面をバウンドして見えなくなった。呆気に取られた一匹のビーストマンにレイラが取り出した腰の短杖らしきものの筒先が向けられる。

途端、ビーストマンの土手っ腹に氷柱が突き刺さった。いつの間にか腹に穴が空いた彼は悲鳴を上げる間もなく絶命した。

「第4位階は問題なくイケますわね、だったら次は…」

少し思案したレイラは別のビーストマンへ筒先を向け、引き金を引く。

ひゆうつと一瞬冷たい風が疾り、今度は巨大な氷塊と共に氷漬けになるビーストマン。

「あらあグリーフ・フロストコフィンの氷柩グリーフ・フロストコフィンも無詠唱で撃てますわ！素晴らしいですわね！

この調子だと第7位階までなら反動無しで放てそう…いや、「核」の強度に若干不安が残りますから長時間の戦闘なら第6位階までに抑えた方が安牌かしら。この様子だと《撃杖》も杖にカテゴライズされているようですからこの世界の法則には反していませんし、あとは全体の耐久性と射撃時のブレ、私の異能力が上手く噛み合うか試さない…」

凄いい早口で呟いて顔を上げればゾロゾロと「実験体」が集まってくる。両手に持つ《撃杖》と呼んだマジックアイテムを手持ち無沙汰にくるくると回しながら、レイラはマッドな笑みを浮かべるのだった。

それから暫く、不運なビーストマン達は的と化してレイラに討伐され続けた。

レイラの使う魔法の根本は『凍結』、この世界に古くから存在する地水火風の四元素、その内のひとつであり、自然現象そのものだ。

彼女が氷魔法を放てば放つ程周囲に影響力は増していき、より強力かつ広範囲に渡って彼女の世界は象られる。耐性を持つ彼女以外の生命はたちまちその活動を止め、物言わぬ氷像と成り果てる。決して生者を寄せ付けぬ凍獄の女王、レイラが《獄界絶凍》と呼ばれる由縁であった。

ある者は腹に幾つも氷柱を刺され、またある者は未来へ冷凍保存。レイラの放つ冷気の影響で加速度的に周囲は凍結していき、遠くにいたはずのビーストマンまで数秒で物言わぬ氷像と成り果てていく。

最後に残ったのは静寂と、白銀に凍った木々と草の中に立つ漆黒のドレスを着た淑女のみ。

「あらヤダく私とした事が、少し興奮し過ぎてしまいましたわ。お許しあそばせ。」

白々しいお辞儀をし、前菜を平らげたレイラは更に森の奥へと突き進む。道中で出会ったビーストマンを適度に処理していくと、伝令を聞きつけ応援にやってきたらしきビーストマンが飢えた本性丸出して追いかけてくるではないか。

「んー物足りませんわねえ…もう少し荒らしてやりましょうか。」

くるりと踵を返し、別の道を疾走していくレイラを血眼になって追いかけるビーストマンの群れ。中には木の枝を伝って移動出来る器用な者もいる、故に森林でビーストマンと相対するのは愚策の極みでありましてや生き残るなど至難の業だ。

相手が神人^{レイラ}でなければの話だが。

まるで後ろに目でもついているかのようにレイラはビーストマンの追撃をひよいひよいと避けて適度に他の個体を的にしながら走り続ける、しかも速度が全く落ちていない。先頭のビーストマンが追いつけそうで追いつけないギリギリの速度を維持しつつ森の中をがむしやらに走り回り、後ろに沢山^{トレイン}付いてきているのを確認したレイラは満足し、元来た入口に向かって木々を縫うように進んで行った。

開けた視界の先には横一列に並んだ鉄盾の壁と五体の天使達、そして先程取り逃した人間の女。

散々焦らされた拳句に目にした人間^{エサ}の大群に獣の群れは唸り声を上げて歓喜した。

食事がここにあるぞ、と仲間たちへ告げる遠吠えだ。最近森の中に潜んでいてロクにちゃんとした食事をとっていなかった。運動能力が高い代償に沢山食べねば生きていけない彼等にとって食料は死活問題、ならば突然現れたご馳走の山に我慢出来るはずも無い。

次々森から飛び出してくるビーストマン。

“保存食”にと取り置きしていた、あの都市から連れて来た人間もこれが終わったら全部食らってしまった。若い衆がアレを欲しそうにしていたから横取りされる前に平らげなければ。そう安直に考える先頭を走っていた成体のビーストマンが最期に見たものは、銀の淑女が振り下ろす凶刃だった。



「さあメインディッシュですわー！」

高らかに吼えなさい、人類の生は此処に有ると！

「弱肉強食は食物連鎖の宿命なれど、我々はただ座して食われるだけの肉袋に非ず。

全霊を賭して抗うのです。貴方達にその意志と覚悟が有るのなら…嘗て人を救った我が神のように、この私が背中を押して差し上げますわッ!!」

フアランクスの向こうから聞こえる怒号のような咆哮に満足したレイラは手始めに先頭を走るビーストマンの首をハルバードで刎ね、いつもの高笑いと共に彼女の背を大量の矢と投げ槍が飛んでいく。ビーストマンの身体は強靱だ、鉄の投げ槍程度が数本刺さったところで戦闘に支障など出ない。

この投げ槍が “ただの” 投げ槍だった場合の話だが。

「ワイデマ魔法効果範囲拡大ク」、エクステンドマジック《魔法効果時間延長》！

エリアエンチャント《範囲属性付与・凍結の魔霧》!!」

第6位階に属する範囲魔法、中を通過した飛翔物に凍結効果を付与する薄紫の霧。レイラの頭上に薄く広く展開されたそれは上空を行

く鉄の槍を絶死の極槍へと変貌させた。

淡い紫色に輝く槍は雨のようにビーストマン達へと降り注ぎ、掠つた部分から加速度的に凍りついていく。外れた槍も《吹雪く氷の大地》で凍らされた地面と接触した途端に生まれた氷片が爆風と共に弾け飛び、彼等の肉を抉った。

脚に礫をもろに受け、悲鳴を上げて転倒するビーストマンにレイラは容赦なく刃を振り下ろしていく。

華奢な身体つきとは裏腹にレイラは片手でハルバードを軽々と振り回し、嵐のように戦場を駆け抜けた。

「天使達よ、蛮族共を蹴散らせ！」

回り込もうにも召喚されている天使達が立ち塞がり、慣れない凍った地面で足下もおぼつかないビーストマンは得意の運動能力を活かせない。

天使の持つ剣に次々と串刺しにされていく同志を見ながら、自分達は罠に嵌められたのだと気付いたのは哀れにも氷像と化した後か、首が胴から切り離される寸前であった。

「みんなで倒した」感を演出するのがプロの技ですよ。こういう時属性付与できる魔法って便利ですわー…

さあさあ野郎ども、二投目のご用意は宜しくて!?!」

レイラの問いに兵士達は割れんばかりの咆哮で応える。士気も上々。

間もなくして、2度目の雨が更にビーストマンの命を削り取った。

レイラ達が前線で大乱闘を繰り広げるなか、クレマンティヌとセラブレイト率いる『クリスタル・ティア』は森の中をひた走る。

ビーストマンの前線拠点、当然食料も用意されているはず。それを

奪還するのが彼等の使命。

「…ん、ホイっとー」

レイラの陽動作戦により大半のビーストマンは森から出ていった。先行するクレマンティーンが残りの彷徨っている見張りを見つけ次第不意打ちで始末してくれるおかげで進行速度は随分と速い。

間もなくして木で組まれた掘っ建て小屋のような簡素な建物を発見、即座にクレマンティーンが外のクリアリングを行う。何度か獣の短い悲鳴が耳に届くがビーストマンが騒ぎ出す気配は無い。彼女は順調に暗殺を進めているらしい。

最後とばかりにさつきまで目の前を歩いていた虎柄のビーストマンが喉元を真つ赤に染め、声を上げる間もなく事切れた。

「お見事です、《疾風走破》殿。

貴女が居てくれて助かりました。我々だけでは救出はおろか森に近寄る事すら難しい。」

「ねーちゃんのお願いだからね。これくらいどつてことないよー。

今んとこコイツ以外にビーストマンの気配は感じないけど、血の匂いで近くの奴が来ちやうかもだから手早く済ませちゃってね。」

へらへら笑うクレマンティーン。愛用のステイレットは血にまみれ、手持ち無沙汰に指先でくるくると回っている。正直、彼女からすればこの程度は物足りないくらいなのでもっと沢山寄ってきてくれないかなーとか不謹慎な事を考えていた。

レイラと共に過ごし、穏やかな性格に成長した彼女であったが根っこのところの残虐性は失われていないらしい。

掘っ建て小屋の扉を蹴りあげ、クリスタル・ティアが突入して少し、中からゾロゾロと汚れた布切れを被っただけの女や子供が出てくる。意外なのは身体は綺麗なままであった事だろうか。

「女と子供ばかり…」

「食べやすいんだろうねー、《保存食》だもん。」

「言ってる場合ですか！

おい、お前たち四方を固めろ。早急に森から脱出して捕虜の安全を

確保するぞ！」

セラブレイトの号令とともに男たちが動き出す。

救い出したのは30人ほど、それを囲うようにクリスタル・ティアとクレマンティーヌで纏まりながら来た道を急ぎ足で戻り始めた。

「あつ…ううう…ッ」

「何も言わなくていい、今は皆で此処から脱出しなければ…」

神官！彼女達に《獅子の如き心》ライオンズ・ハートを頼む。」

「了解しました。」

一緒に連れてこられた者が日に日に居なくなり、いつ食われるか分からない死の恐怖に怯えながら毎日を過ごさなければならぬのは大人であろうと精神が衰弱してしまう。子供なら尚更だ。

きつと僅かな感情の揺らぎで簡単に発狂してしまうだろう。逃走中に捕虜が暴れだしても困るので、セラブレイトは神官の女性に精神力強化の魔法を付与するよう命じる。

（本当に、今までが何だったのかと思う程作戦がスムーズに進むな…スレイン法国最強部隊《漆黑聖典》、1人居てくれるだけでこれ程心強い事は無い。正に人類の護り手と言ったところか。）

噂に聞く法国最強の戦闘部隊。

数年前、まだビーストマンの侵攻で都市を奪われる前の話、セラブレイトが駆け出し冒険者だった頃よく「法国の凄腕暗殺部隊」やら「表に出せないような後ろ暗い任務ばかりこなす暗部」と酒場の噂話になっていた。

しかし噂は噂、こうして実際に会ってみると《獄界絶凍》と《疾風走破》の2人はとても「人間くさい」。もちろんいい意味でだ。

これまで救援に来てくれていた部隊《陽光聖典》の面々はどこか事務的な雰囲気か滲み出ており、ろくすっぽ会話もせぬまま仕事だけをこなす部隊だった。

しかし高飛車お嬢様の《獄界絶凍》は最初の派遣任務の時からずっと竜王国の為に親身になり、作戦の立案や実働で共に戦ってくれている。一応は特殊部隊なので戦闘以外で目立つ様なことはしないが、いい所の領主らしく、自身の領地から食料や衣類品を頻繁に運び込んで

取り戻した都市に配給しているのだとドラウデイロンは嬉しそうに話していた。配給する量も都市内の国民全てを養えるようなものではないし、疲弊していく竜王国には返せるものもない。

なのに彼女は匿名（バレバレだが）で週に1度は馬車5台分もの食料、衣類、果ては武器までも寄越してくれる。それは前線で戦う者達の貴重な補給源となっていた。

『元老院のクソジジイ共はまっつたく頼りになりませんので領主である私の独断で少ないですが運ばせて頂きましたわ。これからも定期的を持ってくる予定ですのでどうぞよろしく。』

諦めたらそこで試合終了ですよ！』

馬車の荷台に仁王立ちし、お馴染みの高笑いと共に颯爽と去っていく彼女の背中に当時の受け取り担当者は涙を流して祈りを捧げたという。

（まさに救世主といったところ、か。

ビーストマンに国を狙われ、余裕を失っている我々に対してなんと寛大な事か。）

奪われた都市を取り戻し、生き残った民が帰ってくるのはたいへん喜ばしい事だ。

だが一旦萎縮してしまった経済活動を元に戻すまでには長い時間がかかる、セラブレイトのような冒険者であればまだ日々の食い扶持くらいは稼げるが、鍬を振るう程度の力しかない一般の国民には切り詰めた生活を強いらなければならない。

国が負った傷口は深く広く、完治するまでには多大な時間を要するが、それでも生きろと彼女は言っているのだ。

「…ッ！皆止まって、姿勢低く！」

クレマンティーンの強い小声に一同がビクリと反応し立ち止まる、どうやら捕虜の見張りを任された若いビーストマンが周囲を警戒しているらしい。

「ちっ、一丁前に交代制で勤務してんのかよ。

あーちよつと待っててね、OHANASSIしてくるから。」

絶対肉体系言語だ…とクリスタル・ティアの面々は苦笑してクレマン

テイナーを見送った。

彼女はセラブレイトも認める強者、ここまで我々を導いてくれたのならきつと先刻のように問題なく仕留めて終わる筈だ。

時間にすれば5分と掛からず、返り血で塗れたクレマンテイナーが急ぎ足で戻ってくる。そして屈託のない笑顔でこう言ったのだ。

「ごつめーん、暗殺失敗して一匹逃がしちゃった★」

「「オイイイイイイイツ?!?!」」

人質総出でツツコミを決めた直後、ビーストマンの遠吠えが森に響く。これはセラブレイトにも聞き覚えがある、仲間には位置を知らせる為の遠吠えだ。即ち、自分達が拠点に侵入したのが露見した証拠。

「不味いみんな走れ！」

森の出口まで遠くない、一気に抜けるぞ！先頭は俺が、残りは左右を固めろ、お互いに死角をカバーし合うのを忘れるな！

クレマンテイナー殿はさっさと殿を務めやがれお願いします!!」

「だからゴメンって言ってんじゃーん！」

走りながら半笑いで謝罪するクレマンテイナー。

こいつワザとじゃねえだろうな…

「走れ走れ！追いつかれるぞォー！」

捕虜達を連れながらの撤退では決して速度は出ない、木の上からの奇襲に十分注意しつつ森を抜ける。

森の外へ捕虜を全員逃がし、1箇所に集めてクリスタル・ティアの面々で囲った。奥からは獲物を奪われ怒り狂ったビーストマンの唸り声が次々と聞こえてくる。

「平地に出ました、これで私も存分に剣を振るえます。

共に戦って頂けますか、《疾風走破》殿。」

「おっけーおっけー、任しといて。」

獣如きに遅れを取るようじゃねーちゃん隣の隣になんて居られないし。全部ぶっ殺…あつ駄目駄目、やっちゃまおうかなー！」

「…? 『ぶっ殺す』ではダメなのですか?」

「あのねーセラっち。私は法国最強の戦闘集団の1人なんだよ?そこら辺の仲良し冒険者やチンピラワーカーとは違うの。『ぶっ殺す』だ

なんて大口叩いて互いを慰め合ってる連中とは訳が違うんだから。『そう』心の中で思ったなら、その時はもう相手を殺っちまった後、ステに行動は終わってるの。

だから『ぶつ殺す』はもう使わない。

淑女はスマートに仕事をするんだってねーちゃんが言ってたから。」

「は、はあ…」

「『ぶつ殺した』なら使ってもいいんだってさ。さあ、来るよー。」

「ツ!!」

茂みからビーストマンが飛び出してくる、その数50匹ほど、ここを抜かれたら人質を助けた意味が無い。

何がなんでも護り通す、そう強く心に誓いセラブレイトは剣の柄を強く握り締めた。

「(そして絶対に陛下に褒めて貰うのだ…ツ!!)」

「(なんでセラっち鼻血出てるんだろ…走ってる時どつかぶつけたのかな。)」



「ん〜ツ…大★勝★利!!ですわ!」

都市内が大歓声で埋まり、被害を出すこと無く生き残った竜王国の兵士達は互いに肩を抱き合って健闘を讃え、自分達が生きている事を喜んでいきます。

森にあった拠点は完全に制圧完了、生き残りのビーストマンは敗走、2つ目の都市まで邪魔するものは何もなくなりました。これで準備が整えば都市奪還へ踏み出せますわ。

森の拠点に居た捕虜達も全員保護したとクレマンティーンから報告があり、今は陽光聖典の皆様が天使達を使って残党狩りをしています。ニグン様にはクレマンティーンから回収した使い魔を持たせておきましたので、何かあったら知らせてくれるでしょう。報・連・相は大事だとアインズ様が身をもって教えてくれますからね。

私も《撃杖》の試験運用を一通り終えたので大満足です。この都市を満サティスファクション足を街に改名したいくらいですわ！ハーモニカ用意しなさい！

「本当にありがとう 《獄界絶凍》どの、《疾風走破》どの！

兵の損害もなく、捕虜が全員助かったのは2人のおかげじゃ。女王として何か褒美を与えたいところだが…生憎貧しい我等から渡せるものはなにもない…すまんの。」

「スわたくしレインたち法国は既に多額のお布施を頂いていますもの、ドラちゃんに気がする事はありませんわ。

今はただ、皆で勝ち得た勝利の余韻に浸っていれば良いのです。」

おーほっほっほっほ!!

メイドの子達が去年の誕生日に贈ってくれた手製の扇子で仰ぎながら優雅にお嬢様ムーブをかましておきます。この笑い方結構練習したんですよ？

「クレマンティーン又は別の任務があるので明日法国へ戻りますが、私は帝国に用事がありますのでもう少し滞在します。陽光聖典は人数を10人に増やして引き継ぎ警戒にあたってもらおう予定ですの宜しく頼みますわね。」

「うむ、心強いな。」

ともかくご苦労じゃった、宿は良い部屋を取っておいたから2人もせめて戦闘の疲れを癒していつてくれ。」

そう言つてドラちゃんは宰相殿と王城へ帰っていききました。

「やっと終わったね、2つ目の都市までもう目と鼻の先じゃん。」

「奪還より先に経済インフラの復興の方が急務ですわ。」

人ばかり多くても食料や生活必需品の供給ラインが確立していなければ民を養うことはできません、しかし今この時も確実に都市の人

間は餌にされている：バランスを取るのが難しい問題です。まあその辺はドラちゃんが入手く調整してくれるでしょう、伊達に長いこと女王やってる訳じゃありませんでしょうし。」

あのナリで周辺諸国じゃ一番長く国王やってますもんね、宰相殿も切れ者ですし、彼女がいる限り竜王国は大丈夫でしょう。壊れかけの国を救う為に頑張る健気な幼女（見た目だけ）陛下、実に健気ではありませんか。

そんな彼女に私の中のステイ○ムが叫ぶのですわ、「馬鹿には友^ダ達が必要だ」と。

：ビーストマンとの戦争が終わった後、寄付を止めた竜王国をスレイン法国がどうするかは考えたくもありませんが。それまでに上層部を一掃する必要がありますわよねえ：やっぱ殺すか、老害院。番外ちゃんも呼んで派手なパーティーに致しましょう。

「こっわ！」

どしたのねーちゃん、目が据わってるんだけど!？」

「……ハッ?! いけませんわ私つたらはしたない、おほほほ。」

おつといけないいけない、頭の中で物騒なプランニングは止めにしてしましよう。今日はもう仕事あがりですしドラちゃんが用意してくれた宿に戻って食事でも…

「あれ? ねーちゃん、兄貴の使い魔来てるよ。」

ほらそこ、とクレマンティーンが指し示す先には小鳥に似た生物がパタパタと浮いていました。

この子は優秀なビーストテイマーであるクアイエツセ様から借^{ぶんど}りた使い魔ですわ。小鳥なのに広範囲まで届く《伝言》の魔法を覚えた珍しい種なんですって。

「ニグン様かしら。はいもしもし?」

こちら如何なる宝石よりも気高く美しく、そして誉れ高く輝き続ける永遠の令嬢、レイラですわよ。」

「えっその前口上要る?」

要る（迫真）

『《獄界絶凍》殿、イアンです!』

残党狩り中に接敵致しました！部隊員の2名負傷、ニグン殿も苦戦しております！至急応援をお願いいたします！』

「はア!? 2名負傷って…：ビーストマン程度に手こずる貴方達じゃないでしょう！都市から来た新手に囲まれましたの!?!」

『いえ！相手は人間です！』

敵は王国のアダマンタイト冒険者チーム《蒼の薔薇》!!』

「ふぁー！ー！ー!?!?!」

思わず街のど真ん中で間拔けな声を上げてしまいました。蒼の薔薇!?! 蒼の薔薇ナンデ!?!

6 破滅フラグは立たなさそうな冒険者グループと接触してしまった…

「この世界には『冒険者』という職業ジョブがある。

未知のダンジョンでお宝を探したり、誰も辿り着けない様な秘境を踏破する類の“いかにも”な仕事。憧れる者も多く、仲間を集い田舎から飛び出す若者もしばしば現れる程の人気職だ。現実はもつと酷いものだが。

“彼女”もそんな冒険者に憧れて女の身、ひいては貴族の身でありながらも一念発起し、数名の仲間と共に冒険者チームを立ち上げた。当然ながら初めのうちは新人いびりややつかみも受けた。荒くれ者の集まりである冒険者である以上避けて通れない道だ、男尊女卑のご時世なので当然のように身体を求められることだってあった。

しかし彼女は、ラキュース・アルベイン・デイル・アインドラはそんな不条理を覆し、冒険者チーム《蒼の薔薇》はその実力で見事の上がり今では王国最強の冒険者の証であるアダマンタイト級の称号も得ている。

そんな彼女達とニグン率いるビーストマン掃討部隊が出会ってしまったのは全くの偶然だった。

片や《蒼の薔薇》は竜王国付近でこなさなければならぬ大きな依頼があった。

片やニグンはビーストマン掃討の為、少し足を伸ばして探索する必要があった。

「その背に庇うビーストマンの幼体を渡せ 《蒼薔薇》。

それは我々が処分する。」

「お断りよ 《陽光聖典》。

この子はまだ子供じゃない。」

偶然か、運命か、因縁ある二組は竜王国領郊外で鉢合ってしまった。初めにビーストマンの子供を見つけたのは蒼の薔薇の一人、ガガー

ランだった。

姉御肌で面倒見のいい彼女はたまたま茂みの奥で酷く怯えた様子の子を発見。ビーストマンという種族がどういうものか知ってはいるし、チーム内でも反対の意見があったが子供を見捨てる道理は無いとリーダーであるラキユースの鶴の一声で保護する運びとなった。

そこに偶然現れたのはレイラより掃討任務を仰せつかったニグン率いる《陽光聖典》。

元々この2組は嘗て似たような場面で相対した事がある、その時ニグンはラキユースによって頬に傷を負わされ、それ以降彼は「人類救済を邪魔する愚か者」と蒼の薔薇を忌み嫌っていた。

蒼の薔薇もまた、人類を守る為他の一切を排除しようとするスレイン法国の考えに納得する事は決してない。

まさに水と油、そんな2組が再び鉢合わせてしまったのだ。一触即発、戦闘に発展するまでにそう時間は掛からなかった。

「《陽光聖典》よ、人類救済を邪魔立てする不信神者は駆逐せねばならん。天使を召喚せよ……！」

『はっ！』

「イビルアイ、その子をお願い！ティアとティナは側面からね。ガガーラン、やるわよ！」

「おうともさりリーダー！んな胸糞悪い連中にガキは渡しやしねーよ！」

「だから言つたらう、助けると面倒な事になると……」

「鬼リーダー、甘い。」

「それを結局許しちゃうイビルアイもいい加減甘い。」

夕暮れ時に始まった激戦。天使相手に屈強な女戦士であるガガーランとラキユースは善戦するが、ニグンの異能力で強化された《監視の権天使》の防御を突破できず膠着状態に陥ってしまう。一度は陽光聖典優勢に思われたが、ビーストマンを始末しようとする焦りが隙を産み、背後に回り込んだ忍者の双子の奇襲を受け部下二人が

戦闘不能となった。

鉄壁を誇る天使の陣が崩され、これを危機と判断したニグンは後で叱責されるであろう覚悟で持たされた使い魔を使いイアンに《伝言》を繋ぐよう指示する。

「なアーにをやってるのですか陽光聖典は。」

ラキユースの一撃が《監視の権天使》の防御を崩し、スイッチで入れ替わったガガーランの戦鎚が天使に振り下ろされた時、突如として空から割り込んできた六角の氷柱がニグンとガガーランの間に音を立てて落下した。

鼻先三寸の距離に落ちた氷柱に息を呑み、ひんやりとした風がニグンの頬を撫でる。湧き上がってくるのは安堵と、僅かばかりの恐怖心。

(ちゃんと狙って外して下さったのだ…よな?)

この女ならうっかり…なんて一瞬考えてしまった

その上、冷めぐ氷柱のてっぺんに立つ。

靡く白銀の髪、煌めく黄金の瞳、戦場に似合わぬ漆黒のドレスを身に纏う秘密の令嬢。

そう…

「他部署の危機に私わたくし、馳せ参じましたわ！」
おーっほっほっほっほ!!!

開幕高笑いを響かせながら、レイラは戦闘の間に割って入った。蒼の薔薇、突然の事に毒気を抜かれて総ポカンである。

対する陽光聖典の面々は安堵の溜息を漏らす。

「ご、《獄界絶凍》殿、申し訳御座いません！

此度は御身の手を煩わせる様な失態を…」

「他人行儀なのは結構でしてよニグン様。

まあ間が悪かったというか、不運と踊ハードラックダンスつちまったって事でここはひとつ。」

「は、はあ…」

すぐさま礼を取り、頭を下げるニグンにひらひらと手を振るマイペースなレイラ。

対して攻撃をキャンセルされ、大きく距離を取りラキユースの下まで戻るガガーランの表情は優れない。

「ガガーラン、どうしたの？顔色悪いみたいだけど。」

「リーダー、あの女はやべえ。さっきの天使なんて比じゃねーぞ。

戦士の勘だけだよお、双子忍者に気配も察せられず割って入ってきたんだ…分かんذار？」

「ツツ!!敵はそれほどの相手という訳ね…」

警戒する2人を他所に、レイラは愛想の良い笑顔で蒼の薔薇の面々と向き合った。

「先程は部下が失礼を致しました。

元はと言えば私がビーストマン掃討の任を彼等に与えたのです。責任は私にあります。

貴女方に危害を加えるつもりは一切ありませんので、そここの所ご理解下さいまし。

貴方達は先に都市まで戻っていないさい。此処に居られると話が拗れますわ。」

「なっ…ですが…」

「負傷者2名、早急に治して貰わないと。明日の任務に差し障っては困りますもの。我々の任務は竜王国の救済、これを忘れないように。

さ、早く。蒼の薔薇の方々には私からご説明致しますわ。」

「クッ！申し訳…御座いません…ッ」

ニグンは心底恨めしそうにラキユースを睨みつけると、イアン達を

連れて足早に去っていく。

陽光聖典を見送って、につこりと笑ったままのレイラはちらりとイビルアイの後ろに隠れるビーストマンの子供に視線を向けた。

「さて…そちらのビーストマン、それが今回の戦いの元凶ですわね？」

「……この子をどうする気かしら。」

「決まっているじゃないですか。」

ひゅうつとラキユースの横を冷たい風が抜けていった。

「ギイツ!？」

蒼の薔薇は油断なんて微塵もしていなかった、にもかかわらず。

いつの間にか、イビルアイに守られていたハズのビーストマンの子供の腹に氷柱が突き刺さり、大量の血を流しながら苦しみ悶えている。

一番に驚いたのは守っていたはずのイビルアイだ。

「なっ!?!お前、今何を…」

「? 害獣を駆除しただけですが?」

ああ、当たり前所が悪いですね。一撃で死んでませんわ。」

「違う!今《ヒアーシング・アイシクル穿つ氷柱》をどうやって放った!？」

「どうって…『ごう』ですわよ。」

《撃杖》の照準が向き、引き金が引かれる。再び冷たい風が彼女達の間を通り抜け、今度は喉元に氷柱を受けたビーストマンは悶絶しながら今度こそ息絶えた。

その光景にイビルアイは驚愕し、ラキユースは起こったことを一足遅れて理解したのかレイラを睨み付ける。

「なんて事をツ…」

「なんて事、ですか。」

それは私がああ幼体を殺した事ですか？

仕方がないでしょう、貴女達を傷付けずに駆除するにはこうするか手段がなかったんですから。」

「駆除…だとオ!？」

なんであのカキを殺す必要があった？

「まだ子供じやねえか！」

「まだ、という事はいつか大人になるのでしょうか？」

彼等にとつて人間は食事です。幼いのなのでどう取り繕ったつていずれ人類に牙を向きますわ。なので早めに芽を摘んでおきましたの、私何か間違つたこと言つてまして？

これは食物連鎖、人間と亜人の戦争です。

人を喰らおうとするのならば、あちらにも殺される覚悟があるので
は？

ああっ！まさか貴女達、アレが“子供”で“可哀想だから”なんて理由で庇つてたんですの？それは申し訳ない事をしました。」

「…どういう事よッ！」

「説明をしていませんでしたわね。」

ビーストマンは幼体だろうと人を食べますわよ？」

「なっ…」

「しかも肉の柔らかい女や子供を好んで食べます。」

そうして人の味を知り、自分達より弱く狩りやすい“餌”だと認識するので。その癖子供の頃から自分より強い存在には媚を売って、身を守って貰うんですもの。賢しいですわよねえ。

王国は平和な国ですから、ビーストマンがどんな種族か知らないのも無理はありませんわ。」

涼やかな表情のまま、うんうんと納得したようにレイラが頷く。

あのビーストマンは初めから、ガガーランが見つけた時からずっと猫を被っていた。

彼等は本能で自分達より強い存在が理解できるらしい、弱い自分を演出し、危険を回避する為にあの途中でいちばん強い存在だったイビルアイの後ろに隠れ、ずっと身を潜めていた。

あわよくば、“おこぼれ”にありつけるかもしれないから。

「ソレ」は決して人間には心を開かない、だって肉が動いているようにしか見えないのだから。そして万が一、逃がしていたら遠くない未来でまた竜王国民が食われます。

貴女、自分が逃がしたビーストマンに家族を食われた民の前に立て

ますか?」

「そ、それは…」

「ほおんと、生き汚いといえますか、往生際が悪いといえますか…その辺は人間種と変わらないのですわよね。」

私の言い分、分かって頂けました?」

答えを求めてもラキユースは俯いたまま答えない。

「まあそんな訳で、食物連鎖の勝者としてそれを駆除した訳なのですわ。」

そんな事くらい、そこのおチビさんは分かっているハズですけどね。教えて貰わなかったんですの?」

ねえ、亡国のお姫様?」

『ツツツ!!』

“亡国のお姫様”、その言葉にイビルアイの雰囲気が一変するの分かった。

人ならざる身から放たれる濃密な殺気、それと同じく彼女を除く蒼の薔薇の面々も驚愕と共に明らかに険しい表情をしている。

だがそんなもの、空気の読めない女レイラの前ではなんの意味も成さない。

「分からないとでも思いましたの?」

200年の時を生きる『国墮とし』の吸血鬼、お初にお目にかかりますわね。まさか蒼の薔薇に紛れ込んでいるなんて思いませんでしたけど。

イビルアイ、いえ…」

キーノ・ファスリス・インベルン

言い終わらないうちにイビルアイがレイラの首を握り潰そうと爆速で飛び掛る。その指が首筋に届くその刹那、ゴリツとイビルアイの顫に硬いナニかが突きつけられた。

「チイツツツ!?!」

悪寒を感じたイビルアイは手を伸ばすのを中断し、大きく身を翻

す。その直後、レイラの《撃杖》から発射された氷柱が彼女の頬を掠めた。

2度3度地面を跳ね、《飛行》で飛び上がりイビルアイはレイラを見下ろした。

「あらあらアア？手癖の悪いアンデッドですわねえ、英雄としての礼儀とか無いのかしら？」

「私の正体を知っているという事は貴様、《漆黑聖典》だな…何が狙いだ！」

「狙いも何も、本当に偶々だったんですよ？」

さつきも言ったでしょう、『不運と踊つちまった』と。今日は偶々私が竜王国に派遣される日で、偶々陽光聖典が私に助けを求めた…

けどまあ…国から抹殺指定されている吸血鬼ですし、今のは正当防衛って事で。」

「巫山戯た事を…!!」

《魔法二重化》、《水晶散弾》！

イビルアイの両手から放たれる水晶の欠片が散弾のように降り注ぐなか、レイラはまるでダンスを踊るようにステップを踏んで水晶の雨をかいくぐる。時折鼻歌を歌いながら。

「ちいっ！」

「ちよつとイビルアイ！いきなりなんなのよ!？」

「ゴイツはスレイン法国の《漆黑聖典》…特殊部隊だ。しかも私が誰なのか分かった上で近付いてきた！生かしておく訳にはいかない！」

「いやーん物騒ですわ〜！」

「黙れ！」

ヘラヘラ笑いながら散弾を避け続けるレイラと激昂し更に激しい攻撃を加えるイビルアイ。

問答の末、突発的に始まった2人の戦いにラキユースは付いていけず、しどろもどろになってしまっている。

「鬼リーダー、《漆黑聖典》はスレイン法国の隠し球。神の血を引くと言われる戦闘集団。」

「あの美人さんはその一員。」

イビルアイはあの国から指名手配を掛けられてる。捕まったら不味い、助ける？」

「助けるに決まってるんだろ！おチビちゃんを連れていかれて堪るかよ！」

「あつ…ちよつとガガーラン！」

「イビルアイの『秘密』は絶対に外に漏らしちゃダメ。」

リグリッドとそう約束した。」

「そうだけど…」

仕方ないわ。ティア、ティナは援護！」

「了解、鬼リーダー。」

リーダーは渋々といった感じだが、結果的に蒼の薔薇全員がレイラの敵に回ってしまった。



ど う し て こ う な っ た

あれー？私陽光聖典と蒼の薔薇を仲裁しようとして割って入ったハズなのになーぜブチ切れイビルアイたんとお話（物理）する羽目になっただけなのー？

いやたしかに私のなんちゃってお嬢様口調ってシリアスなシーンでは高圧的だし、つい原作知識使ってイビルアイの本名呼んじやったのは悪いと思ってますけれど、そんなに地雷でしたあ？レイラ分かんない。

なーんてフザけてる場合じゃありませんわね！

イビルアイたん、マジ殺しに来てるじゃねーのですの！《水晶散弾》2重で降らす辺り明確な殺意を感じますわ！

でもレベル差あるから殆ど止まって見えますし、余裕で回避可能なんですわよね。

原作では珍しく主人公と出会っても生き残る蒼の薔薇、本格的に活躍するのは八本指編からですけど、まさかこんな所で出会うとは。フランス的には「人類救済の為に役に立ちそうな駒」程度の評価ですが、下手に殺してしまうと王国編で八本指が原作以上に鬼畜難易度になっちまいますわ。

なので私としては事を穏便に済ませたいワケなのですが、彼女達はそうでもないご様子。

「うらあああッー！」

《水晶の散弾》の雨を避けきった直後、筋肉担当ガーランが戦鎧を振り回して来たのでひよいひよいと避けて手加減しながらハルバードの柄で鎧越しに腹をどついてやると、うめき声を上げながら後ろに飛んでいきました。

「うっぐ…!!やっぱ重てえ…！」

「《水晶騎士槍》！」

今度は水晶の槍ですか、ならば私も…

「ジゼル、打ち払いなさい。」

振ったハルバードから《水晶騎士槍》そっくりの氷の槍が斬撃のように飛び出して互いに衝突し、《水晶騎士槍》が粉々に砕け散ります。

漆黒聖典のメンバーには戦力強化の為にプレイヤーの装備、俗に言う『ユグドラシル産のマジックアイテム』を身に付けることを許されています。しかしこの世界の人間は特例を除き適正が無いとユグドラシルアイテムは使えません。そんな中、私が漆黒聖典に入った時適正有りと判断され寄与されたのがこの《魔剣ジゼル》ですわ。レアリティは『伝説級』だと思います。こっそり《記録書》の鑑定機能で調べましたの。レイモン様の話では六大神様もお使いになっていたのか。

魔剣シリーズは嘗て、かの十三英雄の1人が4本持っていて、今は世界の何処かに散らばってるそうなのですが、私のジゼルはその中に含まれていません。

魔剣ジゼルは姿無き刃、こうして別の武器に纏わせることによつて真価を発揮する氷の武器ですの。今は我が領内の工廠にて作成し

た特別硬いこのハルバードに取り憑いています。どんだけ力任せに振り回しても壊れる気配が全くないので高レベルの私でも安心！流石ドワーフ産ですわね！

因みに本体は私の首に掛かってるストールです。魔剣なのに装飾品なんですよねコレ、さつきみたいに空気中の水分を極低温で瞬時に凍らせて斬撃の代わりに氷の槍として形を変え飛ばしたり、氷柱の剣山を地面から生やしたり、魔法とは別手段で冷気をコントロールすることができますわ。使い勝手が良くて、ロツ○マンエ○ゼのバリアブルソードって感じです。

これが私の主力、魔剣ジゼルと私の持つ異能力、それから尖った魔法構成との相乗効果で、驚異的な制圧力を発揮できますの。私が《獄界絶凍》と名付けられる一端ですわ。あとガチ戦闘の時は《神槍》の方も所持を許可されてるんですけど、それが認可されるのはエルフ国との戦争に決着付ける時くらいじゃないかしら。

「《水晶騎士槍》が!?くそ…っ!」

ジゼルで生み出した槍はそのままの勢いでイビルアイまで突き進み、驚いた彼女は辛うじて躲したみたいです。空飛ばれるって面倒ですわね。

「スキあり」

「ありませんわよそんなもの。」

おっとここで双子ニンジャのエントリーです。

良いですよねニンジャ！特殊なスキルを持つ職業で、たしかアインズ様のギルドにも忍者の職業持ちがいたんですけど。

飛んでくるクナイやらスリケンを躲し、まわりついてくる彼女達の動きは流石ニンジャカラテと言うべきか、捕らえどころがありません。

でしたら範囲攻撃ですわ。

「ふんっ!」

「ツ!!地面から…!」

「氷!?!」

ハルバードの柄を突き刺し魔剣ジゼルの能力発動、私を中心に広がる氷の槍が凍った地面から次々と生え、堪らず双子は飛び上がり空中に投げ出されました。コノトキヲマツテイタンダー!

突き刺さったままのハルバードを手放したら両手に二丁の《撃杖》を素早く抜き放ち、それぞれ双子に照準を合わせます。

魔法は…《ジェイル・オブ・ハイドロキューブ四角の流体牢獄》くらいで宜しいかしら。

「なっ!?!」「あっ…!」

《魔法二重化》で撃杖からそれぞれに放たれた無詠唱版《四角の流体牢獄》。

流動する水の塊が相手を包み行動を封じる第五位階魔法、捕らえた相手はそのまま窒息させることも出来ますわ。そして私の魔剣の力が加われば…

「ごおりなさい。」

「ツ…:」

双子を捕らえていた水の牢獄があつという間に凍り付き、ニンジャの氷漬けキューブの出来上がり。見た目はアレですが、命に別状はないので問題ありませんわよ。

ゴトゴトつと地面に落ちる凍った双子を見て、ラキユースさん凄い慌ててます。

「ティアー!ティナ!」

くっ…:貴女の目的は何なの!」

「いや既に目的は果たしてますし、私もう帰ってお肌のケアして寝たいんですけれど。貴女の所の吸血鬼ちゃんか帰してくれませんかよ。」

「白々しい…:スレイン法国は私に指名手配を掛けているだろう。」

私が十三英雄の一人だと知った上で、その中の人間種以外を殺そうとしているんだからな。」

ああ、それですか。昔話の十三英雄は他種族からなるパーティーで当時蔓延っていた魔神を全て討ち滅ぼしたと言われています。それが気に入らないスレイン法国は“人間種のみが成し遂げた偉業”に

する為に過去を捏造してみたり、当時の十三英雄の生き残り、人間より寿命が長い種族の者達を抹殺しようと指名手配していたワケですわ。

時効なしの200年指名手配とか確実に殺す気満々じゃねーですか。コンのお排泄物国家は200年も昔から腐ってたんですわね…

「やっぱ法国ってクソですわ…」

「えっ…」

あつやば、近くにいたからラキユースさんには今の聞こえちやいました？

「おっと失礼。」

たしかに私は《漆黒聖典》のメンバーですが、もう今日のお仕事は終わりましたの。残業なんて真つ平御免ですわ。

なのでさっさと終わらせますわよ、ジゼル！」

ばあんつと弾かれるように地面に刺さっていたハルバードが跳ね、私の手に戻ってきました。この子、知性あるアイテムらしく、呼ぶと勝手に憑依している武器ごと飛んで来るのです。便利ですわよね。

ユグドラシル産アイテムなのに知性を持つてるとか、フレーザーテキストにそう書いてあったのが異世界に来たことで具現化したのでしょうか？

「かつ…カツコイイ…！」

なんかラキユースさんの目が異様にキラキラしてるんですけど、どうしたんでしょう…？

あ、そうか彼女はアレでしたね。魔剣キリネイラムの持ち主でちよつと残念な子でしたわ。

「《砂の領域・対価》！」

私の足下がズブズブと沈み始めました、相手を拘束する魔法ですか！鬱陶しいですわねえ！

「こつちこそ、終わらせてやる…！」

マキシマイズマジック
ドラゴンライトニング
《魔法最強化》、《龍 雷》！」

雷鳴とともに現れた雷の龍が空を覆い、今にも私に襲い掛かりそう。

私もう帰りたいたいのですけどイビルアイは全く話を聞こうとしませんし、残った蒼の薔薇の面々も双子をやられたのにまだ戦意がある様子。これ以上不毛な争いを続けて何になるってんですの！（初手地雷を踏んで戦闘に発展した元凶）
あつそーだ。派手な技で向こうの戦意を挫けばいいのですわ、私つたら天才ですわね！
ならば早速…！

「ホワイト・アルバム白いおもいで」



「…………え」

ラキユースは吐く息が白くなるのも気付かず、思わず声を漏らした。

イビルアイの放った《龍雷》、先程まで天を覆っていた雷の龍が漆黒聖典とおぼしき女の持つハルバードから放たれた波動を浴びた途端一瞬にして白く染まり、完全にその動きを止めていた。

《白いおもいで》、本来人の身では絶対に到達することのできない神智。対魔法、対空特化、『この魔法以下のあらゆる位階魔法と物理攻撃を凍結させ無効化する』第9位階、氷属性の無効化魔法。

そんな事はラキユースはおろかイビルアイすら知らない。
間もなくして凍った龍が重力に従って地面に落下し、バラバラに砕け散って消えていく。

驚愕するイビルアイにレイラは堂々と言い放つ。

「まだやりますの？吸血鬼のお姫様。」

「ッ!!」

その黄金の瞳と目が合った瞬間、さっきまでの怒りは何処かへ消え去り、代わりにひゅうつとイビルアイの喉奥に冷たいものが落ちていく。

相手は自分より格上だと気付く、それは明確な「恐怖」だった。

自分は200余年を生きる吸血鬼。在りし日には彼等と共に幾重もの戦場を駆け抜けて、それなりの修羅場も潜ったつもりだった。そんな彼女が久しぶりに感じた間近に迫る死の恐怖、アンデッド故に本来殺し得ない筈の自分を殺す力を彼女は持っている、今の一瞬でそう確信した。

《飛行》も凍結で無効化されたのか、危なっかしく地面に着地するイビルアイの表情は明らかに怯えている。

(今…何をされた？魔法が凍結…無効化か？)

どちらにせよこの女は私より強い！

どうする？漆黒聖典なら確実に私を狙う、どうか時間を稼いで4人だけでも逃がさないと…)

「……そこまでにして下さい、漆黒聖典のお方。」

「あつ…おいラキユース！」

イビルアイを庇うように前に立つのはラキユースだった。彼女は文句を言おうとするイビルアイを震える手で抑え、レイラの前に立ちはだかる。

「私達の無知で貴女にご迷惑をお掛けしたことは謝罪します。」

ですがイビルアイは私達蒼の薔薇の大切な一員ですので、どうか見逃して頂けないでしょうか。」

冷や汗を垂らし、喉から絞り出すそれは命乞いにも似た譲歩の言葉。

「…」

「お願いします、どうか…」

夕暮れ時とはいえ天候は晴れ、この辺りは温暖な気候の筈だというのに周囲には霜が降りて吐く息は白く、ラキユースの声は震えてい

る。

1歩、また1歩と何も言わないレイラがラキユースに歩み寄っている。そしてふうっとひとつ、ため息を吐いた。

「…私の管轄ではありませんが、六色聖典は王国に関してある任務を委ねられてますの。」

「ライラの粉末に関する調査命令」

心当たり、あるんじゃないかと？」

「そ、それは…」

「貴女、たしか貴族ですものねえ？」

アレがなんなのか知ってますわよね？」

「…あの黒粉は、麻薬よ。」

『八本指』という犯罪組織が取り扱っているわ、王都近くの領内で頻繁に取引されていて王族も頭を抱えている。まだ私達が把握しているのは八本指が関わっている事くらいなの。

私の友人は王国貴族もこの件の片棒を担いでいるのではないかと睨んでいるわ。」

ラキユース達の住むリ・エステイーゼ王国。

豊かな土壌と広い国土を持ち、巫人の生息域からも離れているため古くから繁栄を続けている大国だ。

しかしその平和ゆえ政治の中枢を担う一部の貴族の間では腐敗が横行し、国民に重い重税を強いたり、犯罪に与する者も現れる始末。

調査結果を受けたスレイン王国中央部は王国を隣のバハルス帝国に併呑させる計画を密かに進めているという。

「正直な話、今の王国は人類にとって厄の塊でしかありません。」

肥沃な土地で産まれた悪性腫瘍、何時切り捨てられてもおかしくなく、もし切り捨てられたなら…八本指ごとリ・エステイーゼ王国は地図から消える事になるでしょう。

私の国なら容易くやってみせるでしょうね。」

そんな筈がない、などとは言いきれない。

何せスレイン王国は人類を500年間守護してきた周辺最強国、秘

匿義務がある為保有する戦力が不明なのだ。少なくとも王国など比較にもならないだろう。レイラのような実力者が自分達の知らない強力な魔法を持って攻めてきたら、ただでさえ魔法を軽視し足下が脆い王国などひとたまりもなく瓦解する事だろう。腐った貴族を間近で見してきたラキユースなら否応にも理解せざるを得ない。

「ですがね、私は常々思うのですよ。

何も国ごと消さずとも腐った部分のみを切除できれば事は綺麗に収まるのではないかと。

貴女、膝を擦り剥いてばい菌が怖いからって足ごと切断したりします?」

可笑しそうに問うレイラにラキユースはぶんぶんと首を振り、否定の意を示す。

「なので個人的には八本指ら及びその他の『悪性腫瘍』を切除する為に都合の良い仲間が欲しい訳なのですが…

何処かにいい方はいらっしやいませんかねえ…」

「なっ…!?!」

「はあく何処かに立場に囚われず王国の内情に詳しい、且つ誠実で裏切らない案内役はいないでしょうか。

私これでも法国上層部に顔は利きますので、頭の固いお爺様がたの説得くらいやってあげますのに。

あー困った困ったー。」

にやにやと笑うレイラのわざとらしい溜息でラキユースは理解した。

この女は自分に王国の内通者になれと言っているのだ、この場でイビルアイを見逃し王国の根治に協力する代わりに情報を売れと。

「別に良いんですのよ?」

私は何もしなくても法国は八本指を消す為に動き出しますし。方はどんなものか知りませんが『八本指が消え、ライラの粉末が人類に害を与えなくなった』結果を残せば良いのですから。

ですがその過程でどれ程王国国民の命が消えるか勘定に入っていないだけ、所詮は対岸の火事ですものねえ。」

「ラキユース、此奴の口車に乗るな！漆黒聖典の人間なんだぞ!」

因縁もあり、当然イビルアイは反対の意を示す。

悩んでいると、いつの間にか武器を下ろし考え込んでいるガガーラ
ンと目が合った。

「…オレは賛成だぜリーダー。」

黒粉にや皆困ってんだ、それだけ強え後ろ盾が付いてくれるってん
ならウチらもやりやすい。」

「ガガーランお前!」

「真面目な話だおチビちゃん。」

お前さんの因縁やらなんやらは抜きにして、八本指潰すっていう目
的が一緒なら手エ組むべきさね。奴さんの話を聞く限りじゃ、結果が
同じでも犠牲は少ない方がいいだろ。」

ガガーランの言う事は至極正しい。それを理解はしていても、イビ
ルアイはどうしてもスレイン法国の人間が気に食わないでいる。

「二応、ティアアやティナにも意見を聞きたいのだけど…」

凍ってるのよね、と思ったラキユースが見つめる先には双子を閉じ
込めた氷のキューブが2つ鎮座している。それを察したのか、レイラ
が指を鳴らすと即座に氷が解凍され、同時に操作を失った大量の水が
ばしゃんと音を立てて弾け、水の牢獄から解き放たれ水浸しになった
ティアとティナが噎せながら立ち上がっていた。

「げほっげほげほっ!」

「咳のタイミングまで同じですね、さすが双子。」

「2人とも大丈夫!」

「…ッ大丈夫、凍ってても話は全部聞こえた。私は賛成。鬼リーダー
と彼女の利害は一致してる。」

「私も賛成。目的が一緒ならお互い利用し合うべき。」

でも身体は大丈夫じゃないから漆黒聖典のお姉さん介抱して、主に
ベッドの上で。」

「残念ながら私既に婚約者がおりますので。」

「人妻!?余計に燃える…!」

「無敵ですか貴女。」

大丈夫そうだった。1人は頭が大丈夫じゃ無いかもしれないがいつもの事なので放っておくことにする。忍者はNTRもイけるらしい。

「さて、これで3対1ですが…どうします?」

「ぐぬぬぬぬ…!!」

どんどん外堀を埋められて呻く事しかできないイビルアイ。ラキュースはまた暫く考え込み、再びレイラへ言い放つ。

「……分かったわ。」

それがイビルアイを見逃す条件だと言うのなら、私がお引き受けします。

ただし、私たちが教えるのは八本指に関する情報だけ。奴らを討滅したらこの関係は強制的に解消させてもらう。良いわね?」

「ええ、ええー構いませんわ!」

吸血鬼のお嬢さんもそれで構いませんわね?」

「ぐうううッ……」

分かった…リーダーの判断なら…私から言う事は何も無い。お前を信用した訳じゃないからな!そこを勘違いするな!」

大人気なくレイラを指さし叫ぶイビルアイはその幼い姿相応の子供だった。何百年生きようと根っこは変わらないらしい。

レイラは満足そうに頷いた。

「よろしい。」

それではそろそろ私も失礼致します…あ、そうだ。くれぐれもこの事は誰にも喋らないように。

八本指は耳聰い、法国が加担していると悟れば直ぐに頭を引っ込めてしまうでしょう。ですので私と貴女達の関係は誰にも…例え親しい間柄の貴族、王族相手でも私達の関係は他言無用でお願いしますわ。

きつとその方が三女のお姫様も動き易いかと思いますので。」

「……ッ!何故ラナーの名が…」

「法国の情報収集能力を舐めないで下さる?」

昔から王国はマークされてますの、貴女のお友達が裏で色々と手を尽くしている事などお見通しですわ。

冒険にかまけるのも結構ですが、自分達の国が他国から見てもどれ程の惨状なのか少しは貴族として危機感を抱いた方がよろしくてよ？」
「そんな事、言われなくても分かっているわ！」

思わずムキになって反応してしまった後ハツと口をつぐみ、それ以上喋らなくなってしまったラキユースに微笑むと、「時が来れば此方から報を入れますので、それまでは精々王都の平和を守ってやって下さいな。」と伝えてレイラは《飛行》で都市方面へ飛び去っていった。彼女の姿が見えなくなった後、期を見計らってイビルアイは考え込むラキユースへ声を掛ける。

「ラキユース、今更だが本当に漆黒聖典と手を組んで大丈夫なのか？
相手はスレイン法国だぞ？一体裏で何を考えているのか…」

「良いのイビルアイ、もう決めた事だから。」

確かに彼女の言っていることには一理あるわ。

このまま行けばラナーの予見した通り確実に王国は滅ぶ、麻薬と貴族の横暴で大量の犠牲者を出しながら惨めな最期を迎えるでしょう。

一人の王国貴族として、アインドラの娘としてそんな事は容認できません。

打てる手は打っておかないと、肝心な時に手遅れにならないようにね。」

八本指だけではない、きな臭い反王派閥の貴族達や素行の悪い第一王子、国の抱える厄介事は少なくない。

出奔した身ではあるが誇り高き貴族の一員として、そして王国の行く末を憂う友人の為に自分も出来る事をしようと覚悟を決めた。

「…そうか、ならもういい。」

そう締めくくりイビルアイは空を見上げながらさつきまでの出来事を思い出す。

（手も足も出ない、とはこの事を言うのだろうか…情けない。）

そうだ、あの女についてツアーとリグリッドに報告しておかなければ。十中八九神の血を引く神人だろうが…警戒はしておいてもらお

う。)

…

まだやりますの？吸血鬼のお姫様

『まだやるの？吸血鬼のお嬢ちゃん。』

…

(…なんで今更アイツの事を思い出すんだ…もう居ない奴の事なんて。)

ふと思いだしたのは似たような台詞。

当時、仲間と共に旅をした先で縁を結んだ者の一人。若く(今も外見は変わらないが)調子に乗っていた自分をコテンパンに叩きのめした少女だった。お転婆でお調子者で、そのくせ力ほとんどもなく、厄介な性格を「白銀」からは呆れられ、よくリグリッドにゲンコツを食らっていたなど、今となっては懐かしい思い出だ。途中まで一緒に旅をしていたが、「真実の愛を探す為に旅に出る」と言つてパーティーから飛び出したつきり会っていない。それでも当時のリーダーはそれが彼女らしいからと笑つて見送った。

「カナミ…」

ぽつんと呟いた一言は、夕暮れの空へ溶けていく。



んっふあゝつかれたもくん…

蒼の薔薇との会話は神経使いますわ…さりげなく漆黒聖典の王国介入フラグも立てられましたし、良しとしましょう。

にしてもラキユース、想像以上に良い子でしたわね。加減したとはいえLv差の大きい私が殺気に向けてもイビルアイを庇えるほどの精神力、流石アダマンタイト級の冒険者といったところでしょうか。これで友達に恵まれていればねえ…

リ・エステイーズ王国で最も警戒すべきは王族3兄妹の末妹、ラナーでしょうか。

『黄金』と称される美貌と卓越した知略もさることながら、その素顔はあのデミウルゴスをもつてして「精神の異形種」と言わしめるほどでしたっけ？一見人当たりの良く純粹無垢なお姫様を演じてますけど、中身は真つ黒。護衛のクライム君の為ならメイドも謀殺するし悪魔と手を組むのも躊躇わない壊れた性格。ラキユース達の事も内心では「使える駒」扱いでしたし、王国筆頭でヤベー女ですわ。あんな邪悪なプリンセス・シャーロット、接触なんてお断りです。革命待ったナシ。

彼女の対処法はとにかく近寄らずこちらの情報を与えない事でしょう。あの天才は後にナザリックと接触しますし、どうせなら王国滅ぼそうとしてますし、厄の塊ですわ。

あーでもラキユースつて嘘下手だから早速バレそうですね、万が一接触してしまうようなら私の領地に隠遁してもらおうよう交渉してみましようか。あのわんちゃんを護衛という形で連れてくれば納得して頂けるでしょう。

「ぬあああんもう疲れましたわ〜今日は何もしたくありません〜。」

ベッドの上にだらしなく寝転がって意味もなくゴロゴロ、自堕落最高ですわね！

「お風呂上がったよ〜…って、何してんのさ。」

ダラダラしている所を義妹に見つかってしまいましたわ〜これでは姉の威厳が〜。

「今日の疲れを全身で表現していますのよ。」

「何故表現する必要が…？」

蒼の薔薇と会ったんでしょ、何かあったの？」

「貴女も知っているでしょう、『ライラの黒粉』。」

アレについて色々と尋ねましたの、今後も彼女達にはちよっかい掛ける必要がありますわね。」

事の顛末をクレマンティーンに説明してあげます。さすがにイビルアイの正体については黙っておいてあげましょうか。

「…なるほど、『八本指』ねえ。」

レイモンのおっさんには？私、明日戻るし伝えとこうか？」

「いえ、キチンと書類を仕立てて私から報告しておきますわ。」

変な解釈されて中央政府が本格的に王国潰しに動き出しても困りますし。ラキユースとの約束ですものね。」

「りようかーい。」

明日、ねーちゃんは陽光聖典と交代で帝国に遊びに行くんだっけ。お土産よろしくう〜。」

「ええ、ええ。面白そうなマジックアイテムがあったら買ってきてあげましょう。」

そう、明日は私お休みを頂いておりますの！

明日から4日ほど帝国に小旅行に赴きます。

普段は領地経営と漆黒聖典のお仕事の板挟みで羽を伸ばせる機会なんて殆どないので休日を満喫させて頂きますわよ！



「陛下、本日の詳しい戦報が出来上がっておりますのでご確認を。」
「うむ。」

「陛下、西の防衛拠点から装備の更新依頼が届いております。」

「うむ、西側は本当によく頑張ってくれておるからな。一刻も早く新しい装備を届けてやらねば。」

此処は竜王国王城執務室、目覚ましい活躍で兵士達と共に見事ビース

トマンを撃退したレイラ達を激励し、見送ったドラウデイロンは宰相と共に帰路に就いていた。

身体は幼くとも女王の身である、帰れば大量の書類と格闘する仕事 awaits 待っている。

ただ、彼女はいつものより少しだけ上機嫌だった。

「ご機嫌ですな陛下。」

「むっふー、分かるか？」

都市防衛の為、後顧の憂いを断てたのだ。これで一先ずは連中が殺到してくるといふ事もできまい。」

「スレイン法国様々ですな。」

「当たり前じゃ！高い寄付金を入れておるのだからな！」

苦境に立たされていた竜王国はスレイン法国の介入により、当初よりも少しだけ余裕ができた。

相変わらず残りの二都市はビーストマンに占拠されている為一刻も早く取り返す必要があるが、都市の修繕や経済の復興に回す時間を得られたことは大きい。

それもひとえに、たった一人の淑女がもたらした成果である。

「彼女にはもう少し留まって貰わねば……」

「やつとマトモに話のできるスレイン法国の関係者ですからな、いつそこのまま竜王国国民になって頂きたいものです。」

宰相が皮肉って笑う。

スレイン法国から派遣された《獄界絶凍》と名乗った女性。高飛車となんかよく分からないテンションで周囲を困惑させる彼女に当初はドラウデイロンも「あれだけ金払ってよく分からん派遣が1人とか舐めとんのか！」と思わず叫びそうになったものだが、いざ戦闘となるとその下馬評は悉く覆された。

一度槍を振るえば獣達はたちまち凍り付き、放つ魔法で大地は白く染まる。寒さに慣れていないビーストマンは本来のポテンシャルを發揮出来ず、あえなく彼女の振るうハルバードの鏑となった。

獅子奮迅の活躍に加え、兵士達を鼓舞し引つ張るカリスマ、何より竜王国に親身になり、共に戦ってくれている”。それだけでどれほ

ど兵士達の支えになるか。

他の陽光聖典などならこうはいかない、彼等はいくまで仕事で此処へやって来ている。なので会話も必要最低限で愛想も無いのだ。

「竜王国国民にかあ…いいなあ…そしたらあのロリコンに頼りきりにならなくて済む…」

案外誘ったらサクツと承諾してくれんかの〜。」
「冗談です。」

あの若さであれ程の強さ、恐らく彼女はスレイン法国でも指折りの実力者なのでしょう。引き抜きなど黙っておりますまい。

心配せずとも、法国が竜王国を切り捨てても彼女は我々を見捨てはしないでしょう。《獄界絶凍》殿は情に厚い御方だ、それは陛下が一番ご存知なのでは？」

「そうじゃな、アレで急に裏切られたりしたら人間不信になりそうじゃ。」

半ば呆れ気味に笑うドラウディロン。

思い出すのは今まで共に戦ってくれた彼女の姿。

フレンドリーなんだか厚かましいだけなのかドラウディロンにもイマイチ納得がいかないが、兎に角色んな姿だ。

『初めまして竜王国の皆様、スレイン法国から派遣されて参りました。気軽に《獄界絶凍》とお呼び下さいませ！おーっほっほっほっほ！』
『はア!?なんツツですのこの寄付金の額!!』

滅び掛けの国からこんな搾り取ってブアツカじやアねえんですのあんのお排泄物国家が！ちよつと中央政府に文句入れてきますわ！』
『ドラちゃん、取り敢えず前線のビーストマンは氷漬けにしておきましたわ！これで本隊が敵拠点を叩けますわよ！』

え？凍らせた敵の数？そうですねえ…途中から面倒臭くなって数えるの止めましたけど大体700匹くらいかしら？どうしました急に白目剥いて。』

『腹が減っては戦ができぬ！』

というわけで実家からどデカイ鉄鍋を作って持って来ましたのでこれから中央広場で、ドキッ!?竜王国国民だらけの大・炊き出し会、を

行いますわよ！材料？費用？知らんなそんな事は。全てスポンサーであるこの私にお任せなさい！』

…思わず吹き出してしまった。

彼女が行うこと全てが無茶苦茶だ、だが最後には必ず良い方へ事が運んでいく。それは国民の雰囲気であったり兵士の士気であったりと様々だった。

この数ヶ月で彼女がもたらしたものはあまりにも大きく、世話になりっぱなしである。中には彼女が熱心に信仰しているというスレイン王国の宗教に入学しようと考える国民まで現れるほどだ。

「寄付金、本当にちよつとだけ安くなったんじやよな…」

「良い事ではないですか。」

「いや酒の愚痴でぼろつと言っちゃったのが本当に安くなるとは思わなんだよ…これで『紅蓮』をフルメンバーで雇える余裕が生まれたし、より防衛も堅固になる事じやろて。」

まさかお堅いスレイン王国からあれほど愉快的な御仁が生まれるとはの。」

「つきましては陛下にも今以上に彼女から気に入られるよう務めて頂かなくては。」

陛下の幼児形態に国の全てが掛かっておりますぞ。今に始まった話ではございませんが。」

「ぐっ…し、仕方ないなあ…」

セラブレイトが今以上に気持ち悪くなるのは嫌だが、背に腹はかえられぬ…」

ま、《獄界絶凍》殿は陛下の真の御姿を知ったうえでこの国に親身になってくれているので、幼女形態で無駄に演技する必要など無いのですけれど。

と宰相は喉まで言葉が出かかって、静かに飲み込んだ。そっちの方が国民（と一部のロリコン実力者）の印象も良いし。

「それに…彼女の前で言うてしもうた。」

『国民全てを救ってみせる』と。

ひとでなしの儂が吐いた妄言なのにな…あの娘は笑っていたよ、屈託のない笑顔で。」

それはレイラが派遣されてから数日経った頃、ご機嫌取りも兼ねて彼女のもとへ酒瓶を片手に訪れた時の話だった。

日頃の疲れもあつたのだろう、その時は国を救ってくれた英雄相手に愚痴を零してしまうくらいには酔っ払ってしまっていた。

そんな中、つい言ってしまったのだ。

『ビーストマンを全て国から追い出して国民全員を救ってみせると。』

失われた都市は3つ、度重なる襲撃で兵も疲弊し、税を治める国民は食われ居なくなるので経済も悪化する。更に身体能力で優位に立つビーストマンは数の不利などものともせず津波のように押し寄せる始末。

正に生きた災害、そんな事を誰かが言っていた。そんな絶望的な状況の中、ドラウディロンは王として国を回し、維持しなければならぬ。

『ドラちゃんはトロッコ問題ってご存知かしら？』

『トロッコ…？ 鉱物の運搬に使うアレか？』

『ええ、ええ。』

暴走するトロッコの線路の先は二股に別れていて、片方には自分に親しい間柄の人間が1人、もう片方には見ず知らずの他人が数十人居ます。そして貴女の手元にはトロッコの進路を操作するレバーがあつて、選択する事が出来ますわ。

大切な人を助ける為に多くの他人を見殺しにするか、多くの他人を助けるために少数を切り捨てるのか。一種の心理テストです。

ドラちゃんならどうします？』

『ふむ…難しいな。』

少を捨て、大を生かすのが王として正しい判断じゃろう。しかし…』

儂はできるなら全員助けたい。

民に優先順位などなく、大切な人も知らない他人も皆等しく守るべ

き命である。ドラウデイロンはそう考えていた。

しかし現実是非情である、何度救おうと手を伸ばしてみても、指の隙間から零れ落ちる砂粒のように日々命は消えていく。ビーストマンの侵攻を受けている今では『全てを救ってみせる』など所詮は夢物語でしかないのだから。

そんなことは理解している、寂しそうに俯く彼女をレイラはそつと抱きしめ、微笑んでみせた。

『やはりドラちゃんは“善き王”ですわね。』

“ごめんなさい、意地悪な質問でしたわ。どちらを救っても、貴女は後悔するでしょう。誰かを救うという事は誰かを救わない事だと、昔偉い人が言っていました。

ただし、それはなんの力もない一般人が選択レバを迫握られた場合の話です。』

『……う？それはどういう……』

『私、強いんですの。』

少なくとも母国で一二を争えるほどには。

ビーストマンなどより余程速く動けますし、魔法も誰より使えます。お望みとあらば一瞬で都市ごと永久凍土に沈めて差し上げますわ。そんな私が貴女の治める国に救援として派遣されましたのよ？

なら私を使えば良いでしょう。万人を救えと、国を助けろと命令なさい。』

『ー』

『この国に来てからというもの、皆様なんだかよそよそしい対応ばかりで正直嫌になってました。私が法国から嫌々徴兵されたとも思っていましたの？』

私は、助けを求めた貴女の為にこの国へやって来たのです。今の私は女王陛下の願いを叶える無敵の盾であり最強の矛。

あの問題でどちらかを捨てる、などという考えこそ今は捨ててしまいなさい。私という“反則”がいるのなら、「トロッコを破壊しろ」くらい言ってみなさいな！』

『…頼って…よいのか？』

この国は死に体じや、まして貴女は他国の将。あまり迷惑を掛ければそれこそ法国で面倒な事に……』

『あ、あ、あ、もうしゃらくさいですわね！』

黒き竜の末裔、ドラウディロン・オーリウクルス！』

『ひやツ……ひやいいツツ!?!』

『私は！スレイン法国最強の特殊部隊《漆黒聖典》が1人、第13席次《獄界絶凍》にして栄光あるローグレンツ領主レイラ・ドウレム・ブラッドレイ！』

国を憂い、助けを求め手を伸ばす貴女に願いに応え参上致しましたわ！

さあ命令を寄越しなさい！「竜王国を救え」と！民を救い、獣共を排除し、取り零す事無く全てを救ってみせろと！

叶えて差し上げます。だって私、最優にして最強の令嬢ですから！』

たかが国一つ救えないで人類が救えますか!!

「……本当の英雄というのはあんな子の事を言うんじゃないやろな。」

書類作業をいったん止め、インクの減らないペン型のマジックアイテムを手元でくるくると回しながら女王はぼやく。

その夜、演技も捨ててドラウディロンはレイラに思いの丈を全て話し、彼女もそれを全て受け止めた。後日始まった都市奪還作戦でレイラは万を超えるビーストマンをたった一人で皆殺しにし、都市を統率していた部族のリーダーから一騎打ちを挑まれこれを承諾。両兵の見守る中素手でリーダーを殴殺した後、勝利を収めた。

統率者を失ったビーストマンの集団は呆気なく瓦解し、我先にと逃げ出していくのを見送って空っぽになった都市へ部隊を突入。往生

際の悪い一部の敗残兵を掃討しつつのべ25000人余りの生き残りを救出する事に成功した。

満面の笑みで帰還し、勝利のVサインをかますレイラに堪らずドラウデイロンは王としての恥も外聞も捨ててその胸に飛び込んだ。

その感動的な光景に「てえてえ」と国民達の心はひとつになった。

「元々あの都市で暮らしていた人口は5万人ほど、我々が都市を奪われてから取り戻すまでの期間に人口の半分が奴らの腹の中です。被害の1番小さい都市でこの有様ですからな、残る2つ目、3つ目の都市はどんな惨状になっているか…

痛ましい限りです。」

「一刻も早く…とりたいところじゃが、経済状況も芳しくない。

作物を耕す者も皆食われてしまっておるし、立ち直るまでにどれだけ時間が必要になるのか…問題は山積みじゃ。

じゃが、最後まで付き合ってもらおうぞ宰相。」

「無論です、おつきあいしますとも。」

ニヒルに笑う宰相にうむつ、と返し書類に向き直る。

少し前までのドラウデイロンには見いだせなかった「希望」、たった一人の英雄によって齎された僅かな光を頼りに、彼女はまた暗闇を歩き続ける。

しかし不思議と、これまでよりも孤独を感じる事はなかった。

7 破滅フラグを乗り越えた国に遊びに来てしまつた…

あぜ道をゆつくりと進む2頭の馬に引かれる荷馬車、その中すつぽりとローブを被った人影が二人、積荷に腰掛けていた。

女性らしきその人影は膝のトランクを机代わりにし、揺れる荷馬車の中で本を読みふけている。

「お嬢さんがた、もうすぐ帝都前の関所だよ。身分証の用意しときな。」

手綱を握る初老の商人に外から声をかけられ、眼鏡をずりあげながら彼女は本に葉を挟み、トランクへしまいこんだ。隣の女は反応する仕草もなく、フードの上からでも分かるほどこっくりこっくりと頭を揺らしている。

「zzzz…」

「ほら起きて、そろそろ到着しますよ。」

帝都アーウィンタール前関所には日も高くないうちに荷馬車の行列が出来ていた。

帝都では今、帝国史始まって以来の好景気を迎えている。新皇帝ジルクニフの行った数々の経済政策、無能な貴族達の粛清で国内の灰汁が抜け、無為な搾取も今では殆ど行われる事はない。

頑張った者が頑張っただけ報われる、平民にとって夢のような国策に景気は好調し、中でも国の中心部である帝都においては好景気の影響を直に受けているため、目ざとい商人たちはこぞって帝都を目指す

のだ。この行列もその影響である。

ゆえに関所の衛兵たちは朝から大忙しだ、入国審査は国防の要でもある。忙しいからといって手を抜く事は決してない。

今日も門前には10人がかりの警備体制を敷き任務に当たっていた。

「ふむ、通つてよし。」

…次の者、馬車を降りて身分証を提示し、帝都に赴いた目的を言え。」

「はいはい、私めは竜王国から参りました。」

荷馬車にや塩と香辛料、それから衣類を積んでまきア。目的はまあ商いと…送り迎えを兼ねてますが。」

「同乗者が居ると言うことか。」

中の者、顔を出し入国目的を言え。身分を証明できる物の提示もだ。」

「は〜いただきます。」

他の者達が荷馬車の中身の検閲を進めるなか、衛兵の呼び掛けに呼応し、フードの女性が顔を出す。

女だてらに高い背丈に大人しめの服装で深い蒼色の長髪、そしてその整った顔を邪魔するように鼻にかかる瓶底メガネが印象的な女だ。

「此方の馬車に相乗りさせて頂いております。」

レインと申します、スレイン法国より参りました。」

「そうか、隣の娘。お前もか？」

「……あい」

「こらケレス、ちゃんとご挨拶なさい。」

レインと一緒に顔を出した幼顔の娘、長く白い三つ編みを二股にした女が気だるそうに返事を返す。

「すみませんこの子ったら寝起きで」

「構わん構わん、竜王国からの道中だ。」

女の身なら疲れもするさ。それで、お二人さんの渡航目的は？」

「私はまだ取り立てではありませんが法国魔法局教授を名乗らせて頂いております。ケレスは優秀な助手でして、此度の訪問に同席させる運

びとなりました。

帝都には魔法の教育機関や魔術図書館があると耳にしたもので、その見学に。」

「魔法学院の事か？」

その為にわざわざ法国からはるばる来るとは物好きなお嬢さんだな。」

「ええー！

法国は信仰系魔法の歴史と英智こそ人類一と自負しておりますがその実、魔力系と精神系には疎く資料もまだ少ないのです。なので三重魔法詠唱者と名高いフルード・パラダイン様の運営する魔法学院を見学し、少しでも知識を深めたい。

それ故に遠路はるばる来てしまいました。」

「なるほどねえ…」

熱心に語るレインにふむ…と思考する衛兵隊長の男、御歳40にもなる彼はもう25年近くこの関所で働いてきたベテランだ。

彼程になると帝国に害なそうとする者は例え取り繕っていても表情や態度、仕草の違和感で善人か悪人か判別できる。

見たところ魔法学者と名乗った目の前の女性、レインとケレスからは帝国に害なそうという意味は感じられない。態度や言動から、彼女達からは魔法を探究したいという純粋な熱意が感じ取れた。

話して少し、積荷を調べていた衛兵から『異常なし』との報が届く。「よし、通って良いぞ。」

ようこそ帝都アーウィンタールへ、商いも魔法探究も良いが気張り過ぎは程々にな。」

「へいどうも、お気遣いありがとうございます。」

「ありがとうございます、衛兵の皆様もお仕事頑張ってくださいね。」
そうお辞儀する彼女の乗る荷馬車を手を振って見送る。

神経をすり減らす入国審査、お世辞にも良いとはいえない仕事環境、同僚はむさ苦しい男たち、そんな中で例えお世辞でも美女からかけられる労いの言葉は衛兵達の心に染み渡る。美女は心のオアシスだ。

「なあ今の学者さん、美人だったな!」

「俺は隣のお嬢さんが好みだ。」

童顔に似合わんくらい胸があつたら、俺は見逃さねえぞ。」

「眼鏡が邪魔だ、勿体ない。」

「は?あの眼鏡があるからこそ美女が引き立つんだろが。」

「…は?」

「あ…?」

「戦争しかねえな…」

「下らん事言つてないでさっさと仕事に戻れ馬鹿共!」

若い衆が色めきたつのを一蹴し、衛兵たちは再び通常業務に戻るのだった。



ごきげんよう皆様!私ですわ!

という訳でやって来ました帝国首都アーウィンター!多くの露店と人で賑わう活気溢れる城下町、街の中心に聳え立つ皇帝の居城、The・王道異世界ファンタジーの街ってカンジです。清廉な雰囲気
の神都とはまた違った趣があつて大変よろしいかと。

「ふあ〜…ねむ…」

「馬車でずっと寝てたでしょう貴女、ホラ自分で歩きなさいな。」

気だるそうに進むケレスちゃん、いつもは自分に《飛行》掛け続けているから歩き慣れてなくてヨタヨタ歩く彼女の背中を押しながら私、『レイン』は進みます。

ええ、勿論偽名ですよ。

我々はスレイン法国特殊部隊。普段はスレイン法国民、とりわけ私は領主として日々執務をこなす身ではありますが、有事の際には他国に潜入し情報を掠め取る作業員を任されたりしますの。

こんなふうにな名前と、魔法で外見を変えて別人に扮しながら他所の国へ溶け込みます。今回は特別な異能力を持つフルーダ様が居る帝国への侵入なのでマジックアイテムで魔力量すら誤魔化す念の押しようですわ。

まあ、今日の帝国訪問は完つつ全に私事なのですが！

領主として名前を出し活動する時以外は基本こっちの偽名で通しています。そっちの方が好きに動けますし、領主として外出するより肩肘張らなくて気が楽ですもの。

それに幾つもの顔を使い分けるとか特殊部隊感出ててカッコイイじゃないですか。

本日私が扮するのはスレイン法国で魔法学者を務める若き秀才。

名前は「レイン・エルリク・ホーエンウッド」、専攻は魔力系魔法と地質魔法学。習得位階は第6位階。

努力家で物腰柔らかな法国魔法研究館（国営）の教授です、ちゃんと戸籍や身分証とかもきっちり作ってますの。

実際法国魔法局の局長とは馴染みの間柄ですし完全に嘘ってわけじゃ無いのですが、まあいつだって華麗な私の別側面：クラスがランサーからキャスターに変わったようなもんですわね。水着じゃなくても誤差よ誤差。

霊基が変わっても私は限定星5、Cv沢〇みゆ〇でしてよ！（あくまで本人の妄想です）

「知ってる、こういうの『シヨツケンランヨー』って言うんでしょく。」

はいケレスちゃん嫌い、嫌いですわー！

昨日竜王国でビーストマン達を蹴散らして、蒼の薔薇との密会を終えた後、今朝がた念押しとばかりに前線基地になっていた森を威嚇も兼ねて全部氷漬けにしておきましたので暫くは奴らの侵攻が過激化

する事は無いでしょう。ドラちゃん白目剥いてましたが、寝不足かな？

そして法国へ戻るクレマンティヌと交代で合流したのがこの子、第1席次《無限魔力》ちゃん。本人たつての要望で帝都訪問に同行したいそうです、漆黒聖典つて休み少ないのでたまの旅行はワクワクしますわね！

潜入時の偽名は“ケレシア・リーズ・マスターグ”、愛称はケレスちゃん。教授であるレインの助手を務め、第4位階までの魔法を収める優秀な魔法詠唱者…という設定です。

『他人の魔力量と習得位階が目視で判別できる』という厄介な異能力を持つフルーダ様を誤魔化す為に事前にわざわざ番外ちゃんにお菓子和等価交換で神都の宝物殿から隠蔽のマジックアイテム持ってきてもらいましたので私達の本当の実力が晒される事はないはずですわ。

……私もそうですが《無限魔力》ちゃんもその名に恥じぬ魔力量ですからね、万が一観られてしまった場合あの魔法狂いがどんな反応するか想像したくありませんもの。

「レインちゃん、潜入任務向いてるよねえ。」

普段のインパクト凄すぎて絶対バレないもん。」

「そうかしら？ 普段もスルシャーナ様の使徒に相応しい謙虚で清楚な振る舞いを欠かさないよう心掛けてはいるんですけど。」

「(謙虚…？どこが?)」

「いつもなら5分おきに高笑いしてるじゃん。」

「そんな頻度でしたっけ!？」

会話しながら街を散策中、手近な宿を見つけチェックイン。

『歌う林檎亭』ですか、歴史ある見た目ながら小綺麗な店内、そしてなかなかナイスなネーミングセンスですわね。

今回は4泊5日の帝都観光を予定しています、奴隷市場や闘技場なんかは興味無いのもっぱら魔法学院と魔法図書館の見学ですわね。

それと適当なワーカーを雇って試作マジックアイテムの運用試験を
考えてますの。

それ以外にも野暮用はありますがそれはおいおい。

「必要なものはトランクに纏めてますし、早速見学に向かうとします
か。先ずは一般公開されている魔法図書館から行きますわよー」
「おく。」

久しぶりの休暇に友人と小旅行、テンション上げ上げで参りますわ
〜!!



〜レイン滞在より1日経過〜

バハルス帝国

帝都アーウインタール

王城執務室

一国の統治者が執務を行うには些か質素に見えるこの一室、その奥
にある巨大な執務机の上に山盛りに積まれた書類の束に囲まれる人
影がある。

その中で黙々と執務をこなす金髪の男こそ、今代のバハルス帝国を
治める皇帝。ジルクニフ・ファーロード・エルニクスその人であっ
た。

ほぼ日課と化したこの執務量も慣れたもの、黙々と作業を進め山を
片付けて行く。

時折傍らに侍る副官のロウネより渡された資料を読みふけり、疲れ
たようにため息を吐く姿も見受けられた。

「やはりカツツエ平原のアンデッド共は増え続ける一方か。」

「はい、観測部隊の報告通りなら例年の2倍近い数が平原より溢れております。場合によっては軍の投入も必要になるかと。」

「原因が分からねば根絶もできん、アンデッド退治の費用も馬鹿にならないからな。ワーカー共が定期的に狩っているというのにそれでも間に合わんとは…」

いつまでも手をこまねいている訳にもいかんか、魔法詠唱者を中心とした討伐部隊を編成する。

《ファイヤーボール火球》の絨毯爆撃で焼き払ってやれ。」

「汚物は消毒、という訳ですか。」

承知致しました、編成についてはフルーダ様にお伝えしておきます。」

「そういえばじいはどうした、今朝から姿が見えないが。」

「さあ、私にも分かりかねます。」

バジウツド、貴方は？」

そうロウネが問う視線の先には皇帝を守るため護衛として室内に侍る鎧姿の武骨な男。

名をバジウツド・ペシユメル、『雷光』の2つ名を持つ帝国が誇る懐刀『四騎士』に数えられる程の実力者である。

「ん？フルーダの爺さんなあ…」

今朝方すれ違いましたぜ、噴水広場にできた氷のオブジェを見に行くんだったか。」

一国の皇帝に対して無礼かとも思える態度だがジルクニフは気にしていない、寧ろ実力が伴っているなら彼は相手の人格面に関しては寛容だ。執務室の壁にもたれながら話すバジウツドに耳を傾けた。

「氷のオブジェだと？」

「陛下、こちらの書類です。」

帝都に設置された中で最も大きな噴水が何者かによって凍結させられていた事が今朝、衛兵の報告により判明致しました。」

ロウネより渡されたよると早朝勤務の衛兵が城下をパトロールしていたところ、発見したらしい。

彫刻家による美麗な細工などが施してあるハズの大噴水は氷塊と

共に見事に凍りつき、周囲の気温が3℃は下がっているのだとか。

「あれは魔法技師による循環式構造ですので周囲に凍結による断水等の被害はありません。オブジェ自体も近隣からの不満はなく、寧ろ最近蒸し暑い日が続いているため涼が取れると好評でした。」

ですが問題は人的被害が出てしまった事ですな…」

人的被害、と聞いてジルクニフの顔が険しくなる。が対するロウネはなんとも微妙な表情を浮かべていた。

「どうしたロウネ、帝国民に被害が出たのだろう。何人だ？」

「い、一名です。」

「…は？」

「名はエルヤー・ウズルス。帝国ワーカー『天武』のリーダーでございます…」

その彼の他パーティーとして登録されていた3名のエルフは現在行方不明となっており、現場には奴隷3人分の買取代金が借用書と共に同封されておりました。エルヤーの血判付きで…」

「なんて???!」

エルヤーとは帝国に所属するワーカー。ワーカーとは正規の冒険者とは違い協会に正式登録されておらず、非正規で冒険者稼業を営む者達の総称である。協会の仲介を通さず雇い主と直接契約する事で受け取る賃金こそ多いが、汚い仕事などを任せられる事もある。なんにしても実力が必要な職業だ。

当然、人の生き死にも激しい。そんな中で市井に名が知れ渡るほど活躍できるのはひと握りのワーカーグループしかない。

『天武』もそのひとつ、剣士エルヤー・ウズルスはその才能でもって名を挙げた、巷では色々有名なワーカーだった。

「あのエルヤーが負けたのか。」

奴は人格面こそ問題はあれど帝国では中々の強者だったのだろう、バジウツド？」

「ええまあ、そりや間違いねえです陛下。」

それが物の見事にぶん殴られたのか顔面腫れぼって、噴水と一緒に氷漬けにされちゃったのをウチの部下が見つけたそうで。

俺も現場に行つては見たが：思った以上にズタボロで、あんまりに滑稽だったもんで笑つちまいましたよ。」

「あのエルヤーですからね、我々が発見するまで誰も通報していなかったのがその証左でしょう。」

エルヤー・ウズルスは帝国民でありながらその実、法国出身者である。洗礼名を捨て、何故帝国へ渡つてきたのかは不明だが名を上げた彼の言動には問題があり過ぎだ。

曰く「子供をそのまま大人にしたような性格」のエルヤー。自己愛強くナルシストなのはまだマシとして、白昼堂々自らのパーティーメンバーである奴隷のエルフ達を矚り、痛ぶり、時には辱める。それも街の中でやるものだから見ている側は如何に相手が奴隷であつたとしても気分が悪い。しかし彼はなまじ実力者な為意見することも出来ず見て見ぬふりを繰り返していた。

「書き置きも残されており『今まで奴隷を虐めてごめんなさい、書類と代金を置いておくので契約解除の手続きをお願いします。神に誓い、今までの醜態を猛省し懺悔致します。』との事です。」

「絶対本人が書いた文じゃないだろそれ。」

「ええ、ですが書類と代金は正規のものでしたので市場に連絡しこちらで手続きを済ませておきました。血判もありましたので彼の奴隷は正式に自由の身になりましたよ。」

しれつと言うロウネに思わず吹き出し爆笑するバジウッド。ジルクニフも呆れ顔だか部下の勝手を咎めるまではしなかった。彼も行き過ぎた素行のエルヤーに思うところあつたのかもしれない。

しかしジルクニフの思考はエルヤーではなく別のところにあるようだ。

「帝国でも指折りの実力者を殴つて気絶させ、更に魔法で拘束できる程の猛者が帝都に居るということか?」

「でしようなあ。部下の聞き込みだと、昨日の夕暮れ頃に噴水前でエルヤーと言い争う2人組の女性が居たと聞いてますぜ。」

「ということは女二人でエルヤーを下したということか!? 気になるな、彼女等の仔細は追えるかロウネ。」

「可能です、帝都への来訪履歴を当たってみましょう。エルヤーと何かしら因縁のある相手で、彼は法国出身者、それもふまえ昨日以前に帝都に訪れた法国からの入国者を洗い出してみます。」

「ああ、頼む。」

「探し出して弁償させますか？ 皇帝陛下は随分と噴水にご執心なようです。」

「違うぞバジウツド、私は…いや、待て。」

バジウツド、今すぐじいを探して連れ戻してこい。部下達を何人か連れて構わん。」

「そいつあどうして、そんな急ぐ事ですかい？」

「じいが勝手に行動する時は決まって魔法関係だ。大方今回も凍った噴水が気になったんだろう。ならきつとその女たちに辿り着く。」

エルヤーを拘束できる程の魔法を持つ二人組にいきなり接触させてみる、最悪例の魔法狂いが再発するかもしれない。」

バハルス帝国宮廷魔導師、フルーダ・パラダイン。魔導によって人の寿命を超越し英雄を超えた『逸脱者』となった生ける伝説、今では『三重魔法詠唱者』の名を恣にする大魔法使いだ。皇帝であるジルクニフとは帝位に就く前から教育者として彼に侍り、時折助言する程の信頼のおける間柄。

そんなフルーダであったが、少々行き過ぎた魔道への探究心が溢れ出てしまう事が度々ある（限りなくマイルドな解釈）。

それはジルクニフも知るところであり、何度かそんな場面に出くわしたフルーダの姿を見たからこそ、他国の人間にそんな醜態を晒させる訳にはいかないと配慮した。

急げ！と急かされバジウツドは執務室から追い出される。

まだ確定という訳では無いが、エルヤーを破るほどの魔法詠唱者なら場合によっては困い込むのもいいかもしれない。法国出身らしいので宗教的なトラブルは起きるかもしれないが、弁償にしろ勧誘にしろ先ずは2人組の詳しい特定を急ぐべきだ。

色々な打算を頭の中で巡らしながら、ジルクニフは再び書類の山に目を落とす。



帝都内

帝国魔法図書館

国内最大級の規模を誇る魔法図書館、魔法学院の卒業生達が残した論文を初めとする魔法論文の数々が所狭しと並び、帝国魔法省御用達の魔術書、資料が集うこの大図書館。一般公開されているので身分証があれば他国の人間でも入館する事ができるのです。

表向きは帝国の魔法に対する習熟度調査、本音はただ私が気になっただけですの！ 気になり過ぎて昨日は昼食以外は閉館時間までずっと図書館に2人で籠ってました。

ちゃんと後でレポートに纏めて元老院に提出してやりますので問題ナッシングですよ。

正しい情報をなるたけ詳しく伝える事によって上層部の暴走を抑えるのです、王国にも今度何かしらのアプローチを掛けて仔細を報告しないと…このままいくと戦士長殺害ルートまっしぐらですからね。蒼の薔薇にああ言った手前、できる限り手助けはしてあげませんと。

私とケレスちゃんは昨日に引き続き、気になった魔導書を片っ端から漁ったり法国の魔法論文と比べては意見を交わしあっています。

「ケレス、こっちの論文どう思います？」

「私的には三節の定義が気になりますね。」

「……それ、仮説と結論が結びついてない。」

多分根本の魔法論理が法国の定義と違うんでしょ、アタシが見た中で近いのはこれと…これ。」

「ふむ…なるほどこれなら筋は通ってます。流石元首席。」

国ごとに根底の定義が違っていているのは頂けませんね。かと言って統一しようにも宗教が絡んできますから易々と変わる事などできな

いでしようし。貴女なら丁度いい落とし所が探れるのでは？」

「変に持ち上げるの止めてよ、座学はともかく実技じゃレインちゃんに勝てる奴なんて居なかったじゃない。」

卒業課題も、あんなのお貴族様と元老院の好き嫌いで点数付けられるんだから。ずっと私が負けてたよ。」

「卑屈ですねえ、学生時代は自信満々で毎日私に勝負を挑みに来ていたというのに。そんなに番外ちゃんにコテンパンにされたの引き摺ってるんですか？」

「ゲッ!?その名前は出しちゃ嫌あ…」

実は学生時代、私とケレスちゃん（偽名）って同期なんですよね。

法国が主導する魔法教育機関、貴族平民関係なく入学できたので。前世の学校と違って同じ学年に幅広い年齢の人がいましたから同い歳って訳じゃ無いんですけど。

「学生時代、懐かしいですね。同窓会とか企画したいんですけど皆集まってくれるかしら。会場は私の実家で。」

「レインちゃんの領地はエルフやドワーフが暮らしてるから来ない奴は来ないでしょ。在学中も差別意識強い同期は結構居たし。昨日も会ったじゃん、エルヤーとか。」

「まったくあのおバカさんは…卒業してもまっつっつたく変わってませんでしたね。いつものノリで氷漬けにしてみました。」

卒業してからしばらくして、法国から飛び出して行ったと人づてに聞いたのもう会うこともないだろうと思ってたんですが。

会っちゃったんですよねえ、昨日の帰り道で。

エルヤー・ウズルス、あの人は魔法剣士専攻だったので学部は別だったんですが、学生時代からエルフに対する偏見が激しく、在学中に何度も言い争いになりました。

私のメイドを貶した時は思わず手が出てしまい校庭に1週間ほど氷像になってもらいましたっけ。ざまあねえですわ！

因みに今回のオシオキは5日ほどで溶けるよう調整してあります、暫く氷の中で反省なさいな。

「でも大丈夫なの？あのエルフ達勝手に《転移》で飛ばしちやつて。」
「奴隷契約の方は血判とお金を用意すれば誰かが察してくれるでしょうし、問題ないかと。」

今頃ベルが介抱しているでしょう、どちらを選ぶかはあの子達次第です。」

あの馬鹿つたれは性懲りも無く奴隷のエルフを買い込んで手籠めにしていました。

ええ、おかげで即プツンきましたわ。

エルヤーを成敗したあとわけも分からず怯えるエルフっ娘達には『転移』で私の領地へ飛んでもらって、そこで今後の人生を選んでもらう事にしました。

私の屋敷でメイドとして契約分の借金が返済できるまで働くか、全てを捨ててエルフの国まで帰るのか。

前者ならちゃんとした雇用契約書を仕立てて、奴隷契約時の売買金を私の屋敷で使用人として働いてもらい返済させます、勤務時間は朝8時から夕方5時まで、うち昼休憩1.5時間、残業なしで社宅完備のホワイト企業ですので労働初心者の貴女も安心！

同僚のエルフも居ますので職場環境は決して悪くはないはず、定期的にアンケ取って雇用満足度調査してますから！

そして後者を選ぶなら、私が借金を全額返済したうえでこっそり耳も再生させ、エルフの国へ帰ってもらいます。

帰ってもらおうと言っても我が国とエルフ国は絶賛戦争中ですので近くの森まで送る程度ですが。どっちにしる奴隷エルフは自由になるし、そこからは彼女達の器量次第ですわ。

そもそも私、奴隷制度反対なんですよね。前世二十一世紀の日本人ですし、価値観が違い過ぎますの。

エルフ国との開戦後に法国が報復措置の一環として始めたお排泄物事業のひとつで、亜人軽視のお排泄物議員共が好きな様に考えたおかげで出来上がったキング・オブ・お排泄物。

…って私何回クソクソ言ってますかはしたない、これも全部法国が悪い！

今では当たり前のようにみんながエルフ奴隷を認知してますけどとんでもない。可能なら今すぐ帝国と法国の奴隷市場を物理的に粉砕して関係者を全員縛り上げ、一人一人十字架に張り付けにして喉が潰れるまで神の前で懺悔させてやりたいくらいです。その為に魔法をアレンジして十字架型の氷塊を生成できるようになつたくらいですし。

この際だから技名も改変してやろうかしら、《クロイツヴェルニクトランツェ十字型殲滅冰槍》とかならアインズ様も気に入るそうですわね。

(レイラちゃんの顔こっわあ…)

ケレスちゃん!? そんな顔して怯えないでくださいませんか!?

「失礼、お嬢さんがた。

少しよろしいですか?」

ふと、スネイ○先生に激似の声で呼ばれたような気がしたので顔を上げるとそこには品のある白髪のご老人の姿がありました。

あら、ダンブル○ア先生? 此処はホグ○ーツだったかしら。

つかこの面、見た事ありますわね。

もしかして、イベントじゃな? (名推理)



帝国四騎士が一人、『雷光』バジウッド。

裏路地生活から成り上がり、今や四騎士筆頭とも噂される彼は現在皇帝命令により護衛の任を解かれ、宮廷魔導師の捜索に駆り出されていた。

部下も5人ほど動員し、市街地を初め彼の向かいのような場所を虱潰

しに探してはいるが成果はなく、辟易としていた所に漸く部下から吉報が舞い込む。

「まあそりやそうだよな、魔法詠唱者サマなら此処に来るわ。失念してたぜ。」

部下とともに受け付けに顔を通し、目撃情報があった場所に向かうとそこには人集りが。皆魔法学院の制服を着用しているので学生なのだろうが、誰も彼もがメモを取りながら人混みの中心に耳を傾けている明らかに異様な光景。

「おう悪いな、帝国騎士のお通りだ。道を開けるよー。」

バジウツドが人混みを掻き分け進むと案の定、そこには見慣れた宮廷魔導師の姿が。周りの目も気にせずになにやら2人組の女性と熱心に話し込んでいる。

話し掛けようとしたのだが…

「なるほどのお…つまり法国の魔法理論の根底には四属性に加え光と闇の二属性、つまり6つの属性によつて基礎が象られていると。」

ならば先程聞いた位階魔法より古に存在する魔法とはルーン技術に通ずるものがある?!」

「ええ、扱える者はひと握りの竜種と文献に綴られていますますが数多の命を代償にし放つ極大魔法の存在は法国内でも既に証明されています。」

故に既存の属性魔法は体内に有する魔力を6つの『色』に変換し体外に放出する、人体とは例えるならば魔力の変換装置だと私は考えています。」

「ほおーそういう捉え方もあるのだな…!」

そうか!それが先程レイン殿の仰っていた無詠唱魔法の定義に繋がるわけじゃな?

なるほどなるほど。帝国の者では思い付かぬ独自の視座、若い身でありながらそれ程の知識をお持ちとは…いやはや感服致しましたぞ!」

「フールーダ様こそ!」

魔法の最大化技術と術式の最適化において右に出る者はいないではありませんか！特にこちらの論文に記載されている簡易魔法陣、お独りで構成を練られたのでしょうか？一節簡略化するのに2年掛かると言われている魔法術式を僅か5ヶ月で4節も短くできるだなんて…私の知る限り法国にもこれ程の才ある術者はいらっしやいません。陳腐な褒め言葉ですが、流石は逸脱者と呼ばれしフルーダ翁にあらせられます。」

「いやなんの、探究心こそ儂の原動力なれどそれを支える弟子たちの働きあつてこそその成果。」

それより先程話に出てきた《撃杖》なるマジックアイテムについて詳細を聞かせて欲しいのだが！法国の魔術の真髓を是非この目で見てみたい！」

「勿論です！」

どこか魔法を放てるような広いスペースがあれば良いのですが…」「それなら問題ない！おおいアルシエ、アルシエよ！学院の第二校庭を空けよと教頭へ通達せい！」

これは学院長命令である、急げ！」

「は、はいフルーダ様、直ぐに！」

「あー…ちよつと宜しいですかい。フルーダ様。」

おずおずとバジウッドは話し掛ける。

ヒートアップした2人の会話は広い図書館内に響き渡り、なおも魔法談義を聞きたがる生徒達が集まってきている、野次馬が集まっているのはこのせいか。ほつといたらこの2人無限に会話が続きそうだ。レインと呼ばれた女性の隣では彼女の補佐らしき白髪女性が鼻ちようちん作つて眠っているのが見えた、多分ヒートアップする2人の話に興味なくなつて寝てしまったのだろう。「俺だつてもう帰つて寝たいわ」とバジウッドは心の中で悪態を吐いた。

「ぬ？なんじゃバジウッド、話の最中に。」

邪魔するでない！」

「いや皇帝陛下からアンタを捕まえとけつて仰せだつたんですが…

ちよーつと遅かったみてえですな。」

「陛下が儂を？」

そうだお前にも紹介してやらねばな、こちら法国より来訪されたホーエンウッド女教授。この若さで第6位階を修める才女であるぞ。助手のマスターグ女史も優秀な魔力詠唱者じゃ。

女性の身ながら魔導を極めんとするその心意気には儂と通ずる所がある！素晴らしい！」

第6位階、という事は相当な魔法詠唱者であるという事は魔法に疎いバジウッドにも理解できる。

そしてこの短期間であるフルーダと意気投合するという事はこの瓶底メガネの彼女も同類なんだろうな、とバジウッドは頭ではなく魂で理解した。

「ご紹介に預かりました、レイン・エルリク・ホーエンウッドと申します。」

「こちらは助手のケレスで…あらもう、起きなさいケレス。」

「あー…話終わったあ？」

「貴女ずっと寝てたんですか!?せっかくフルーダ様から貴重なお話を聞かせて頂いたというのに…後でレポートを書かせますからね！」

「うげえっ、嫌だあ…」

「申し訳ありませんフルーダ様、この子ったらいつもこんな調子で…実力はあるんですけれど。」

「ホホ、良い良い。」

考える事は頭を使うのじゃ、貴女が目を掛ける程の才女であれば相応にな。

違う見方で物を見ることが如何に困難で脳を酷使するか儂も身をもって知っておるとも。

休む事もまた、魔導の探求に他ならぬよ。」

バジウッドの搜索も虚しく、フルーダは法国の魔法学者と接触してしまったようだ。

やたら興奮した老人からまくし立てられ、結局バジウツドも法国産の新しいマジックアイテムとやらを見学する為に学院へと赴く事になった。

(面倒な事に巻き込まれちゃったなあ…)

辟易とするバジウツド。

法国は敵対こそしていないがレイン女教授は他国の、それも第6位階が使えるとなればフルーダ級の重要人物だ。そんな彼女を帝国の重鎮が前準備もなく連れ回しているとなるとジルクニフからなんと言われるか…

(っーか大概レインっー女教授も自由だよなあ…)

道中、「レポートやだあ…やだよ…」と文句を垂れながら教授の私物らしきトランクケースを抱えレインに襟首を掴まれる助手を見て謎のシンパシーを感じざるを得ない。あの子もきつと師匠に振り回されてるんだろうなあ、可哀想に。

余談であるが図書館から学院に赴く最中、移動する2人を追い掛けるように集まった学生の波が蠢いてさながら民族大移動の様だったと受付の者は後に語る。

……

ところ変わって、此処は帝国魔法学院

案内されたのはサッカーコート2面分ほどの面積をもつ学院内の校庭、普段ならば実技の授業で《火球》などの攻撃魔法を練習する場だ。近場に燃え移るものもない。

そんな中、レインはトランクケースを助手から受け取ると金具のロックを外し、中からパーツを取り出していく。

小さい部品から大きい部品まで、中には明らかにケースに入らない

であろう長さの鉄の筒が出てきた時はギャラリーからどよめきが上がったが「企業秘密です」とレインは笑顔で黙秘を貫いた。

「さて、それでは組み立てがてらこのマジックアイテムについて軽くご説明致します。」

先程もお話したように私の専攻は魔法地質学、大まかに言うと魔力の根本たる『地脈』を捜査、追求する学問です。

普段我々が行使している魔法、その発動過程を研究し根源を探る：そんな感じですね。」

慣れた手つきで次々とパーツ同士を組み合わせながらも決して解説をやめないレイン。その仕草に多くの学生が魅入ってしまう。

彼女曰く魔力には『内魔力』と『外魔力』なる2パターンの概念が存在し、内魔力は体内で生成される魔力、外魔力は大地に根ざす自然の力の事を指すらしい。

この世界の人々は属性魔法を発動する際、『地脈』という大地より湧き上がるエネルギーの根源から外魔力を下賜され、それを肉体を通して内魔力と混ぜ合わせるにより初めて攻撃魔法は成立するのだろうか。

『名は体を表す』と法国では古くから伝えられており魔法発動に必要な文言、魔法名はいわば存在証明なのです。武技においても技名を宣言する事で初めて発動が可能になりますよね？原理はそれと同じです。」

ここまで話を聞いてもちんぷんかんぷんだったバジウツドは自分の身近なものに置き換えられやつと腑に落ちたのか、「なるほどねえ」と相槌を打った。

「ならばその逆、宣言しなければ魔法は発動しないのか？」

例えばフールーダ様、貴方は『火球』を発動しようとしています。なら先ず何をを行いますか？」

「ふむ：初めに魔力を込め詠唱し、名を宣言する、と言いたい所じやが…恥ずかしながらあまり深く考えた事がない。」

「高位の術者なら尚更でしょうね。魔法は魔力を込め名を宣言する事で発動できて当たり前、その思考と動作は魔法に慣れれば慣れるほど

洗練され、頭と身体に染み付いていきますから。

魔力を込め、内魔力と外魔力が体内で混ざり合い、指先から放出される直前の状態まで準備を整え名を呼ぶ事で初めて魔法はこの世界に発現し、現象として成立するのです。

魔法名の宣言は論文で言うところの『結論』であり、魔法が発動したという『証明』、魔法という現象が辿り着くべき『帰結』でした。故に多くの魔法論者は無詠唱魔法に否定的で、この工程を省略するのは不可能だと判断しています。」

ですが…と組み上がったマジックアイテムを机に乗せ、レインは続けた。

「省略ではなく、『変換』。

魔法発動の宣言を別の工程に置き換えれば、結果として無詠唱で魔法は発動するのではないか？

そう考えた我々が作り上げたマジックアイテム、それが《撃杖》なのです！」

ばばーん！とすしぎ○まいポーズの彼女のもとには鉄と木で象られた細長く黒い物。

名を呼ぶのではなくトリガーを引くという行為に置き換える事で擬似的に無詠唱魔法を行使する、それが《撃杖》の真価である。

「ほお…ほおほおくッ！」

見た目は随分と地味だが…このルーンの刻まれた赤い石はいったい？」

「それこそドワーフ達のもつルーン技術の結晶、私達は『ルーン石』と呼んでいます。

詠唱を変換する際、この石に込められたルーンがそれぞれの属性に対応し発動工程を詠唱の代わりに『トリガーを引く』という動作に変換できるのです！」

そう語るレインが懐から転がしたのは6つの色に別れたルーン石、どれも撃杖にセットされているものと大きさが同じにカットされており文字はそれぞれ違うがルーンが刻まれている。

「赤は火、青は水と氷、緑は風と雷、黄色は土、白と紫は聖属性と死霊

属性なのですがこの2つはまだ不安定で実用化にまでは至っていません。私の不徳の致すところですよ…」

申し訳無さそうにする彼女だがとんでもない、どれも帝国にはない魔法技術を駆使した逸品だ。

フルルーダは興奮のあまり鼻息荒く「さ、触らせてくれ！」とルーン石を取り上げて、うつとりとその輝きに浸っている。

フルルーダのお目付け役として隣で説明を聞いていたバジウッドも何の気なしに一番近くにあった緑色のルーン石を摘んでみる。透き通るように綺麗な翠色、中心にはどうやったのか石の中にルーン文字が刻まれていおり、バジウッド程の力自慢ならちよつと力を入れただけで潰れてしまいそうだ。

今にも手に持つルーン石を舐め回しそうなほど興奮した様子のフルルーダに対して、魔法について門外漢のバジウッドはこの石ころの重要性にイマイチピンとこないようだ。

「ルーン石ねえ…これって何から出来てんだ？

見た感じ随分綺麗だが…」

「宝石ですね。」

「…えっ」

静まり返る一同、フルルーダだけは我関せずと食い入るように赤のルーン石を眺めているが。

「ルーン石はその性質上、魔力伝導率の高い物質が好ましいのです。

よって外魔力をより通しやすく、より純度の高い天然鉱石が必要になります…結果大量の宝石を一旦熱で溶解させて再結晶化、そこにルーンを刻みコーティングする事でルーン石として構築しています。

これもドワーフのもつ製鉄技術の応用です。」

地脈より滲みだした魔力の結晶が宝石であると古の文献に語られていますので。因みにバジウッド様の持っている緑のルーン石はエメラルド、ヒスイ、マラカイトの融合石ですね。と笑顔で説明するレインにバジウッドは引き攣った笑みを浮かべて摘んでいたルーン石をゆつくりと机に戻した。それはもう丁寧に。

「？宝石としての価値は失われていますよ…」

「そういう話じゃねえんだわ!」

「…さて、それでは実際に撃杖を撃ってみましょうか! ケレス、準備して。」

「あーい。」

撃杖を手渡されたケレスはフルーダから取り上げた赤いルーン石を撃杖後部に嵌め込み、飛び出した金属製の取っ手部分を目いっぱい引き引き金に指をかけた。射撃目標は50メートルほど先に設置されている鉄鎧を装備した案山子だ、予めフルーダの高弟達が設置したものらしい。

「射撃時に反動がありますので《飛行》と併用する際は重心制御に注意が必要になります。」

魔力を充填、撃ちたい魔法を思い浮かべながら標的に照準を合わせて引き金を引けば…」

片膝を着き射撃体勢に入ったケレスが案山子に向けて引き金を引く。

ハンマーがルーン石を叩くのを合図に小さな円筒型の魔法陣が銃身を包むように展開され、筒先から赤い光が走ったかと思うと前方の案山子から炎が上がった。

本当に詠唱していない。小声で喋った訳でもなく、本当に無詠唱で魔法行使した。これは魔法詠唱者からすれば革命モノの衝撃だろう。

中心から円球状に広がった《火球》は間もなく鎧ごと案山子を燃やし尽くし、焼け残りの火が消えた頃合いで、真っ先に声を上げたのは案の定…

「すっ素晴らしいいいいいいいッ!!」

この魔法キチ、ぶれない。

「儂にも貸してくれ、是非とも撃杖を撃つてみたい! 頼む!」

「ええ、是非お試し下さい!」

高弟の皆様も宜しければどうぞ。試作品は三本予備がありますし、詳しい取り扱いをご説明致しますね。」

レインの言葉を皮切りにどつと人が押し寄せる。常に新しい物に飢えている学生達の好奇心も我慢の限界だったようだ。

彼女から撃杖の取り扱いについて簡単な解説を受け、早速試し撃ちを試みる学生達を眺めながら、「若いってすげえなあ…」と若者の熱意に若干引き気味のバジウッド（おじさん）なのであった。

「ひゃああああっはっはっはっはあ!!!

素晴らしい！本当に無詠唱で魔法が発動できとる！最大化すら無詠唱で掛けられるとは恐れ入るぞオ！」

「し、師よ落ち着いて下さい！」

レイン教授のご説明によると発射時の衝撃は腰にクさるそうです、連発は御身に響きます！」

「年寄り扱いするでないわ！」

「!??!?!? まだまだ試し足りん、この魔力尽きるまで（ゴグギツ）ほ、ア、ッ
」!?!?!?」

（（い、今フルーダ様の腰から凄い音が…!））

バジウッドは無言で天を仰いだ

8 破滅フラグしかないワーカーチームと仕事してしまつた…上【挿絵あり】

『ごきげんよう皆様がた！』

私、今年の学年代表を務めさせて頂きますレイラ・ドウレム・ブラッドレイと申しますわ。

本日はお日柄も良く、入学式にもつてこいの日和ですわね！新入生代表として大変嬉しく思…え？なんですの学園長…ちゃんと原稿読め？嫌ですが！

私、この学校でやりたい事がありますの！それはですねえ…あつちよつ…教頭先生？マイクを取り上げようとなさらないで！

新入生代表の挨拶を任されたのは私ですよ！

なあなあで誤魔化さないでマイク返しなさい、誤魔化すのは貴方の薄毛だけで十分ですわ！

あぶなっ!!杖抜きましたわね!?やつたろうじゃねーですかア!!』

何やってんだこいつ

というのが彼女への第一印象だった。

代表挨拶で意味不明なマニフェストをぶち上げて、教頭（第5位階習得済み）と壇上でドンパチ繰り広げ、最終的に彼のカツラを剥ぎ取り勝利宣言を新入生代表の挨拶とした異例の入校式は今も脳裏に焼き付いてる。

上級生からやつかみを受けながらも挑まれる決闘は全戦全勝、教授でさえ思いつかない様な魔法の論文を在学中に何枚も書き上げるその偉業の数々は私達が卒業した後でも学園に語り継がれてる。

辺境出身の異端児、レイラ・ドウレム・ブラッドレイ

“血濡れ”の娘、亜人殺しの野蛮人なんて揶揄されていたあの子とつるむようになったのは何時からだっただろう。

周りが凡人ばかりでウンザリしていた私に刺激をくれたのはレイラちゃんだった。

奇抜な言動でみんなを引きずり回して場を掻き回す癖に、最後は必ず大団円と高笑いできちんとまとめしてしまう。そんな彼女に私は無意識の内に惹かれてた。

私も昔はちよつと…ホントにちよつとだけ調子に乗ってた時期があった。名前も思い出したくないアイツにコテンパンに叩きのめされるまで気付かなかったけど、思い返せばレイラちゃんはいつも調子に乗る私を窘めてくれていたっけ。

いや、それ以上にレイラちゃんがぶっ飛んでて周りからは『やべえ二人組』って認識されてたんだけど…

若気の至りよ、若気の至り…フフ…

それから何の因果か、法国最大の秘密組織で私とレイラちゃんは再会できた。

レイモンのおっさんはあの子の素行を見て脇腹を抑えながら唸っていたけど、彼女の入隊については正直納得しかない。

レイラちゃんに相応しい職場は漆黒聖典くらいしかないだろう。

………

「今日のプレゼンはバツチリでしたわね！」

これで帝国もよりルーン魔法の重要性に着目してくれることでしょう、フルーダ様とのパイプもできた事ですし万々歳ですわ。」

「じゃあ明日は予定通りカツツエ平原の調査？」

「ええ、相手が正体不明のアンデッドとなればフルーダ様でも手こずるでしょうし、私たちの出番です。」

あの後散々撃杖を打ちまくって腰をいわしたフルーダと別れて私達は宿まで戻り、夕食を終えて今は一息吐いている。彼は明日も魔法談議をしたいそうだがあの様子じゃ無理でしょ。

私が帝国に訪れた本当の目的、それは《占星千里》の予言で見えた人類に仇なす未来の阻止。

本当はこんな仕事、陽光か火滅辺りがやってくれば良いんだけど、エルフ国との戦争の兼ね合いで人が足りないので仕方ない。

やり方は私に一任すると言われたので好きにやらせてもらおうつもり。

内容は単純、『カツツエ平原に現れる大規模アンデッド群の討滅』だ。漆黒聖典を派遣するという事は予測される被害規模は相当なんだろう。

スレイン法国はこんな風に秘密裏に部隊を派遣して誰にも悟られないように人類の繁栄を手助けしている。今回もそう、カツツエ平原から現れるアンデッドは強力だ。帝国の軍隊だけだと退けられはしても大きな被害が出るかもしれない。けれど法国と帝国は国交はあるものの友好国でもないので表立って救援になんて向かえない、向こうからしても恩を売りに来たと思われるから。野心の強い今代の皇帝なら尚更に。

だから一般人になりすました私達が影からサポートしてやって危機を乗り越える。

まあレイラちゃんの方は本当に帝都観光が目的で来たみたいだけどこの際なので手伝ってもらおうことにした。あの子の性格上断る事なんてないだろうし、私も樂できるから。

「それに、ねえ？」

貴女専用の撃杖も試験運用に丁度いい事ですしい。

うっふふふ…明日を楽しみにしてなさいな。盛大な花火が上がるますわよ！」

にたあつと笑うレイラちゃん。
《無限魔力》の異名を持つ私専用の撃杖ねえ…一体どんな代物なんだろう。

そもそも《撃杖》の構想を聞いた時は半信半疑で正気かコイツって思ったけどまさか本当に完成させるとは…これ業界がひっくり返るレベルのマジックアイテムだよ？

無詠唱魔法なんて一昔前までは鼻で笑われる夢物語だったってのに、レイラちゃんは何の気なしにやってのけちゃうんだから…

「ワーカーは誰を雇うつもり？」

事前の打ち合わせじゃ『ヘビーマツシャー』か『竜狩り』のおじいちゃん達が候補なんだっけ。」

「そう思ってたんですが、先程ロビーに降りた時にフルーダ様の高弟の方にお会いしまして。」

彼女の推薦もあつて『フォーサイト』に発注しています、返答は明日の朝までお預けですわ。」

フォーサイト：たしか4人組のワーカーでバランスも取れてて実力もそこそこ、半森妖精ハイフェルフの射手が居るって諜報部の情報にあつたな。私たちスレイン法国出身だし、余計な諍いが起きなきゃ良いけど。

レイラちゃん曰く大人数で向かってても目立つので少数精鋭で平原に向かいたいそうだし、そっちのが動きやすいのは一理ある。

「アンデッド群はどのくらいの規模なのか不明なのがネックですわねえ、《無限魔力》あなを駆り出すあたり上層部は相当焦ってるみたいですけど。」

「気になつて出発前に《占星千里》ちゃんに直接聞いたんだけどサツパリよ、あの子が言うに霧の中に蠢く無数のアンデッドの群れが見えたんだって。」

カツツエ平原なら自然発生の説もあるけど私が思うに原因は多分、最近活発化してる『ズーラーノーン』の仕業なんじゃないかな。」

『ズーラーノーン』、アンデッドを使い騒動を起こす傍迷惑な秘密結社。

下部組織なんかも枝分かれしてて、スレイン法国の諜報能力を持つてしても未だにトップの「盟主」とやらは見つかっていない。ウワサじゃそいつの高弟の一人に法国を脱走した元神官が在籍してるんだとか、とにかく面倒な連中だ。

つつても危険な組織なのは間違いないので聖典出動案件、普段は火滅か陽光が対処する。

法国的にはアンデッド使役は完全にクロなので見つけ次第裁判無し即死刑が決まつてる、選べるのは処刑法くらいよね。

カツツエ平原なら自然発生のふりして割と誤魔化せたりしちゃう

からなあ、可能性としては十分だ。

「ま、どちらにせよ全部片付けてしまえば問題ありませんわね！」

うん、この子はブレないなあ



「嫌よ私は、絶対受けないから。」

「まあそー言うなって、な？」

帝都某所、レイラ達も泊まっている宿屋『歌う林檎亭』。

かつて林檎の木から作った楽器を奏でる吟遊詩人達が集まった事が名の由来となったらしい、それなりに年季の入った宿だ。

そんな宿屋の1階に設けられた酒場、その一角である4人組が円卓の上に置かれた依頼書を囲みながら唸っていた。

「報酬は良いんですね、報酬は。」

そのガタイに似合わぬ優しい瞳と物腰柔らかな態度が目立つ大男、ロバーデイクに合わせるようにリーダーのヘツケランは頷く。

「それなんだよ！」

最近闘技場の報酬シケてるだろ？宿の支払いも危ねえしここらで儲けが必要なんだよ、分かってくれイミーナよう。」

「嫌よ！だって依頼主はあの法国の学者なのよ!？」

絶対ロクでもない裏が有るに決まってるわ！」

猛反対するイミーナの両耳は人より尖っており、ハーフェル半森妖精である事が伺える。

ご存知かもしれないが帝国は奴隷制度を良しとする国家だ。

そして市場で主に売買されるのはエルフ、しかもスレイン法国から輸入されるエルフが大部分を占めていた。なので同族のイミーナにとっては喜ばしいことではない。それに拍車をかけるようにスレイン出身のエルヤーが同職に居た。

彼の素行は皆の知るところ、奴隷のエルフをゴミのように扱い、往來で暴力を振るうその姿を何度見かけた事か。

それがトドメとなったのか、「スレイン法国」という単語に極端な嫌悪感を示すイミーナをなんとか説得しようとリーダーは口を回しているわけだ。

「ごめんなさい、良かれと思って私がこの依頼を持ってきたから…」

そんな中ひとりしゅんとする金髪の少女、彼女の名はアルシエ。

とある事情でワーカーをやっている彼女は第3位階までを習得した凄腕の魔法詠唱者である、昼は魔法学院の生徒として活動し、夜はワーカーとして二足のわらじを履いていた。

(学業の合間にワーカーするだなんておかしな事を言った私を受け入れてくれた人達にせめて羽振りの良い依頼を受けて欲しかっただけなのに…どうしてこんな事になっちゃうの?)

アルシエ・イーブ・リイル・フルト、それが彼女の本名だ。名から分かる通り貴族の娘である。

鮮血帝ジルクニフの行った無能貴族の大粛清、その煽りを受けたのが彼女の家だった。

地位はなくなり財産は没収された、残るものも少なくなったフルト家当主はまだ貴族という地位に固執して散財を続けている。膨れ上がっていく借金を見かねたアルシエは学業の合間にワーカーとしての活動を始め、報酬を借金返済にあてているのだ。

しかし父親の浪費癖は留まることを知らず、2重生活で心身共に疲弊しきっていた。

このままでは身体を壊してしまうと、彼女は泣く泣く学生としての立場を捨て活動をワーカー一本に絞ろうと考えている。

そんな彼女が残り少ない学生生活を送る中、師であるフルーダと

共に出会ったのが法国からやってきたというレインであった。

フルーダの高弟の一人、という立場で顔と名前を覚えられていたアルシエは偶然歌う林檎亭でレインと遭遇し、彼女がマジックアイテムの稼働実験の為に雇えるワーカーチームを探していると聞く。

依頼料も破格の待遇だったので自身が世話になっっているフォーサイトを推薦し、真つ先に依頼書を貰ったのだ。

「謝る必要はありませんよアルシエ。」

元はと言えば貴女がフルーダ翁の高弟だからこそ受けられた依頼です、そうでなければこのような高待遇の依頼など我々は知りもしなかった。」

自分のせいでメンバー内の不和を招いてしまったと後悔するアルシエにロバーデイクは優しく諭す。

しかしイミーナは一向に納得する気配がない、ため息を吐くヘツケランは彼女を安心させるため、アルシエに援護を求めた。

「そうだアルシエ！依頼主の学者さんと会ったんだよな？」

だったら人柄とか教えてくれよ、流石に文面だけ見て納得しろは無理があるからな。」

「分かった、えつと…」

女の人、外見は青い髪で瓶底メガネ、白髪の助手を連れてた。

お師匠様と魔法談義で盛り上がれるくらい魔法に詳しい、知識も相当なものだと思う。」

「ほう、それはすごい。聡明な方なのですね。」

「マジックアイテムも開発してるって言ってた。」

実際に使わせてもらったし、性能も抜群。明日の依頼もそのアイテム達の使用実験なんだと思う。」

「そのアイテムとやらの詳しい情報は？」

「依頼を了承してくれたら説明するって言われた、一応国の守秘義務があるからって。」

「フルーダ翁と渡り合える才女であるなら背後に法国がいてもおかしくはありませんね。」

貴女の「眼」にはどう映りましたか？」

「魔力量はフルルダ様より少し下で、本人は第6位階の魔法が詠唱出来ると言ってた。」

「だ、第6位階!?それはそれは…」

あのフルルダですら至るまでにその身で寿命を伸ばしに伸ばし、長きに渡り生きてきたうえで習得した魔法を若い身でありながら既に会得しているという事実にはロバーデイクは驚愕を隠せない。

「彼女の異能力が影響しているって言ってたけど詳しい事は分からない。」

「そんでよ、アルシエから見てどう思ったんだ?魔法云々じゃなくってさ。」

「…優しそうな人だった、お師匠様みたいに一旦熱が入ると止まらなくなるみたいだけど。」

それと説明も上手で、法国では教授をしているんだって。

人当たりも良いし、正直同じ法国出身でもエルヤーとは全然違う。」

「ぬう…」

アルシエの言葉に嘘はない。

押し黙るイミーナ、その姿を見かねたのか今度はロバーデイクから更に援護射撃が入る。

「そう言えば、帝都中央の噴水広場が氷漬けになったのを知っていますか?」

「ああ知ってる知ってる、ぶん殴られたエルヤーが見事に冷凍保存されてる奴な。」

誰がやったか知らねえがオツな事してくれるぜ。」

“氷漬けのエルヤー事件”は瞬く間に市井に広まり、1日と経たずワーカー達の間では今や知らぬ者は居ないほどの知名度を誇る。その情けない姿をひと目見ようと帝都中から人がやって来て新たな観光名所と呼ばれるほどだ。

正直凍る前より人気なんじゃね?と皮肉ったのは誰だったか。実際その通りなのだから困る。

「その事件が発覚したのは今朝がただったのですが、前日の夕暮れ時に噴水前でエルヤーと言い争いをする女性二人組が目撃されたよう

なんです。」

「つまりエルヤーを凍らせたのも教授達だと?」

「ええ、だと私は考えています。」

目撃者から話を聞くとどうやらエルヤーが連れていた奴隷が原因で言い争いになり事に至ったと。

その後エルフ達の奴隷契約書に人数分の金銭を支払い、置いておいたそうです。わざわざエルヤーの血判までとって。

この状況、2人がエルフ達を解放したのだと判断できませんか?

確かにエルヤーは酷い奴ですが、同郷出身だからと言って全員彼と同じとは限りませんよイミーナ。」

さすがはチーム内で一番弁の立つロバーデイク、割と言ってることは正論なのでイミーナも「ぐぬぬ…」と唸りお口がミツ〇イーみたいになっている。

「…スレインの学者サマがすげえ奴って事は分かった、とりあえず明日直接会ってみて判断するしかねえよ。」

な、イミーナ? 会ってみるだけだから。」

それにせつかくアルシエが持って来た美味しい仕事だ、フイにするのも勿体ねえしな。

と落とし所を決め、話を切り上げるように酒を注文し始めたヘツケラン。イミーナはまだ納得はしていないようだが思うところあるのだろうかさつきよりは大人しくなったようだ。残った時間にエルヤーへの愚痴を酒の肴にしながらフォーサイトの夜は更けていく。

「そーいやカツツエ平原って言えばよ、最近行方不明者が多発してるらしいな。大方大穴狙いの馬鹿共が無茶したんだろうがさ。」

「アンデッドを駆除し申請すれば帝国も報奨金を出してくれますからね。」

欲を搔いて平原深くにまで潜り、後戻り出来なくなってしまいそのまま…というのはよくある話ですし。我々も気を引き締めなけれ

ば。」



レイラ滞在3日目、朝

『歌う林檎亭』

朝、といつてももうそろそろ太陽は真上に差し掛かり、昼飯が近いと胃袋が鳴りだす時間帯。

日中は酒場ではなくカフェとして営業している一階広間の隅で、昨日と同じ席に座り依頼人と対峙するフォーサイトの面々が居た。

アルシエの情報通り青い髪に取っつけたような瓶底メガネ、小綺麗な身なりと装いから深い教養を感じさせる。

「初めまして、フォーサイトの皆様。

スレイン法国より参りました、レイン・エルリク・ホーエンウッドです。

来て頂けたということは依頼の件は受けて頂けるといふ事で宜しいですね？」

レインの後ろには助手のケレスが、向かい合うヘツケランの後ろにはアルシエ、イミーナ、ロバーデイクが控えている。

「ちよいと待ってくれや、先生。

俺たちも受けたいのは山々だか依頼内容が不明瞭過ぎてな、アイテムの実験以外何にも分からねえんじやどうしても不安になっちゃう。

こちららパーティーの命背負ってるんだ、報酬が美味しいのは良いが詳しい話を聞いてから判断したい。」

少し高圧的に、そう問う。

この手の羽振りの良い依頼には大抵裏がある、昨日イミーナが喚いていたように。金も欲しいが最優先すべきは仲間の命だ、慎重になるに越したことはない。

頭のお堅いスレイン法国のお偉いさんなら少しでも機嫌を損なえば憤慨してこの話をご破算になる筈だ、そうなりや「残念だった」で済む。とハツケランの僅かばかりの打算であった。

しかしスレインはにこやかな笑顔を崩さない。

「それもそうですね、命を掛けて頂くのに些か礼儀を欠いております。申し訳ございません。

今回貴方がたに使っていただきたいのはこちらのマジックアイテムです。」

と、魔法のトランクケースから出てきた物が机の上に並べられていく。

「…なにそれ、弓?」

「こつちはメイスのような…他にも色々ある。」

「これらは現在開発中のマジックアイテムでして、フォーサイトの皆様には稼働実験をお手伝いしてもらいたいです。」

場所はカツツエ平原、アンデット蔓延るかの地なら実験的は沢山居るからと彼女は語る。

「何故それをわざわざ帝国のワーカーにやらせる必要が? 大事な実験なら国内で済ませちまえば良いだろう。」

「このアイテム群を販売するに当たって想定する客層は冒険者、もしくはワーカーだからです。

命の危険と隣合わせの冒険者達の生存率を僅かでも上げるため、私は法国でマジックアイテムの研究をしています。

昨日アルシエさんにもお見せした《撃杖》もその一つですね。

なるべく実践に近い形でデータが欲しかったので、帝国ワーカーの皆様にご協力を仰ぐ形となりました。」

実際のところ、ワーカーとしての質は各国と見比べても帝国が随一だろう。汚い仕事も行うのにあのジルクニフから見逃されている理由は一重に彼等の仕事のレベルが高いからだ。必要悪としての側面もある。

仕事人としての力量を認められているからこそスレインは帝国のワーカーに接触した。

「うーん…」

「どうだお前ら、この依頼。」

正直なところ、この女に裏は無さそうだとヘツケランは判断したが最終確認の意味も込めてメンバーに参加の是非を問う。

「私は大丈夫、撃杖ももつと撃つてみたいし…」

この依頼を持ってきたアルシエは勿論肯定派。

「我々の実力を鑑みて依頼してくれたのならば、それに応えるしかありませんね。」

ロバーデイクもそれに首肯する。

最後まで反対していたイミーナは…

「ねえセンセ、ひとつ聞かせて。」

「はい?」

「私は半森妖精よ。」

ここで大胆なカミングアウトだ。スレイン法国はエルフを奴隷にまで貶める人間至上主義国家、普通なら何かしら嫌な顔のひとつでもされる所だが。

「ええ、見れば分かります。」

レインの笑顔は全く動じなかった。

それが気に食わないのかイミーナは更にまくしたてる。

「ツ人間至上主義の法国サマがエルフ風情に金払ってまで実験頼む必要があるのかって言うてんの。」

「??」

必要ならエルフだろうとドワーフだろうと雇いますが…

ああ、そういう事ですか。

イミーナさんは法国にどんな宗教があるかご存知ですか?」

「そりやアレでしょ、六大神だかなんだか…」

「はい、その通りです。」

ですが六大神信仰にも分派が別れておりまして、国民の大多数は人間至上主義のアーラ教徒なのですが私はスルシャーナ教を信仰させておいておられます。」

スルシャーナ教。

命あるものに安らぎを与え、同時に久遠の絶望を与えるとされる六大神が一柱の名を冠した分派である。

他の神達と違い異形であったかの神は人類以外にも寛容で、そんな彼の意を継ぐ信徒たちは『志を同じくするならば亜人種、異形種とも分け隔てなく接し、救いの手を伸ばすべきである』という思想が強い。本国でもスルシャーナ教徒達はエルフ奴隷の売買について反対運動を行っており、戦争の早期終結を願っていた。勿論その旗頭となっているのはあのなんちゃってお嬢様である。

「なんと、法国にはそのような教えのある分派が存在していたのですね。」

「アーラ教に比べると圧倒的に信者が少ないので他国にあまり知られていないのも無理はありません、法国は秘密主義ですし。」

私の故郷の領主様が熱心なスルシャーナ教徒でして、奴隷として売買されていたエルフ達をお金で解放して領地に住まわせたり、領内では賃金を払って正式に従業員として雇い入れたりしているんです。私も幼少の頃に遊んでもらったりしていました、なので偏見とかはありません…」

他にもドワーフや霜の竜の皆様も同じ領内に暮らしていますよ。と笑顔を示すレインにイミーナは顔を顰めたが、やがて諦めたように息を吐く。

「はあく…分かった、分かったわよ。変に考えてた私が馬鹿みたいじゃない。」

ヘツケランの好きにしたら？

ただし！アンタの報酬の一割は私に寄越しなさい。」

「なにイ!? そりゃないぜイミーナようー!」

夫婦漫才を始めた2人を置いて、代わりにロバーデイクが話を進めその日の午後から出発というという話で纏まった。



『もう止めてよお父さん！』

ウチにそんな高価なものを買うお金なんてないでしょ、何処から借金してきたの!?!』

『ええい煩いぞアルシエ！』

これはあの憎き鮮血帝に我がフルト家が屈していない姿を見せつけるための必要経費だ！

そもそもあやつが肅清など起こさなければこんな事にはならなかった：悪いのは全部あの男なのだ！』

『何言ってるの：？命が助かっただけでも良かったじゃない。』

この家の家賃だってカツカツだし、魔法学院の学費も今月分まだ払えてないんだよ？ジャイムス達のお給料もまだなのになに：：』

『家賃やお前の養育費は兎も角、執事共の給料など後回しでいいだろう。』

栄光あるフルト家で働かせてやってるだけ有難いと思え、平民共め。』

『：ツ!!なんて事言うの！』

もう知らない！ジャイムス達のお給料は私が何とかする！お父さんはもう要らない！買い物も止めてよ、このままじゃ本当に一文無しになっちゃうんだから！』

『待てアルシエ、何処へ行く！』

本当に本当に、嫌になる。

私の家は貴族の家系、だった。

新皇帝ジルクニフの行った貴族の大肅清、「無能な者から切り捨てる」を地で行く彼の政策の煽りを真つ先に受けたのがフルト家だ。

たとえば貴族だろうと能力のない人間は容易にその地位を剥奪され、身を落とす。実力主義の彼に着いて来れない者は容赦なく置いていかれた。

彼の政策が正解だったのは今の帝国の様子を見れば明らかだろう、『膿』が切除され市場に正しくお金が回るようになり、歴代最高と言っ

ていいほど今の帝国は繁栄期を迎えている。

それに取り残された哀れな没落貴族が私の父だ。母も父の横暴を諫めはするけれど、止めようとはしない。金持ちだった頃の感覚が忘れられないだろう、結局のところ父と同類なんだ。

プライドばかり無駄に高く、働いてもいなくせに大口を叩いて高価な壺や食器を買い漁り必死に虚栄を張り続ける父の姿に私は呆れ、自分の力で生きていくことを決めた。

それには双子の妹がいる、その子達をあのまま親の下に居させたらどんな未来が待っているか分からない。

幸いな事に私には魔法詠唱者としての才能があった。仕事を探していた折に、丁度魔力系魔法詠唱者を探していたヘツケラン達と出会ったのは正に運命だと思う。

ワーカーは命の危険が付き纏う職業だけど背に腹はかえられないし、それにもうすぐ学院には別れを告げてワーカー一筋になれる。

そんなとき、フォーサイトの集まりでやってきた『歌う林檎亭』のロビーである人と会って言葉を交わせたのは本当にラッキーだった。「カツツエ平原で試作マジックアイテム群の調査」という内容の仕事、提示された報酬の額、喉から手が出るほどお金の欲しかった私はつい身内のワーカーチームにその依頼を融通してもらおうよう頼み込んだ。

今回の依頼は破格の高待遇だ、この稼ぎがあれば延滞していたジャムス達使用人の給料も賄えるし、それを払ってもまだ貯金する余裕が生まれる。

この依頼を足がかりにお金を貯めていつか妹達を…クーデとウレイを連れて家を出よう、2人には私のような苦勞をして欲しくはないから…

依頼主であるレインさんとその助手のケレスさんを加え、ワーカー

チーム『フォーサイト』はカツツエ平原の入口までやってきた。

道中の馬車で借り受けたマジックアイテムの詳しい取扱い法を聞いたのだけど、どれもルーン技術を利用して帝国産のアイテムでは足下にも及ばない高性能武器。

《撃杖》もそうだけどこの人の頭の中は一体どうなってるんだろう：ちよつと怖くなってきた。

「さて、それではお願いしますね。」

私とケレスはデータ取りに専念致しますので最低限のカバーだけ行います。

馴染みの武器とは少し異なりますが皆様の連携なら問題、ありませんよね？」

「嫌味な言い方してくれるじゃないセンセ。」

「このような武器を渡された手前、活躍しない訳にはいきません。」

挑発的に笑うイミーナといつもととは違い好戦的なロバーデイクの2人が持つのは彼女から手渡された武器。

イミーナの持つ弓は普段使う木製のものとは違い鉄製のもの、引き絞る糸にも魔法が掛けてあるらしくより頑丈かつ柔軟な作りで矢の威力を底上げする仕様になっているらしい。その分引き絞るのに力が必要になるのだとか。

そしてロバーデイクにはその身ほどもある高さのタワーシールドとメイス。タワーシールドには重さを無くすルーン魔法が掛けられているから取り回しも効くし、メイスには内部に黄のルーン石が内蔵されていて魔力に反応して《地裂震》^{アースクエイク}の魔法を発動するらしい。

昨日今日とルーン技術について触れて分かったこと。

ルーン石は撃杖による『変換』、魔力の通り道になる他にも「石に対応した属性の魔法を記憶させる」機能と「それぞれの属性の魔力を蓄積する」機能が備わっているらしい。

ロバーデイクの持つメイスのように、内蔵されたルーン石に魔法を覚え込ませて魔力を流すだけで人の代わりに石が魔法を発動するから、これによって本来信仰系魔法しか使えない彼でも間接的に《地裂震》が使用可能になる。口頭による魔法名の発音が必要だそうだけ

ど。

魔力の蓄積は文字通りルーン石の中にそれぞれの属性セの魔力を蓄積チャージできる。そして対応したルーンの施された武器に乗せることによってそれぞれの属性を付与するようだ。イミーナの弓にはそれが施されている。

古くからあるが今では位階魔法の発達によって廃れ、帝国の誰もが見向きもしなかったルーン、法国の学者様が見つけ出したその本領は帝国魔法学院に衝撃を与えた。一部の気の早い学生達は既に過去の文献を漁りまくって図書館にあるルーン関係の書物は空っぽになっているらしい。お師匠様も痛む腰を引き摺りながら図書館に向かうとして四騎士の方々が必死に引き止めているのを遠巻きに見た。

私も、もうすぐ居なくなるとはいえ無限の可能性を秘めたルーンの力にいち魔法学生として興味が絶えない。

それにルーン石に込められた魔力つて普段使つてる位階魔法の魔力とどこか違うのよね。

師と同じ、魔力の「質」を見る私の異能力だからこそ分かる微妙な差異に違和感を覚えた。

「きよーじゅ、前方30メートル先。

スケルトン5、動死体6、骨ボーンの禿鷲3。」

探知魔法を使って周囲を探る助手のケレスさんの報告で思考は中断し私達は臨戦態勢に入る。無言でレイン教授とヘツケランが頷きあつて、イミーナの肩に手をかけた。

「そんじゃ始めますかね。

イミーナ、頼む！」

「りよー…かいッ!!」

矢を番え、キリキリと張り詰める音の後にイミーナから発せられた矢の軌跡には青白い電光が走っていた。熟練の野伏レンジャーの手によって放たれた一撃はこちらに気づかずヨタヨタと徘徊するゾンビの頭に命中、その直後に光が迸り黒焦げになりながらガクガクと痙攣したのを最後にそいつは倒れ動かなくなった。

撃った本人すら啞然とするなか、教授は凄く嬉しそうにニコニコしている。

「…わーお。」

「うんうん、理論通りです！」

イミーナさん、矢を放った感想は如何ですか？」

「威力は申し分無し、でもその分張りが堅くて力が要るわね。連射するととなるとキツイかも。」

それと今の青白い光は？雷属性を帯びてたよね。」

「それは弓柄部分に嵌め込まれているルーン石に込められた魔力が発せられる矢に属性を付与しているからです。エンチャントの魔法だと思っして下さい。」

石の魔力が尽きるまで付与は続きますので、理論上50発は撃てるはずですよ！」

教授はすごく嬉しそう……ですよ？」

「ん……オホン。それではイミーナさん、少々弓を拝借……」

これでよし、先程より弦が引きやすいはずですよ。」

あ、アルシエさんは禿鷲の処理をお願いしますね。ケレス、彼女のサポートと記録をお願いします。」

「あーい。」

「了解。」

私が持つのはもちろん撃杖だ、事前にレイン教授から渡された4色のルーン石のうち翠色（雷属性）をセットして射撃体勢を取る。ちゃんと片膝を着いて、反動を流せるように。師の犠牲と教訓を無駄にしてはいけない（戒め）

骨の禿鷲に照準を合わせ、引き金を引く。

放った《雷撃》^{ライトニング}は一直線に飛んでる禿鷲に直撃して、黒焦げになった塊が地面に落ちた。

続けざまにルーン石を叩くハンマーとレバーを引いて戻し、2匹目へ。

悲鳴を上げる暇もなく2匹目も炭に変わった。

さらにもう一度引き戻し照準、最後の1匹を墮とした。

…なんだろ、この動作凄く楽しい。

しつくりくるつていうか、馴染むつていうか…私でも魔法を無詠唱で撃つて高揚しているのかも。

「ヒュウ、鴨撃ちたアこの事だな。やるじゃねえのアルシエ。」

「なんか凄くサマになつてたわね。」

パチパチと拍手するヘツケランとイミーナ、ロバーデイクも「普段よりイキイキとしていましたよ」つて言われた。なんかちよつと恥ずかしい…

「ちよつと見せてね…」

石の魔力純度は良好、ハンマーによるインパクト時の損傷もなし。耐久値に若干不安が残るけど、それ以外は概ね理論通りに発動してるよ。」

「なら撃杖の方は耐久テストだけですな、アルシエさんにはこのままバンバン撃ちまくつて貰いましょう。」

魔力管理は怠らないようお気を付けて。」

「分かりました、レイン教授。」

そう、撃杖は無詠唱で魔法を発動出来てしまうから魔力管理には十分注意が必要だ。

夢中になつて撃ちまくつた挙句魔力切れで動けなくなりましたじゃ笑い話にもならない、実際昨日も試し撃ちに熱中してた高弟の何人かは気付かないうちに魔力が尽きて動けなくなつていたし。

次にレイン教授はヘツケランとロバーデイクに指示を出し、近接戦闘にて彼等に渡した武器の性能を測るようだ。

ロバーデイクの突き立てたメイスから放たれる《地裂震》が地面を隆起させゾンビ達を分断し、半分をヘツケランが、もう半分をイミーナが処理していく。

ヘツケランに渡されたのは双剣でイミーナのように武器に属性が付与されるタイプのもの、それぞれに火属性と聖属性のルーン石が嵌め込まれているらしい。どちらもゾンビやスケルトンの弱点なのでまるでバタを切るかのように刃が通る。

「ん…確かに威力は申し分ねえが、取り回しがなあ。」

この出っ張ってるのが気になっちゃまう、ルーン石つてのも剥き出しで危ねえんじやねえの？」

「う…それはそうなのですが。」

剣は幾らか小型化出来てもルーン石を現状それ以上小さくできないので、細剣や双剣でも必然的にそれなりの大きさになってしまうんですね。

もつと術式を圧縮してコンパクトに収め、小型化させるのが今後の課題になりそう…

ヘツケラン様、今度は此方の両手剣フロードソードをどうぞ。」

「はいよつと。」

で、コイツにや何の属性が付与されてんの？」

「聖属性ですね。」

ですがまだ術式の構築が不安定で未完成な部分が多いのでお気を付けて、特に柄のルーン石にはあまり強い衝撃を与えないようお願い致します。爆発しますのです。」

「ぶつつ!?ば、爆発?!?!」

「因みに爆発すると…」

「ルーン石の中に蓄えられていたエネルギーが暴走して、衝撃波と一緒にに辺り一面吹き飛ばします。何度か実験もしましたので高確率でそうなるかと。」

人の半身くらい消し飛ばんじやないんですかね。」

「ヒエツ…」

「か、かなり危険なのですな。ルーン石というものは…」

「ええ、ですが得られる力は絶大です。ルーン石はエネルギーを溜め込む炉心の役割も果たしていますから。」

それに爆発に関してはもうそういうものと納得して頂きたいです。

かの六代神様の一柱も言っておられました、『自爆はロマン』と。」

「『物騒?!?!』」

「やっぱり法国って頭おかしいんじゃない(真顔)」

そんな会話を繰り返しながら私達は武器のデータを取りつつ、私達は平原の奥へと進んでいく。

かなり進んだ所で武装の点検も兼ねて小休止を挟む事になり、朽ちた建物の跡地らしき場所で休憩する事になった。

「きよーじゅ、撃杖の発射記録とルーン石内浸透魔力の毎分ごとに統計まとめた奴。はい。」

「ありがとうケレス。」

うんうん、ここまで実践的なデータが取れたのは初めて、大きな進歩ですよこれは！フォーサイトの皆様にも感謝しなければ！」

「そりゃ良かった、できりゃあその感謝は形で表してくれると嬉しいね。」

「もちろん、報酬には色を付けさせて貰いますね。」

カツツエ平原は昔からアンデッドモンスターが出没する危険地帯だ。弱いものはゾンビやスケルトンから、強いと死デスナイトの騎士なんかの伝説級のアンデッドが出現したという記録も残っているそう。

そんな場所が帝国領と隣り合わせにあるという事で、安心できない皇帝は軍を動員して警備を固め備えは万全、その口減らしに私達ワーカーにも国からの討伐依頼が入ったりする。

沢山のワーカーが何度も潜っているのだから当然ルートは開拓されており、出現率の低いエリアなんかも判明済みだ。霧が掛かってて視界は悪いけど深く潜り過ぎない限り迷うことはないだろう。

と、思っていたんだけど…

「ッ!？」

「な、何よコレ！」

「地面が…ッ」

地震、ロバーデイクの《地裂震》よりもっと大きな揺れだ！

まるで波みたいに：地面が蠢いているの!?

グラグラと立っていられないほど大きな揺れに思わず尻餅を着く私達。

するとモコリと大地が盛り上がり、フォーサイトと教授達が分断されてしまった。

明らかに不自然な地面の動き、狙い済ましたかのような地震の発生に嫌な予感のした私は思わずヘッケランに叫ぶ。

「リーダー！魔法で攻撃されてる！」

「分かってる！イミーナ、索敵は?!」

「……ツ駄目！少なくとも術者は私のスキルで発見できる距離に居ない！」

「3人とも此方へ、守ります！《地裂震》！」

ロバーダイクのメイスが光ると私たちを取り囲むように大地が壁のようにせり上がり、揺れから守ってくれている。

「レイン教授の教えが役に立って良かった。

予め自由度の高い魔法を込めて貰っていたようです。大地の魔法、イメージ次第でこのような事もできるんですね。中々に心強い。」

「ツ教授とケレスさんは!?!」

『は〜いこつちです〜!』

顔を上げると、頭の中に直接声がこだまする。

3人とも同時に顔を上げたからどうやら《伝達》の魔法を発動させたらしい。

グラントコントロール

彼女曰く《土流》の魔法で土を操作され、完全に分断されてしまったようだ、《飛行》で合流しようにも霧が深く視界が悪いうえに骨の禿鷲やもつと高位のモンスターが上空に跋扈している危険があるため断念。ここまで大規模な土流を行えるのはアンデッドの中でも高度な知能を有するエルダーリッチだろうとのこと。

『もしかしてこの土流を起こしたエルダーリッチを筆頭にアンデッドが集結しているのかも知れません。十分注意して下さい。』

だとするとこれは計画された襲撃…!?

私達は分断され追い込まれている事になる、アンデッド同士が自分

から徒党を組むなんて話は聞いたことが無いけど、奴らは群れで増えれば増えるほどより高位のアンデッドが産まれやすい。犯人のエルダーリッチはそれを見越して…

「ツマズイわねこれは…」

それに索敵担当のイミーナから聞くにどうやらこの騒ぎで周囲のアンデッドが集まってきてるのだそう。ぐずぐずしてはいられない。「数がヤバすぎ、30…50…もっと増えてる！今すぐ移動しないと囲まれるわ！」

「オイオイマジかよ、楽な依頼のはずだったのによ！」

『こうなったら実験も何ありません、皆さんは急いで来た道に戻って下さい！』

私達は別のルートで合流しますから！」

「クライアント放って帰れるかっての！」

『大丈夫、私達の心配は要りません！』

自衛手段くらい嗜んでますから…皆様こそ、戻ったら緊急時の武器の使用感についてみっちり聞かせて頂きますからね！」

「んな時までアンタは…ああもう分かったよ！」

フォーサイト！大急ぎで来た道戻るぞ！イミーナ先鋒、左右は口バーとアルシエで頼む、殿は俺が引き受けた！」

「了解！」

「リーダー!?本当に2人を置き去りにするの!?!」

「大丈夫だアルシエ、先生は第6位階の魔法詠唱者なんだろう?こんな所でくたばるタマじやねえさ。それに…これは俺の勘だが、やべえのはむしろ俺たちの方だろ。悠長に待って合流出来そうにねえんだよ。先生よオ、貰った武器使い潰すつもりでやるからな!文句は無しで頼むわ、死ぬんじやねえぞ！」

『ええ、行って!』

隔たれた壁を背にしてフォーサイトは走り出す、非力な私はリーダーの決定に着いて行くしかない。せめて二人の無事を祈りながら。

二人とも、どうか無事でいて…！

9 破滅フラグしかないワーカーチームと仕事してしまつた… 下

…目を覚ますとそこは知らない屋敷の庭園だった。

一緒に来た二人もキョロキョロと周りを見回しながら、戸惑いながらも杖は手放さないとところを見るとワーカーの端くれらしく警戒は怠っていないようだ。

あの軽薄な男に買われてから数年、私達は玩具のように扱われた。蹴られ殴られ、最初の頃はあの短小なモノで無理矢理抱かれる度、夜な夜な3人で肩を寄せあつて声を殺して泣いていた。戦争奴隷として売りに出された絶望と恐怖で心がぐちゃぐちゃになって、お互いの傷を舐めあつていないと壊れてしまいそうで…

でも後になって気付くんだ、壊れてしまつた方がよっぽど幸せだつたつて。

今となつてはもう抱かれることに何の抵抗心も抱かない。行為が終わるのをただ無心で待ち、エルヤーが癩癩を起こさないのを祈るだけ。3人の中で私が一番抱かれた回数が多かつたから、それなりに気に入つていたんだらうか。反吐が出る。

神官の職を修めていたのをこれほど後悔したこともなかつた、回復魔法なんて覚えていなければこうなる事もなかつたのになつて。

「綺麗なところ…」

思わず声に出してしまつた。

《転移》で飛ばされた先は綺麗に手入れの行き届いた庭園だった。何処の国かは分からない、どうすればいいかも分からないまま、私はあの人から渡された書状を握り締める。

『今から貴女達を転送します。』

向こうでメイドでも使用人でも誰でもいいから見つけて “これ” を渡して、そうすれば後の段取りはやってくれる。

…ごめんなさい、国の勝手で貴女達エルフをこんな目に合わせてしまつて。私が謝つたところでなんの慰めにもならないけれど、せめて手の届く範囲で出来ることをしたいの。

きつと貴女達にとつても悪い話ではない筈だから…』

なんで彼女はあんな悲しそうな顔で赤の他人だった私たちに謝つたんだろう、『悪い話じゃない』と言つたのはどういう事だろう、雌の身体以外なんの価値もない奴隷の私にそんな事を言つたつてどうしようもないのに。

色んな疑問が今も頭の中をぐるぐると回つてる。

「もし、貴女達。」

突然呼び掛けられ反射で顔を上げた。

綺麗なメイドさんだった、新雪のように真っ白な白髪をシニヨンで纏めていて、落ち着いて凜とした佇まい。髪の間から見える長耳で彼女の種族が私達と同じエルフなのだと思ふ。

「此処は私有地ですよ。部外者は立ち入り禁止、早々に立ち去りなさい。」

警告は一度しか行いません。」

「ひっ!? す、すみません…」

しまった、いつもの癖で思わず謝つてしまった。

怯える私達に最初は冷たい視線を向けていた彼女だったけど、私の握っている書状に目をつけて寄越すよう促された。

暫くそれを読み、見比べるように私達と視線を行ったり来たりさせながら彼女は立ち上がり、私たちに手を伸ばす。

「成程、お嬢様のお客様でしたか。」

此処に飛ばされたという事は《転移》ですね? 先程の無礼をお許しください。

さ、此方へどうぞ。

旦那様にお目通りする前にお召し物を準備致しますのでその間に皆様には治療と、身体を綺麗にして頂きます。」

多分《伝言》の魔法を使っているんだろう、屋敷の中から次々と同じメイド服を着込んだ使用人の人達がぞろぞろとやって来て、私達を

介抱してくれた。

驚いたのはそのメイド達が皆エルフだった点だ。

もしかして本当にエルフの国に…ツ!?ということとは身体を綺麗にするって…

「その顔は何か勘違いしていらっしやいますね？」

ご安心下さい、此処はあのクソツタレなエルフ国ではありませんし、貴女の想像しているような事は決して起きませんよ。」

困ったように笑うメイドさんが気まずくて思わず目を逸らしてしまった。じゃあなんなんだ、本当に分からない。

「ようこそローグレンツへ、貴女達を歓迎致します。」

戸惑いながらも私は彼女の手を取った。

つまらない奴隷人生だったけど、この手を取れば何かが変わる、そんな予感がして。



カツツエ平原。霧立ち込める幽原の墓所のド真ん中にて現在私と相棒は絶賛孤立中、途中までは順調にフォーサイトの皆様といたんですけれど…

突然の《土流》、分断される私達、何も起こらないはずが…というやつですわ。

完つ全に嵌められましたわね！

ええそれはもう物の見事に！

まあ分断されたのも丁度良かったです、仕事になる場合隠密かつ迅速に片付けないといけないので目撃者が居ると困るんですよ。

他の聖典なら任務後に事故を装ってこっそり始末しちゃったりするんですが勿論私はそんな事故致しませんよ？でも今回の分断はちよつとラツキーって思ってます。

フォーサイトにははぐらかして説明しましたが下手人はエルダーリッチなんかではありません、間違いなく人間の術者でしょう。《マキシマイズ最大化》と《ワイデン範囲拡大化》を付与されて巨大化した《土流》なんてエルダーリッチ如きが打って堪えますか。連中、できて《火球》が限界ですからね。もしかするとナイトリッチかそれ以上のアンデッドが産まれた可能性も有るのですが私の勘が「NO」と言ってますので、その線は無し。

ただの勘と侮るなかれ、ことアンデッドと悪魔に関して私の勘はよく当たりますのよ？なにせ半分はお母様の血が混じっているのですから。

「《無限魔力》ちゃん、敵反応は？」

「今やってる…」

あー、コレ〃当たり〃だね。

スケルトン・ウォリアー

スケルトン・ウォリアー 骸骨戦士

レッドスケルトン・ウォリアー

スケルトン・ライダー 骸骨騎兵

グール 食屍鬼

ガースト 腐肉漁り

崩壊した死体ほか多数。

何これ、アンデッドの博覧会かよ…数は500を超えてる。」

「霧の中で相当溜め込んでいたんですかねえ。」

何年もコソコソとアンデッドを集めて何をする気かは知りませんが…」

死した人間の魂は肉体から離れ、浄土へ旅立つ。現実に残された身体は本来なら弔われ、灰にするなりして無くしてしまうのが最善手ですが蘇生魔法の存在するこの世界には復活の手段として遺体は残す習慣があります。まあレベルが低かったり損傷が激しいと復活できず結局灰になる訳ですが、大体的場合は土葬で弔うのです。

それに地域によつては死体処理も大雑把で、特に毎年王国と帝国が戦争して死者を出してるこの平原はアンデッドの温床ですの。

それにつけ込んでアンデッドを増やし、徒いたずらに死者を愚弄する不屈き者は…

「本気赦せませんわよねえ…」

「ツ…許さないのは分かったから、どーすんの？」

ンなもん決まっていますわ

「派手にブチ壊すに決まってるでしょうが。」

トランクケースからぬるりと取り出した、丸太ほどある大きな長方形の箱のような撃杖。9つの発射口の並んだそれを《無限魔力》ちゃんに放り投げると、危なげながら彼女は受け取りました。

「使う魔法は《^{ナバーム}焼夷》でお願いします、貴女なら無限に撃てるでしょう？連続発動する度に一々喋るのも面倒ですものね。」

「そりやま、そうね。」

……待つて、これ担いで撃たせるつもり？」

「ルーンで軽くしてるので見た目ほど重くありませんよ？」

使い方もいつもの撃杖と変わりません。ただレバーを戻す必要が無いのと、リミッターを外してあるのでトリガーを引いている間は無制限に魔法が飛び出す仕様になっています。普通の術者なら秒で魔力が枯渇して死にますが、貴女なら平気でしよう？」

「ホントだ重くない…」

なるほど、アタシ専用になるわけだ。」

その名の通り、条件さえ整えば無限に魔法を発動できる彼女ならこのじゃじゃ馬も使いこなせる事でしょう。

小物は焼き払って貰うとして、私は大物を仕留めないといけませんからね。

「さあ、急ぎで片付けますわよ。さっさとフォーサイトの方々と合流しなくては。」



「いつも通り優雅に華麗にスマートに、人類を救うとしましょうか。ちよつと力加減に難が生じるかもですが。」

決して旅行を邪魔されたから怒ってる訳ではありませんよ。ええ、決つつつしてせつかくの休日を台無しにされて怒ってるんじゃないやありませんから！」

「ぶちぶちにキレ散らかしてんじやん…」



彼は優秀な魔法詠唱者だった。

魔法学院をその年主席で卒業したし、勤め先でも成績優秀。そしてその敬虔な信仰心から何れ神官長の座に就くのも時間の問題だともされていた。

美しい妻と最愛の子をもうけ、全てが順風満帆に見えたのだ。

傍から見れば

その男は物心着いた時から人を人として見れなくなっていた。

原因は分からない。家庭環境のせいではなく、育ちが悪い訳でもなくて、何一つ不自由の無い生活だった筈なのに。

彼は端から壊れていたのだ。

自分を育てる親を血と糞尿の詰まった肉袋としか認識していなかった、隣に侍る妻とよく泣く我が子は蠢くナニカにしか見れなかった。

それでも必死に取り繕って、『普通』を生きた。

が、ある時彼は天啓を得る。

友人に連れられ訪れた怪しい集会で、一冊の本を渡された。出版元の名は『ブローラーノーン』。

まだその頃は弱小カルトサークル程度だったその組織に彼は感銘を受け、入信する事に。

集会の度、盟主を名乗る顔も見えないボロボロのフードの男から囁かれる。

ありのままの自分でいいのだと

殻を破り、自分を解放しろと

周りに合わせる必要などないと

その言葉に導かれるまま、最終的に彼は“弾けた”

張り詰めた糸が千切れるように、あるいは膨らみきった風船が針一本で弾けるように。思うまま全てを出し切った。

土の聖典に所属していた彼は腕力こそ無いが地属性魔法の腕前はピカイチだ、そして誰にも言えないが死霊魔術にも適正があった。

極めつけはその異能力、『アンデッドを服従させる』というシンプルかつ単純なその力も真価を発揮し始める。

あるとき彼は唐突に、妻と子供を殺しアンデッドに変えた。そうする事で初めて2人を愛する事が出来た自分に気付く。

愛のカタチに生きている必要など無い、寧ろ死んだ後ならいつそう深い愛を味わえる。

世界が違えばその性癖はこう呼ばれていた事だろう。

ネクロファイリア
死体性愛者と

「死にこそ真実の愛は宿る」そう信じて疑わない彼は『盟主』に導かれるまま両親を殺し、同僚を殺し、果ては見ず知らずの者にまで独りよがりな死を振り撒いたのだ。

国を追われ、ズーラーノーンに身を置くようになってからもブレーキの壊れた彼は愛を施し続ける。

しかし我等を追う者達も一筋縄ではいかない、法国の度重なる捜索により危機を察知したズーラーノーンは表舞台から姿を消した。盟主はお隠れになり他の高弟達も世界中に散らばって各々身を隠す事となる、今は雌伏の時だ。

そして自分も。

あと数ヶ月、死体蔓延るカツエ平原で身を隠し、帝国を覆い尽くせるほどの戦力を蓄える事ができたなら『盟主』にこの国を捧げよう。

最近起きているワーカーチーム失踪事件の真相、それは彼が原因だ。

より強いアンデッドを生み出すにはより強い個体が必要だった、なので定期的にカツエ平原にアンデッド狩りにやってくるワーカーを狙い影から襲う。

アンデッド蔓延るこの地は自分にとって庭のようなもの、まだ最深处まで到達した事は無いがそれもより強力なアンデッドを作り出し従えさせれば踏破も夢ではない。

そう本気で考えて、いつものように迷い込んだ哀れな羊を迎えてやろうと探知魔法を掛けながらお得意の土魔法で分断させ、集めたアンデッド達をけしにかけて各個撃破を狙おうと準備を整えていたところ。

唐突に天に向かって巨大な火柱がぶち上がった

ぽかん、と意識が抜け落ちそうになるのを後からやってきた猛烈な熱と風によって現実に引き戻される。

それだけではない、息つく暇もなく大量の火柱がカツツエ平原の静寂をかき消すようにそれはもうどっかんどっかん上がりまくっていた。それが《焼夷》の魔法だと理解するまで数秒要したが自分の知っている《焼夷》はこんなに連発できるものではない。しかもこれは非常に近い存在しか唱える事を赦されぬ第7位階の魔法、自分も齧った程度の知識しかないがそんなじよそこらのワーカー達が放つものとはワケが違った。

なんて考えている間に今まで集めに集めたアンデッド達は《焼夷》の文字通り絨毯爆撃に見舞われ火だるまになっていき、既にその数を半分にまで減らしている。まさに理不尽なまでの暴力、ふと彼の頭に追っ手の可能性が頭をよぎる。

嘗て所属した組織の内部にて、神の意向に逆らう裏切り者を始末する特殊部隊の存在を。

もしそれが自分へ差し向けられているとしたら…？

明らかな異変を察知した彼は急いで踵かかとを返し隠れ家へ戻ろうと試みた。

「何処へ行くこうなのかね。」

その恐ろしくも美しい声音に思わず脚が止まる。

振り向けば瓶底メガネが印象的な青髪の女が一人、自分の目の前に腕を組み仁王立ちしていた。

アンデッド蔓延るこの地において場違いなほど軽装備、明らかなイレギュラー、一瞬で彼はこの女が追っ手なのだど悟る。

変な喋り方だな、とは思ったが言葉には出さなかった。

「オホンツ……きげんよう、良い天気ですね。」

墓場のクソみたいな空気吸ってるせいで気分は最悪ですけど。」

「法国の手の者か……」

「あら、自覚がありましたの？」

そうそう追っ手ですよ追っ手、一応聞きますけど貴方こんな所で何をしているのかしら？

ゾンビ使つて酪農でも始めるおつもり？」

「ハッ！お前には分からんだろう、この行為の崇高さが。」

「ええまあ、理解したくはありませんね。」

こんな薄汚い場所に引きこもつてやる事なんてたかが知れてますもの。

なので、全部踏み潰しに来ました。

ねえ、ズーラノーシ幹部：法国の裏切り者さん？」

「…殺れッ!!」

にやにやと笑う女、塞がれた退路は言外に「お前を逃がす気はないぞ」と語っているようなもの。

もはや問答など意味を成さない、命令を下した瞬間背後から巨大な拳がレインを横殴りにした。

ブラッドミート・ハルク
血肉の大男、全身筋繊維むき出しの筋肉の塊が彼女の脇腹を殴りつける。

この不意打ちで何人ものワーカーを葬ってきた、無防備なまま受ければ人の骨など簡単に砕き割れる一撃が女へ直撃、巻き上がる戦塵に勝利を確信し、彼女の死体をどんなアンデッドに変えてやろうかとフードの下で下卑た笑みを浮かべる男だったが、生憎と今回は相手が悪い。

「…お行儀が悪くつてよ?」

血肉の大男の振り抜いた拳、指一本一本が大人の拳ほどもある幅のそれを片手で驚掴みにして止めている。大男も剥き出しの筋肉がプルプルと震え、脚がめり込むほど力を入れているというのに。

「ばつ…馬鹿な!」

「嫌ですわ品のない。」

大男の拳をそのまま地面に押し付ける、衝撃でクレーターができた。驚愕する男をよそに腕に引っ張られて下がった頭を淑女の右脚が蹴り飛ばす。顔面にクリーンヒットした脚、縦に割られそうなほどの衝撃で吹き飛ばされた大男は何度も地面を砕きながら転がって動かなくなつた。当然、首から上は消し飛んだ。ハルクからデユラハンにジョブチェンジかな?

「切り裂きジャック、ジャック・ザ・リッパ、死の騎士!あの女を殺せ!」

次々に現れるアンデッドモンスター。

どちらもこの世界においては伝説に語られる程の高位アンデッドだ、そんな存在を彼が従えられるのはひとえに異能力の賜物である。そしてカツエ平原はどういう訳か高位のアンデッドが産まれやすい。それも彼の力に拍車を掛けていた。

雄叫びを上げる死の騎士、それに続いて奇声を発しながらいち早く此方へ飛び掛かろうとした切り裂きジャックが空中で突如動きを止める。本人も気付かぬうちに腹を貫いた《氷葬騎士槍》、レイラの異能力によって超絶強化され弾丸の如く飛び出したそれは瞬く間に死体を凍らせ爆散させる。既にレイラは撃杖を抜いていたのだ。

「すつトロいすわねえ、その距離で剣が銃に勝てると思いませんか?」
続けて突進してくる死の騎士から振り下ろされるフランベルジェを紙一重で躲し、ステップを踏みながら巨体の足下で踊るようにレイラはそのまま両手の撃杖を向け発動、《氷片散弾》アイシー・バックショットがタワーシールドに直撃する。強力なノックバック効果と多段ヒットで堪らず仰け反る死の騎士に追い打ちとばかりに何発も散弾を叩き込んだ。

起き上がる巨体に続けざま発砲、ノックバックで倒れ込み、起き上がるとまた発砲、ハメ技でタワーシールドは氷片によって無惨にも穴

だらけになり、フランベルジェでも受けきれなくなった死の騎士は遂に自身の《根性》効果が発動したところで地に伏せ、なんの感慨もなくその頭を踏み潰され消滅した。

あつけ無さすぎる、男も拍子抜けしてしまうほどにあっさりと三体の伝説級アンデッドは葬り去られてしまった。

「やっぱゾンビにはショットガンって相場が決まっていますのよね、前世おバイオ嗜んだ私に隙はなかった。」

「ばっ馬鹿なア！高位アンデッドが三体だぞ！

国すら相手取れる戦力がどうしてこんな…」

「どうしてって…私が国より強いからに決まってるでしょうが。」

「ツツ!!おのれエエツツ!!」

地面が盛り上がる。地が揺れ、割れた大地から巨大な骨の竜が遂に姿を現した。

これこそ彼の切り札、魔法攻撃の殆どを無効にするその巨軀はどんな障害をも蹂躪することができる。更に手ずから地属性魔法のサポートによって物理耐性を持つ土の鎧を着込んだ骨の竜はさながら要塞のよう。

「本当は帝国を潰す時の為に取っておきたかったが仕方ない、さあ骨の竜よ！存分に暴れ回るがいい！」

「……」

「ハハハハッ！」

恐怖で声も出ないか！

「なにこれ、くっだらねえですわ。」

「…なに？」

「正体不明って言うから、青褪めた乗り手^{ペイルライダー}、クラスを覚悟していたのに骨の竜に毛が生えた程度だなんて…もしかして《占星千里》ちゃんの子言ってコイツの事でしたの？魔法で強化されてるから正体不明って…」

なーんか拍子抜けですわねえ。」

「こんな小物に私の休日が…」と頭を抱えながら残念そうに唸るレインにふっふつと怒りが込み上げてくる。

自分が長年かけて従えたアンデッド達、都市すら滅ぼすそれらを片手間に滅した拳句自ら強化した骨の竜を「拍子抜け」呼ばわりだと？
「巫山戯やがって…ならそのまま踏み潰されて死ぬがいいッ!!」

雄叫びと共に骨の竜が全身を軋ませ、その脚を振り上げる。

「あら、もう来ましたの？」

突如として飛来した幾つもの赤い光が吸い込まれるように骨の竜へと踊り掛かり、大量の魔法陣と共に大爆発と火柱がその身に降りかかった。

耐性を越え弱点である火属性攻撃をもろに浴び、声帯など無いはずの骨の竜から苦悶の雄叫びがこだまする。

巨体がぐらりと傾いて横倒しになるのを眺めながら、空より降りてくる影が一つ。

「思ったより時間掛かりませんでしたね。」

「雑魚ばっかだったから。」

《無限魔力》の異名を持つ彼女の異能力は『反復』、一部の攻撃魔法を除き自身が放つ2発目以降の同名魔法の消費魔力を無くす。という破格の能力だ。

代わりに発動する度詠唱が必要になる訳だが、その面倒をカバーするのが肩に担ぐ身の丈程もある大型の撃杖。

これにより彼女は無詠唱で文字通り“無限”に魔法を発動できる。固定砲台と化したその制圧力はご覧の通り、目算500を超えるアンデッドを一人で撃滅して余りあるほどだ。

「あれ、まだ仕留めきれてない。もしかして強化掛かってた？」

肩に担いだ撃杖を起き上がろうとする骨の竜へ向け、トリガーを引く。

カチン、と軽い音がして9つの発射口から一斉に赤い閃光が灯り、慄く男の頭の上を通り抜けそれら全てが骨の竜へと殺到する。爆音と共に再び炎に包まれた骨の竜は今度こそ斃された。

「あらく汚ねえ火花。」

「馬鹿な…骨の竜は魔法を無効化する…筈なのに…」

「え？確かに骨の竜は魔法を無効化出来ませんが、第6位階までです

よ？知りませんでしたの？

で、今この子が放ったのは第7位階、お分かり？」

「は、ハハハハ…」

掠れた笑い声を上げるしかない男。

長年集めたアンデッド達をあつという間に殲滅されて、差し向けられた刺客は第7位階を容易に連発する女ども、これじゃどっちが化物か分からないじゃないか。

人の範疇を超えたこの所業、噂に聞く『漆黑』の仕業に他ならないと彼は察した。

神の血を引く神人、圧倒的な戦力差、奴らは法国を脱した自分を確実に始末しに来ている。

本来ならばここで観念するところだが、どうにも彼は往生際が悪いらしい。

歯を食いしばり立ち上がる、全ては歪んだ目標の為、盟主とズーラーノーンの為と！

「まだまだッ！まだまだア！」

《魔法最大化》！《魔法範囲拡大》！

グランドヴ 「漆黑聖典パアアンチッ!!」ボオエアッ!」

最早いつ殴られたかも分からない、気付いたら彼は頬骨を砕かれながら宙を舞い、骨の竜が残した残骸に叩き付けられて意識を刈り取られた。続けてバランスを失った骨の残骸が彼の上へと降り注ぎ、埋もれた彼の姿を拝むことはもう叶わない。

何年も掛けて準備した計画も、長年集めたアンデッド達も一瞬にして泡沫に消えた。

「これぞクレマンティーヌ流、『スつと行ってドスッ』でしてよ。

戦士職も齧ってない魔法詠唱者が敵を前にして何を悠長に詠唱してるんですか。

功夫が足りませんのよ、功夫が！」

「(ドスっていうかドゴオって感じだったな…)

何よ漆黑聖典パンチって、ダッサ…」

「こまけえこたあいんですのよ！」

ふっ：また人類の危機を救ってしまいましたわね。

ところどころでした？貴女専用の撃杖は。

名付けるならそう：《天デイザスター・シヨットワンド 災 撃杖》！貴女の異能力によって無限

に降り注ぐ殲滅魔法の雨あられ、正に天災と言つても差し支えありま

せんわ！」

「《天デイザスター 災》ねえ：確かに一々詠唱しないでいいのは助かるけど本
当に貰つてもいいの？代金くらい払うよ。」

天災撃杖は特別製でレイラの持つ2丁と同じオーダーメイド、世界
にふたつと無い代物だ。9つ分の発射口がある分使うルーン石数も
多く内蔵された魔力回路の密度も濃い、更に物が大きいため作業工程
も複雑。材料費、人件費を鑑みれば屋敷一つに匹敵してもおかしくは
ない。いや、これからの価値を考えるとそれ以上かもしれない。

そう遠慮する《無限魔力》にレイラは微笑む。

「いいんですよ、私と貴女の仲でしよう？」

法国の安寧の為、ひいては人類の未来の為、特に漆黒聖典の皆様には
強くなっていただかないと困りますもの。」

「あつそ、全部《ハメツフラグ》回避のためって事ね。」

《無限魔力》は肩を竦める。

長年学友としてレイラと共に過ぐすなか、ふと彼女の口から零れた
《ハメツフラグ》という言葉。

意味はよく分からないが、自らが知る中では人類最強に近いレイラ
が本気で恐れ、忌避しているのであれば大体どんなものか想像はつ
く。

（《占星千里》ちゃんでも読み解けない程遠い未来に訪れる人類の危機
：つてとこなんだろうけど、本人は頑なに教えてくれないしなあ。）

遠い未来に訪れる危機なんて荒唐無稽な話、普通ならバカにされる
か笑われるかの2択だが、レイラがそんな冗談を言わない性格なのは
長い付き合いで既に知っているし、撃杖の開発や冒険者の生存率の底
上げなどと言い出して人類規模で発展を促しているのも危機感の表
れだろう。

(あんま一人で抱え込まないでよ、親友。)

「なにか?」

「…べつつにい。」

「??さあ、野暮用も済んだ事ですしフォーサイトの皆さんと合流しましょうか。ちゃんと苦戦した体を演出しながら向かいましょうね。」

自身の撃杖をホルスターに収め、天災撃杖をケースに押し込むと服に泥とホコリを少々付け唐突に《無限魔力》もといケレスを小脇に抱え込めるレイラ。

「えっ、何…」

「《飛行》は危ないと言った手前飛んでいく訳にもいきませんし、途中でアンデッドに出くわしても面倒ですの。

一氣に駆け抜けますわよ!

《能力上昇》、《流水加速》、《雷鳴疾駆》、オマケに《千陣踏破》!!」

轟ッ!とレイラの周りに旋風が舞い踊り、足下に雷光が溜り初めて

…

「レイラ、いつきまゝす!」

「まって何その武技、後半2つ初めて聞いたあああああああ!?!?!」

地面を抉り砕いてなお余る程の圧力で飛び出したレイラは霧を掻き分け一直線に、悲鳴がドップラー効果を起こすほどの速度で周囲のアンデッド達も反応出来きぬまま、霧の平原を駆け抜けて行った。

ちなみに抱えられていた《無限魔力》は出走5秒程で過度のGに耐えきれず気を失った。



息があがる、元々もやしっ子で体力なんてなかったから。ワーカーになって多少は体力が付いたけどそんなの慰めにもならないくらい
の消耗だ。

でも脚は止められないから必死に息を吸って、みんなに追いつく。

「来るよ！脚が速い…多分腐乱犬ゾンビドッグが5匹！」

「よっしゃ、ロバー！」

「了解、《地裂震》！」

ロバーデイクの攻撃で足下を揺らされ体勢の崩れた腐乱犬にイミナの放った弓が突き刺さる。例の如く感電して動かなくなったのを見届ける暇もなく、フォーサイトは霧の平原を駆け抜けていた。

「これで襲撃何回目だまったく！多過ぎだろアイツら！」

「文句言ってる暇あったら走りなさい！」

私は気配感知のせいであって今だって背中がゾワゾワして堪えないのよ！後ろに100は居ると思いなさい！」

思わず私もゾツとした。

100匹のアンデッドに追い掛けられている現状は絶望の一言に尽きる、幸い足の速さは私たちの方が勝っているから四足歩行アンデッド以外が追いつかなくて来ることはないけれど、スタミナが尽きる前に平原を抜けられるかが勝負だ。

「ロバーデイク、大丈夫？」

魔法を使い過ぎて、これ以上は走れなくなっちゃう。」

「ハハハ…アルシエの目は誤魔化せませんか。」

新しい武器を借り受けて調子に乗っていたのかも知れませんが、ペース配分を間違えましたね。」

気丈に振る舞う彼だけど心做しか顔色が悪いし、「眼」で見てもかなりの魔力を損耗している状態だ。

普段よりできることの幅が広がったぶん魔力を消耗するペースも変わってくる、回復役のロバーデイクが魔力系による牽制もこなすようになれるなら、その分の魔力も余計に使わなければいけないから。

このアイテム群を運用するならそのあたりも考えて戦術を組まないと…もし無事に帰ることができたら教授に報告ね。

「ロバー、大丈夫か？少しペース落とした方が…」

「いえ、大丈夫です。もうすぐ平原ですしこのまま…ツツ!？」

何かを感じ取ったロバーデイクがヘツケランを庇うように躍り出て、構えた盾に巨大な何かが直撃した。

ここからでも聞こえるほど大きな、何かが折れる音、一拍遅れて真横に飛んでいくロバーデイク。

……え？

「ロバーデイクツ!!」

いち早く意識を取り戻したイミーナが張り裂けんばかり叫ぶ。

巨大な黒い壁、そう見まごうほどの巨体。

ソレを目にした途端、全身から血の気が引いていくのがわかる。

生者全てを忌み嫌うかのような咆哮に思わず脚が竦んだ。どうして、タイミングが悪過ぎる。なんでこいつが今ここで……

「デスナイト……なんでここに……」

冷静に考えれば分かる。此処は高レベルのアンデッド蔓延るカッツェ平原、ことアンデッドに関しては何が起こるか分からない。

その昔、師であるフルーダ様が捕え何処かに連れて行ったそれ。私はその時同伴していなかったけど、当時の高弟数十人を犠牲にして漸く捕らえることに成功した真正正銘の化け物。

単騎で国すら滅ぼす伝説のアンデッドを前に、たった4人のフォーサイトが出くわしてしまった。

「つアルシエー！ロバーの所へ！イミーナ牽制頼む！」

「わ、分かった！」

言われるままロバーデイクの下へ飛んでいく。

酷い有様だった、顔面は赤を通り越して青く腫れぼって、盾を構えた両腕はありえない方向に折れ曲がり、地面を転がったから擦り傷も多数みえる。明らかな重傷者だ。

「ロバーデイク！ロバーデイクしっかり！」

ポーシオンを……

携帯していたポーシオンを使っても治りが遅い、それほどに彼の身体は限界を迎えているんだろう。

ボロボロのロバーデイクをなんとか介抱しながらヘツケラン達に助けを求めようとしたけど駄目だった。二人とも死の騎士の相手で

手一杯…どころじゃない、今にも殺されそうなほど苦戦している。今でもこうして生きていられるのは2人のチームワークが抜群なのと、ヒットアンドアウェイで上手く注意を逸らしながら極力近距離戦を避けているからだろう。でもそれも時間稼ぎにしかならないはずだ。「ア…ルシエ…」

「ッ!?気が付いたの?すっかりしてロバーデイク、諦めちゃダメ!」
「はやく…逃げて下さい…」

血の匂いに釣られて腐乱犬が寄ってきます…貴女だけでも脱出を…」

「そんな事できない、必ず連れて帰るから!」

それ以上言葉を発せなかった。霧の向こう、四方八方から聞こえてくる獣の唸り声が私の思考を掻き乱す。

どうすればいい?姿が見えなきや《多対標的》マス・ターゲットで狙えない、残りの魔力も心許ないけど…腐乱犬から彼を助けるにはこうするしか…ッ!

「《魔法最大化》、《魔法持続時間延長》コンティニユアル・ライト《永續光》!」

私が使える強化を全掛けした《永續光》、撃杖ではなく普通の杖でそれを真上に打ち上げた。

飛び上がった光の球は20メートル程上空で眩しい光を放ち、薄暗く霧に紛れていた平原を照らし出す。

「ッ見えた!」

すかさず撃杖に手を掛け《多対標的》で敵を補足し《雷撃》の引き金を引いた。発射口から飛び散った雷の束が腐乱犬に飛来し、悲鳴をあげながら腐った犬畜生共は黒焦げになった。でも…

「魔力…限界かも…」

《多対標的》で枝分かれした《雷撃》にほとんどの魔力をもっていかれ、私も魔力が底を着きそうだ。ふらつき思わず膝を着く、限界を迎えた《永續光》の効果が切れ、再び薄暗がりの平原に戻るなか聞こえたイミーナの悲鳴で無理矢理意識を覚醒させた。

顔を上げるとヘッケランの右腕が切り飛ばされている光景が目に見える。

胸にブロードソードの突き刺さったデスナイトが振り抜いたフランベルジェの風圧で吹き飛ぶヘッケランをイミーナが追いかけて泣きついた。

絶対絶命、そんな言葉が脳裏を過ぎる。

メンバー2人が重傷者、相手は伝説級のアンデッド。背後には追っ手が多数で、オマケに私の魔力も尽きている。笑っちゃうくらい絶望的なこの状況。

わたし、死ぬのかな

くそつたれな家の借金の為に

あの子たちを残したまま？

そんな事できない

死んでたまるか

思考を放棄してしまいそうになるのを必死に押し殺して、考える。

ヘッケランが刺し違える覚悟で刺した両刃剣は深々とデスナイトの胸に突き立っており、自力で抜くのに手間取っているようだ。

柄に輝く白い石が目に入った時、咄嗟に私の脳裏にさつき話した教授の言葉が過ぎった。

『自爆はロマン』

いや違うそうじゃない！もつと前！

『特に柄のルーン石はあまり強い衝撃を与えないようお願いします、爆発しますのです。』

『人の半身くらい消し飛ぶんじゃないですかね。』

「イミーナツ!!」

「なっ…何よ!？」

「今すぐデスナイトに刺さってる剣の柄を撃ち抜いて!」

「は!?!何言ってるの!?!」

「早く!このままだとみんな死ぬ!」

「…っ 《精密狙撃》、《武器破壊》!

せああああああつ!」

怒りの一撃。

限界まで引き絞られ、狙い済まされた一矢がイミーナから放たれ、吸い込まれるようにデスナイトに刺さった両刃剣の柄へと叩き込まれた。

ここからでも聞こえるほど大きな音を立て、ルーン石はその3分の1ほどが欠けているのが見える。

次の瞬間、デスナイトを丸ごと覆い尽くすほどの大きく眩い光とともに石が弾け、爆発音と共に聖属性の魔力爆発が周囲に炸裂した。

衝撃波が大気を揺らし、吹っ飛ばされた取り巻きのアンデッド達も地面に落ちる前に光に当てられ灰になる、余程強い加護が込められているのか、周囲の霧も一時的に散って周りが随分と明るくなった。

「すっご、あんな爆発食らったら流石にデスナイトも…ッ!？」
「うそ…」

生きていた、デスナイトは生きていた。

盾を持つ手は弾け飛び、上半身を失ってもまだその動きは完全に止まっていない。兜と一緒に半分ほどになった頭蓋骨はまだ此方を睨みつけている。フランベルジエを引き摺りながらヨタヨタと向かってくる。

「このッ…イミーナ、矢は…」

「ツダメー！今のが最後の一本よ！」

イミーナの矢筒にはもう残りが無い、ロバーデイクは瀕死で動かさず片腕を失ったヘッケランは生きてはいるけど今すぐ治療が必要。

吹けば飛ぶような私たちの命運ももう尽きようと…

「《魔法最大化》、エメラルドスプラッシュ・ドラクーン《翠龍晶飛沫》ッ!!」

突然現れた巨大な緑色の龍の首がデスナイトを呑み込んで、上空に吹き飛ばす。

舞い上がったデスナイトは今度こそ空中でバラバラに弾け、散らばった骨が辺りに散らばる様子をイミーナと私はぽかんと眺めながら、馴染みのある声に安堵を浮かべた。

今の魔法、私の眼だと第7位階って見えただけど…考えるのやめた



「本当に申し訳ございませんでした！」

遙か遠い世界には『土下座』という名の文化がある。

座礼の最敬礼に属し、かの国においては最大限の謝罪を意を表す仕草だ。

本来なら土の上で行われなければならないが、此処は板場である、それでも精一杯の謝罪を込めてレインは目の前のワーカー達に土下座を敢行している。

その後、間一髪間に合ったレインが放った《翠龍晶飛沫》でデスナイトは斃れ、二人はフォーサイトと無事合流。

レイン達は“野暮用”のあと来た道を急いで戻ろうとし、平原を走り回っていたところアルシエによって打ち上げられた《永続光》の光を見つけすつ飛んできた訳だ。（迷って武技使いながら平原中を爆走していた事は流石に話していないが）

ちなみに小脇に抱えられていたケレスは顔を青くして気を失っており、目が覚めたと同時に女の子が出しちゃいけない虹色のなにかを盛大に吐いた^{ゲロッ}。高速で走り回るレイラに抱えられ脳みそシエイクされていたのだから仕方ない、宿に戻った今でも気分が優れないからと同席はせず現在は部屋で療養中。

「頭を上げてくれよ先生。」

ホラ、こういう事故もさ、ワーカーやってりやよくある事なんだから。」

「そういう訳にはいきません！」

だってヘツケラン様…腕が！頭も！」

「頭は残ってるが!？」

手持ちのスクロールに込められていた《治癒》でロバーデイクは治療できた。そしてヘツケランも傷を癒された訳だが、残念な事にデスナイトのフランベルジェで斬り飛ばされた左腕は拾う暇もなく、回収しようとした時には既に腐乱犬の餌になっていたのだ。

この世界ではポーションによる治癒手段がある為、切断程度なら繋ぎ直す事が出来るのだが、そもそも食われて無くなってしまうは戻しようがない。ユグドラシル産のポーションであればもしかするかも知れないが、今は詮無きこと。

「こちらこそ不甲斐ない所を見せてしまいました。」

本来なら回復は私の仕事、きちんとペース配分を考えていればパーティーの瓦解は防げていたかもしれないのに…新しい装備に浮かれていました。」

「そうね、私達も油断してたのかも。」

強い装備でやれることを選択肢が増え過ぎてて対応しきれなかった。」

イミーナの言葉にレインは唸る。

新しい技術でワーカー達の利便性が上がるのはいい、しかしその広すぎる利便性故に使用者が対応しきれない、人間が道具に振り回されているのだ。

使用者しだいとも言えるが、いきなり強くて便利な武器を手に入れ増長しそのまま命を落とすなんて結末も十分有り得る話。実際フォーサイトもレインが到着していなければ後続のアンデッド達に追い付かれそのままゾンビの仲間入り、なんて結末になりかねない事態に陥っていたし。

「だから先生は悪くねえよ、俺達は内容に納得してこの依頼を受けたんだ。」

傷を負ったら俺達の責任なのさ、それ以上は野暮ってもんだぜ。」
「うう…」

「利き腕じゃないだけラッキーさ、まあ双剣使いから片手剣にジョブチェンジしなきゃならんかもだがね。」

「ツでしたら是非私に義手を造らせてください！」

腕によりを掛けて最高の品を提供致します、勿論お代は頂きませんので！」

グイグイくるレインにヘツケランは渋々承諾する事にした、恐らく彼女の性格上どこかしらで落とし所を見つけないと延々に謝罪されそうさ。

そんな中、イミーナの横に座るアルシエがバツの悪そうな表情でわずおすとレインに言う。

「…すみません教授、ルーン石を暴走させたのは私の判断です。何年かかっても弁償しますのでどうか…」

彼女の口から出たのは謝罪の言葉。

あの時、咄嗟に言ってしまったがルーン石は原料に宝石を使用してゐる。1つ制作する為のコストが半端ではないのだ。

しかしレインは朗らかな笑顔を浮かべ、問題ないとアルシエの肩を優しく叩く。

「大丈夫、万物は皆いつか壊れるものですから。」

弁償なんて気にしないで下さい、むしろ自爆させてあのデスナイトに致命傷を与えたのは大きな成果です。それだけ威力が高ければわざと自爆させて周囲を攻撃させる投擲武器としての可能性も見い出せましたし。」

宝石使った一回限りの投擲爆弾とかどんだけ高級品だ。アルシエは許され安堵する反面、「この人の金銭感覚大丈夫かな」と黙々と構想を練り始めたレインを憂う。

こうしてカツツエ平原での一連の実験は終了した。

使われたマジックアイテム達はレインに回収され、自室でケレスと共にメンテナンスと調整が行われる。

依頼後、レインから渡された報酬は最初に提示された額を大幅に越える金額だった。「色を付けてくれると嬉しい」と冗談半分だった

ヘツケランは与えられた額に思わず2度見し口をパクパクとさせていたが。彼女曰く「命を賭けた仕事にはそれに見合った報酬が必要で、皆さんの実力だからこそデータも集まったのだから。次があればまた依頼させて頂きますね、」との事で、フォーサイトとの継続的な雇用契約を結びたいそうな。

アルシエにしてみればこれ程嬉しいことはない、使用人達への給金に割いてもまだ余りある報酬に思わず家で小躍りしたほどだ。

そして翌日、レイン滞在最終日を迎えたこの日

「レイン・エルリク・ホーエンウッド様ですね？」

ジルクニフ皇帝陛下の遣いで参りました、陛下は貴方との謁見を望んでおられます。どうぞこちらへ。

お連れ様もどうぞ、ご案内致します。」

宿を引き払い、店主に礼を言ってからケレスと共に歌う林檎亭の扉を出た直後のこと、道のど真ん中に停められた豪華な馬車と黒づくめの騎士たちに囲まれ、ジト目で見つめてくるケレスの隣りで思わずレインは呟いた。

「もしかして私わたくし、何かやっちゃいました？」

10 破滅フラグより毛根が心配な皇帝と会談して
しまった…

ジルクニフ・ルーン・フアーロード・エルニクスは生まれながらにして支配者である。

10代前半にて即位し、肅清と策謀を繰り返した結果彼は「鮮血帝」と恐れられるようになった。

無能な者は例え貴族であろうと切り捨て、有能であれば平民だろうと取り立てる彼の政策により権力は磐石になり、バハルス帝国は歴代最高と言つて良いほどの好景気と軍事力を恣にしている。

これもひとえに皇帝ジルクニフの手腕の賜物であり、彼のもとでなら今後100年の帝国の繁栄は約束されているだろう。と法国の歴史学者達は口々に語った。

と、まあこんな感じで神官長達は彼をヨイショしている訳です。

実際お隣の王国とは比べるまでもなく栄えてますもんね、この国。そりや連中も併合させようとするわけです。聖王国の夢見がちな女王様とは違い彼はきちんと現実可能な策を打ち出し、飴と鞭を使いこなしながら成功に導いていますからね。原作だとストレスで毛根死滅してましたけど。

しかし、それだけで終わらないのが法国クオリティ。

理想の為政者たるに相応しい彼を法国神官長達は人類の指導者として祭り上げるべく密かに動こうとしてるみたいです。具体的には王国の併合、それが巡り巡ってガゼフ暗殺に繋がる訳ですが…

法国が救えねえ f u o k i n , c o u n t r y なのはいつもの事として。

そんな国を動かす程の大物皇帝が今、私の前に座っております。

玉座の間に通されるかと思いきや、案内されたのは豪華な応接室でした。随伴して下さったバジウツド様曰く「特別に堅苦しいのはナシ

でいくんだってよ」とのこと。

「初めましてだな、レイン・エルリク・ホーエンウッド教授。」

皇帝にしては随分フランクな挨拶を交わす彼の瞳はこちらを値踏みしているようにも見えました。思ったよりフランクな方ですね。

原作だと主人公に振り回される苦労人の側面ばかりが目立ちますが、彼自身めっちゃ有能マンなのでナザリックが現れなければ法国の裏工作もあって王国も併呑してたんでしようけど。

けどそうはならなかった、そうはなりませんでしたの。だからここで彼の毛根はおしまいなんです。

彼の両隣には4騎士の2人が控え、私の後ろにはバジウッド様と片目を髪で隠した女性の騎士が立っています。全員が武装しており、皇帝に何かあれば即座に動ける厳戒態勢、まあこの距離で皇帝の警備なので当然っちゃ当然ですわね。

仮に私が陛下を害そうとした場合、即座に私とケレスの首を刎ねられるように武器には手を掛けたまま、これも彼の人徳の表れなのでしょう。

しかし時の皇帝から直々に招集されるこの事態、私何かしちやいましてかね？ 休日を友人と一緒に満喫していただけだというのに：エルヤーを氷漬けにしたのが不味かったのかしら、彼性格はアレでもここらではかなり有力なワーカーだったようですし。

「お会いできて光栄に存じます、シルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクス皇帝陛下。」

「こなれているのだな、普通はいきなり一国の王が目の前に現れれば戸惑いのひとつも見せようものを。」

「内心はドキドキですよ、私のようないち研究者の為にわざわざ陛下がお会いになりたいだなんて。」

「いやなに、フルーダが世話になったそうだな。」

昨日の夕刻から会う度に新たな魔法の理論やら新時代のマジックアイテムやら興奮気味に話してくるのだ、その中にしよっちゅう君の名が出てくるものだから気になってな。」

本人は興奮のあまり腰をやってしまっているが。と少々呆れ気味に笑うジルクニフ陛下の表情は柔らかく、フルーダ様との仲が伺えます。確か即位当初からずっと相談役やってるんでしたっけ、彼。

「実は私も新しい物には目がなくてね。」

魔法の理論については専門外だが新時代のマジックアイテムとは実に興味深い、是非話を聞かせてはくれないか。」

「私の研究成果であれば喜んで。」

私の返答に意外そうな顔をしていらっしやるようですが、別に隠す事でもありませんし構いませんわよ？ケレスちゃん？肘でつつくのやめて下さる？こそばゆいのですが。

…おっと《伝言》ですわ。

『ベラベラ喋っちゃっていいの？国家機密レベルの超技術なんだけど。まだ本国にも公開してないんでしょ。』

『よろしいのでは？』

『…了解、そういう事ね。』

そういう事とはどういう事？

「先ずはルーン技術の御説明から致しますね。」

そもそもルーンとは…」

………

………

………

「成程な。魔法の新たな可能性、そのひとつが貴女の手によって開拓された訳だ。」

素晴らしいな、君が帝国出身者であれば相応の褒賞を取らせていたところだぞ。いつそ帝国こちらへ移住するかね？」

「うふふふ、陛下はお上手ですね。」

目がマジですよこの人。もしかして私、引き抜きされようとし

てます？ヤダ私ったらモテモテですわね！クアイエツセ様嫉妬不可避ですわー！



ジルクニフは自他共に認める優秀な王である。

知識はもちろんの事、1を聞いて10を知るなど朝飯前。10代から皇帝を務める敏腕ぶりは伊達ではない。唯一自分に劣らないとしているのはお隣の王国に居る第三王女くらいのものである。

そんな彼はある時相談役であるフルーダから1人の魔法学者の名を聞いた。普段自分以外の魔法詠唱者の話題などした事の無いフルーダが熱心に話す彼女はなんと第6位階の魔法が行使できる凄腕の魔法詠唱者なのだそう、使用位階を目視で判別できるフルーダがそう言うなら間違いはない。

あの時フルーダの目付け役として着いていたバジウツドに話を聞くと「出身が法国とは思えねえほど自由奔放な学者様でさア」とのこと、そして魔法について学のないバジウツドにも丁寧に説明し彼も理解を得たと聞いている。それもジルクニフには好感触だった。

基本的に学者は学者同士でしか話をしない偏屈な人間が多いため、学のない相手を見下す傾向にあるからだ。

集めた情報を副官であるロウネと共に精査した結果、まず間違いなく彼女はスレインの重鎮であるという結論に達した。

そして身分を隠して帝国へ渡来した目的、入国審査では「魔法探求」と銘打っていたようだが本当の目的はきつと、近年急激に実力を伸ばしつつある帝国の魔法教育についての調査あたりだろうとジルクニフは予測する。

情報漏洩を防ぐ為本当なら接触を避けねばならない事態なのだが、運が良いのか悪いのか既に身内の魔法狂いが先んじて接触し、あまっさえ仲良くなってしまうたとバジウツドづてに聞いた時は思わず天

を仰いだものだ。が、彼は現帝国皇帝、この程度のイレギュラーに動じるはずが無い。

逆に考えるんだ、情報くらいあげちゃってもいいさと

急に頭の中に浮かんだ謎の紳士の言葉を頭の中で反芻し、彼は行動に移す。

仲良くなつてしまつたのなら仕方ない、フルーダと語り合えるほどの仲ならば逆に^{あちら}法国の情報も抜き出せるはず。

引き抜きは見込めないにしてもその魔法技術のひとつでも参考に出来ることがあれば、との打算もあり此度の会談を仕掛けてみたのだ。

当然口は堅かろうが腹芸ならばジルクニフの独壇場、それなりの自信を胸に彼は会談に望んだのだが：

「それでは」説明致しますね！

そもそもルーンとは…

まずは軽いジャブ程度から始めようと構えていたらいきなり聞きなかつた本題をぶち込まれ内心ずっこけそうになるジルクニフ、自前のポーカーフエイスで持ちこたえる。

レインの話は饒舌に、自身が提唱する魔法理論の定義や課題、問題点などを語っていく。

その説明はどれも丁寧かつ的確で、魔法に対してさほど知識を持ってないジルクニフにも理解できる程噛み砕かれた内容だった。

彼女の教師としての力量に思わず感嘆を覚える。

(凄まじい知識量だ、じいと張り合えるだけはある。

そして先程説明を受けたルーン石による新たな魔法の可能性、これはいち学者の胸に留めていい代物ではないぞ!?)

ルーン石のもたらす恩恵は計り知れない、その技術ひとつで戦争の形がひっくり返る代物だ。

魔法詠唱者なら誰でも使え、手軽に無詠唱発動が可能になるならばはこぞって購入したがるだろう。

マジックアイテムにしてもそうだ、石一つで^{エンチャント}手軽に魔化を付与するなど正気の沙汰ではない。未だに歩兵が主力となる時代遅れの王

国と比べ魔法詠唱者による少数精鋭化を重視する帝国にとって、喉から手が出るほど欲しい超技術。

しかし懸念もある。この「撃杖」なるものが作製に至るまで様々なコストを要求してくる点だ。

まずはルーン石の核となる宝石。

この技術が確立され、周囲に知れ渡ってしまえば原料となる宝石類の価値は暴騰するだろう。装飾品として既に高値で取引されている物に「良質な魔法素材」という価値まで付与されれば市場価格がどうなってしまうのか、考えただけで恐ろしくなる。

幸いにも帝国には過去に無能貴族達から押収し国庫に眠る財源があるため、いくらかは賄うことができるだろうが。と、会談と並行しながらジルクニフは思案した。

更には人。

銃身に使われる素材は殆どの物がジルクニフも見知った素材だったのだがそれを加工する技術者には相応の熟練度が要求される。ドワーフならいざ知らず、細工を担当するエルフにもだ。

彼女の故郷では手先の器用なエルフ達を雇用していると聞いたがそれを帝国でやった場合果たしてまともに機能するかどうか。勿論奴隷である以上命令すれば働きはするだろうが、机上に置かれた撃杖を設えるほどの繊細なものを作れるのかと問えば答えはノーだ。

(帝国に流れてくる奴隷共では到底できない。)

あちらのエルフはあくまで『正規雇用』を前提とした協力関係にあるという、ならば当然エルフ達が納得する程の対価を払っているはず。

ものづくりには意欲が必要だ、モチベーションや信頼なども加味すれば出来る上がる物の質も雲泥の差…

人類第一主義のスレイン法国の人間がよくもまあ他種族との信頼関係など勝ち取れたものだ、まさか魅了や精神支配の類を使ったわけでは…いや、詮無き事か。)

皇帝たるジルクニフは目利きにも優れている、その観察眼をもってして目の前のマジックアイテムが使用者の為に如何に細部まで作り

込まれた逸品かひと目で分かった。そこに邪な思惑などひとつも介してはいないだろう。これは『好き者が好きな事を好きなだけ詰め込んだ結果』生まれた産物、目の前の女教授を慕う者達が丹精込めて作り上げた品に他ならない。

専門知識の塊、専用の技術者も必要、さらに素材も高価ときた。ワゴンオフ品ならともかく量産して販売など夢のまた夢だ、開発者であるレインの課題も『術式の簡略化』と『制作コストの削減』だと話している。

故にこの技術はまだ改善の余地がある未成品、今後の進捗次第で大きく化ける可能性の塊なのだ。

率直に思う、「是非欲しい」と

「成程…魔法の新たな可能性、そのひとつが貴女の手によって開拓された訳だ。

素晴らしいな、君が帝国出身者であれば相応の褒賞を取らせていたところだぞ。いつそ帝国へ移住するかね？」

冗談めかして言うが半分は本気だ。

必要なら破格の待遇を用意してでも彼女と技術者ごと囲い込もうとすら思う、例えば相手が法国の重鎮であろうともだ。

「うふふ、陛下はお上手ですね。」

技術の革命と言って良い程のマジックアイテムを生み出しておいで、欲が無いのか無自覚だけなのかレインは微笑んでみせる。瓶底メガネの奥の瞳にはこちらが交渉しているという気すら無いのだろう。純粹に、自らの研究成果を皇帝から賛辞され喜んでいようだ。(やはり反応はイマイチか、相手が法国ともなれば研究の為の施設なども我が国とは比べ物にならないだろうし、物で勧誘するのは悪手だな。

財に関してもルーン石作製に宝石をポンポン使っているのを鑑みるに金には困っていないようだし、だとすると此方から切れる札は限られる。

少し発破をかけてみるか…)

「謙遜するな、素人目で見てもこのマジックアイテムが規格外なこと

くらい分かる。

あのじいが寝食も忘れ熱心に語る程だからな。」

「かのフルーダ翁に興味を持って頂けて光栄です、この研究は冒険者、ひいては人類の魔法理解への第一歩と信じておりますので。」

「冒険者とな？」

「てつきりかの国主導で行っているものと。」

「いいえ？この研究は私自身が趣味で始めたものの延長ですので、国にはまだ正式に発表しておりませんよ。」

「……なに？」

この女はなんと言った？

これほどの研究成果をまだ本国へ報告していない？

聞けば彼女は冒険者達の生存率を少しでも上げるために研究を始め、今日は本当に魔法探求が目的で帝都へやって来てフルーダと意気投合、話の流れで撃杖という劇物をお披露目してしまった訳だ。

（学者の口の軽さを笑うべきかフルーダの魔法狂いが功を奏したと褒めるべきか…）

この学者は自身の発明がどれほど重要なものか理解しているのか？

一歩間違えば軍事転用待ったなし、超技術をペラペラと国の重鎮に喋ってしまふなど…いや、違うな。これはもしかや…

（私を試している…のか？）

その時、シルクニフに電流走る。

技術職とはいえレイン教授は相当な知恵者だ、今までの会話でもその優秀っぷりは明らか。

彼女はかの大国、スレイン法国出身である。

人類存続の為なら手段を選ばない冷徹国家、秘密主義ゆえ委細は不明だが、非道なマジックアイテムを使い大規模な魔法を行使しているなど暗い噂も多い、そんな国から生まれた魔法学者。

ならばこの会談、彼女は自分を試しているのではないか？

目の前に新技術という名の餌を出され、それをどう対処するか。勸

誘するか取引するか、またはそれ以外の何かを求めている？ 国の皇帝を相手に分析しているのか？

胸の奥に浮かんだ疑問は考える度に膨れ上がる、法国という秘された国で彼女自身の情報も少ない以上全ての裁量はジルクニフの一存で決まる。

下手を打てば法国への印象も悪化する恐れがあるので、この先より返答は慎重に選ばなければならないと悟った。

王国のように見限られてしまっただけでは最悪の場合要らぬ敵を増やす結果にも繋がってしまうからだ。

(このような技術がまだ未発表…？)

解せんな、そんな情報をなぜ本国よりも先に他国の者に広める必要がある？)

勧誘からおかしな方向にシフトし始めたジルクニフの脳内とはお構い無しに、再び物憂げな表情のレインが言葉を紡ぐ。

「時に皇帝陛下。」

現在の魔法理論についてご存知ですか？」

「…？いや、分からないな。」

「現在魔法学者の間で語られる理論。」

我が国では魔法の根底は6元素を用いた理論なのですが、帝国や聖王国では2つ引いた4元素を根底としています。

これは宗教的な問題であったり、古くからの伝承の違い故に行き着いた魔法理論の“ひずみ”なのです。基礎が歪んでいるからこそ、未だに各国の論者達の見解は錯綜し、進化を阻害してしまっている。

私は人類にはまだ未知の可能性があると疑っておりません。

種族値で勝る亜人達に生存圏を囲まれる人の世で生き残る為我々は更なる成長を要し、誰より頭を使って生き抜く必要があると憂いております。

この撃杖は始まりに過ぎないので、私はこの技術を足掛かりに魔法の基礎を打ち直し、人類が一丸となって魔法の発展に勤しめるよう作り直したい。」

なるほど、この女も確りと法国の人間だ。とジルクニフは首肯す

る。

「……それが、例え人類同士の争いの道具になったとしても？」

「構いません。」

眼鏡の奥に一切の嘘は無い、そう彼は判断した。

人は弱い、ジルクニフにもそんな事は百も承知だ。

力も心も弱い我々はだからこそ学び、鍛え、時に媚びる、全ては「生きたい」と渴望する種の生存本能ゆえに。

しかし人類が一丸となるなど夢物語もいいところ、現に帝国は王国を狙っているし、王国は腐った貴族が内輪揉めを繰り返して醜い内乱の末あと数年無いうちに崩壊するだろう。聖王国と竜王国は亜人とピーストマンに手一杯の現状でこのような事を謳えるのは法国だけだ。

一瞬、八方美人で甘い決断しか下せない聖女王を思い出し、すぐに忘れた。

だからあえて口に出す。

「夢物語だな。」

突き放すわけではない、ただ真実を述べただけだ。

しかし彼女はその通りです、と笑う。

「だから私は考えたんです。」

ならばいつそのこと、宗教も種族の垣根を越えた魔法学者による魔法学者の為の組織を作ろうって！」

「なんて???!」

元氣げに宣言するレイラ。

さっきまでのシリアスな雰囲気は何処へやら、思わず呆けた声を出してしまい目が点になるジルクニフにも構わず彼女は続けた。

「魔法の研究が進まない原因は魔法詠唱者が個々の知識に頼り過ぎる点にあると思うのです。」

神秘の秘匿も魔法の美德ではありませんが、それでは知識が偏るしいずれ成長の限界が訪れてしまいます。

なので！魔法詠唱者が気軽に意見を出し合い共に切磋琢磨し合え

るような場を、例えば冒険者組合のような独立した組織を設立し各々の研鑽に役立てることができれば人類の魔法技術はもつと進展するし、競争相手が出来て良い刺激になると思うんです。

先日フールーダ様とお話して確信しました！」

彼女が提唱したのはいわばサークル活動だ。

定期的に集まり意見を交わし、議論する。

皇帝という権力の一極集中による支配体制を敷くジルクニフには馴染みのない響きだが、誰かと言葉を交わし互いに意見し合う事は大切である。魔法という共通の事項について語り合うのならなおさらに。

要は魔法詠唱者同士集まって茶でもしばきながら定期的に会談しようぜ！である。

レイン：もといレイラ的には「そっちの方が原作より魔法の発展が見込めますし、現地住民の魔法への理解が深まってルーン技術も知れ渡り一石二鳥ですわよね！おーっほっほっほー！」くらいのニュアンスで喋っていたのだがそれを受け取ったジルクニフと隣のケレスは驚きのあまり目を見開く。

まずケレスだが

（やっぱり、レイラちゃんはルーン技術を餌にしてまで人類の進化を促してる。大概の問題事なら一人で終わらせるあの子が単独で解決出来ないほど未来の危機は深刻なんだ…

戻ったらレイモン様にそれとなくその旨を伝えておかないと、議会に色々と根回ししてもらわなきゃ。）

レイラが身を削ってまで推し進める魔法組合（仮称）がもたらす恩恵と人類全体のメリットを考え、このことは自分一人の胸に留めていものではないと悟り信頼出来る神官長へ上申しようと決めた。

そんでジルクニフ

（人類規模の魔法詠唱者連合を設立するだど!?

魔法技術の普遍化とは聞こえは良いが、我々帝国が積み上げてきた魔法戦というアドバンテージが無くなってしまおうではないか！

これが法国の真の目的…!

まずいな、この発言がじいに知れ渡ってしまったら…)

意地でも参加したがるだろう。

先の接触で魔法職同士の会談が己の理に叶っている事を自覚してしまったフルーダだ、こんな美味しい話を耳にすれば這つてもレインについて行こうとする。国の最高戦力がポンポン他国に遊びに出て行かれてたまるか!

しかし、現実は無常である

「話は聞かせて頂きましたぞ!!」

バアンツ!!と扉が蹴破る勢いで開かれ、思わず護衛の4騎士たちが其方を凝視する。釣られてレイラ、ジルクニフが振り向いた。

そこには高弟達によってベッドごと荷台で運ばれうつ伏せになった状態で鬼気迫る表情をこちらに向けるフルーダの姿が!

どうやらまだ腰は完治していないようだ。

「じい!おまつ…:安静にしてろと言っただろう!」

「だが断るツ!!」

レイン女史を王城に招くのなら儂も顔くらい出さねば無礼というもの!」

くわっ!と目を見開くフルーダの瞳は嘗てジルクニフも見た行き過ぎなまでの魔法への狂気が見て取れる。あ、駄目だこれ完全にスイツチ入ってるわつて一目でわかった。

「正直な話、魔導の深淵を追い求め二百年余り、儂はこの歳になって限界を感じておった。

ジルの代にてようやく帝国に学院を創立し多角的に情報を取り入れてもなお、マンネリ化した現状を打開する事は終ぞ叶わんかったんじゃ。

だが!貴方と話して儂は久々に天啓を得たツ!!

もたらされたルーン技術を用いた新しき魔法の可能性、是非とも共に探究させてはくれぬだろうか!」

「勿論ですフルーダ様！」

貴方様が協力して下さるなら百人力ですわ！」

がっし！と熱く手を交わす2人、同じくルーンに魅入られたフルーダの高弟達は諸手を叩いて喝采し、ついていけない四騎士たち、白目を剥くジルクニフ、おい寝るなケレス。

突然のフルーダ乱入の後、ヒートアップする2人を他所に落ち着きを取り戻したジルクニフによって、レインの発足する組織の詳細を問われ彼女はこう答えた。

立場や理念に囚われない自由で文化的な魔法詠唱者の為の組織を発足すると。

レインは1人でも多くの人類に魔法の恩恵を与えるため。

フルーダはより深く魔導の深淵を覗くため。

各々の目的は違えど「魔法探求」という志を同じくする者同士、切磋琢磨する環境を整える。一応王国にも冒険者組合の中に魔術師組合というものが存在するが、あくまでこちらは同好会の様な扱いでいくらしい。基本は魔法詠唱者が集まりだべる息抜きや情報交換を行うサークルだ。

場所はレインの提案により竜王国へ拠点を置く事になった。スレイン、バハルスの中間に属するかの国ならばいちいち会いに行く度どころかに伺い立てる必要も無い。

竜王国は現在ビーストマンとの戦争中に伴い、他国からの協力を受けやすくする為、人類国家側の入国規制がとても緩くなっている。勿論犯罪者や身分の分からぬ者を易々と入れる訳では無いが、国王であるドラウデIRONとレイ^{レイラ}ンはマヴダチなのでちよつと話を通せば簡単に会談の場は用意できるのだ。

(ぬっぐぐぐ……もはや引き抜きどころの話ではなくなっちゃった。

いやしかし逆に考えろ、ルーン技術を広めるのが目的なら必然的に

最新の情報はじいを通して帝国へ伝わるではないか！国力強化に繋がるならそれに越したことはない、フルーダに情報を共有させ帝国独自のルーン技術を確立すれば王国攻略の一助となるはずだ。

むしろいち早く情報を手に入れる基盤を整え、ルーン技術でも帝国が一步先を走ればよい。

場所が竜王国なのが気に入らないが…彼女と竜女王が既知の間柄とは思わなかった。いやまさかあの若作り女王はこれを見越したうえで先んじてレイン女史と接触をしていたと？まさかな、自国の事で手一杯のあの女にそんな余裕は…余裕…は？)

いやさて、確か竜王国は法国の援助を受けていた筈だ。寄付金を納める代わりに戦力を貸し与える法国のがめつい商売なのだが、ジルクニフは各国に差し向けた密偵達の報告を思い出す。

『竜王国には昨今、法国より強大な戦力が投入された模様。通称“銀の戦女神”はその力でもって瞬く間にビーストマンを殲滅し一番近い都市を奪還した。』

最初にこの報を受けた時は危機に瀕し現実逃避した結果夢物語に縋る竜王国民の戯言かと鼻で笑っていたが、後から出てくる戦女神の詳細な情報から“それ”が実在する人物である事を特定した。

曰く、神の血を引く戦の申し子にして魔導の極意を備えし人類の守り手、法国の最終兵器。

人の形をした神の写し身、『神人』という呼称で呼ばれているそうだ。情報を共有した際、フルーダが会いたい会いたいと駄々をこね城を飛び出しそうになったのを四騎士総出で押しとどめたのが記憶に新しい。ほんと、彼らには苦勞をかけるな…給金は弾んでやろう。(最新の情報ではつい先日、ビーストマンひしめく森を犠牲者ゼロで制圧したそうだな。

ん？待てよ、その戦女神とやらが森を攻略したと報が入ったのが4日前、この2人が帝都へやってきたのはあの日の報告から逆算して恐らく3日前…という事はツ!!)

瞬間、ジルクニフに電流走る

(お前、なのか!?)

ひしめくビーストマンを皆殺し都市を奪還した戦女神は…)

必死のポーカーフェイスで隠しながらも、人より勝る獣の軍勢を簡単に駆逐してしまえる力を秘めた存在から目が離せない。

そう

今も熱心にフルルダと今後の打ち合わせを行っているレイン…の隣で鼻ちようちん作って寝てるケレスだツ!!

(まさか…彼女かツ!?)

いや、相手は法国。その戦略、諜報能力は我々の常識の埒外にあってもおかしくはない。レインという多弁で目立つ女性の陰に隠れ私の反応を伺っていたというなら納得がいく。愚者を演じ相手の警戒を解くなど諜報の基礎も基礎だ、私としたことがこの程度の違和感にも気付けないとは…新技術とじいの熱に当てられてしまっていたのかもしれないな。)

ジルクニフ君、もうちよつと視線右にずらしてもらて

(教授と助手の関係、普通なら立場が上である方が直接反応を伺いやすいがある下での立場でレイン教授と話す私を観察し、そしてこのジルクニフを前にして居眠りするという事はもう私の話を聞く価値などないと判断したから。影武者^{レイン}を勧誘しようとした時点で既に勝敗は決まっていたというわけか。)

フルルダの魔眼が位階を測り間違えた可能性も考えたが、あの法
国なら魔力を誤魔化すアイテムを所持していても不思議では無い。
自分が代々受け継ぎ、今もこの胸に掛かっている王家のペンダントが
そうだからだ。これは魔力を誤魔化しはしないが精神攻撃から身を
守るとされている、そんな言い伝えがある首飾り。小さな首飾りひと
つでこれだ。

このご時世、どんな効果を持ったマジックアイテムがあるか分
からないなら疑うに越したことはない。

全ては戦女神の掌の上()

軽い敗北感から顔を上げると、ケレスから一番近くに侍る四騎士の一人、ナザミがすぴすぴ眠る彼女を視界に収めながら「陛下、この娘どうしましょう」と無言で指示を求めているのが解る。皇帝の前で居眠りとか肝が座ってるレベルの話じゃないのだが、あまりにも堂々とした居眠りっぷりにナザミも無礼による怒りより先に困惑が勝つたらしい。ナザミの向かい側、皇帝の傍に侍るバジウッドもそんな彼女の豪胆とも言える姿を見て肩を震わせながら必死に笑いを堪えているようだ。

構わん、寝かせておくとアイコンタクトで指示し未だ白熱した議論を繰り広げる2人を眺めているとなんだかどつと疲れが押し寄せてきた。

（結局私も、まだまだ半人前という訳か。

だがしかし！このジルクニフ、転んでもタダでは起きんぞ！

例え相手が件の戦女神だろうとルーン技術に関する情報は頂く、そして今後も継続して接触できれば彼女自身の引き抜きの手もあるかもしれない。

その為の鍵はフルーダだ、頼むぞじい……！）

トランクケースから大量の紙束をフルーダや高弟達へ配り、それに目を輝かせ狂喜するフルーダ。レイン女史はルーン技術に関する研究成果のレポートの写しを譲ったそうだ。よしいぞフルーダ、そのままどんどんレイン女史の口を軽くしろ、それで情報を引き出せ。とジルクニフは事の成り行きを静観している。

その裏で己の頭はフル回転だ。ルーン技術の概要は彼女の懇切丁寧な説明により把握した、あとはこの基礎の上に帝国でどのような活用法を見出すか、それに伴い予想される経済の動揺、国内の混乱をど

う処理するか、更には今後必ず出てくるであろう模造品の取り締まりまで、スムーズに新技術を浸透させられるかは全て皇帝の手腕に掛かっている。

「本当によいのか？」

貴女が半生掛けて集めた成果なのだろう、同じく魔導を研鑽する身分としてこの苦労はよく分かる。ああ言った手前、このような貴重な物をタダで貰うのは忍びないが……」

「いいんです、もとよりこの情報は公開してルーン技術を目に触れやすくする為のものですから。貴方様が記念すべき第一号！」

フルーダ様こそ、まさかこれ程ヒントを渡されて成果が出ませんでした、なんて言いませんよね？」

「……言うてくれる！」

待つておれ、次に会う時目にも見せてくれるわ若造め！」

腰痛でベッドの上だというのに快活に笑うフルーダはジルクニフから見て分かるほどに楽しそうであった。

狂気も今は薄れ、澄んだ瞳で高弟達と共に資料にかじりつき話し合う姿は新しい玩具を与えられた子供のよう。

ジルクニフは安堵する反面、少し羨ましくも感じる。皇帝に至るまでの過酷な道程、暗躍と謀略渦巻く皇宮での生活は幼い彼に影を落とし、年相応の子供のように振る舞えることなどついぞ無かった。

魔法狂いとはいえ長年自分を支えてくれている相棒なのだ、ジルクニフにとって彼は帝国で数少ない心を許せる間柄であり血の繋がらない親のような存在。そんなフルーダが純粹に喜ぶ姿を見て何も思わないほどジルクニフの心は死んではない。

戦女神云々は別として、フルーダにこのような転機を齎してくれた2人には感謝してやっても良いのかもしれない。

(自由に振る舞えるじいを羨ましいと思う日が来るとはな。)

「皇帝陛下？」

……ッ大変失礼致しました！陛下の御前でありながらフルーダ様と長々と……決して陛下を蔑ろにした訳ではございませんのでどうかお許し下さい！」

「許す、自然体で居てくれた方が貴女も話しやすいだろう。それともその程度で腹を立てるほど私は狭量だと思われていたのかな?。」

「いえまさかそんな! 慈悲に感謝致します。」

「はは、冗談だ。」

もつとも、其方のお嬢さんは随分とリラックスしているようだが。「はい…!? ケ〜レ〜スうう!!」

恐る恐るレインが振り向き、鼻ちようちん作って眠りこけるケレスの両の顚に回転する拳が突き刺さる。

「んあえ…? ふがっ?!?」

「貴女は! 大事な! 話の最中に! いつもいつも! 寝るなって言ってるでしょ!」

陛下にも失礼でしょうがあ!」

「がああああああギブギブきよーじゅ!

割 れる頭 割 れちゃうかア ア ア ア ア ッ!?」

「レイン殿それ以上いけない!!」

『脳天爆砕拳』で声にならない悲鳴を上げるケレスを慌てて止めに入るフルーダとその高弟達を眺めながら、そのやりとりにジルクニフは自然と笑顔になってしまうのを自覚した。

彼にしては珍しく打算もない、心からの笑みだった。



(演技演技、演技ですわよ)

(いだだだだだだだっ!)

レイラちゃん本気! 本気出てるから! 頭蓋骨がクラツカーみたいに弾け飛ぶう!!)

(しかし見事に愚者を演じている、このジルクニフでなければ騙されていたところよ。)

◆
レインとケレスが無事会談を終え、馬車に乗り込み王城を後にするのを執務室の高みから見下ろすジルクニフ。執務室内にはロウネと四騎士ニンブル、ナザミが控え、バジウツドとレイナースは見送りに向かわせた。

此度の会談は実に有益なものであった、フルーダに渡されたルーンに関するレポートと試作品の撃杖一丁は丁重に取り扱わなければならない。

ルーン技術のもたらす恩恵は計り知れない。戦女神の引き抜きに關しては長期戦になりそうだが、一先ずビーストマン騒動がひと段落するまではあちらに掛かりつきりになるだろう。

それまでフルーダには2人との仲を深めてもらう、今は雌伏の時だ。

いずれ来る王国併呑の日まで。

「『魔巧同盟』か。」

ルーン技術を始め魔法の新たな可能性を世に送り出す魔法詠唱者の同好会：甘い理想だが彼女のプランには現実性があった、案外スグやつてのけるのかもしれんな。」

「はい、差し出された資料に私もぎっと目を通しましたが凄まじい完成度ですね。知識に關しては素人同然の私でも分かりやすく纏められておりましたし、綺麗事ばかりではなく問題点や改善点まで網羅する徹底ぶり。」

フルーダ様や学院生達が目の色を変えるのも納得致しました。」

魔巧同盟とは話の盛り上がった2人が名付けた呼称である。魔法の側面と技術の側面、2つの視点から世界を変える同好会。

ロウネも是非彼女には帝国にて共に皇帝の覇道の手助けをして欲しいと思う。しかしレインは法国の人間だ、引き抜くには色々と手筈を整えなければならぬ事くらい承知している。

「フルーダには精進して貰わねばな。」

ロウネよ、来月より帝国の予算の2割をローン技術開発のため利用する。財源の調整は任せた。

材料の調達も任せるが決して宝石商共に気付かせてはならん、素知らぬ顔で少しずつ買い叩け。」

「承知致しました。」

「陛下あ、学士殿の御見送り完了しましたぜ。」

執務室の扉を開け、バジウツドとレイナースが帰還した。

ふと、ジルクニフは違和感に気づく。「まったく嵐みてえな女でしたな」と軽口を叩く彼の横に立つ四騎士の紅一点レイナース・ロックブルズ、妙に嬉しそうに佇む彼女はいつもとは…もとい先程とは明らかに違っていた。

文字通り、顔が

顔の片側を覆い隠していた前髪は上げられ、素顔を晒すその肌はみずみずしくハツラツとした表情でジルクニフを見つめている。

「陛下？私の顔に何か付いていますか？」

付いていても困るのですが、と冗談まで言ってみせる彼女に思わず絶句。

「レイナースお前…」

四騎士が一人、『重爆』のレイナース・ロックブルズは“いわく”憑きである。

もともと領主としてモンスター退治を生業としていた彼女はとあるモンスターとの交戦時、死に際の呪いを受け顔の半分が膿に覆われる仕打ちを受けた。女として致命傷を負った彼女はその強力な呪いを解除する方法を探す為、帝国にて四騎士として従事している。

だからジルクニフに忠誠心も殆どなく、彼もそれを認めたくえで雇い入れた筈だ。

ある種契約の証といっても過言では無い呪いの跡が消えていた、それも完全に。

「レイン教授は素晴らしい御方ですね、陛下。」

「ツツ!!彼女か…」

それができるとしたら彼女しか有り得ない、とジルクニフは嘆息する。

どうやらレイナースはレインの帰り際に自身の呪いの事をうちあけたらしい、親身に相談に乗ってくれた彼女が使う法国独自の解呪法によって見事呪いは取り払われ、晴れて彼女は永年の呪縛から解放された訳だ。

フルーダをもつてして解呪できなかった呪いをあの女がどうやってあっさり解呪したのかは知らないが、レイナースが四騎士を続ける理由を失った。それが大きい。

もともと呪いを解除できたらあとは好きにしていという契約で雇い入れたので強く引き留める事も出来ない、どう説得したものかと頭を抱えているとレイナースはそれを見透かしたように微笑んだ。

「御安心下さいませ、四騎士の地位を降りようなどは言いません。教授も今までの恩は返した方が良いと仰っていましたので。」

ただどうやら呪いが消えた事で弱体化してしまったそうなので、暫くカツツエ平原付近にて鍛え直してまいります。許可を頂きたく。」

「お、おう。色々言いたいことはあるが…許可しよう、励めよ。」

「ありがとうございます、皇帝陛下。」

レイナースの笑みは今まで見た事も無いほどに晴れやかで、透き通っていた。

ジルクニフにとって、レインと銀の戦女神が『嫌いな女ランキング』にランクインした瞬間だった。

しかし彼は知らない。

この『魔巧同盟』が後に起こす歴史的改革の数々を。

それに伴い参加者が増え、吸血鬼の元姫君や裏社会の骸骨魔法詠唱者、果ては聖王国のNo.2まで巻き込んだ巨大組織となる事を。

11 破滅フラグどころじゃないフラグだらけになつてしまった…

◆とある帝国騎士の独白
朝

鏡の前で自分の顔を確認するのはここ最近の日課である。

先日までは鏡に立つ事すら億劫だったが、今となつては毎日欠かさず確認し、これが現実だと噛み締めるのが楽しくて堪らないの。

「ふふふ…」

思わず声に出して笑つてしまふけれど許して欲しい。

あの日、法国から来た学士様が王城へ訪れた日。

陛下の御前で自身の魔法論について熱く語る彼女は嫉妬してしまふほど綺麗で、その堂々とした口振りは自らの自信に裏付けされたものだと嫌でも理解させられる。

私も、ああなりたかった。

私の呪い、忌むべき死に際の呪い。モンスターによつて掛けられたこの呪縛によつて私は居場所を失い、婚約者を失い、全てを失つた。

呪いを解くために帝国騎士となり、解呪の方法を探し続ける日々は苦痛そのものだったわ。

帝国中の薬師、教会を渡り歩いてみたり、怪しい噂に一縷の望みを賭けて闇市の商品に手を出したりもした。けれどこの強力な呪いを解除できる薬も解呪できる神官も居らず、闇市の製品も全部偽物で、怒つて商人ごと灰に変えてしまったこともあるけれど後悔はしていない。

そんな日々が続いたある日、帝国へとやってきたスレイン法国の魔法学者。

会談を終えたあと、見送りの際にダメ元で彼女にこの顔の事を話し、解呪方法が無いか問うて見る事にした。何か言いたそうにしてい

た同僚はひと睨みで黙らせた。

なにか、文句でも、ありますか？ありませんわね？

レイン教授はおもむろに私の前髪を上げた。

前髪で隠しているのは忌々しい呪いの跡、今も膿を出し続ける醜い痣が残っている。咄嗟に隠そうとした私の手を抑えながら彼女は…

「よく、今まで頑張りましたね。

辛かったでしょう、私に任せて。」

大抵の場合、この呪いを見たものは顔を顰めるか酷く狼狽えるか私から離れるか、どれにしる疎ましい目で私を見てくる。

けれどレイン教授は優しい微笑みを崩さずに左手をそつと痣に押し付けた。呪いは掛かっけていてもちゃんと感覚はある、呪われて以来自分ですら触れもせず放置していた顔に何の躊躇いもなく触れられ思わず心臓が跳ねた。

触れた衝撃で膿が弾けて袖にべつとりと掛かるのもお構い無しに、彼女は静かに何かを唱え始めたの。

“私が殺す

私が生かす

私が傷付け私が癒す

我が手

を逃れうる者は一人もいない

我が目の届かぬ者は一人もいな

い”

ぞわりと全身が粟立つのを感じる。

先程までの優しい彼女とはうって変わって、氷のような冷たい雰囲気気に呑まれた。

清白と荘厳が入り交じったような感覚、教授が一言一句唱える度に、彼女に触れている頬から得体のしれない何かが流れ込んでくる。

それに対して呪いが過剰に反応しているような…

“打ち砕かれよ

敗れたもの

老いた者を私が招く 私に

委ね

私に学び

私に従え”

呪われた痣が熱を帯び始め、慌ただしく鼓動が脈を打つ、ぶくぶくと沸騰するかのような熱さに悲鳴を上げそうになるのを理性で必死に抑えながら、思わず空いている教授の手をしっかりと握り締めた。潰さんばかりの力で手を握っていても、彼女は優しく握り返してしてくれる。

“休息を

唄を忘れず

祈りを忘れず

私を忘れ

ず
私は軽く

あらゆる重みを忘れさせる”

途端、断末魔のような悲鳴が聞こえ、紫色の煙のようなものが痣から吹き上がり空に溶けていくのが見えた。

“装うことなかれ

許しには報復を

信頼には…あらっ？

もう消滅してしまいましたか、三節までもつとはなかなか強力な呪いだったようですね。」

「学士様、今のは…」

「私の国に伝わる “おまじない” です。」

六代神様も御愛用なされたという書物より抜粋した聖句を唱える事で悪しきものを浄化する魔法で、本来なら浮遊^{レイ}霊^スなどの物理攻撃の効かないモンスターや悪魔に対して使用するんですが、強制的に魔を祓う聖言なので解呪の真似事もできるんですよ。」

膿で汚れた手を払いながらあっけらかんと笑う彼女から手鏡を手渡された。

……………あ

「痣と呪いは連動していたようですね、上手くいって本当に良かった。」

前髪をあげてもそれがない

いつも疎ましく思っていた顔半分、膿に冒された疎ましい痣はきれいさっぱり無くなって、代わりに肌色が露出していた。

「うそ…」

彼女がそっとハンカチを手渡してくれる、気付けば鏡越しの私の瞳から涙が零れ落ちていた。膿で汚れてもいない透明な涙、あの呪いを

受けてからてつきり枯れ果てたものと思っていたのに。

「こりやあたまげたな、レイナースの呪いは帝国中の神官を掻き集めても治せなかったってのに。」

「私の聖句は解呪というより退魔の分類なので、おそらく解釈の問題かと。」

呪いを痣に憑いた魔なる物と仮定して、それを浄化したと考える頂ければ分かりやすいですか?」

「いや仮定で、呪い相手にそりや完全に押し付けじゃねえか。」

ゴリ押しで解呪しちまう先生もやべえよ。」

「我が国では常識に囚われてはいけないのです。」

「アンタの国は魔境か何かか!」

いけない、言葉が出ない。

何度触っても忌々しい膿のベタついた感触はなく、直に肌を触れていた。すべすべ…

「ほんとうに…戻ってる…」

「はい、もう前髪で隠さなくても大丈夫。」

「ありがとうございます…ぎいませす…ッ!」

それからの私はどうしていただろう。膝から崩れ落ちて無様に泣いて、レイン教授に介抱して頂いたのは覚えているのだけだ。

呪いを解いた以上帝国に用は無い、すぐにでも四騎士なんて辞めてやろうとしたのだけど「今まで養ってもらってにおいてそれは不義理過ぎる」と彼女に止められて、仕方なく留まることに。

代わりにお暇を頂いたので、私は自力を底上げするためカツツエ平原付近の帝国領地へ赴いた。今日は到着して既に3日経過している。

レイン教授のアドバイスを思い出す。

『武技や鍛錬も大切ですが、〃カースドナイト〃を失ったレイナース様はアンデッドを倒して聖属性の加護を強めても良いのかもしれない。』

遠国にある聖王国には、^{パラディン}聖騎士〃という職種もあるそうだし、暇を頂けたのなら試してみてもいい?』

私には自分でも知らないうちに呪いによって自身の身体能力を高められるような加護が働くようになっていたらしい。それが解呪と共になくなつて、今は大幅に弱体化してしまっているのだそう。

確かに呪いが解けてからいつもより少し身体が重い兆候はある、実際に武器を振ってみないとどれほどのものか分からないけれど。

それを補うために教授が考案したのが「びるど」と呼ばれる研鑽方法だそう、難しい言葉が多くて理解が追いつかなかつただけど、要するに私の場合はアンデッドを沢山倒せば鍛錬の代わりになるそう。

恩人の言葉なので素直に従い今に至る。

此処はカツツエ平原と隣り合わせでほぼ毎日低級から中級とされるアンデッドが出現する領地、試すにはうってつけだ。

「レイナーズ様！」

おはようございます、本日も城壁前にアンデッドが多数現れておりますのでご報告にありがとうございました。」

「ありがとうございます、今行きます。」

「ついえ！それでは失礼致します！」

伝令の騎士が去っていく。

私の呪いを知り、前まで目を合わせようとしなかつた男どもが今となつては顔を赤くして我先にと私へ報告にやって来る。

ホント、男つてそういうところですよ。

馴染みの槍を持つ手はいつもより若干重い、やっぱり教授の仰つていた仮説は正しいのでしょうか。

なら彼女の考察の通り、アンデッドを殺し続ければ私はまた強くなれる。そう疑いはない。

だつて、私を解放して下さいな方なのなもの

呪いを解除し颯爽と馬車に乗り込むその後ろ姿、頭に輝く光輪と真っ白な6枚の羽を幻視した。

…いえ彼女こそきつと、私の天使様なのね。



「おうグリーンガム、久しぶりじゃねえか。

依頼帰りか？」

「ぬ？おう、これはヘツケラン殿。仕事でな、竜王国付近まで行ってきたのだ。

汝も壮健そうだなによ…り…」

「あく…やっぱそういう反応しちゃう？」

此処は謳う林檎亭、ワーカー達馴染みの溜まり場である一階の酒場にて、ワーカーチーム『ヘビーマッシュャー』リーダーであるグリーンガムは同業者であり気のいい友人でもあるヘツケランの変わり果てた姿に瞠目していた。

変わったのはヘツケランの左腕、二の腕の付け根より半分だ。

それは人の腕と呼ぶにはあまりにも機械然としていて、指先を曲げる度カチャカチャと鉄の擦れる音がする。所謂それは『義手』なのだが、素人目からでも分かるくらいに高価な代物だとグリーンガムは即座に理解した。

「汝、それは一体…」

「コレな、前に依頼でハマこいちまってよ。

傷は治ったが斬り飛ばされた腕がモンスターに食われて無くなっちゃまったんだ。

それで依頼主の厚意で義手を贈ってもらったワケなんだが…どうにもなあ…」

気に入っではいるんだけどよ、と半笑いのヘツケラン。

人の腕より少し太い程度の義手、その指が器用に折れ曲がり右手と同じポーズをとる。

普通ならありえない事だ。

グリーンガムの知っている義手と言えば木を組み合わせて作られたものが精々で、例え鉄で作られていたとしても指の先まで器用に動か

せるはずが無い。

「義手の中にギツチリ魔法が仕込まれてて、俺の意思に従って動くんだとよ。」

「なんというか、凄いな。」

「どれほどの技術者が作り上げた逸品なのか…」

「ホントすげえよなコレ、俺も貰った手前言い辛いけどちよつと引いてるもん。」

精々出来のいい義手程度だろうと高を括っていたヘツケランはこれが送られて来た時に変な笑い声が出たという。

上等な木箱に入れられた、見るからに高価そうな義手、手紙も同封されていて、「漸く義手が完成致しましたのでお贈り致します。書面にてメンテナンス等の説明書を付与しておりますので後ほどご確認下さい、お問い合わせはスレイン法国ローグレンツ領〇―〇〇―〇番地まで」とご丁寧な領内を往来できるパスまで入っている。

「アフターケアまで万全か！」と同伴していたイミーナは叫んだ。

何を隠そうこの義手、内部にルーン文字がたらふく内蔵されていて、ヘツケラン専用調整されたものらしい。最初に登録した者以外の操作を受け付けない代わりに義手の隅から隅まで木の根のように張り巡らされたルーンが装着部位から使用者の意思を読み取り、繊細な指の動きまで細かく再現出来るそう、実際使ってみたヘツケランも思い通りに動く義手に驚きながらその完成度の高さに若干引いた。

「なんでも負傷兵が戦線復帰する為に失った四肢の代わりになる事を想定して造られた義手なんだと。」

腕があつた時と殆ど変わらねえ動きができるから助かってるが、こんな高そうなモン着けて持ち歩くのは気が引けてなあ…」

高そう、違うな。間違いなく高価なのだ。

使用する部品はすべて1から打ち出し、エルフ達が数人がかりで組み上げた。ルーンひとつひとつはレイン自ら丹精込めて刻印し、その上から工房の親方達に頼んで文字が消えないよう加工を施して、その上に重ねる形で何度も鋼を打ち直した。これにより軽量化のルーンも相まってヘツケランはほとんど重さを感じていないにも関わらず

硬度はオリハルコン並かそれ以上、外観も傍目から見れば完全に二の腕まで伸びる細めの手甲にしか見えない。技術も見た目もこの世界では至高と呼ぶべき逸品に仕上がっている。

代金は不要、とレインは言ったが実際掛かった手間と費用を合算すればフォーサイトが10年間休まず働き続けてやつと支払えるくらいの金額なので知らぬが仏と言うやつか。

もしルーン技術に聡い者、例えばフルーダなんかがこんなものを見てしまったら最後、真顔になって「ころしてでもうばいとる」と本気で言いかねない。

「…ツなぜだか無性に悪寒がした。

ヘツケラン殿、その腕普段は手袋か何かで隠した方が良いのではないか?」

「そうするわ…なんか俺も寒気したし…」

流星は日々危険と隣り合わせの請負人達、危機への察知は早い早い。

『ツツツ!!今、天啓が降りたような気がするぞ!』

『ハイハイ、黙って仕事を終わらせてからにしろ。』

『最近孫が冷たい…』

さて、ここでワーカーチーム『フォーサイト』のその後について補足しておこう。

リーダーのヘツケラン・ターマイトを筆頭に集まった4人組みのチーム、彼らの運命はレインに出会ったことにより大きく変わってしまった。

そもそも金策のために集っていた4人なのでレインの依頼を終えた時点で目標は殆ど達成しており、ヘツケランとイミーナが2人でこ

なせる簡単な依頼をたまにやる程度の頻度でしか活動しなくなった。
4人集まって活動するのは大口の依頼、もといレインの新作お披露
目と稼働実験の時くらいのものである。

神官でありパーティの回復役、ロバーデイク・ゴルトロンは依頼報
酬を少しずつ帝国内の孤児院に寄付し（一度に大量に送ってしまうと
周囲から怪しまれてしまうため）恵まれない子供達への支援を惜しま
ない。時間の余裕もできたので孤児院の子供達に勉学を教えたり、神
官の才能を見出した者にはその知識を惜しまず与えているそうだ。

リーダーのヘッケランは同チームのイミーナと共に細々とワー
カー活動を続けるなか、交際関係に発展。報酬を元手に一軒家を購入
する等、ワーカーという不安定な職業から脱却するための足場固めを
着々とつづけている。

とある護衛依頼の際、商人を助けた際にちらりと見えた美しい銀色
の義手からそれ以降『銀腕』の異名で腕の良いワーカーとして噂され
るようになり一部商人の間で有名人になったそうなの。

最後に、最も生活が変わったのがアルシエだ。

報酬で貰った金貨を使用人達の給料にあてがったはいいが、なおも
虚勢を張りつづけ現実を見ようとしないうるかな父親を見限った彼女
はある日手切れ金とばかりにお金を家に置いた後妹達を連れて家を
出た。そして自身の師であるフルーダへ直談判し妹共々転がり込
んだのだ。

アルシエの魔眼はフルーダと同質のもの、そしてルーン技術が齎
された今、撃杖使用経験の豊富な魔法詠唱者を国が放っておくわけも
なく、説明を受け魔法詠唱者としてではなく一人の人徳ある大人とし
て父親の行いに激怒したフルーダ推薦の元ジルクニフの計らいに
よりアルシエは魔法省に新しく設置された『魔巧技術課』へと配属さ
れる。

フルーダ以上にレインと接点のある彼女はワーカー活動を国か
ら容認されるといふ法外措置まで取られており、その裏ではレイン引
き抜きを狙う皇帝の思惑が働いたのだとか。

ともかく給金も安定し、晴れて妹たちと一緒に暮らせるようになってアルシエ。代わりに魔法省の激務に晒される事になるが、偶に会いに行くフォーサイトメンバー達との会話と家で待つ可愛い妹達が癒しになっているようだ。

ただ未だに感情を優先して親との縁を完全に切れていないことが彼女の心のしこりとなっている、それが未来にどんな影響を齎すかはまだ知る由もない。



「……と、まあ。

こんな感じで帝国ヘルーン技術を無事布教、国力アップで人類大勝利！てなカンジですよ！」

「へえー帝国にねえ。」

「ごきげんよう！私ですわ！」

本日は法国神都最深部、番外ちゃん家からお送りします。家つってもただ広いだけでベッドと最低限の生活用品しかない殺風景な場所なんです。番外席次あらためリーネちゃん、もしかして女子力クソザコなのでは？私は訝しんだ。

まあ生まれが生まれですし仕方ありませんわね。

数日前、帝国より帰還した私達は竜王国経由で一度法国へ戻り、報告書を纏めて中央政府へ提出致しました。

《無限魔力》ちゃんと別れた後すぐ自領に戻るのも面白くないのでせっかく神都へ来た事ですしお忍びでリーネちゃんの所へ遊びに来ちゃいましたー！借りてたマジックアイテムも返さないといけませんしね。

途中出くわした元老院の皆様は凄く顔されたんですけどなんなの、私を鬼か何かと勘違いしておられる？

「それよりさあ、帝国に私と釣り合いそうな強者はいなかったの？あの爺はともかく、噂じゃ帝国四騎士とか強いって話じゃない。」

「皇帝と話した時お会いしましたよ、例え東になっても素手の私にすら勝てませんわ。」

彼等はいくまで現地産の強者ですからね、プレイヤーの血を引いた神人達インチキと一緒にするだけ可哀想です。

「なんだあつまんない。」

「闘技場は？『武王』は見なかった？」

「生憎と私、見世物の殺し合いに興味ありませんので。」

あれが娯楽として成り立っているのは刺激に飢えた一般人が安全な位置から非日常を味わう事ができるから。

亜人との命のやり取りを毎日やっている私からすれば只の野蛮な三流プロレスにしか見えないですよ。オーガなのに人間と仲良くしてる『武王』ことゴ・ギンさんとか首狩りウサギさんには興味ありますけど。

「貴女と釣り合うような男性なんて、いたとしても大陸で数人程度でしょう。」

隊長はどうなんですか？一応私の知る限り一番の強者なのでは。」

「アイツじゃ無理無理、逆立ちしたって私には勝てないわ。種も弱そうだし。」

「はア：何処かに居ないのかしら、私を倒せる男。」

「種で、貴女ねえ…」

頭の中それしかないんですかねこの娘。

まあ私の知ってる限り人類圏に彼女以上の人間はほぼ存在しませんし仕方が：あ、いや人外でもイケるんですけど？どっちにしろ真のインチキチートナザリツク勢が現れるまでは最強ですか。

さて、私の考える人類救済計画（直諭）においてまず最初に強化せねばならないのが彼女、《絶死絶命》。

作中で唯一主人公達に対抗出来る可能性がある現地人、理由はプレイヤーの血が半分以上引き継がれその身に流れているからに他なりません。

たしか母親も元第1席次を張れるほど実力者Ⅱプレイヤーの混血で父親も……ツチ、あのヤリ○ンド屑の事考えたら腹立ってきました。が人格は別として彼もプレイヤーの血を濃く受け継いだエルフでしたか、なので成長速度はかなり『ゲーム寄り』ということなのでしょう。私も身をもって感じていますからね。

お母様は純プレイヤー、お父様も半分かそれ以上は神プレイヤーの血が混じっているはずですから、半分ずつ受け継いでも7〜8割くらいこの身体はゲーム要素で構築されているのでしよう。

装備できるユグドラシル武器が他人より多いのもその恩恵ですね。

現地人の自力の限界が25〜30Lvそこら、そこにプレイヤーの血が混じることで上限が解放されていく……なんかスマホゲーのキラの上限突破みたいですね。

この世界の人類は世界規模の親ガチャだった…!?

一言で言えばそう、理不尽極まりない。

現実にゲームの設定を持って来るとこんな感じになるんでしょうね、しかも下手に時間が経ちすぎて完全に混ざっちゃったから取り返しもつかねえという異常事態。マジ竜帝くんさあ…

そして今も100年ごとに現実ゲームは空想に侵食されつづけている、と。

…そのうちガイ○やらア○ヤから不要と判断されて切除されたりしません？大丈夫？

コレ原作知識持ってないと私もリーネちゃんと同じ感じに滅茶苦茶な育成構成がなされて取り返しのつかない事になってるんでしょうねえ。

ゲームと違って気軽に死んでレベルダウン、上げ直しもおちおちやっつけられませんし。つーか傍から見たら強くなつては自殺を繰り返す狂人ですわねソレ、お成仏なさつて？

な、ので。既にLvの上がり切っている彼女には取り敢えず自分の持つ力の把握、格上との戦闘を想定した訓練をこなしつつ、ゲームには存在しない未知の要素、武技の開発とかしちやってるワケなんです。《雷鳴疾駆》とか彼女の発案ですし。

私という不確定要素が原作の流れをいつ変えてしまってもおかしくない今、話の本筋で死なない事が確約されていたキャラクターが別の要因で死んでしまうかもしれない状況ですので自衛手段は持つておいて欲しいのですよ、リーネちゃんに始まった話ではないのですけれどね。

こういうの《バタフライエフェクト》って言うんですけど？

クレマンティーンとか良い例で、原作より強くなってる信仰心もそこそこあるから離反の疑いどころかズーラーノーンのズの字もないんですよね。

「そういえば前に言った事、覚えてますか？」

「ええ、やってるけど私の異能力は技は読み取れても詳細までは分からないから。いくら武器と見つめあつたつてスルシャーナ様の技の詳細なんて読めないわよ。」

「リーネちゃんの異能力、『武器の所有者が持つ切り札を行使できる』という破格の力。」

確かに強い技ではありませんがその反面、技の詳細まで読み取る事ができないのがネックでした。

例えば彼女の所持している大鎌、〃カロンの導き〃はかつてスルシャーナ様のご愛用なされていた信者垂涎の御利益アイテムなのですが、それを持ったリーネちゃんはオーバーロードの最強スキル The goal of all life is death あらゆる生命の目指すところは死であるを発動可能になります。

私もアニメでアインズ様が対シャルティア戦で一度使ったの観て覚えてるだけなんですけど、頭おかしいスキルですよ。なんですけど耐性貫通の即死技って、ユグドラシルのバランスどうなってますの。

ただこのスキル、使えば勝ちが決まる訳ではなく発動してから色々制約がある様子。まあゲームの技ですのでデメリットがあつて当

然ですわよね。

それに気付いて欲しくて時々リーネちゃんを唆し遠回しに「弱点や制約を把握しておきなさい」と忠告するのですけど、やっぱ説明テキストのない現実世界では難しいご様子。スキルがスキルなので不用意に何発も試せませんし。

「最後にその異能力使ったのいつでしたっけ？」

「たしか…アゼルリシアの中腹に特大サイズのゴーレム系モンスターが現れた時だったかしら。その頃は漆黒聖典も数が少なくて…ほら、元第2席次の…《剣帝凄絶》が若い頃、死ぬ気で侵攻を食い止めてくれてたんだっけ。」

「え、お父様の若い頃って…相当昔じゃないですか。」

「他の聖典も出払っちゃっててさ、最高神官長が渋々私に出撃命令を出したの。」

結果はまあ、お察しよ。」

「その時発動して何が起こったか覚えてます？」

「そうねえ…発動してから当たった感触はあつただけど、効果が出るまで数秒ラグがあつたかも。10秒ちよつとかな。」

それ以外は覚えてないや、兎に角一度使えば確実に相手は「死ぬ」。耐性だろうが相手が既に死んでようが関係なく死の概念を押し付ける技よ。」

「でしたら発動から効果が適応されるまでの数秒間が勝負ですわね、回復や蘇生を使う暇も無いくらい苛烈に攻める事ができれば隙も埋まりますし。」

「そもそも異能力使うまで追い詰められる事の方が少ないんだけど。」

最近だと貴女と戦った時位のものよ。」

「もしかして私、遠回しに死ねって言われてます!？」

リーネちゃん!?!その怪しい笑い方はなんなんですか!?!隙あらば私のこと殺そうとしてません!?!

ですがリーネちゃんが己の能力を自覚して、分析してくれるに越したことはありません。ステータス画面の存在しない現実世界なので!

最悪私を餌にしても学んで貰わねば！踏み台ばっちこいでしてよ！

格上との戦い方を学ぶ事こそこの世界の強者に必要ですからね、窮地の時こそ人の本質が見えると言いますし実践戦闘に勝る経験はありません。

「ねえ、今日来たのはただお菓子をこ馳走してくれる為じゃ、ないわよね？」

「あー…まあ、そうですね。」

神官長にバレないようにスキルと魔法はナシの方向でお願いします。」

「わーかったわかった、今回は壁も床も心配しなくていいわ。直すアテができたから。」

「はい？……ッ?!?!」

底冷えするような悪寒を感じ咄嗟に部屋の隅を凝視し、必死に表情を取り繕いながら暗闇の奥に潜む “それ” に微笑みかけます。

なーんでこのお方がアナタの部屋に来てるんですかねえ！最奥で眠ってらっしゃるハズでは!?

つーか動いてるとこ見るの初めてなんです！入隊の時一回だけ謁見させて頂きましたけど明らかに “僕封印されています、起こさないでね！” みたいな雰囲気出してじゃないですか！

「私も最初は驚いたわ。」

最近起きてる事が多いから、暇潰しに私の部屋へ来たりするの。」

「…神官長はこの事ご存知でして？」

「こんな面白そうな事上層部に言うワケないじゃない、ここ100年間ずっと眠りっぱなしだったのについ最近何かに呼応するように起きちゃったんだから。」

私以外の前に姿を表すのは珍しいけどね。」

「大問題なんですが!？」

ああ色んなフラグ乱立してもう気が狂いそうですわ…

まあなんですか、起きてしまったものは仕方ありませんわね。取り

「敢えずお菓子食べます？」

「ルーファス様。」

「暗くてよく分かりませんが影が長くような仕草をして伸びた手が
テーブルのビスケットを鷲掴みにして持っていきました。」

「…え？前の方が美味しかった？」

「ちよつと前にレイラの家に行ったじゃない、その時お土産に貰った
やつを気に入ったみたいよ。」

「知らない間に私のお菓子献上されてるう!!」

◆
今回は時間なくて市販のやつ買いましたからね。

「ねえ、もしかしてこの世界線、私というイレギュラーのせいとど
ん原作から離れていってませんか？ホントにナザリック来るん
ですか？来ないなら来ないって言うってくださいませんか？」

「龍帝は仕事しませんでしたてへぺろ♪」って誰か言っただけ!!

◆

「もしかしてこの前神官長に勘づかれず私の領地に来たのって…」

「あの御方に《転移》の高級魔法で飛ばして貰ったの、そこで対価に貴
女のお菓子をあげたってワケ。」

「神々の遺した神聖存在をタクシー代わりにするんじゃないやありませんわ
よ!?!」

「たくしーって何よそれ。」

◆とある最終兵器半森妖精の独白

私は強い、他に並ぶものが居ないくらいには。

私の仕事は挫折を与えること。

漆黒聖典に入った神人は大抵の場合、国最強の部隊に所属できたことに浮かれるあまり自身の力に酔っている。かつての隊長もそうだった。

それを矯正し、傲慢な新入りの鼻っ柱を叩き折る。上には上がいる事を思い知らせてやれば大体の奴は大人しくなるもの。

《無限魔力》の時はちよつとやり過ぎて卑屈な性格になっちゃったのは申し訳なく思ってるけど…

けどそれは私にも言える事、戦えば常勝不敗、他に並び立つ者が居ないせいで気付かないうちに自らの力に驕っていた。

彼女に出会うまでは

『貴女がレイモン様の仰っていた《絶死絶命》様ですか。』

初めまして、漆黒聖典13席次《獄界絶凍》を拜命されましたレイラ・ドウレム・ブラッドレイと申します。よしなに…え？本名名乗るのはNG？別にいいじゃないですか減るもんじゃなし、これから苦楽を共にする同僚ですよ？ご挨拶くらいしておかないと。』

見るからに傲慢そうな貴族の女、そんなのが最初の印象だった。呼び付けたのは私だけど嫌な顔ひとつせず高笑いしてるその姿は余程自分に自信があるのかアホなだけなのか…

けれどその力、特に魔法と槍術を組み合わせた氷特化の戦法には思わず感心してしまう。

「自作だ」と言う見たことも無い魔法を使い現れる氷のゴーレム達にはそれなりに苦戦させられた。多対一を前提にした広範囲戦術、立ち回りも上手くて足りない部分を魔法と武技でカバーし、仕留めどころが分からない。

しかも予め用意していた結界用の巫女が魔力不足で倒れたせいでその肩代わりもしながらの戦闘、消費も半端ない筈なのに彼女は最後まで私に食らいついてくる。

ほんと、何処からあんなアイデア湧いてくるのかしら。

結局魔力切れで気絶してしまい、私の勝利で終わったけれど万全の状態であるまま戦い続けていたらきつと私は…

それから私は自分の足りない部分に気付き、レイラの助言を受けながら武技の開発や格上との戦闘を想定した訓練なんかを定期的に行う事にしたの。

私より弱い奴が何を言おうと聞く耳持たないけど、レイラの言葉には不思議と説得力があった。

格上への対処法はまるで実際に見てきたみたいに具体性があった、気付けば私から彼女に教えを乞い、こうして相手になってもらってる。それから暇潰しの雑談相手にも。

彼女が話す魔法理論は素人の私にはよく分からないけれど、新しいマジックアイテムの話題はとても気になった。

なんでもルーンと位階魔法を応用させた通信系のマジックアイテムや簡易的に結界を張れるようなものまで開発中らしい、今度試作品を持ってきてくれるのだそう。

今まで訓練と言えばあの母親からのしごきしか知らなかったからこうやって手取り足取り一緒に訓練するのは初めてだ。

それはとても新鮮で、楽しい。まさか私が訓練を楽しいだなんて思う日がくるなんて思ってもみなかった。

戦闘中、時折見せる彼女の苛烈な一面は、かつての母を思い起こさせるけれどその瞳はナズルのように優しくくて。

あと料理が美味しいのもナズルっぽいわね。

…あの人に重ねるなんて、ほんとうに私ってばレイラのこと気に入ってるんだ。

それにしても…

「えいつ」

「あつ!?ちよっ…こらー!」

ルーファス様に動揺した数少ない彼女の隙を見て左の小指に嵌められた指輪リングを抜き取った。

焦るレイラ、隠蔽が解けて途端にその腰元から伸びる両手を広げて

余りあるくらい大きな「6枚の白い羽」と頭上に輝く神々しい「冠に似た光輪」が後光と共に現れる。

これがレイラの本性。

そう、本当の彼女は半天使だ。

誰も知らない彼女の秘密。私が知ったのは完全に偶然で、泊まりに行った時風呂場でたまたま目撃してしまった。彼女が白状するに母親は《水星天の熾天使》という天使の種族で、物心つく前から隠蔽の指輪を付けて種族を隠しているらしい。

熾天使の名は聞いた事がある、法国に遺されている六大神様の資料にも記載されていた。他にも9種類ほど数がいて実際にはその一柱であるアーラ様も《至高天の熾天使》という高位の天使であるらしい、それと同格かそれ以上の種族であるならレイラがどれくらい希少な存在か理解出来るでしょう？

この事は義妹のクレマンティーヌや婚約者のクアイエツセすら知らない、知っているのは父親と私だけ。

「やっぱそっちの方がいいじゃない。」

熾天使と人間のハーフだなんてお得な身体、隠さないで中央政府の前でバラせば貴女の計画ももっと早く進むんじゃない？」

天使や奇跡が大好きな連中だもんね、皆掌返して貴女に従うと思うわよ？

「…私は「人間」です。」

人類は己の力で立ち上がらなければ。

ただ助けられただけの人間がどんな末路を辿るか想像できない貴女じゃないでしょう。

今更この姿を見せたところで混乱を招くだけでしようし、この秘密は墓まで持っていきません。」

そう不貞腐れないでよ。私達の仲じゃない。

私は表舞台に出られない存在、貴女は隠し通さないといけない種族、どっちも秘密を抱えてるのはお互いさま。

私達だけの秘密、ね。

「私は好きだけどね、このモフモフの羽は特に。」

「お止めなさない、くすぐったいですわ。」

「はあくこのふわふわ堪んない…」

この包まれるような安心感、心地好い暖かさは本当癖になる。布団代わりにして昼寝したい。

……実際しようとして何度か逃げられたわ。

わしやわしやわしやわしやわしや…

「……満足したら指輪返して下さいね、この姿だと感情が無理やり抑制されておかしくなりそうです。」

「善処するわあく…」

ほんと

人類最強の守護者名乗ってる2人が揃って純人間じゃないなんて、皮肉が効いてて面白いと思わない？

「ルーフアス様も羽触りたいって
!?!?」



神都中央部、大聖堂内に振り分けられた神官長達の私室にて。

節制と儉約を尊ぶ国是故か、国の上層部にしては質素な作りの執務

室には漆黒聖典担当神官長のレイモンとその隊員《無限魔力》が向かい合っていた。

提出された報告書を一通り読み終え、レイモンは溜め息を一つ。「やはりカツツエ平原の異常はブーラーノーンの手の者の仕業だったか。」

「ご苦勞だったな《無限魔力》、それと休暇中にも関わらず協力してくれた《獄界絶凍》にも感謝せねば。」

「はい、ありがとうございます。」

それと、レイラちゃ…《獄界絶凍》の同行に関してレイモン神官長のお耳に入りたい事が。」

「…それが報告書に残せない内容だと?」

「その通りです。」

魔女帽子の下から覗く、いつものだらけた態度とはうってかわって真面目な表情で《無限魔力》は語り出す。

「彼女は《占星千里》より先の未来を見越して行動しています。」

新技術を餌に帝国のフルーダ翁を抱き込み、それを足掛かりに魔法詠唱者の地位向上の為の組織を設立しました。新種のマジックアイテムも自領で多数開発中。

試作品の凶面は私も見ましたけど、どれも凄まじい完成度です。法の魔法技術を何世代も先取りできるほどには。

レイモン様も彼女の突飛な才能はご存知でしょう? 何処から思い付いたのか次々と未知の理論を書き上げて、教授達を困惑させた。なのに学生時代に彼女が出した論文が見向きもされなかったのは貴方達が意図的に評価を下げて揉み消していたから、じやなきや卒業論文で私が彼女に勝てるはずがない。」

「…謙遜を、あの年の卒論は同期の中で最も君が優れていたよ。」

「今更評価はどうだったいい。」振り分けて「分解」、読み取って「解析」、入れ替えて「変換」、創り出す「錬成」、レイラがいつも言っては実行してきた法則。あの子が作り上げた試作品の中には学生時代に書いた論文の内容が含まれたマジックアイテムもちらほらあった。

きつとあの子は学生の頃…いえもつと前からこの危機が訪れる事

を予期してた！今それを形にしようとしてるってことは、その危機が訪れるのは2年後にやってくる予定の「揺り返し」になる可能性が高い！」

「……」

「速やかに対策を講じるべきです。」

具体的には国をあげて彼女が行っている事業を手助けする必要があります。

問題児がどうか言ってる場合じゃない、彼女の才能を切り捨てて護りきれぬほど今の人類は精強でないことくらいレイモン様もご存知でしょう。」

あくまでも冷静に、理詰めに攻める《無限魔力》にレイモンは再び深いため息を一つ。

この世界で100年ごとにやってくる「揺り返し」、時には万人を救う勇者を、時には国を滅ぼす魔物を生み出す歪みを法国の一部の間は知っている。

中央政府ではその揺らぎから生まれた実体が人類にとって有益か有害かを判断し、可能なら自国へ取り込み戦力とする方針を取っている。

今までは揺らぎが生まれ、実際にその正体と相見えるまでは相手の判別ができなかった。が、レイラは次の揺らぎにやってくる『ぷれいやー』が人類にとっての危機になると判断したわけだ。

本来ならば隊員が上司に意見するなど以ての外だ。漆黒聖典は護国の為に任務を遂行する秘密組織、信仰を忘れず上からの決定を粛々と実行すればよい。

それを押してなお、彼女は上官への具申を選択した。頭は回る癖に普段だらけて軽い言動ばかりの娘がこうも真剣になってわざわざ言い詰めに来たのだ。無下に帰す訳にもいかなないとレイモンは腹を括る。

そして彼は語り出す、レイラがかつてより法国上層部からマークされてきた事を。

初めは幼少期、元席次の娘が産まれたという報を受け密偵を彼の領

地へ飛ばしたのが全ての始まりだった。

その娘は5歳に満たないというのにハキハキと自分の意思を示し、神官団に対して「義妹との会話の邪魔だ」という理由で強力な魔法を行使したそうだ。

この時点でレイラは素質を見出され、魔法学院卒業と同時に聖典加入が内定していたという。

しかし彼女は説明に訪れた神官に全く構うこと無く自領へと舞い戻り亜人との攻防戦に明け暮れる毎日を通り越す道を選んだ。いや、そもそも入隊の話すら耳に入っていなかったのかもしれない。

亜人生存圏との国境線に位置する彼女の領は戦略的にも重要なポイントだ、疎かにすれば侵略を許してしまう。だからあえて泳がせておいて、機を見計らい勧誘する。そう神官長達は考えた。

が、そこでレイラのやりたい放題癖が暴走し始める。エルフを雇い、ドワーフに従え、霜の竜達と協力し領地の安定化を進める彼女に上層部は慌ててこれ以上の勝手を許してなるかと漆黒聖典加入へ向けて動き出した。

次々と新しい風を齎す彼女を閉鎖的な中央政府の神官達は危険視したのだ。

今でこそ「あの娘ならしょうがないか」くらいの風潮で神官長達の意見は固定されつつあるが、当初の判断ではレイラを隊長に並ぶ護国の勇将に仕立てあげる為、なんと国宝での洗脳も視野に入れていたらしい。

彼女の奔放ぶりを重く見た一部の神官長は本気でその計画を推し進めていたそうだが、幸運な事に実行に移す前にその神官長は任期を終え、今は元老院にて執行権を失っている為最悪の事態は免れた。

「そんな…国宝を使ってまで思い通りに動かそうとするなんて。」
「当時は私も反対した。」

風の巫女が使う神器は知っているだろうか？大魔法発動の為自我を失い、一生を道具のまま終える運命を背負った少女たち。今でこそ《獄界絶凍》の考案した魔法理論の応用で会話ができるほど後遺症無く魔法を行使しているが、そうでなければ彼女達は使い潰されて終わ

りだ。

国の為、人類の為と聞こえはいいが対価に1人の女性の人生を食い潰すのはどうなのかと常々思うよ。

そんな咎を友人の娘に背負わせたくはなかった。」

レイラの父であるゲバルトとレイモンは現役時代の同期である。

人付き合いの多い男では無かったが少なからず接点もあり、共に仕事をすることも多かったレイモンは彼の婚約を素直に喜び、レイラ出産の折には自身も妻と共に祝いに駆けつけるなどそれなりの友好関係を築いていた。

如何に人類至上主義とて守らねばならぬ一線はある。友人の娘が国の操り人形にされる未来を看過できるほどレイモンも人の心を捨ててはいない。

「『揺り返し』の件は了解した。

明日の議会で私から皆に発信しておこう、《占星千里》の予知夢のように確実性がない為説得力に欠けるだろうが…

彼女の設立しようとしている組織についても私の権限内のできる限りのサポートをすると約束する。」

「ありがとうございます。」

本当に、今期の漆黒聖典には苦勞をかける。

揺り返しの時期が被っているのもあるがエルフとの戦争沙汰やビーストマン侵攻、更に頻発する亜人の襲撃など例年以上に出動案件が増えている現状。

「今代は運が悪かった」と笑って流すのは簡単だが、これらは先輩である自分達が過去にやり残した事の清算を次代に押し付けてしまったが故。

そう自分を戒め、せめて後輩達の手助けをしようと思えるくらいにはレイモン・ザーグ・ローランサンは出来た男だった。

「今後も彼女の周りで何かあれば私に報を入れてくれ。上官である以上責任は取る、それが上に立つ者の責務だ。

…正直なところ、君が進言してくれて有難いと思っっているよ。

《獄界絶凍》といい君といい、今期の漆黒聖典は粒揃いだ。その考えは必ずや人類に安寧を齎す一助となるだろう。期待している。」

「勿体ないお言葉です、レイモン神官長。」

連絡の方は承知致しました。それでは私はこれで…」

「し、失礼致します！・レイモン様！」

退室しようとする《無限魔力》が言いきらないうちに蹴破る勢いで扉が開かれる。

癖の強い金髪のショートヘアにトレードマークの眼鏡、更にこの国では珍しい学生服を着込んだ少女。

「お？《占星千里》ちゃん、ういゝ。」

彼女も漆黒聖典所属の隊員であり、第7の席次に座る者。

超人戦闘集団である漆黒聖典には珍しくサポートに徹する隊員で、異能力は「千里眼」。

遠くの風景を見通し偵察を行えるのはもちろん、限定的ではあるが未来視も可能な希少能力の持ち主だ。

「む、《無限魔力》なんでここに…」

「レイモン様に報告書、例のアンデッドの件は私と《獄界絶凍》ちゃん で片付けといたから。」

もうカツツエ平原は大丈夫だよ。」

喋り方ももとに戻し、いつもの調子で執務室のソファに寝転びながらだらけている《無限魔力》にレイモンは苦笑いし、視線を《占星千里》へと移す。

「そっか、良かった…」

「じゃなくて！レイモン様に至急報告しなきゃいけない事があるの！」

「何かな《占星千里》、君がそれ程急ぐ事とは。」

「…『予言』が来ました、場所はトブの大森林最奥部。おそらく…」

「『破滅の竜王』か…!!」

馬鹿な、早すぎるー！」

《占星千里》の報告に思わず叫ぶ。

はるか昔、スレイン法国が生まれるよりずっと前の事。ある時突然

空を切り裂き現れた化け物の一体で、封印されし禁忌の存在。

彼等が“破滅の竜王”と呼ぶ存在である。

法国の伝承では世界を滅ぼす力を持つとされており、かつて世界が竜の全盛期だった頃殆どが討ち取られたが、一部の個体は生き残り大陸じゅうに散らばった。

トブの大森林に存在するという個体もそのうちの一つである。当時国が極秘に行った調査の結果、最後に接触したのは十三英雄で、何らかの方法を用いて封印され今に至ったようだ。

そして今代にて、未来視を有する《占星千里》の度々の警告をもって法国は“破滅の竜王”の復活を予期し、対策を取っていた。

「風の巫女に急ぎ通達を！至急議会を招集せねば！」

“破滅の竜王”が動き出したとあれば最悪、国宝の使用も視野に入る必要がある！」

「カイレ様をお呼び立てするんですか？」

先日から体調が優れないと仰られて部屋に籠りつきりでしたが……」

「議会で採決されればの話だ。」

十中八九そうなるだろうが……頑張つて貰うしかならう。法国に残っている漆黑聖典のメンバーの確認を急げ、議会で意見がまとまり次第直ぐに出立の準備を。

くつ、火急の際すみやかに判断を下せないのが議会制のままならんところだ。」

因みに、法国の隠し球である漆黑聖典が出動する為には神官長達の集まる会議で賛成票が半分を超えないと認可されないし、国宝の持ち出しに至っては八割が賛成しなければ使用を許可できない。

しかもそれは神官長による話し合いで、それはもう果てしない時間を要するのだ。民主主義の弊害がここに来て迅速に行われるべき判断に足枷を嵌めていた。

“破滅の竜王”復活に対する法国の対抗策として第一に挙げられたのが国宝を用いた無力化。

嘗ての神々が遺した偉大なる遺産の数々、その中に存在する

『傾城傾国』ケイ・セキ・コウクによる洗脳効果を使い竜王を隷属させる作戦である。

国宝により管理下に置く事ができれば脅威の排除だけでなく亜人達への牽制にも利用でき一石二鳥、さらに成功すれば人的被害も皆無となればこの案が満場一致で可決されるのに時間は掛からなかった。

しかしこの法衣は選ばれし者のみが着用を許されし国宝、適正の無いものが使つてもただの際どいチャイナドレスだ。

有難いことに法国にはその適正を持つ者が1名だけ在籍している、だが彼女は高齢で現在も健康体とは言い難い。更に法衣を使用できるまで対象に近づける為には漆黒聖典のメンバーで周囲を固めて護衛するしか方法がない。超人集団の中に動けぬ老婆が一人入るだけで当然進軍速度は下がるし、リスクは多いが…

「漆黒の面子はたしか…《時間乱流》第2席次と《四大精霊》、《地砕罰剣》第6席次が別任務で大陸の南に行つてるし《天上天下》第12席次は今朝水明聖典の人たちと一緒にエルフ国の偵察へ出発したから国に残ってるのは8人…《獄界絶凍》レイラちゃん含めて9人かな。」

当然ながら、番外の彼女は除外だ。

法国の最終兵器以前に《無限魔力》が名前を出したくないだけであるが。

「全て動員させる、総力をもって当たらなければ成功は無い相手だ。」

「という事はもしかして私も…」

「《占星千里》ちゃんも出動だよ、当たり前じゃん。」

「うええ、戦闘苦手なのに…」

「《神聖呪歌》ナツちゃんと一緒にサポート宜しくう。」

肩を落とす《占星千里》にニヤニヤしながらその背を叩く《無限魔力》。

漆黒聖典にだって当然向き不向きがある、彼女が得意とするのは千里眼による状況確認と戦況把握くらいのもので、直接的な戦闘力は殆ど皆無に等しい。そのために護身用のマジックアイテムを宝物庫から直々に下賜されているほどだ。普段から携帯することを義務付けられており、これは未来視という希少な異能力を保護する為に中央政府が下した措置である。

「レイモン様！レイモン様あ！」

通達の準備を整えていたところ、けたたましく廊下を蹴り歩く音と共に4人目の来訪者がレイモンの下に現れた。

やってきたのは風花聖典だろうか、緑を基調とした巫女服に身を包んだ少女が開いた扉から顔を出した。額には汗が浮かび顔は真っ赤、その頬には涙の跡を残し何やら随分と急いでいるようだ。

今日は何人来るんだ、と内心悪態を吐きながらレイモンは少女に応答した。

「どうした落ち着け、何があつた？」

「はあ…ッ！かい…レ…」

カイレ…様が…」

「カイレ様…？彼女がどうした。」

「カイレ様が先ほど…息を…引き取りまし…た…」

「「は??？」」

空気が凍る、問題児は居ないはずなのに。

思わず固まる3人、嗚咽を漏らし我慢出来なくなったのか幼い風の巫女は堰を切ったように溢れ出す涙と共に涙声でうったえる。

「カイレ様が…先ほどお亡くなりになりましたあ…!!」

いつもの時間にお昼ご飯を取られていないのを不自然に思っ様子を伺いに行ったら…ベッドから倒れていらっしやっ、息…してなくて…何度も呼び掛けたんですけど全然反応なさらなくて…わたし…うわああああああああん!!」

カイレ様が死んだ

この国でたった1人

使えば滅びの魔王すら御することの出来る道具を唯一使える御方が

死んだ…？

泣きながらその場にへたりこんでしまった巫女をいち早く正気に戻った女性陣が介抱しようと駆け寄った横で、固まったままのレイモンの脳内に浮かぶのはただ一つ。

破滅の竜王どうしよう

手から滑り落ちた書類の束が散らばる音だけが虚しく響く

12 破滅フラグの塊みたいな奴と相見えてしまっ
た…

スレイン法国、神都中央部に位置する大聖堂。

政を行う為に使用される場、円卓に並ぶ12の椅子に座るお歴々は誰一人として一言も喋らず、その空気はすこぶる重かった。

意を決して口を開いたのは漆黒聖典統括神官長レイモン、その表情はかつてないほどに固い。

「状況を整理しよう。」

各々頷く神官長達、目を背けたくなるような現実など腐るほど見てきた彼等の心は強い。でなければこの席に座る事すら叶わなかっただろう。

「カイレ様が、お亡くなりになられた。

享年87歳、脳内出血だそうだ。もともとご高齢ゆえに復活も叶わない。」

この世界には便利な蘇生魔法が存在する。

使える者は極わずかだが死者の魂を冥界より呼び戻し、現世の肉体に収める復活の儀式。当然スレイン法国にも存在するし、此度に亡くなられたのは国の重要人物だ。普段なら躊躇なく行使するべきなのだ、神官長達の表情は固い。

まず、レイモンの言う通りカイレは既に高齢者。死者の魂を呼び戻すのに必要な体力など残っていないし、失敗すれば肉体は灰となって消滅し二度と呼び戻す事が叶わない。

ユグドラシルの言う通り『Lvが足りない』。

《死者復活》レイズデッドは肉体の強度が一定以上でないと蘇生が失敗する、更に高位の魔法である《真なる蘇生》トゥルー・リザレクションであればカイレの復活も叶うだろうが、この場に集まった者たちの中にそんな奇跡のような魔法が存在するなど誰が知り得ようか。知っていたとしても手段がない。

「これにより国宝『ケイ・セケ・コウク』は使用者を失い機能不全に陥つ

た。

我ら風花聖典も協力し全力をもって次代の依り代を探す予定であるが……」

口を開いた風花聖典を治める神官長の言葉に覇気は無い。

神々の遺した偉大なる遺産、ユグドラシルアイテムを使用するにはそれに適応する人物が必要だ。

風花聖典の所持する様々なアイテム群ですら法国の総力をもって選び抜いた適合者達であり、招集するのに多大な時間を要する。

ましてや国宝クラスのアイテムの適合者などこの国に存在するかすら不明である。砂漠の中で砂金一粒を見つけ出すようなものだ。

「そんな時間、無いのだろう。」

《占星千里》より得た報が正しければ。」

そうレイモンが返す。

「つい先程、彼女より伝えられた予言。

『破滅の竜王』復活が事実なら当初の計画は破綻する、国宝の新しい依り代を見つけるより先に奴が大陸を蹂躪するだろう。」

場所がトブの大森林、というのが更に話を難しくする。仮に大陸の中央部に位置するかの森から動かれた場合、被害は聖王国を除く全ての人類国家に波及してしまうからだ。

竜王がどれほどの脅威となるか不明だが、法国と帝国はともかくビーストマンの侵攻に明け暮れる竜王国は背後を突かれる形になるし、王国の場合は論外だ、十中八九抵抗もできず踏み潰されて終わらるだろう。

「奴が動き出す前に居場所を特定し包囲、封印なり捕縛なり何らかの手段で自由を奪い『ケイ・セケ・コウク』の後継者を見つけるまでの時間稼ぎとする。」

「おのれ、エルフとの戦争さえなければ火滅も遠慮なく投入できるものを……」

円卓を砕く勢いで火滅の長が拳を叩き付ける。

本来ならば彼の部隊も投入しなければ収まらない程の事態なのだ

が、現在法国はエルフと戦争中、戦線を下げれば敵国の増長を許してしまう。

「神々の遺産に竜王を捕縛できる代物はあったのかい？それを使用できる人物も、国内に居なきや意味がない。」

「可能性があるものは幾つか確認しているが、問題は適合者が1人しか居ない点だ。」

名はエドガール・ククフ・ボーマルシエ、神器『革の戒め』に適正があり近いうちに聖典入りが期待されていた男。元老院の推薦のあった彼を竜王の下まで護衛し、封印を遂行する。」

正直、この方法では時間稼ぎにしかならず根本的な解決にはならない。レイモンとしては竜王の完全な撃破を目標としているのだが、議会では依然として竜王を国宝で隷属させる案が有力だ。それだけ竜王の力は魅力的なのだ。

「何れにせよ竜王の現状を把握するのが最優先事項となる、此度に限っては手段を選んではいられない。」

入ってくれ。」

入室を促すレイモン。

誰に？神官長達の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

いやいや、この作品をここまで読んだ諸君ならもうお分かりだろう。

そう

ドバアンツ（会議室の大扉を蹴り開ける音）

「ごきげんよう神官長の皆様！」

私ですわ!!

レイモン以外の円卓に座る全員が白目を剥いた

「よつこらせ…つと。」

レイラを初めとした、現在法国に残っている漆黒聖典の面々が集合（みんなレイラの後ろから気まずそうに入ってきた）し、運び込ませたのはなにやらゴテゴテした大小様々な四角い箱の様なもの。

それぞれにルーン文字が刻まれており、円卓の真ん中にそれは設置された。

「《獄界絶凍》、これは？」

「映像を投射する装置です。」

探知魔法を使用する術者と同調させる事でその者が見ている視界をこちらのレンズから投射し、壁に写す機能を有しておりますの。」

「いつの間にこんなものを…」

「理論自体は学生の頃から考えてましたわ、実物にするのに材料が足りなかったただけでしたから。」

「何度か試運転もしましたので安全性は保証致します、では…『巫女ちゃん、お願いしますね。』」

『承知致しました。』

《伝言》の魔法で連絡をとったのだろう。風花の神殿にいる巫女が儀式を開始し、遠見の魔法が発動。箱の突起から照射された光が壁に投影され、上空からの俯瞰視点でトブの大森林の様子が映し出される。

突飛なマジックアイテムもさることながら、初めて見る技術と景色に驚きの声を上げる神官長も多い中、レイラは口を開いた。

「さて、と。」

こちらが現在のトブ大森林の様子です、風の巫女ちゃん協力のもとオンラインでお送りしておりますわ。

我々に必要なのは迅速な連絡と明確な状況把握の為の手段、事件は会議室ではなく現場で起こっているのです。神官長の皆様にも是非現実を見て頂きたくて、こちら御用意致しました。」

につこり、と微笑むレイラの言葉に若干の棘を感じる。何人かの神官長が気まずそうに視線を逸らした。

そういうところぞスレイン法国。

「《獄界絶凍》、あとは僕が。」

「ええ勿論、お願いしますね隊長。」

レイラの庄に戦く面々、それを諫め前に出た隊長が切り出す。

「レイモン様の招集により我ら漆黒聖典9名、参上致しました。」

概要も既に全員へ通達済み。神器所有者を護衛し破滅の竜王を索敵、神器による封印又は捕縛致します。

後は議会の承認を頂くだけです。」

どうぞ御用命を。

跪く人類最強の守護者達を前にして意気高揚する神官長達。信心深い彼ら彼女らなら必ずやり遂げてくれるだろう、満場一致で可決され漆黒聖典はトブの森へ派遣されることとなった。

……一人聖堂の奥でルビクキュー2面揃えに奮闘しているアンティリーネを残して。



「ぎげんよう皆様、仕事ですわ!!!」

私レイラちゃん、今皆でトブの森を大搜索して魔樹あなたをさがしてるの！

というわけでね、カイレ様亡くなっちゃいました！

：いやどういう事ですか!? ついこないだまで元気に私の領まで遊びに来て一緒に話したじゃないですか! その時もお元気そうでしたのに：

カイレ様が死ぬのは原作がスタートした後、独断専行したシャルティアを洗脳しようとして《巨盾万壁セドラン様》と一緒に貫かれ殺されてしまはずだったんですが、なにをどうしたら自室で大往生なんて話になりますの!?

おかげで中央政府は大混乱、当初の計画だった破滅の竜王洗脳作戦は要を失い御破算になってしまったワケなのですけど：おのれバタフライエフェクトオ! 半分くらい私のせいなんでしょうが!

「まーだ上は竜王を洗脳する気でいらっしやいますのね、頭スレイン法国ですか老人共は。」

「ねーちゃん、流石にそれはどストレート過ぎ…」

隣で義妹にツッコまれてしまいましたでしたがここに居る全員分かっているでしょうに、現時点で洗脳が不可能な今、神器で拘束なんて生易しい事言っられるほど竜王が軟弱でない事くらいねえ!

皆聞かないふりしてても私分かってますからね! 隊長とか溜め息吐いてるの誤魔化さないし、番外ちゃんも出撃不可とか舐めてるんですか?

ま、現実見てもらう意味も兼ねて今回リアルタイムで観戦してもらおうよう取り計らったんですけど。

初めは招集され漆黒聖典の顔ぶれが揃った時、《無限魔力》ちゃんの言葉からでした。

「ちよつとさあ、今回の仕事納得出来ないんだよね。」
って。

竜王が復活するのは良いとして、当時レイモン様と一緒にいた彼女と《占星千里》ちゃんが「議会はまだ竜王洗脳計画を諦めておらず、今回の出撃は国宝の新しい所有者を探す『時間稼ぎ』」だと知ってし

まったこと。

概算Lv80越えの準レイドボス相手になーに悠長なこと言ってるんだこのお排泄物共がつて話なんですが、彼らは竜王の強さなんて正確に分かんないんですものね。知ってりや即番外ちゃん出勤案件なんです！そもそも人類側の現存戦力で勝てるか不明ですけど…

「竜王相手に洗脳の下準備の下準備なんて悠長な事言つてられる暇なんてねーんですのよ。」

何故さつさと討伐に踏み切らないのか、コレガワカラナイ。

「まあ、それも兼ねて現実見てもらう為に《獄界絶凍》ちゃんに色々用意して貰ったワケだけど、よくあんな代物持ってたね。」

射影機の事ですか？

アレは学生時代お遊びで作った玩具みたいなものなので大した事ないのですけど。

ルーン文字知ってからより安定して通信ができるようになったのでこうしてお披露目した訳ですの。

「報告、連絡、相談は組織の基礎中の基礎です。いちいち伝令使つて時間かけながら上の指示待ちなんて前時代過ぎて欠伸が出ましてよ！」

「それで出発前に我々にこれを？」

隊長が自身の顚こめかみに指を当てながら聞いてきます。

彼等に渡したのは《伝言》を使えるようになるマジックアイテムで、片耳に掛ける通信機のような代物。本来は我が領地での情報伝達を素早く行う為に私とヘジンマールちゃんて考案したんですよ。

実際に領地で使ってます、いちいち伝令飛ばすのも手旗信号リレーするのも面倒ですし。

通信範囲がさほど広がらないので領内各所に中継塔を設置して効果範囲も伸ばしてるのですが、今回は隊員同士さほど離れる事もないので大丈夫でしょう。最悪クアイエツセ様の使い魔で中継させて貰いますか。竜王国に行った時持ってきた小鳥ちゃんで。

聞いててお察しの通り、このマジックアイテムは前世知識から着想を得て、製作、実現致しました。

安定した量産は出来ませんが作り置きはあるのでこうして隊

員に配布しても大丈夫。

へ？なんでこんなモン作ったのかつて？

学生時代、破滅フラグをへし折る為になんでもしていた時期がありました。手当り次第色んな研究に首を突っ込んで試し、前世の知識も持ち出して試行錯誤してたんです。射影機やこの通信機モドキもその中の一つですわ。

『口だけの賢者』が原作でも扇風機モドキや冷蔵庫モドキを開発して後世に遺したように、こちらの素材と技術だけでも頑張ればなんとか再現できちゃうみたいです。

この世界において情報の伝達速度向上は必須！

情報を制する者は異世界を征すのですわ！《伝言》の魔法はこの世界だとあんまり良いイメージ持たれてませんけど、そこは私努力しまして、使用する《伝言》同士の波長を合わせて信頼性を高めると共に秘匿性も増しました。ユグドラシルにも盗聴魔法とかあったりしましたからね、向こうの設定にどこまで通用するか分かりませんが盗聴対策しておくに越したことはないでしょう。

「これを使えば隊員同士迅速に情報伝達ができますし、連携も取りやすくなる筈です。」

破滅の竜王の前だと何が起こるか分かりませんからね。

それに、誰も知らない秘密装備で特殊任務なんて私達今とつても特殊部隊してるってカンジですわ！

実際のところ男性陣、渡された時ウキウキしてたでしょう。」

「くっ…否定できない…！」

身体は正直ですわね男子い！

ふっふっふ、我ながら準備が良い！

魔樹の復活が早まってしまった以上漆黒聖典を失う訳にはいきません、バタフライエフェクトで何が起こるか分からない今慎重に行動せねば！



エドガール・ククフ・ボーマルシエ

法国でも随一の名家、いわゆる「有名どころ」の家系ボーマルシエ家に生を受け、かの神々の子孫の証である血を覚醒させた逸材である。

その軌跡は才気に溢れたもの、学生時代は常にトップをひた走り、実技も座学も負け無しの正に神童と呼称するに相応しい男だ。さらに人格者で信仰心も厚いとなればもはや聖典入りは秒読み段階、彼には法国民として輝かしい未来が待っている事だろう。

調査の結果、選ばれし者しか使用できない神々の遺産を扱う資格を得たと判断された時、彼は確信を得た。

俺は選ばれた存在なんだ！
と

他の凡百とは違う、自分が特別である自覚。

正にエリート中のエリートであり、これからの法国を引っ張っていくに相応しい人物であると自らの心に刻み、本日初めて巷で密かな噂になっている「漆黒」の名を冠する聖典の隊員達と行動を共にしている。

隊長は若く、細めの優男ながらその目付きは鋭く常に油断せず状況を把握している。先陣を切り皆を纏める統率力も高く、リーダーに相応しい人物なのだろう。

隊員は皆独特の雰囲気だ。

法国の遺産に身を包んでいるので他の聖典のような統一感はないが1人1人が纏う気配は歴戦のそれであり、例えば自分が喧嘩を売ったら歯も立たずに負けるだろう。

あ、先程から後衛に徹している眼鏡女子は除く。彼女はサポート役だと予め説明を受けたので。

このような人達と共に働けるなんて望外の喜び、そして自分もいつかその中の一人に名を連ねるのだ！

「このサラダサンドうめえな…」

「ふ、そうでしょうそうですね。」

僕が仕事の合間を縫って改良に改良を重ねた品種です、その完成度たるや、みずみずしさは正に神域に達しているといえる。

特に中に挟んでいるこのトマト！

至高の甘みを出すためどれほど《獄界絶凍》と試行錯誤を繰り返したか…自信作です。」

《一人師団》、君だんだん老後の公務員みたいな生活になっていないか？少し心配なんだが。

野菜が美味しいのは認めるが。」

「おいコラ《疾風走破》、そのハムサンドは俺が抑えてただろうが！返せ！」

「えーこれは私のだけど？」

証拠でもあんの？《巨盾万壁》ちよつと自意識過剰なんじゃなあい？」（ニヤニヤ）

「証拠も何もそれ俺の齧りかけなんだよ！」

「え、なんだあ汚い。」

「人のモン盗つといてなんつー言い草だ!？」

「ちよつと、《無限魔力》がサンドイツチ喉につまらせてる！ナツちやん先輩お水お水！」

「《神聖呪歌》とお呼びなさい、貴女最近《獄界絶凍》の悪い癖が移ってますね…」

「水とお茶とオレンジジュースありますけどどれにします？

《無限魔力》ちゃんはオレンジジュース好きでしたっけ。」

「……！（なんでもいいから早くくれ！という顔）」

（なんだろうか、これは…）

すごく、ほのぼのです…

トブの森侵入後、周囲の安全を確保した一行は「破滅の竜王」捜索のため《一人師団》ことクアイエッセの使役するモンスターに索敵を任せ、現在報告待ちで休憩中だ。

人類未開の地であるトブの大森林、その内部に我々は居る。普通なら警戒のひとつでもする所だが索敵を始めてしばらく、突然《獄界絶凍》と呼ばれる女性が手にした鞆からピクニツクシートを広げ始めた所から始まる。

「そろそろお昼にしません？」

軽くですが作ってきましたので、使い魔の報告が上がるまで休憩しましょう。」

何を言ってるんだこの女は

エドガールが思った正直な感想だった。

国宝使用不可のうえ竜王復活の報を受けて厳戒態勢の今、国の最重要部隊たる漆黒聖典が呑気に休憩などして許されるのだろうか。

しかし他の隊員たち、更には隊長まで同意しこうして休憩時間に浸っている。

「よ、よろしいのですか？ 作戦行動中では…」

「《一人師団》の使い魔に任せておりますので問題ありませんわよ。

一流の戦士たるものに余裕をもって優雅たれ。

使い魔が帰還するまで暇ですし。人間、食える時に食っておかないと肝心な時に力が出ませんからね。ポーマルシェ様もどうぞ。」

《獄界絶凍》、そう呼ばれる女性からサンドイッチを渡され困惑しながらもそれを頬張る。

めっちゃうまだった、人類最強の特殊部隊は料理も一流なのだ！

そんな休憩タイムを挟んで少し、使い魔が帰還した《一人師団》の表情が陰しくなる。

「見つかったか？」

「ええ、此処から3キロほど離れた森の奥。

周囲の木々が不自然に枯れ尽くしたエリアが広がっているようです。

周囲にモンスターや亜人の気配はなく中央部には葉も枝もない大樹が一本聳え立っていると。」

「わーお何それ、絶対アタリじゃん。」

ヘラヘラ笑うクレマンティーン、その目は全く笑っていないが。

《無限魔力》がやっと喉の詰まりを治したのを見た隊長は手元のオレンジジュースをぐいっと飲み干し息を整え、宣言した。

「漆黑聖典、行動を開始せよ。」

無言で頷き合う面々、その表情は真剣そのもの。

強者が放つ独特の気配、思わず冷や汗を流すエドガールは彼等の雰囲気呑まれていた。

さつきまでのピクニック気分が嘘のようだ、このメリハリも彼等が一流たる所以なのだと改めて実感する。

《一人師団》の使い魔に導かれるまま進む一行はやがて開けた場所に出た。

森の奥だというのに周囲に木々は一切なく、赤茶けた平原が広がっているようだ。その中央、枯れた木々が墓標のように点々と立ち並び真ん中に不自然なまでに幹だけ伸びた巨大な樹木がどっしりと地に根を張っている。

「明らかに怪しい…:」

「こんな自己主張激しい竜王とかありますか?」

「周囲にモンスターの気配はなし、恐らく本能的に竜王の存在を察知し殆どの個体が立ち退いたのでしょう。」

「それで立ち向かったであろう一部の連中の成れ果てが、コレって訳か。」

《人間最強》が下を見やり、足で転がすのは山羊の頭のような形をした大きな頭蓋骨。

自分たちよりよほど大きなモンスターが此処でなにかと戦い、死亡したのだと判断できる。

「ふむ…」

レイラが徐おもむろにその白骨死体を触ると握ったそばからボロボロと崩れ落ち、灰のように空中に溶けて消えていった。

「損傷具合を見るに腹を一撃で突き破られ絶命しているようですわね、骨も触れば崩れる程極度に乾燥していて…一体何をされて死んだのかしら？」

「おーいキミ達！キミ達い！」

『ツツ!!』

隊員のものではない、聞き慣れぬ第三者の声に思わず全員が警戒態勢をとる。

煤けた平原の隅っこ、ポツンと佇む樹木から声の主は現れた。

ドライアード、名はピニスン・ポールペルリアというらしい。この辺りに産まれた木々に宿る妖精でこの辺りの情報を一番理解しているとして事情聴取をする事に。

漆黑聖典の面々に囲まれるさまは若干圧迫面接感があるが…

「なるほどお？つまりアンタはその魔樹つてのに怯えながら『英雄様』つてのを待ってる…それって何年前の話よ？」

「わ、わかんないよ。前に会ってから沢山太陽が登ってるから…」

妖精故に時間の感覚が曖昧な彼女に露骨に顔を顰める隊員たち、特にエドガールなどは亜人軽視の意識が強い神都育ち故に嫌悪感を顕にしている。

そんな中、ピニスンの言葉を頼りに情報を整理すると先ずこの魔樹が封印されたのは推定数百年も前の話、執り行った7人組の英雄達も姿と種族くらいしか参考に来ることはない。そもそも生きているのかすら不明だ。

今までは時々根が暴れ周囲のモンスターを襲う程度だったのだが、ここ最近その頻度が増え周辺のモンスターは絶滅。更には地中で根が蠢き他の木々にまで被害を出す始末なのだそう。ピニスン自身も魔樹の《絞め殺す蔦》ギャロップ・アイビーにより今もじわじわと養分を吸い取られている現状だ。

「ほら今も魔樹が蠢いてる！」

「いや俺たちには分からんし。」

隊長、お偉方はこの状況を観てるんだろ？ だったらさっさと拘束なり封印なりしちまおうぜ。いつまでもこんな辛気臭い所に居らんねえ。」

「そうだな。」

ボーマルシエ殿、準備をお願いします。」

「承知しました。」

エドガールが国より託された神器『革の戒め』。

言い伝えによれば鈍色に輝くその鎖は万里の彼方まで届き、神すら縛る強い拘束力を誇るそのアイテムは法国中央政府の承認によって此度の持ち出しが可能になった。

突然だがスレイン法国は嘗て六柱の神プレイヤーにより建国された国家である。

龍帝の起こした異変により空想の世界からやってきたプレイヤー達、彼等が遺した遺産もといユグドラシル産のアイテムは異世界こちらの世界で運用される際、法国内に神が直々に書き記した伝承書によってその効果を把握し適合者を搜索している。

（なーんか引つかかりますのよねえ…）

600年という長い月日が経ち、劣化しないマジックアイテムとは違い人々の伝承は薄れ変化していくものだ。

（あの魔樹は原作でいうところのレイドボスクラスなのでしよう？

『革の戒め』が拘束系のアイテムだとして、ゲーム世界のアイテム一つで易々と封印なんてできるのでしようか？ それこそ原作のワールド

アイテムくらいでないよ…)

そして今代の神官長が『革の戒め』の効果を都合のいいように解釈した結果、元老院は誤った判断を下した。

(…ッ！)

「神器よ、その力でかの竜王を鎮めたまえ！」

振り掲げた鎖の束が光り大樹へと躍りかかるその刹那

ぞぶり、と

エドガールの背を何かが貫いた

確かに革の戒めは敵を拘束する。

が、拘束するだけだ。

封印するなんてどこにもテキストに記載されていないしそんな効果もない、もちろんボス相手に半永久的に拘束など以ての外。そしてゲームバランス的に考えて、そんな拘束系アイテムの使用者など真つ先に狙われるシステム（ヘイト値を稼ぐ）になっている。

その結果がこれだ。

「ボーマルシエ殿ッ!!」

叫ぶ隊長と同時に地面が不自然に蠢き出す、怯えるピニスンがそこらの地面を指さしながら絶叫した。

「わああああ嘘だ嘘だ！」

もう完全に復活してるじゃないかあ！」

次々と地面から盛り上がる木の根、先は鋭利に尖っておりうねうねと蠢くそれはまるで生き物のように脈動し、隊員達へ殺到する。

「ジゼエエルツ!!!」

次の瞬間、レイラが叫ぶと地面に突き刺したハルバードから冷気が迸り、イガグリのように尖った無数の氷柱が的確に躍りかかる根を串

刺しにして凍らせた。この時になってようやく全員が襲撃を察することが出来た。

「隊長、ボーマルシエ様を！」

「分かってるー！ああクソツ…」

ボーマルシエ殿！ボーマルシエ殿！

間髪入れず撃杖を抜いたレイラの放つ氷の弾丸がエドガールを串刺しにしていた根をぶち抜いて、腹に穴を空けられた彼が力なく地に落ちる。

駆け寄った隊長が手元のポーションで回復を試みるが失った血は取り戻せず依然として意識が無いままだ。

（血を吸われている…！）

いや根を使って水分を吸っているのか!?

さつき《獄界絶凍》が調べていた遺体が風化するほど乾燥していたのはこれが原因か!)

あのまま根に血を吸われ続けていればエドガールは間違いないで死んでいただろう、隊長は戦慄した。

気付けば周囲は蠢く木の根で覆い尽くされ、まるで地面が波打っているかのよう。

「全員ひと固まりになれ、絶対に死角を作るな！」

《一人師団》と《占星千里》は状況の確認急げ！

「了解…ッこれは不味いですね。」

「ああ…うそ…やだやだやだやだ！」

青ざめる《占星千里》が示す先、震撼する大地に蠢く根の大元となるひとときわ巨大な大樹の幹、その中程がビシビシと音を立てながら横に大きく裂け、更にその上二箇所がひび割れ内部に赤い光が灯る。

それはおぞましく、引き攣った笑みを浮かべた笑顔のように。

もはや探知など掛ける必要も無く全員が目撃した

射影機を通し、映像だけであるが神官長達も見ている事だろう

全長100メートル長、はるか昔に空想より零れ落ちた理不尽の塊、世界を滅ぼす時まで擲擧された恐ろしき魔樹の復活を

「マジか、この巨体が動くのかよ…」

思わず見上げる《人間最強》、普段なら見上げるほどある彼の巨漢でも巨人と小人くらいのサイズ感がある。他の隊員も一様に奴の一挙手一投足を伺い厳戒態勢を緩めない。

「わ、わ、わ…こっち来るう！」

また、ピニスンが叫ぶ。

蘇った魔樹は軋むような唸り声を上げると先程とは比べ物にならない量の根が地中から盛り上がり一直線へこちらへと襲いかかってくるではないか。

「《獄界絶凍》（隊長） ツ!!」

常人では到底反応できない速度で迫る根の槍をパーティきつての高レベル二人が次々と叩き斬っていく。

「総員戦闘態勢！此処で応戦するぞ！」

「なんでよ、今からでも撤退すればいいじゃない！」

「瀕死のエドガール様と使えない神器を担いで撤退できるほど状況は生易しくありませんのよ！」

焦り撤退を推奨する《占星千里》、だが今も根を斬り捨てるレイラの言う通りだ、撤退しようにも来た道は暴れ狂う根に阻まれて戻る事も出来ない。

隊長は先程助けたエドガールが血を吸われていた事を説明すると何かを察した《占星千里》は鞆から地図取り出し眺め、顔を更に青ざめながら呟いた。

「ちよっと待ってよ、あの竜王つてもしかして…」

「あー…私も気づいちゃいました。」

「これって対応誤ると絶対ダメなやつですわね。」

「オイなんだよ2人して、説明しろ！」

《占星千里》の示す地図、嘗て暇つぶしと千里眼の練習も兼ねてトブの森周辺を覗き見し大まかな地図を作った事がある。アゼルリシア山脈の麓ふもとに位置するこの大森林は豊かな自然が育む好立地だ、そしてアゼルリシアから流れ落ちた雪解け水は地下水を通じて大森林の自然に濾過され川へ流れる事で周辺国へと伝っていく。

言わばこの森は巨大な浄水施設だ、気付くものは少ないがこの森がなければ王国も帝国も竜王国も、法国だって安心して水を当たり前のものとして享受する事などできはしない。

「《人間最強》、貴方朝起きたら先ず何をします?」

「なんだよ急に、祈るに決まってんだろ。」

「なら次は?」

「顔を洗わねえと一日始まらねえ。」

「次。」

「ホントどうした?」

そりゃ寝起きで口ん中カラツカラだから一杯の水で喉を………オイ、マジか。

竜王の目的はそれか!」

「そう、竜王も寝起きだ

喉が乾いて乾いてたまらない

「あいつ、この辺の水を吸い尽くす気だ!」

急いで阻止しないと法国どころか他国までヤバイ!」

仮にトブの森が竜王の手に堕ち、ここら一帯のように水も養分も全て吸い尽くされたでしょう。

アゼルリシアから流れる水は濾過されることなく諸国へ垂れ流される事になり、結果付近で水不足が多発する。綺麗な水を求めて人々は争い、やがて人類存続に影響を来すまでになるだろう。

「ナツちゃん! 私に “敵視誘導” の詩を!」

「はあ!?何を言ってるの 《獄界絶凍》!」

あれはモンスターに付与する詩ですよ、そんな事したら貴女に竜王の攻撃が殺到します!」

「それが目的でしてよ！」

私がデカブツを引き付けますわ、さもないと最悪此処で全滅して法
国はおしまいですー！」

「オイ待てよ、壁役は俺の仕事だろうが!？」

「じゃあ貴方、さつき根の動きが見えました？反応出来ました?？」

そう言われ《巨盾万壁》は言い返せず俯いた。

この世界は残酷だ、レベル差が大きいと理不尽なまでに圧倒されて
しまう。彼にはあのうねる根の一撃を目では追えても身体が反応で
きなかつた。

《神聖呪歌》のバフや武技の重ねがけで漸く反応できる程度だろう。

「隊長は全体の指揮がありますし、単騎でも戦えて機動力のある私が
囿に適任でしょう。」

ピンスンちゃん、お願いがあります。」

「えっ僕かい…?な、なんだよう。」

「貴女、地面に根付いているから魔樹の根が何処から来るの察知出来
るのでしよう?」

さつきも竜王が動いたのを一番最初に気付いていましたし、なら伸
ばす根が何処から来るのか彼等に教えて下さいな。」

少し、手伝って頂けませんか?」

にっこりと笑うレイラ、裏表なく必要ならば種族問わず助けを求
め、求められればそれに応えるのが彼女のモットーである。他の隊員
達も何も言えない、その手段が現状一番生存率が高くなる方法だと気
付いているから。そしてそれはピンスンにも言えること、その誠実つ
ぷりに思わず頷くしかなかった。

「話は纏まりましたわね、隊長!」

「ああ、ドライアードを取り囿むよう死角を潰し陣形を組め。」

《神聖呪歌》は言われた通り《獄界絶凍》へ《敵視誘導》を付与、《占
星千里》は弱点の偵察を、《一人師団》はタイムモンスターを使い陽動
の手助けを行い攪乱しそれ以外は後衛職を守護しつつ周囲の安全確
保を優先しろ。決して背後は取らせないよう心がけ行動するように。
《無限魔力》はポーマルシエ殿を頼む!」

「りよーかい、コイツお荷物だなあ…」

「おっと《無限魔力》ちゃんそれ以上いけない。」

「この状況を神官長様方も見ておられる筈だ、じき指示が下るだろう。

なら僕らは何があんでも生き残る、正念場だ漆黒聖典！」

13 破滅フラグを打ち破るべく策を講じてしまつた…

「こんツツツのお!!」

樹木と金属が擦れ合うとは思えないような奇音が大森林に響く。復活した破滅の竜王、もといピニスン曰く魔樹ザイトルクワエ。

100m超あるその巨体が動く度大地は揺れ、根本より蠢く側根が波のようにたわんでは森の生命を吸い尽くしていく。その両脇からまるで腕のように生える一際大きな根と枝葉で編まれた触腕とレイラのハルバードが音を超える速度でぶつかり合っていた。

吟遊詩人と神官というこの世界ではかなり異色の職業構成であるが、優秀な隊員である《神聖呪歌》によってレイラにかけられた“敵視誘導”は正常にその効力を発揮し、思惑通り魔樹は他の隊員に目もくれず彼女一人に苛烈な攻撃を浴びせかける。

それをレイラが弾く、弾く。時に舞うような回避を挟みながら、一撃でも掠れば五体ごと弾け飛ぶような威力でしなる触腕をいなしつづけていた。

それは国で最強と誉(ほまれ)高い彼等からしても既に人外の動きであり、同じ事をやれと言われれば苦笑いしながらお茶を濁すのが関の山。如何に彼女が規格外の存在なのか否応にでも思い知らされる。

「ふおおっ!? うひい!」

あつぶ! なっ! いいいいいい!!

ひいいこれ結構キツイ! しんどいですわ!

隊長オ! まだ本部から連絡は来ないんですの!」

「…依然対応を検討中だそうだ。

もう少し粘ってくれ《獄界絶凍》!」

「あのお排泄物クソ老人共何をモタモタしていますの、はよ決めなさいな!

人類滅亡の瀬戸際ですよ!!!

後で全員足の指一本ずつ凍らせてもぎ取ってやりますからね、それはもう丁寧に！」

「報復の仕方がエグ過ぎる!？」

あと暴言！気持ちわかるが暴言は止めて差し上げろ！」

2人はなんとなしに会話しているように見えるが周りは衝撃波で枯れた木々が吹き飛び無数の木の根が槍となり襲いかかってくる地獄絵図だ、隊員達はこんな時までいつものテンションで戦っているレイラに呆れつつ、確実に根の掃討をこなしていく。

聖典内でトップ二人除けば最高レベルの隊長を筆頭に、各隊員がそれぞれの役職に恥じぬ奮闘っぷり。特に目覚しい活躍を見せるのは目に追えぬほどの速度で次々と根を掃討する《疾風走破》ことクレマントリーヌと、周囲に数多の魔法陣を展開させながら魔法で援護に奔走する《無限魔力》だ、魔樹の根相手にレベル差が大きいのもある。しかしレイラが相手する魔樹本体のレベルは末端の根のほぼ2倍、たとえ数値で分からなくても歴戦の戦士である彼等の勘が「これは無理だ」と訴えていた。だからこそあの戦闘に加勢できない事に歯噛みする。

(クソがつ、これじゃねーちゃんの所まで行けねーじゃねーか！)

(天災撃杖ぶっぱなすには広さが足りないし、周り巻き込んじゃうよなあ…)

「《占星千里》、どうだ!？」

「まだ解析中…!？」

現時点で分かっているのは弱点属性と、魔樹の体力が桁違いに多い事くらい。

もっと近づけば早く測れるかもしれないけど…」

《占星千里》のもつ眼鏡、例に漏れず神々の遺したマジックアイテムである。

名を『英知の結晶』、眼鏡の見た目をしたその神器は相對したモンス

ターを通し眺め続ける事で段階的にステータスを公開する効果がある。

「そんな余裕は無いな…」

苦い顔で悪態を吐く隊長。

周りを見渡せばうねる木々の根で地面は覆い尽くされ、眼前にだつて捌くのが億劫になるほどの数がひしめいていた。今だつてレイラが本体付近の根も「敵視誘導」の効果に巻き込んで引き付けていなければこちら側は物量に圧殺されてしまっていただろう。

他の隊員達にも加勢できるほどの余裕はない。

現在《神聖呪歌》はレイラへの支援と同時に隊員達へも強化の詩を使っている最中である、その数なんと五種類。各人の強化が切れるタイミングで間髪入れず別の詩を入れる事で再発動までのラグをなくしパーティーを支えるその手腕には感嘆を覚える。彼女もまた人類の守護者に足る英傑の1人なのだ。しかしそれに掛かりつきりで回避の余裕などありはしない。

ピニスンを中心に内側にクレマンティーヌ除く女性陣と瀕死のエドガール、ティマー故に後衛にならざるを得ないクアイエッセ、外側に隊長達でそれを護っている現状なのだが、絶え間ない攻撃の嵐に迂闊に余所見をする事すら許されない。

(やべやべやべやべやべーいですわ！)

想定してたより魔樹硬い！体力多い！倒せる気がしなーい！

つーかよくよく考えたら大人数のパーティーで相手する前提のモンスターに単騎で挑むとか気が狂ってますわね、私グ○ブル廃人じゃねーんですから救援信号出したいんですが!?

え、ダメ？議会で過半数の賛成票が要る？なあんだいつもの法国ですわね！)

「おF○C○Kでしてよおおおッ!!」

((（またよく分からん事叫んでるよあの女…）（（

消耗し、ジリジリと追い詰められていく漆黑聖典。レイラの踏ん張りによってなんとか持ちこたえられているがこのままでは全滅するのも時間の問題だ。



「だからこそ！今竜王の討伐に踏み切らねば人類に未来は無いとあれほど説明したでは無いか！」

声を荒らげる大元帥。軍部を治める彼だからこそ竜王の脅威を正しく理解し、ここで始末をつける他にないと主張した。

しかし他の面々の表情は固い、この場に居る殆どは竜王の再支配に肯定的であるからだ。

スレイン 法国神都、中央議事堂内。

今この時に限っては人類の運命を左右すると言っても差し支えないこの状況でも悲しい事に、未だ彼等の意見は纏まらないでいた。

討伐に賛成しているのは大元帥、火滅と水明の神官長、そしてレイモンの4名だ。少なくともあと2人は味方に付けないと法国の方針を変更できない。

「討伐してしまえばもう二度と竜王を御せる機会は無くなってしまふ。エルフ国へ向けての圧力、ひいてはあの忌々しい『白金の竜王』を武力で牽制できるまたとないチャンスなのだ。」

反対する理由は様々あるが、法国の抱える問題の数々が彼等の首を縦には振らせなかった。

まず現在戦争中であるエルフ国。

突如として反旗を翻したエルフ王の強権により始まった泥沼の戦争だ。法国を騙し、当時の第1席次を拘留、強姦し望まぬ妊娠を強制させた罪は重い。世代が変わった今でも中央政府の神官長達はエルフへの憎悪を募らせ、王の首を狙っている。

しかし当のエルフ王は正体が不明であり、実力も行使する力も分か

らない。元第一席次が敗北したという実績から判明しているのはただただ「強い」という事実のみ。

未知の脅威を前にして万全の体制を整えたいという神官長たちの考えも理解できる。

そしてもうひとつ、評議国に居る強大な存在 「ブラチナム、ドラゴンロード」「白金の竜王」について。

本名をツアインドルクスⅡヴァイシオン。

法国が建国されるはるか昔から存命する強大な竜の一族であり、異種族入り交じる多民族国家アークランド評議国を治める永久議員だ。

彼個人と法国には僅かならぬ因縁があり、国は竜王の監視対象に置かれている現状。エルフ王と同じようにかの竜王もまた強大で、底知れぬ力の持ち主である。

国の切り札とも言える番外席次が表立って活動できないのも奴の監視があるからだ、だからこそ第2の切り札として破滅の竜王は確保しておきたい。

今の所かの竜王に目立った動きはないが、弱い人類はあらゆる手を尽くして危機に備えなければならぬのだから。

じゃあ番外席次と同レベルの《獄界絶凍》がなんで好き放題出来るのかっていうと、そもそも中央政府がその存在を把握出来ていなかったからだ。

彼女の出身地は神都より離れたド辺境の田舎領地、神格者としての価値を見出し接触した時には既にその強過ぎる自我に周りは振り回されっぱなしだった。本来なら嚴重に管理され、国に仕えるべき才能が突然辺境に生えてこられたら対応なぞできるか。

むしろ今まで自由奔放にさせていたからこそ法国の利益になっているし結果オーライだな、そうに違いない。

神官長達は無駄にポジティブだった

そんな反対派の彼等を眺めながら、レイモンは内心舌を打つ。

（やはり決め手が足りない…）

彼等の根本にあるのはやはり異種族への恐れ、種族差で劣勢を強い

られる人類に手段など選んでいられないのは分かる。だがそれに固執するあまり大局が見えていないようだ。」

ちらりと見据えるのは出発前にレイラが残した射影機だった。

その映像の向こうには今も魔樹と激闘を繰り広げる漆黒聖典の奮闘が映されている、この現場を見ながら「余裕そうだから拘束して封印」などと悠長な事を言っているだろうか。

「左様、そもそも討伐など可能なのか？」

「何を弱気な事を、人類最強の戦闘部隊である彼等が集えば勝てぬ敵などありはしない！」

番外席次の出撃さえ認められればな！」

「白金の竜王の監視はどうするつもりで？」

彼女を出撃させたところで奴に見られてしまえばこの国は新たな竜王の脅威に晒される事になるでしょう。」

「そうだ、《獄界絶凍》が足止めできているということは封印の芽が摘まれた訳ではない。」

「それまで彼女を使い潰す気かい？それこそ現実的じゃないね。」

されど会議は踊る

再び始まる喧々諤々の言い争い、中央政府のいつもの光景だ。隊員達は今も戦っていて時間の猶予などないというのに。

「馬鹿ね、たかが樹一本伐採するのに何をモタモタしているの。」

議場に響く澄んだ声（田村ゆ〇りvoice）。

不意を突かれた神官長達が凝視する先の入り口には白黒の髪を靡かせルビクキューを弄ぶアンティリーネの姿があった。

「…会議中だぞ番外席次、早々に宝物番へ戻りたまえ。」

「嫌よ、せっかくレイラが遊びに来てくれたのに緊急事態で招集を掛けたのは貴方達でしょう？」

彼女が居ないと退屈で堪らないわ。」

貴方達が相手してくれるのなら別だけど、と周りを見渡せば彼等は
気まずそうに目を逸らした。

最高神官長が退出を促すも彼女は何処吹く風か、マイペースにルビ
クキューの面合わせをしながら飄々とした態度に一部の神官長は顔
を顰める。純人間種ではない彼女を快く思わない議員も複数人在籍
しているからだ。

そんな中、レイモンに会議に割り込んできた理由を問われると彼女は
嬉しそうに大袈裟ぶって言い淀む。まるで悪戯を隠す子供のよう
に。

「ねえ最高神官長、私に出撃許可を出しなさい。」

そうしたら全部片付けてあげる。神器も神人も全員無事に回収し
て撤退できるわよ?。」

「それはできない。」

君の出撃には議員達の賛成票が半数必要だ、承知の筈だろう。」

「はあくホンつットに頭が固いわね。レイラだったらデカイ溜め息吐
いた後『その凝り固まった脳ミソ凍らせてシャーベットにしますわよ
!』って言ってたわよきつと。」

そんな猟奇的なこと言うわけが無い、と議員達は内心嗤うがふと彼
女の普段の言動と自分達への対応を思い出すとだんだん心配になっ
てきた。

やべ、本当にされそうかも

「レイラや《無限魔力》がさんざんお膳立てしてくれてるってのに貴方
達ときたら…」

これが人類の守護者名乗ってるんだから聞いて呆れるわ。」

「…結局のところ何が言いたい、君は我々をからかいに来たのか?」

「怒らないでよ最高神官長、私は…」

そうね、貴方達の後押しをしに来たの。

とある御方のご意向でね。」

とある御方？後押し？

議員達の頭に《？》マークが浮かぶ中、いち早く察したレイモンは慌ててアンティリーネに聞いたです。

「待て 《絶死絶命》！」

君が呼ぶ御方とはまさか…」

言い切らぬうちに入り口に居たアンティリーネはいつの間にか脇へとはけ、跪く。

開かれた大扉の影から現れた何か、それを理解し驚愕するまでさほど時間は掛からなかった。

「まさ…か…まさか貴方様は…!？」

震える声で椅子から立ち上がり、歓喜の涙を流しながら即座に床へ跪く最高神官長。他の議員達も座っている場合ではないと次々椅子から転げ落ちるように跪く。

スレイン 法国。

人類を守護し、繁栄を手助けする事を主命と定めた人類国家。

しかし嘗て六柱存在していた國創りの神々は寿命によつて滅び、最後まで人類を守護して下さったのは皮肉な事に異形の神だった。

かの大神には並々ならぬ恩がある、故に法国ではあえて『決して侵してはならぬ、強大にして荒ぶる神である』として奉り、恐れ尊ぶ事でのその威光を神都から遠ざけた。その社と本殿は今もレイラの領地である辺境ローグレンツにのみ現存し人と亜人の境界線から我々を見守って下さっている。

その神より遣わされた従属神、闇の神スルシャーナの遺した忘れ形見、竜王の探知すら届かぬ神都最深部に秘匿され議員達が幼い頃より昔からずつと眠りについており、神々亡き今もはや覚める事は永劫ないだろうと歴代の神官長から口々に嘆かれていたそれ。

『ひとよ　　たちあがりなさい』

その御言葉が耳に届いた時、神官長らは滂沱の涙を流さずにはいられなかった。レイモンですら齡50を過ぎた身にして幸運にも訪れた従属神との突然の謁見に涙し、そのお言葉を心に刻み付けている。それは多くを語らない。

しかし全ての神官長、並びに役職者達が「頭」ではなく「魂」で理解した。

これは激励である

至らぬ人類を導く為再び目覚め、重い腰を上げてくださった神からの啓示なのだ。

ふっ、と気配が消える感覚。肩にのしかかるようなプレッシャーが消え彼等は自由になった。

そこにはもうかの御方の姿は無い。皆一様に涙の跡を残しながら無言で頷き合い、席へと戻る。

「結論は決まった？」

結論？この場に限ってはそんなもの話し合う必要などないだろう。大元帥も最高神官長さえも咎めぬ中、にやにやと笑うアンティリーネに代表して指揮官であるレイモンが声を大にし宣言した。

「番外席次、《絶死絶命》の出撃を許可する。

並びに現場で存命の全漆黒聖典に通達を。」

その命に替えても竜王を討伐せよ

是は、人類を救う戦いである

アンティリーネは、《絶死絶命》は、鮮烈な笑みをもって命令への回答とした。

◆
もう何度目の激突か、触腕とハルバードによる剣戟は依然終わりを迎える気配はなく、余波で森が削れていく。

レイラ以外の隊員達も尽きる事ない根の猛攻を凌ぎ、体力の限界を迎えようとしていた。隊長やレイラがまだ元気に動き回れるのは単純にレベルが高いからだ。

「オラへばんなよ《人間最強》、その筋肉は見せ筋かア！」

「ツまだまだやれるさ。お前さんは元気だな《疾風走破》…」

「鍛え方がちげーんだよ鍛え方が！」

巨大戦斧を振り回す《人間最強》の背中を守るように立ち回り、背後の根を三本まとめて串刺しにし斬り捨てるクレマンティヌ。

レイラと一緒に領地を侵略から守り、亜人を殺して密かにレベルが上がり続けていた彼女はいつの間にか聖典きつての戦士に成長していた。

特に近接戦闘においては他より抜きん出ており、持ち前のスタミナと高速戦で敵を翻弄し急所を迷いなく串刺しにできるだけの技量を持ち合わせている。

「幾ら潰しても減ってる気がしねえぞコレ！」

隊長、このままじゃジリ貧だ！」

「盾の人お！後ろから来てるよ！」

「おっとさせるか…よっ！《無限魔力》殺れ！」

「はいはい《灼炎弾》フレアボムつと。」

ピニスンが指さす方へ移動し、大盾で的確に根を防御、すかさず《無限魔力》が弱点である炎系の魔法で根を爆破し燃やし尽くす。

このドライアード、なかなかいい仕事をしてくれる。地中を通して根の動きが把握できるピニスンから事前に情報を得て先回りで動けるのは盾役の《巨盾万壁》にとって大きなアドバンテージだ。

その時、クアイエツセの使い魔を通して隊長の通信機に連絡が入った。

「…皆に通達だ。」

現時点をもって竜王の再封印は放棄、以降は討伐を作戦の最優先事項とする。」

やっと決めたか！と隊員達が口々に騒ぐのも束の間、新たな問題が浮上した。

そもそもどうやってこのデカブツを討伐するのか？である。

根であるなら隊員達にも対処は可能だ、が大元の魔樹は隊長もしくはレイクラスの戦士でなければ話にならない。

2人を魔樹に当てるとして、戦力が足りなさ過ぎる。更に困った事にマジックアイテムによる観察を続けた《占星千里》曰くこの魔物は「ドン引きするくらい生命力がある」らしい。比較対象が他にこの世界に居ない為どの程度かは不明だが、とにかく規格外の体力を誇る個体なのだとのこと。

「それに《神聖呪歌^先》の具合も良くなさそう、今までずっと異能力を使い続けてるから…」

そう心配そうに呟く《占星千里》の隣で彼女は今も歌による支援を行っている。

歌で皆を強化する《神聖呪歌》の能力は魔力の代わりに喉を酷使してしまう、故に毎日の発声練習は欠かさないのだがそれでも彼女の喉は無敵ではない。使い続ければ痛めるし最悪潰れてしまう事だってあるのだ。

「やっべえですわ！」

皆さん屈んで身体を小さくなさい!!」

突如として耳元に木霊する令嬢の叫び声。

普段の余裕綽々な態度とは違う切羽詰まった声音に不思議に思い隊長が見上げるとそこには自分達の直線上に聳え立つ魔樹と、その中

間にはレイラの姿。

突如として動きを止めた魔樹はその左右に裂けた口を大きくかっぴらき、此方に向けて明らかに何かを「溜め」ている。

隊長が気付き、同じくレイラが撃杖を地面に打ち据え巨大氷壁を出したその直後。

耳障りな雄叫びと共に魔樹の口内から放たれるそれに氷壁は5秒と保たず粉碎され、直線上に立つ隊員達に襲いかかった。

「…え？」

戦闘員ではない《占星千里》の目には何が起こったのかすら理解できなかつた。

分かつたのは魔樹の繰り出す破壊音と圧倒的な風圧、それから向けられていく自分が死ぬだろうということくらい。

おそらく他の隊員達も同様だろう。

悲しいかなこの世界の半分は空想^{ゲーム}なのだ、熟練者が行っている技術の高さを初心者^{ゲーム}が理解できないように、レベル差があり過ぎると低い側は文字通り「何が起こったのか分からない」。

知覚外の高速であったり、知覚外の力であったり、頭で理解が追いつかない。気付いた時にはもう死んでいるか四肢のどこかを失った後。

まさに人智を超えた光景。

そんな感覚を今その身で味わっている彼女は意識が飛びそうになる中、どうにか踏ん張って耐えていた。

何故彼女がまだ生きているのか？

そこにレイラが立っているからだ。

魔樹が口から放つたのは無数の種子で作られた弾丸だった。

一粒がボーリング玉程もある大きさの種子、それが音速を優に超える速度で迫り来る。先程紙のように貫かれた氷壁からして、人体に当たればどうなるかなんて想像に難くない。

「くうううううううあああああアツツツ!!!」

それをレイラは斬っていた

凄まじい激突音に耳を潰されそうになるなか、ちゃんと目で追えて

いるのか一発一発丁寧に、背後に居る隊員達に当たらぬよう軌道を逸らし捌いていく。

「うぎイツ?!?!…いいいいツたいですわねえつ!!!」

その最中、金属の弾ける音がして彼女のハルバードが碎かれ宙を舞う、弾丸を斬り続けた衝撃に耐久力の限界を迎えたのだと理解する間もなく、無手になった彼女は怯まず直撃コースだった最後の一発を右手で殴りつけるように横へ薙ぎ、逸れた弾丸は幾つもの巨木を貫いて彼方へと消えていった。

「ご、《獄界絶凍》…ひいつ?!」

心配する《占星千里》が顔を青くする視線の先、先程弾丸を弾く為殴りつけたレイラの右腕にはハルバードの破片が突き刺さり惨たらしくへしやげ、指はあらぬ方向へねじ曲がっていた。見ての通り重症である。

「ふーッ…ふー…ツツ!!」

「早くポーションを！ 《獄界絶凍》無事か!」

「すまない、僕でも反応できなかつた…!」

「…腕も飛びませんでしたし…問題ありませんわ…」

私も、まさか氷壁を破る威力だとは思いませんでした。

「…ッ全員ピニスンちゃんの所へ、一箇所に固まりなさい!」

間髪入れずレイラは隊員達を集め防御魔法《氷雪結界・スノーボールドーム・アイギス聖刻》を発

動。覆うように展開された7枚からなる青白いドーム状の層が張られ、一拍遅れて襲い掛かる根や触腕の攻撃から身を守る。

「すげー…」

「緊急用の物理防壁です、長くは持ちませんしその場凌ぎにしかありませんわ。」

あ、ポーションどうも。」

慌てる《占星千里》から渡されたポーションを喉に流し込み、その独特な味に顔を顰めながら元通りになった腕の感触を確かめる。

（便利な世界ですわよねえ、現実だったら全治何ヶ月もかかる粉碎骨折なんですけど…

おかげで命が軽い軽い。

しっかしどうしましょうかしら。幸いさっきのタネマシンガンは必殺技みたいですので連発はしてこないようですが、即席とはいえ私の氷壁を破るだなんて…腐っても高レベル帯のモンスターって所ですかね。舐めてましたわ、反省しないと。」

「囮作戦は無駄になっちゃいましたねえ。と元通りになった腕を確認し、冷静に周りを眺めてみる。」

「まだ《神聖呪歌》の詩の効力があるのか魔樹は執拗にレイラを狙っているおかげで結界の外は地獄絵図だ、うねる根が今でも結界にまとわりつき凍らされ、それでも物量で押し潰してこようとするし、本体の触腕も凄まじい勢いで攻め立てている。」

「私なら『止める』事はできても殺し切るのは不可能、決め手が足りませんわ。」

「レイラに拘束の手立てがない訳ではない、奥の手を使えば拘束、或いは長時間の足止めは可能だ。」

「しかし発動に多大な時間を要する為詠唱中は無防備になるわ、発動してもその場に留めるだけで体力が天元突破したこの個体を始末できるだけの攻撃力は無いわで容易に使えない。」

「しかし放っておけばこの魔樹は一部の水源を吸い付くし、成長したその根は他国へと侵入するだろう。時間を掛ければ掛けるだけ不利になっていく。」

「あわわわもうダメだ、おしまいだあ！」

「んなこと分かってんだよ諦めんな！さっきからうるせえなコイツは!？」

「喚くピニスンを抑え込む《巨盾万壁》、共闘したおかげか2人には妙な信頼関係が生まれているらしい。」

「追い詰められたと判断したのか歌うのを止め、若干喉が枯れてしゃがれ声になった《神聖呪歌》がポーシヨンで喉を潤しつつ隊長に問い掛ける。」

「けほっ…結局全員まとまってしまいましたね。」

「隊長、どうします？」

「中央が討伐を決意した以上、討伐可能だと判断できるだけの理由が

ある筈だ。

「可能性としては…」

「番外席次の投入、ですか？」

頷く隊長、《無限魔力》だけ凄く嫌な顔をしたのをレイラは見逃さなかった。

「あの方が？」

僕のタイムモンスターにはなんの報告もありませんが…どうやって此処へ？」

《一人師団》ことクアイエッセはそのビーストテイマーとしての腕を駆使し、連絡用の使い魔の他にレイラの供回りとして数匹の戦闘用魔獣を向かわせると同時に探知に優れた魔物を数匹、森じゆうに散開させている。念の為の策として野良モンスターによる不要な横槍を防ぐ為だ。

伝達と探知と戦闘の三役同時使役にはかなりの実力を要求されるが彼ならば隊長も安心して任せることができる。

かなりの広範囲を索敵しており、効果範囲は森の出口である法国付近にまで及ぶが番外席次らしき影を見たという報告はまだ入っていない。

彼女が来るとしたら徒歩、といっても一般的に考えられる徒歩の速度ではないので探知が反応できない可能性も有り得るが…

「…ッ！」

隊長、魔樹の「すていたす」が変わってる！」

と、隊長が考えに耽っていた時。

《占星千里》の叫び声と、バキバキと何かが軋む音がしてハッと我に返る。

「おい…オイオイオイ！ヤベエってこれは！」

「…まあじっ！」

唾然とする隊員達、顔を上げた隊長も同じ表情にならざるをえなかった。

『魔樹』というカテゴリに属している以上、この竜王はその場に根を張り動くことなどないと思っていた。故に地下で根を広げ、面制圧によ

る侵攻を隊長は予測していたのだが…

魔樹の下腹部より盛り上がる2本の巨根が幹を支え、持ち上げている。人体的に言うならそれはまるで「脚が生えている」かのようなだった。

「お前…歩けるのか…」

思わず隊長もそう呟くしかない。

封印の魔樹ザイトルクワエ。トレント系の大型種に分類され、もとはゲームの中ボス程度だったそのモンスターは遙か昔に起きた「揺り返し」の影響を受け、異世界へと転移した。

ただの文字列だった設定は現実に反映され、植物だったのも影響したのか大森林の豊富な水と栄養を遺憾なく吸収し、それはそれはよく成長した。転移場所が人里離れた森の奥地だったのも大きい、ユグドラシル基準だとせいぜい大人数パーティで挑む初めての高体力、超大型モンスター程度だった彼は今やレイドボス並のHPと形態変化まで兼ね備えた究極の存在へと生まれ変わったのだ。

二本足で立ち上がったことによりその全長は約150m超、影で隊員達がすっぽり覆われてしまうほど。

「クワエが立ったあ!!」

何故か妙に馴れ馴れしい口調でレイラが叫ぶのと同時、踏みつけた片脚が音を立てて境界と激突し激しい揺れが一同を襲う。

同時に硝子の割れる様な音が何度か響き境界の表層が叩き割られた。

悲鳴をあげる隊員達、魔樹の足の裏までくつきり見える至近距離で流石のレイラも冷や汗を掻く。

「あつぶねえええですわ!」

一撃で障壁4枚持つてくのは強烈過ぎますって!強度上げるのにどんだけ苦労したと思ってますの!?

きいいいいっ!とヒステリックに吠えてみせるレイラだが内心必死だ、隊員たちを死なせないようにするには彼女が境界を維持し続けなければならぬ。でも守ってばかりでは攻撃に転じることも出来ず。

攻め手の不足にやきもきするレイラの上から再び巨木の踏みつけ

が襲い掛かる。

「このツ……執拗いですわね！」

瞬間、レイラが結界の内側に指で書いたのは見慣れぬ文字。

三文字程度のそれが淡く輝いたと思うと踏みつけを直撃させた脚が大きく跳ね、反動で勢い余った魔樹が尻もちをついた。

予想外の出来事に何が起こったのか分からずポカンと立ち尽くす隊長達を他所に驚愕する《無限魔力》が慌ててレイラへ駆け寄り問い詰める。

「は？レイラちゃん今のどうやったの!？」

「ダメ元でやったら出来ちゃいました！」

私が一番びつくりですわよー！」

「魔法に追加でルーン魔術を付与するなんて頭おかしいでしょ!!私にも教えて！」

「状況考えてくださるう!？」

襟を掴まれがっくんがっくん揺らされるレイラ自身もぶっつけ本番で成功させたらしく自分で発動しといて狼狽え方が半端じゃなかった。

しかし依然として危機的状況に変わりない、さっきの一撃で遂に限界を迎えた結界がひび割れ、更に根の猛攻を受けて一部が欠け始めた。

クレマンティーンがいち早くそれに気付き漏れ入った根を処理するが、今度は本体の魔樹がその巨体を起こし三度踏み潰そうと脚を振り上げる。

万事休す、誰もがそう思ったその時

魔樹のすぐ横、何も無いはずの空間から突然生まれた黒い渦から青い影が2つ、勢い良く飛び出し幹へと激突した。

苦悶の呻き声を上げながら今度は横倒しになる魔樹ザイトルクワエ。

同時にまとわりついていた根が一瞬にして微塵に刻まれ、救世主は

結界の外へ降り立つ。

レイラもよく知る顔が不敵な笑みを浮かべ、やってきた。

「弛んでるわね漆黒聖典。」



キタアアアアアアアアアアアア!!

番外ちゃんキタ!これで勝つるう!

「《絶死絶命》…!」

「まさか、本当に貴女に来ていただけるとは…」

あ、そうか。

皆さん驚いてるようですがどこがちが普通の反応ですよ。私だけ遭遇率が異常なだけで、本来は存在すら許されない、外観アノール○ンドみてえな聖堂の奥の奥に秘匿されたレアキャラクターですし。

ていうか魔樹を横殴りにしたのドラゴンじゃなかったですか!?!という事はまさか…

【見ない間に随分と煤けた面をしているではないか、レイラよ。】

「ムンちゃん!?ヘジンマール君もどうしてここに…いやどうやって此処へ来ましたの!?!」

【と、突然番外席次さんが領地へやってきて無理矢理…】

【領地の方はゲバルト殿が「任せろ」と。

なにやら面白そうな事になっているではないか。】

【義母^{ははうえ}上、ワクワクが隠せてないです。眼が真剣^{マジ}ですよ…】

魔樹の方を睨みながら獯猛に笑うムンちゃん。うん、戦闘狂ですね!それに付き合わされるヘジンマール君可哀想!

ていうか魔樹が倒れる直前に見えたあの渦、《上位^{グレートレポーターション}転移》でしたよね?そんな高位魔法が使える方なんて法国に1人しか居ません

わ!

確信をもってアンティリーネちゃんへ首を向けるとそれはもう無垢な笑顔で答えました。

「後で貢ぎ物ヨロシク、これ前借りだから。」

「本人の居ない所で私を担保にするなあ!!!」

思わず素が出ちましたわよ!

またあの御方の力を借りましたわね番外ちゃん!? 私のお菓子を担保にしてえ!

けれどけれど、これで魔樹と同レベルの矛と盾が揃いましたわ!

「隊長、決めに行きますわよ。」

番外ちゃんと2人で本体を足止めなさい!」

「なぜ? 私の異能力なら動きを止める必要なんてないでしょ。」

んゝ慢心! 慢心ですわよアンティリーネ!

相手は同格で何をしてくるか分からないモンスター、《The goal of all life is death》の効果をざっくりとしか知らない彼女が不用意に使って万が一撃ち漏らすなんて事があれば大惨事ですし、あの木偶の坊がボス特典で自己蘇生機能を持つていたら目も当てられません。

私の記憶が正しければかのスキル、即死耐性は問答無用でブチ抜けますが、死んだ後に発動する蘇生効果に対しては無力ですし。再発動可能になるまで何日掛かるかも不明ですからね。

なのでその不安要素を埋めるため、私が奥の手を使います。

発動までに時間が掛かり、動けなくなるうえに敵のヘイトも集めるであろうこの魔法を使うのは現状不可能だと思っていたのですが、ムンちゃん盾とアンティリーネ矛が居てくれるなら問題ないでしょう!

「貴女が力を効果を発揮するまでの間、あの木偶の坊には何もさせませんわ。」

なので魔法発動までの間、皆様におかれましては詠唱中の私を全力で守護もって頂きたいんですの。

因みに1日一回しか使えないうえ攻撃が掠りでもしたら詠唱失敗ですので気合い入れて介護して下さいませ♡」

「ハードルが高いな!？」

「けど面白そう、良いわ乗ってあげる。」

他の連中もそれでいいわよね？

大きいのは私と隊長で相手するから、貴方達は小物から死ぬ気でレイラを守りなさいな。傷一つつけちゃダメよ。」

アンティリーネちゃんの登場で一瞬呆けていた各々が瞬時に己の役割を理解し、大きく頷きます。

ほんと、漆黒聖典って優秀なんですよ。全員状況対応能力半端ないですし、非戦闘員のナツちゃんや《占星千里》ちゃんすら覚悟ガンギマリなの宗教の力様々って感じですよ。

クアイエツセ様はヘジンマール君となにやら話しているご様子ですし、他の男連中も傷付きながらも戦意は上々、遠慮なく守られてしましましょう。

『神聖呪歌』は引き続き強化を頼む、無理そうなら僕は外してくれて構わない。」

「ご冗談を、全員に満遍なく祝福を届けてみせます。喉も潤いましたし。」

「《占星千里》、《無限魔力》、僕と一緒に来て貰えますか？ヘジンマール殿と共に陽動を行います、結界の中に居るより機動力もあるし、安全でしょう。」

「わ、私?!分かった…」

「りよー。クアちゃんとヘジンマール君の組み合わせって珍しいねえ。」

「つて事は俺と《巨盾万壁》、《疾風走破》で《獄界絶凍》の護衛って訳か。」

ハハ、この期に及んで根っこの相手とは気が滅入る。」

「嫌なら止めても良いけどお?」

ぶっちゃけアタシ一人でもねーちゃんの護衛くらい楽勝だし。」

「ハッ、言ってくれるな!」

……本当にお前は強くなった、《人間最強》の名も返上しなきゃならんかもなア。」

「オイ止めろ、俺だつて《獄界絶凍》の奴に盾役を奪われて落ち込んでんだ。戻つたら鍛え直しだよチクシヨウめ。」

「オツサン二人の傷の舐め合いだあ、気持ち悪う。」

「オツサンちやうわ！」

ああ、これだから。

これだから人間が好きなのです。

絶望を前にして、泥にまみれても尚、進む事を諦めない。ゲームなどでは絶対に再現できない現実いまを全力で謳歌する人の輝きをどこまでも私は愛しましょう。

民を治める王も、鋤を振るう農民も、商いに精を出す商人も、皆生きていく。1と0の羅列などでは決して再現できない生きた人間。

それが世界の理不尽如きで脅かされて良い道理などこの世の何処にもあつてはならない。

民に寄り添い、慈しみ、人の営みを次代へと繋ぐ事こそ領主の使命。理不尽な淘汰を“生存競争”などと銘打つのなら、私は全力でそれを覆す。世界が勝手に決めた摂理データも限界値ステータスも全て踏みじって、人類の足掻きを偽りの神に突き付ける！

それがこの世界を愛したお母様の願いであり、交じり者の私が遣わされた天命なのだから！

「どんな時でも華麗に優雅に、一片たりとも慢心なく任務を遂行するのが一流の漆黒聖典ですよ！」

こんな所で彼等を失うなんて事、認めてたまりますか。

見せてあげましょう魔樹サイトルクワエ。

貴方がこの世界で規格外の成長を遂げたように、私もユグドラシルでは成し得る事のできない技術と力で完膚無きまでに打倒して差し上げます。

さあ、最高の理不尽を堪能なさい！

「お見せしましょう、私の超位魔法を!!!」

14 破滅フラグしかない特殊部隊に背中を任せてしまった…

僕が初めて彼女と出会ったのは齡5つの夏。

遠縁であるブラッドレイ家に賓客として招かれ、茶会でもてなされた時だ。当主自らが手入れし、自慢する程綺麗に整えられた庭園にテーブルや椅子を並べ、婦人の振るうお茶に舌鼓を打っていたそんな中、茶菓子を運んで来てくれた彼女が目についた。

僕と変わらない年頃にも関わらず母親に言われるままメイド達と共に手際よくテキパキと動き、菓子の入ったケーキスタンドを差し出す少女に僕は…有り体に言って「一目惚れ」してしまったんだ。

子供ながらに教養と気品を漂わせ、動く度優雅に揺れる銀の長髪、輝くような金色の瞳、雪のようにシミひとつない白い肌に思わず息を呑む。

トドメに社交辞令の笑顔で僕の心はノックアウト、直ぐに両親へ相談した。

我が？国スレイン法国では自由恋愛を認められているものの、貴族階級の者…特に僕のような強力な異能力を持ち、将来を期待されるような逸材にはより優秀な子を後世に遺す為、国から婚約相手を斡旋される事がある。

国に行く政略結婚のようなものだが、より強い子孫を残す為600年前から続く制度でありこの国では珍しくもない事だった。

当然僕にもそのお鉢が回り、国から選ばれた娘を娶る予定だったのだけど、そこにレイラが現れたというわけだ。

ファーストコンタクトは最悪の一言だったけどね

その頃の僕は…まあその、色々と調子に乗っていた。

両親からは毎日のように妹と比較され、優秀な子だと言いつけられてきた。僕自身も才能に恵まれている自覚があったし、テイマーとし

ての実力も他の者より抜きん出ていて、同世代の子供達と喧嘩になった時なんか5対1でも簡単に勝ててしまえる。大人も一目置く僕を止められるものなんて何も無い、そう確信していた。

でもそんな自惚れはレイラの前で木っ端微塵に打ち砕かれる事になる。

何度会話に誘っても素っ気ない態度を取る彼女にあらう事か勝負を持ちかけて、「勝ったら相手の言うことを何でも聞く」だなんて馬鹿な約束を取り付けたんだ。我ながら本当に愚かしい事をしたと思う

：

結果はお察しの通り大惨敗、両家の見ている前でそりやもうポッコポッコに打ちのめされて暫く立ち直れなかったよ。

ムーンウルフの群れも、結晶驚の大群も、ヤケになって出した切り札ギガントバジリスくさえ冷めた瞳の彼女は容易く蹴散らして、尻餅を着く僕の喉元に刃を突き付けられてやっと格の違いを思い知った。

どれも全く歯が立たず、バジリスクに至っては目が合うと石化するからって理由で彼女はずっと目を閉じて戦ってたんだよ、信じられるかい？

レイラと僕では根本から違ったんだ、聞けば僕と出会う以前から鍛錬に打ち込み、父親や衛兵達と共に毎日国境を守るため戦い、何度も戦場を経験した彼女と温室育ちの才能だけでぬくぬくと育った僕は成長の基盤と経験値が段違いだった。

両親はそれでも無理を言ってレイラと僕の縁組を組み、若いながら将来を約束され仮初の夫婦となった僕達だったが彼女から向けられる感情はとても淡白なもの。むしろ今まで僕と比べられ、役立たずとして家族内で蔑まれていた妹に甲斐甲斐しく世話を焼き、一緒に過ごす時間の方が多くくらいだ。

それから色々なアプローチでレイラの気を引こうとしたけれど結果は全部空振り。流行りの冒険譚、珍しい花や果実、神都からの勧誘すら彼女はなんの興味も示さなかった。

地位を盾にし、かなり強引な婚姻だったので相手方の御両親には反対されるかと思っただが、ゲバルト殿は「娘の選択に任せる」とし、当時ご存命だったカナミ様からは「やだ青春！クア君頑張つて！」と逆に激励を頂いたりもしたよ。結構放任主義なんだよね、御両親。

卓越した戦技、魔法を使いこなし、巫人を蹴散らすその姿はいつも完璧だった。

けれど僕らが婚姻関係になったその年の末頃、悲運が襲う。

カナミ様が亡くなられたのだ。

元々お身体が強くなかったのだけど、レイラを産んでから徐々に体調が悪くなる一方だったらしい。

それを隠して僕達を屋敷へ招いてお茶を振舞ってくれたり、病をおくびにも出さず他の者達へ気丈に振る舞われていた。本当に強い人だ。

葬儀が一通り終わり、名残惜しくも去っていく人々の中最後まで棺の傍に残り続けたレイラ。

いつもの自信満々の雰囲気とは違い静かなその後ろ姿に何か引つかかるものを感じて、帰路に着こうと外へ脚を運んでいた妹や両親を振り切つて教会へと戻った僕。

そこで彼女は泣いていた

麗しい金色の瞳に涙をいっぱい浮かべながら、しゃくりあげみつともなく、カナミ様が眠る棺に抱き着くように縋りついて。

葬儀中、皆の啜り泣く声が響く中、終始表情を変えず参列していた彼女が。

『あの娘は強過ぎるんだ。』

いつの間にか背後に立っていたゲバルト殿が僕へと語り掛ける。表情こそ殆ど変わらないがいつもの厳いかめしい雰囲気はなく、沈んだ様子で。

『人前ではブラッドレイ家の令嬢たる振る舞いを忘れず、誰にも弱みを見せない完璧な女、そう君の目にも映っていただろう。』

『完璧』

彼女がまさにそうだった。

誰よりも鍛錬に勤しみ、誰よりも勉学に励んだ。レディとしての作法も領民への気使いも全て、5歳という若さでこなしてみせた。

天才、そういう他ない。

更に努力も怠らず、弱き民を護り、救ってみせるその姿は…

『まるで英雄、ないし救世主のようだ。』

僕の思考に被せるように彼は続ける。

『娘は突然家督を継ぎたいと言い出してね。』

それまで蝶よ花よと育ててきたが、本人が望むならと武器の使い方を教えるにあつという間に上手くなって、領兵の誰も娘に敵わなくなつた。

正直怖くなつたよ。ズブの素人、しかも女の身でありながらひと月も経たず歴戦の近衛兵すら下した娘に。如何に儂血滯れの血を引いていたとしてもな。』

そこから語られるレイラの昔話は壮絶の一言に尽きる。

巫人襲撃の際は周りに反対されても必ず出撃し帰ったあとも血マメが潰れるまで毎日槍を振り続けた、更に母親から魔法の教鞭も受けながら寝る間も惜しんで試行錯誤を繰り返し、敵襲が来ればまた出撃…それを1年近くも続けている。

おおよそ5歳の子供が耐えられるものではない。

『努力の天才、そう妻は言っていたよ。』

あの娘は自分の為に泣かない。

泣く時はいつだって、誰かの為だった。

共に戦った衛兵が巫人との抗争で殉職した時、領民に被害が及んだ時、そして妻が死んだ時。』

齢5つの少女がだよ？と、皮肉って笑うゲバルト殿。

ハッキリ言つて恐ろしいとすら思ったよ。同世代の僕らじやせいぜい持つてたお菓子を地面に落としたとか、友達と喧嘩して泣くとかが当たり前なのに。

誰かの為じやないと泣かないなんて精神性、5歳の小娘が持つていいものじやない。レイラはまるで自分に興味がないみたいだった。決めた事を人形のように繰り返し、徹底的に効率を求めるその精神性に狂気すら感じる。

『君はそんな女の夫に名乗りを挙げたのだ。』

物怖じしたかね?』

『ッ……………』

…したよ、したさ!

そんな彼女と愚かにも付き合おうだなんて思った甘い自分に死ぬほど嫌悪した。

けれど、そんな心境とは裏腹に彼の問いかけに対して僕は笑った。笑えてしまったんだ。

才能にのぼせ上がった甘ちゃんだけど、惚れた相手に怖気付くほど臆病者じやない。まだ超えるべき壁がある、目指すべき目標がある。人生の指針が今、決まった気がした。

僕がレイラの夫になります。

構つて貰えなくてもいい、足蹴にされても食らいついてその隣に立てるように。

そしていつか僕が死んだら、僕の為に泣いて貰えるように。

自分でも驚くほど、言葉はするりと口から零れ落ちた。

『……………そうかね。』

それつきりゲバルト殿は喋らなくなった。

やがて一通り泣いた彼女が僕たちに気付いて慌てるあまり訳の分からない言い訳し始めたり一悶着あったけど、今は割愛しよう。

「お見せしましょう、私の超位魔法を！」

そう自信満々に宣言するレイラ、何をするつもりかは分からないが彼女が『決める』と言った以上僕の指針は決まってる。

「ヘジンマール殿、お願いします。」

「わ、わかったよクアイエッセ。」

後ろの2人も振り落とされないようにね……！」

レイラがアゼルリシア山脈より連れてきたフロストドラゴンの一匹、ヘジンマール殿。

地を這うバジリスクや帝国で起用される下級翼竜ワイバーンとは違い本来なら人と共存するなど考えられない上位存在、誇り高き霜の竜たる彼の背に乗せてもらえる事ほど光栄な事もない。

「《占星千里》、魔法で僕たちの足場を固定して下さい。かなり速度が出ます。」

「分かった……！」

サポート特化型の彼女なら普段使わないニツチな魔法も網羅している。足場が安定したのを確認し、僕は意識を集中した。

僕が持つビーストテイマーとしての才能の延長線、モンスター操作を応用させた騎乗能力。

本来なら汎用性はなく、召喚した大型モンスターに騎乗する程度のみ力しかないが僕の手には掛ければ騎乗モンスターのスペックを最大限かつそれ以上に引き出す事ができる。

しかしこの能力を使うためには僕との主従関係が必要だ、なのでヘジンマール殿には一時的に僕にタイムさしてもらい、従ってもらっている。

人より強い上位存在であるヘジンマール殿がわざわざ従ってくれているのはこれまで共に培ってきた信頼関係があつてこそだ。無理やり付き合わされたレイラの領地防衛で彼とは何度も戦場を共にし

た。

今回も彼の魔法実験に付き合うのを対価にこうして協力していた
だいているのだ。

…まさか人と竜の信頼関係を法国で得られる日が来るとは思っ
てなかつたね。

『飛行速度上昇』、『反応速度強化』

『千里眼・回避』、『中位筋力上昇』

『氷纏い』、『物理耐性付与』。

一先ず強化はこれくらいで。ヘジンマール殿、気分はどうです？

【悪くないけど、身体が勝手に動くこの感覚は慣れないなあ…】

蒼い巨体がふわりと浮き上がり、高速で飛び上がる。僕達に負荷が
掛からないのは《占星千里》の魔法のおかげだ。

そのまま一定の距離を取りながら魔樹の周りを旋回、過去にレイラ
から学んだ「何があっても対応できる距離」を保ちながら。

「申し訳ない、少しの間我慢して下さい。」

僕の操作で露払いと陽動を引き受けましょう。

《無限魔力》の魔法による爆撃で気を引き、《占星千里》はマジックア
イテムで引き続き観察を。」

「はい。」

クアちゃん知らない間にこんなこと出来るようになってたんだ、意
外。」

「レイラばかりに無理させてはいられませんからね。」

本体は隊長と番外席次様が引き受けてくれるはずですが根の量が
異常です、壁となるムンウエニア殿への負担は少しでも減らした方が
いい。

それに貴女の撃杖、小回りが効かないでしょう。」

「あれ、バレてた。」

「広域殲滅が貴女の得意分野です、これだけ開けた上空なら周りが巻
き添えになる事もないでしょう。」

回避は僕に任せて、あとは好きにどうぞ。」

「流石クアちゃん分かってるう。」

……親友の腕潰されて平気な顔してられるほど人間捨ててないんだよねー。」

気持ちには分かりますけど声のトーン下げるのはよしてくださいよ、《占星千里》が怯えているでしょう。

かく言う僕も許嫁を傷物にされて腸はらわた煮えくり返ってる訳ですが……目の据わった《無限魔力》が被っていた三角帽子からずりりと四角い箱のような撃杖が這い出て、それを肩に担ぐ。

気だるそうな瞳に殺意を込めて巨木を睨みつける姿は普段の彼女とはかけ離れていますね。学院生の頃レイラと共に上級生に喧嘩売りまくってた時期の雰囲気似ています。

レイラ、君は周りにもっと愛されている自覚を持った方がいい。

妹しかり彼女然り、貴女の為に暴走しかねない連中が聖典内に何人もいるのだから……

「よし、ぶつ殺すか。」

(この人達真顔で超怖いよお……)



「さあ、頼みましたわよ皆様!!」

レイラの合わせた手から広がる特大の魔法陣。

ドーム状の光中に曼荼羅の如く緻密な魔術の描かれた線が空に走り、傍目から見てひと目で「ヤバい魔法が来る」と分かる異様な光景の中心で彼女は詠唱を始めた。

それを見た途端目の色を変えて襲い来るザイトルクワエに再びムンウエニアが突撃をかます。

それに続くようにアンティリーネと隊長が左右に陣取り、触腕に向かい合った。

先程までレイラが纏めて相手していた分だ、隊長とはいえ気を抜けば一瞬でミンチにされる。そんな面持ちで挑む彼の横ではアンティリーネが得物の大鎌を振るい、叩きつけられた触腕を払う。そして返す刀で太い根を袈裟斬りにして見せた。

何の気なしにやってみせるその姿に自分との格の違いを改めて理解する。

「思ったより再生が早い…面倒ね。

隊長、右を頼むわ。左は任せなさい。」

「…ッ了解！」

トブの森から栄養をリアルタイムで吸収し、瞬く間に修復されていく触腕を呆れ半分に眺めながらボヤクアンティリーネに言われ、槍を握る手に力が籠もる。

思えば彼女と一緒に戦うなど生まれて初めての経験だ、ついて行けるか自信はないが…

(遅れを取る訳にはいかないな…！)

かかる触手を紙一重で躲し、触腕の接合部分を的確に貫く。国より貸し与えられたこの槍は姿こそみすぼらしいが強度と切れ味は他に比類なき神の国の業物だ、その鋒は自分が思うより深く魔樹へと食込み、威力のほどは苦悶の悲鳴となって森へ反芻した。

【《凍晶装甲》…】

アダマシアライズ

喉を鳴らし唸るムンウエニアから吹き出す冷気、視覚出来るほど濃く白い絶対零度の霧が彼女を覆い、爪、翼、牙、果ては尻尾の先までも深蒼の鎧で武装した彼女が大地を踏み締める。

咆哮と共に周囲の気温がぐっと下がるのを感じた。

アゼルリシアに古来より住まう凍土の竜種、『霜の竜』の一頭たるムンウエニア…イリスリム。血筋だけならあの『白金』にも通ずる、この世界で原初の端くれである彼女はレイラと戦線を共にする中で本

人も無自覚のうちにかの竜王が操る始原の力、その一端に触れていた。

レイラが異能力と位階魔法で行っているそれとは根幹が違う、氷属性の元素を用いた『始原の魔法』。もつとも、白金の竜王が放つような莫大な命のエネルギーの放出より規模は数段下がるが、嘗て八欲の王が敷き今や世界中に馴染んでしまったユグドラシルの理に囚われることの無い神秘の結晶だ。

岩肌を思わせる頑強な氷の鎧を纏うこの技は耐久性もさることながら、破損しても氷属性の魔法を浴びると自動的に修復される機能を持つ。そして周囲が冷えれば冷えるほど鎧の硬度は上昇し、防御力はムンウエニアの巨体で振り回せばそのまま攻撃力へと転じるのだ。

【食い破ってくれる!!】

蒼い暴君が迫り来る根の波状攻撃を容易く引きちぎり、蹴散らす。

人には決して真似出来ない異形の暴力をもつてして蹂躪するそのさまは正に『竜』と呼ぶにふさわしいだろう。

「凄いな、これがアゼルシアの霜の竜…」

感心する隊長を他所にアンティリーネは魔樹の異変を感じとり皆へ通達する。

「ッ嫌なもの見ちゃった…」

地上班、注意しなさい。キモイのが向かってる。」

空の一部に黒い斑点が見える。魔樹に使役されてか共生関係なのか、表面からうごうごと小さな虫系のモンスターが這い出して、耳障りな羽音と共に空を覆う群れをなし襲いかかろうとしていた。

「隊長、いったん離れるわよ。取り付かれたら面倒だわ。」

「了解、僕も集られるのは御免です。」

《無限魔力》！」

『あいあいさー…!!』

2人が身を引いたのとほぼ同時に、赤い稲光が何本も迸り黒い空に穴が空く。

隊長の呼び掛けに応え上空から無限に放たれる
ブライトオブ・スプライトウエブ
《赫灼の雷電網》、駆け抜ける赤雷の網が轟音と共に羽虫を焼き尽

くし、瞬く間に灰に変えていった。退路を確保した2人はムンウェニアの傍へと着地。

「2人ともじっとしている、《雪崩の吐息》!!」

アウアランチ・ブレス

ムンウェニアの吐く白い炎を思わせるドラゴンブレス、アゼルリシアのフロストドラゴンが放つ通常のものとは比にならないほど強力な絶対零度の吐息が広範囲に渡って撒き散らされ、残った虫達を瞬時に氷砕した。

レイラを守る地上班もそれぞれの連携を駆使し虫に対処している、空から降り注ぐ《無限魔力》の魔法に合わせ大小様々な虫系モンスターを捌いていた。

(…知らなかった、私と竜がいてもこいつらこんなに連携取れてるんだ。)

隊長の合図に合わせクアイエツセの操る騎竜が魔樹の注意を逸らし、《無限魔力》の飽和爆撃で的確にダメージを与えレイラ護衛の3人の負担を減らしていく。ヘイトをずらし攻撃を分散させる上手いやり口だ。

隊員達は知らないだろうが、普段出撃する事など殆どなく、あつても一人で全て解決してしまうアンティリーネにとって此度の出撃は長い人生で初となる合同作戦だった。

なので「レイラと隊長は兎も角、練度の低い他の連中が着いて来れなかったでしょう」と内心心配していたのだがそれも杞憂に終わる。むしろ突然現れた自分の指示を十分理解し、それぞれの役職が即座に最善の判断を取ろうとするあたり漆黑聖典のチームとしての有能っぷりが否応にでも分かる。

(団体行動じゃ私が一番後輩、か。)

彼らに感心する反面、ここにきて己の任務経験の少なさに僅かな焦りを感じた。こればかりは肉体の練度や戦闘技能だけに限った問題ではなく時間と経験の積み重ねなのだ。

以前の彼女ならこうはいかなかっただろう、独断先行で全て片付けてしまうアンティリーネだがレイラと共に訓練に励み、今は他者との協調性を理解している。

(ほんと私、何にも知らないな…)

国より厳しく秘匿され、大聖堂の奥で宝物番という名の軟禁生活。いつも見上げるのは無駄に綺麗に掃除された白い天井。興味はあれどおいそれと外出するわけにもいかず、レイラと話すようになるまで外に目を向けることなど終ぞなかった。

しかしここ数年、特にレイラが入隊してからこの国は変わり始めている。長命な彼女ゆえ、永きに渡ってスレイン法国の内部を眺めてきたなかでひしひしとその変化を感じていた。

そこに追い討ちを掛けるように『あの御方』の復活、もはや疑いようもない。

スレイン法国は今、改革の時を迎えているのだ。600年の歴史に胡座をかき、人類を庇護する目的のあまり亜人憎しの行き過ぎた排斥を唱える上層部の連中が成さねばならないこの国始まって以来の試練。

(問題はあのクソトカゲがどう動くかだけど、今は目の前の問題を解決しないとね。

…案外その辺から私達を眺めているのかも。)

ここまで派手な戦闘を繰り返しては間違いなく件の竜王に察知されてしまうだろう。仮に魔樹を討伐できたとしても問題は山積みだ。

特にレイラ存在に関して竜王がどのような裁定を下すかアンティリーネにも想像がつかない。けれど身勝手な言いがかり如きで数少ない(唯一の)友人を殺されるのは絶対に御免こうむる。

「ねえ隊長。」

「…?なんででしょう。」

「レイラを守るわよ。今もこれから、あらゆる脅威から。案外人類の命運って彼女が握ってるんじゃないかしら。」

「流石にそれは言い過ぎ…」

いや、貴女がそう仰るのならあながち間違いでないかもしれませんがね。

取り敢えず今は彼女の魔法発動に期待しましょう。あれほど自信満々のだから。」

「ふふふ、りょー…かいッ!!」

気合い一閃とばかりに飛び出したアンティリーネが目にも止まらぬ速さで魔樹の片脚を切り刻む。半分ほど幹を削り取られ堪らず膝を着く魔樹の顔が降りてきた所を見計らい、弾丸の如くムンウエニアが魔樹の眉間へとその巨体ごと飛び上がった。

「ごしやりと鈍い音が響き仰け反った魔樹が仰向けに倒れ、地を揺らす。」

「なんか、人型に近付いたせいとか戦いやすくなってる？」

「だな、バランスが崩れやすくなっている。」

力任せに振り下ろされる触腕の鞭もムンウエニアが盾となり2人を守る。入れ替わるようにして人類最高峰の戦士達が再び魔樹へ襲いかかった。

(やはり凄まじいな彼女達は、僕も遅れをとる訳にはいかない…!)

人と竜による人智を超えた戦い、それに交じる隊長も番外席次と肩を並べるまたとない機会に高揚していた。

『みんな聞いて!』

破滅の竜王がさつきの大技を撃とうとしてる!』

不意に隊員達に届く《占星千里》の警告。

戦闘中に彼女がここまでハッキリとものを伝える時がどういう事か分かっている者たちは即座に呼応し、戦いながら指示を待つ。

「ようやく視えたみたいですね。」

『うん、ドラゴンの背中からバッチリ。』

「溜め」の時間は15秒くらいでそこから《獄界絶凍》に届くくらい長い射程距離がある。見た目通り物理系統の攻撃で発射弾数は85から最大150発。

でも二足歩行状態で撃つ時は竜王にも大きな反動があるから必ず半歩引いて射撃体勢を整えないと撃てないみたい。』

まるで解説のようにスラスラと述べる《占星千里》の自信には理由

がある。

彼女が持つ『叡智の結晶』はユグドラシル産、それも末期に産まれた初心者救済用のアイテムだった。

戦闘中にモンスターの情報記録し攻撃パターンや弱点を知らせてくれる便利アイテム、だったのだが中級、上級者となればモンスターの弱点など幾らでも暗記しているし、何なら攻略法も非公式wikiを見ればひと目で分かる。結果「装備枠1つ潰す癖に戦闘中にわざわざ段階踏んで情報開示とか何このクソアイテム、頭運営か？」としてプレイヤー達から嘲笑の的にされていた代物だ。

ま、そんなことはゲーム時代のお話。

人類にとって未知が溢れ便利な攻略サイトなど存在しないこの異世界において情報アドバンテージを得る事が出来る数少ないアイテムだった。

それが上手く機能し、『占星千里』から得られた情報をもとに隊長とアンテイリーネは細かな指示を出し、空と陸から連携して根の侵攻を食い止める。

「予備動作が分かるなら対処のしようもあるな。

《獄界絶凍》、どうだ!？」

「あともう少し、もう少しですわ…!」

じれるレイラ、展開した大魔法陣はまだ点滅を繰り返し膨大な情報リソースが頭の中を駆け巡っている。そちらの処理に手一杯で防御は完全に護衛任せだ。

「お姉さん奥から3本来てる!」

盾の人は後ろ回って2本!筋肉の人、正面から5本!なんだこれえメツチャ大変だあ!？」

「「そりやお互い様だ!」「」

(仲良いですねこの人達…)

詩による強化を行いながらレイラの隣で護衛される『神聖呪歌』は緊張感の無い3人と1匹を眺めながら喉の調子と相談しつつ各員にバフをばら蒔いていた。

(それに比べて『獄界絶凍』…いえレイラは普段の態度からして有り得

ないほど落ち着いていて、雰囲気もガラリと変わって真剣な表情をしています。

超位魔法、でしたっけ。人智を超えた究極魔法だと聞き及んでいますが流石の彼女も真面目にならないと勝てないと悟った様子ですね。普段からこれくらい清廉で居てくれれば……いけないいけない、こんな事口に出していたらまた《無限魔力》から「あ、ママだ。」だなんて揶揄されてしまいます。

まったく：私はまだ未婚です！レイラと違って1つしか歳違わないですから！誰がママですか誰が！

：それにしても何故彼女からこれほど神聖な気を感じるのでしょうか。この娘一応扱いはスルシャーナ教の筆頭聖女ですけどそれだけが理由なわけないでしょうし。謎ですわ…)

(うおおああああ頭ン中破裂しそうですわ！)

ゲームの時だと魔法発動までの時間って待つだけでしたんでしょうけど現地人が使うととんでもねえ処理能力要求されますのね！

けど負けない！

うおおオン、今の私は人間魔力融合炉、流石にちよつと本気出しちゃいますわよく!!)

魔法陣の中、すまし顔で処理を行っているように見えるが本心はこんな感じである。緊張感死んでるのかお前は。

突如、いつだか聞いた雄叫びと共に魔樹が半歩さがり“溜め”の仕草を取る。その直線上には未だ魔法を唱えるレイラがおり、憎しみすら込めた魔樹の双眸は明らかに彼女をターゲットにしていた。

どうやら大技を放つ際にヘイトの誘導は関係ないらしい、一番危険度が高いと判断した相手のみを狙い撃ちにするようだ。

それを見るなり隊長が通信機越しの大音量で叫ぶ。

「総員、大技が来るぞ！」

「…仕方あるまい。」

ヘジンマールよ、後は頼む。」

【え、ははうえ義母上?】

生返事のヘジンマールをよそにそれだけ告げて飛び上がるムンウエニア、向かうは魔法陣の中に立つレイラの前。着地した衝撃で周囲の根は蹴散らされ飛散する中、彼女は降り立った。

同時にタイミングを測る《占星千里》が告げるカウントダウンに伴って魔樹の全身から軋むような不快音が響き渡る。

『発射まであと10秒だよ!』

【鎧の限界を試すには丁度良いか…】

セレスティアよ、私に向かって氷魔法を撃て!無限にな!」

『ちよつ、本名は出さないで!仕事中!』

【そちらの事情など知らん、急げ!】

『んもー!!』マジックターゲットイング・ワウン《魔法座標固定・個》

《氷塵乱れ吹雪》!!』

喚くセレスティア、もとい《無限魔力》から放たれた縦に伸びる氷雪の大竜巻がムンウエニアに直撃し、纏う冷気が膨れ上がる。

岩肌のようにだった氷の鎧はますます大きく膨れ上がり刺々しい氷柱で被われ、分厚い氷が何層も重なって得られる強度はいかほどか。まるで重装歩兵のようだ。

【まだ足りん!もつとだ!】

『それ以上纏うとたぶん自重で動けなくなるけど!』

【構わん、やれ!】

『じゃ、遠慮なく…!!』

レイラから手渡されたデイザスターショットワウン《無限魔力》の天災撃杖、その銃口の先が肥大化した翼を盾のように構えるムンウエニアに向かって火を吹く。

9つの発射口に展開された魔法陣から撃ち出される《電塵乱れ吹雪》が彼女へ殺到するのと魔樹が動いたのは同時だった。

激突音が響く、ムンウエニアが盾にした翼に種子の弾丸がぶち当たり、飛び散った流れ弾が周囲の森を抉り飛ばした。

【ぬうううううううッッ!!】

勢いの留まらない種子に鎧は所々が欠け続け、同時に降り注ぐ雹塵の大竜巻がそれを修復し続ける。無限に鎧の破壊と修復を繰り返さねながらそれでもなお彼女は盾役として立ち、最後の一発を終えるまで倒れること無く耐え抜いたのだ。

「マジか…耐えちまいやがった。」

「感心してる場合じゃないっての筋肉ども！」

手え動かせ！」

大技を終えても根が襲い来る事に変わりはない。

寧ろ後が無くなったのか攻撃はより一層激しさを増し、ピニスの指示が間に合わなくなるほどに忙しい。

「隊長、デカいの来るわ！」

「了解！」

最早なりふり構わないといった様相の魔樹が振り上げた両の触腕を番外席次と隊長が受け止め、弾く。更に《流水加速》、《大斬撃》、《疾風超走破》など数多の武技を駆使しバラバラに切り裂き大きな隙を作り出した。

(ッいける…このまま…)

大魔法陣の点滅が早くなり、徐々に収縮を始めたその直後、レイラの周囲から根が現れ襲い掛かる。

すかさずクレマンティーンがそれを処理、持ち場へ戻ったのだが傍にいた《神聖呪歌》が何やら周囲の様子がおかしい事に気付き声をあげた。

「ッ危ない！」

切られた根の先から別の根が更に生え、再び動き出したのを見た《神聖呪歌》は咄嗟に前へと躍り出てレイラを庇う。

完全に不意を突かれた形だった。クレマンティーンと護衛2人は別の根を相手していて気付いていなかったし、地中の動きでなかったのでピニスが反応できるわけが無い。魔樹の超回復力にものを言わせた強硬突破。

ただ1人、アンティリーネだけは視界の端に捉えてはいたものこ

の距離ではどう足掻いても間に合わない。

レイラに当たれば魔法は失敗、故にただ1人動けた《神聖呪歌》が
変わりに串刺しにされる。

そんな未来がアンティリーネの脳裏に過ぎった。

が

「なんだ、思ったよりガッツあるじゃない。」

突如として現れた鈍色の鎖が目の前まで迫った根を絡め取り、纏めて拘束し地面に打ち付けた。拘束を解こうとびちびちと気持ち悪くはね回るそれを眺めながら啞然とする《神聖呪歌》のすぐ後ろ、ピンスンの本体である木に寝かされていたポーマルシエが根性で意識を取り戻し、貧血で息も絶え絶えになりながら震える手で神器を握りしめている。

「……………戒めの…鎖よ…ッ！」

其れは、何も出来なかつた男の最後の足掻き。

ユグドラシル産アイテムに相応しくその拘束力は折り紙付き、何本も展開された鎖が2人を守るように這い回り、次々と根を捕らえていく。それに気付いたクレマンティーヌが慌てて合流したその時。

「お待ちせ致しました。」

天を衝くように巨大だった魔法陣が完全に収縮し、レイラの掌に収まったと思うと彼女を中心に可視化出来るほどの力場が生じた途端、拘束された周囲の根が瞬時に氷塵になって散り去っていく。

魔法発動には“名”を呼ぶ必要がある。

この世界で唯一普通の定義であり、彼女が人生でもっとも取り組んだ専門分野。

そんなレイラの集大成にして、ユグドラシルでも魔法職を極めた者

しか唱えられぬ大魔法。

宙に揺蕩う主なき極地の光

《異^エ端^イの書^ボ、冰^コ冠^トたる天^イ獄^キ要^ル塞^ス》

15 破滅フラグを踏み倒してしまった…！

展開術式収納

顕現座標固定

アンカーロック解除

天蓋 抜錨

《エイボンレ異端の書、コルド・イイキルス氷冠たる天獄要塞》

超位魔法とは。

DMMOORPG『ユグドラシル』において使用可能な位階魔法の頂点に位置する極大魔法、発動まで膨大な時間を要するのと引き換えに戦局を180°覆す程の効果を秘めた超絶魔法。

スレイン法国においては人の身では決して到達できぬ『第11位階魔法』として文献に記されている。

使用出来る者は有史以来、嘗て人類を守り抜いた六柱の神々が発動し、天変地異を起こしたとも、空を覆う龍を召喚したとも伝えられた伝説上の魔法。

どちらにせよ文字通り魔法を“極めた”者のみが唱えられる絶技である。

諸人ならば一生のうちに見る事など決してない神の奇跡を今、漆黑聖典の面々は目撃していた。

現れた“それ”は空を覆う銀幕の如きオーロラの中に聳え立ち、まるで空を泳ぐかのように浮遊する超巨大な逆さまの冰山。衛星のように周りを取り巻くように小さくまな氷塊が時折ぶつかり合い、削れ弾けた破片が太陽光に反射しキラキラと眩しく輝いた。

その幻想的な光景に誰もが呆気に取られ息を呑む。

「これが…」

「ねーちゃんの超位魔法?」

「ええ、ええ!」

皆様よく踏ん張って下さいました、これより先は私の…」

レイラが喋りきるより先に魔樹が動く。

術者が彼女だと気付いたのだろう。真っ先に触腕の矛先が向かい、その速度はアンティリーネさえ反応が遅れるほどだった。

「なっ!?レイ…」

動くな

隊長が飛び出そうとしたその刹那、視界が真っ白に染まる。

否、漆黑聖典全員の視界が真っ白になった。無論突然の攻撃で皆やられてしまったとか、正体不明の弱体化を受けたとかではない。

文字通り、真っ白になったのだ。

戦場だったはずの赤茶けた荒野、魔樹によって栄養を搾られ尽くし
一帯の土が変色するほど荒れ果てた土地が。

見渡せば辺り一面、土地も茂る木々も舞う木の葉でさえ白に覆われ

ていた。それら全ての光景が一瞬で凍結したのだと理解するまでに数秒要し、思わず吐いた吐息が宙に溶けていく。

広範囲を完全凍結、しかも自分達やピニスの本体は凍らせることなく留めているのを見る限り対象を絞って発動が可能らしい。

「お行儀の悪い触手ですね、エロとグロの区別もつかない無能は嫌われますわよ?。」

「質問を質問で返すド低脳ですかあ?。」とぷりぷり怒りながら彼女は眼前で凍りつきピクリとも動かない魔樹の触腕、撫でるだけで人を挽肉にできるそれを手で軽く払い除ける。払った先から崩壊が伝播し触腕の根本までどんどんび割れ崩れ落ちていく。それほどになるまで身体の芯まで凍らされたのだ。

相変わらず言ってる事は訳分からんが。

「《獄界絶凍》、この魔法は…。」

「あまり動かないで下さいね。今は皆さんを効果対象から外してますが、常人なら5秒で肺が凍って即死する空間にいるんですよ?。」

『ひえっ…』

レイラから告げられる衝撃発言に《占星千里》が思わず喉元を抑え顔を真っ青にした。

「《占星千里》ちゃん、魔樹のステータスどうなってるか分かります?。」

『…うう、ホントに喋って大丈夫なのコレ?』

えっと……うわ、何これ。

凍傷と行動阻害と回復阻害がとんでもないくらい重複して竜王に掛かっている、それで根の再生が遅いんだ。』

「ふむ、息してなくても根から水分を吸収しているから余計効きが良いようですね。朗報ですわ。」

ぱちんっ!とレイラが指を鳴らすと冷気が流れ生まれた氷が一瞬で組み上がり、2 m程の鎧騎士が30ほど彼女の背後に綺麗な隊列を成す。

驚愕する《無限魔力》が思わず呟いた。

『無詠唱魔法…』

「期間限定ですけどね。」

私の超位魔法はあの大氷山が出現している間のみ、あらゆる氷魔法がノーリスクかつ無詠唱で発動可能になるんですの。

それと、一部の魔法を除き氷以外のあらゆる攻撃は全て不発になりますのでその所注意して下さいまし。」

《異端の書、氷冠たる天獄要塞》

頭上に聳えるあの大氷山が現れている間、範囲内全ての氷属性攻撃は敵味方問わず大幅強化され逆にそれ以外の攻撃は弱体化される。ユグドラシルにおいて氷系統では二つとない最高クラスの広範囲魔法。

レイラ曰く「ぼくのかんがえたさいきょうのこおりまほう」とのこと。

ルーンにしる「撃杖」にしる、無詠唱魔法の確立なんて荒唐無稽な考えが一体彼女の何処から来たのか疑問に思っていた《無限魔力》だったがこれで納得がいった。

期間限定ではあるが既に無詠唱で魔法を行使する事ができるのなら、それを雛形に理論を作り上げていけばいい。レイラが開発した無詠唱魔法云々の起源、根源はこの超位魔法なのだ。

片腕をもがれた魔樹は白く染った体表をまるで脱皮のように身震いで無理やり剥がし、苦悶の雄叫びを上げた。しかし地表付近にある取り巻きの根は芯まで凍り付いているのか身震いの衝撃で全てが脆く崩れ去っていく。

3人がかりで止めていた根を一瞬で消し飛ばすその力に戦慄する隊員達。たった一言呟いた余波でさえこの威力なら、この魔法の真価はいったいどれほどのものなのか…

かつんっ！

レイラのブーツが凍りついた地面を叩く。

トレードマークたる白のストールが靡き、皆も見慣れた漆黒のドレス、靡く白銀のストール。その美しい口元にいつもの不敵な笑みを浮かべながら。

彼女は破滅の竜王と呼ばれるこの魔樹を確実に始末する気である。いつも領地防衛の際に相手している亜人達や竜王国のビーストーン、彼等の目的は多少の差異はあれど根っこにあるのは「種の生存」だ。人間が家畜の肉を食物とするように、彼らも食物として人を食い、活力として種を繋いでいる。

だが目の前の魔樹は違う、はるか昔に異なる世界からやって来た侵略者。^{インベーダー}

本来なら主人公とその仲間たちが人目の届かぬうちに始末してしまうが、この物語ではそうもいかなかった。

そこに意思は無く、^{フレバーテキスト}設定の通りにしか動けない、その行動の末トブの生態系を破壊するのなら容赦はしない。

この世界の弱い人類とは違う、自分には理不尽を覆す力があるのだから。

「皆様の頑張りのおかげでどうにか発動までこぎ着けました、平に感謝申し上げます。」

さあ、ここから先は私の独壇場！

たかが世界を滅ぼす大木ひとつ、この私の敵でないとその身に刻んで差し上げましょう！

さあ、アンティリーネ。」

「なによ。」

「いつも通り優雅に華麗に完膚なきまでに、人類を救いますわよ！」

「…ツ良いわね、乗った!!」

神の申し子、最強の二人が厄災の前に立つ。

世界を滅ぼす厄災、空を覆うような大樹を前にして不思議な事に彼女達は笑っていた。

「作戦は？」

「好きに動きなさい、私が完璧に合わせますわ！」

「ははっ！じゃあ遠慮なく行くわよっ!!」

高らかに宣言するレイラ、弾丸のようにアンティリーネが跳ねる、同時に地が凹むほどの衝撃が周囲を襲い、武技なしでも隊長が反応できない程の速度で飛び出した彼女は飛び乗った魔樹の片腕をその大鎌でなぞるように抉りぬけ、彼女の走った軌跡に沿って触腕が2つに裂けていく。

隊長と2人で戦っていた時もアンティリーネは彼に合わせていた。けれど今なら、同格と認めた彼女なら好きに動いても自分に合わせて戦ってもらえる。

それに負けじと先程砕け散った腕を再生させた魔樹が身体を這うアンティリーネを力任せに叩き潰そうと腕を振り上げるが、それを許すほど銀の淑女は優しくない。

「動くなど言ったでしょう！」

無詠唱で放たれた^{ヘルフロスト・ヘックスピラー}《冥府の六角氷柱》、紫氷で造り上げられた巨大な六角柱が魔樹の遙か上空から落下し、ピンポイントで振り上げた腕を撃ち抜く。

「おかわりもどうぞ、沢山召し上がって？」

続けざまに空から降り注ぐ氷柱の雨に体中を貫かれ、地面に縫い付けられた魔樹のものがきはますます激しさを増し、その分だけ地中から根を通して水分を吸収し回復しようとするが、^{イーキルス}大氷山の放つ凍気による鈍化でどんどん速度が落ちていった。

『おいレイラー！これ大丈夫ですか!？』

僕達にも当たったりしませんよね!？」

「ご安心くださいいな、ちゃんんと狙って外してありますわよ。ヘジンマール君、そのまま滞空してて下さいね。」

「りよ、了解です…不安だ。」

「それおくれバキウンバキウンバキウン!!」

おほほほほほほほほ!

((不安だ…!!))

外している、といつても超魔法が空からポンポン降ってくる真っ只中にいるのだ。ノリノリのレイラに尚更心配になったヘジンマールは勿論、彼に騎乗する3人も生きている気がしない。

「あああああああああつ!!」

妨害を受けること無く根本まで2つに裂いたアンティリーネ。

レイラの背後から次々に生まれる氷の鎖。

彼女が生み出す氷の造形は全てゴーレム魔法によるものだ、その名も《レギオン・メヒウシス氷帝重機兵団》。魔法の性質上『造形』を得意とするレイラはその自由度を遺憾無く発揮し様々な氷のゴーレムを自由自在に作りあげる。人型のものに留まらず剣、槍、杭、弾丸など彼女の知るありとあらゆる武器凶器が一瞬で組み上がり魔樹へ襲いかかった。

それも超位魔法発動中につきノーコストかつ無詠唱で。

天より降り注ぐ氷柱と武器の群れが魔樹の幹を次々と貫き、白銀の鎖ががんにがらめにして動きを阻害、さらに待機する漆黒聖典の護衛に騎士型のゴーレムを侍らせる。それら全てを指先シングルアクションひとつでこなし、みせるレイラにこれには同職の《無限魔力》もドン引き、マルチタスクどころの騒ぎじゃない。

「足場ア!」

「かしこまりましたよ!」

肩を伝って飛び上がり、すかさずレイラが創り出した無数の氷塊を足場に飛び回る。すれ違いざま魔樹の幹を所々切り裂いては別の足場へ飛び、また飛んでは傷つけていく。回復阻害によって修復が追い付かずどんどん体表を削られ、いつの間にかズタボロになった魔樹は咆哮と共に半歩下がった。

「もうそれは見飽きましたわ…よっ!」

咆哮が終わり種子が発射される直前、レイラの振り下ろした手に合わせて特大の六角柱が魔樹の頭に突き刺さる。

鐘を突くかように上から押さえ付けられた魔樹は思わず頭が下がり、発射口が閉じた所を見計らって漂う冷気が口元を縫い合わせるように凍らせた。

魔樹が慌てて塞がった口を開こうとするがもう遅い、行き場を失った弾丸は口内で暴発し、ありえないほど膨れ上がった幹がやがて風船のように弾け飛ぶ。

「「「「ええ〜：「「「」」」」」

『き、汚い花火ダナー！』

弾けた種の勢いで上半身が無惨に裂け、がくがくと痙攣する魔樹にからうじてそんな声を漏らした《無限魔力》に皆が無言で頷いた。

まさに圧倒的、先程まで全滅を覚悟していた破滅の竜王をまるで子供を弄ぶかの如く翻弄し手玉に取る彼女たちに隊長は改めて彼女達の格の違いを思い知る。

：もう全部あいつらでいいんじゃないかな

魔樹は弾けた幹を再生…できない。

吹き飛んだ顔面を崩れ掛けの触腕でヨタヨタと触ろうとしているがその動きは鈍く、幾重にも掛けられた弱体化が邪魔をして動く事さえままならない。

超位魔法発動下において魔樹の行動は著しく制限され、レイドボスクラスであれど弱体化はちゃんと通る。それに加えてゲームには存在しないレイラの異能力が《異端の書、冰冠たる天獄要塞》の性能を極限まで引き上げていた。

今の彼女なら国を覆う程の大火であれ、猛る火山の噴火でさえ一瞬で凍土に変えて余りある。

最早ザイトルクワエは狩られる獣、空に掛かるオーロラの帳の下、白亜の天獄要塞がトブの森全域を支配しているのだ。

「《占星千里》ちゃん、奴の体力は?！」

『……ダメ、相変わらず体力に変化なし!』

下がってるのは再生能力と他の耐性だけで魔樹本体の生命力は底無しよ!』

「ならば当初の目的通り、決めてもらうしかありませんわね。アンティリーネ?」

「任せて、確実に殺すわ。」

普段閉じ込められていた鬱憤を晴らすかのように暴れ回り、レイラの隣に着地したアンティリーネは待つてましたと言わんばかりに大鎌の照準を魔樹へと向ける。

同時に彼女の背後に現れる十二の時を示す機械的な光の時計板。

「The goal of all life is death」

彼女の呟いた詠唱らしき単語、決して長くないその言葉にレイラ以外の全員が息を呑んだ。

心臓を鷲掴みにされたかのような緊張感、一瞬ではあるが幻視した“死”のイメージに脚が竦む。

アンティリーネとレイラを除く、この中では最も強い隊長ですら思わず目を背けたくなるような嫌悪感に襲われるが、これは自分に向けられたものではない、そう言い聞かせる事で何とか表情を取り繕っていた。

「《死》」

おそらく魔樹に致命傷を与える魔法なのだろう、アンティリーネが唱えたそれは言ったきり何も起こることがない。その代わり、背にする時計の秒針がゆっくりと時を刻み始めた。



「…へ？」

思わず漏れたマヌケな声が白い吐息と一緒に口から零れる。

奴を確実に殺す為、即死魔法を唱えた瞬間全てのものが凍り付いて、一切の動きを止めていた。

見れば魔樹はもちろん他の隊員も身じろぎ一つしないし、空に舞うヘジンマールでさえ空中で礫にされたようにピタリと固定されている。

何もかもが止まった灰色の世界で私に優しく笑うのは案の定…

「安心なさい、安心なさいなアンティリーネ。」

なにその絶妙に艶めかしい声、腹立つわね。

「これ、何なの？説明して。」

「何って見ての通り…」

時を止めましたわ!!

「なあにそれえ…」

自信満々にぶちかますレイラに思わず私は白目を剥いた。隊長の気持ちがちよつと分かった気がする…

止めた？時を？周りを見れば納得せざるを得ないけど…文字通り時間を止めたと豪語する彼女に詳しい話を探ねる。

《異端の書、氷冠たる天獄要塞》で凍結の極地へと到達したレイラは遂に時すら凍らせるまでに至ったらしい。この魔法は要塞出現中につき1度しか使えないがひとたび使ったが最後範囲内に生きるあらゆる物体の動きは周囲の時間と空間ごと凍結し、文字通り何も出来なくなる。その代わり攻撃は不可能らしいけど…

彼女曰くこの超位魔法の発動範囲内で氷属性以外に唯一許された魔法、それが「即死魔法」。私だけ動いているのは即死魔法の発動者だ

から。

「貴女の即死魔法に私の時止めを重ねました。

言ったでしょう？あの木偶の坊は何もさせずに始末すると。」

「…やってる事めちやくちやね。」

「理不尽には相応の理不尽をぶつける、それがこの世界で私達が行えるたった一つの冴えたやり方でしてよ！」

ああ、そう。

時間の止まった世界でも《The goal of all life is death》の効果はまだ続いている、この技が発動するには時間が必要だから。レイラはこの時間稼ぎがしたかったのね。

時が止まってるのに時間が進んでるなんて変な感覚だけど…

この灰色の世界が終わったら間髪入れずに技^{スキル}が発動して、竜王は死ぬわけだ。

向こうからすれば何が起こったのかすら分からない、まさに理不尽極まりない。

「じゃあ最初から時止めすれば良かったのに。」

「対象がデカ過ぎましたからねえ、弱体化を重ねがけしてからでない
と耐性に弾かれるかもしれないから。」

「ふーん。」

ほんと、よく考えて動いてるのね。」

体感で分かっている、御大層に「破滅の竜王」と呼ばれるこの魔樹は私達より一回りは格下だ。レイラもそれを分かっているはず。他の隊員を守るというハンデがなければ1人でも魔樹討伐をやつてのけるだろう。

それでも彼女は決して策を怠らず、わざわざ自分より弱い隊員達に守って貰い超位魔法発動という賭けまでしてから丁寧^{丁寧}に布石を用意して確実に始末しようとした。見かけによらずその慎重っぷりには思わず頭が下がるわね。

…もし私が単独で相手していたらどうなっていただろう、きっと直ぐに異能力を発動して魔樹の持つ耐性とやらにも気付かずに…

シミュレーションが足りてない、全く油断もいい所ね。あれほど

こっぴどくレイラに言われたつてのに。

針の先は後半へ差し掛かる、魔樹の終わりももうすぐだ。

「私もまだまだ勉強が必要つて事か、人類守護の柱を名乗るには経験不足ね。」

「あらく貴女からそんな単語出てくるなんて意外ですわつてつきり無限に強者との戦いを望むバーサーカーだと思つてました。」

「あんただけには言われたくないわよ、この人でなし。」

「そりやお互い様でしてよ！」

軽口を叩きあえる仲の友達なんて無駄に長い人生の中で初めての経験、なのよねえ…

カチコチ カチコチ

妙に癖になる針の音

「ねえアンティリーネ。」

「あによ。」

「楽しかつた？」

「!!……そうね、いい気分転換にはなつたわ。」

久々に思いつきり外で力を使える機会だつたし、ね？

…ありがとう

かくして、晩鐘の音が色の戻つた世界に響く



「そして時は動き出す…ですわ。」

アンティリーネの背後に光る時計の針が一周し、天を指すのとレイラが呟いたのは同時。

時を飛ばされた自覚の無い隊員達は突然の状況変化に付いて行けていない。

理不尽なまでの弱体化と数多の波状攻撃、更には口内で自爆までしてみせたボロボロの魔樹の体軀から力が抜け、仁王立ちのままだらんと動かなくなつた。

状態異常の名は「即死」。有効判定を受ければどんなに力があるうと、どんなに天井知らずの体力だろうと強制的にゼロに至らしめる、空想の^{ゲーム}世界だからこそ実現可能な理不尽の極み。

赤く輝いていた眼光も完全に消失し、恐ろしいほど静かになった荒地の大木に恐る恐る《占星千里》がアイテムで目視して驚愕の叫び声が響く。

『しん…でる？』

魔樹、完全に沈黙…：隊長!?

さつきまで笑つちやうくらい体力があつた筈なのになんで？どうして!?!』

「私と獄かい…もういいや、レイラで殺しといたわ。もう動かないし復活もしない。」

『カロンの導き』の刃腹を軽く撫で、なんとなしに言つてのけるアンティリーネに隊長は驚きを隠せないが…

「ホントに死んでる！死んでるよオ！」

ボクに繋がつた魔樹の根が消えてるんだ！

もう苦しくないや！わああいやつたあああああ！」

大声で狂喜乱舞するピニスンを見る限り本当に討伐されたのだから。終わりは随分と呆気なかつたが。

バキバキと耳障りな音を立て、足下から白く凍っていく魔樹。

この超位魔法内で殺された命は決してもとには戻らない。何故か

? そういう効果なのだ。^{テキスト}

大氷山から放たれる冷気は通常の氷属性魔法のそれではない。身体の芯まで凍てつく波動に当てられたが最後、生命活動が完全に停止しても対象は氷の監獄に囚われ死に続ける。

故に術が解けても蘇生魔法は効果を失い、使用者であるレイラが赦すまで永遠にその罪を償い続ける事になるのだ。

唯一許されている即死魔法もこの効果を補助する為。

再生能力を阻害され、行動を阻害され、弱体化で丸裸にされ体力関係なく即死させられた魔樹は全ての抵抗を失い文字通り何もさせて貰えなかった。

眠るように全身がゆっくりと白く染まっていく魔樹に知能や感情があるのなら死の間際、心から叫んでいた事だろう。

理不尽だ、と。

100メートルを超える巨体が白く染まりきり、森の中でもひときわ目立つオブジェができあがり。

おーっほっほっほっほ!!!

誰もが唾然とする前で銀の淑女はいつも通り、自信満々に高笑う。

「世界を滅ぼす暴れ柳如き、私にかかればなんのその!

またまた華麗に世界を救ってしまいましたわ〜!!

自分の才能が恐ろしくつてよ!」

大氷山が少しずつ崩れ落ち、氷の世界が消えていく。やがて戻った青空から射す光に照らされて、かつて魔樹だった巨大な氷像が輝いて見える。

静まり返った森の中、大きな戦いが終わったのだと漸く理解した。

「…状況終了、だな。」

安堵を込めた隊長の呟きに皆が頷き、無駄に高い所から魔樹を見下すレイラを半笑いで見つめるのだった。

封印の魔樹、討伐完了!!



ところ変わって、ここはスレイン法国中心部。

神都中央、白亜の大聖堂 “ドラグノア” 内部、嘗て建国の神々が御身自ら創造した由緒ある建築物。その議會の間にて12人の賢者たちは映像越しに事の顛末を観戦し、巫女からの通信が途切れたのか映像が消えた。

誰一人言葉を発さなかった。

否、発する事ができなかった。

何故？

漆黒聖典は全員でないにしろ出撃し、隊員達も皆無事である。満を持して投入した番外席次は、その圧倒的な力で見事破滅の竜王を討伐せしめた。

勝算すら怪しいと散々紛議していたが蓋を開けてみれば人類側の
大勝である、彼等を派遣した者としてこれ程誇らしく名誉なことも無
い。

なのに議会のお歴々はみんな揃って頭を抱え、ある者は下を向いて
ブツブツと呟いているしある者は隣と神妙な面持ちで話し合っ
た。

そんな中、意を決したようにレイモンが席を立つ。

「破滅の竜王は無事討滅された。」

だが後始末は我々が付けねばならない、皆の意見を伺いたいのだが
…」

「意見も何もないでしょう。」

彼女は：正しく神の申し子だ。」

いの一番に返した風の神官長の言葉に場の空気がぐつと重くなる。

レイラ・ドウレム・ブラッドレイ

第13席に籍を持つ彼女はそのコードネームに恥じぬ働きをし、神
官長達の目の前で番外席次と共に使命を全うした。

その証拠に先程まで写されていた映像には彼女が発動した魔法で
完膚なきまでに打ちのめされ、今や森に建つ巨大オブジェと化してい
る魔樹がある。あれほどの巨体を完全に止めてしまえるほど強力な
冷氣、それを可能とした大魔法。

此度の活躍をもって、神官長達の認識はひとつになった。

彼女こそ間違いなくこの国において最高、いや現存する人類で最も
高位の魔法詠唱者だ。

人の理より隔絶した身体能力

人の知を超えし超魔法の行使

何よりその若さでかのフルーダよりも高位の魔法詠唱者に辿り
着いたその才能、彼女から提供されるアイデアには毎度驚嘆するしか
ない。

番外席次と同じ、正しく『神の申し子』だと。

「相違ない、《獄界絶凍》こそ《絶死絶命》に次ぐ神の御使い。

人類救済へ新たな道が開かれた訳だ。」

「しかも番外席次と違って彼女は純人間種、我が国でも大手を振って迎え入れられる。素晴らしい事じゃないですか。」

カイレの予期せぬ死亡により国宝は実質運用不可能になったが、レイラの活躍は人類に大きな利益を齎すだろう。

だがしかし、この場に浮かれ気分の者など一人もいやしない。だって、だって…

「よりによってあの娘がねえ……」

ぼそりと呟いた水の神官長の言葉が全てを物語る。

かつて国の方針として迎え入れた聖典一番の問題児、やる事全てが破天荒で奇々怪々、この世の理不尽全てを擬人化したような女。訳わかんないこと言いながらしつちやかめつちやかに場を掻き回す癖に最後は必ず大団円で納めてしまうヤベー奴。

学生時代、学院内に数々の伝説を打ち立て、卒業した今でも後輩達の間で噂語りになるほど。

辺境領主として社交デビューした際には汚職貴族達の悪行を次々と暴き、某徳〇八代目將軍様の如き手際で華麗に処断した。

彼女の領地に住む者たちは種族問わず平等で、圧政もなく民の満足度が高く、それが生産性向上に繋がって高い利益を生み出しているのだから文句の付けようもない。

国より発行される情報誌『移住したいスレイン領ランキングBEST5』（法国情報部調べ）によれば彼女の領地は国の端に加え、亜人の脅威と隣り合わせというハンデがありながら5年連続1位をキープしている人気領だ。実際彼女の領は高地で夏は涼しく快適で、冬季の冠雪時期と亜人の襲撃に目を瞑ればとても過ごしやすい。ドワーフ工場やエルフ工房の総本山である為辺境でありながら新たな技術や流行の生まれる場所。

レイモンだって認めたい、「人類救済の為にはレイラの方針が一番

正しい」と。

600年続く人類至上主義の教えに反し、柔軟な思考でエルフやドーフと手を取りながら歩む彼女には我々とは違う道があった。

彼女の描く人類救済は国と方針こそ違えど、皆が等しく平等に生きる事ができる。

だがそれを認めてしまうことはこれまで600年の人類の歩みを否定する事に他ならない。何より仮にこの場の全員が彼女の思想を寛容したとしても、国民達がそれを許さないから。

積もり積もった異種族への思い込みによる差別意識、生まれた壁はもはや一代で取り除けるほど生易しいものではない。それもこの思想を良しとした中央議会の怠慢であり、歩みを止めた自分達へのツケだ。

そんな瓶の底にこびり付いたプライドを払拭しようと立ち上がった者がいる。

「……我々は変わらなければならない。」

漆黒聖典指揮官、レイモン・ザグ・ローランサンその人であった。彼の言葉に皆が顔を上げ、続く言葉を注視する。

「国宝の機能不全、《獄界絶凍》の発動した超魔法の存在、そして“あの御方”のご帰還。」

これ程の事態が立て続けに起こった。

当初の目的通り封印の魔樹を洗脳しようと動いていればどうなっていただろう。

直前になつてカイレが病死し、なかばパニックに近い中レイラの機転がなければこうして現状を把握する事もままならないしアンテイリーネの出撃許可すら“あの御方”直々の御言葉がなければ今も議会は紛糾したに違いない、そんな悠長な事をしている間に漆黒聖典は全滅していたかもしれない。

聖典壊滅はつまるところ、法国の国力低下を意味する。戦力が個々の力に依存しているこの世界において国に所属する実力者の喪失は防衛力の低下に直結するのだ。

「目まぐるしく変わる情勢の中、いつまでも同じ椅子に固執して待っているのは破滅しかない。」

今一度方針を見直し、我々のあるべき立場をあの御方へ示す必要がある。」

お忘れですか？

かの神々が何故我々を救ってくださったか、どうしてスルシャーナ様は不死の命を賭してまで人類を比護して下さったのか。

それは哀れみではなく希望である

文明を得ろ、仲間を増やせ、組織としての基盤を構築せよと。ただ闇雲に日々を生きるのではなく、「活きる」と、それだけの時間を賜った。

亜人に虐げられ餌にされる運命だった人類は今日とは違う明日を見れたのだ。

決して『人類が特別だから』などと思いつてはいけない、それでは自分達を虐げる亜人たちと同じになってしまう。

「何故スルシャーナ様が御身を犠牲にしてまであの御方：ルーファス様を後世に遺したのか、何故今このタイミングでお目覚めになられたのか。」

諭すようなレイモンの言葉を神官長達は黙して聞き続ける。

彼等とて自覚はある、このままの方針で国を運営していれば維持は容易いだろう。だがそれだけだ。度重なる亜人達の襲撃、終わりの見えないエルフとの戦争、そして各人間国家で浮上する問題の解決。未知の課題が山積みの現状において停滞が最善手であるはずが無い。

「残された時間は少ない、国の前に先ずは我々が変わらなければ。」

そう締めくくる彼に再び議場は静まり帰り、静寂が聖堂を包む。

不意に手を挙げたのは火の神官長だった。

「ならば、具体的には何を？」

「各国への問題解決における対応を今一度考え直す必要がある。」

比較的安定した帝国は兎も角として、竜王国への支援や王国の犯罪組織など枚挙すれば問題は山のようにある。」

「特に王国の麻薬問題は可及的速やかに解決せねばならない問題だ、黒粉が広まればやがて帝国や我々の国にまで被害が拡大するやもしれん。」

早急に情報を精査する必要があるか。」

『八本指』だったか：愚かな連中だ。」

嫌悪感を露わにする神官長達。

「竜王国へは《獄界絶凍》が派遣されて好き放題やらかしているので様子見として：他には？」

「聖王国との国交はできないだろうか？」

かの国とは300年ほど前から地理的な理由で国交が絶たれているが、我々と同じ人間国家だ。味方につければ心強い。」

「あちらの国とは宗教的価値観が違いますからなア、こちらが歩み寄っても突っぱねられる可能性もある。」

「だが利害関係を結ぶだけなら良いアイデアね。」

今代は女の聖王が就いてるようだ、水明^{ウチ}で国交の糸口を探ってみるさね。」

「それより皆様、一番大事な事をお忘れではありませんか？」

次々と議題を交わし、言葉が続ける一同に冷や水を浴びせるかの如く風の神官長が言い放つ。

「今回の出撃で我々は《絶死絶命》を外へ出し、あまつさえ大規模な戦闘まで許してしまった。」

かの竜王が黙っておりますまい。

何よりも先んじて評議国への対応を話し合うべきだ。」

「むう…」

「それは…」

押し黙る神官達。

そう、此度の出撃において法国は秘匿し続けていた番外席次という鬼札ジョーカーを切った。

これははるか昔に取り決めた竜王との明確な契約違反である。世代が変わったから知りませんでした、で済まされる軽い話ではない。

“もんだいない”

『ツツ……!?!』

突如脳内に直接声が響く。

それが何を意味するものか即座に理解した彼等は見えない相手に向かって礼を取ろうとするがそんなものお構い無しに声は続けた。

“いまは 聖女たちに 心から しゆくふくを”

プツン、と途切れる《伝言》。

顔を上げた彼等は皆一様に安堵の笑みを浮かべながら、自分達の選択が正しかった喜びを享受するのだった。

破滅の魔樹は討滅され

竜国に銀の戦乙女ありき

魔導の寄るべを人に与う

かの御子は蘇った

全ては真なる救済の為

後に「人類の導き手」と呼ばれる護法国家。
スレイン法国の転換期が今、訪れている。

「……これが君の選択か。」

残念だよ、スルシャーナ。」

完勝に浸るレイラ達をはるか遠く、探査魔法の知覚外から眺める白金の鎧はフルフェイスの兜を揺らし、僅かに憂いの籠った眩きと共に瞬きの間に消え去った。

16 破滅フラグしかない鎧がやって来てしまった
…

諸君、私は天使が好きだ。

ジ○リールが好きだ、アズ○ールが好きだ、天音か○たが好きだ、ルシ○アーが好きだ。

イカ○ス、ニ○フ、アス○レア、ピツ○きゅん、ブ○ピきゅん、パ○テイ&ストツキ○グ、立華か○で、パズド○だとラジエルが好きだ、グラ○ルならガブリエル、FG○ならカ○ンちゃん。ブル○カのティーパーティー3人組を知った時、膝から崩れ落ちて当時の時代に生きていなかったことを死ぬほど後悔したし天使の悪魔ちゃんは私に新しい風をもたらしてくれた、スーツ×天使も良いよねえ!!癖ええええ!

諸君、私はありとあらゆる天使キャラがだあい好きだ……!

100年以上前になるけどアニメの中の天使達(比喻ではない)は冀みたいな現実を忘れさせてくれる唯一の娯楽だった。

だからある日思い立つ。

そうだ、私自身が天使に成れば良いんだと。

ゲームの名前は『ユグドラシル』

私を選んだのはもちろん天使!

機械人形みたいな初期フォルムは課金をじゃぶじゃぶキメる事により作り替え、当時私のトレンドだったジ○リールと立華か○でとカレ○ちゃんを足して二で割った感じに仕上げた。気分は天翼種^{フリーユージェル}、最高ね私!

どうよこのぱっちりお目目にふわふわの羽!抜群のスタイル!そして天使に欠かせない後光が差さんばかりの光輪^{ヘイロー}!

ふつくしい…(ねっとり)

私は天使!

私は最高!

新時代はこの私！

よおーしこのままwikiガン見で進化チャートに従って天使の最高種までメガシンカしてやるぜえく!!!

なんて言っていたらいつの間にかレベルもカンストし、突つかかってくる異業種狩りプレイヤーを返り討ちにしていくうちに《水星天の熾天使》の種族を得て、ユグドラシルが全盛期を迎えるに伴って後続のプレイヤーが増え始め私は所謂「古参勢」と呼ばれるようになった。

ソロ活動を続けるうちに周囲の環境はどんどん変わっていった。

異形種狩りなる娯楽が流行って狙われたりもした。

それを狩る異形種狩り狩りなるギルドが現れた。

大きなギルドでスキヤンダルが起きてゲーム全体の雰囲気はひりついていた時期もあった。

ワールドチャンピオンが集まって作ったとんでもギルドが色んな問題を起こし、悪名高い異形種ギルドが1000人超えのギルドアタックを乗り越え勝利して、新しいアップデートがあまりにも世界観とかけ離れ過ぎて「剣も魔法も関係ないやんけ！」って叫んだことだっただけであった。

起こる沢山のイベント、何度も復刻を望まれるほど面白いやつからシナリオライターの正気を疑うレベルのクツツツつままないものまで余すことなく堪能し、どんどん月日は流れて行って。

ゲーム界限に盛者必衰は付き物で、マンネリ、クソ調整、パクリ疑惑、他にも色んな原因が重なった結果、ユグドラシルは過疎った。

アクティブユーザーはどんどん減って、一時期は全盛期の3%くらいまで落ち込んだらしい。運営は色んな策を講じたようだけどそれでも新しい娯楽に飢えたプレイヤーを思いとどまらせる事は出来なかった。

それでもユグドラシルを続けていたのは、ひとえにこのアバターを愛していたから。

他のゲームに気移りしそうにもなったけど、結局ユグドラシルの

“ローグレンツ豊穰祭”

毎年秋から冬に移り変わる頃、私の住む地方で行われる年に一度の大イベント。

私の治める領地、高地に位置するこの辺りの冬は非常に厳しいです、冠雪期になると気温は連日昼でも零度を下回り、3日に一度は雪に見舞われます。酷い時は2・5mくらい積もったこともあったかしら？

秋の実りに感謝し、冬を超えるための力を蓄える我が領きつての特
別行事。三日三晩かけて行う領地ぐるみのどんちゃん騒ぎですの。

普段は清貧に勤勉に、質素な暮らしを心がけるスレイン法国民もこの日だけは鼻歌交じりに騒ぎだし、他領の皆様はもちろん、これを商機ととらえた諸外国の商人達もこぞって此処を訪れ商いに精を出す、三日間で白金貨3万枚ものカネが動くと専らのウワサ：というか実際動きます。計算したらそれくらいの額が算出されたので。

お父様曰く、初めは領民だけで静かに祈る程度の集まりだったそうなのですが、「それだけじゃつまないでしょ！」とお母様が規模をどんどん拡大して現在のお祭り騒ぎにまで発展してしまったとのこと。お母様らしいと言うかなんと言うか……。

まあ私も？ただ慎ましく祈ってるだけとかつまんねえですし？
せっかくのイベントなら派手にお金をバラ蒔いて経済を回した方が
為になるので。

「という訳で第48回、ローグレンツ “大” 豊穰祭！

優雅に素敵に開☆幕☆ですわよ!!」

中央広場に特設されたステージの上に立つ私の宣言により上がる
花火とファンファーレ、それに伴い怒号のような歓声がギャラリーか
らこだましてお祭り開始を告げました。

.....

「私達が魔樹討伐を果たしてからのお話です。

無事帰還した我々漆黒聖典は事の全てを上層部へ報告、私の計らいで生中継をご覧になっていた彼等もその成果にたいそうご満悦の様子でした。

討滅した魔樹は私の超位魔法とアンティリーネのスキルにより完全沈黙、もう二度と動き出すことは無いでしょう。

今まで吸った栄養をゆつくりとトブへと還し、ツケを払い終わったら消滅させて差し上げましょうね。何年掛かるか知りませんが。

それに伴って今回出撃した漆黒聖典のメンバーは皆様レベルが上がったご様子。口々に「壁を越えた感覚がした」とか揃って仰ってましたし。

まあ隊長ですらほぼ格上、他の隊員からすれば1.5から2倍近いレベル差のある相手でしたし相応の経験値は貰って当然ですわよね。我ながらとんでもねえジャイアントキリングを成し遂げてしまいましたわ。おほほほ!!

かく言う私も久方ぶりに「壁越え」の感覚を味わいました、現実と違い自分が強くなったと実感できるのは良いものですね。アンティリーネも自身にその兆候があつたそうで珍しく驚いてました。

それから討伐後のトブの様子ですが、アフターケアとして風の巫女ちやんと《占星千里》ちゃんに監視をお願いして暫く見守って貰った感じ勢力図そのものは原作と変わりハムスターないみたいです。

西のナーガ、東のトロール、南の賢王、共に大きな動きなし。唯一ナーガがかなり遠くから戦う私達を観戦していたようです、クアイエツセ様のタイムモンスターから報告がありました。

私としては森付近のカルネ村まで被害が拡大していなくて一安心、

原作が進む上で欠かせない要所ですからね。

大きな変化があった魔樹の傍には相変わらず誰も手を出そうとしていない様子ですが……やっぱ森のド真ん中が急に凍土に変わったら警戒しますよね。周辺環境に影響出ないように出力はかなり抑えたいんですが。

ただ、リザードマン 蜥蜴人の集落は魔樹の出現にいち早く気付いたらしく、原作のナザリック侵攻時よろしく部族間で手を結び対抗しようとしてました。まあ私達が全部終わらせて撤退準備を整えていた時に大挙して来られたので凄く気不味くなっちゃいましたが…

ちゃんと各部族長の皆様もお揃いで、旅人のザリユースが放浪中で不在以外は主要キャラ全員集合してましたね。

他の聖典メンバーは亜人相手で喋り辛そうだったので私が代表して事のあらましを簡潔に伝え、ご納得して頂きました。ちゃんと話せばわかってくれる賢い種族ですものね、蜥蜴人は。

そのあと女同士気が通ったクルシユ様と少しお話したり、《人間最強》と《巨壁万壁》に謎のシンパシーを感じたゼンベル様が肉体で語り合ったりと異文化交流も一悶着ありましたが穏便に帰路に着きました。

蜥蜴人は寒さが苦手なそうなので、防寒具とかと引き換えに資源の交渉を試みるのもよさそうですね。集落周辺の湿地には粘土があり、質も良いので焼いて煉瓦に加工もできますし、高い断熱性を持つので寒冷地帯の我が領ではそれはそれは重宝します。それに伝手はいくらあっても足りませんから。

あ、もちろん雪国ローグレンツ産の安くて丈夫な防寒装備を提供する予定です。流石に蜥蜴人サイズは規格から作り直さないといいけません、ぼったくくる気はさらさらありませんよ。

ピンスンちゃんなんですけど、魔樹の傍に本体があつてかつ私が周辺を凍土に変えてしまったせいで魔樹の束縛から解放されても栄養不足で遠からず朽ちるとわかってしまい、泣きつかれた結果私の領地に植え替えをする事になりました。

今では温度管理の施された温室で我が領特産品の林檎栽培をドルイドの能力を活かして手伝ってもらっています。

「任せてよー！光り輝くくらい最高の林檎に育て上げてみせるさ！美味しい水と土も貰ってるからねー！」

うーん頼もしい。

新しい土地の栄養を貰ったおかげでドライアードとしても成長したらしく、《擬態》と称する人型の分身体を作れるようになったみたいです。本体の木から離れて遠隔操作ができるらしく肌の色も人間を真似て、見た目は完全に美少女。栽培担当のエルフ達とも仲は良好のようで、よくお喋りしているのを見ます。

そんなこんなで帰還した私達ですが、まず一番にやらなければならぬことが。

破滅の竜王騒ぎでドタバタしてましたが、亡くなられたカイレ様の弔いは法国式で厳かに執り行い、ご遺体は彼女の故郷へ埋葬される運びとなりました。

漆黒ではありませんが特殊部隊のメンバーであり国宝の所有者であったことは家族にも秘密です、あくまで職場の同僚として私達は出席致しました。

……原作ならばシャルティアに刺されて死亡でしたからね、死期が早まったとはいえお気の毒に。

今回作戦に参加した漆黒聖典メンバーは報酬として暫くの間お暇を頂き、遠方から帰還した残りのメンバーと共に全体報告会を開いた後それぞれの日常へと戻っていききました。

私は領主として、本来の仕事を頑張りますわ。

これが他のメンバー、例えば隊長だと外交官だったり、ナツちゃんなら所属する修道院の聖歌隊長、《無限魔力》ちゃんは自営業の古書店経営、最年少の《占星千里》ちゃんなんかは現役バリバリの学院生だったりします。

ちなみに筋肉担当のお2人は普段は「農夫」として過ごしています。

す、お前達のような筋肉した農夫がいるか。

実は漆黒聖典って言外無用の特殊部隊なんですよ。

特殊部隊なんですって！（2度目）

原作だとプレアデス以下のトンチキイロモノ集団扱いされる事が多い我々ですが、異世界目線こちらで捉えれば正しく人理の守護者として創設された精鋭部隊。

周囲の生存域を亜人とモンスターに囲まれながらなんだかんだ600年種を存続させてますからねこの国、その手腕は漆黒聖典あつての物種でしょう。

だからといって！人類以外死滅させる勢いで亜人排斥する理由にはまっつったくならないのですが！ねっつ！！

あ、そうだ。

一番変わったことと聞かれれば、これを言い忘れてました。

「……あによ、私の顔じつと見て」

「本当に釈放されたんだなって思いました」

「囚人か私は」

私の目の前でお上品にアツポウペイとミルクティーで優雅なbreakfastを楽しんでいる白黒髪のハーフェルフこと番外席次アンティリーネ。

なんとこの度、宝物番の任を解かれ、晴れて自由の身となりました！

……つていやなんですか!?

彼女は私の知る限りだとエルフとの戦争に投入されるまで幽閉さ

れたままのハズなのに、なーんでもナザリック襲来より先に自由の身になってらっしゃるんですの???

今朝方やって来て、いつものように抜け出したのかと軽く考えていたら「もう宝物番はしなくていいって今代の漆黒聖典指揮官のホラ……レイモン、から言われたの、彼の勧めでとりあえず貴女の所で世話になる事になったから、ヨロシク」とか言っちゃうんですもんこの子。

慌ててレイモン様に確認取ったら、議会の決定で本当にアンティリーネは自由になってるし！

『神都以外で彼女を安心して任せられるのは私の知り得る限り君しかないんだ、急な決定により事後報告になってしまっただけに本当に申し訳ない。』

頼む！いやほんとこの通りだ！』

レイモン様にしては珍しい本気のお願いだっただけで思わず承知してしまいました……控え目に言っただけで原作崩壊なのでは!?

「それにしても凄いよね、豊穰祭ってのは。

辛気臭い神都とは大違い」

「年に一度のお祭りですからねえ、皆様の熱気で千年氷も溶けますわ。貴女が宝物番をしなくなったという事は、他に誰かが宛てがわれまされたの？大体想像つきますけど」

「そーね、御身直々に国宝の管理をなさって下さるそうよ」

ルーファス様が復活したんですものね。

元々国宝はユグドラシル側の領分ですし、口伝のみで理解の追いついてない現地人より従属神である彼女のほうが上手く管理できるでしょう。

なんかどんどん原作のスレイン法国から乖離してる気がしますわもう細かいこと気にしたら負けな気がします。

ん？でもお、アンティリーネが自由になったという事は彼女に着いて回った問題も解決したということ？

元人類最強の存在だった当時の第1席次の娘であり、公には伏せら

れています。エルフ王族の血も引く女アンティリーネ・ヘラン・フーシエ。

その存在が秘されている理由はただ一つ、評議国の代表たる白金の竜王が法国と定めた条約に反しているから。

時は最期の神スルシャーナ様が八欲王に敗れ去り、神の庇護を失って法国が大混乱に陥っていた頃。

藁にもすがる思いで評議国と条約を交わしたのでしよう、たとえばんなに理不尽な条件だったとしても当時の人類は要求を飲まざるをえなかった。

最初の頃の対価は庇護の代わりに亜人種への生贄を差し出せだとか、かなり猟奇的なものだったと聞きますが。それをツアーが独断で変更し、今の不平等条約を強引に裁決した、と。

『評議国に属する亜人国家は人類に対して無関心を貫く、その対価として法国は竜王監視のもと過ごすこと』

最強種の竜王様が何を思ったのか人間種から強者が生まれることを嫌ってはるか昔にそんな約束を取り付けたそうです。

……これってかなり理不尽な要求なんですよね。

要は『弱い人類のままなら竜王は君たちを見逃してやるよ』と言っている様なものなので。

まるで強い人類が生まれるのを恐れているかのよう……。

まあ、かの種族は八欲王にあわや絶滅にまで追い込まれたようですしナイーブになるのも当然かと……私怨もいくらかありそうですが。

どっちにしてもあの竜王が監視している限り人類は彼の顔色を伺って生きなければなりません、強くなることも文明を先に進めることも自称裁定者様のお心ひとつ、と。

控えめに言っておf○ckですわね。

お母様の日記を見る限り、裁定云々依然に彼個人の理由のほうが大きそうですけど

「おっと、もうこんな時間ですか。」

アンテイリーネ、支度なさい」

「へ?」

「何もせずおまんま食えると思わないことです。」

『働かざる者食うべからず』が我が家の家訓、私の領地に暮らすのなら手に職を付けてもらわねばなりませんからね。

という訳ではいい、コレをどうぞ」

「何よこの服……胸に『警備スタッフ』って書いてあるんだけど」

「それはもう!警備員ガードマンに決まっていますわ!」

今は豊穰祭の真つ最中、街全体で行われる商いや催し物は数多あり、ローグレンツは今、活気で満ち溢れています。

しかし人が横行し、活気があるということは同時にトラブルも多く発生するということ。

事前の厳しいチェックにより禁制品や反社会的な団体からの出店は弾いてますが、それでもこの3日間街中の至る所で商人同士のトラブルや柄の悪い連中同士の喧嘩、乱闘騒ぎなんかは日常茶飯事チャメシ・インシデントなのです。警備の手は幾らあっても足りないんですわよね。

私も警備に回れば良いんじゃないの? って話なんですけど、祭りの運営がもう忙しいつたらないんです。

2日目に竜王国からドラちゃん遊びにがプライベートで観光にいらつしやるのは毎年恒例なんですけど、今年は3日目に聖王国の使節が来るみたいなんですよね。

ルーファス様のお目覚めからこつち、どうやら中央政府はかなり融和政策に舵を切ったらしく今まで宗教の解釈不一致と地理的な問題でお互い見向きもしなかった聖王国と国交を持つとうとし始めました。因みに外交官には我等が隊長が抜擢されたそうです。

それで法国で一番盛り上がる祭りを見せてやろう、ってな感じで私の所に話が来ました。なので今年は歓待の準備を祭りの運営と同時に進行しているので特に忙しく、まさに猫の手も借りたい現状。

アンテイリーネがいてくれて助かりましたわ。

「ええー……」

はいそこ露骨に嫌そうな顔しない！

「私はこの後お客様の相手をしなければならぬので詳しい説明はクレマンティヌ警備隊長に任せます、3日間よろしく頼みますわね」

「せっかくの外だし露店巡ろうかと思つてたのに……」

「警備中はほぼ自由行動なので買物等好きに歩き回つて構いませんわよ？」

「祭りにあてられた路上喧嘩、商人同士の場所取り合戦、吟遊詩人の弾き語りを警備。やる事に暇はありませんから。」

「トラブルを見つけたら貴女の裁量で対処（主に話し合いで）してくださいな」

「！そうなの、対処（物理）していいのね？」

「分かったわ」

「妙に物わかりが良いですね……」

「じゃあお仕事（やさしく喧嘩の仲裁）お願いします」

「任せなさい、得意なの（主に殴る蹴る事が）」

ン〜…？…なんか会話に妙な齟齬があるような気が……まあどうつて事はないでしょう。

最近入った新人メイド達に更衣室まで案内され部屋を出ていくアンティリーネを見送つて、手元の紅茶を一杯……ふう。心が安らぎますわ〜。

取り敢えずこれで人払いはできましたか。

「ベル、私は書齋に戻ります。」

これより合図があるまで如何なる者も書齋に近寄らせないように

なさい、周辺の掃除もする必要はありません。

メイド達に厳命する事、よろしい?」

「畏まりました、お嬢様」

「それと、外壁付近で警備しているお父様へ連絡を。」

『レイラはお客様のお相手をしています』と伝えて貰えるかしら?」

「一言違わず、そのようにお伝え致します」

「ええ、ええ。」

行きなさい、街まで被害が出てはブラッドレイ家末代までの大恥ですからね。万が一を考えて避難誘導の待機を」

「ご武運をお祈り申し上げますお嬢様」

「いや武力行使は最後の手段であって欲しいけどね!?先ずは話し合いからですが!」

「説得（物理）ですよね分かりますお嬢様」

「ち、ちがわい!」

もうっ……!早く行きなさいな!」

「……では失礼致します」

美しいカーテシーの後、転移で消えるメイド長を見送って、私も移動しましょう。

誰もいない廊下を渡り、執務をこなす書斎へと辿り着くと工廠特製で効果抜群の盗聴防止用マジックアイテムを起動させます。

そして自然な仕草で常備している腰のホルスターに撃杖があるのを確認し、いつも座ってる書斎机ではなく対面用のソファへと座りました。

「ふう……」

……やっべえやっべえやっべえのですわ、魔樹を討伐したから遅かれ早かれ来る事は分かってましたがもう来るとは。全然心の準備できてないんだが!」

「人払いは済ませましたわ。」

そろそろ出てきて下さいませんか?」

虚空に向かってそう呟くと、対面のソファに光の粒子が集まって、形になっていきます。

霊体化を解くサーヴァントみたいでかつこいいなーとか現実逃避しながら眺めていると現れた白銀の鎧が訝しげに問うてきました。

『…何時から気付いていたんだい?』

「貴方が無断で我が家の敷居を跨いだ時からです。取り敢えずお掛けになって? 不法侵入者さん」

うん、破滅^ッフラグ^{アー}の塊^鎧ですわね☆

やああああああだもおおおお!!



「えーと、以上が警備担当の大まかな説明……です。

番外席次様」

「話し方、別に呼び捨てで構わないわよ。これからレイラの所に厄介になるんだし、むしろ警備は貴女の方が先輩なんだからもつとフランクでいいわ」

「……マジか」

「マジよ」

「じゃあそうするか……てゆうーかアタシ番外様の本名知らないんだけど」

「アンティリーネよ、アンティリーネ・ヘラン・フーシエ。」

よろしくクレマンティーナ」

「よ、ヨロシクオネガイシマス」

「固いわ、表情も動きも何もかも」

（そりや入隊時アంతタにズタボロにされたからねエ！恐れもするわ
！）

「じ、じゃあ早速警備に行こっか。

私は東の通りに行くからアンティリーネは西の広場を……」

「まあ待ちなさい。

よく考えたら私、初めてのお祭り参加なの。

レイラからは警備するなら自由に露店を回って良いって言われているし、美味しいお店とか案内しなさい。クレマンティーナなら詳しいわよね？」

「……」

「さあ行くわよ、神官長達から分捕った小遣いもたんまりある事だし」
「アツハイ（ねーちゃん助けてえええええ……この際クソ兄貴でもいいからあああああああ!!）」

17 破滅フラグしかない対談に臨んでしまった…
(上)

スレイン法国の北端、亜人と人類の境界線、辺境都市ローグレンツにて。

「豊穰祭」と称するこの一大イベントは娯楽の少ないスレイン法国で唯一と言つていいほどの大型行事だ。

老若男女問わず多くの人が訪れ大いに賑わい、経済活動も活発になり白金貨にして5万枚の大金が動くとも言われている。

期間内には専用の大型馬車を運行し神都及び最寄りの主要都市からアクセス手段を増やす事で集客率に拍車を掛けていた。

普段は宗教に傾倒し、質素と清貧を旨とする若者達もこの日だけは自身の財布の紐を弛め、北端の地に集う。

ある者はお気に入りの装飾品を買う為、またある者は最新のマジックアイテムを品定めする為、三日三晩のお祭り騒ぎに参加するのだ。

活気に溢れた大通りは人でごった返し、販売物によって区切られたブースに所狭しと展開された露店にはこの祭りを商機と捉えた商人達による選りすぐりの品々が並ぶ、食材を取り扱う店舗からは溢れんばかりの美食の香りが垂れ流され、買い物に疲れた人々の空きっ腹を大いに刺激した。

しかし人が集まれば活気が生まれ、それに伴ってトラブルも生まれるというもの。

商人同士の諍いや祭りの熱に当てられて血気盛んな若者達が起こすトラブルは数しれず、そんな問題事を解決するため3日間限定で組織されるのがローグレンツ警備チームである。

首領はもちろんレイラ、実働部隊の筆頭として義妹のクレマン

テイーヌと参謀役を務めるクアイエツセ、その下で普段からその身で領地を護る兵^{つわもの}達が50名ほど侍り、治安維持に務める。

開催期間中の領地防衛はどうなっているのかというと、治安維持に回した兵力はレイラの父、ゲバルト率いる聖典OB達が補っていた。

老いや怪我等で一線を退いたとはいえ彼等の実力はそこらの亜人など歯牙にも掛けない精強な猛者ばかりなので当代領主も安心して祭りの運営に打ち込めるといふもの。

「流石に未だ現役のゲバルトのように動けませんな」

「しかし得物を持つとつい昔を思い出してしまうわい」

「ははは、まだまだ我々も捨てたもんじゃアない。それにカナミちやんと約束したからのお」

「あの子の明るさにこの老骨、何度救われた事か。」

皆の憧れじゃった、ゲバルトがいなけりや儂が…」

「おっとそれ以上はいけない。」

ところでクインティアのせがれ、今日の賄いはなにかね？」

「帝国から珍しい香辛料が手に入ったとの事でレイラは『マアボトウフ』にすると言っていました」

「ほう、それは嬉しい。」

あの辛いやつだろうか？好物なんだ。尚のこと警備に気合いも入ろうというもの」

「ご歓談もその辺りに。敵襲だ。」

参謀、位置を」

「はっ！」

…ヘジンマール殿の報告によれば数は70程度、中型の蛇人^{ナーガ}と思われれます。なおも接近中」

「匂い立つなア…どこもかしこも亜人だらけじゃないか」

「では皆の衆、参りませうか。」

「我等は神の代理人、神罰の地上代行者、我等が使命は、我が神に逆らう愚者を、その一遍までも絶滅する事」

Amen^{エイメン}

聖句を唱え、自領へ侵攻する愚か者共を見つけたクアイエツセを含めたった6人は巫人の群れへ襲い掛かり10分と経たずに殲滅を完了した。



拝啓、天国のお母様。

貴女の愛娘レイラは今、人生で5本の指に入るほどの危機を迎えています。

もちろん1番はナザリックな訳ですが、次点で候補に上がる程の大事件。

それが目の前に座る白銀の鎧、本名ツアインドルクスⅡヴァイシオン。

この鎧は本当の姿ではありません、これは遠隔操作で動かす人形の様なものの中身は伽藍堂。私の熱感知スキルサーマルセンサーに反応しないのはそういう事なんでしょう。

魔法で動き遠隔操作できる鎧…技術者の端くれとしてはそのカラクリがととても気になる所なのですが、今はそんな場合ではありませんわね。

彼ははるか昔から生きる竜種で、本体は評議国でユグドラシルアイテムを護ってるんでしたか。片時も離れない所を見るに相当な心配性なんでしょう。

そんな彼が分身を使ってまで動かねばならない、それだけで事の重大さを物語っています。

まあ出張理由は火を見るより明らかなんです！

そう、私ですわ!!

…正しくは私とアンティリーネでしょうか

「お茶は？」

ちようど新芽の美味しい茶葉がはいっているのですが」

『遠慮するよ。』

落ち着いているんだね、こうして発見されたのだしもつと警戒されると思っていたんだが』

「金品狙いの賊なら挨拶無しで首を刎ねればおしまいなのですが、貴方はそれでも無さそうですからね」

『…そうかい、そうならなくて良かった』

まあ、嘘ですが。

原作知識でこいつツアーじゃねえかって分かってましたし、価値観や道徳観は別としてこの竜は他の竜王達と比べてある程度会話が成立する事も知ってます、だから即戦闘は避けました。紅茶もブラフですわ。

「鎧姿の人型個体が現れたら間違いない中に人が入ってる」って普通なら思いますものね。

中身に気付いてないフリを続けましょう。

不法侵入に関しては全く納得してません！

いくら立場や種族の違いがあるとはいえ他所様の家に姿消して無断で立ち入りあまつさえ盗み聞きとかやってる事が外道過ぎてぶち殺したくなりますわね！

おf○c k!!!

「貴方、お名前は？」

『どうしてそれに答える必要が？』

「殿方が女性の部屋に無断で押し入って名前も名乗らないなんて不躰にも程がありますので。」

不快で思わず氷漬けにしてみましたそうすわ」

『……リク、リク・アガネイア。』

そう呼んでくれ』

はいダウトオ！ダウトですわ！

アインズ様にも名乗ってましたよねえそれ！

余程気に入ってるんですか？

いいえ違いますわね、忘れられないんでしょう？

「よろしくお願ひします、アガネイア様。

私はレイラ・ドウム・ブラッドレイ。

スレイン法国边境都市ローグレンツでしがな領主を務めさせて頂いております。

それで、御用件は？

ただいま年間行事の真つ最中につき基本的に商談も面会もお断りしているのですが」

『商談ではないよ、君に尋ねたいことがあるんだ。

単刀直入に聞こう、君は『ぶれいやー』なのかい？』

ンンンンンその台詞オバロ二次創作で腐るほど聞きましたわあああ!!まさか私が言われるとは！

『ぶれいやー』とは我が国に伝わる神の別称ですわね。

私如きがその名を語るなど烏滸がましいにも程がありますが…どうしてそうお考えなのですか？』

『トブの森での顛末を観戦させてもらった。

君の力は危険だ、連中に匹敵する程にね』

「……………連中、というのは八欲王の事ですわよね？

流石に建国の神々を連中呼ばわりされるといち法国民として黙っていられないのですが」

『そこは自由に捉えてもらって構わない、兎に角君には『ぶれいやー』かそうでないかを問いたいんだ』

うーん高圧的。

アカン、下手な誤魔化しは死を意味しますわね！さっきから息も詰まるような殺気がバッシバッシ叩きつけられていますもの！（粹なギヤグ）

もう開き直って素直に喋っちゃいますか…よく考えたら私なあんにも悪い事してませんし、存在自体が悪だと言われたらどうしようもありませんけど。そう、なるべく穏便に…
やるつきやねえですわ！



「結論から申し上げますと、私はぶれいやーではございません。

ですが私の家系はかの血を濃く受け継いでいるのでその影響かもしれませんわね」

レイラの回答に鎧の向こうから思案するツアー。

イビルアイからの報告で知ったスレイン法国の強者、この世界では上位に相当するイビルアイが手も足も出ずに倒された（本人は負けないと言いつ張っていたがいつもの強がりだろう）らしい目の前の女性はレイラ・ドウレム・ブラッドレイと名乗った。

見た目は普通の人類種となら変わりは無い、というかツアーは他種族の個別別情報など殆ど区別しない、唯一違うのは嘗て共に戦った13の英傑達くらいのものだ。

だというのに何故だろう、レイラからどこか懐かしい気配を感じてしまう。

見た感じ、人当たりは良さそうだが腹に一物抱えていそうな女。突然現れた自分に対し戸惑う素振りも見せず客人として扱うあたり、強者ゆえの余裕が伺える。

『君たちの歴史は知っている。

国を興したぶれいやーの遺した影響が600年経った今も続いている事がね。

彼らの血を濃く継ぐものほどぶれいやーに近く、強者となり得るん

だ。君もその1人だろう』

「ええ、その認識で間違いないと思います。」

それで私のどこが危険だと？

生存競争以外で無益な殺生はしない主義なのですが」

『全て、だ。』

ふれいやーの血を継ぐその身体、天候をねじ曲げる程の位階魔法、それら全てが世界の脅威になりかねない危険な力だよ』

嘗て八欲王が所持し、今なお彼らの拠点だった空中都市にて稼働を続ける神のアイテム。

名を《無銘なる呪文書》ネームレス・スベルブック。この世全ての魔法が刻まれており、また新たに生まれた魔法も自動的に記載されていくという効果を持ったそれは、自称世界の管理者たるツアーが最も注目し、監視しているアイテムだった。

故あって拠点から離れられない身なので実際目にした訳ではないのだが、かのアイテムの稼働は竜の持つ超感覚故に体感で分かる。それほど強大な力を秘めているということも。

それが最近になって頻繁に…それはもうポンポンと新しい魔法を記録していくのを感じたツアーは何事かと焦り、鎧を使って世界各地を調べ回っていた所だった。

「それを使わなければ死ぬ状況でしたので。」

私必要な事が必要な時に行っただけですので反省は一切しておりません」

『……』

「ご納得は…：されないようですわね。」

ではなぜ世界の脅威、というわりにはこうして話し合いの場を設けていただけなのでしょう？

こう言っでは何ですが、挨拶無しに姿を消したまま私の首を取りにくればそれでおしまいだっただけでは？」

『そうだね、確かに危険だが君は“悪”ではない。そう判断した。』

だからこうして接触したんだ』

「まあ、それはそれは…」

「光栄だと喜べば良いのかしら」

魔樹を討伐した事に限った話ならツアーは彼女に感謝すらしている。本来なら自分が始末を着けなければいけないはずの異物を彼女達が代わりに排除してくれたのだから。

「あの魔樹が人類圏に及ぼす影響を考えれば放っておく訳にもいきませんでしたし、お気になさらず」

『すまないね。』

序でに尋ねておきたいのだが、氷像はあの場に残り続けるのかい？』

「ええ、何年掛かるか分かりませんが今まで吸った栄養を大地へ還すまで残り続けるでしょう。」

「時が来れば勝手に崩れ落ちるはずですよ」

『…ふむ、嘘ではないようだ。』

てつきり法国はユグドラシルアイテムなり使ってこつそり手中に収めるんじゃないかと危惧していたけど杞憂だったようだね。

「すまない、こちらの話だ。気にしないで欲しい」

（おわっはー!?!）

もしかしなくても国宝使ってたら詰んでましたわね?」

ポーカーフェイスを崩さないレイラだが衝撃の事実には焦りまくっている。もしカイレが存命で魔樹に対し国宝を使っていたらこの場も設けられる事はなく問答無用で自分は殺されていただろう。内心間抜けな悲鳴をあげながら必死に表情を取り繕っていた。

その後も何度か質疑応答を繰り返して、聞かれた事を正直に答えている。

もともとレイラは誠実なのでおかしな嘘で誤魔化すようなこともしない、もちろん国家機密に関わるような事項は「教える事が出来ない」とハッキリ断りながら。

ツアーからしてみれば意外も意外だ。

不法侵入同然の真似をし、高圧的な態度で迎えた初対面。彼自身の種族差による怠慢あれど「後に敵対するかもしれない」そう考えたうえで対応だったのだが、彼女の予想外の反応に良い意味で期待を裏切られた形となった。

それはまるで、在りし日の「リーダー」の姿と重なるように『…君は何故、この国に留まる。』

神に近い稀有な能力を持ち、その気になれば世界を支配する事だって可能な筈だ』

もちろん、そんな事をすれば竜王達は大手を振って彼女を排除しにかかるだろう。

はるか昔に世界の法則を歪ませる事で現れるようになった「ぷれいやー」。

その影響力は凄まじく、時に種の存亡まで左右し世界の安寧を悪戯に揺るがす存在である為、同じ時代を生きた竜達は侮蔑を込めて彼等の事を『竜帝の汚物』と吐き捨てた。

ツアーはまだ理知的なほうで、他の竜王によつては「ぷれいやー」と判断されれば即殲滅対象にもなりうる。

「興味ありませんわね。」

私には護るべき国があり、護るべき人が大勢居ます。民を放り出して突つ走る領主がどこに居ますか。

それに、生憎他所様を害する余裕も気概も持ち合わせてはおりませんわ」

ほら、人間って臆病な生き物ですから。と冗談めかして笑うレイラ。

ますますもってこの人間の事が分からなくなった。

ただ感じるのは彼女の言葉はその場を取り繕う為の嘘ではなく人類を安じる紛れもない本心。なのにどこか他人事のように達観している。

(まるであのお転婆天使みたいだな)

脳裏に過ぎるのは嘗て共に旅をした仲間達。

その破天荒ぶりから何度リグレットと一緒にあって頭を抱えた事

か、紆余曲折ありながらも最後は結局自分の道を突き進んだ彼女をツアーも気付けば裁定者という立場の垣根を超えて応援してしまっていた。

皆を巻き込み引つ張る力、俗に言う「カリスマ」と呼ばれる才能を彼女は持っていたのかもしれないと、今となっては思う。

心を許せる数少ない友人だった、「竜帝の汚物」と切り捨てるには惜しいほどに。

(能力は本当に凶悪の一言だったけどね。)

全く、鎧の遠隔機能を超えて本体にまで届く猛毒なんて聞いてないよ。もう呪いの類いじゃないか。

ウン百年と生きてきたけど下痢と腹痛で拠点を離れたなんて後にも先にもあの時だけだ…)

その後偶然一回会ったきりで足取りは掴めていないが彼女の事だ、きっと自分の満足する終わり方を選んだのだろう。

『……………』

「…？なにかな？」

『いや、すまない。考え事をしていただけさ。』

ともかくこれで確認が取れたよ。

君が突出した強者である事、この世界を悪戯に乱す気は無い事だね。

それをふまえて君に告げなければならぬ』

もう力は使うな

これ以上世界を汚すなら竜王は容赦しない



「ハイハイ大人しくねーあんまり動くと腕折るよー?」

「イデデデデデすいませんすいませえんツ!!」

「ちよつと気が立ってただけなんですぅ〜!!」

腕を拘束され地面とキスしながら情けない悲鳴を上げる若い男、組み伏せたのは華奢な体躯の少女であった。

警備担当クレマンティーヌは先程見つけたトラブル、屋台営業に難癖付けて料金を踏み倒そうとした男達の捕縛に勤しんでいる。

彼女としては最初は注意だけに留めるつもりだったのだが舐めた態度であしらわれ、再度注意すると暴力に訴えてきたので適切に対処し現在に至る。妹様の仕事はいつだってスマートなのだ。

「『ちよつと』で屋台ごと破壊する馬鹿が何処にいるのかなー? けんぺーい、連れてってー」

「はっー承知致しましたーオラ歩けー!」

既に戦意喪失した男を憲兵は連れていく、祭りの間の恒例行事な為その連行ぶりも慣れたものだった。

「あとは逃げた2人を追ったアンティリーネなんだけど、大丈夫かなあ…」

「誰が大丈夫ですって?」

「ぎゃっ?!?!」

「いきなり後ろから話し掛けて来ないで貰えますぅ?!」

びつくりした猫みたいに飛び退くクレマンティーヌの背後に現れたのは期待の新人警備員（本人談）ことアンティリーネだ。

警備中、たまたま見つけたトラブルに介入しクレマンティーヌは主犯格の男を、アンティリーネは逃げた取り巻きを追っていた。

「ほれ、2人取り押さえておいたわ。

「ちゃんと通行人に配慮したから」

「ほいつと両手に掴んでいたものを放り出す。

顔中真っ赤に腫れぼった、スタボロ状態のガラの悪い男2人が床に

転がった。

酷く引っぱたかれたのか顔の大きさが2倍くらいに膨れ上がって、滂沱の泪と共に時折小さな嗚咽が聞こえてくる。

「わーお…」

「暴れるから取り敢えず黙らせた、死んでないしこれなら文句も無いでしょう」

ふふん、と胸を張るアンティリーネ。

素手とはいえそもそもレベルに天と地ほどの差があるのだ、五体満足なのを感謝して欲しい。運が良かったなチンピラ。

反射的に「いやそうじゃない」と言いかけたクレマンティーヌは口を閉じ、代わりに特大の苦虫を噛み潰したような引き攣った笑顔で答えることにした。

「すまんね、そこのお2人さん。ちよつといいかい？」

声のする方へ振り返ると、そこには1人の老婆が立っていた。

一目で老人だと分かる姿をしているがその声は力強く老いを全く感じさせない、そんな彼女の底知れぬ「強さ」を目敏く気付いたのかアンティリーネは口の端を吊り上げる。

「なあにお婆さん、またトラブルかしら？」

「ちよいと道を訪ねたくてね。」

街の入り口で「ぼんふれつと」は貰ったんだがアタシの行きたい所が記されてなくて困ってたんだ」

そうして老婆がひらひらと手で靡かせるのは祭り期間中に発行される無料の案内紙だ。3日間で出店する店舗の情報やイベントの会場、日時など、あらゆる情報が記載されている。

活版印刷技術の浸透していないこの世界において『紙の量産』はかなりの苦勞と手間を要するのだが…まああの女ならなんとなしにやってのけかねない。

「道案内も警備員の仕事よ、任せなさい。」

それで何処へ行きたいのかしら」

「お嬢ちゃんやる気だねえ、助かるよ。

場所は領主様の御屋敷さ。

まったくあのバカ鎧め、アタシを置いて行きよってからに…」

「?。」



「ふむ……」

考え込むレイラ、といっても出すべき結論は既に決まっているのだが。

「つまるところ、アガネイア様はこの世界に属する何かしらの高貴な存在で、本日は貴方なりの警告のつもりで此方にいらっしやった訳ですわね?。」

沈黙をもって肯定とするツアーに彼女は一切笑顔を崩さぬまま淡々と告げる。

「先ずは対話の為にわざわざ我が領地まで出向いて下さった事、真に感謝申し上げます。

貴方様から最大限のご配慮を感じますわ、きつとお忙しい中貴重な時間を割いて下さったのでしよう」

すらすらと彼女の口から出てくる言葉にツアーはなおも沈黙を貫いている。

彼としても最大限譲歩した、今回の警告は魔樹討伐の報酬とも言っている程だ。レイラの言う通り人間の為に自分の時間を割いた、永い永い竜の寿命の中では束の間の一刻。

それでも竜である自分の時間を使ったということはそれほどに意味のあるものだ。彼が判断したからだ。高圧的になってしまったが

この対話により彼女も大人しくなり、世界への干渉を控えたまま人生を終えてくれるだろう。人の寿命は過ぎ去っていく矢のように早いのである。

本気でそう思っている、レイラの表情から読み取って竜のツア―は間違いなくそう判断した。

「それをふまえたうえで、私からお答え致しますね。」

だって彼女は笑顔なのだ、どうしようもなく。

氷のように張り付いた天使の微笑みを崩さず、一切の山もない平坦な口調で言葉を紡ぐレイラ。

……仮に此処にクレマンティーヌかゲバルト以外の自領の誰かがいたとしよう。そいつは今の彼女を見るなり顔を真っ青にして逃亡しているか、土下座して泣いて許しを乞うているに違いない。

結局、竜に人の心は分からない

「いやですわ♪」

屈託のない、爽やかだが強い拒絶の言葉。

『……うん？聞き間違いだったかな』

「いいえ、嫌です。とお答え致しました」

につこりと、それはもうにつこりと笑顔でそう返す対面のソファに座る淑女の圧に一瞬思考が停止する。1回聞き間違えかと思っただけでもダメだった。

(あ、アレ？)

納得してくれたんじゃないの？)

「止めるわけじゃないでしょう、馬鹿なんですか？」

すつげえいい笑顔でクツソ辛辣な返しをされ竜王、困惑。
声音は至って平坦。

だが何故だろう、言葉の端々から感じる「圧」は。

配慮した？笑わせるな、やっている事は不法侵入及び恐喝だ。そこに配慮も平等もあるものか。

一方的にやって来て、頭ごなしにこちらを脅すヤ○ザのやり口となんら変わらない。なんならレイラが聞かなければ名すら名乗りはしなかった（しかも偽名）無礼者だ。

本当に正体不明の何者かによる警告ならまだしも、この鎧が誰であるか明確に分かっているレイラの前ではただの無礼なゴロツキと変わらない。そんな礼儀も知らぬ阿呆がいけしやあしやあと口にする要求にはいそうですかと頷く程彼女が従順なわけなかった。

というか原作知識を踏まえても予想以上の無礼千万ぶりにブチ切れる。

初めに抱いていた「穏便に済ませる」目標は一体何処に行ったのか、月まで飛ばしたんじゃないですかね。

「百歩譲って、不法侵入は多目に見ましよう。文化の違いと捉えて納得致します。

千歩譲って、偽名を使った事に関しても意見はありません。貴方は本来あるべき立場を超えてまで此処へ来て下さったのだから。

ですが一方的な私見で人類の歩みを邪魔するのだけは断じて許容できませんわね」

確かにレイラは原作知識によってツアーがどのような存在であるかも知っているし、自分がどれだけ足掻いても届かない強者であることも、生物としての格の違いだって分かっている。

しかし、その程度の理由で止まらない。

ナザリ破滅ツクラ来訪グの時は刻一刻と近付いているのだ。

自分が殺されるだけならまだいい、しかしナザリックが後に起こすのは人類レベルの厄災だ。

人命を軽んじ、餌や素材としか見ていない外道共。善人であれ悪人であれ、老いていようが若かろうが人であるのなら喜んで貶める残酷な化け物達。

一部例外はあれどその雀の涙ほどの善性は主人への忠誠心の前にあつさりと塗り潰される。

彼女が知る限りならその者らは人を生きたまま虫の苗床にし、蘇生と回復を繰り返しながら楽しそうに生者の生皮を剥ぎ、女子供を攫い拷問と人体実験をさも当たり前のように繰り返す、そんな連中が現れる。やって来てしまうのだ。

「そうあれ」として創られた贗作たちによる、生存競争ではなく異物の侵略。

そんな奴らが未来に来ると分かっている以上、生き残るために対策は立てて当然だろう。新しい技術や武力で武装し、己を守る為に策を練るのは防衛本能として正しいはずだ。

この鎧はそれすら許してくれないのか、後で割を食うのは自分達だというのがこのに。

(まあ、ツアーにだって分かりっこない未来の話なので言ってもしょうがないんですけどね)

「貴方が仰りたい事、よく分かりました。

要は気に入らないんですね」

『…なに?』

「強すぎる力とか、異物だの汚物だの真つ当な理由を付けているように見せかけてその実、貴方が嫌な思いをしたくないだけでしょう?と言っているんです。

貴方達、滅ぼされかけましたもんねえ?」

はるか昔、世界を支配していた竜種。

その天下を一夜にして崩したのが八欲王と呼ばれる異物の集団で

あつた。

“ワールドチャンピオン”

元の世界ではそう呼称され、数多のユーザーの中から選りすぐられた9つの世界の頂点。9人のプレイヤー、そのうち8名が何の前触れもなく異世界に放り出されたのだ。

本人達の意志とは関係なく、転移直後で現実とゲームの区別も付かぬまま、彼等は自由に振舞った。悪い方向に。

「ゲームならモンスターを倒してドロップを狙うのが当たり前」、「殺してもまたポップするから大丈夫」、「自分達よりレベルの低い雑魚ばかり」。

まるで幼児が銃を振り回しているようだった。

ゲームという偽りの中で積み上げた、ただただ強いだけの銃ちからで弱い者から考え無しに片っ端から奪い去る。

その圧倒的な力に大陸は恐怖のどん底に突き落とされた。

そんな彼等に義憤を覚えた者、単に自分達の存在が脅かされるのを危惧した者、つまるところ異世界に置ける頂点である竜種は勇敢にも挑みかかり、種の壊滅という結果をもって敗北した。

剣一振りで大地を分割し、振るう魔法で天候が歪み、死んでも死んでも蘇生アイテムで蘇り何事も無かったかのように戦線に戻ってくる。

そんな連中が同族の皮を剥ぎ、ドロップだなんだと訳の分からない事を言いながら迫ってきたら恐怖でしかないだろう。

理不尽だ、と心の底から思っただろう。

それは理屈で表すには単調すぎる、感情の話。

“嫌い”にならない訳がない。

「私と同じ人類が、自分達より圧倒的に弱いはずの存在が、人間 “如き” が自らを脅かしたのが気に入らないのですね？」

その子孫がのうのうと繁栄し、生きていくのを見るのが癢に障るのですね？

だから貴方は監視と称して人類を好き勝手しないよう一方的に縛

り付けている」

『待て、待ってくれ。』

君は：何処まで知っているんだ？

偽名の件も含め、僕は名前以外自分の事を明かしていないはずだ、
どうしてそこまで考えが及ぶ？

君は何者だ!?!』

「何者かについては先程も申し上げましたでしょう、二度も言わせな
いで下さいな。」

それに、貴方今ご自分で『竜王』って言ったじゃないですか。

法国が唯一恐れ、その動向を常に把握しようとする奔走している亜人連
合国家に属する竜王^{ドラゴンロード}、貴方はその使い：もしくはご本人なのでしょ
う？ だいたい想像はつきますわ」

普段のレイラから出るとは思えないほど冷めきった言葉。

原作知識と母より託された日記より、レイラは何故かの竜王がスレ
イン法国へこれ程までに監視の目を向けるのか、幾つか仮説を立てて
いた。

そして実際にこの目で確かめて確信を得る。

言葉にするには極めて陳腐な“私怨”と八欲王に滅ぼされかけた
恐怖がもう一度来るかもしれないという“怯え”、それから僅かばか
りの“後悔”を。

信用なんてこれっぽっちもしていなかった。

だからこそ、母カナミは彼に関する文書の端々に「うそつき」と記
載した。旅をしていた時も、魔神を打ち倒した時も、パーティが解散
して暫く、久しぶりに会って話した会話の中でもすべて。

『そうだ、僕が竜王のメッセンジャーだと知って何故そこまで強気で
いられる?』

「いられるも何も、別に媚びへつらう必要もないでしょう。」

私は成すべきことを成すのみ。

技術は進歩し理論は飛躍する、人類の進化は止められない。例え貴

方が他国の間者で圧倒的強者だったとしても、チープな脅し程度で私の歩みを止める事など言語道断！止めて堪りますか！」

本来なら人類が判断し、決める事だ。それを他国の上位存在が私怨で監視し、あまつさえ裁定者などと気取っているのに誰が納得するか。

内政干渉お断り！と静かに怒気を放つレイラだが、リク改めツアーは強気な姿勢を崩さない。

『…なら君は何を成すんだ。

それが世界を汚すと知っていないながら何故力を付ける、何故強くなるうとする。』

「『対等』になる為です。

弱者と強者の溝は深い。お互いが拮抗してこそ対等が生まれ、同じステージに立つ事で初めて話し合いという席が設けられる。」

ナザリックを前にして僅かでもレベルの差を埋めておけば少なくとも「舐められる」ことはない。守護者クラスはともかく、戦闘メイドレベルの強者相手に互角に持ち込める程度まで強くなっていれば「迂闊に手を出さず警戒して然るべし」とあの主人公なら判断するだろう。少なくとも直ぐ蹂躪して終わり、という選択肢は消える。

それにゲームには存在しないこの世界独自の技術を保持していれば対等とはいかずとも有事の際にはその技術を餌に交渉のテーブルに着く事ができるかもしれない。カルマ値最悪のNPC達を前にしてこんな努力に望みは薄く、希望的観測ではあるが。

一方的な庇護は要らない、過度な接待も要らない、同じ目線で同じ世界を見る為に彼女は力を欲した。

だがツアーはそんな事は露知らず、目の前の人間が傲慢にも自分との契約を無視し話を進めているようにしか見えなかった。

お互い食い違う2人の対話は熱を増していく。

『絵空事だな。』

君達は既に世界を汚した、魔樹を殺したあの半森妖精の少女もそう
だ。

法国は僕との条約を既に破っていた、この対価は支払ってもらおう事
になる。』

「お好きにどうぞ？」

ですが法国は今、大きな転換期を迎えています。

今まで通りの高圧的な外交でどうこうできるような生易しい相手
だと思わないことです。

八欲王との戦争から逃げ、おめおめと生き延び今更になって我が物
顔で裁定者を気取る竜王に期待はしてませんけど。」

『…なに？』

「ハッキリ言わないと分かりませんか。

邪魔なんですよ貴方、これ以上人類わたしたちに口出ししないでください。

貴方は監視者でも裁定者でもない、ぶれいやー”と言う名の災害
に負けた被害者の1人に過ぎません。

私達は先に進みます。

しようもないプライドで古参が新規の足引っ張るの止めて貰えま
す?。」

信用してないんでしょう?ならもう放つといて下さいませ。

途端、殺気が満ちる。

鎧越しても分かるほどに濃密なそれは部屋中で軋みをあげて、鳴い
ているようだった。

『図に乗るなよ人間』

低い低い、地の底を這うようなドスの聴いた声。

圧倒的な格上の竜種が放つ本気の威圧だ。

『短命な君達には分かるまい、世界規模の脅威など。』

奴等がどれほど世界を捻じ曲げ、汚し、法則を乱して余り有るか』

普通の人間なら震え上がり、失禁でもしながら意識を飛ばしかねない強烈な怒気を真に受けるのは他ならぬレイラである。

「はあ」

『確かに、君達を信用していない。』

期待もしていないし、生かすことで将来自分の助けになるなど考えた事はない。

それでも監視という名目で生かしている。

最大限の譲歩だ、これ以上は傲慢というものだ』

「はあ」

『スレイン法国はその枷を外そうとしている、これ以上の勝手を許せば君達を始末しに他の竜王達まで出張る事になるだろう』

「はあ」

『魔樹を討伐した事に関しては感謝しているよ。』

だからここまでだ。

これ以上君達は世界に干渉するな』

「はあ、そうですか。」

だから殺したんですね、リーダーを」

『……………は？』

あつけらかんと答えるレイラに再び固まるツアー。

おかしい。さつきまで殺さんばかりの怒気を放っていた鎧が一変、僅かに震えたかと思うと嘘のように大人しくなった。

どうやら仮説は当たっているらしい、と彼女は言葉を紡ぐ、その顔に笑みを貼り付けたまま、特大の爆弾を投下した。

「貴方の答えで漸く合点がいききました。

もう用済みでしたものね。

生かしておいても新しい脅威になりかねないから先手打って殺し

たんでしよう？

賢い賢い裁定者様♡」

“十三英雄” そう呼ばれた集団がいた。

それは約200年も昔のこと。

八欲王が悪逆の末、仲間割れで滅び平和が戻ったのも束の間、主を失った従属神達が乱心し“魔神”として世界各地で破壊活動を活発に起こすようになった暗黒の時代。

荒ぶる魔神を鎮めるため1人の男が立ち上がった。

“リーダー”、後にそう呼ばれるようになる彼は傷付きながらも旅をし、そんな彼を慕い、魔神討伐の旅路には多くの仲間が加わった。

彼ははじめは弱かったが傷付きながらも必死に剣を降り続け、やがて誰よりも強くなった。

彼等は幾つもの夜を超え、幾つもの出会いと別れを繰り返して、旅路の果てに大陸全ての魔神を討伐せしめたのだ。

リーダーを筆頭に魔神を打ち倒す彼等の姿は人々の心に希望を与え、やがてかの一団を“英雄”と語り継ぐようになる。

そんな吟遊詩人の語る御伽噺のような一団に当時のツアーは所属していた。

彼には竜王という立場がある、故に魔法で鎧を創り遠隔操作で視覚を共有しながら諸国を周り、魔神への対抗策を練っていた。そんな折、魔神討伐を目指して旅していたリーダーと出会えたのは正に運命と言っても差し支えない。

今でも鮮明に思い出せる、あの懐かしき日々。

「……法国には500年の歴史が有りますわ。

当然、これまでに起きた500年分の出来事を記録し保管する施設だつて存在します。

その中から私、探しましたの。十三英雄の事を」

曰く、「十三英雄」という呼称はスレイン法国が亜人軽視で歪めた人数なのだがそこは割愛して。

「国の始まり、人間国家を形創つた六柱の『ぶれいやー』。

我欲のまま奪い、殺し、最期は内輪揉めで崩壊した八欲王なる『ぶれいやー』。

そして世界に散つた魔神を永き旅路の果てに全て討伐せしめた十三英雄。

私、その中でも十三英雄についてよく調べてまして、国の書庫や他国の歴史書なんかも全部掘り返して探していたんですよ」

200年も昔の話なのに、調べてみるとわりと痕跡は残っているものなんですよ。とヘラヘラ笑うレイラ。

破滅フラグをへし折る為なら彼女は文字通り『何だつてやる』。

今までもそうだった、力をつけるため両親に止められようが一心不乱に槍を振り続け、魔法を覚える為に書庫に籠つて何徹もしながら勉強に耽つた。

例え千を超えるような膨大で乱雑な過去の資料でもひたすらに掘り起こし読み解いて、必ず答えを見つけてるだろう。

母の日記に記された記録を垣間見て生まれた竜王に対する『疑問』、その答えをレイラはずつと探し続けていた。

「『リーダー』」を筆頭に他種族からなる混成部隊は最後の魔神を討滅した後、解散した。

ただ、それぞれが故郷へと帰っていくなかでどうしても足取りの追えない人物が何人かいました」

「彼等は人類種であるにも関わらず魔神討伐後も人間国家に属することはなかった。」

「これだけならよくある事なんです、疑問は他にありましたの」とある場所へ行つたつきり、幾ら探してもそこから先の消息が掴めなかつたんですね。

暗黒騎士、大神官、そしてリーダーの3人。全員が同じ場所で足跡が途絶えたんですが、そこが何処だか知ってます?」

含みのある笑顔で天使は微笑む。

悪魔のような甘い声音で語り出す。

鎧は何も喋らない。

「アーグランド評議国」

「3人ともそこに向かったのを最後に記録が無くなっているんですよ、それはもうぱったりと」

「うち2人は戦士職、大神官は記録によると天使を召喚する信仰系魔法詠唱者だったそうですね。3人とも転移系の魔法は習得出来ない」

「もしかすると…第三者の転移魔法か未知の手段で遠くの地へ旅立ったのかもしれない。」

もしかすると…ちやっかり評議国に永住していて見つけれなかったのは私の研究不足なだけかもしれない。」

「ただこれは私が独自に調査し、得た推論なのですが」

「殺されたんですわよね、3人とも」

吐き捨てた言葉に空気が凍った

「けどおかしくないですか？

魔神を斃し、世界を救つて、誰よりも強くなつた勇者達は練度も実力も極限にまで達していた筈。

なのに他殺されるということは、油断させて暗殺か、彼等以上の力を持つ者が手を下したか……

世界から弾かれた異物を打ち倒す程の彼等を物理的に打倒できる存在なんて片手程しか数えられません。

現行人類の私達ではあの魔樹にすら苦戦させられましたからね」

『……………』

「攻撃手段も分からない魔神を初見で討伐するには相応の装備が必要だった事でしょう、一撃で殺されない防御力は当然としてアイテムか装飾品で毒や呪い系統の耐性も得ているはず。

それらを貫通するほどの強力な攻撃や毒の類を使った可能性も考えられますが、そんな事をすれば周囲に相応の被害が出て破壊痕や魔力の残滓は必ず証拠として遺る。

なるべく静かにコトを済ませるには…装備を剥ぎ取って背後から一撃で仕留めるのが常套手段ですわね」

「けれど百戦錬磨の猛者ならば当然、警戒心の高さも天井知らず。

余程の事がないかぎり無防備に背中を晒すなんて真似はしない」

『……………』

「なら3人を殺した犯人は

人類最強クラスの猛者を一撃で葬れる実力を持ち

相手の耐性、装備、所持アイテムも熟知したうえで

彼等が警戒心の欠片も抱かないほど親しい

そんな「誰か」になるんですわよねえ」

「そうそう、記録によれば3人とも『ふれいやー』様かそれに連なる血筋の方々だったそうですね。

彼等が最後に接触したのは『高価そうな白銀の鎧を着た仲間』なる人物だそうですが……その所どうお考えですか？白銀の鎧さん？」

瞬間、レイラの頬を巨大な剣が掠め背後の本棚に突き刺さる。

本棚ごと壁をぶち抜き、もうもうと煙が立ち込めるなか、凍った紅茶の入ったカップが音を立てて割れる音が響いた。

『……もう、たくさんだ』

当然、それをやれるのは1人しかない。

「壁の修理代は評議国宛に請求させていただきますね」

『君は危険だ。』

やはりここで殺す、あの半森妖精もだ。

世界を穢す血は絶やさねばならなかった』

「……それが勇者殺しのクソトカゲが出した結論ですか。

しよーもねえですわ、でも自白したようなものですね。

貴方は仲間を裏切った。

彼等は貴方を信じて国まで訪れ、歓待を楽しみにしていたというのに」

『……黙れ』

「魔神を討伐できるほど力を付けたふれいやーが八欲王と同じ未来を辿るのではないかと疑心暗鬼に陥って、出した結論が国ホームに呼び寄せて秘密裏に暗殺ですか。自国の方が隠蔽しやすいですもんね」

『やめろ』

「勇者達はさぞ浮かばれないでしょう。

使われるだけ使われて、目的を達成すれば用済み。

まんまとおびき出されて拳句消されるだなんて」

『やめろ……！』

「結局お強い上位種族様は下等生物の命も尊厳も、何もかも奪ってい

く…

利用して利用して利用して、終わったらпойっ！

まあ！何が「裁定者」ですか、やってる事がそこら辺の犯罪組織と
なんら変わりありませんわ！」

『やめろと言ってるだろッ!!』

「認めなさい。」

お前は苦楽を共にした友人との絆よりも、使命感の皮を被ったちっ
ぽけな私怨を優先した。

後で後悔して、罪滅ぼしのつもりで人類の監視でもやっていたんで
すか？

自ら手を掛けた事に中途半端な罪悪感でもあったんですか？

所詮人間だと自惚れて、ズタボロにやられた拳句恨みつらみを抵抗
できない弱者に押し付けて保護した気になっているだけでしょー！

『…ッ違う!!』

レイラが言い終わらぬうちに、ツアーの周辺に展開された大量の武
器が速度を増して襲い掛かる。

その直後、凍りつき力なく床に落下した。

『なっ…!?!』

それを確認するため首をひねろうとした時、異変に気付く。

鎧がぴくりとも動かない、まるで磔にされたかのように椅子に座つ
たまま姿勢が固定されている。

現在ツアーの鎧の中には魔法によって生まれた氷が隙間なく詰め
込まれている。

鎧の中は伽藍堂、氷によって関節に蓋をされてしまえば物理的に隙
間がなくなり動けない。温度の変化で普通なら気付くだろうがこの
鎧はツアーが遠隔操作で動かす玩具のようなもの、感覚などないだろ
う。故に気付くのが遅れてしまった。

「…そちらが手を出さない限りはこちらからも手を出さないよう努め
ましたが、残念です」

既に極低温に凍りついた部屋の中、そう答えたレイラは机に身を乗

り出して、片脚で鎧を強く踏みつけながら撃杖を動けないツアーの頭に突き付けた。

「私はお前の全てを否定する。」

停滞を好み、進歩を拒み、最強種の驕りで過去をいつまでも引き摺った。ただ無為に永く生きているだけの自惚れ竜王。

200年前も、そして今も、お前はまた間違えた」

その瞳に絶対零度の殺意を乗せて、淑女は嗤う

18 破滅フラグしかない対談に臨んでしまった…
(下)

夢を、観ているようだった

永い永い生のなか、寝床で観る暖かい夢

毎日が新鮮で日々の小さな変化にすら喜びを感じる未熟な若輩者
のような

僕は束の間の冒険ゆめを観る

『〃白銀〃、これからヨロシクな!』

そう言つて無防備に伸ばしたその手を忘れることはない。

世界各地に散らばった破壊の残滓、〃魔神〃と呼ばれる遺物たち。

滑稽にも自滅した八欲王達が遺した汚物を探し出し、始末するため
大陸を奔走していた時期に彼等と出会った。

弱そう……いや弱いな、ちっぽけな人間だった。

周りにいる仲間達とは比べ物にならないくらい練度が低い、そこら
辺にいる農民と変わらないような弱者。それがリーダーの第一印象
だ。

弱いくせに戦闘では我先にと前へ出て、ボコボコにされて帰ってく
る。

リグリッドから「死に急ぎ野郎かいお前は!」と何度も叱責されて
いたのをよく覚えているよ。

けれど皆の力を合わせて最初の魔神を倒した時、彼の力は見てわかるほどに大きく飛躍した。

他にも魔神に荒らされ全滅した街を見た時や非道な行いで他者から略奪を行う人間を止めた時も、悲しそうな表情とは正反対に彼の五体には力が漲り、弱き者を助けるためと通常以上の力を発揮し続けた。

喜ばしい事だ。

旅を同じくする仲間の成長ほど嬉しいものはない、僕達竜種は常に種の頂点として生まれてくるからね。下手に寿命も永いもんだから彼の言う「成長の喜び」とやらを実感する機会が無くて珍しいんだ。

それからもリーダーはメキメキと力をつけ、迎えた最終決戦。

彼はこの中の誰よりも強く、僕の鎧だって気を抜けば負けてしまうくらいには強くなっていった。

心から嬉しかった

そう、嬉しかったんだ

今まで共に冒険した仲間の成長にこれほどまで心揺さぶられるとは思ってもみなかった。

寝食を共にし（鎧だから食べることはできないけど）、強大な敵を打倒するため隣で戦って、他愛ない会話で笑い合える。

種族も地位も関係ない、等しく皆が平等で、足りない所をお互い支え合い、助け合う。

“仲間”

これが、そうなのか。

僕はずっと独りだった。

永劫に近い竜の寿命と始原の魔法に繋がる資格を持ち、この世界の最強種として生まれた。

いつも孤高を気取っていた竜帝ちちや他の竜王のように、僕もそうあるものだとばかり考えてた。

「竜は一にして全である」とは誰が言っただろうか。恵まれた肉体を

持ち、尽きぬ魔力と生命力はこの世界の支配者たる証。

故に竜種は孤独だ、誰かに頼る事をせず、独力で全ての問題を解決しようとしてしまう。実際、できてしまうからね。頼ってしまったなら他の者から後ろ指を指されかねない。

でも彼等に出会って僕の価値観は根本からひっくり返ったよ。

エルフも、ドワーフも、死霊使いも神官も、天使も悪魔の混血児すら同じ輪の中で笑い合い、時に背中を預け共に戦い、生きていた。

しかもその中心人物が人間だったんだ。

満天の星空のもと、野営のため皆で集めた薪に火を付ける。

匠王の持ち込んだ酒を大神官やリグリッドが飲み漁り、カナミと暗黒騎士が盃片手に何やら熱心に語り合っていて、慣れない酒でうつらうつらと頭を揺らすキーノをリクが介抱している。吸血鬼なのに飲めるし酔える酒を用意してくるとは流石ドワーフ産、恐ろしい。

生真面目なエルフは最低限の食事を済ませたら直ぐに周囲の警戒へ行ってしまった。虹彩異色オッドドアイの彼女は王族の生まれらしく、普段は素っ気ない態度だがいつも影で皆を気遣っていた。今回も皆が安心して騒げるように気を使って自ら動いているんだろう。その為の野伏レンジャーだ。

散々騒いで皆が寝静まった頃、独り見上げる夜空は住処に籠って眺めるより何倍も美しく見えた。

ああ、幸せだ

鎧姿なのが本当に口惜しい

こんな旅ゆめがずっと続けば

彼等はあるの忌々しい「ぶれいやー」とは違う。

同族を遊び感覚で皆殺しにし、尊厳を貶めた外道どもとは違うんだ。

違うんだ……!!

違うに決まってる!!

でも、ゆめは覚めたんだ

『ぐいめんな…ツアー……』

自らの爪が彼の身体を貫いた時の光景を僕は忘れない。

ああ、ああああああ……

ああああああああああああああ……ツ!!

違う！違う違う違う！違うんだ！

僕は殺すつもりなんてなかった！

懐疑心はなかった！疑う気持ちなんてこれっぽっちもなかった！

そのハズだ、そのハズだったのに！

君を裏切ったあの男を疑った、偽りの力に溺れ人命を軽んじ世界征服なんて嘯いて実行しようとした仲間を斬ったリクを……

君も将来そうなってしまうのかも頭を過って……

考え始めると止まらなくなった！

所詮「ぶれいやー」だと、あの八欲王と同じ種族なんだと一方的に決めつけて君を罠に嵌めた。一番最低な方法で暗黒騎士と大神官を殺した！君を殺した！

なのに何故、君は最期まで僕に微笑むんだ……

八欲王あの日の地獄が忘れられなくて、一時の浅慮で関係ない君たちまで巻き込んで、拳句の果てに疑心暗鬼で仲間を罠に嵌めた最低のクズ野郎に。

『ぐいめ……ん……』

もっ……と……はな……し、すれば……よかったな……』

『なかまの……きもちにも……き……づいて……』

あげられない……なんて……リーダーしっかく……だ』

なんで謝るんだよ

なんでそんな目で僕を見るんだよ

「暗黒騎士も大神官も同じ目をしてた

騙されて背中を刺されてるっていうのに揃いも揃って恨み言のひ
とつとも言わないで

まるで迷子の子供をあやしているような、困った表情で笑うのだ

僕は君たちを散々利用して、取り入って、しまいには裏切った最低
野郎だっというのに

『じゃあ……泣くなよ……バカやろ……う……』

言われて気付く、目元から溢れるものに

旅ゆめの中、炎で街を焼かれた娘が、魔神の気まぐれで家族を殺された父
親が、やつとの思いで支配から開放された村長が、見知らぬ誰かが悲
しみ、時に喜びと共に流していたそれ

僕にはきつと無いものだと思ひ込んでいたよ

そうか、これが“涙”か

“後悔”なのか

リクの心臓から鼓動が止まる、目から光が消えていく。僕らの頼れ
るリーダーは静かに、腹を貫かれたというのに穏やかな表情のまま息
を引き取った。

その高潔な魂は蘇生を完全に拒否していた。

周りの竜王達はこの話題に触れると「よくやった」「上手くやった」
と口々に僕を褒め称える。

ただ1人、ブライトネス・ドラゴンロード色彩の竜王だけは複雑な表情で僕を見ていたけれ
ど。

彼にはワンエイスの曾孫が居るからね、何か思うところあるんだろ

う。

僕のやった事は支配者として正しかった、けど友人として最低の事をした。

仲間との絆と一時の均衡を秤にかけて、愚かにも均衡を選んだ。リグリッドやカナミに顔向けなんてできないくらいに最低な行動だ。

けれど竜王としての僕は厚かましくも彼女達に素知らぬ顔して話ができる、できてしまう。

だってしようがないじゃないか、この世界の未来の為なんだから

慈母^{マザー}の笑う声が頭の中に響く
竜帝^{ちち}の愚行を精算しなければ

あんな思いをするのなら、もう弱い人間に頼りはしない。

初めから期待しなければ後悔なんてする必要もない。

今後は人間に頼らず僕だけの力で異物を排除してみせる。その為に人類にはこの大陸の端で細々と生きていて欲しい、ぶれいやーの子孫たちもそうだ。

強者なんて要らない、慎ましく種が存続しているだけで万々歳だろう？

タイミングのいい事に、スレイン法国が評議国と不戦条約を結びたいと申し出てきた。

スルシャーナが消え、ぶれいやーという抑止力を無くした事が国民に不安を与えているようだ。それにかこつけた議員達が人間にどんな不平等条約を突き付けるのかは分かりきってる。

スレイン法国はスルシャーナ達の遺した最期の人類領域、他の5人が寿命や稼働限界を迎えて命を終える中、アンデッド故に最期まで

残った彼とは何度も話し時にアドバイスを貰っていた協力者だった。彼らの遺したアイテムの回収も行いたいが：弱りきった国にそれは流石に酷だろう。時を見て、話を持ち出せばいい。ただスレイン法
国には六大神の子孫が混じっている、万が一その中から強者を見出し
てしまったら制御ができなくなるから監視も兼ねて条約を組むよう
に議員達に提案してみよう。僕の頼みなら断りはしないだろうし。

そして嘗ての仲間、カナミもふれいやーだ。

天使である彼女はリーダーのように寿命がない分いつどこでタガ
が外れるか分からない。

だからやらなければ。

次に会う時は彼女にも：嘘を吐かなきゃいけないのか。

仕方ない、仕方ない事だ。けどそれはちよつと、嫌だな…



「人類はいずれ神の手を離れ、自らの脚で歩き出す。これは確定事項
です。」

友人すら信じられなかった裏切り者のお前如きがどの面下げて許
さないとかほざくんですか。

そして、言いましたわね？

私の友人を殺そうなどと戯けた台詞を」

部屋の空気が凍る。

窓は外が見えないほど霜で真っ白になり、鎧が擦れ合う音でガチガ

チと耳障りな音を立て、所々から氷柱が滴り落ちていた。

既に超低温に達していた筈の室内温度はマイナスを振り切つて、数値化するなら物理温度の限界値である―273℃にまで達しようとしている。

「貴方、生きて帰れると思わない方が宜しくつてよ？」

そんななか、怒りによってなけば暴走状態になった異能力で人体に影響どころかこの世全ての生命体が絶命するレベルの冷気を放つレイラ。

言葉だけではない、今の彼女には殺ると言ったら殺る「スゴミ」がある。

プ○シュート兄貴の教えも忘れる程に怒りを露わにする彼女に相對する白銀鎧、ツアーは必死に考えを巡らせていた。

（不味いな、少なくとも鎧のまま勝ちはなさそうだ。）

始原の魔法を使えば鎧經由で彼女一人なら始末できそうだけど、そうすると後に控える半森妖精に備えられない：こんな事ならリグリッドを待つてから彼女に会うべきだった。）

仮に鎧が破壊されても本体に問題はない。それよりも後に控える問題の方が大事だ。

そもそもこの鎧、本当なら信頼できる友人と共にきちんとアポイントメントを取ってから訪れるつもりだったのだが、早く確認したいが故に独断専行を優先してこのザマである。

『じゃあどうすれば良かったんだよ…』

レイラにも聞こえないような細かい声、ツアーの吐露した愚痴にも似た台詞が消え入るように鎧の中へ響く

“そこまで”

『ツ?!?』

2人が一触即発の膠着状態に陥っていたその時、声と共に《転移門^{ゲート}》が開く。

そこから現れた影にツアーは驚愕し、レイラは驚きと共に鎧から脚を離し即座に跪いた。

認識障害の魔法らしい、纏っていた黒いモヤが晴れる。

そこから現れたのは赫と黒を基調に彩られたロングドレス風の修道服、ウインプルの代わりにティアアラを被る。まるで精巧に作られた人形のように美しい女。

薄衣のように白い肌とエルフのように尖った耳、2人を見つめる光のない赫い瞳から彼女が人ではないと直感できる。

『…まさか君まで出てくるとはね、ルーフアス。』

スルシャーナが殺されて以降現れることは無いと踏んでいたけれど。』

ルーフアス、そう呼ばれた彼女こそ六大神の石柱スルシャーナによって創られ、主人亡き後もスレイン法国に留まっていたNPCその人であった。

“……………”

ツアーの言葉に見向きもしないルーフアスは跪いたままのレイラへと近寄って、徐にその頭に手を置く。

“部屋 もどして”

「し、承知致しましたわ!!」

先程までの怒りはどこへやら、慌てて落ち着きを取り戻した(矛盾)

レイラが指を鳴らすと部屋はたちどころにもとの温度へと戻り、満足したように彼女はツアーの対面にあるソファへと腰掛けた。レイラは付き人の如くソファの後ろ側に控え様子を伺っている。

本来ならば目覚める事すらなかった六大神の従属神、ルーファス。嘗ての神々を失い、仕えるべき主を無くしたNPC達はその深い絶望から自死を選ぶ者、錯乱し周囲に甚大な被害を及ぼした者など様々な症状が記録に残っている。そんな中彼女だけは何故か錯乱も絶望もせず、封印という形でスレイン法国地下深くに留まった。

そのまま幾百年、ただのひとつも暴走を起こさずに眠り続けていたのだが：何故か最近になって目覚め、漆黑聖典の魔樹討伐を期に法国内で活動を再開している。

竜王と六大神のNPCという本来^{原作}ならありえない奇跡の組み合わせ、そんな状況の中静かにルーファスはその口元を開き：

“くそとかげ ばーかばーか”

『……………なんて
????????』

クツソ幼稚な暴言をお吐きになられた。

“メッセージを再生します”

と思つたら突然機械的な口調で告げてきた。

“あー、あー、この録音をツアー、お前が聞いているということとは、俺はもう滅んでいて、ルーファスの保管魔法が解除された後だろう”

それはルーファス本人の声ではなく、低い男性の声音だったのだがレイラとツアーはこの声の主を瞬時に理解する。

(……………もしかしてこのお声、スススススルシャーナ様^{!?!?}!?!?)

『彼が、何故……………』

スレイン法国の守護神にして六大神の石柱、名をスルシャーナ。500年前に滅び、謎に包まれた彼の肉声などそれだけでスルシャーナ教徒にとつては国宝に匹敵する貴重品だ。

「連中、好き放題やり過ぎだ。」

少しだけ話す機会を貰ったが、この世界の住人の事を素材としか思っていないようだし、ゲーム感覚が抜けてない。説得は無理だった。

知ってるか？ワールドチャンピオンって響きは良いが、要は9つの世界から選ばれた超重課金者だ。金にものを言わせて、働きもせず延々とゲーム続けるなんてとんでもない。クソみたいなリアル環境の中でそんなこと出来る奴は限られてくるんだよ。

お前には聞き覚えのない単語が沢山出てきただろうが察してくれ。チャンピオンってのはごく一部を除いて選りすぐりのキチガイ集団なんだ。

そんな連中が8人も集まったらどうなるか想像着くだろうか？」

彼が語るのは当時存命だった八欲王について。

ユグドラシル最強のチャンピオン8人が興した少数精鋭ギルドはその圧倒的な課金額と昼夜を問わずゲームに張り付く膨大なプレイ時間をもってして行われるゴリ押しは数々のイベントにおいて猛威を奮った。

流石に大人数を有する大型ギルドの物量には届かないが、重課金で固めたNPCとワールドチャンピオンに成り上がる程のキャラコントロール能力、そして「チャンピオン」の職にふさわしい強力無比な固有スキルを存分に使った戦いは全プレイヤー中でも群を抜いている。

ある意味ユグドラシルを誰より楽しんでいた彼らはゲームにどっぷり浸り、名残惜しくも迎えたサービス最終日。

8人は拠点ごと異世界へと転移する事になる。

それはそれは喜んだことだろう。

レベルはそのまま、スキルは引き継ぎ、所持アイテムも豊富、嘗てはその希少性と防御力の高さから難攻不落の要塞とまで言わしめた空中神殿と重課金で武装した屈強なNPC達をそのままに「ユグドラシルⅠⅠ」が始まったのだと。

自分達以外の者は全て作り物と勘違いし冒険心の赴くままに素材を集め、モンスターを斃し、勇者の如く家探しをして村々を荒らし回った。

邪魔してきた竜王達には持ちまへの力をもって蹂躪してやった。

命乞いをする者は気まぐれで生かし、報酬がしよぼければその場で斬り捨ててクエスト破棄もした。

そうして何年もゲームと現実の区別もつかぬまま、世界中を荒らし回った。

「やつら竜王や亜人狩りに飽き足らず俺達が守ってきたスレイン法国にまでちよっかいを出してきやがった。

話し合い：はもうできそうにない。

一応同種のよしみだろうが、竜王戦と違って虐殺に否定的な奴も一定数居るらしいな。侵攻が遅いのは意見が食い違って竦み足になってるんだろう。

全体主義に同調圧力、こういうところ無駄に人間臭いんだよなあ、近いうちに仲間割れでも起こすんじゃないかあいつら」

「まあ、アンデッドの俺は間違いなく滅ぼされる。

竜種の皆にも既に酷い被害が出てるだろう。言っても仕方ないだろうが、同郷の馬鹿共が起こした愚行を謝罪させて欲しい。本当にすまなかった。

でもなツアー、どうかこの結果だけが人間の全てだと決め付けないでくれ」

「あいつらも元は何の力もない一般人だった。

たまたま玩具のおかげでなんでもできる力を手に入れて、舞い上がっちゃってる。俺だってそうだった。

アンデッドつっても元は土建務めの底辺小卒だったんだぞ！何度

も話したよな!?”

“馬鹿共には明日、灸を据えてくる。

十中八九殺されるだろうが…俺もここらが潮時だ。竜王達が徹底抗戦したおかげで向こうも死んで、幾らかレベルダウン食らってるだろうがチャンピオンの固有スキルがあるからな…1人でも道連れにできれば御の字か。

人類はもう俺達の加護なんて必要ない。子が親から独り立ちするように、スレイン法国も自分の脚で歩き始める。ちよつとばかり狂信的過ぎるのは不安要素だが…

でもそれでいいんだ、元々俺達は世界の異物だったんだから。お前が言ってた「竜帝の汚物」って表現がピッタリさ。”

“寿命持ちは軒並みくたばって、ねこにやんとアーラも稼動限界を迎えた。神都の要塞化にレベルを消費しなけりやもつと永く生きられたかもしれないが…もう終わった事だ。

そして俺も、綺麗さっぱり掃除される。”

“最近、目を閉じるとよく昔の事をよく思い出すんだ。

サービス名終了後、クランでいきなり異世界こっちに飛ばされてから滅びかけの人類を見つけて衝動的に助けちゃってさ、神だなんだと崇められてホイホイここまで来ちゃった”

“どいつもこいつもゲーム中毒者の馬鹿ばかりだったから政治も経済も分からねえ、お互い意見を出し合ってたなんてか現地人の前で取り繕って”

“みんな手探りで必死だった。

でもそれが楽しかったんだよ、誰かと一緒に悩んで考えて、時にぶつかり合ってたさ。

「活きてる」って実感、それがあつたからアンデッドの俺でも最期まで人類に寄り添う事が出来たんだと思う”

“だから、ツアー。

この記録を聞いたら、友人を作ってくれ。

ゆつくりでいい。腹を割って正直に、自分の本音が語れるような相手を作れ。

それで悩みとかちゃんと相談すればいい。皆で話し合って決定しろ、竜の誇りを捨てろとは言わねえがそこはホラ：折り合い付けさせよ。

お前さん、頭固いし。一人で全部抱え込む癖があるからな、放つといたら使命感と責任感で潰れちまいそうだよ。

ただでさえ連中に同族殺されまくった後だつてのに：やつぱあいつら絶許だわ、全員5回くらい即死キメとくか？”

”ま、ツアーはツアーだ。

ありがとな。短い間だつたがお前には世話になった、竜達の中でまともに取り合ってくれたのはお前だけだつたしよ。

だからこうして最期の挨拶を俺の娘に託す。

俺達のガチ装備も全て娘が保管して封印、苦勞はしたがワールドアイテムを使ってNPCとしての枷も外した。凝り固まった設定が少しはマシになるだろう。時が来るまで徹底的に隠蔽させる。法国の宝物殿はフェイクさ、万が一連中に荒らされた時用の匣だ。

ワールドアイテムも1個入れといたから信憑性はあるだろ”

”もし子孫の誰かが：「人類を正しい方へと導くに相応しい人材」が現れた時、ルーファスの封印は解けるようになってる。

悪魔は嘘や悪意に敏感ってテキストを逆手に取つてな、この子の探知能力なら法国じゅうの人間の中から『ホンモノの救世主』を探し当てるだろう”

”なに、そう時間は掛からねえよ”

”お前たちの言う『揺り返し』。

ユグドラシルプレイヤーの転移に備えねえとな、俺が居なくなつても人類がツアーの手助けになれるようサポートするんだ”

”人類は弱い、言葉に嘘を乗せて裏切りもするし騙しもする。

けどよ、前に進むととする力ほどの種族より強いんだ。

不幸を、後悔を、失敗を、全部全部飲み込んで己の糧にできる種族だ”

”きつとお前の力になってくれる”

”このメッセージを聞くのは封印が解けてルーファスとお前が対

面した時だろう、連中の侵攻の都合で急拵えの設定だから粗が多い計画だし、タイミングがズレたら時期が遅過ぎ：なんて事にもなるかもしれないがどうか：”

”お前を傷付けちまった人類を、もう少しだけ信じてあげてくれ”

”再生を終了します”

静まり返る書齋。

レイラは口をつぐみ、ツアーは深く俯いている。

法国の伝承によればスルシャーナは八欲王との戦いに敗れ、この地を去ったと言われている。

同じ外からやって来た者同士で設けた短い話し合いの場で、彼は八欲王のスタンスを悟った。

彼らは元いた世界でいう所の富裕層にあたる人物だ。

コロニー内において富を独占する支配者達、金にもものを言わせ気に入らない事があれば過剰な報復を行う幼稚な精神性、社会人としての道徳など投げ捨てた彼らの所業をスルシャーナは同郷故に何度も見ている。

そんな彼等が圧倒的なレベルと最強のクラス、無敵のNPC達に囲まれて、自分たちより弱い原住民に対して何をするのか想像に難くない。

彼等はそういう生き方しかできない人間なのだから。

この世界の支配者たる竜達を絶滅寸前になるまで狩り尽くし、亜人を木っ端の如く粉碎しながら最終的にアンデッドのスルシャーナにまで手を伸ばそうとした。

人間を匿うアンデッド、という存在が気に入らないのか、それとも六大神の保有するマジックアイテムを奪う為か、八欲王はいつも通り

幼稚な衝動のままこちらを排除しようとするだろう。

そして歴史の通りにスルシャーナは滅ぼされ、敵を失った八欲王はその一件の後宝の奪い合いで仲間割れを起こし全滅した。

『……言うのが200年遅いよ、きみ』

ぼそりとツアーが呟く。

リーダーのこと、スレイン法国のこと。

忠告をもっと早く聞いていれば、なんて今考えてもしょうがない。けれど胸を苛む重い後悔だけはいつまで経っても消えなかった。

“悪魔は『あくい』や『うそ』にびんかん”

“たいきよくに いちする 天使も そう”

“いままでのお前 うそしかなかった”

“じふんに 『うそ』 ついてた”

“でも 聖女とはなして 『うそ』 きえた”

“ だから パパとのやくそく はたす ”

『……………』

全て見透かされている、この小さな悪魔に。

目覚めて少し、ルーファスは法国に残った資料とその探知能力でもって失った500年分の情報を精査した。

眠っている間この世界で起きた事全てを頭の中に叩き込み、自分の立場を理解する。同時に存命の最強種達についての調査も並行して。

仕えるべき主を失った喪失感はある、しかしそれに苛まれるよりも先にルーファスには彼が遺した最後の命題が託されていた。

そして機械的に論理的に、ひとつの結論を導きだす。

国民や政府上層部の凝り固まった人類主義思想は正に主が危惧した未来そのもの。自分が眠ってから500年分の積もり積もった偏見を打開できる“爆弾”が必要だった。

そこで白羽の矢が立ったのがレイラである。

悪魔の彼女はその特性上、その言葉や行動に込められた『悪意』を察知し、相手の虚偽を見抜く事が出来る。

その性質を応用すれば『純粹な善意』を持つ人間を逆探知することだって可能だ。というのがスルシャーナの考えた作戦である。

スリープモードの状態のまま他の機能をオフにして、探知能力に特化したルーファスの悪意センサーは国中を網羅した。

スルシャーナ的には「人間って寿命短いからサポート役として娘を着けたいな。代替わりしても寿命のないルーファスは残り続けるから引き継ぎも楽になるだろうし、人類の負担も減るだろ！」くらいの気分だったのだ。感覚的に50年に一人くらいの周期で現れる予定だった。

しかし彼には誤算がひとつ、選定役のルーファスが抱く『善人』のハードルはすこぶる高かった。

故に候補は上がれど採用までに至らず、結果何百年も眠ったまま過ぎた後遂にレイラが選ばれた訳だ。

「母の愛した領民を守り、人類を護る」その言葉には驕りも偽りも一切含まれていない。貴族産まれにも関わらず民の心に寄り添い、他種族であっても平等に接する懐の深さを持つ。口だけではなく具体的な取り組みにも精を出し、結果領地は豊かになった。この国において神の加護が無くともその脚で歩き出し、しっかりと先の未来を見据えている彼女にルーファスは主の影を見た。

純人間ではないから、などと無粋な事は言うまい。彼女こそ人の世を救済するに足る器。

そう判断したルーファスの行動は早い。

そもそもサポート役として生み出されたこの身だ、戦闘補助はもちろん、『優秀である』と設定された彼女は六大神の現役時代もスルシャーナに付き添い、他の従属神達と共に数々の政務をこなしてきた。処理速度はピカイチだ。女の身体として生まれたのだから時には『そういう』サポートもしなくてはいけないのかとも思っていたがレイラは既に夫持ちであり、杞憂に終わる。

レイラとの会談の際もツアーが容赦無く殺しにかかっていたなら
即座に戦闘へ介入していた事だろう。

主の命令で探し続け、やっと見つけた『ホンモノ』をみすみす失う
訳にはいかないのだから。

そして進めなければならない。

命令通り、『真なる人類の導き手』が望む国づくり。その第一歩を。

“スレイン法国 は 評議国の ひごから だつする ”

相変わらず無表情のまま一方的に話すルーフアスの言葉に思わず
顔を上げる。

そんな事、レイラだつて知る由もない。

だつて彼女が提案したのはスレイン法国の完全な独立。竜王の庇
護から離れ、自らの手で人類を導くと宣言したのだから。

従属神（NPC）たるルーフアスがそう言うとはつまり、宗教国家
スレインの総意に他ならない。

会議？承認？多数決？

知らん、そもそも此処は元は神（ぶれいやー）が統治し動いていた
国だ。

いちいち多数決など取る必要は無い、この場においてはそれが最善
だと彼女は判断した。

『それを他の竜王が許すとも？』

“だから こうかんじようけん ”

“《傾城傾国》 あげる ”

「ええっ!？」

大きな声で驚いたのはレイラだった。

国宝ケイ・セケ・コウク、名称《傾城傾国》はスレイン法国に伝わる
最高峰のアイテム、ユグドラシルにおいてもその位は最上級となる
“ワールドアイテム”に位置し複製は愚か現地においては2つと存
在しない超貴重品だ。

それを、議論も無しに譲渡すると言った。

そろそろ神官長達が泡吹いて倒れる未来が浮かんできたぞ

(マジですか!?)

確かにカイレ様が亡くなられてから所有者は居ませんし…今更取られても…)

“ほかにも 宝物殿のアイテム いらないぶん じょうとする
これでおあいこ”

“竜王 せつとく まかせた”

ぐつ、とサムズアップするルーファスに唸るツアー。確かに提案は魅力的だ。

元々スレイン法国のユグドラシルアイテムはツアーが保管し、管理すべきだと思っている。ツアーたち現地住民にとってユグドラシル産のアイテムは適正のある極わずかな者以外は装備できない仕様になっており、一度所有者が居なくなれば次に発見されるのは何年先か分からない。その間アイテムは持ち主不在で宙ぶらりんのまま国庫の中で眠らなければならず、管理費だって馬鹿にならないのだ。

永き時を生きるツアーはユグドラシルアイテムが世界に広まるより前に産まれているため装備などできない。国宝を渡されても使い道は全くない。故にただ手元に起き、保管する。危険な効果を持つものであればあるほどに目の届く所で管理がしたい。

あと竜種の本能が光り物やレア物を好んでいるのもあるが、本人は気付かない無意識下での事だ。

それに《傾城傾国》の譲渡、これはデカイ。

あらゆる者を耐性無視して洗脳、魅了できるこのワールドアイテムは彼が注視していたアイテムのひとつだった。世界級存在である竜王には効かないだろうが、これがスレイン法国にある限り他国はいつまでも洗脳による裏切りを懸念しなければならないのだから。

これをツアーが管理できるメリットは大いにある。

“それに 腹をわって はなさない”

『君とっ?』

ゆつくりと首を振るルーファスが書斎の扉を指差した直後、向こう

側からドタドタと複数人の足音が響いた。

「ねーちゃん大丈夫!？」

なんか屋敷の一角が吹き飛んでるんだけど……って書斎がスゴい事になってるううう!?!?!」

音を立てて扉を蹴破つて、転がり込んできたのはクレマンティーヌ。続けてアンティリーネとその後ろから老婆が姿を現す。その瞳には確かな怒りの感情が宿っていた。

げっ…

そうツアーから声が漏れたのをレイラは聞き逃さなかった。

「ツアーーツー！」

こんツツツの大馬鹿鎧が！

アタシを放つて何処ほつき歩いてるのかと思ったら屋敷をこんなにしよつて！」

『ま、待つてくれリグリッド！これには深い事情があるんだ！

それから今スゴい大事な話をしてる！だからお説教は後に…』

「いいや限界だ！言うね！」

だいたいお前さんは独断専行し過ぎなんだよ人の忠告に耳を貸さずに！」

『でもこうしてちゃんと接触出来ただろう!?!』

「結果他所様の家を半壊させてるがね！」

お前さんの事だ、相手への配慮も説明も無視して突然現れたんだろ！」

『いやそんな事は…』

「あら、透明になって邸内に不法侵入し私を監視していましたか。」

にやにやしながらそう呟くレイラに一瞬顔を向けたツアーは内心毒づいた。余計な事を…

それがさらに老婆をヒートアップさせる。

『だからそれは仕方の無いことで…』

“じゃーな くそとかげ”

今度こそ《転移門》の向こうにルーファスが消える。

「あー…」

気まずそうに言葉を濁すクレマンティーヌ。

説明をうけ、評議国の偉い人(?)らしいこの鎧と自分の義姉が殺し合い一歩手前まで迫っていた事は明白だ。

どうしようかな…と頭を抱えていた時、我らがご令嬢が黙っている訳がなかった。

「観光なさい!!!」

『「…:…:…:…:…:…:」』

????? ?????

どかーん!と椅子から立ち上がり、鎧を指差すレイラに一同困惑。

「私は世界一切り替えが早い女、これしきの事態で一々沈黙していられますか!

なのに貴方はこの期に及んでもまだ責任感がどーのこーのグチグチ考えているのでしよう、スルシャーナ様直々のお言葉がありながら!!!」

「切り替えが早いのは分かる」

マイペースにうんうんと頷くアンティリーネ。

「ならば我が領地を観光なさい、視察なさい!

幸いにも本日より3日間、此処はスレイン法国でもっとも賑わい活カのある場所。

実際に貴方の目で確かめると宜しいでしょう、私達が何のために意固地になるのか。六大神様が創り、スルシャーナ様や十三英雄達が守護^{まも}ろうとした世界をじっくりたつぷりご堪能下さいませ」

今なら超有能ツアーガイドとして私と警備隊長二名が同伴致しましょうそうしましょう！

ウツキウキでそう語るレイラの事を見ていたら、何だか難しく考えるのが馬鹿らしくなってきた。

途端、今まで沈黙を貫いていたリグリッドは呵呵大笑に笑い出す。

「そうだねえ、それがいい！

行くよツアー、お嬢ちゃんに案内してもらおうか。

今はそうした方がいいさね、きつと。

「折り合い付けて“さっ”」

『……………はあ、分かったよ』

「それはそれとして、屋敷の修理代は評議国につけさせて頂きますからね」

『構わない、僕の短慮が原因だ』

鎧も立ち上がる、今度こそ間違えないために

『よろしく頼むよ、レイラ』

今度は作り物でない、花のような笑顔でレイラはツアーの手を取った。



「リグリッド様には自己紹介がまだでしたわね。」

私はスレイン法国辺境ローグレンツ領当代領主、レイラ・ドウレム・ブラッドレイと申します。どうぞよしなに。」

「あたしやリグリッド、今回はツアーのお目付け役さ。よろしくねお嬢ちゃん。」

「……?どうか致しましたか?」

「いやさなんでもないよ。」

昔の友人に雰囲気が似てると思っただけさ。

ほんと、姿は違えと雰囲気がカナミによく似てる。」

「えっ、なぜリグリッド様がお母様の名前をご存知ですの!?!」

「『お母様ア!?!?』」



「今日ほとんどもない一日だったねえ…」

スレイン法国からの帰りの道中、リグリッドがごちる。

本当にとんでもない一日だった、今日だけで数年分働いた気分だよ。

あのと彼女の案内で向かった豊穰祭。

数々の催し物には僕ですら楽しそうだと思うものがあつたし、露店の食事はどれも美味しそうだった、本体で来なかつたのをちよつと後悔しちやつたよ。《保ブリザベインシオン存》の魔法覚えておいて良かった。

そしてそれを営む人達の目には皆活気が溢れていた。

評議国のものとはまた違う、明日に希望を抱き活きる目だ。嘗てのリーダーが宿した瞳の色彩いろと同じ輝き。

それは美しく、尊いものだ

なにより守らなければいけないものだ

強者ゆえの重責も気にすること無く、自由に過ごす彼女ならそれが可能なんだろう

羨ましい

それに国としても十分な利益のある話だった、国宝の譲渡を初めとした新しい条約の締結は両国に新しい風を齎すだろう。

他の竜王や議員達への説得には骨が折れるだろうけど、仕方ない。

それにしたって……

「アンタ、なんであの子がカナミの娘って教えてくれなかったんだい？ じゃなきやもつと穩便に事が進んだ筈だろう！」

『僕だってあの時初めて知らされたんだ！ 説明不足じゃないぞ!?!』

レイラってカナミの娘だったんだね!?!

全つつつ然気付かなかったよ！

雰囲気は似てるなどは思ってたけれどまさか本当に娘だったとは

…

『真実の愛を探して旅に出るわ!』

彼女は旅の答えを見付けていたみたいだ。

観光の終着点、街の外れにある教会の地下に安置された彼女の遺体を見せてもらった。

天使だから腐敗しないらしい、亡くなってから20年近く経っているのに目立った損傷は一切なく、とても安らかな表情で眠っていたよ。

「願いが叶って良かったねえ、カナミ。」

愛おしそうにそう呟く彼女の瞳には涙が滲んでいた。

『リグリッド、君に話したい事がある。

聞いて軽蔑するかもしれないし、僕を殺そうとするかもしれない。けど……』

「分かってる、拠点に戻ったら幾らでも聞いてやるよ。罵倒と一緒にね」

肩をすくめる彼女と帰路に着く

もう、間違えないさ

た
いつの間にか、頭に響いていた慈母の笑い声は聞こえなくなっていた



それから数日後。

ローグレンツ豊穰祭の3日間にわたる行事も終わり、使節の接待も無事完了したレイラは中央政府より呼び出しを受けた。

「あら《占星千里》ちゃん、貴女も呼び出しですか?」

「は、はい……」

多分仕事の話、だよな? 叱責とかされたらどうしよ……」

「三年連続アカデミー首席になるほど優秀な貴女に限ってお叱りを受ける事は無いでしょうけどね。」

まっ! 私首席取っても入隊初日にハチャメチャ怒られましたか!」

おーっほっほっほ!!

いつもの調子で笑うレイラに《占星千里》も苦笑いで返す。令嬢特有の溢れ出る陽キャのオーラに一体一で相對するのは根っから陰キャの《占星千里》には些か刺激が強過ぎるのかもしれない。

二人は通路を進み、辿り着いたのは中央政府の議員達がいつも会議を行う円卓の間。漆黒聖典として何度も訪れている。

既に開いている大扉を抜けると、円卓に集う神官長達。入室を告げると最高神官長に促され彼等の前へと辿り着く。

「ごっつきげん麗しゅう神官長の皆様。

第13席次《獄界絶凍》ただ今馳せ参じました」

「お、同じく第7席次《占星千里》、御前に」

そう膝を着く二人に一拍置いた直後、円卓の真ん中に《転移門》が開く。

出てきた影に神官長が皆跪く、覆っていたモヤが晴れ、隠蔽を解いたルーファスが姿を現した。

「ツツツ!!」

特別な『目』を持つ彼女なら分かってしまう、ルーファスの人と隔絶した存在感とその力に。思わず息を飲み、呼吸を荒くする《占星千里》にそばにいたレイラは「大丈夫ですよ」と笑顔で伝えた。

「我が神の使徒たる聖女たちに勅命を与える」

「王国へ向かい 人に仇なす脅威を駆逐せよ」

「裁定は《獄界絶凍》に委ねるものとする」

「虐げられし弱者に救済を」

「仇なす愚者に誅罰を」

「薬が人類へ蔓延する前に迅速に遂行せよ」

莊嚴、まさにその言葉が似合う威嚴あるお言葉に場が静まり返る中、顔を上げたのは我等がご令嬢。

「拜命致しました。」

必ずや貴女様の望み通りに事を進めて見せましょう、お任せ下さいませ」

堂々と言い放つ、そこに謙遜など微塵も無い。

どんな時でも変わらない、いつも通りの先輩だ。

《占星千里》の肩が少し軽くなるのを感じた。

“現地にて第12席次《天上天下》と合流した後 事を進めよ”

“二人に六大神の加護あらんことを”

さあ、行きなさい

頷き告げたルーファスの姿が消え、議場を支配していた圧が無くなったのを境に指揮官レイモンが口を開く。

「ルーファス様が仰った通り、王国には既に《天上天下》が潜入している。

向こうに着いてからでも構わないが…追加人員が必要なら今のうちに進言してくれ。」

「そうですねえ…でしたら変装や潜伏が得意な水明聖典の皆様を何人かお借りしたいのですが。」

おそらくあちらでは諜報合戦になりますからね」

「分かった、ウチで手配しておくよ」

「ありがとうございます。」

では、準備を整え次第出発致しますわね?」

「ああ、頼む。《占星千里》もそれで構わないな?」

「承知致しました」

満場一致、話はまとまった。

巫女の勅命により、スレイン法国漆黒聖典の力をもって大麻草『ライラの黒粉』の除去及び王国に潜む麻薬組織『八本指』の殲滅が今、正式に決定される。

「敵は国を股に掛ける麻薬組織、そして一部王国上層部……
協力者にもコンタクトを取るべきでしょう、連中の目を掻い潜る必要
がありますわね。」

待つてなさい八本指、全力で轆き潰して差し上げますわあ……」

うふふふふふふ……！！

(ひえええええ先輩怖あ……)

妖しげに笑うレイラを横に《占星千里》はちよつと引いていた

19 破滅フラグしかない国へ潜入してしまった…

どうしてこうなった

頭の中で同じ言葉を何度も何度も連呼した。

すべて上手くいったはずだ。

強さを求め、強敵を求め、本能の赴くまま闘ってきた自分。求めるものは最早「表」の世界には無いと悟り、鳴り物入りで飛び込んだ裏社会。

同僚、あるいは部下との仲は良好だった、憲兵に狙われない安全な隠れ家も手に入れた。

雇い主の組織は麻薬の密売や売春業、奴隷商売で勢力を拡大し、これからも王国の犯罪界に根強く蔓延るであろう大物だ。食いぶちには困らない。

奴らは純粋な戦闘力を欲している。

なら俺達を売るには絶好の機会だ、いずれ成り上がり連中と同じ席に名を連ねるのも容易いだろう。

もう少し人数が欲しいところだが、まあいい。

俺達《五腕》はこれから覇道を歩むはずだったのに。

「どうしてこうなった…ッ!!」

破壊された一室で瀕死のまま無惨に転がされる腕利きだったはずの部下、そして同じくボロボロの姿で無様に床を舐める自分を客観視する。

「『どうして』ですって?」

ぼそり、と元凶が呟く

もはや動かぬ屍（元から死んでるが）となって壁にもたれ掛かるデイベーノックを蹴飛ばして、マルムヴィストの顎と背骨を砕き、ペシユリアンの両腕を細切れにして、肋を数本割られたのか蹲って呻くエドレストームを今も踏みつけながらそいつは…

何の変哲もない村娘のような衣装を着込んだ女は絶対零度の視線を俺に向けてきた。

「そんなもの、決まっているでしょう。」

「貴方が弱いからですが？」

「なんだと…？」

「自らの強さに驕り、弱者を虐げ今の地位に満足していた貴方。」

もうこれ以上は頭打ちだと決め付けて、立ち止まって下を向いたのは貴方でしょう。そんな軟弱者に私が負ける道理なんて髪の毛程も存在致しません」

知ったような口であっけらかんと言ってみせる女に腹の底から怒りが込み上げてくる。

「軟弱者だと？この俺が？」

「巫山戯んな…ッ!!」

四肢に力を込めようと踏ん張った矢先、顔面に迫った蹴りをもろに食らい後ろに一回転しながら背中から壁に叩きつけられた。首がもげなかったのは奇跡だろう。

クソツ！鼻が折れちまった…

おかしい、こんな事あっていいはずが無い。

武闘家の俺には分かる。

動きは酷く緩慢で、達人のそれとは程遠いハズなのに全く避けられない。

ただただ一撃が重く、速い。どう目を凝らしてもあの女の筋肉量ではありえない速度の蹴りが見切れなかった。

魔法や異能力の類か？なんて一瞬頭をよぎったが、そんな悠長な思考も許してくれないほど奴の攻めは圧倒的で、激しいのだ。

文字通り「格」が違う。

「巫山戯てるのは貴方でしょう。」

それほど恵まれた肉体を持ちながらやってる事は小悪党以下だなんて、恥を知りなさい」

女は吐き捨てる。

それは俺達がこの教会を買収し占拠していたことか、それとも流れてくる孤児達を奴隷娼館へ流していた事だろうか。

何が問題なのだ、弱者は強者に食われるのが世の理だろう。ましてやこの王国ならば尚のこと。

「その顔、全く反省していませんね。」

「これだからこの国は……」

「《獄界絶凍》」

言葉を遮るように女の背後の暗闇から現れた男、その手に捕縛されているのは俺達を買収したこの教会の神父だった。

外傷はそれほどなさそうだがこれ以上無いほど顔を青くして怯えきっている。

「背信者に任意同行して頂いた」

「あら、早かったですね。」

御機嫌よう神父様」

爽やかな女の笑顔と共にズシリと音を立て、気温が一気に下がった気がした。

神父はその贅肉まみれの顔からガチガチと歯を鳴らすほど震え、^{おの} 怖いのがわかる。痛みで薄れかける意識の中、そんな2人を眺めながら「蛇に睨まれた蛙」って諺を思い出した。勿論蛇は女の方だ。

「はっ…はひっ……」

「神官団教父として王国でのお勤めご苦労様です。突然の訪問、失礼致しますわ。」

「そうそう、貴方の教会おうちに賊が侵入していましたので不躰ですが先に対処致しました。事後報告になってしまっただごめんなさいね」

「ええ!? いや…そのようなお手間を…ハイ。」

「あ、ありがとうございます…」

「全部分かっているんだろう、これ以上ないほど白々しい女の台詞に青色だった神父の顔が土気色にまで落ち込んでいく。」

「あらあらあ? どうなさいました? 随分と齒切れが悪いですね。」

「賭博場ではもつと元気に喋っておいででしたのに」

「ヒツ!?!?」

「見てわかるほど大きく奴の身体が跳ねた。」

「そう、この男は表の顔こそ教会を仕切る善良な神父を演じているが、裏では八本指(オレたち)と結託して孤児を娼館や違法奴隷として市場へ卸す販売人ブローカー。俺たち《五腕》が此処を仮拠点としていたのもその繋がりがあったからこそ。」

「…酷い賭博癖があるとは聞いてたが、それを嗅ぎつけられたか。」

「よく賭けておいででしたねえ。」

「人の趣味にとやかく言うつもりはありませんが、今後は合法的な施設を使って遊びを楽しんで下さいね?」

「はひっ…はひい…わかりました…」

「息も絶え絶えになんとか息を吸いながら辛うじて蚊の鳴くような返答を繰り返す神父。」

「あのデブはもうダメだ、完全に女の気迫に押し潰されている。気を失わないのは女が奴の気絶しないギリギリまで追い詰め、おぞましい笑顔で覇気を制御しているからだろう。」

「それはそれとして。」

今まで法国から教会へ贈られた多額の寄付金の使い道と保護と称して消えた子供達の行先を本国で洗いざらいたああつつつぷりと御説明して頂きます。

覚悟なさつて下さいね♥」

「へああッ?!?!」

「《占星千里》ちゃん」

「了解」

「お待ちください漆黒聖典さま！」

話します！洗いざらい全て話しますから本国行きだけは

「《^{ヘレイコーマ}重度昏睡》あふうん……」

隣にいた眼鏡の女が使った魔法によって強制的に眠らされ、白目を剥いて崩れ落ち連れていかれる神父を横目に連中が何者なのか悟る。

神父が叫んだ単語「聖典」という単語からしてこいつらは隣国スレイン法国の人間だ。

人類救済なんて笑える目標を本気で掲げるイカレ集団に王国が目を付けられる理由は……腐るほどあるな。

「漆黒……せい……てん……?」

いつだったか、裏の情報ルートを使つて聞き齧った隣国の特殊部隊の噂。

5種類ある特殊部隊の存在しない6番目、曰く人類最強の精鋭部隊で人類救済の為に汚い仕事を秘密裏に行う連中なんだとか。

当時は鼻で嗤っていたが、そんな奴等に八本指が目をつけられた？王国も黙っちゃいないだろうがたかが知れてるだろう、下手したら全く気付かないままかもしれない。愚図の集まりだからな。

「あらあら、聞かれちゃいました。」

まあ良いでしょう。」

胸ぐらを捕まれ、ありえない力で持ち上げられる。

俺の身体をかつてない恐怖が支配した。

これが、人間だつて？

化け物じゃねえか

周辺最強国の特殊部隊が八本指を狙っている。

あの調子だと既に王国じゆうに密偵を放っているんだろう、そして武闘派部門を狙い撃ちで潰しにかかったという事は組織の弱点も把握されてる。

間違いない、法国はこの国ごと八本指を滅ぼす気だ。

「《天上天下》さん、お願いがあるのですが」

「如何様にも」

「彼等と同じ体格、性別の死体を4人分用意して下さい？」

「アンデッドの彼は私が供養致しますので結構です」

「御意」

死体…4人分…？

「先輩、それは…」

「大丈夫ですよ《占星千里》ちゃん、責任は全て私が背負わせて頂きます。巫女様にも一任されていますからね。」

我々はあまねく人類に救済の手を差し伸べなければなりません、それが誰であろうとも」

「貴方達、楽に死ぬると思わない事ですね♪」

これ以上ないくらい蠱惑的な笑みを浮かべた女の顔に走った特大

の悪寒を最後に意識が堕ちた。



人類に仇なす害虫を駆除するRTA、はーじまーりますわよー!!!
本日走るのはこちら、リ・エステイーゼ王国に巣食う闇組織『八本指』をメタメタに叩きのめす蹂躞チャートとなっております。

八本指というのは王国内に蔓延る巨大犯罪シンジケートであり、原作オーバードにおいてひとつの要所となる「ゲヘナ編」、それを発端に起こる「王国滅亡編」の原因になる（される）可哀想な人達の集まりですわ。

麻薬販売をはじめ思いつく限りの悪行を組織的に繰り返し、他国に勢力を伸ばすまでに成長してしまった犯罪集団。法国は当初、発見はしていても他国への内政干渉になる為遠慮して王国が対処するのを待っていたのですが、待てど暮らせど一向に対策すらとれない彼等に痺れを切らし、結果原作では国力を落とす帝国に併呑させる目的で行った戦士長暗殺に繋がるわけですね。

うーん、どうしてそうなった？

国としては最早王国を切り捨てる勢いで計画していたんでしょうけど、何故ガゼフ様を？彼、理由話せば協力してくれそうですのに。コレガワカラナイ。

まあ十中八九、法国首脳陣のお篤い人類守護精神（笑）からくる怠慢でしょう。

驕るな!!（無名司祭）

おっと失礼、話が逸れましたわね。

このとおり、作中でも屈指の悪役集団です。なので原作でもその末

路は悲惨の一言に尽きます。

たしか深読み悪魔に組織ごと乗っ取られるんでしたっけ？そんな幹部達は虫のプールにご招待されて心まで犯され傀儡扱い、唯一セバスによって真っ先に殺された六腕のメンバーが一番幸せな死に方をしたのでした。流石はセバス、ぐう聖。

そんな彼等は王国内の至る所に繋がりを持っていて、そのパイプは商人、巡回使、王国貴族、そしてなんと一部の王族にまで及んでいきます。そうですね、みんな大好きバルブロ第一王子の事ですわ。

どうしてこうなるまで放っておいたんでしょう。

王位継承権を持つ第一王子が犯罪組織と繋がっている事がどういう事か理解出来ますか？

王族とは言わば国の“顔”、気品や威風はもちろんその繋がりに至るまで、他国からすればそれら全てが評価対象になるわけです。歴史の長い王国であれば尚のこと。

バルブロ王子はその顔に泥ぶっかけて顔面パツクしてる状態なんですよ。

麻薬捌くような犯罪組織に汚染された王族なんて他国からすれば論外も論外、一瞬で敵国認定待ったなしでしょう。本人の能力も低いので就任後も手腕で持ち直すなんて不可能そうですし、仮に王位継承してしまえば法国の対王国方針が静かな心を持ちながら激しい怒りによって反転し、麻薬撲滅から原作通りの国家転覆に変わる事間違いない。

幸い？にもこの事はまだ周辺諸国にも知られていない極秘情報です。なので、我々が事を起こす際に上手く使えると良いのですが。

…つーか彼を《天上天下》に尾行させて3日も経たないうちに八本指と接触して金を受け取り、その足で意気揚々と違法娼館に通うお姿を確認してしまいました。おそらくかなり昔から癒着は常態化しているのでしょう、周囲の警戒もクソもなく油断だらけでしたし。

ハッキリ申し上げてドン引きです。問者の警戒もせず白昼堂々と王族が賄賂&陰姦なんてマジで世も末ですわ……

終わっちゃうってんなり・エステイーゼ王国！

原作開始前でこの有様ですよね、そりや第三王女も悪魔（比喻ではない）に魂売りますわ！いや彼女なら例え国が正常に稼働しているも売りますわね、たぶん。

だって精神異形種だし。クライム君との願いを叶える為なら自分の国なんて100%オフの帯付けて常時決算大セール中です。

もはや王国の未来はザナツク第二王子の手にかかっているのでは…？

というワケで、我々はこの組織を撲滅、麻薬による被害を根絶し国を正常な状態に戻す為派遣されました。

いち人間国家相手に漆黒3名の動員は異例の事態に他なりません、諜報目的だとしても《天上天下》とほか聖典の諜報員で事足りるな私と《占星千里》ちゃんにまで出撃許可が降りたという事はかなり本腰入れて王国を矯正するつもりなのでしょう。

ルーファス様直々の勅命ですからね、皆様の気合いの入れようも半端じゃありません。

そんな訳で今回派遣されたのは私こと《獄界絶凍》と魔樹戦でも活躍して下さった《占星千里》ちゃん、そして法国が誇るザ・ニンジャ《天上天下》さんの3名でお送り致します。

そして私の要望により、諜報が得意な水明聖典から数名ほど動員して頂いておりますの。

「数名どころの騒ぎじゃないだろう」

「ナチュラルに私のモノログに入るの止めて下さいませんか？」

数名ですよ、す・う・め・い。

取りなして下さった水の神官長様には後で御礼の品を送りましようね。

頼んだ時「こいつマジか」って顔してドン引いてましたけど多分私が見た幻覚ですよ幻覚。

そして気持ち新たに挨拶も兼ねて法国の神官団が経営する王都の

教会へ来たわけなんです、そこにはどっかで見たとある褐色禿頭とその御一行。

……………？

なーーんでゼロさんいらっしやったの????

なんで

…いや????????????????

此処は原作でも序盤から最も深く描写され、最後の最後まで不遇だった可哀想な国。

悪党共が蔓延り弱者がゴミのように扱われ、如何に腐敗した政治が行われていたか、こと詳らかに語られた王国、及び王都リ・エステイーゼ。

国としての前提が劣悪過ぎて主人公が滅ぼした方がまだマシとまで言われたデイストピアです。

こんな異世界ロアナ○ラで経営する教会やそれに付随する孤児院がマトモなわけないですよね！

残念ながら此処には力の均衡を望む香港マフィアも永遠の闘争を望む元ソ連軍敗残兵も居ないので、教会だろうが孤児院だろうがしっかり八本指に染まって悪党共の隠れ蓑になってました！おf○ck！！

そこで内心中指立てながら突入してみたらあら大変、『六腕』の皆様がたむろってるではありませんか！

といつても5人しか見当たらなかったのもまだもう1人の…えーと、クライム君に倒された人。サキユなんとかさんでしたっけ？が揃っていないようでしたので五腕ですけど。

取り敢えず五人沈めて今に至る訳ですがただ今まつこと困り散らしております。

だってこの人達と交戦する気はなかったですし、八本指潰すにしてももっと回りくどいやり方使って、法国の力をこれでもかかとアピールしつつ全力で絞め殺してやろうと思ってたんですが…

早速チャート崩壊しててレイラこわれちゃう

まあシバキ倒してしまつたものはしょうがないですね、オリチャー発動しましょう。

まず彼等には死を偽装してもらつて……竜王国にでも行つてもらいましようか。ビーストマンと毎日食つた食われたの生存競争していれば悪巧みする暇もないでしょうし、そもそも彼等つて原作でも八本指の用心棒みたいなポジションでしたので案外お金次第でどうとでもなるのかも。神父様と結託し孤児院の子供達を保護と称して奴隷送りにしていたのは絶許ですが。

ならば話は早い、早速彼等を未来へ冷凍保存コールドスリープして竜王国へ即日発送いたしましょう。

へっへっへ…竜王国へようこそ。

死にたくなければ戦いなさい、君たち一人一人にバッドエンドスチル（主にビーストマンに捕食）を用意した世界線で歓迎しますわよ…

『ッその杖は…!?!』

おっと私とした事が、成仏させ損ねたアンデッドが何か言いたそうですわ。しきりに私の撃杖を指さしていますが。

『その杖にある宝石、知っているぞ！』

コレだろう！』

と懐から取り出したのはなんとルーン石（赤）ではありませんか。まだ市場に回してませんのにとっから盗んで…いや待って、たしか王国へ出立する直前に速達便でフルーダ様から文が届いてましたね。

なんでも私が研究用に譲渡した撃杖を一丁盗難されてしまつたのだとか。下手人は皇帝陛下の手腕のもと直ぐに捕らえられて回収されたのですが中に収まっていたルーン石だけ抜き取られて闇市に流

れてしまったそうです。

手紙にはアルシエさんのご家族の方がこの事件に関わっていたり、皇帝陛下が過去に類を見ないほど激怒してもう一度貴族の大粛清をおっぱじめる気なんだとか色々書いてありましたが：もしかしてそのブツがアンデッドのもとへ渡った？

裏市場なら国を跨いで移動していてもおかしくありませんし：状態を見るにこれを売った本人も「ちよつと大きめのルビーだろ」くらいの気持ちだったんでしよう。

ルーン石なんて価値の分からないものにはただの綺麗な石ですからね。

『頼むーこれについて教えてくれ！』

中にルーン文字が刻まれていて炎属性の魔力を宿しているのは理解した。

同じ石を持つお前ならこれが何か知っているだろう！』

まあ私、開発者ですしおすし。

あーそういえばこの人、原作にもいましたね。六腕に所属する知性を持ったアンデッド。名前はたしかダイバーノックでしたっけ？

生者を憎むアンデッドの習性を覆すほど強い魔法への好奇心が彼の人間性を保っているんでしたか。

『構造から察するに魔法発動の触媒としての用途か、内包する魔力量は永続的な魔^{エンチャント}化を施す為のものだろう！』

お、ビンゴです。なかなか勘がよろしいですね。

『そしてこの触媒以外にも必要な魔法媒体があるな？』

それらを組み合わせる事によって何らかの術式を発現させる、石に込められた魔力が一系統のみなのは発動対象を1属性に絞る事で魔力流動率を上げるためだ！』

皮肉な話だ、生者を憎み殺める事がアンデッドの本質だというのに、生者から生まれるものでしかこの好奇心は満たせないのだからな……』

「この石は何処で？」

『先週だったか、馴染みの闇市から購入した。』

「やっぱりそうでしたか……」

購入した闇市の場所を洗いざらい詳しく吐きなさい、それで手打ちにしましょう」

『ツ良いのか!?!』

「この魔法について知りたければ教えて差し上げます、どうせ彼等と一緒に面倒見るつもりでしたし。」

ただし、貴方がこれまで行つた悪行の数々は決して消える事はないし、私も此処で起こした事を赦す気はさらさらないですわ。

私から信用を得たければ彼等と共に働きで取り戻しなさい。

先ずは他4人の説得からですね」

『承知した……いや承知致しました！』

その知識を得られるのならこのデイバーノック、蒙昧なる不死者の身なれど貴方様の下で罪を償わせて頂きます！』

ははーっ！て感じで平身低頭なデイバーノックさんには後で闇市の情報を吐いて頂きましょう。

八本指の内情も話してくれると助かるのですが、どうやらこの時点で六腕の皆様は警備部門を設立したばかりで、まだ組織内の地位はそれほど高くないそうです。彼らはいつ死ぬか分からない裏稼業、お互いを騙し合っていた犯罪者なので、それが利益目的で集ったところで組織内で信頼を勝ち取るには相応の時間が必要でしょう。

他人を易々と信用出来ない故に腕つぶしだけで成り上がるには難しく、設立したてでまだ若手の彼らは古参勢にとって未だに使い勝手のいい用心棒扱いなのだとか。

まあ下手に高い地位に居着かれても抜けた時怪しまれるだけですし、このタイミングで始末を着けられたのは僥倖ですわね。

『……以上が俺の知る闇市の所在と流通ルートです』

「宜しい、では暫く眠って下さいな♪」

『は、それは…ッ!?!』

言い終わらないうちにデイベーノックさんを《嘆きの氷柩》で閉じ込めて、ゼロさん達同様竜王国へボツシユートしておきましょう。

「水明聖典さん、王都に噂を流してくださいさる？」

『教会で放火騒ぎ、犯人は周辺に屯していたチンピラ。居合わせた神父とトラブルになり火事に巻き込まれて死亡』と。

話の本筋さえ合っていればそちらで少し脚色を加えても構いませんので。

それと本国から教会復興の支援申請を取り付けて、書類を一式揃えてくださいな」

「承知致しました、《獄界絶凍》様。

二日以内に御用意致します」

大組織ゆえに、幾重にも張り巡らされた八本指の情報収集能力は脅威です。

なので虚偽の情報を掴ませて彼等は死んだ事にしてしましましょう。

幸い原作より六腕の地位は低いようなので「ああ、新入りが馬鹿やっておっ死んだか」くらいに思われるはず。

水明聖典の働きにより情報を敢えてあちらへ流して、死体も偽装すればいつもの王国で起こる些末な出来事として処理される。この国ってこういう所ありますからね。

徹底的に隠蔽します、尻尾を掴む前に雲隠れされたら堪りませんもの。

スレイン法国の使者が王宮に遣わされる理由付けにもなりますしね。

教会を燃やすのは些か心が痛みますが…

「さあ、撤収しますよ。」

地下室も無し、我々以外に人は居ないのは確認しました。

悪党に汚された教会なんて綺麗さっぱり燃やして消毒です」

「あっさり燃やしちゃうんだ…」

「致し方なし、我々の教会が汚職の温床となったのならいつそ燃え落ちた方が教義も穢れぬというもの」

というわけでパパパツと火を付けて、終わり！

オリチャー発動して若干遠回りになってしまいましたが、早いところラクユースに接触して本腰入れて活動開始せねば！



「新しく出来たレストラン？」

「そ、ラナーの紹介でね。」

最近オープンしたばかりだけど結構人気なんですって」

他愛ない会話を広げながら昼の王都を歩く5人組。

王国アダマントイト冒険者『蒼の薔薇』は今日も依頼を終え、事後処理を終える頃には太陽は既に真上を過ぎており、少し遅めの昼食をとり、街を徘徊していた。

「知ってる、大通りからちよつと外れた所にあるやつ」

「なんでも独自のルートで仕入れているから価格もリーズナブル…らしい、客の会話を聞き齧っただけだけど。」

独自のルート、と呟いたティアにガガーランは怪訝な表情を浮かべ、考えを明かした。

「それってよお、まさか『連中』が絡んでたりしねえか？」

「それもふまえてラナーに依頼されたわ。

八本指が新しく設えた興行なら警戒しておく必要があるからね」

頷くラキユース。

かねてより友人ラナーから依頼されたのは最近新設された町外れのレストランの調査だ。

なんでも値段のわりに量も多く、冒険者や市民たちから話題になっているらしい。

しかしその出自がハッキリしておらず、もしかすると八本指の息がかかった店かもしれない。

例え人気でも犯罪組織の資金源になる可能性があるのなら、証拠を見つけ次第処罰する必要がある。

「イビルアイ、確か毒や薬物を判別できるマジックアイテム持ってたわよね？」

「《炭鉱のカナリア》の事か？」

ああ、持つてるぞ」

イビルアイが取り出したのは緑色の小さな水晶が埋め込まれたブローチ。

これはマジックアイテムで、毒や薬物を周囲に検知すると水晶が赤く輝き危険を知らせてくれるという代物だ。

「食べ物に混ぜてる…とかはないでしょうけど、店の内部で麻薬の取引がおこなわれているのかもしれないし、組織の幹部がいるのかも。充分注意しましょう。」

取り越し苦労ならそれはそれでいいわ。

「ご飯も美味しいと評判だしね」

「私は食べられないがな」

「それは悪いと思ってるけど…」

「分かってる、いつもの事だ。」

「お前らが食べてる間は周囲を探知魔法で警戒しよう」

公にはできないがイビルアイは吸血鬼、アンデッドだ。食事をとる必要のない身体はある意味便利だが、こういった場面では煩わしい。特にラキユースはいつも残念そうにするのでどうにかしたいと考えているが、ジョークを飛ばしたつもりが逆に申し訳なくなってしまう。イビルアイ反省。

アダマントイト冒険者の自分達が来店すれば、やましい人間なら僅かなりとも何らかのリアクションを起こすだろう。その辺は表情を読むのに長けた忍者達に任せるとして、探りを入れるにはちようどいい。そう判断したラキユースは4人を連れて中央通りから外れていった。



「店員に私好みの美人がいるといいけど…」

「店員に私好みのシヨタがいるといいけど…」

「あんた達そればかりね…」

「相手は犯罪者、ならやり捨てても問題ない（キリッ）」

「最低だな」

「こいつらの方が犯罪者じみてねえか…？」



王都の外れ、賑わう中央通りから少し離れたところ。

問題なく件のレストランには到着した。

真新しい塗装の施された外観に、レンガ造りの煙突より上る煙、玄関先に整えられた鑑賞樹、ところどころに新築の雰囲気伺える。

「悪党のレストランにしては小綺麗にしてんじゃねえか、もしかして取り越し苦労だったか？」

「まだ油断はできないわ。」

先日のような火事があった後だもの」

「教会がチンピラに放火されたやつ？」

「幸い保護されていた子達シヨタは皆無事だったそう、良かった。焼け死んでたら絶許」

先日起きた教会放火事件の話はラキユース達の耳にも届いている。一部情報が偏っているが…

犯罪組織に与するならず者達が屯していた教会で神父とトラブルになり、争ったあと最終的に火をつけた。だが間抜けなことに火の手に吞まれて教会もろとも燃え尽きてしまったという間抜けな犯人の起こした事件。なんとか神父と保護されていた孤児達は助かったが重症を負った神父は本国へ帰還してしまったらしい。

教会はスレイン法国が過去に建築した歴史ある建物で、信徒たちの拠り所だったので再建の話し合いを行うため近いうちに使者が王城へ訪れるのだそう。

「トラブルの原因は八本指の神官団勧誘が原因だろう。回復魔法が使える人間を抱きこもうとして失敗したか…」

「だからって教会ごと燃やす奴があるかよ、馬鹿共が」

忌々しげにガガーランが吐き捨てる。

勢力を増し、最近更に好き放題するようになってきた八本指だ。今後も似たような事案が起きなければいいが…

小綺麗な店内に足を踏み入れる。

中は外観より広い印象で、テーブルには席いっぱいいっぱいに客が詰め込まれ、その間を縫うように店員が忙しなく右往左往していた。

「あちゃあ、いっぱいだなコリヤ」

「いらっしやませー！

何名様で…ウソ、もしかして蒼の薔薇!?!」

一番近くにいた店員が驚きの声を上げ、店の視線が一気に集まる。

アダマントイト冒険者になってからというものの、この手の視線には慣れたものだ。が、小つ恥ずかしいのは変わらない。黄色い声援がたつ中、軽く手を振ったラキュース一行は席を案内された。

(……………85点♠)

はつらつとした雰囲気と大人しめの眼鏡のギャップがGood、胸も小ぶりながらいいカタチ。

将来に期待大♣?)

(黙りなさい失礼でしょ!)

何よその気持ち悪い喋り方は!?)

(我が慧眼を用いた由緒正しき採点法、故郷にも伝えられている)
(今すぐ伝承破棄しなさいそんなもの!)

テレアがなんか言ってるが気にしちやダメ。

「本日は当店のご利用ありがとうございます!」

その…大変申し訳ないのですが只今お席がほぼ満席でして、相席でしたら6名様席がございしますがどういたしましょう?」

「私は構わないわ、皆は?」

「いいぜ、匂いを嗅いでたら腹が減って仕方がねえや。早くなんか食おう。」

店内の美味そうな匂いに当初の目的が若干ぶれ始めているガガーランが同意し、それに続くように双子が頷く。イビルアイは相変わらず仮面を付けて素っ気ない態度だが、食べないから多少はね?

元氣よく頷く眼鏡の女性店員の後を追い、一番奥のテーブル席へと辿り着く。

相席、と説明されたのでそこには1人で紅茶を傍らにケーキを楽しむ青髪の女性が読書に耽っていた。

「お客様、相席宜しいでしょうか?」

「ええ、構いませんよ。」

快い返事と共に促され、ラキユース達も席に着く。

「ご注文決まりましたらそちらの呼び鈴でお呼び下さい」と告げ去っていく店員の背を見送って、メニュー表を開いた。

全体的に肉料理が多めだ、物価の高い王国では考えられないほど値段もひと回りほど安い。

「ねえ貴女、このお店にはよく来ているの?」

初来店ゆえ何が美味しいのか分からないのでとりあえず相席の女性に問うてみる事にした。

彼女は読んでいた本から目を外し、ラキユースに微笑む。

「ええ、私も最近通いつめるようになったんです。

肉料理がお好きならこちらの『ボンベグウ』などは如何でしょう、ボリユームもあつて満足できると思いますよ」

この世界のメニュー表には写真がない。

なので常連の意見を参考にしよう。

「使われているお肉は竜王国産のものを使用しています」

「竜王国?あの国は今ビーストマンでてんやわんやなんじゃねえのか?」

「侵攻を察した酪農家達が予め王都近くの農場まで家畜を大移動させたのだと聞いています。

経済を腐らせないために。

取引ができるだけで有難いと女王陛下のご好意で安価で提供して下さるそうですよ」

「太っ腹じゃねえか竜女王さま。

じゃあお言葉に甘えてオレはこいつにしよう」

景気のいいガガーランはボンベグウに決めた。

「お姉さん、他にオススメはある？」

「なければ貴女を食べたい」

「ちよつとティア！初対面の方に失礼でしょうが！」

いつもの調子な忍者を嗜めるラキユースに女性は口元を抑え遠慮気味に笑う素振りを見せる。

「真に残念ですが、私すでに夫のいる身の上です。

「ごめんなさいね」

「問題ない、私は人妻もイけ……ツ？」

突如として身体が跳ね、さつきまで女性に向けていた淫蕩な視線とは裏腹に姿勢を正すティア。それに勘づいたのか双子のティナも一瞬瞠目し腰の暗器に手を掛けた。

「貴女、何者？」

「あら？気付かれちゃいましたか」

「顔も雰囲気も全部別物。」

「でもこの人、過去に1度私達と会ってる」

「？どういう事よティア」

「その根拠は？」

「嗅いだ事がある匂いがした、それだけ」

忍者の鼻は誤魔化せないという事だろうか、それか単にティアの性癖レズが行き過ぎているだけか。

「香水まで気を使ったつもりなんですけどねえ」

女性が瓶底メガネを外す。

青かった髪色はたちまち輝くような銀髪に

瞳はくすんだ色から黄金に

「例え地味な装束を着けていても隠せぬその気品オーラ

そう

「ごきげんよう、久しぶりですわね」

私、ですわ

「覚えてくださって光栄です、『青の薔薇』の皆様」

にこりと微笑み、上品に紅茶を傾けるその顔にラキユース達は見覚えがある。

不幸な行き違いで剣まで交える羽目になった他国の特殊部隊員、そして対八本指の秘密協力者。

《漆黒聖典》

その内の一人、たしか名前は《獄界絶凍》。

コードネーム呼びなのは出自を誤魔化す以外に呪い避けの為でもあるのだろう。

一見無防備を装っているがその力の差を彼女達は嫌という程知っている、この関係は一時のもの故に警戒は怠らない。

「貴女が接触してきたということは…」

「ええ、本国から正式に許可が降りました。」

スレイン王国は王国の麻薬組織撲滅に全力を挙げて取り組むよう、勅命を頂いております」

「マジかよ。」

周辺最強国のあんたらが協力してくれんなら頼もしいが…」

「ですが事は想像よりも大きいようでした。」

本来なら直接介入するつもりでしたが、我々はあくまでも秘密裏に“お手伝い”させて頂く方針をお伝えしておきますわね」

「それは何故？」

「王国首脳部の中に八本指と関係のある者らが潜んでいるからですよ」

「……そう」

俯くラキユース。

彼女も王家に連なる貴族の生まれ、高貴な一族だ。

友人（ラナー）との話もあり薄々想像はしていたが、腐敗貴族の中に犯罪組織へ与する者が確認されてしまったことに不信と落胆を隠せない。本当は信じたくなどないが、自分たちより遥かに優れた情報収集能力を持つ法国に「そう」だと断定が取れてしまったら疑うべくもないだろう。

彼女曰く法国の目的は八本指及び関係者の徹底的な撲滅と麻薬に汚染された国の浄化、なのだが国の中枢に食い込むような位の貴族が関わっていると下手に手を出せば他国の内政干渉になってしまう。なので表立って行動はできない、との事。

「法国も面倒ないざこざは避けたい、か」

「あくまでも今回の主役は貴女たち、私達は影ながらサポート致しますよ。」

まあ、他の方法もあつたそうなのですけどね」

「…例えば？」

「ん…没案だし言っちゃっても構いませんか。」

陰湿な方法だとガゼフ・ストロノーフ戦士長を暗殺して国力を低下させ、帝国との戦争で併呑させる長期作戦ですかね。」

もつと直接的な方法だと…王国全土を法国が一晩で制圧して支配権を奪い取り、無理矢理にでも犯罪組織を炙り出して始末する。とかかしら」

「戦士長を暗殺なんて…」

「一晩で制圧」

「そんな無茶な…とは言わない」

「ああ、奴さんなら本当にできちまいそうだ」

目の前の女ならやりかねない。

おそらく個として人類最強クラスの彼女なら一晩で王都を凍土に変えて制圧、なんて離れ業も朝飯前だろう。

「なるほど、神人の貴様らなら王国の蹂躪など容易いか。相変わらず人類救済の為ならやりたい放題だな法国は」

「それほど貴女達の国は末期症状だということですよ。」

少しは反省して頂きたいですね」

そうレイラは肩を竦めて見せる。

実際、レイラが進言し懇切丁寧に報告書まで作ってルーファスに直訴しなければここまで思い切った介入が決定されることは無かつただろう。

腐敗の現場を聞いてはいても見た事がない中央政府のお歴々ではどんなに鮮明な報告書を提出しても解像度に限界がある。

仮に沸点の低い大元帥や火の神官長なんかが現地の悲惨な光景を目撃してしまつたら、義憤に駆られそのまま派兵か火滅聖典投入…なんて選択肢もゼロではない。

それだけ人類への愛が深いといえばそうなのだが…もうちよつとこう、手心というかなんというか…ね？

「それでは早速、お仕事の話をしましょう。

我々が集めた情報と貴女達の持つ情報、すり合わせをしておかないといけませんからね」

紅茶で口を湿らせ、一呼吸置いて彼女は口を開く。

ここからは大変機密性の高い話になる、そう察したイビルアイが盗聴防止のため周囲の音を消すマジックアイテムを使おうとしたのをレイラは優しく制した。

「…？何故止める、こんな店の往来で聞かれては不味い話だろう。」

この中に間者がいるとも限らない、双子忍者なら見つけ出せるだろうが…」

「ご心配なさらずともこの店だけは王国の何処よりも安全ですよ」

「それは何故…？」

首を傾げるラクユースに勿体つけていたレイラは手元の呼び鈴を鳴らす。先程注文を取るために店員から渡されたものだ。

金属の鳴る音が店内に響き…

店が静まり返った。

「………え？」

ラクユースは瞠目し、気付く。

いたる所から感じる視線。

先程まで隣の席で酒を交えながら下品な馬鹿話を繰り広げていた3人組の男性が

食べ物で口を汚す子供の面倒を見ていた親子連れの家族が

顎が弱いのかステーキ肉を噛みきれず右往左往していた老人が

厨房で料理に精を出すシェフも、忙しなく店を走り回っていた店員でさえ

見ている

店内のあらゆる人間が、誰一人として喋らずに動きを止めて自分達が座る席を凝視していた。

針を落としても聞こえそうな静寂が突然訪れる。

「……「ツツツ?!」「ツツ」

ガガーランは突然の事に言葉を無くし、双子は焦りつつも瞬時にいつでも戦闘、離脱が出来るように備え、イビルアイでさえ仮面の向こうで唾然としていた。

蒼の薔薇全員に注がれる視線を一身に受け、特大の悪寒を感じたらキュースの頭はひとつの結論に辿り着く。

「……一体いつからこの国に、何人潜伏していたの?」

息があがる、堰を切ったようにどつと流れだす冷や汗が止まらない。

全員、そうだ全員だ。

この店に入ってから今に至るまで、この空間に居る老若男女全ての人間はスレイン法国から来た諜報員である。双子でも気付かないような演技で、まるでともともとそうであったかのように王国へ溶け込んでいた。

立地は王都の端とはいえ此処は王国のド真ん中、そんなところに店を構え目に映るだけでこれだけの数の人間が他国から紛れ込み当たり前のように過ごしている。その事にラキュースは恐怖と同時に強い危機感を覚えた。

それでも強ばる顔を必死に取り繕って、頬杖を着いて微笑むレイラを懸命に睨み付ける。

「お答えしかねます。

我々は利害関係が一致したが故に同じ卓テーブルに着いているだけ、初めに

そう契約致しました。

お互いに仕事以外の質問、不要な詮索は無しでいきましょう」

ね？

微笑みと言葉尻から生じる有無を言わさぬ圧に思わず頷くしかない。

悔しいが、同時にここまで何の抵抗もなく他国の人間の侵入を許してしまった王国の不甲斐なさを改めて噛み締めた。

もう一度、レイラが呼び鈴を鳴らす。

さつきまでの静寂が嘘のように皆が動き出し、店に喧騒が戻った。未だに愕然とする蒼の薔薇の面々を他所に、先程自分たちを案内してくれた眼鏡の店員が持ってきた資料を机に広げ、ケーキを一口含み甘味を楽しんでいる。

「せっかくの機会ですし、食事でもしながら楽しく作戦会議しましょう。」

裏方ながら我々もこれで大手を振って麻葉殲滅に動き出せるわけですし、さしあたっては…貴女たち以外にも表立って動いて下さる仲間が必要ですよねえ」

さあ

^{あまね}遍く人類救済の為、よからぬ事を始めましょうか

悪戯を企む子供のように、鼻歌を歌いながら八本指を潰す計画を立てるレイラがこの時だけでも敵でなくてよかったと心底思うと共に、王国の未来に一抹の不安を覚えたラキユースであった。



王都リ・エステイーズ王城内

とある一室にて

一人紅茶を嗜む少女がいた。

金色の髪は長く後ろで流れ、唇は微笑を浮かべた桜の花の如く、深い青の瞳はブルーサファイアを思わせる。

まるで絵画からそのまま飛び出したような美少女は優雅な仕草でカップを回し、紅茶を一口。

「今頃ラキユース達は例のお店へ行っているかしら」

誰に問うでもなく、一人部屋の中で呟く

「竜王国から帰ってきてこつち、明らかに様子がおかしいんだもの。なのに親友の私に何も相談してくれないなんて…」

親友、とても便利な言葉だ。大好きだ。

決定打は1ヶ月ほど前、依頼で竜王国から帰ってきた時の事。

明らかにラキユースの態度が変わった。

変わった、といっても常人には分からない誤差の範囲だが目ざとい彼女は一発で見抜いている。あれは何かを隠している顔だ。

だからいつか話してくれる筈だと待っていたのにラキユース本人からは一向にその気配もない。

問い詰めるのは簡単だ、あの子はすぐ動揺が顔に出る。幾つか推論をぶつければ当たりに反応するだろう。

「隠しているものは何か、なんて聞かなくてもすぐ分かるけれど。問題は…」

協力者が誰なのか

何処、ではない。誰、なのかだ。

王都郊外に最近オープンしたレストラン、メイドや騎士たちの会話から察するに安くて美味しいらしい。中でも肉料理がとても良いものなのだとか。

王国で安く肉を卸せる場所は限られてくる、なので国外から輸入し提供していると考えるのが常道だろう。

ならば肉の提供元は：距離的に竜王国。ビーストマンの侵攻で逼迫したかの国ならば赤字覚悟で取引がしたい、ならそれを上手く手の上で転がせるのは便宜上彼等を庇護するスレイン法国だけだ。

結論、あの店はスレイン法国が運営しており、八本指とはなんの関係もない。

この国は犯罪組織に汚染されている、それを確かめる為か、既に対処する段階にまで入ったか、諜報員が次々と国内へ侵入してくるだろう。いやおそらくもう入っていて、今日も何食わぬ顔で王国民として暮らしているのだ。

しかしこのシナリオを誰が仕組み、王国内に大量の諜報員を送り込んだのか。それが分からない。

幾つか掻い摘んだ情報の中で使えそうなものを模索する。

可能性として挙げられるのは行政機関、あちらの国の神官長と呼ばれる身分の者達。

憶測でしかないが王国のような一人の勅命で動くのではなく大人数で話し合い、多数決によつて国の方針を決めているのだろう。情報は既に掴んでいる筈なのに今までの動きが鈍かったのはそれが原因だ。

それが漸く重い腰を上げた、という可能性も考えられるが、やり方がスレイン法国らしくない。

かの国ならばもっと間接的に時間をかけて：：そう、遠回しに国力を下げてから帝国に併呑させるくらいの回りくどい手を使ってきてもおかしくない筈だ。

だが蓋を開けてみれば大量の諜報員を国内に忍び込ませ、真綿で絞め殺すようにじわじわと八本指を追い詰める浸透戦術。このまま続けば彼等は殺されている自覚すらないまま潰されるだろう。

つまり国の決定でありながら、作戦立案している件の人物は決断が早く余程の切れ者である事を示している。

虚偽と真実を上手くすり合わせ、「人が怪しむギリギリのライン」を上手く突いた情報操作。その手腕に少しだけ興味が沸いた。

それに便乗し、この国に害成そうとするかは不明。

ただ理解出来るのは、八本指とそれに付随する麻薬を本気で撲滅しようとしている事。

これまでにない速度で、綿密に確実に情報を集めている。それも八本指に全く悟らせず、警戒すらさせない程隠密性も高い。

その気になれば国王の尻毛の数まで網羅しそうな勢いだ。

スレイン法国は謎が多い故、如何に彼女が原作をして「異形種」といわしめるレベルの優れた頭脳を持っていたとしても、推理と予測には限界があつた。

事実は小説よりも奇なり、と確かめようにも自分は籠の中の鳥、迂闊に外へは出られない。この時ばかりは背負う身分が煩わしい。

「じゃあ此方へお招きしましょう」

ラキュースが件の協力者と接触すれば、なにかしらの反応は必ずある。

この国はもう末期だ。

汚職と麻薬が蔓延し、経済は低迷、このような事態にも関わらず民を指揮する貴族たちは身の振り方しか頭になく、これ幸いと犯罪組織が台頭してくる始末。挙句の果てに王位継承権を持った自分の兄までもが犯罪に加担しているとくればもはや未来はないだろう。

まあ、彼女にとってはそんな事は心底どうでもいいし、どんな末路を辿ろうが些事ではないのだが。

彼女に見えているのはひとつだけ、他の全てを投げ打つても独占したい■^ク■^{ライム}との甘い甘い記憶だけだ。彼の事を考えている時だけは心の底から幸せを感じる事が出来る。

人でありながら人に馴染めない彼女にとってそれが全てだった。

ラキユースとつるんでいるスレイン法国の協力者も、私とクライムの未来のために働いてくれる優秀な駒であれば儲けもの。

なのでこんな国には適当に見切りを付けて、何処か落ち着いた場所に亡命でもして2人でしっぽりねっとり（限りなくマイルドな表現）したいなあ…と、紅茶を楽しみながら耽るのであった。

「はあ…いつになったら私の平穩はやってくるのかしら」

誰も居ない部屋の中、鈴のなるような声とそれに反比例するようなドス黒く濁った瞳で吐いた溜息が溶けていく

20 Side OPS：聖王女でも〇〇がしたい！

さて

レイラ達スレイン王国の面々が王国へ潜入し、犯罪組織撲滅の為裏で色々と画策している頃と同時期に。

スレイン王国より、アベリオン丘陵を挟んで西側に位置する人類国家にも少なからず動きがあった。

名をローブル聖王国、国土の大半を海に囲まれ、丘陵に蔓延る亜人たちの熾烈な生存戦略を今も繰り広げるかの地。

その首都、ホバンスに位置する王城に座するのは正装を纏ううら若き女王であった。

愛らしさと凛々しさを備えた花のように美しく整った顔。

長い金色の髪は艶やかで光沢を放ち、天使の輪を幻視させるその風貌はまさに国の至宝といっても差し支えないだろう。

名をカルカ・ベサーレス

聖王国の歴史上初となる女性聖王にして10歳という若さで第4位階魔法までを習得した才女である。

因みに現在22歳、恋人絶賛募集中。

そんな彼女は現在、聖王の玉座に腰掛け、北部の貴族達が集うなか目の前に跪く部下の報告に耳を傾けていた。

「……………以上がスレイン王国で我々が視察して来た内容でございます。

公文書に記されていた通り、かの国は永きに渡る宗教的対立関係を解消し我が国との融和を望んでおります。

つきましては文化交流をはじめ、両国による本格的な資材の取引、亜人の紛争に巻き込まれる我々への支援も行いたいと…」

事の発端はスレイン王国より届いた一通の公文書。

国と国のやり取りを公的に綴ったものゆえ、難しい事が長つたらしく記されていたが要約すればこうだ。

『我々は人類繁栄の為、過去の因縁や宗教的価値観を乗り越え手を取り合い、生き残るためお互いに協力し合うべきだ。』

手始めに使節を送って、お互いの文化を視察して距離を縮めていこう。

そんでゆくゆくは物資の取引とかやらない？』

ローブル聖王国とスレイン法国、この二国間関係には永い間空白が存在していた。

理由としては2つ。

先ず物理的に距離がある。

隣国に他人間国家の接する法国は兎も角、聖王国の周りは海に囲まれた半島だ。一番近い人間国家は海を越えた先にあるリ・エステーゼ王国の沿岸都市である。

幸い陸路は繋がっているものの、間にあるアベリオン丘陵は亜人達のテリトリー。様々な種族の亜人が武力によって覇を競い、己の生存圏を主張し半ば紛争状態となっている彼の地を横断するのは自殺にも等しい。

そして信仰の違い。

法国には六柱の神プレイヤーを元に作り上げた六大神信仰という宗教の形があるのに対し、聖王国にはそのうち光と闇を差し引いた四大神信仰が存在している。

おそらくは、嘗て法国を建国したプレイヤー達が別の場所で興した国のひとつが後の聖王国の基盤となり、そこに関わった者がたまたま4人だけだったからではないかとされているが、あくまで想像の域を出ない。

それでも聖王国民にとっては建国当初から伝わる由緒正しき教えであり、それ故に異なる宗教を持つ法国と轡くつわを並べる事に些かの抵抗もあろうもの。

使節を務めた外交官により述べられる内容にはこちらにとって不平等になるような条約や、経済的不利を被る取り決めなども一切な

かった。

それでもこの場に並ぶ貴族の面々の表情は渋い。

「ありがとう。」

「どう思う、ケラルト？」

そう女王は零し、隣の女性を見やる。

茶髪の長髪にカルカにも負けず劣らずの美貌を持つ彼女は聖王国神官団団長、女王を支えるカストディオの両翼とされるケラルト・カストディオだ。

「……ハッキリ申し上げるなら、異常ですね。」

かの国とは建国以来殆ど接点もなく、お互い不干渉を貫いていました。

それが今になっていきなり国交を結びたいなど……裏があると捉えるのが当然かと」

女の身と侮るなかれ、ケラルトはカルカ即位後もその座を支え、反発する南部貴族達を押さえ込み続けた手腕は本物だ。

そんな彼女が警戒心を顕にしたのを見て、同席する貴族達はますます表情を固くした。

「私としては、仲良くできるのならそうしたいのだけどね」

「あくまで利益目的の外交であるなら問題ないでしょう。」

土地柄ローブルは他国との国交が少ない。陸路は亜人で塞がれて、頼るのは海路のみです。それすらシードラゴン様の護衛付きという条件でしか安全を確保できていない。

そんななか法国は何が目的で取引がしたいのか、気になるところではありますが……」

ケラルトの言葉にカルカは少し考える仕草をとる。

彼女の掲げる政治は皆を慈しみ、苦を取り除く為の統治に重きをおいている。

「弱き民に幸せを、誰も泣かない国を」とは彼女が残した言葉だ。その言の通り善良な彼女は民からも愛されており、巷では「清廉の聖王女」の異名で親しまれている。

しかしその反面、非情になりきれないその甘さで強い態度が取れず一部の貴族との遺恨が燻り、特に南部の貴族達からは「甘い選択しかできない無能」と謗りを受けられることもしばしば。

まあ、表立ってそんなことを言ったが最後、隣に控えるケラルトに苛烈な報復を受けること必然なのだが。

「聖騎士団団長殿はどう思いますか？」

「支援が貰えるなら貰っておけばいいんじゃないか？」

貴族の問いにカルカの隣、ケラルトとは反対側に立つ者。

カストディオ姉妹の姉の方、レメディオスが大きな声で言い放つ。

「ただでさえ前線は物資が不足しているのだ、腹が減っては戦ができません」

直情的な彼女は「貰えるものは貰っとけ」の精神だ。

事実アベリオン丘陵付近の防壁拠点は度重なる亜人の襲撃より年がら物資不足になやんでいる、国から出せる量にも限界がある以上この話は渡りに船。任務で前線へ出る事が多いため、現場の状況をよく知るレメディオスの一言は重い。

しかし困っているから助けてもらおう、で片付かないのが国交の常である。

物資を支援する対価としてスレイン法国は一体何を求めてくるのか？これがわからない。

「姉さんの意見は兎も角、詳しい事情は明日いらっしやる法国の外交

官から聞かないとなんとも。

対話の中で彼らの目的も自ずと見えてくるでしょう」

「そうね、ではスレイン法国の件はひとまず置いておくとして…次の報告をお願いします」

「はっ！」

以前より対立関係にある南部貴族の現状ですが……」

聖王国南部にはカルカの統治を嫌い、隙あらば追い落とそうとする連中がいる。そこから述べられる報告に対してケラルトの笑みが怖いほど深くなつたのは言うまでもない。

聖王国において対法国についてのあれこれはかなりデリケートな問題だ。

別にカルカやケラルトがスレイン法国に対して憎んでいるだとか、特別な感情があるわけではない。

会ったこともない相手に「昔からそうだから」とこちらの価値観を勝手に押し付けるのは愚者以下の思考。聖王女は窮地に陥る国のため、その差し伸べられた手を取ろうとするだろう。

だが南部の貴族に今回の件が知られば「聖王女は永年の仇敵に手を貸す愚王」だとか好き勝手なことを言いかねないし、ただでさえ徴兵で負担を強いている国民の反発も幾らか予想される。

善性ゆえ強い態度を取れずなあなあで国を治めていた反動だ。そこから一步踏み出す事ができるかは聖王女カルカの政治手腕に掛かっていた。

笑顔の怖いケラルトの視線に怯えながら続ける士官が全ての報告を終え、今日の会議は無事終了。

貴族たちは各々の領地へ戻り、大臣との打ち合わせを済ませ彼が出ていった後カルカは軽く溜め息を吐く。

此処にはもう馴染みの顔しかない。

「スレイン法国、悩ましいわね」

「まったく、面倒な問題を持ち込んでくれたわ。」

「…いえ、上手く転がせば鬱陶しい南部貴族達への牽制に使えるかも。」

「言っておくけれど、あまり非情な手段は止めてね?」

「分かっています。」

「けど南部へ圧力をかけるにはもってこいの申し出だし、これを機に南北統一をさっさと済ませてしまいたいですね。」

「亜人達の動向も最近きな臭いので」

「難しい顔をするケラルト。」

「周りを海に囲まれ、唯一の陸路は亜人の生息地と隣り合わせ。ローブル聖王国は国家として生まれ落ちた時からずっと侵略問題に悩まされている。」

「亜人は総じて凶暴な種族だ。」

「アベリオン丘陵にて、今も亜人同士の覇権争いは行われている。力が全ての彼等にとって弱き人間の領地は格好的、捕えた人間は食料にするもよし、奴隷にするも良しの貴重な素材だった。」

「故に聖王国は国境付近に要塞線と長大な防壁を築き、多大な犠牲を払いながら必死に今日までその土地と尊厳を守り抜いている。」

「最近では歴代最強と名高い聖騎士団団長によってその勢力を押しさえ込みつつあるものの、完全な解決には至っていない。」

「この世界において種族差とは即ち食物連鎖のカーブストそのものだ。一般に『亜人』と称される個体は生き物としての生命力、腕力、脚力、果ては特殊能力などが人類のそれを軽く上回っており、食物連鎖の中でも上位に位置している。」

「対してこの世界の人類には僅かばかりの知力と短命故の繁殖能力しかなく、ひと握りの強者しか彼らに対抗出来るものはない。」

「事実、この世界の人類が大陸の端で細々と生きているのがその証左だろう。」

大陸中央部に存命する人類は食用家畜同然の扱いを受けている事を知る者は多くない。

運良く残っている土地もはるか昔、竜帝の行った『世界の根幹を揺るがす程の大魔法』によって現れるようになった『プレイヤー』を名乗る者たちの気まぐれによって辛うじて得られた生存圏だ。

その事を国ぐるみで理解し、何とか人類を存続させ続けようとしているのは現状法国のみである。

聖王国だって現人類の今を理解しているつもりではあるが、戦力差を踏まえ場当たりの対応しかできないのをカルカは齒痒く思っていた。

国内問題に関しては…南部のつまらない意地の張り合いに付き合わされているだけだ。

カルカが歴代初の女聖王である事が気に入らないだとか、強い政策が取れないことを無能扱いして悦に浸る本当の無能どもの相手など好んでしたくない。

ケラルトとしては、聖王を軽侮する連中を可能な限り屈辱的な方法で失脚させるくらいで許してやろうと思っている。

方や国内問題、方や亜人侵略、両方解決しないとイケないのが最高位神官の辛いところだ。

「ケラルトも賛成しているなら問題ないな！」

法国と仲良くすればいいじゃないか、支援も貰えて南部連中も黙るなら一石二鳥だ！」

「はあ、この世全ての人間が姉さんくらい素直ならこんなに悩む必要もないのにな…」

良く言えば直情的、悪く言えば難しいことは考えない(られない)レメディオス・カストディオ。

根っから猪武者な姉に苦笑しつつもケラルトは考えを巡らせる。

本音を言えば欲しいのは物資だけではない。

度重なる亜人の襲撃は物だけでなく人だつて消費する、現実問題として聖王国は深刻な人材不足に見舞われていた。

特に即戦力となる人的資源の不足は致命的だ、いくら歴代最強の聖騎士と誉高いレメデイオスがいるとはいえ、彼女だけで全てが補えるはずもなく。何度も実戦を積み重ねて得られる戦の経験や知識、判断力などは訓練ではどうにもならない。

徴兵で教え込むのには限度があり、数は揃っても質が見合わない：なんてのはこの国ではザラだ。生半可な兵では壁にもならない、それほどまでに人と亜人の種族差は大きい。

個人の強さが所属する国の国力に直結するこの世界において、強者の数で劣るのは亜人に対抗する上で非常に心もとない。かといって育成しようにもひっきりなしに亜人は攻めてくるのでその場の対応で手一杯だ。

まだ表面化はしていないが、聡いケラルトなどはこの現状を危惧している。

なので本音を言えば欲しいのは即戦力となる人的資源、つまり法国の保有する軍事力の貸し出しを要求したい。

そして彼等が前線を護つてくれる間に兵の育成を行い、より精強な兵による防衛線を構築すれば一先ずは持ち直せる。

実際、こちらで掴んだ情報によればアベリオン丘陵の向こう側、竜王国ではビーストマン襲撃の折に法国から軍隊を派遣し戦況を覆すほどの戦果を上げたのだとか。その代わりとして竜王国は法国に多額の寄付を収めているようだが。

(南部貴族からの反発は確実、もし派遣要請が通つたとしても法国から王国の港を経由して要塞線までいちいち渡航させるなんて現実的ではないし、費用だつて馬鹿にならない。

欲を言えば単騎で絶対な戦力を持ち、尚且つ聖王国へ常駐してくれる強者の投入のだけど：そんな美味い話あるわけないわよね。噂になつてる『戦女神』とやらも竜王国へかかりきりのようだし。

巫人に勝つても資金が尽きましたじや笑い話にもならないわ)

「大丈夫ですカルカ様！」

御身の理想を邪魔する巫人共など全員この私めが剣の錆にしてご覧にいれましょう！」

「姉様…」

そうではない、そうではないのよ。と喉からでかかったケラルトだったが、実際彼女の武力依存になる点に関して、悔しいが異論を唱えることができないのが現状だ。

確かにレメディオスは強い。

歴代最強と謳われるほどの実力を持つ彼女だが、それでも守り切れるのは戦場の一部のみ。長い長い要塞線の全てを守り切ることなど土台無理な話だ。

「私があと10人居れば防壁周りは完璧なのにな！」

と雄弁に語る彼女を目撃した事だつてある、事実その通りなのだけど、あの姉が10人も増えたら部下が心労と過労で全滅してしまうわ…と想像してしまうケラルトだった。

「そういえば、件の外交官の方はもう入国していらっしやるのよね？」

「はい、謁見は明日ですがその前乗りとして。」

一応護衛兼監視は付けていますが、特に怪しい動きはありませんでした」

「他国の来賓を監視だなんて心苦しいけれど、仕方ないわよね…」

「事態が事態ですから。」

それに南部が彼に接触してくるかも知れませんが、そのためにバラハ殿とグスターボ殿にお願いしています」

ケラルトの出した2人の名は聖王国でも特に優秀な軍人であり、国に9人しか存在しない『九色』の称号を持つ人物たちだ。来賓の外交官殿に危害が及ぶ事は万に一つもないだろう。

◆
会議は終わり。ケラルトは自室に、レメデイオスは王城の兵士たちに稽古を付けると言ってやる気満々で出て行った。

「…よし」と

衣服を着替える。

清楚で華やかなドレスはしまい、黒や茶色の多い地味めで目立たない、村娘のような出で立ちの服装。

髪の毛も隠せるようにフード付きのローブを纏い、この時のためにカスポンド兄さんから貰った認識阻害の効果を持つモノクルを装着する。

聞けば元の持ち主である兄も煩わしい教育の合間を縫って、気分転換の為お忍びでこの装備を使って城下へ降りていたらしい。聖王女に就任した際、「お前もきつと俺と同じ道を辿るだろうから、これを譲ろう。だがくれぐれも危険な事はするなよ」とこっそり譲り受けたマジックアイテムだ。

彼と同じ道、即ち…

「久しぶりに街に出たい…!!」

息抜きがしたいのです！

私はこの国の王族、ひいては女王、歴代初の女性聖王。覚悟していたとはいえ、当然降り掛かるストレスも相当なものでした。

国民からの期待、南部貴族のやつかみ、他国への印象、就任してから今までの全てがそれはもうストレスの塊なのです。

ケラルトやレメディオスの協力があるとはいえ依然として問題は山積みだし、ストレスのせいで最近お肌が…うう…

でも後悔は無い、私が望んだ事なのだから。

『弱き民に救いを、誰も泣かない国を』

この国の当主となる時誓ったのだ。

民のため、人のため、粉骨砕身し国内の弱き者たちを庇護し、巫人達との厳しい生存競争の中でも歴代聖王のようにその営みを後世に繋いでいくのだと。願わくば戦争に終止符を。

巫人から、他国の脅威から、全てを守り抜いてみせる。あの日、玉座で先代から冠を頂いた時から心に刻み付けた。

だからこれは弱音じゃない。そう、休憩だ。

私は時々変装し、王族にしか伝えられていない秘密の抜け道を通りこっそり城から抜け出して城下を散策している。

先代の聖王陛下は民の生の声に耳を傾けられる貴重な機会だと笑い混じりに教えて下さった。

……先代も大変だったのね。

「ふんふんふん♪」

鼻歌を歌いながら歩いても、誰も私が聖王だなんて気づかない。認識障害さまさまだ。

この時だけは目の前の問題なんて忘れて、1人の「カルカ・ベサーレス」として振る舞える。

だから市井の様子を見て回ったり、良さげなマジックアイテムが売りに出ていないかチェックするのも怠らない。

自慢じゃないけど独学の美容魔法には一家言あるのよね、王女って

疲労とストレスで直ぐにお肌が荒れちゃうから…日々のケアは怠れないの。

だから道すがら美容関係のアイテムがないか目を凝らして露店を周り歩いている。

一口に美容品といっても種類は多岐に渡り、塗るタイプの薬品から魔法の込められた羊皮紙スクロールタイプのものでさまざま。

顆粒タイプの飲み薬もあるけれど、大体のものは粗悪品で酷いものは禁製品なんかが混入していたりするから注意が必要だ。

…その手の薬品はだいたい南部から持ち込まれているのだけど、表立って公開する気はない。ケラルトが機を見計らって、最高のタイミングで発表してやるのだとあくどい笑みを浮かべながら言っていた。

手近な露店でサンドイッチを購入し小腹を満たす。

本日は少し雲があるけれどほとんど快晴といって差し支えない、ポカポカ陽気のホバンス城下は今日も平和だ。

けれど国境付近では今も亜人と兵士たちによる睨み合いが繰り広げられている。

この国は亜人と永きに渡り争っている。その為、国民達に徴兵制を敷いて毎年兵力を補っていた。

やりたい事もできず、自分の意思と関係なく戦争に駆り出される。国民の反発は間違いなくあるだろう。

…もしケラルトの言うように法国が軍事力を貸し出してくれるのなら、国民の負担も少しはましになるのかしら。

真に国の為を思うなら、南部貴族の方々から来るであろう反対なんて力づくで押し切って…

だめだ、どうしても心の中でストップがかかってしまう。私の事を嫌いな南部の皆さんもいつか分かってくれるって心の何

処かで思っていて、これ以上彼等に悪い印象を与えたくないから。非情な判断を下せない、王として民を導くには不必要な気遣いだ。

やっぱり私は『甘い』

『優しい』『んじゃなくて』『甘い』だけ

恵まれた容姿と地位に甘えて、頼りになる親友二人に甘えて、皆に甘えきっている。

こんな私が……

だっ、駄目よ駄目！

今は息抜きにこうして変装までして城下へ降りているのに、嫌なこ
とばかり考えちゃ！

うう…でも…改めて思い直すと尚更…

感情の浮き沈みで風邪を引きそうだわ…

そうだ！他の事を考えて気を紛らわすのよカルカ！

国王ではなくカルカとして、一番の悩みと言えばそう…

お嬢さんが欲しい……!! (迫真)



聖王国現聖王、カルカ・ベサーレス。

由緒正しきベサーレス家長女にして、正当なる聖王国の王位継承者。

容姿端麗、頭脳明晰、慈悲深くその美しい容姿も相まって国民の間では彼女の事を『ローブルの至宝』とそう呼ぶ者も多い。

傍から見ればこれほど完璧な女性は2人といないだろう。

だが、それ故に

いや、だからこそ

彼女はその身に問題を抱えていた。

平均的な女性の結婚適齢期が15〜18歳の異世界において、現在彼女は20歳を超えて暫く。

未だに彼女は未婚である

ぶつちやけると高嶺の花過ぎて男が寄ってこない。

そりや王族の生まれで周りが霞むほどの美人な顔つき、しかも聖母のような慈悲の心を持つ聖女様だ。並の男でなんて釣り合うはずもないだろう。

政において皆の前で演説する際、そのプロポーションに魅了された男性は確かに多い。が、そんな邪な心すら浄化してしまうほど溢れんばかりに彼女から迸る聖母と見まごうオーラの前に^{サン・オブ・ザ・サン}男どもの息子たちも思わず頭を垂れ、聖女に欲情してしまった己が愚行を恥じるのだ。

「確かに美人だけど、聖女王様をそういう目で見るのはちよつと…」

「高嶺の花過ぎて隣に立つのも烏滸がましい」

「彼女は国と結婚した聖女様だから（過激派）」

などと

容姿が、立場が、風評からその立ち振る舞いに至るまで全ての要素が悪いように空回りして今の惨状に至る。

彼女としては常日頃から心身の疲労回復を怠らず、特に肌のケアに至ってはこの国で唯一の美肌魔法を開発するなど、鬼気迫る気合いの入れようであり、子を産む為の母体としては最高品質といっても差し支えないのだが。

そんな感じで世の男性達からは恋愛対象として見られず、貴族階級にも彼女に手を出すような剛の者はおらず、男つ気のない生活だった為出生から現在に至るまでで一番長く話したのは実の兄カスポンド、故に男性との付き合いなどほとんど無い。挙句の果てにカストディ^{レスピアン}オ姉妹とよく行動している所を目撃されているため「実は同性愛者なんじゃないか？」などと囁かれる始末。

(ちがうのおおおおお！)

確かにケラルトとレメディオスは仲のいい頼れる友人だから一緒に居ることは多いけど…あくまで友達なの！

私はノーマルよ！)

(最近、年下で顔見知りの貴族の娘達がどんどん結婚していつて祝言を読む度に胸がきゅうつとなるのは気のせいに決まってるわ！)

(まだ…まだあわわわ慌てる様な時期じゃない。)

20歳を過ぎてからこれ以上ないくらいお肌に気を使っているし、王家に伝わる安産体操だってやってる、アンダーヘアのお手入れだって毎日欠かさないんだから！

ママになる準備は万全！そう万全なの！)

(我儘は言いません。)

糸の一切付いていない、私という人間を愛してくれるお婿さんを…！)

聖王女カルカ・ベサーレス、齡22歳にして己の身の振り方に焦る乙女であった。

とんつ

「あいたつ」

不意に誰かにぶつかってしまふ。

集中力の乱れから来る前方不注意、衝撃で我に返ったカルカが見上げるとそこに厳つい顔が目に入る。

「ああん…？何だテメエ」

ガタイばかりが良く、顔つきも素行も悪い、まるで漫画かアニメにでも出てきそうなガラの悪い男性にうっかりカルカはぶつかってしまふ。

「ご、ごめんなさい。前をよく見てなくて…」

「ゴメンで済んだら憲兵は要らねえんだよ！」

乱暴な手つきでフードが捲られる。

頭になった金髪と整った顔立ちに男は思わず息を呑んだ。

現在、カルカは認識障害のマジックアイテムを装着しているため幸運にも正体はバレる事は無かったがそのかわり「とんでもなく美人な知らない女」が顔を出した事に男は下卑た笑みを隠せない。

「あーあ、この調子だと折れちまってるかもなア。

どう責任取ってくれんだよお嬢ちゃん」

「え、少しぶつかっただけで折れはしないかと…」

「そういう事じゃねえんだ、俺を不快にさせた責任を取って欲しいのさ。」

なあに宿で一日ほど俺の相手をしてくれりゃ許してやるよ」

思わず「ええ…？」と唸るカルカ。

確かに出会いは求めているが、こんな男との出会いじゃない。

望んでるのは素敵なお嬢さんであって、下卑た視線を向けてくる暴漢を好意的に捉えられるほど彼女の倫理観は破綻していない。

さっさと謝って、慰謝料を求められるならそれを払って解決してしまいたいのだが彼はどうやらカルカの身体を求めているようだ。

もちろん異世界であるからこの要求が真つ当である…とかそんなことは無く、不当も良いところであり罪悪感に付け込んだ卑劣な愚行である。

「嫌です、慰謝料でしたらお支払いしますので」

「気の強え女だ、気に入った。」

ベッドの上で屈服させるのがますます楽しみになったぜ」

「ちよつと…ツ離して下さい！」

逃げようとしても腕を捕まれているため身動きが取れない、なおも抵抗するカルカがいい加減魔法の1つでも使って撃退してやろうかと思案していたところ。

「失礼、お二人ともどうかありませんでしたか？」

建物の角から別の男が声を掛けてきた。

「ああん？邪魔するんじゃないやねえよ優男」

「ですが女性は嫌がつている様子ですよ？」

彼女はそれ程の事を？」

彼のその態度はカルカを助けたい、というより純粹に疑問に思っているのだろう。

なぜ白昼堂々道のど真ん中で大の大人が若い女性に乱暴を働いているのか。

「そうさ、この女は不注意で俺の肩にぶつかりやがったのさ。あく痛え痛え、この様子じゃ折れちまってるかもなア！」

だからコイツには付きつきりで『看病』してもらわなきゃワリに合わねえ」

「ちよつとぶつかっただけで折れてるわけないでしょう、大袈裟な事言わないで！」

理不尽な要求にカルカも思わず声を大にして反論した。

そんなそんな二人を優男は「ふむ…」と一考し、徐に男へと近寄っ

ていく。

「な、なんだよ」

「いえ、本当にそうなのかなと。」

彼女がぶつかつた衝撃で…肩でしたよね?」

「そうだよ、だが触るんじゃないねエ!

オグアツ!?!力…強ツ!?!」

ボグツ

「はぎやあツ!?!」

優男が近寄る素振りで肩を締め上げた直後、鈍い音がして悲鳴とともにダランと垂れて動かなくなった。

「ああ本当だ!」

確かに肩、外れていますねえ。

ですが思ったより症状は酷いようだ、今すぐ医師の下へ走った方が
良い」

「いやっ…今っお前があ…」

「代金は私が支払いましょう、ほら早く!」

僕の気が変わらないうちに早く行きなさい」

「ひいつ!わ、分かりまひた…」

動く方の手に3枚ほど金貨を握らせ、這う這うの体で走り去つていく男を背に、尻餅を着き完全に置いてけぼりになったカルカはきよとんと目を丸くする。

「お嬢さん、大丈夫ですか?」

「は、はい。ありがとうございます…」

「平和そうな城下街でも一本道を外れればああいう輩は何処にでも居

るのですね」

彼の言う事にカルカは俯き表情を暗くする。

徴兵制を敷き民に負担を掛けているのは他でもない王家自身、その不満がこうして暴漢などの治安の悪化に繋がっているからだ。

「すみません、私が至らないばかりに…」

「?どうして貴女が謝るのですか?」

不思議そうにする男に慌てて誤魔化す、今のカルカは聖王ではなく一人のカルカ。

身バレする訳にはいかなかった。

自然な仕草で手を差し伸べられ、それを取り起き上がる。改めてまじまじと彼の姿を見た。

黒髪のロングヘアに整った顔立ちのイケメン君、歳は自分より少し下だろうか。服装はローブで隠しているが、時折見え隠れするコートの裾は真新しい新品の物、それなりの身分がある人物なのだろう。

彼の手を離れた時、カルカの心は妙なざわめきに襲われた。

(なに? なんなのこの感覚は…?)

明らかに平時とは違う感情の揺らぎに彼女は戸惑いを隠せない。

『彼の手を離したくない』と欲してしまうなんて

「あ、あの…!」

「はい?」

その混乱の一時的な答えとしてカルカが選んだのは彼との継続的な対話だった。

「他の国も…城下は荒れているのですか？」

我ながら適当な質問をしたと後悔していたのだが、思いの外男は真剣な表情をして応対してくれるようだ。

「そうですね…僕は国とは王の心そのものだと思っています。」

民は正直だ、善王であれ悪王であれ必ず何かしらの反応を示す。

作物の収穫量などの数字で表せるものだけではなく、村々や城下町の雰囲気さえ見えないはずの顔を変える。宗教である程度の意思統率は可能ですが、一時的なものだ。

人の心は常に移ろいゆくものだから」

「そう考えると、帝国や竜王国は凄いですね。」

優秀な皇帝に支えられ安定した帝国はまだしも、ビーストマンの侵攻に耐えながらも国を存続させ戦線を維持する竜王国は最前線の都市も活気に溢れていました。負ければ死が待っているにも関わらずね。

きつと街の者たちは諦めない竜女王の態度に後押しされて、侵略を耐え抜いているのでしょうか」

竜王国、カルカも知っている。

人を食らう亜人種、ビーストマンの生息域と地続きで隣り合わせになっており、聖王国同様はるか昔から亜人との闘争を余儀なくされた国家。

立地の問題で聖王国からの救援は望めないが、幼い女王が懸命に国を回している姿はかの国から送られてくる声明文で容易に想像出来る。こちらにも侵攻を受けている以上、表立って何もできないのが心苦しい。

「もちろんその逆、王国などは…」

いえ、止めておきましょう。僕如きがとやかく言うのはお門違いです。すね。」

王国の言葉が出た途端彼は表情を暗くし話を中断してしまつたが、カルカはどうしても聞いておきたかつた。

「国は王の心そのもの」という彼の言が頭から離れない。

喉まで出かかつていた言葉をどうにか絞り出す。

「なら……聖王国は……如何でしょう。

民は……皆は満足しているのでしょうか、王の統治は間違っているのでしょうか」

ただの戯言だ、王の苦勞も知らない一市民の言葉の重みなどたかが知れている筈なのに、死刑執行を待つ囚人のような気持ちでカルカは彼の言葉を待っていた。

「……難しいですね。

もとより国政に正誤などありません。

正誤二択で判断するには複雑すぎる程、政には人の思惑が絡むものですし。それは他国が客観的に見た結果ですから。

どの国も『それが正しい道』だと己自身に思い込ませるからこそ人が動き、国が動くのではないのでしょうか」

「かの王……今代は王女でしたか。

彼女は恐らく『そうあって欲しい』という理想と『そうなってしまつた』現実の差に苦悩しているのかもしれない。

民の幸福を心から望んでいなくても、その理想に現実が追いつかない。その結果国内の意思疎通が取れず南北を分かたれたままの歪な政治形態を保っています。

これは致命的でしょう、1つの国に2つの政治形態があるようなものです。

それがどんなに綺麗なガラス玉でも僅かにヒビが入っていればいずれそこから真つ二つに割れてしまう」

理想と現実の差に苦悩する、彼の言葉がすんなりと胸に落ちる。
同時にそうなるまで国を導き、言われるまで気づかなかつた自分自身への落胆がカルカを襲った。

(ガラス玉…)

そうね、この国は割れかけのガラス玉。

どんなに一生懸命守ろうとしても、甘い私ではいずれ…)

「…けれど、個人的な意見を述べさせて頂くなら僕は陛下を支持します」

「……え？」

「彼女は民の『今』を懸命に護ろうとしている。

全てを投げ出し自暴自棄になるのではなく、誰かの意見に迎合するでもなく。亜人の侵略、或いは国内の政治的攻防から徹底して民を遠ざけ護っています。

その強固な意志を傍目から見ても感じ取れるからこそ、民は徴兵制も殆ど反発なく受け入れ自ら戦地に赴く。

陛下はいつも御自身が仰っていた言葉を実直に行われ、理想と現実の差異に苦悩しながらも一歩ずつでも前に進もうとしておられる。そんなふうに感じました。」

「素晴らしい事です、誰もができることではないですから」

「意志を持つ者と持たざる者では放つ^{オーラ}氣質が違います。

民を導く目に見えないチカラ…俗っぽくなりますが、^{カリスマ}“と呼ばれるもの。目には見えませんが、その言動ひとつひとつに魂が宿る。”

かの王女も例に漏れず、ね」

「そんな陛下が心を砕き、国のために奔走しているのに民が何もしない、なんて不義理な事は決してないでしょう？」

それに…」

「……っ？」

「頑張っている女の子がいたら応援してあげたくなるじゃないですか」

「おっと、王に対して不敬なもの言いでしたね。忘れて下さい」と半笑いで男がごちる。

決してからかっている訳ではなく、冗談めかして言う彼の向かいでカルカは…

(頑張ってる……)

(応援したい……)

(女の子っ…!!!)

お顔真っ赤っかであった。

何を隠そう、男の前にいるのは聖王国王女カルカ・ベサーレスその人である。

普段民とは身分を隔て王城の中で暮らし、民から…もとい一般男性からこうして身分を超え対面し素直な賛辞の言葉を受けるなど初めての経験だったのだ。

いつもの王女モードなら涼しい顔して「ありがとう、私も貴女の期待に応えられるよう頑張りますね(全力聖女スマイル)」くらいできょうものを、素のカルカの状態で面と向かってこんな事言われたら嬉しいやら恥ずかしいやらで頭が茹で上がる。

それに彼、無駄に顔が良い。

更に物腰柔らかな仕草と悪漢を圧倒する力強さ、そして他国への広い知識を持つその博識ぶり、心・技・体全てが整っている(カルカ談) 決め手とばかりに彼は王としての自分だけでなく、一人の女性としてカルカを評価し、それでも「応援したい」と言ってくれた。

その言葉に再び心臓が跳ねる、具体的な音声で表すと「きゅんっ♡」って鳴った。

英才教育で培われた彼女の頭脳が高速回転を初める。状況を整理、今まで彼に言われた言葉全てを一言一句丁寧に思い起こし、過去、現在の状況全てをふまえ、導き出した結論は…

(なんて素敵なお人なの！お婿さんにしたいっ！)

聖女らしからぬ我欲に塗れた恋愛感情だった。

(初対面なのに優しいし、物怖じもしないし、カルカわたくしを見て喋ってくれ
る…

一切糸の付いていない私を…

…ハッ!!もしかして彼、私の事が好きなのでは!?)

聖王女カルカ・ベサーレス、度重なる結婚願望を拗らせクソ雑魚恋愛脳になってしまった女。

今回のシチュエーションはそう、言うなれば初めての新歓コンパで向かいの席に座った女の先輩から積極的に話しかけられ、「あれ?もしかしてこの娘俺の事好きなんじゃね?」と優しくされただけで勘違いする哀れな大学一年生のようなアレである。

「クツツツソチヨロいですわ〜!」ってイマジナリーレイラが叫んでいるぞ聖王様。

「…どうかされましたか?」

顔色が優れないようですが、どこか具合でも?」

「うえあいつ!」

大丈夫、大丈夫ですご心配なくう!! (クソ早口)

反射的に物凄い勢いで離れてしまった恋愛クソ雑魚聖王様はその
気まずさから御礼を述べると凄まじい速度で彼と別れ…

「せめてお名前だけでも聞いておくべきだったわあああああ
……」

我に返って私室のベッドで布団ををおつかむり悶えておりました
とき。

◆ 「外交官殿、探しましたぞ！」

「ああグズターボ殿。」

申し訳ありません、面倒を掛けてしまったようで」

「いえいえ、ずっと宿の中も窮屈でしょうし市井を回るくらい上に言い訳は着きますが…」

次からは我々をお連れ下され、万一の事があれば大変だ」

「ははは、大丈夫ですよ。」

これでも祖国で……3番目くらいには強いので」

「(凄い自信だな…) そういう問題ではありません。」

バラハ殿と合流致しましょう、城下の視察もその折に」

「承知致しました。」

不躰なお願いではありませんが、道すがら歴戦の軍人であるお二人の話も聞かせて頂きたい。

貴方方から見た聖王国や諸国、亜人達の事も」

「ええ、機密に関わるような事でなければ問題ありません」

「それはよかった」

◆ なお、余談ではあるのだが。

翌日の法国外交官との謁見において、フードを脱いだ彼の顔を見た途端王女が吹き出し身悶えるという前代未聞の事件が起きてしまったのだが、幸いにもそれを目撃したのはごく一部の者のみであり、強く緘口令が敷かれた。

あわや外交の危機かと最高神官ケラルトは天を仰ぐが、後に「場を和ませる為の王女なりの気使いである」と外交官自らが納得し無事に交渉は続く。

結果、聖王国の鉱山資源と引き換えに糧食や武器等の補給物資を定期的に前線へ届ける為の条約が二国間に結ばれる事になった。

輸送コストの問題に関しては両国が平等な配分になるよう取り決め、負担する事になる。

前線への法国による部隊の派遣申請は残念ながら通る事は無かったが、代わりに召喚系魔法詠唱者の教官を派遣し天使召喚を行える兵士を増やして戦線の増強を計れないかとの意見が飛び、法国はそれを承諾。近々教官が数名派遣される事に。

召喚魔法は現地人にとつて決して簡単な魔法ではないのだが、多くの聖騎士を排出する聖王国ならば素質を持つ者は多く存在するはずだと、訓練所とは別に帝国ほどの規模ではないが魔法教育施設も設立し法国もそれをサポートする構えをとった。

ここまで協力してもらった手前、南部による非難は免れないが、ケラルトによる予想は国益で上回って実績を叩き付けてやれば連中も黙らざるを得ないとの事。色々と工作も考えているらしい。

謁見の終わり際。

外交官の語る「法国で開発される新しい魔法技術」を訝しむケラルトの前に彼から意味深な『招待状』を手渡されるのだった。

これがケラルト・カストディオが初めて「魔巧」に触れる機会となる。

後に彼女は語った。

「確かにあの集まりはこれ以上無いくらい有意義で楽しかったけど、同時に彼女が心底恐ろしく感じたわ……」

そんでその手紙を彼からの恋文と勘違いした聖王女陛下は情緒を壊された。

◆
これが後に国家と宗教を越え、吟遊詩人の語り草になるほどの大事件を繰り広げる事になる聖王女カルカ・ベサーレスの恋愛譚、その序章に過ぎない事など誰が予想できるだろうか。

場所は戻り、リ・エステイーゼ王国

「兄上、私は……貴方を断罪するッ!!」

王城、玉座の間。

空はどんよりとした雲に覆われ、時折走る落雷の明滅激しいこの部屋に勇ましい怒声が響き渡る。

此処に集まった全ての者たちの総意を述べようか。

………なんて

????????????????

21 破滅フラグしかないお姫様に会いに来てしまった…

「ラナーに会って欲しいの」

王国で諜報活動を初めてしばらく、ラキユースが持ち出してきた話題に私は内心顔を顰めていました。

ラナー、とはラキユースの親友にして王国第三王女。

本名ラナー・ティエル・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ。

彼女の過去の功績として奴隷制度の廃止がありますが、これは普段滅多に我儘を言わない彼女が涙ながらに国王に泣きついて訴えた結果です。他にも公道整備など国民の為にちまちまとした努力も垣間見えますが、殆どが汚職貴族達のお小遣いに横領されて途中辞めになっている状況ですね。

花のような笑顔とあどけない仕草、そして民を想う心はその容姿も相まって天使のような天真爛漫お姫様。

見た目は完璧なんですわよね、ええ。

見た 目 だ け は

以前にもお話したとおり、彼女は原作においてこの国の滅亡に最も関わる重要人物であり、王国崩壊の影の立役者です。

アニメだっけ印象に残ってます、4期最終話の唐突に全力笑顔で歌い出す彼女には前世の私、戦慄致しました。

シン○オギアを彷彿とさせましたわね。作風は熱血バトルとかけ離れてますけど。

そんな彼女を表現するなら『天才』という言葉以外で言い表せません。

原作でも暗号の即時解説やメイド達の立ち話を分析して貴族達の

関係を把握など、その片鱗を垣間見せておりました。

ナザリック転移後からはいち早く知恵者2人に見出され、裏で国家転覆を画策。

情報を流し王国を好き放題荒らさせた拳句首都を壊滅（本当は緩やかに自滅させるつもりだったらしいですが、予想外の馬鹿フィリップ松岡によりナザリックは殲滅を選びました）させて父である国王を殺し、現地人ではカルネ村、ツアレに続く数少ないナザリック庇護下に降る事となりました。

その後は自身を小悪魔インプに変貌させてもらって、愛するペットと墳墓の奥で永遠を共に……

うん、クツツツソ物騒な女ですわね！

ていうかどうして我々の存在がバレちゃったんでしょう、王城内には意図的に水明を配置してませんし、だとしたら彼女は又聞きの更に又聞きで得た情報を纏めて存在を突き止めたのかしら？

チートですわチート！

1を見て「1」と答えるのが凡人だとするならば、彼女は1000まで答えてみせるでしょう。何故そうなったかひとつひとつ丁寧な説明付きで。

それが誰にも理解されないから彼女は王国から、人類から浮いていた。

一見天真爛漫に見える彼女の根底にあるのは無能過ぎる周りの人間への失望と、その中で唯一眩しく輝くクライムという男の子の存在のみ、それ以外は全て等しくゴミなのです。

ともすれば人格破綻者、本職の悪魔をして「精神の異形種」とまでいわしめる彼女の心の闇はもはや払拭不可能でしょう。

もつと幼少の頃に出会っていれば或いは……いえ、そうになっているものは仕方ありませんね。大体法国の田舎領主と王国第三王女じゃ接点なんて作れるわけねーですし。

そんな彼女への接触なのですが……

正直会いたくありません。

個人的な感想を述べるならば、後に王国を滅ぼす爆弾になり得る存在にわざわざ干渉する必要性を感じないのです。

というか私の八本指壊滅プランにラナーの協力は不要でした。

組織の居場所は水明の皆様と《天上天下》が居れば直ぐに特定可能ですし、妨害手段も《占星千里》ちゃんのサポートで万全。原作知識もあつて彼等の首魁が一堂に集まる会合のタイミングも想像出来ません。あとは各栽培所の裏取りを済ませるだけでしたから。

そこにあの天才が介入して八本指が予想外の動きをしてきたら流石の私も今度こそチャート完全崩壊してリセ確定です、人生にリセットボタンなんてありませんけど！

それと、私が少し感情的になつているのもあるのでしょうか。

原作を思い起こしてみてください。国が腐りきつているとはいえ、彼女はなんの逡巡もなく自ら進んで異形に取り入ってゲヘナを誘導し、数万人単位の人間を文字通り餌にしました。

八本指という犯罪者集団ならまだしも、何の罪もない女子供まで巻き込んで彼等に捧げた。その行先が人喰いの怪物たちの食欲を満たすためだけの趣向品になると彼女なら容易に想像できるでしょうに。

それもこれも全て「たった一人のペットクライムの為」に起こした盛大な滅亡劇。

その行いは人類にとって充分裏切りと呼ぶに足り、愚物と名高い第一王子より余程残酷な殺人犯です。警戒するなという方が無理でしょう。

規模は異なりますが同じ民を束ねる者としてどうしても嫌悪感を拭えません。

まあこの情報と感情は真正銘『神』視点である読者であつた私にしか持てないものであり、仮に知識を持たずこの世界に生まれていれば彼女の純朴な演技にホイホイ騙されてラキュースに続く優秀な駒扱いになつてたんでしようが…

「この関係は他言無用だとお伝えしたはずですが？」

笑顔のままちよつと非難を込めて軽く睨んでみるとラキユースはバツの悪そうな顔をして目を逸らし、言い訳を述べてきました。

「うう……それは本当に申し訳ないのだけど…」

日に日にラナーにやんわりと問い詰められて…

あの子勘が鋭いから私が何か隠してる事に気付いてるわ」

「それは単にラキユース様が態度に出やすいだけでは？」

「うぐツ!?…返す言葉も無い…です…」

「はあ、貴女が隠密や欺瞞に向いていない事はよく分かりましたわ」

ラキユース、嘘つきの下手そうですね。

良く言えば誠実なのでしょうけど、貴族特有の腹の中を探るような騙し合いとか彼女には向いていません。だからアインドラ家の人間は貴族の癖してアウトロー多いんでしょうか。たしか叔父のアズス様も冒険者でしたっけ。

「捨てられた仔犬みたいな顔するのはお止めなさい。

分かりました、本来ならラナー姫を巻き込みたくはなかったのですが怪しまれているのなら仕方ありません」

「お目通りさせて頂きましょう、入城手段は其方で工面して下さいね。言っておきますが一般人が突然王城に入ったと知られれば少なからず他の者から怪しまれるでしょうし、リスクが大き過ぎます。

怪しんだ貴族の誰かが八本指に繋がっていればそれだけで我々は詰み。

そうなれば程なく私は主命を執行致します、お忘れなきよう」

「…分かつてる、これ以上ボロは出さないわ。

ラナーにもきつく言っておくから」

ちよつと脅しも掛けましたし、これでなんとか約束は守って貰いましょう。

ボロを出さないって、私にも言えるんですよねえ…
あぁ〜ラナーの前で迂闊な事言わないか気が気でないですわ〜



数日後、王城リ・エステイーゼ内にて

掃除の行き届いた石畳の廊下を歩くのはアインドラ家令嬢、ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ。

本日はいつもの冒険者としてではなく、貴族としての装いで登場だ。

彼女がこの城に住まう第三王女と懇意にしているのは皆の知るところであるが、城内ですれ違う使用人達はその後ろを歩く見慣れない人物に首を傾げていた。

海の底に似た深い蒼色の長髪に瓶底メガネが特徴の女性がそわそわとラキユースの後ろを着いて歩いてる。

時折あちらこちらへキョロキョロと視線を動かし、目の合った使用人にギクリと身体を震わせると、ぎこちなく会釈を返してくる。随分王城慣れしていないその仕草に一部のメイド達は「お上りさんが来たのかしら？」と揶揄うように隠れて笑った。

城へ入場を許されたという事は怪しい人物では無いようだが…

普段の彼女とは全く違う、あまりの挙動不審ぶりに見かねたらキユースは歩を進めながらもレイラに問う。

「レイ…ン、別にそこまで緊張しなくてもいいのよ?」

「そそそ…そうは言いましてもねラキユース様。

いきなり王国のお姫様が私にお会いしたいだとか言われても、私がない田舎の魔法学者ですしおすし…

こういうキラキラした場所は身分に合わないといえますかね…」
「おすし…?」
それでもラナーが見込んだ優秀な魔法詠唱者なんだからシヤキつとなさい」

軽く背を叩かれて思わず背筋が伸びる。

いまだオロオロする彼女を連れて、ラキユースはラナーの居る私室へと向かった。

(こ、こんな感じでいいのかしら?)

(バツチリですラキユース様、このまま演技に付き合ってくださいませ。

私はレイン、法国のしがない魔法学者。

出版した魔法論文が偶然ラナー姫のお眼鏡に留まり話をしたくて友人であるラキユースを使って王城にお呼ばれた田舎者です。

貴女は都会慣れしていない私に呆れながら緩慢な雰囲気を出しつつ演技して周囲の警戒を緩める！

ハイ復唱！)

(私は都会慣れしていないレイラ「レインです」…レインに呆れながら緩慢な雰囲気を出しつつ演技して周囲の警戒を緩めるのが役目…

コレって本当に意味あるの!?)

(勿論ですとも！

潜入任務の基本は与えられた役になりきること。

まず、この城には八本指の息のかかった使用人が居ると見て間違いないありません。

こうする事で「コイツ大した事ねえな」と相手から舐められる、すなわち取るに足らない客人であるという第一印象を持たれる事が重要なのですラキユース様)

(急に早口!!)

お忘れの方も多いと思うが、レイラは法国特殊部隊所属の現役隊員お嬢様である。

その戦闘スタイルと魔法の性質上、広域殲滅や制圧戦に投入されがちなバリバリ武闘派の彼女であるが、これまでの任務で何度も身分を偽り他国へ潜入、調査も行った。

本職の水明聖典には劣るがそれなりに経験も豊富で演技に自信もある。

バーチャスミツシヨウ
貞淑な任務だつてこなせるMGS系お嬢様なのだ！

そんな彼女は今回王城に招かれる折、極力周囲に怪しまれないよう「レイン」の名を使い、ラキユースと共に潜入した。

(周囲に溶け込む為に与えられた「役」を被るのです。

聞けばラキユース様はお持ちの魔剣キリネイラムの中に潜むもう1つの人格と戦っているのだとか)

(え、っ、何故それを…)

(法国の諜報能力に不可能はありません。

夜な夜な部屋で独り魔剣に語り掛けながら己と対峙していらつしやるのでしよう?)

(そ、そう…ね。間違いないわ…うん)

(演技の基本は思い込み、すなわち精神力です。

魔剣の闇を覆すほどの克己力をお持ちなら役を被るくらい朝飯前でしよう?)

ホラ前から貴族が来ますよ、演技演技)

(そ、そうね…魔剣の闇なんかで私の精神は揺るぎはしない…だから演技くらい余裕よ、余裕…)

向かいからやって来た貴族に訝しげな視線を向けられながらも二人は進む。

因みに通りすがりに別の貴族から「平民を王城に連れ込むとはどういう事か」とか「アインドラ家は常識がなっていない」的ないつもの嫌味を言われたりしたが、ラナーの客人である事や魔法学者である事を

説明しな何とか事なきを得た。

どうやら貴族達は基本的にラナーとは関わりたくないらしい。

「今の貴族達、内一人はリットン伯でしたね。」

「六大貴族の一人でしたか」

「…もう何言い当てられても驚かないからね。」

「そう、第一王子を国王に推薦してる貴族派の一人よ」

「噂に違わぬ横柄な方でしたねえ」

「ええ、又聞きしただけでも重税や無理な徴兵が祟って領民の支持は最悪よ。」

「ほんと、一体何処まで知ってるの。貴女の国は…」

「うふふふふ、」想像にお任せします」

本当は六大貴族全員の本家と分派の家族構成から人間関係、果てはトイレに入る時間帯までほぼ全て把握しているのだが、敢えて口には出さないレイラ。

貴族の癖して揃いも揃って諜報員が容易に潜伏できるほど警備がザルなのが悪い。法国と王国の防犯意識は既に三世代ほど離れていた、無論遅れているのは王国のほうだ。

廊下に誰も居ないことを把握してからそんな会話を繰り返し、遂にラナーの私室の前までやって来た。

ラクユースが扉脇に控える騎士に伝え暫くすると、「どうぞ」と鈴の鳴るかのような声が扉越しに響く。

入室を促され、部屋に入るとそこには麗しい姫君が数人のメイドを従えて座っていた。

「ようこそラクユース、そして学者さん。」

どうぞ座って下さいな」

部屋にはキャリーテーブルを押しお菓子とお茶を用意するメイドが3人、そして背後に幼さの残る白鎧の騎士が1人。

ラキュースは慣れた仕草で、レイラもといレインはオドオドしながらも席に着き差し出された紅茶に舌鼓をうつ。

「ほ、本日はお招き頂き誠にありがとうございます。姫殿下におかれましてはお日柄もよく…」

「ふふふっ、堅苦しくしないで結構です。

わざわざお呼び立てしてごめんなさいねレイン様」

「こ、光栄です」

「貴女が書いたこの本、素晴らしくってどうしても御本人とお話が見たかったの。ラキュースも我儘を聞いてくれてありがとう」

「いいのよ、親友じゃない」

「今日は沢山お喋りしましょうね。」

「お茶のお代わりとケーキを用意して下さいさる？」

「承知致しました、姫様」

レインの著書を手キラキラとした笑顔を向けるラナー。

テキパキとメイド達が茶菓子を用意し、お茶会は始まった。

話は終始レイン著書の魔法理論がメインで、ラナーが疑問を呈する所にレインが学者特有の早口で解説を挟みながらそれに答えるの繰り返し。

彼女達が賢いのもあり、専門的な話題が次々と繰り広げられていく。

傍から見れば訳分からん会話を繰り広げられ眠くなってくるだろう。

それを目ざとく察したのか、暫く話した後ラナーはお付の騎士を残してメイド達に持ち場に戻るよう伝える事にした。

何もせずただ突っ立っていられるのもメイド慣れしていないレインが落ち着かないし、この後もひたすら喋るだけだ、なら別の仕事を片付けていて欲しいと諭され「必要であればまたお呼びください」と言葉を残しメイドは部屋を去っていく。

これで“人払い”は完了だ。

ラナーの視線に察したのか、ラキユースはイビルアイより借り受けポケットに忍ばせていたマジックアイテムを起動する。

周囲の音を消し、盗聴を阻害する優れものだ。

「……………これで宜しかったでしょうか」

「自然な導入誠に感謝申し上げますラナー様。

私とラキユース様ではメイド達の警戒を解くにも限界がありましたから」

レインの雰囲気ガラリと変わる、もうそこには「都会慣れしていない人見知りの田舎学者」の姿などない。

演技の時間は終わったのだ。

「貴女が此処に残したということとは、其方の騎士様にもご納得のうえ同席して頂いているととらえて宜しいですね？」

「はい、彼は私が最も信頼する騎士です。

ね？クライム」

「はっ！

この鎧に誓い、この部屋で起こる一切の出来事は他言致しません」

クライム、そう呼ばれた騎士はいつそう背筋を伸ばし、身の丈に見合わない程高価なその鎧の胸に拳を当てながら強く誓う。

その若すぎる故にまつすぐな瞳は充分信用に足るものだった。

「よろしい、では改めて。

ラナー・ティエル・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ第三王女殿下、お初にお目に掛かります。

私はこの度スレイン法国より犯罪組織八本指の壊滅、及び市井に蔓延る麻薬の撲滅を目的とし、勅命を仰せつかる部隊の指揮を務めさせていただきます。

立場上本名は名乗れませんのでここでは引き続き「レイン」とお呼びくださいませ」

瓶底メガネの向こうでくすんだ瞳が微笑むと、ラナーも姿勢を正し頷く。

「ラキユース様とは縁あって、かねてより協力者として情報提供をして頂いておりました。

無論、仕事以外で余計な情報は得ておりませんのでご安心を」

「なんとなくそんな気はしてました。

だってラキユースったら、あからさまに態度に出るんですもの。

お茶に誘っても露骨に断ってみたり、何かと挙動不審で寂しかったわ」

「うう…それは…ごめんなさい…」

バツの悪そうに俯く彼女に悪戯っぽくラナーは笑う。

「けれどこうして貴女から接触して頂けたということは、少なくとも今は味方という判断でよいのですね？」

レインとラナーの微笑みが交差する。

語らずとも答えは伝わったようだ。

「《天上天下》」

「此処に」

ずるりとレインの影から現れる人影に思わずラキユースは驚き、クライムは驚愕と共に思わず姫を守らんと腰の剣に手を掛けた。

それをラナーは視線で制し、ことの成り行きを見守り続ける。

「ラナー様、先程出て行ったメイドは皆貴族家出身で間違いありませんね？」

「はい、紅茶を入れていた栗毛の方が一番の古株でポウロロープ家の

侍女でした」

「《天上天下》、彼女を尾行しなさい。

人気のない場所で誰かと話すかもしれないかもしれませんが、怪しい仕草をとれば報告を」

「御意」

とぶん、と一瞬で《天上天下》が影に沈み、黒が一瞬蠢くとそれつきり動かなくなった。彼女の指令通り早速出て行ったのだろう。

「：彼女は「クロ」でしょうか」

「本人がそうでなくとも分派のひとつが関わっている可能性がありますので」

「そう：残念ね」

「監視役、という事なのでしよう。」

余程貴女が恐ろしいのですね」

ラナーは悲しそうな表情で俯く。

普段自分の世話を焼くメイド達の中にすら犯罪組織の片棒を担ぐ者が居る、そう察し悲しい事実にはラキユースだって心が痛んだ。

「恐ろしいだなんて、そんなつもりはないのだけど」

「いいえ、恐らくこの城で唯一、心から犯罪組織の蛮行を止めようと考えるのは貴女一人です、ラナー様。」

殆どの権力者は彼等の垂らす甘い蜜を啜るために尻尾を振るか我が身可愛さに知らぬ存ぜぬを突き通すでしょう。

そんな貴女が疎ましいのですね、でなければ侍女すら監視に付けるまで神経質になりません」

八本指は最早王国を裏で操れるほどの巨大な組織として確立してしまっている。

権力の掌握は勿論、王城に堂々と間者を忍ばせる程連中の力は広く

大きくなってしまった。

その魔の手は王のみならず、継承権を持った子供達にまで及ぼうとしている。それを阻むラナーは邪魔になるだろう。

彼女が慈悲深い姫君であり、民を想う政策を次々と提案し採決されているのは皆の知るところだ。最近では国内における奴隷の廃止案などが挙げられるが、それも八本指が彼女への警戒を強める一助となってしまうた。

「ですので我々が接触すれば少なからず御身に危険が及ぶ、そう判断し敢えて計画から外したうえで事を構えておりました」

「そう…ね。」

「ごめんなさい、余計な手間を掛けさせて」

「いえ、むしろ僥倖でしょう。」

どの道八本指は王国貴族の中まで深く根付いておりますし、御身に危険が及ぶ可能性をふまえればこうして真に迫ったお話をさせて頂いた方がいざという時護衛もしやすいので」

「いざ」というのは彼女が考える最悪のケース。

八本指が強硬手段に及んだ時、ラナーが直接的な危害を被る場合である。

その整った容姿から「国の至宝」とまで呼ばれる彼女が悪漢共に襲われてしえば、ただで殺されるはずが無い。

如何に警戒しているとしても同性としてそのような蛮行を許すほどレインは人の心を捨ててはいなかった。

「ご安心下さい。」

作戦行動中、御身の安全は我々が保証致します」

「ありがとうございます、貴女がそう言って下さるのなら安心ね」

安堵の表情を浮かべるラナーにレインも笑みで応え、話題は八本指に移った。

組織形態の確認、各部門の来歴と国内各所に散らばった関係機関の位置、彼等の悪行に加担する権力者に目星を付け動向を注視している事。

国内の内情をよく知るラナーは彼女なりの推論と考察をレインに言つて聞かせ、諜報で得た情報と統合して一つ一つ事実にも最も近い可能性を積み上げていく。

重要人物、組織内の派閥の有無、麻薬の栽培地まで詳らかに。

話が終わる頃には取り出した地図とメモ用紙が付箋と殴り書きでいっぱいになるほどに埋め尽くされていた。

「ふう、こんな所でしようか」

「ええ、とても有意義な時間をありがとうございましたラナー様。

貴女のおかげで随分と早く事が進みそうです」

涼しい顔で笑い合う2人だが、周りで眺めていたラキユースとクライムは慣れない頭脳労働で疲労困憊である。

「というかラナー、貴女凄いわね。」

いつもと雰囲気も全然違うし、とても頼もしいわ」

「何を言うのラキユース、普段能天気な私だって国の危機だつてことくらい分かるわ。」

だから今は本気モードなの！」

ふんすつ！と胸を張ってみせる彼女に呆れ混じりでラキユースは微笑む。

「流石はラナー様です！」とお付の騎士は誇らしげに語るし、尻尾振つてる犬みたいだ。

「改めて、本日は貴重なお時間を割いて頂き誠にありがとうございます。共有して頂いた情報は有効に利用させていただきます」

「ええ、力になれたのなら幸いだわ。

私は立場ばかり大きい非力な女だけど、国の為なら全力を尽くさせていただきます」

「ふふふ、非力だなんてご冗談を」

一通りの書類を鞆へしまい込み、レインはラナーへ感謝の意を示す。

そうして徐に懐から小さな砂時計を取り出すとごく自然な仕草でそれを逆さまにし、目の前へ置く。

「ああ、それと最後に」

「?ええ、なんででしょう」

ぴん、と。

時が張り詰めた。

「そろそろ『それ』、止めて頂いて結構ですよ」

「はい?」

愛想の良い笑みを崩さず、まるで意味が分からないといった様子で首を傾げるラナー。

そんな彼女にもう一度、冷たく言い放つ。

「その気色悪い演技をお止めなさい。」

貴女ほどの知恵者が、まさか二度も言わないと分かりませんか？」

その語彙は強い、有無を言わさぬ強制力があつた。

見回せば周囲から2人以外の色が消え、背後に侍るクライムも隣に座るラキュースも静止したまま動かない。まるで時が止まってしまったかのよう。

それを正しく理解し、いち早く現状に順応したラナーの判断は流石といえる。

その顔から一瞬で先程までのたおやかな笑みは消え、浮かべた能面のような表情は一切の感情を写さなくなった。

「素直でよろしい」

ここでの会話は我々以外に漏れることはありません、これで安心して本音で話せますよね」

レインが指先で撫でる砂時計。

出発前にルーファスから直々に賜ったユグドラシルアイテムであり、対象者を空間ごと隔絶し中身の砂が流れている間のみ「攻撃も罠も行えない完全対話用の空間」を作り出すことができる。

盗聴盗撮はもちろん、内部で起きた出来事に対する録音なども全てシャットアウトするユグドラシル内でも稀有な神器級アイテムだ。

：ただし、当の本人にはレアリテイも何も知らされていないまま「内緒話する為のアイテム」くらいのノリで「がんばー」と無表情でサムズアップするルーファスから渡されているが。

「や」と…

この空間でなら身分を偽る必要もありませんし、自己紹介を致しましょう。

初めましてラナー様、私はスレイン法国漆黒聖典第13席次、コー

ドネーム《獄界絶凍》と申します。

お会いできて光栄ですわ、ラナー様」

「…本名は教えて下さらないのですね」

「ええ、呪い避けなど諸々の事情がありますから」

「どうして私の今までが演技だと?」

「企業秘密です♪」

そう答えレインは眼鏡を外す。

その仕草は先程までの堅苦しい「レイン」ではなく、潜入の為にオドオドした演技をしていた「レイン」でもない。

信念に裏打ちされた自信と洗練された上流階級の者がとる優雅な振る舞い。纏う強者の風格は戦闘知識皆無のラナーでも分かるほど濃密で、研ぎ澄まされたもの。

掛けられていた変装魔法が解かれ、青髪のレインから銀髪のレイラへと変貌したがラナーはさして驚いていないようだ。

「竜王国に派遣された『銀の戦女神』様にこんな所でお目にかかれるなんて光栄です」

「流石の洞察力、やはり貴女はとても賢い」

平和ボケした王国にも竜王国の噂は伝わっている。

だがそれはあくまで噂でしかなく、日夜相手を追い落とすことしか考えていない貴族たちにとってはどうでも良い話だ。

ラナーも勿論過去に会ったことなど一度もない。

行商人伝いで集まる市井の噂を更に又聞きで話していたメイドの話から掻い摘んで、想像上の人物だった戦女神をレイラに重ねる事で確信し答えとした。

「それで、本日はどういったご要件でしょう。

わざわざ友人を使って私を呼び出し、リスクを冒して王城まで連れて来た。

それがどれほど八本指を刺激しかねない危険な行いか、聡明な貴女なら初めから気づいておいででしょう?」

「はい、それは重々承知しております。

ですが一国の姫として貴女方の真意を探らせて頂きたくてお招き致しました」

「……」

「貴女方が裏で何を画策しようとも、王国は何もできないでしょう。

情報網、兵力、練度、全てにおいて法国に劣る我が国が何をされようと気付くことは無く、全てが終わった後に漸く自分達の首が落ちて
いる事を自覚する。

そういう愚図の集まりですから」

周囲の目も無いため此処では人目も憚らず、少し口汚くなってしま
うラナーだが彼女の心境を考えればレイラも強く是正することはし
なかつた。

この国の惨状を一番近くで眺めていたラナーだ、賢い彼女だからこ
そその一言は重い。

「貴女は継承権は無いとはいえ第三王女なのでしょう、上申しなかつ
たのですか?」

「何度も何度もお父様に提案しました。

民を守る為、国を良くする為、色々な提案をして、やり方も皆が分
かるよう細かく砕いて全部記載して、一生懸命考えたんです。

でもダメでした。

『お前は幼すぎるから』とか『女性が政まつりごとに出るのはおかしいから』と
適当な理由を付けられて取り合って貰えませんでした。

所詮は世間を知らぬ姫の戯言だと貴族からあしらわれ、父の与えた
予算だけを懐にしまい込む彼等を見て私、とうとう張り詰めていた糸
が切れてしまったんです」

ああ、もうこの国は駄目なんだ。

犯罪者を呼び込んで、汚職に浸かり、弱者を虐げて、外の世界を見向きもせずに自分達に与えられた柵の中でお互いの足を引つ張り合う。

それを他国から見られたらどう思われるか、なんて微塵も考えていない。

これを滑稽と言わずしてなんと言うか。

挙句の果てに実の兄までこの泥沼に平気な顔して浸っているなんて、誰に言えるだろうか。

恥ずかしいとかおかしいだろとかそんな感情はとうの昔に過ぎ去って、今はもう虚無しかない。

リ・エステイーズ王国は朽ちかけた巨木、内側から害虫八本指に食われ、病気にその身を腐らせる悪意の温床だ。

この国を建て直せる唯一の希望だった彼女。

そんな希望が日の目を浴びることのないままに、ラナーはこの国を既に見限っていた。

「気付いていたのですね、第一王子の事を」

「直接見た訳ではありませんが、貴女方がいらつしやった事を踏まえれば間違いありません。」

兄は：バルブロお兄様は八本指に組しているのでしょうか？」

沈黙をもって肯定を示す。

いよいよもって救いようがない。

「だからこの場を借りてお願いがあります、漆黒聖典様。」

王国を壊して下さい。

「完膚なきまで徹底的に、跡形も残さず」

一切の抑揚のない平坦な声音で彼女は言う。

故郷を壊せと、姫君にそこまで言わせるこの国にレイラは素直な吐き気を覚えた。

そして同時にラナーへ湧き上がってくる憐憫の情。

「…そう、貴女はとうの昔に諦めてしまっているのね」

ぼつりと呟いたレイラにラナーは思わず顔を顰め、生気のないままの瞳で見つめる彼女にとても演技上手だなと内心呟く。

「幸いにも王国は土地だけは肥沃な好立地。

国が消えても土地は後世へ残るでしょう、割譲されても生産能力が落ちる事はありません。

民への負担はありますが…このまま貴族に飼い殺しにされるよりマシでしょう」

「貴女の言っている事は国への明確な背信行為です、自覚していますね?」

「その通りです」

「最小限には抑えるつもりですが民の血が流れますよ?」

「理解しております」

「御父上、親族、果ては貴女にも責任は降り掛かってきますが」

「重々、承知しております」

「……そうですか」

レイラは黙り込む。

ここでラナーが望む台詞を言うべきか、突き放すべきなのか、ここが物語のターニングポイントなのだろう。

彼女の選択は…

22 破滅フラグしかない姫様を取り込んでしまっ
た…

私にとって人類とは、道具でしかない

今日も世界は暗い鈍色で、くだらない権力闘争と内輪揉めを繰り返す王城内で毎日目を覚ます。

笑顔の仮面と演技の皮を被って、今日も『みんなが望むお姫様』を模倣し続ける。

昔の私はもう少し明るかったらしい。

けれど大きくなるにつれて他の人達と自分の違いに気付き始めた。

どうしてこんな簡単な事ができないの？

少し考えれば分かる事なのに

どれだけ説明しても、どれだけ微に砕いても、結局彼等には分からない。
ない。

言葉は通じているはず、難しい事なんて何も言っていないのに、知らない間に私と他の人間との間には大きな溝が生まれていた。

最初は分かってもらおうと努力したけれど、今となっては無駄なこと。
と。

だから私は演じる。

天真爛漫で能天気なお姫様

権力闘争に興味はなく、継承権争いもしない

人畜無害なか弱いラナー

花を愛でて、友人との他愛ない会話を楽しみ、税に苦しむ国民を憂う籠の中の鳥

そんなもの、嘘なのに

うそ うそ うそ うそ

ぜんぶぜんぶ、嘘

塗り固めた嘘を重ねて、そこへまた嘘を貼り、積み上げながら生きてきた

そうしているうちに、気付いた時には私の本当の気持ちはどこかへ消えてしまったの

けれどそんな私の世界に唯一光を齎してくれたのは1人の少年だった。

ああ、かわいいクライム

かわいい私の ■ ■ ■

全ての色を失った灰色の世界で彼の無垢な笑顔だけが輝いていた。

彼の輝きは嘘だらけの人生でただ一つの真実（ほんとう）

渴ききつた私を唯一満たすもの

この気持ちだけは嘘じゃない

■ してる

彼を失わないように、閉じ込めて、拘束して、私に依存させて○○○○○○して○○○○……

こほん。

とにかく。

彼だけは何があっても手元に置きたい、他の何者にも変えられない私だけのクライムだもの。

でも、彼と私が暮らすにはこの国は些か腐りすぎている。

覆しようなのない国家の腐敗、蔓延る犯罪組織の手、私が王族なのを加味しても彼を護るのには限界があった。

甘ちゃんのお父様は貴族達を裁けず、愚鈍な長兄は早々に犯罪組織に尻尾を振った。次兄は少しだけマシなようだけど、立ち上がる気概

も熱意も足りない彼に期待はしていない。

なので今まではなあなあで対抗策を練りつつ八本指の動きを把握して、こちらに火の粉が飛んでこないよう誘導だけしていたのだけど、バルブロお兄様を取り込んだ辺りから横暴がいつそう活発化している。

麻薬栽培所の増加や身寄りのない子供の誘拐が頻繁に起こり、奴隷を使った違法娼館が各地に乱立、調子に乗った貴族の内政干渉もかなり多くなった。ボロを出すほど表立ってはいないけど確実にその影響力を広げて、病魔のようにジワジワと国を蝕んでいる。

どうでも良いけれど、いえどうでも良かったのだけど、その過程で私が邪魔になったのかしら。

給仕のメイドがある日急に別の者に交代した、ある特定の従者だけが四六時中着いて回るようになった。

あからさまに警戒されている、世間では『苦しむ民を憂うお姫様』で通っている私にこれ以上余計な真似をさせないように八本指の指示で人を送ったのだろう。

このままでは私とクライムの身も危ない。

そんな時、竜王国へ行ったハズのラクユース達『蒼の薔薇』が持ってきた情報は価値あるものだった。

「スレイン法国が王国へ干渉しようとしている」

彼女は上手く誤魔化してしらを切ってるつもりですが、私にはお見通し。直ぐに分かった。

：嘘を吐いてきた年季が違うのだから。

スレイン法国といえば周辺人類国最強の宗教国家、600年より昔から存在する謎多き国。

周りを人類国家に囲まれる王国には馴染みないものだけど、亜人種への牽制や抗戦を何百年も継続してきたそのキャリアは語るに及ばず、と言った感じ。

兵力、諜報能力、練度も圧倒的な戦争強国。彼等の奮闘が今の人類圏を形作っていると言っても過言ではない、そんな国が隣にあればこの国をどう思うか、正しく知る者は僅かしか…いえ王国には私以外居

ないわね。

そんな物騒な国が我が国に干渉してくるとしたら理由は1つ、巷で悪行を振りまく八本指の撲滅だ。

特に麻薬の流通は他国にも広がりを見せ始め、王国だけの問題ではなくなってしまうている。

予想では帝国と繋がっている拜金主義者や八本指とズブズブのリットン伯の領地から盛れ出して、甘い毒を他所へばら蒔いている可能性が非常に高い。

予想では麻薬の浸透速度はもつと遅いはずだったのだけど、ある時あからさまに麻薬の流通量が増え始めた。大方、欲に目が眩んだ下っ端構成員が目先の金欲しさに栽培量の拡大を計ったのだろう。

目立つ行動は肥大化し過ぎた組織が身内を制御出来ていない証左であり、八本指という組織が如何に統率の行き届いていない無能集団か伺い知れる。

あ、王国貴族よりはマシかしら。

正直、八本指は大した組織ではない。

それよりも問題なのは。

唯一のイレギュラー、ラキユースの手引きにより法国より派遣されてきた諜報部隊の指揮官である……

「…そう、貴女はとつくに諦めてしまっているのね」

彼女はそう零し、頬杖をついたままじつとこちらを見つめている。

その瞳には僅かばかりの懐疑心と憐れみの感情が込められていた。

マジックアイテムの登場は計算外だったけどこれで概ね私の目的は達成できた。

法国に私の立場を示し、あわよくば有事の際保護してもらおう約束を取り付けること。

王族を、ではない。私の身の安全を確保してもらおう。

私は賢いけれど、それ以外は年相応の女だ。腕力も体力も大の男と比べれば圧倒的不利ですもの。

万が一組み敷かれた場合、抵抗しても非力な私ではなすがままだにされるのがオチ。勿論クライムも護衛として信頼しているけれど、信頼と実力は別問題だから。

いざと言う時物理的に私を守る壁が欲しい。

少し話した感じ、彼女は演技は上手だけど見た目ほど冷酷な人間じゃない。演技の腕は仕事で培ってきた経験による賜物で、私と違って沢山の人と接しながら育ってきた人情家なのだろう。

そしてかなり頭も切れる、二重に掛けた私の演技を見抜かれたのは正直予想外だったわ。

たまたま知った本の著者を突然呼び出してお話する天真爛漫なお姫様

その裏で友人と共に犯罪組織撲滅の為健気にも暗躍する第三王女
それで目的は達成されるハズだったのだけど、彼女は許してくれないらしい。

だから最後の札を切った。

いつも鏡の前で練習している笑顔も消して、あえて素の表情で。

母国の腐敗に辟易として、どうにもならないならいつそ全部壊してくれと懇願するラナー

という私。

今思えばこれが私の本心に一番近いのかもしれないわね、その本心すら嘘かもしれないけれど。

……私にはクライム以外要らない。クライムと一緒に暮らす為ならこの国の全ての人間を生贄にしたっていい。

第三王女ではなく一人の女として、誰にも邪魔されない場所での命尽きるまで彼と共にいたい。

彼の全てを管理したい

おはようからお休みまで、食事も入浴も排泄も床の世話も全て

彼を飼いたい

そうする事でしか私は彼を■せない

これが私の■のカタチなのだから

その為なら、法国だろうと魔王だろうと手玉にとってみせる。

「時に貴女、好きな人はいるかしら？」

「……へ？」

突然の質問に一瞬間抜けた声が漏れてしまった。

「想い人はいるかしら？」

「恋人は？恋愛とか、した事はある？」

「えっと……」

「それとも、もう心に決めた殿方がいらっしやるの？」

「貴女ほどの立場の方なら許嫁とか居そうですねが……」

「いい、居ません。」

「恋人も許嫁も……」

「あらそう、てつきり隣の彼にお熱なのかと思いました」

そう止まったままのクライムに視線を移す彼女。

ぞわりと背筋に悪寒が走る。

彼に目が行ったことは不思議じゃない。私が孤児上がりのクライムを拾い上げ、個人的な感情で側近に選んだ事は王城内では周知の事実であり、わざわざ特別な鎧も与えマーキングしているのだから周囲の人間が私とクライムの関係を察するのも分かる。

身の丈に合わない地位と鎧を与えられたお姫様のお気に入り、そう

思われるよう仕向けたのだから。

クライムに目を付けられた？

違う、この女が言いたいのはそんな生易しい事じゃない。

「……何を、仰りたいの？」

この、感覚は、なに？

その金色の瞳と目が合う度に感じたことの無い悪寒が走る、嘘で固めたハズの心の奥まで見透かされるよう。

酷く気持ちが乱れてくる。こんな事、今まで無かったのに。

「うふふ、そうねえ…貴女の望み通りにしてあげましょう。

いざと言う時に備えて凄腕の護衛を極秘に侍らせ、王城から安全に逃走する手段も整えます。

最悪のケースを想定していつでも法国へ亡命できるようエスコートして差し上げましょう。

梓は…その騎士さんの分も必要かしら？」

「ツ宜しくお願い致します」

完全に話のペースを奪われ掠れた声で返事することしかできなかった。

金色が私を覗き込む

また、酷く心が乱れる

魔法、違う

異能力、そんなんじゃない

もつと本質的な何かが違う

なに、この違和感

彼女は　ほんとうに　にんげん？

想定通り、彼女の口からは私の望む言質が取れているはずなのにどうしても拭えない不安に滅多に流れない汗が頬を伝う。

「国を壊すほど暴れる気はございませんが、勅命を頂いた以上八本指は徹底的に潰させて頂きます。」

貴女が思う通り、王国は腐りかけの巨木と変わりありません。一人倒れるならまだしも疫病を他所にばら撒きながら朽ちるとなれば、人類の護り手”として黙っている訳にはまいりませんので」

害樹の伐採なら前にもやりましたしね、と彼女は呆れ気味に笑う。

……以前にも国を裏から潰した経歴がある、という事かしら。やはり法国は要注意だわ。

「よろしくお願い致します。」

我々にはもう、どうにもできません」

「承りましたわ。」

ああ、それと。これも個人的な質問なのですが……」

「私が答えられるならなんなりと」

「貴女、彼の子を産みたいのかしら」

……………は？

「こ、ども……？」

「あの小さな騎士様を■しているのでしょうか？」

だったら子供の1人や2人、もうけてみたいとは思いませんか」

その質問に私はハッキリと答えることができなかった。

初めての経験よ、口から言葉が出てこないだなんて。

どうして？私はクライムを■している

彼の無垢な笑顔を■してる

忠犬のように私に尽くしてくれる忠誠心をしてる

私と同じ彼を■してる

■してる、■してる、■してる

■してる■してる■してる■してる■して■して■して■して■し

てあい■■アイAI■ ■愛■■あい■ ■■

愛■アイ？

こんなにも■してるはずなのに、不思議と私は「彼との子供を作りたいか」という問に対して答えを出す事ができなかった。

「貴女の人となりは知りません。

生まれ持った能力を活かせなかった周囲の環境、育ってきた経緯と立場を考えれば「そう」なるのも納得できますし、「そう」なつてしまった貴女はもう戻る事はないのでしょうか。

ラナー、貴女の抱く■の形がどうであれ、他人の恋路に口を出す気はありませんが…」

ああ、確信した。

この女は気付いている。

私がクライムに抱く感情の奥底、隠し通してきた真相に。

それは執着、あるいは潜在的な同族依存の延長で「普通の」人間が語る■じゃない。

普通の人間なら■した人の子供が欲しいとか思うのでしょうか？

でも私は違った

彼を自分のものにした、自分色に染め上げたい、拘束して監禁して、誰の目にも止まらない所で一生涯添い遂げていたい。

でもこれは人の倫理に反してる、そう理解しているから私は■したクライムの理想とするお姫様を演じ続けながら生きてきた。

歪んでしまった私に普通なんて分からないんだもの。

「得体の知れない事を咄く少女」、「理解不能な事を述べる薄気味悪い女」、それが貴族達から受けた私の総評だ。騎士もメイドも兄2人も、父ですら同等の人間は居ない。

理解者なんて何処にも居なくて。

この国には。いえ、人の世に私の居場所は有り得ない。

そう、幼い時に結論づけた。

けど何が悪い？

私の世界は閉ざされている

「貴女は賢い。」

なら私の真意も容易に読めるはず」

全てが想定されて、計算されて、推理されて、分かりきった未来しか訪れない

「例えどんなに聡明で優れていても、世界の全てが予測できる訳じゃない。

人の世はそれほど単純な作りをしていない」

だって、全部、つまらないもの

「そう断じれるほど生きていないでしょう。

たかが14にも届かない箱入り娘の分際でよくもまあ一丁前に吠えましたわね」

うるさい、うるさい

お前に私の何が分かる

「何も。」

けれど、少なくとも貴女よりは永く生きていますし貴女より多くを経験してしましてよ」

なら、わたしはどうすればいい？

とうに結論を出したはずなのに、今更問われて「わからない」だなんて。

動揺で思考が定まらぬまま、人生で初めて他人にものを問うた。

「…既に貴女の行動が物語ってますが」

？

頬を熱いものが伝う、ずっと汗だと思っていたのに。

それは涙だった。知らぬうちにぽろぽろと流れ落ちるそれは床を濡らし、顔の下に小さな水溜まりを形成してた。

「あ…れ？なんで、私…」

意識とは無関係にボロボロとこぼれ落ちるそれに困惑が隠せない。演技の時以外に人前で泣くなんて普段なら有り得ないのに。

軋んだ感情がコントロールできない。

あの瞳を見たから？

「それがまだ貴女が彼の為に人であろうとする証拠です、大切にさないな。」

その■が少しでも人に近付いたなら、近付きたいと願うなら、私に相談なさい。

後悔はさせませんわ」

まだ、やり直せる？

たぶん、このまま2年も経てば私の人としての良心は完全に嘘で塗り潰されて、消えてしまおうだろう。

クライムへの■に縋るように生きて、それ以外の全てを容赦なく切

り捨てる。彼との平穩の為なら悪魔とだって笑顔で契約するような。そんな怪物ランナーに。

そんな自分に変わってしまったのを、全て諦めてしまった私は抵抗なく受け入れているはずだった。

危険だ

この女は危険だ

離れなければ

あの曇りない金色の瞳に見つめられる度、身ごと焼かれるような気分になる

取り繕った演技が、塗り固めた嘘が全部剥がされて奥底に消えてなくなつた筈の善性を無理やり引つ張りだそうとしてくる

きつと「いつものランナー」は壊されてしまう

そう自分の中で誰かが悲鳴をあげている

けれど

差し伸べられた手を取らないともう「戻つてこれない」？

また、気持ちが揺れる。

嘘で固めて何処に行ったかも分からなくなつた本心が必死に彼女に縋ろうとして、それすら嘘ではないかと疑つて、ぐちゃぐちゃになつた思考が纏まらない。

こんな事人生で1度もなかった。

「初めて」を拒絶する私が、これ以上嘘を吐きたくないと思願する私が、年相応の子供のように大人に頼りたい私が、自分以外全てを塵芥だと断じて未来を閉ざしてしまつた私が、必死に考える。

けれど時間はそれを許してはくれなくて

「……そろそろアイテムの効果が切れますか。

内緒話もここまでですわね」

砂時計の残りの砂はもう僅かばかり、この空間は終わってしまう。

終わってしまったえばまた、私は「みんなのラナー」にならないといけない。

「この件が片付くまで暫く王都に滞在する予定ですし、貴女にこれを渡しておきましょう。」

《伝言》よりも機密性の高い《暗号電報》コード・エニグマという通信用魔法が込められたマジックアイテムです。

通信可能範囲は狭く対になる子機同士でしかやり取りは交わせませんが、王都内であれば問題なく機能するでしょう。

何かあればこれで連絡を」

机上を滑ってこちらへ寄越したのは装飾の施された赤いブローチのようなマジックアイテム。

それと同じ装飾で色違いになるような青いブローチが私に見せつけるように彼女の懐から取り出された。

「貴女がこの国がどうなろうと構わないように、私も貴女にさほど興味はありません。けれど…」

全てに失望して、全てを諦めて、心を閉ざしてしまうにはまだ若すぎると思いますけどね」

…やさしい、微笑みだった

子供の成長を見守る親のような微笑みだった

よく愚物共が浮かべる打算的でその場しのぎの作り笑いじゃない

吐き気がするほど甘く優しい■

私がとうに諦めてしまったもの

…羨ましい、なんて思っていないわ。

そう、まったく。

.....

内緒話を終えて、ラキユースと法国の訪問者は無事帰路に着いた。別れ際、部屋から出てきたところを偶然通りかかったザナツクお兄様とレエブン侯に目撃されてしまったが、あの様子なら変に怪しむ事も無いでしょう。

そもそも次兄は根性無しですし。

私との接触はリスクが大きい、今後は渡されたマジックアイテムでこつそりとやり取りするのが主な連絡手段になる。

けれど首尾は上々、法国との協力を取りつけたのなら話は早い。

あとはどんな幕引きにするか役者を決めるだけ。

全て頭の中で思い描いていた通りの展開だ。

何も問題はない。

「.....レイラ・ドウレム・ブラッドレイ」

部屋の中で1人、反芻する。

例のアイテムの効果時間ギリギリで最後に彼女が語った自分の本名。

呪い避けだと徹底していたはずなのにどうして最後の最後に私に名前を覚えてくれたのかしら。

短期間でそれほどの信頼を得た、と安易に納得できるほど私達は話してはいないのに。

...ああ、そうか

「貴女も私と同じなのね」

その言動から滲み出す異常なまでの他者への■、例え取り繕おうとも同類の私には分かる。

レイラ・ドウレム・ブラッドレイは怪物だ。

稀代の傑物、あるいは英雄、またあるいは救世主と呼ばれるそれ。

私が壊れんばかりにクライムを■するように、彼女ははちきれんばかりに人類を■している。

他者を出し抜く知恵と愚者を黙らせる力でもって、全力で人類■を執行してる。

私と彼女に相違点があるとすれば、時間と環境。

年齢の差はもちろんとして、閉じ込められた私とそうでなかった彼女、歪んでしまった私と歪まなかった貴女は同じ怪物でもまるで対照的で：

やめましょう、今更こんな下らない事を考えるのは。

過去はもう過ぎたこと、決して羨ましい訳じゃないわ。決して。

もう動揺はない、涙も引つ込んだ、安心して「いつものラナー」を徹底できる。

だからこれからの人類が歩む先を予測してみよう。

普段ならこんな事考える必要なんて全く無かったのだけど状況が変わった。無理やりにも意識を変えなければいけないほど人類最強の護法国家様の与える周囲への影響は大きく、憂慮すべき対象だ。法国の隠し通してきた実力者達を実際に目にした事で視野が少し広くなったのかしら。

大陸の端で亜人と異形に押さえつけられどん詰まりだった人類種は繁栄を迎えるでしょう、早ければ2〜3年後には成果が開始める。

理由は勿論法国の存在、そしてレイラ（レイン）が著書で残している魔法技術だ。

普段魔法詠唱者が使う位階魔法とは異なる、ルーンを初めとした世界に古くから存在する魔法体系の復興、そして改良。

型に嵌められた魔法をただ唱えるだけの形式だったシステムではなく、むしろ型から作る事で魔法の自由度と汎用性を高めた全く新し

い体系。

例えるならクッキー。

今までは決まった生地が決まった形の枠を押し込んで、決まった形状にしか焼けなかったけど、その枠を自分達が自由に變えてクッキーを作る。そんな感じ。

丸しかなかった枠を星型に変えたり、文字型にしてみたり、はたまた生地の味付けを變えるだとか、とにかく自由な発想で魔法を行使できる。

そして位階魔法よりも優れた汎用性。

別文献で得た知識だが位階魔法は「世界への接続」なる鍛錬を行い、選ばれた者のみが行使できる魔法らしい。

故に魔力を有していても魔法詠唱者として大成できる人物はほんのひと握りで、ほとんどの者は最低位である第1位階の魔法習得すら困難なのだ。

厳密に言えば更にその下には0位階の生活魔法があり、そちらはもつと習得のハードルが低いそうだが。

そんな現状を打破する汎用性を新しい魔法は持つ。

魔法はより人々に身近な存在に変わり、生活向上にも大きく貢献するでしょう。

何よりこの魔法は「底が知れない」。

学べば学ぶだけ、深淵の奥深くまで潜ってしまえば、その自由度故に戻って来れなくなりそうな危うさがある。

それこそ、一発で世界の法則そのものを変えてしまいそうな魔法だっけ見つかってしまいそう。

踏み込めば戻って来られない危険性を孕んだ底知れぬ魔法…

『深淵を見つめるとき、深淵もまたこちらを見つめている』だなんてどこかの本で読んだのだけど、その通りね。

ただ、便利になれば良いという訳じゃない。

生まれる諍いや争い、果ては戦争の道具なんかにも起用されるはずだ。野心高い帝国の鮮血皇帝なんかは飛び付きそう…いえ、もう着手

している頃でしょう。彼女は帝国にも変装して赴いたと言っていました。

ああ、だから人類中に触れ回っているのね。

平等に知識を与え、技術を発展させる。

きつと彼女は各国から優秀な魔法詠唱者を集つてこの技術を供与するだろう、そして持ち帰つた知識と技術は各々の国内で独自に発展を遂げる。

育つところまで育つてしまえば、次に生まれるのは強力すぎる戦略級の大量破壊兵器だ。

育つた魔法はそれぞれが互いを牽制し、「やったらやり返される」という意識を産む。報復への恐怖で国家間の争いは少なくなるだろう。

互いが互いの力を警戒し合つて抑止力になる

言うなれば『魔導抑止』

国同士が同じラインに立つことで平等が生まれ、対話が生まれ、仮初だろうと「恒久的な平和」が訪れる。

万が一暴走する国があつたとしても法国にはそれを容易く鎮圧しうるだけの戦力があり、同時に力の弱い他国の支援にも惜しみなく力を注げるでしょう。そうして国家間のバランスを保ち続けるのが彼らの与えられた役目。

ビーストマンに押されていた竜王国への過剰な戦力投下や仲違いしていたはずの聖王国への物資輸送は法国の真の目的である「人類平等」、その裏付けだ。

魔導抑止によつて人類はひとつになる

それに乗遅れた王国は帝国に併呑されるか八本指に飲み込まれるかの瀬戸際で、今回の漆黒聖典派遣が文字通り国存亡の為の『最後の審判』って事だったのかしら。

法国の行うそれはまさに人類平等の体現

魔導による抑止と国のバックアップによつて齎される完璧な人類圏の安定化、人類至上主義たる法国の企む真の安寧。

「ここまで考え、溜息を吐く

「馬鹿馬鹿しい」

そんな事できるわけが無い。

その程度で人類はひとつにはならない。あの女の言葉を借りるなら、それほど世界は単純な作りじゃない。

ちよつとしたボタンのかけ違いで全て台無しになるような危うい博打だ。

「けれど、私を計画から省こうとした理由は何？」

その仮説が現実味を帯びたものだったとして、何故執拗に私に存在を気取らせないように務めたのか。

世間には地位しか持っていない無害なお姫様で通っている私を荒事に関わらせないようにした、と思えば納得出来る。

でも初対面の時点で既に彼女は私がひた隠しにしていた本性や能力、更には演技の裏の裏まで見抜いていた。

まるで最初から知っていたみたい

なのに私を使おうとせず、私の意思に従って、あたかも私が自分から決めたかのように演出し事を進めた。

気に入らない

結局彼女は最初から私を王国から引き剥がすつもりだったわけだ。

私がクライムに抱く感情も、密かに隠していたはずの本性も見抜いたうえで私の好きにさせた。

気に入らない

あれだけ私の心を乱しておいて？
全て彼女の掌の上で踊らされただけ？

「……………ふっ、ふふふっ」

頭　　に　　き　　ま　　し　　た

してやられた、完全にしてやられた。

手玉に取られて、誘導されて、彼女が望む答えを出すことしかでき
なかつた！

あの短い時間で一番聞かれたくないクライム^弱、一番動揺する
精神の異常性^点、全部全部突き付けられて、無様に泣くことしかできな
かつた!!

生まれて初めて卓上戦で完膚なきまでに敗北を味わった!!!

やられっぱなしで終わる訳にはいかない、だって…

悔しいじゃない！

我ながらクライム以外の人間に固執するなんて私らしくないと
思ってはいる、が。

かつてないほどレイラという女に興味が沸いた

仮にあの女の目標が仮説の通りの人類平等を達成する事だとして、
自分とクライム以外に一切興味がない私は将来確実に邪魔になる筈
だ。それを分かっているなお私を生かした。

憐れみ？情が移った？いいえ、実際に私と合間見えてこう思ったの
でしょう。

警戒してたけど、まだ若く自分が相手取るには足りない小女だと
私を子供扱いして！（実際子供である）

悔しい、ええ認めましょう。

私、今とても悔しいわ。

久方ぶりに訪れる人間らしい感情の昂りが胸を熱くする。

覚えていなさいレイラ・ドウレム・ブラッドレイ。

私を甘く見たツケは大きいから。

先ずは王国をさっさと片付けて、貴女の懐に潜り込んであげる。勿

論クライムも一緒にね。

それからじっくりたあつぷり貴女の弱点を学んで、「諦めるにはまだ早い」なんて澄まし顔でほざくその鼻を明かしてやる。

「まだ人としてクライムを■せる可能性」なんかで期待させた貴女には私達を保護する義務がある筈よ。

私は人間に期待しない

他人なんて信用するに値しない

涙なんてとうの昔に枯れきって、残ったのは恵まれた容姿と無駄に高い地位だけ

■を知らないぬげがらの化け物だ

そんな私だと初めから見抜いておきながら、なおも私に手を差し伸べようとする

その思惑が分からない

分からないのは「怖い」から

擦り寄ってあげる

だからまずは彼女の懐に入るところから始めよう、当初の予定はキャンセルで。

より過激に、より丁寧に王国には反省して貰う。

そうしたら…そうしたら…

私にも人間らしい愛が理解できるのかしら

………

なんて決意を新たにしていた所、ノックの音で我に帰る。
2人の見送りをお願いしたクライムが帰ってきたのかしら。
どうぞ、と返事を帰すと入ってきたのは見覚えのある小太りのシル
エットだった。

「やあ、腹違いの妹よ。」

少し時間を貰って良いかい？」

「あら、ザナックお兄様。」

なんだ、次兄か。

クライムの為の声質で返答して損したわ。

いそいそと向かいの席へと座る彼に違和感を覚える。いつもその
体付きに相応しくふてぶてしい態度のはずなのに、何処か挙動が不安
定だ。

なんというか、動きが……

「?…どうかなさいましたかお兄様、体調が優れないのでしたらお話
は後にでも……」

「あ、ああいや！」

大丈夫だ、体調は問題ない…いや、ある意味問題は…ある……か」

妙にかしこまって神秘的な面持ちでごちる次兄を訝しんでいると、ず
いつと顔を寄せて、かつてないほど真剣な顔をしながら蚊の鳴くよう
に小さな声音で問うてきた。

「妹よ、聞きたいことがあるのだが。」

先程お前が話していた学者、レインと言ったか？」

彼女……」

つまさか次兄が彼女に興味を示すとは思っておらず、さっきの醜態
も相まって必死に飛び上がりそうな身体を演技で押さえつける。

バルブロお兄様よりはマシだけど所詮はザナック…とか侮っていたわ。

よりによって彼か。

根掘り葉掘り聞かれて計画が露呈してしまうのは非常によろしくない、誤魔化すのは簡単だけど、『興味を持たれる』事自体が危うい。返答次第では漆黒聖典に処分してもらう必要がある。

これは極秘作戦なのだ、片脚をつっこんでしまった以上信頼を守る為不安要素は極力排除しなければ。

ああ、さようならお兄様。

深入りしすぎた貴方が悪いのです、せめて丁重に埋葬致しますので安らかにお眠り下さいな。

「その…恋人などはいらっしゃるのかな？」

「……………はあ？」

何言ってるんだこいつ（真顔）



グッドコミュニケーション!!

グッドコミュニケーションですわ!!

ひえくくしんどかったですわラー、あの死んだ魚みたいな目に視線合わせながら話すの辛すぎませんか？SAN値がゴリゴリ削られる

のですが！

途中からかなりテンパってしまいましたでしたがなんとか目を逸らすことなくお話できましたし、これにて任務完了でしょう。

『いい？レイラちゃん。』

対話の基本は目と目を合わせてお話する事、約束ね。

どんなに相手が嫌な奴だろうと絶対に逸らしちゃ駄目よ、「私はあなたの言葉をちゃんと聞いてます」「あなたと仲良くしたいです」っていう誠意の表れなんだから。

相手と仲良くなるには目を見て会話して、隠してる真意を探りなさい。「私は敵じゃないですよ」アピールを怠らないようにね！

うまーく使えば常連客も増えて指名もいっぱい貰えるしたくさん貢がれ：こつちの世界じゃ関係ないか、ごめん今のナシ！』

ありがとうございますお母様！

お母様のお言葉を胸にレイラは今日も頑張っております！

前世は接客業だったんですね！

ま、原作知識があろうとなかろうとやべー女はやべー、私今回それを実感致しました。悪い、やっぱつれえや。

え？！将来デミウルゴスとかアルベドと卓上で対面するかもしれない？やっだもおーお家に引きこもっていいですか？！しがな一般貴族令嬢（極秘部隊所属）は自領に引きこもって亜人退治してちやダメ？ダメ？そう…

「ヤツ…イヤツ…ヤダー…」

「先輩?!?」

おっと、思わず某名探偵電気ネズミみたいなしわくちや顔になりながらハ〇ワレ構文を披露してしまいました。まあ此処には私と《占星千里》ちゃんしか居ませんし問題ナツシングですわよね。

「失礼、取り乱しました。

それでは《占星千里》ちゃん、其方の報告をお願いしますね」

「り、了解…」

これが密偵が今日までに特定した麻薬の栽培場の所在と取引場所の位置。

それにさつき《獄界絶凍》から貰った予測地図と照らし合わせたら、信じられないけど殆ど照合が一致したわ。

私達が発見できていない所は後日確かめるしかないけど、おそらくドンピシャでしょうね」

「それからこっちの資料：関与の怪しい貴族達の裏取りは《天上天下》が進めてる、人海戦術で明日の昼には調査が完了する予定」

「あらそう、沢山動員して正解でしたわね。」

人類最高峰の頭脳が弾き出した資料の感想は如何でした？」

「気持ち悪いくらい正確な予測よ、実はラナー第三王女が八本指の黒幕だつて言われても違和感ない」

「もしそうだったら我々もつと苦戦させられていたでしょうね」

冷や汗を掻く《占星千里》ちゃん。

ラナー姫。人格はどうあれ、彼女は紛うことなき天才です。

いえ、天才という言葉すら陳腐ですわ。彼女はその気になれば今後百年：いえ千年先の未来すら見通せる英智を持つ女。別ベクトルで原作最強格の1人です。

敵に回すとかとんでもない！かといって危険視し過ぎて始末してしまうのも後味悪いですし：原作開始前で若干幼いからか本編ほどの狂気は感じ取れませんでした、案の定クライム狂いでした。

アレで八本指級の犯罪組織のボスだったら？誰も勝てんわ！

私やツアーのような『プレイヤー』レベルの戦略兵器級強者ならまだしも、どんぐりの背比べ状態の強さしかない現人類の中で策謀こねくり回して数の暴力で圧殺されたら王国なんて一晩で八本指の手に堕ちてますわよこんなもん。

潜り込む隙とか絶対作ってくれませんわ。あつたとしてもそれは罨、嵌ったら最後絡め取られてアウト○イジも真っ青な泥沼の地獄が待っている事でしょう。彼女が味方で良かった！（迫真）

きっと彼女は今頃自分の目的が達成できてほくそ笑んでいることでしょう、自分の身とペットの安全も確保できたワケですし。

目的が一直線に決まっていたぶん話の着地点^{オチ}は着けやすかったです。原作知識サマサマですわね！

さて、媚びも売れたワケなのでいよいよ本格的に八本指を潰すため段取りを済ませてしましましょう。

「必要な書類と衣装は？」

「今日届いた、確認済み。王城へのアポイントメントも取っておいたよ。」

……はあ、ホントに私がやらなきゃダメ？」

「私は既に『レイン』を演じておりますし、他の隊員は裏作業で手一杯ですもの。」

貴女にしかできない役回りですわ。

『予言』も出ていないのでしょうか？ だったら未来がどうなるかなんて誰にも分かりません。」

最良は自らの手で掴み取るのです」

「確かにそんなホイホイ来るものじゃないけど……
了解、やれるだけやってみる」

「それでこそ漆黒聖典の若きエースです。」

荒事は私と《天上天下》に任せておきなさい」

「エースは止めて……恥ずかしいから……」

「え、でも非戦闘員なのに番外ちゃんの分^せを前にして漏らすだけで済んだっつー「わああああああ!!? 誰から聞いたのそれえ！」

番外ちゃん本人から聞きましたか？

凄い事じゃないですか、彼女の殺気とか浴びたら普通の人間は泡吹いて気絶するか身体中から色んな体液漏らしながら全力土下座で赦しを乞うのが定番なのに、お小水ちびっただけで意識も飛ばさなかったなんて。番外ちゃん感心してましわよ?」

「あれは！予言でそうなるって予め知ってたから本番でギリギリ我慢できた（できてない）のであって、予知夢の時は大変だったんだから

23 破滅フラグしかない国がゴタゴタしてしまつてる…

自分は“特別”な人間だ

けれど“特別”にも種類があつて、強かったり弱かったり、役に立ったり立たなかつたりする。

この世界に特別なんて星の数ほど存在するんだ。

私が生まれついて得た“特別”は『眼』だった。

文字通り千里先まで見通す遠視能力、遠方の帝国に名高い大魔道士フルーダには劣るけど、人間の気配や気配オーラを視覚可能、そして極めつけは『予知夢』の能力。

生まれた村では異能力タレントそのものが特別で、村唯一の保持者だった私はそれはもう両親や周りの人達からチャホヤされながら育ててもらった。

私は“特別”で、なんでもできるんだって息巻いてた。

そうして意気揚々と法国で一番の魔法学院に入学し、知ることになる。

先生は私が見た事のないような魔法をいくつも扱えた

先輩達の決闘を間近で見、迫力に圧倒された

同級生は私なんかよりずっと賢くて、ずっと努力してた

私が気付いていないだけで、“特別”なんてそこかしこに転がってる。

私の“特別”なんて此処では沢山あるうちの一つに過ぎなかった。

この眼だけを自分のアイデンティティにするには小さ過ぎて、世界の広さを思い知った。

その事実打ちのめされて、謙虚に生きていこうなんて思ったのはいつ頃からだろう。

異能力の事は忘れて、無難に友達作って、無難に勉強して、無難に卒業する。

恋愛結婚なんてロマンチックな事は望まないからそれらしい旦那さんを見繕ってもらって、村に戻ったら大人しく余生を過ごすんだ。

なんて思っていたのよね、1年生の半ば辺りまでは

『ごっつきげん麗しゅう中等院生の皆様!!!』

教室内がザワつく。

大扉を蹴りあける勢いで現れたのは、本来出くわすはずのない高等院の先輩たちだ。

『あの、昼休憩だからといって流石にいきなり中等院に押し掛けるのは些か礼儀に欠けるのでは…?』

困ったように笑うのは飾り気のない清楚な振る舞いと溢れんばかりの母性で男女問わず大人気、学内聖歌部隊の歌姫にして『聖母』と名高い愛され生徒会長。

ヴィーナ・フロデューテ・ロモワ

『……今のレイラちゃんに何言っても無駄よ。

諦めな、かいちよ』

雑な三つ編みのボサボサ髪に無愛想な面した女生徒は、入学して以来ずっと学年模試一位を独占して教員からも恐れられる学院きつての『神童』、なのに上級生から目の敵にされては返り討ちを繰り返す彼女が通った後には喧嘩の魔法跡が絶えないと噂される問題児。

セレスティア・デメチ・エウレシス

そして…

『おーっほっほっほっほ!!』

レイラ・ドウレム・ブラッドレイ

この国立魔法学院で歴代トップクラスのぶっちぎりでヤバい女。実力もさることながら、その奇抜な行動は教員ですら制御不能。

「目が合ったと思ったら既に背後に回り込まれてる」

「高笑いで浮遊^{レイス}霊が消滅した」

「竜種を素手で殴り殺せる」

「実際巫人は殴り殺せた」

嘘か真か数々の噂話は学年を超えて伝わっている。入学当初、周りの生徒たちもその先輩の話題で持ち切りだった。

入学式典で教頭のカツラを剥ぎ取り代表挨拶としたこと、他にもセレスティア先輩とタッグを組んで上級生に決闘をふっかけては彼らのプライドを片っ端から叩き割り、怪しげな実験に学院長を巻き込んで髭が一万二千色に光り輝くようにしたり、魔法学院七不思議の1つであり六大神様がこの学院の何処かに隠したとされる埋蔵金、通称“ライノオ・ゴーン”を見事発見し法国史に遺る偉業を成し遂げたとも。

三者三様にこの学院では有名人で、夜空に輝く星みみたいな人達だ。中等院のいち学生である私なんて廊下ですれ違うくらいの頻度でしか顔を見ない関係だと思ってた。

いったいどうしてこんなところに……

『ルリ・ヘティス・キスタインさんはご在席かしら?』

なんでさ

滅多にない上級生の訪問に静まり返る中、クラス全員の視線が一気に私に向けられた。ヤメテヨ…

目が合って私がぎよつとしてる間にクラスメイトが道を開け、先輩

達がズカズカとやってくる。

うわ〜瞳キレイ〜スタイル良過ぎない？本当に学生？ていうか私と同じ人類か？（現実逃避）

『ごきげんようキスタインさん、ちよつと面ア貸して頂けます？』

人当たりのいい笑顔で歴戦の不良みたいな台詞を吐きながら迫ってくるのはやめて下さい、温度差で死んでしまいます。

『レイラ、取り敢えず事情を説明しない？』

何も分からないままキスタインさんも困惑してますよ?』

『おつと失礼、順番が逆でしたわね！』

ルリ・ヘテイス・キスタインさん、私達と……』

おバンド致しましょう!!

『『『なんて?????????』』』

クラス全員の気持ちがひとつになった瞬間だった

……なんで??

〜先輩事情説明中〜

話を一通り聞いた感じ、先輩達は毎年行われる学院大祭で行われる公聴演奏会に挑むため一緒に楽器を演奏するメンバーを募集しているらしい。

法国魔法学院は国創りの神々である六大神様のうち四柱が考案し、

創り出したとされる人類最初にして最古の魔法教育施設であり、国の最重要指定文化財だ。

都市から離れ、自然豊かな立地と広大に広がる古城をイメージした巨大な校舎は六大神様直々に設えた代物らしく、『ある神は魔法で天を拓き、ある神は水と大地を興し、他の四柱は土と瓦礫の山からこの城を作り上げた』と文献に記されている。

『やっぱ魔法学校なら古城だろ！』

『隠し部屋とか山ほど設置しましょ！』

『9と4分の3番線を作るんだよオン!?』

『近くの森にユニコーンとヒュポグリフ放そうぜ！』

『マイ〇ラ1000時間の実力見せてやんよ！』

『うるせえヒキニート共、リアル土建屋の俺が通るぞ！』

先ずは凶面引いてからだ！』

当時の神々のお言葉が遺された貴重な資料より抜粋したものだ。

六大神様は市井に親しくとても寛大な神であったそうで、教育機関の設立にも喜んで力を貸して下さった。それが今日のフランスの基礎を形作っている。

フランスで六大神様が永く深く信仰されるのは、こういった市民に寄り添ったエピソードが多く残っているからだ。

そんなこんなで完成したこのフランス魔術学院には年に一度、作りたもうた神々に感謝を捧げるべく全学年を挙げて大祭が行われる。

期間は一週間、校内を開放し教員や生徒以外の外部の人間を招いて行われる大規模な儀式、と言っても形式ばったものではなくて生徒達がクラスごとに創意工夫を凝らした露店を出店して売上金を稼ぎ、その一部を神へ献上する、というものだ。

他にも吟遊詩人による演目や神々がもたらした『ガツキ』という音が鳴る道具を用いて語られる趣向を凝らした芸なんかもある。

その発表会に先輩達は出演したいらしい。

『でもなんで急に…』

『ナツちゃん、今年が最後の大会なんですよね。』

今まで堅つ苦しい聖歌しか歌ったことないそうですから、最後くらいはつちやけた演目で絶唱したいでしょう?』

『だから公聴演奏会を乗っ取って、かいちよに学生時代最後の思い出作りをさせてあげたいってワケ。』

ま、本音は形式ばってつまなくなつた演奏会をぶつ壊してやろうと思つてるんだけど』

『ちよつ、セレス!? 貴女そんなこと考えてたんですか??』

いやに乗り気だと思つていたら…』

『でもなんでわざわざ中等院の私の所へ?』

『貴女入学申請書の得意分野の欄に “ギイタ” って書いてたじゃないですか』

『なんで先輩達が私の入学申請書見てんですか!?!』

『そこはホラ、会長権限でちよちよいつと…』

『ロモワ会長はともかくお2人は役職持ちでもなんでも無い一般生徒のハズですよねえ!?!』

個人情報漏洩じゃない!

確かにギイタは弾けるけど、たまたま村に置いてあつたのをおじいちゃんに教わりながらちよちよ弾いていただけだし…

他にも楽器が弾ける生徒はいるだろう。

わざわざ私じゃなくてもいいハズだ。

『別に私じゃなくても…』

『他の連中は楽器はできてもお粗末な信仰心のせいで既存の曲しか弾きたがらない。』

私達がやろうとしてるのは作曲から演奏まで全部オリジナル、それに着いてきてくれる子が欲しいの』

『も、もちろん貴女に信仰心が無いと言つてる訳じゃないのよ?』

他の皆さんはすこし頭が堅くって、どうせやるならマンネリになつた公聴演奏会にも新しい風が必要かなーって思つて…』

『そこで!』

1年生のキスタインさんなら適任かと考えた次第ですよ!

どうかしら、私達と一緒に学院の頂点テッペン目指しませんこと?』

なんでいちいち不良みたいな言い回しなんだ…

そう言つて自信満々に手を差し伸べるブラッドレイ先輩には一切の迷いも下心ない、気配オーラで何となくわかる。

…眩しいなあ

きっと先輩達は特別の中でも更に“特別”なんだ

そんな彼女達に私が混ざるなんて烏滸がましい

夜空に輝く一番星に手を伸ばしたところで届きはしないのに
けど

それでも

『…わかりました、やります』

私は、星とくべつに手を伸ばすのを諦めきれないらしい

これが私と先輩達との初めての出会いで、平凡だった学院生活を波乱の毎日に変えるキツカケになった出来事。

この日を境に私は色んな非日常に巻き込まれる事になる、それは漆黒聖典に選抜された今でも続いていて…

.....

「使者の方々、はるばる法国よりよくぞ参られた」

此処は王城リ・エステイーズ、そして目の前の玉座に座っている老人はこの国の国王であるランポツサ三世。

現在私は外套に身を包み、法国の使者として王城へと招かれて
いる。

これも《獄界絶凍》の企みのひとつ、先の教会焼失に対する法国側
の補償と意見交換を行う為にやって来た使者という設定で私はここ
にいる。

「歓待に感謝致します国王陛下。」

陛下におかれましてはご家族共々にご爽健そうでなによりにござ
います」

対面する国王の隣には王国最強の剣ガゼフ・ストロノーフが控え、
第一王子、第二王子、第三王女が椅子に座り並ぶ。

そして私の周囲に並んでいるのは六大貴族を初めとする国内の貴
族たち、そしてその周りを衛兵が囲っていた。当然ながら厳戒態勢
だ。

「顔を上げてくだされ。」

それにしても随分と若い司祭殿ですな」

「私はつい最近司祭に就任したての新人でして、経験を積ませていた
だく事も兼ねて今回の訪問に同行する運びとなりました」

「ほお…歳も儂の娘と殆ど変わらないだろうに、立派なものよ」

「恐縮でございます、国王陛下」

第三王女と一瞬目があって、此方に微笑みかけてきた。

裏では先輩と一緒にあって国を潰す勢いで八本指殲滅を企んでい
るってのに、彼女もとんだ演者よね。

「わざわざ新人を連れて来るとは…法国は王国を舐めているのか？」

ボソボソと貴族たちからそんな声が聞こえる。

覚悟はしてたけどこの国の貴族たちは本当に酷いもんだ、文句以前

に御前会議で私語そのものが御法度でしように、空気も読めない無能なんだろうか。

ま、今に始まった話じゃないけど。

そんな声が聞こえたのか、ランポッサ王はわざとらしく大きな咳払いをひとつ吐き続けた。

「さて、使者殿。

事前の書状によれば此度の訪問の目的は先日焼け落ちてしまった教会の新設についてだったか。

しかしかの施設は余が国王として就任するより昔に建てられたものゆえ知識不足でな、詳しい経緯を話してはくれまいか」

「承知致しました、国王陛下。

かの教会が設立されたのは約200年前、当時国王であらせられた初代ランポッサ王とスレイン法国との友好の証として贈られたものになります」

当時はまだ貴族達の汚染もなく、肥沃な土地を活かし優秀な人材を生み出す国として王国が期待されていたため、法国の支援策のひとつとして礼拝堂とそこに所属する神官団の派遣が認められていた。

《回復^{ヒール}》の料金も他所と比べて破格だったらしい。

それが代替わりするにつれて国とともに腐っていった現在の惨状に至り、先日の火事（自作自演の焼き討ちだけ）に繋がるのだけだね。

「建造されて200年余り、法国でも類を見ない歴史ある建造物でした。

それが放火によって焼け落ちてしまうとは…事実を知った神官長達もたいそう心を痛めております」

「しかも件の下手人はかの犯罪組織『八本指』だそうではないですか。

悲しみ以上に心無い蛮行に神官長の皆様は憤っておられました」

「むう……」

一応犯罪組織への危機感はあるんだろう、唸るランポツサ王を見る限りはそう思った。
なので、と私は続ける。

「言伝ことづてを預かっております」

私が先輩から託されたこの役は別に大したものじゃない。
けど気配を他人より察知しやすい私にしかできない“特別”な仕事、王国浄化の為の最後の裏取り。

できるだけ甘い汁で悪人を釣り上げること

「せめて形だけでも元通りにしたい、というのが神官長の総意です。
工費は我々が負いますので、どうかもう一度礼拝堂を建て直す許可を頂けないでしょうか？
そしてスレイン法国も八本指撲滅に微力ながら支援させて頂きたい。」

議場がザワつく、「内政干渉だ」とかの意見も聞こえるが国王の一喝で黙らせた。

勝手な発言に隠す気のない野次、本当に無能なのね、この国の貴族って…

「失礼した、使者殿。」

八本指には我々も手を焼いている、協力して下さいならばこれほど心強いことは無い。

して、協力とはどのような形で？」

「部隊投入などは先程どなたかが仰っていた通り内政干渉に当たりますので、鎧や武器などの物資支援が主になりますね。」

それから負傷者を治療する神官団も教会再建の暁には数を増やし

て配備させていただきませう」

「それは王国としても有難い事だが…」

因みに工費はいくらかかりそうかね？」

「あの大きさの礼拝堂で元通りに再建となると…」

金貨100万枚ほどでしょうか、ステンドグラスや調度品の発注には専門の業者を雇い入れる必要がありますので」

まあ、大嘘だ。

あの礼拝堂に金貨100万枚は流石にやり過ぎ、王国の業者へ委託する事を加味しても余り金が山ほど残る。

わざわざ白金貨に換算せず提示したのはそっちの方がインパクトがあるから。

そう、使い道の無い用途不明金が大量に

それこそ、少しばかり着用しても大差ない程の

そしてこの事実は建築の指揮や総括を行っていた者なら直ぐに辿り着ける

八本指のアガリ、つまるところ資金源は多岐に渡る。

麻薬の栽培や販売は氷山の一角に過ぎず、奴隷売買、違法娼館の運営、売春の斡旋、ブラックマーケットを利用した関税を取られない物資の密売など。

その中でも特に規模が大きく、より人とカネが動く事業が土木建築だ。

健全な土木業者に様々な理由を付けて法外な仲介料をせしめる悪徳商法。

「既にこちらで財源を用意しております、国王陛下の許可さえ頂ければ明日にでも王国各地の土木業者へ連絡を取り着け後着工可能です」
「なんと…既にそれほどの準備を進めているとは…」

しかし、我々は見返りに何を出せば良い？」

「正直な話、神官長の皆様は現在のリ・エステイーズ王国に良い感情を持っておりません。

麻薬を国外へ流出させる悪行を国が容認している、など私も有り得

るなどとは思っておりませんが、彼等は言外に『自らの潔白を証明せよ』と仰っているのでしょうか」

麻薬による汚染拡大は最早王国だけに留まった話ではなくなってしまう。

とめどない被害は犯罪組織の行いだけでなく、王国そのものがその悪行を容認、または援助しているのではないか、そう神官長達は零す。

麻薬が流通しているという情報を水明聖典が得てからというもの、法国は逐一王国内の最新情報を仕入れているけれど、待てど暮らせど一向に改善の兆しはみえない。

それどころか第一王子にまで癒着の関与が疑われている有様だ。

先輩の判断で第一王子の関与はまだ「疑いがある」状態だと本国へ伝えてはいるけれど、本当はズブズブの癒着地獄に浸かりきつてるんだよね。

なんかもう落胆とか通り越して笑えてくるわこの国。ああ、先輩の目がみるみる死んでく！

…であるならば、このタイミングで王国は自分達の身の潔白をハッキリさせておかなきゃならない。

「スレイン法国は血縁関係による国同士の強い結びつきを望んでおります。

具体的には…その…

ラナー第三王女と法国貴族の婚姻を結び、血の繋がりを強化したい。との事です。」

…一部の貴族達の雰囲気が変わった。

六大貴族、及び各小領地の貴族達のプロフィールについては頭に叩き込んである。

性格、能力、思考、体調、家族構成、影響力、癖、趣味の傾向、家族との距離感、部下の扱い、王への態度、忠誠心、反逆心 e t c …

水明の皆さんに調べてもらった情報は1人1人全てプロフィール

して頭に叩き込んだ。

そうでもしないと先輩達には追いつけない、力で劣る私は頭を使うしかない。

幸い私にはこの眼がある。

僅かな呼吸の乱れ、挙動から相手の感情のゆらぎを察知するのはお手のもの。

ブルムラシユー侯とリットン伯は事前調査で完全に「クロ」だ。

前者は拝金主義の裏切り者、帝国に情報を流しながら犯罪組織ともつるんで金を巻き上げてる大戦犯。既にこつちでコネクションも全部把握してるし肅清されるのは確定。監視対象から外す。

後者のリットン伯、自領に多数の農村を偽った麻薬栽培施設を設立してる。能力が低く承認欲求ばかりが高い、自分の価値を上げようと民に無理な重税を繰り返す。小さなプライドに反比例するように密売所は多数。そんなもので貴方の価値が決まるわけないのね。

ウロヴァーナ辺境伯、「クロ」。

僅かに脈が上がって呼吸も速くなってる。

領内の密造施設は6箇所と小規模、動揺の仕方からして本人が直接関与しないでも息子のうちの誰かが八本指と癒着している可能性アリ、それを知りながらも見て見ぬふりしてるかなし崩しに自分も加担する嵌めになったんだらう。王からの信頼や人間的な魅力は貴族の中で一番なのに、巻き込まれて可哀想なおじいちゃんね。

因みに調査によって彼の息子の中で最も八本指に近いのは三男と四男だと判明済み。そこから芋づる式に関わった人間を釣り上げる予定。

ペスペア侯、「シロ」。

六大貴族の中では一番の若輩、正直者なのか八本指の情報を得てから今までずっと領地の隅々まで警戒し続け、密売施設を作らせてない。

別の形で犯罪組織への関与が疑われたけど今のところそれらしい証拠は無し、周囲の家族、親族、関係者も調べあげたところまさかの全員真っ白、王国では数少ない根っからの真面目な一族なのよね。

だから彼の脈拍が上がっているのは周囲のひりついた雰囲気の影響され若輩者故の経験値の無さから来る不安や焦燥の表れ。問題なし。

レエブン侯、〃シロ〃

六大貴族の中でも異質な男、貴族派閥と王族派閥を飛び回るコウモリ。領内の密造施設の数はゼロ、家族親族と冒険者上がりの護衛、並び周囲の関係者にも犯罪組織に関与した形跡なし。清廉潔白。

寧ろ彼の尽力のおかげで今まで六大貴族は瓦解を免れている、それに気付いている者は国内に僅かしかない。

そもそも気付いてたら「コウモリ」なんて揶揄はしないわ。

ポーカーフェイスを崩していないけどきつと今も法国という異物をどう処理しようか必死に頭を働かせているんでしよう。

そして最後にボウロロープ侯。

六大貴族中最も広大な領地を持つ貴族派閥筆頭、元軍属の成り上がり貴族。

先の帝国との戦争で戦果を挙げ続け貴族の地位にまでの上上がった勇将であり、根っからの軍人氣質故に少々思考が凝り固まっている歩兵戦力至上主義者。

王国で魔法詠唱者がぞんざいに扱われるのもこの男を筆頭に軍関係者が魔法を軽視しているから。新しい技術を受け入れられない堅物。

娘をバルブロ第一王子に嫁がせて地位を確固たるものにした。

この男が第一王子と八本指を接触させて、王族の顔に汚職で泥を塗った張本人。

調べてみたら出るわ出るわ密造施設と密売所の山、六大貴族の中で最も八本指と関わりが深い人物は彼だと断言できる。

黒も黒、真つ黒の犯罪者よ。

他の小貴族も相応に動揺しているようだけど、一番呼吸が乱れてるのは彼。さあ、どうする？

……冷静に考えて上位貴族の七割が八本指の駒って、この国終わっ

てない？今に始まった話じゃないけどさ。

「ラナーを法国へ嫁がせよ、と申すか…」

低く唸るようにそう呟くランポツサ王。

当然だろう、彼がラナー姫を溺愛しているのは周知の事実だ。それを政略の道具にするなど納得出来るはずがないし。王国と法国の力関係上、これは政略結婚というより人身御供に近い。

でも今は状況が状況だ。八本指に国を食い荒らされ他国が口を出してくるほど深刻な状態に陥ったこの国の現状を理解している彼ならば、王として何が最善かなんて分かりきっている。そして何よりも

…

「陛下、この申し出受けない手はありません！」

「さようですぞ、法国の支援を受けられるのならば決断すべきでは？」

貴族達は乗り気になる。

口々に騒ぎ出す貴族達。

真面目な貴族はラナー1人の犠牲によって法国という巨大なバツクアップを受ける事ができて安心するし、そうでない貴族も目の上のたんこぶだった彼女が消えて国外に行ってくれるならそれに越したことはない。

そして目の前には建築費用とは名ばかりの用途不明金貨100万枚という大金が転がっている。

邪魔者が消えて餌も貰える、そんな美味しい話を前にして欲深い彼らが黙っているとても？

「急な申し出ゆえ、陛下におかれましては慎重に慎重を重ねた議論が必要かと思えます。

2日後再び王城へ赴きますので、その時に返答をお聞かせ下さい。
滞在期間中、我々は『黄金の輝き亭』を宿にしておりますので要件

があればそちらへ御連絡を」

「……………承った、厚意に感謝する」

「良い返事を期待しております」

貴族のヤジも耳に入らないほど考え込むランポツサ王に別れの挨拶を交し、お付きの司祭達と玉座の間を後にする。

去り際、間の抜けた表情をする兄ふたりの横で佇むラーナー姫と一瞬だけ目が合って、表面上悲しそうな顔をした彼女は満足したように僅かばかり頷いた。

計画通り、と



謁見前日、漆黒聖典潜伏拠点

『第三王女を法国へ嫁がせる…?』

『ええ、それが現状ラーナー姫を最も安全に王国から脱出させる手段でしょう。』

国と国の取り決めで連れ出してしまえば八本指も手は出せないはず。むしろ有難がられるのでは? 今までも散々煙たがられていたようですよ。』

『でも姫の身柄と引き換えに法国の支援を受ける契約なんですよ?』

今までずっと隠してた私たちの存在を仄めかして大丈夫なの?』

『大丈夫じゃないです』

『ええ…………』

『だから教会の再建築を本国に打診したんですよ。』

レイモン様に打診して、再建予算はなんと金貨100万枚ですわ☆

『高つつつか!!御殿でも建てる気なの!?!』

『バックアップは任せろ』って仰ってましたからね、必要経費ですよ必要経費』

(水明の長に引き続き…おいたわしやレイモン殿)

『まあ金額は置いといて。』

多くの人と物とカネが動く大型事業、それを王国に放り投げたら彼等がどうすると思います?』

『着服しようとするね、間違いなく』

『そう。』

金貨100万枚という餌で彼らを釣り上げて、更に厄介だったラナーが他国へ行くかもしれないという情報を与えます。

貴族から情報を抜いている八本指幹部たちはどう思うでしょう?』

『…動揺は広がるね。』

今後の対応や取り分の話をする為に集まるのかも』

『その通りですわExcitely!!!』

ところで王都地下に広がる広大な地下通路の存在はご存じかしら?』

先代ランポッサ王が帝国の侵略を恐れ作らせた緊急用の脱出路。万が一の時のために籠城戦まで考慮されたうえで蟻の巣の様に複雑で入り組んだ作りをした、王都中に繋がる迷路です。

使われないまま100年近く経った今では王族すら話にも出さない忘れられた存在でしたが、その何処かで八本指は会合を行うのでしょうか、隠れ潜むのにびったりですから。

ラナー姫から預かったこれ、渡しておきますね』

『この地図…王都近郊の地下通路の見取り図と開通履歴じゃない!』

国王の調印がしてるって事はこれ、原本…?』

……あのお姫様、もしかしてここまで先読みして先輩にこれを?』

『でしようねえ。ホント、賢い娘』

『ホントどこまで優秀なのあの人…』

了解、会議ができそうな広間の特定と地上出口の包囲は任せて。

聞いているわね《天上天下》』

『無論、半日で完了させる。』

水明は姫の護衛以外全て動員するが構わないな?』

『ええ、お好きになさって。』

…ああ、後で護衛役の水明の方々と話をさせて貰えます?一言伝えなれないといけない事ができましたので。』

『待機させておく』

『よろしい、明日から王都は騒がしくなりますよ。』

私の予想だと約束を取り付けてから王国正規軍が動き出すまで2〜3日ほど猶予があるはず、その間に任務を完遂し証拠を全て消しなさい。

「犯罪組織は善なる国王の手によって完膚無きまでに叩き潰され、もう麻薬が市井に蔓延ることはない」、その結果のみを民の耳に届け安寧を与えるために』

その為に我々は神の使徒より遣わされたのだから



王都王城内、玉座の間

「王よ、どうかご決断を!」

「この期を逃せば王国は二度と立ち行かなくなります!」

若い貴族たちからそのような声が飛ぶ。

フランスの使者は既に帰路につき、与えられた猶予は2日間。その間にランポツサ王は大きな決断をせねばならなかった。

「父上、これは国の有事なのですぞ。

ランナー1人を犠牲にすればフランスの支持が得られます、安いものだ」

鼻を鳴らしそう嘯くのはランポツサの子であり長男、バルブロ第一王子であった。

雄弁に語る彼には思惑がある。

前述の通り八本指と彼とはズブズブの癒着状態であり、単刀直入に言つて彼が国王に就任した暁には晴れてリ・エステイーゼ王国は八本指のものとなる。

義父にあたるボウロロー侯と結託し王位を手に入れる為ならばどんな手段も講じる彼にとって、賢く美しく、且つ民から人気のある妹がすこぶる邪魔だった。

元々ランナーは継承権を放棄し継承争いにも我関せずの姿勢をとっているものの、その求心力をバルブロは危惧している。

そんな彼にとって今回の縁談は渡りに船であり、余計な事をする前に妹をフランスへ追いやつてしまいたい。そうすればあとは自分の手腕のもと、フランスをバックに帝国へ向けて圧力を掛けられる。

この男はフランスが今の状態の王国のまま黙って従うと本気で考えていた。

それよりも、頭の中にはフランスが用意した100万枚の金貨しかなかった。

バルブロだけではない、この場の六大貴族のうち殆どが降つて湧いた100万枚の金貨をどうやって懐に収めようか腹の中で皮算用を決め込んでいる。

歴史あるだか何だか知らないが高々教会1つで金貨100万枚なんて絶対に余る金額だ、一度請け負つてしまえばあとは横領し放題。

どうやって王を言いくるめて工事を自領の管轄にしようか、それは

かり頭の中で考えていた。

が、誰一人としてそれを顔に出さないあたり、性根の悪sゲフンゲフン：腹芸の上手さが伺える。

口々にまくし立てる貴族達

そんな中、未だ黙して王の隣に仕える男。

名をガゼフ・ストロノーフ。

先の御前試合にてその頂点に立ち、見事戦士長の地位を手に入れた王家の懐刀であった。

ガゼフには政治が分からぬ、ガゼフはしがらない平民の出であった。

毎日愚直に剣を振り続け、ただ王の刃となるべく研ぎ澄まされた彼にとつて陰謀渦巻く政闘の渦中は些か居心地が悪い。しかし王の護衛は戦士長の義務であり、退出する訳にもいかない。

だからせめて自分は邪魔をせぬよう置物に徹していよう、そんな心づもりでこの場に立っていた。

しかし…

(なぜ、誰も姫様のお心を問おうとはしないのか。

彼女とて年頃の娘、それを政略結婚など…

うら若き乙女の人生をまるで道具のように扱っている事に誰も疑問を覚えないのか?)

悲しいかな、この場で最も人間らしい意見を胸中に秘めていたのは彼だけだった。

(姫様が王位継承権のない娘だとしてもこれはあまりにも惨い仕打ちではないのか?)

いや、この場においては俺のような思考の者こそが異質。故に口を挟むべきではない。

俺はただ王の剣としてこの場に居るのみ)

ちらり、と俯く件の第三者を横に見る。

まだ歳若い御身ながらこうして政闘の場へと赴き、老獪な貴族達と向き合っている。本人の意思とは関係なく自身の未来を決められようとしているのに。
強い御方だ。

(そして、クライム)

彼女の隣で心配そうに見つめる純白の鎧騎士クライム。

ラナーは彼の事をいたく気に入っており、滅多に言わないワガママを言い路上の捨て子だったクライムを王城まで引つ張ってきた。そして周囲にアピールするかの如く特注の鎧を与え、側仕えとして仕えさせている。

彼女がクライムにどんな感情を抱いているかなど、馬鹿でも分かる。

それに応えるため、クライムは己を鍛えていた。何度かガゼフが指導をした事だつてある。

(尚更に辛かろう、何もしてやれない自分が不甲斐ない)

届かぬ想い、迫る政略結婚、いつそ吟遊詩人の詩にでも出てきそうな程の悲恋である。

この世には剣の腕だけでは覆せぬ理が存在する、それを彼は思い知り誰にも気づかれぬよう拳を握りしめた。

ガゼフは清々しいまでに善人であった。

と、ガゼフの胸中を語りながらも貴族と王の茶番は止まらない。

王としての自分と親としての自分の狭間で揺れ動く王、それに便乗し利益を取り合う心無い貴族、最早さつさと妹を追い出したいだけの第一王子。

事態は混沌を極めつつある。

そんななか、声を上げた男がいた。

「あー…父上、兄上も。」

取り敢えずはラナーの意見を聞いてはみないか？」

ザナツク・ヴァルレオン・イガナ・ライル・ヴァイセルフ。

王家ヴァイセルフの次男にして王位継承順位第二位の男、普段は不遜な態度で兄であるバルブロを刺激しないよう行動する彼が何の気まぐれか、どうして今になって声を上げたのか。

「聞く必要などないだろう。」

継承権のない王の子供というものはこういう時の為にこそ使つてやるべきだ、国同士の契りを結ぶ為にな！」

「……………」

なおも沈黙を貫くラナー。

「だが当人の考えも聞いてやらないとあんまりではないか兄上、ラナーはその…近衛との事もある」

「ハッ！何を馬鹿な、そもそも平民と王族が釣り合うはずがない！

城に居させてやつてるだけ有難いと思え」

嘲るように笑うバルブロ、悔しいがクライムは何も言い返せない。格差意識の激しいこの国では当たり前前の事だった。

耳を貸さないバルブロにザナツクは小さくため息を吐き、今度はラナーへ向き直る。

「ラナー、お前はどうかんだ。」

国のためと聞こえはいいが、他国の見知らぬ貴族と婚姻を結ばされるなど。

思うところの1つでもあるだろう？今のうちに言っておいた方がいい」

「わたし…は…」

クライムと一緒に居たいです…

でもっ…!」

かぶりをふって顔を上げたラナーは瞳に涙をいっぱい浮かべ、言う。

「私にしか出来ないこと、なのですよね？」

私が法国へ嫁げば、犯罪組織をやつつけるために役に立てるのですね？」

「それは…そうだが…」

「八本指には皆が苦しめられています。」

お父様のような求心力も、バルブロお兄様のような腕力も、ザナツクお兄様のような凶太さも持ち合わせない非力な私でも出来ることがあるのなら…それに縋る事が王族として最善なら…」

「ヴァイセルフの娘としてラナーは…」

ラナーはその責務を全うします…ッ!」

今にもぐしゃぐしゃになりそうな笑顔を浮かべながら、気丈に振る舞うラナーはそう父へ宣言する。

精一杯の強がりだと、ひと目で分かった。

辛いはずだ、悲しいはずだ。それを必死に押し殺し、ラナーは笑う。それは幼い姫が一生懸命考えた末に辿り着いた最善を掴む為の結論であり、民を思う決意の現れ。

自身の運命に殉ずる儂い姫君の姿だった。

「ら、ラナー……」

溺愛する娘の「覚悟」を見せつけられたランポツサ王は身を焼かれるようだった。

女兒であったがゆえに甘やかし、蝶よ花よと育ててきた娘の勇ましい姿を初めて目の当たりにした。

なんと健気で勇ましいことか。

同時に今まで野放しにし、これほどまでに娘の心を締め付けた八本指を必ずや打ち倒してみせると心に誓う。とうに彼から迷いは消えていた。

「その覚悟、しかと受け取った…

皆の者！

これより王国は法国と共に総力を上げて犯罪組織『八本指』を撃滅せしめる！

これは王の勅命と心得よ、必ずだ…必ず奴らを根絶やしにしてくれるッ！」

その雄叫びにも似た力強い宣言、普段の王とは似つかぬ威風に覚悟なき貴族達は思わず竦み上がり、そうでない貴族は一気呵成に、一拍遅れてそれぞれ応える。

「至らぬ儂を許して欲しい…ラナーよ…」

「いいのです、お父様。

全ては王国の未来のため。

……クライムも、お願いね？」

「……ッ!!最後までお供させて頂きます、ラナー様」

『王国騎士たるもの、私情を捨てよ。

常に主の剣であれ』

クライムがかつて教えを乞うたガゼフ・ストロノーフが言った言葉。

騎士とは国の軍隊である。誇りと矜持を掲げ、清く正しく実直に与えられた使命を全うすることこそが我等の務め。時として己を捨て、抜き身の剣の如く振る舞わなければならない事だっている。

不意にその教えが胸を過ぎる。様々な感情を押し殺し、若きクライムは精一杯騎士としての矜持を示した。

美しい主従を見せられ、周囲の反応は様々だった。相応に感動し、うつすらと涙すら伝う者、冷めた瞳で茶番だと嘲る者、先を見通し思考を巡らせる者。

多くの思惑が渦巻く中、王国の方針はこれで決定した。

2日後、使者が赴くまで彼女は王国で最後の時を過ごす事になる。



その夜

「ザナックお兄様」

「こんな時間にどうした、腹違いの妹よ。」

護衛も連れず部屋を抜け出して…夜更かしは美容の敵ではなかったのか？」

「今はそれはいいのです。」

少々、真面目なお話をさせて頂きにまいりました」

「……それは、普段のお前をとつぱらってでも私に伝えなければいけない事なのかな？」

「その通りです。」

残された時間ももう僅かしかない。

とてもとても、大事なことです。

私と、この国と、そしてレイン様に関わる」

「ッ!!そうか、入りなさい」



翌朝、ラナー・テイエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ
は王城から忽然と姿を消した

24 破滅フラグしかない国に衝撃が走ってしまった…

「まだ見つからんのか!!」

玉座の間に怒号が響き渡る。

王城は今や蜂の巣をつついたような騒ぎに陥っている。

ラナー第三王女が忽然と姿を消してから既に日は傾き、夜の帳が訪れようとしていた。

第三王女の失踪

初めは誤報か、タチの悪い悪戯かと嘯く者も居たが、巡回兵が城壁付近の庭に就寝時いつも姫が着用していたヘアピンと争った痕跡、そして彼女の毛髪数本を見つけ事態は急展開。

誘拐の線が色濃くなり、王は捜索隊を編成し王都中を大搜索させることになった。

ラキユースもこれを知るなり必死の形相で仲間と共に王都を駆け回り、今も姫探しに奔走している。

聞き取り調査の結果、最後にラナーと会ったのは護衛のクライム、就寝前の挨拶を交わした後攫われたとされる。

この時点で第一王子バルブロはクライムを犯人だと断定、投獄しようとしたが王や他貴族達によって制止され、以後むくれっ面で紛糾する会議を静観していた。

「そもそも何故今だ!」

何故このタイミングでラナーを狙うのだ!」

「お、落ち着いてください父上…」

冷静になれるわけが無い。

溺愛していた娘を、よりによって一番安全だと確信していた王城内で攫うなど言語道断。

警備の不備然り、娘の恋路どころか身柄まで守れなかった己の不甲斐なさで憤りどころにかなりそうだった。

しかし、これだけは。沸騰した頭でもこれだけは理解出来ることがある。

「……………内通者がおる」

普段の彼が発するとは思えない程暗く、低い声。

怨恨と慙愧の念が入り交じった、闇より深い底から響く魂の叫びだ。

ラナーが居たのは国内でも最高峰の警備を誇るはずの王城内、例え夜中であろうと交代制で警備兵が巡回しているはずだ。

なのにその時間に勤務していたはずの兵からは取り調べの結果「異常なし」以外の報告はない。

そして攫うタイミングも彼女が法国への出立が決まったその日の夜であり、誘拐に至るまでの行動が早すぎる。

という事は、だ。

あの時のあの会話、法国の使者とランポッサ王のやりとりを聞いていた者のうち、誰かが政略結婚の情報と警備の配置や見回りの勤務時間を誘拐犯へ一緒に渡した事になる。

当然ながら指示したのは八本指だろう、法国と手を組まれて一番困るのは奴等だ。王は確信を持っていた。

「誰だ！娘を攫った裏切り者は！」

見つけ次第地獄の苦痛をその身に味わせ、磔刑に処してくれる！」「父上……」

疑心暗鬼に陥った王の姿はもはや見ていられない。

無理もない、娘の身柄という特大の地雷を踏んだのだ。

温厚だの甘いだの散々な事を影で囁かれても涼しい顔をしていた彼からは想像出来ないほどの豹変ぶりに貴族達は慄き、激昂する度お付の給仕などは小さく悲鳴を上げて震えている。

ガゼフ、クライムもまた怒りと焦燥感で潰れんばかりに拳を握り締め、己の無力と不安に耐えていた。

「とにかくラナーを見つけられない事にはどうにもならん。

使用人達にもう一度王城内をくまなく調べさせろ、今は捜索隊の報を待つしか…」

「し、失礼致します！」

ザナツクの言葉を遮るように飛び込んでくる衛兵。その表情は焦りに染まり、この場の者全てに最悪の予感が脳裏を過ぎる。

「ラナー様の居場所を特定致しました！」

場所は王都外れの再開発予定地にある職業安定所です！

ですが…」

『職業安定所』、とは王都内で不景気による失職で働きに困った者へ仕事を斡旋する国の事業所である。

が、それを額面通りに受け止めた者は少ない。

一部の者は知っている、その施設は汚職貴族によって歪められた職業安定所とは名ばかりの八本指の息のかかった違法施設だということに。

その中でも衛兵が示した再開発予定地に位置する館は最悪だった。

「その施設は…実際職業安定所とは名ばかりの違法娼館であり…」

「……………は？」

「ヒイツ!？」

げ、現在アインドラ様がた蒼の薔薇が先んじて該当施設を襲撃しております！

加勢の要求もされており予断を許さぬ状況との事！」

顔を青くし目の前で震える伝令などもはや視界には映らない。

ランポツサ王は頭が真っ白になりそうだった。

ラナーが行った数少ない政策のうち、犯罪組織の資金源になりそうな違法な施設の廃止などが挙げられる。

そのうち、国の許可が降りないまま奴隷を使い違法な環境で奉仕させ賃金を得ている娼館や風俗店は取り締まりの対象となり、かつて王都にて大規模なガサ入れが行われたのだ。その発起人は他ならぬラナー姫その人である。

その逆恨みなのか、そうではないのかなど今は関係ない。

大事な娘が攫われて？

身柄は違法娼館にある？

……………は？

今日一番の怒号と戦士長の出撃命令が玉座の間に木霊するのにさほど時間は掛からなかった。



時は戻り、日が傾く少し前

王都外れにあるレストランに迫る完全武装の2人組が居た。

なかば乱暴に扉を開き、呆気に取られる客の中を掻き分けて店の一番奥に座る目当ての人物へ向かって突き進む。

「あら、ぎげんよう。

随分と早い到着ですね、もつと我武者羅に探してからここへ辿り着くものと思っていました」

「ふざけないで」

王国アダマンタイト級冒険者、蒼の薔薇。

その主要戦力である2名、ガガーランとラキユースだ。

鬼気迫る表情のラキユースは可笑しそうに笑う彼女の服を掴みあげ、肉薄する。

「ラナーを何処へやったの」

「さあ？ 私にも分かりかねます。

まさか夜のうちに居なくなるとは予想外ですわ。

只今探知に長けた者を散らして捜索中ですが、出来れば日が完全に落ちる前に見つけ出したいところですね」

「……」

「その顔、全く納得していませんね。

けれど、どうなってしまった責任が我々だけにあるとでも？」

ラナーとレイラを引き合わせたのは他でもないラキユース自身。

彼女がラナーに勘づかれてしまったからこそレイラはわざわざ王城へ出向く羽目になり、連中の不信を買った。

もちろんそれだけが理由という訳ではないが、誘拐の原因となる一端になったのは間違いないだろう。

いくらレイラを睨み付けてもその事実だけは変わらない、変わらないいからこそ八つ当たり気味になってしまふ愚かな自分が嫌になる。

「……っそれでも、何か手がかりはないの!?!」

焦るラキユースを優しく諭すように掴まれた手を振り払い、乱れた衣服を整えながらレイラは言った。

「王都の各関所には諜報員をばら蒔いてあります、八本指程度の隠密能力で我々の目を逃れお姫様を外へ連れ出す事は出来ません」

「じゃあラナーはまだ王都のどこかに？」

「報告が来ない以上そういう事でしょう。」

王都内の何処かに監禁されている可能性が高い、尚且つ八本指の息のかかった施設となると…少々候補が多過ぎますわね。

此方も今王都に残った部隊を総動員しておりますのでもうしばらく辛抱なさい。

其方の双子忍者ちゃんとお転婆吸血鬼ちゃんも必死になって捜索しているのでしょうか？」

「そうだけど…」

「《獄界絶凍》！ 《獄界絶凍》！！」

店の2階から焦った様子で降りてきた《占星千里》が息を切らしながらレイラへ駆け寄る。

「第三王女が攫われた場所、特定できた！」

南東の職業安定所に連れていかれたっぽい、早く向かわないと…」

「職業安定所ですか、それはちよつとマズイですわね」

「職業安定所…？」

確か日雇労働者を斡旋する国の施設なはずだけど、どうしてそこにラナーを？」

「マジかよ…急ぐぞリーダー！」

おチビちゃんと双子にも連絡取って合流だ！」

「ちよつ、ちよつとガガーラン!?!」

「理由は後で話す！」

……最悪の事態になってるかもしれないねえ、覚悟しといた方がいい」

いつになく真剣な表情でそう呟くガガーラン、普段おらかなで快活な彼女が滅多にとらない態度にラキユースも顔が強ばる。

「行くぞ！ 邪魔したな漆黒聖典さんよ！」

引つ張られるように店を後にするラキユースを見送って、レイラは紅茶をひと口含む。

喉を潤したあと、「飲んだる場合か！」と焦る《占星千里》に向けて軽い指示を飛ばし再び席へと腰掛けた後、誰に言うでもなく独り呟く。

「良い友人ではないですか、もっと大事になさったら？」

独り言は喧騒を取り戻す店内にかき消され誰の耳にも届く事はない。

.....

レイラと別れレストランを飛び出したガガーランとラキユース。息を切らし走りながらも、ラキユースは疑問を口に出す。

「どうゆうことなのガガーラン!？」

職業安定所がなんなのよ!」

「表向きにはそうだろうよ、彼処は。

だが裏じゃ働きに困ってる奴等の弱みにつけ込んで、やべえ仕事を斡旋する場所だつて有名なんだ。

噂じゃ八本指が取り仕切ってる悪行に加担させられるらしいつてよ!」

「なんですつて!？」

そんなこと私は一度も……」

「そりやそうさ、ずっと巧妙に隠してた。この情報はいわゆる〴〵知る人ぞ知る〴〵つてヤツだからな!

オレも噂を聞き齧ったのは最近よ。

しかしさつき出てきた法国の嬢ちゃんの焦りようだと、噂はマジか

もしれねえ。

そんな所に姫さんが連れて行かれた、どうなると思う?」

「……ッ!!」

言うまでもない。

顔の整ったラナーだ、犯罪の片棒を担ぐような施設でどんな扱いを受けるか馬鹿でも想像できる。

「ごめん鬼リーダー、遅れた」

「先に報告に行こうと思ったけど、向かう先は一緒っばい?」

走る2人に追いついたのは双子忍者のティアとティナ、どうやら彼女達もラナーの居場所に当たりをつけ向かっていたようだ。

「イビルアイがその辺の騎士を捕まえて国王に伝令させてる、私達は直に向かおう」

「ティナと2人で先行する」

「お願い、急いで!」

ああラナー……どうか無事でいて……!」



ぱちん、ぱちんと、肉と肉のぶつかり合う音

時折聞こえる少女の呻き声

野郎の荒い息遣い

王都南東部。

国の衰えとともに日銭を稼ぐにも困るようになった労働者たちを救うため設立された職業安定所。

弱者救済の為に設えられたこの場所は、今となっては形ばかりの違法施設となっている。

初めのうちはきちんとした施設としての体をなし、職を失い路頭に迷う国民と人手不足に悩む現場とを繋ぐ橋渡し役としての責務を全うしていたのだが、施設のトップが代替わりするたびに形態は劣化し今代で遂に八本指との癒着にまで関係を持ってしまう。

もはや健全な機能は失われ、男が斡旋されるのは八本指の息がかかった劣悪な仕事環境の中長時間労働させられ、雀の涙ほどの賃金しか貰えない職場ばかり。

女などはもっと悲惨で、実にその8割が風俗で慰み者にされる始末。残った2割は質の悪い貴族に身受けされ消息を絶った。

そして現在

職業安定所の体をなした裏側で、今日も今日とて汚い音が響き渡る。

「……………ひっ、ひっひっひっ！…ぐひひひひ……………!!」

「あ……………ぐッ!?うあ……………」

娼館内地下室、お得意様用の特別室。

俗に言う『VIPルーム』では一組の男女が設えられたベッドの上で身体を揺らす。

少女の上に馬乗りになった男が腰を振り、恍惚の表情を浮かべながら枝のような両腕を軽々と押さえつけ、空いた方の手で彼女の顔面を殴打した。

1 発、2 発と殴られる度少女の顔は苦痛に歪み、頬に痣が浮かぶ。

それを眺めながら更に腰の動きを激しくする男。

「ぐひひっ……良いぞオもつと見せろ。」

高い金で買った甲斐があった……」

そう言つて娼婦の着ていた如何にも高そうなドレスの胸元を引つ
掴み、思い切り外側へ破く。

びりびりと音を立てながらただの布切れと化すドレスの中から現
れた娼婦の腹部に再び重い拳を食らわせながら、その脂ぎって贅肉だ
らけの顔から満足気に荒い息を吐いた。

男の名はスタツファン・ヘーウィツシュ。

この娼館に足蹴く通う常連客の1人であり、筋金入りに歪んだ
加虐性癖リョナの持ち主ラーであった。

「それにしても、こんなところでお目にかかれるとは思っていなかっ
た。」

ドレスだけでも金貨500枚を叩いたんだぞ?」

「ひゅー……ひゅー……」

「オイ何気絶してる、さっさと起きろ!」

「あつ……がッ!」

もうし……わけ……ございません……」

意識を失っていた娼婦の腹部を目覚まし代わりに数回蹴りつけ無
理矢理覚醒させる。

娼婦として小綺麗に整えていたはずの彼女の顔は青痣と傷跡だら
けでもはや見る影もない。

「あの姫君が着用していたドレスを着て俺の相手ができるんだ、光栄
に思え。」

お前を買った値段よりこのドレスの価値の方が圧倒的に高いんだ
からな!」

「は……い……」

「それにしても…」

あゝ！本物をこうしてやりたかった！」

音の通らぬ地下室でスタッファンは魂の叫びを上げた。

再びその腰を上げ、先程より激しく、いつそう強く少女へと打ち付ける。

「ああラナー、ラナー、ラナー姫！」

あの美しい顔をめちやくちやに犯してやりてえなあ！」

八本指とかなり前から癒着し、今の地位と金を手に入れたスタッファン。

巡回士という立場を手に入れた彼は歪んだ性癖の捌け口を違法娼館に求めていた。

以前までは八本指経由で娼館など探し放題で、欲望を満たす場所など山ほど存在したのだが、ラナーが行った政策により摘発が相次ぎ今では片手で数えられるほどしか残っていない。

逆恨み、拗らせた性癖、美しい顔への歪んだ肉欲が彼をこの店へと運ばせた。

日が落ちきらぬ早い時間に此処へ来たのは偶然だったが、いい買い物をした。やはり善行は積むものだなどとスタッファンは思う。

来店し馴染みの店員と言葉を交わした際、あのラナー姫が着用していたドレスが出回っているという話を聞いた際は一も二もなく飛びついた。

精巧な偽物かとも訝しんだが、わざわざ店員がリークしてきた情報だった事と、実物を見て嘗て王城で姫が着用していたものと全く同じものだと確信を得て、金貨500枚で買い取ってから彼女と顔の似た金髪の娼婦を指名し、行為にふける。

「あの忌々しい姫君の小綺麗な顔を！」

「ぎっ…!?!」

「ぐしやぐしやにしてやったら!」

「…あがつ!!」

「どれだけ気持ち良いかなあ!!」

「や…やめ…」

「黙って股を開けエ!」

わざわざ似た顔のお前を選んでやったんだ、丹精込めて奉仕しろ」

無理矢理身体を起こし、自分の股へ顔を埋めさせる。

汚い水音と一緒に恍惚の表情を浮かべながら、コスタレブレイ行為に勤しむス
タッフアン。

「ごほっ…ごぼっ!?!…あ…あ…たすけ…て…」

「そうだ!」

あのお優しい姫君なら泣いて許しを乞うだろうなあ!

もつと言ってみろ、その分だけ腹を殴ってやる。

ポーション回復薬も買っておいたから何度でもできるぞ!

それとも、こつちの方がイイ声で鳴けるか?」

「え…」

おもむろに少女の指に手を回し、恋人繋ぎのように優しく握り込む。

そして次の瞬間両の手を使い彼女の左手小指を逆側にねじ曲げた。

「ひっ!?!あつ…やっ…やめ…」

「そうだあもつと見ろ、折れるぞ折れるぞ折れるぞオ…」

「ゆるして…ください…指は…ゆるしてえ…」

「そうかそうか折れるのは嫌か!」

「そうだよな!痛いのは嫌なものな!」

痛みに身を振りながら必死に懇願する少女に卑下た笑みを浮かべながらスタッフアンは一瞬だけ力を緩め、祈りが届いたと彼女が安堵の表情を浮かべたその瞬間。

ぼきり

「……ぺ？」

スタッフアンの視界がぶれる。

べきべきと碎ける音がして、身体と頭が離れた。

飛んだ頭部はそのまま地下室の壁に叩き付けられ、気付いた時には真つ赤な染みになっていた。

恍惚の表情を浮かべたまま、唐突に彼は事切れた。

「……クソが」

返り血の着いた戦^{ウオーレピック}鎚を肩に担ぎ直し、巨漢の女性が毒づく。

脂ぎった凶体を乱暴に横へのかすと、痣で全身腫れぼつて見れたものでは無い少女と一部破かれた見覚えのあるドレス。

到着した蒼の薔薇は制止する職員を強引に突破し、建物内を搜索。

ガガーランは地下室を担当しており、一部屋ずつ虱潰しに家捜ししていた所、スタッフアンの大声を聞きつけ乗り込んだわけだ。

ギガントバジリスクすら慄く巨鎚の一撃をただの人間が受けてしまえばどうなるか想像に難くない。

思ったよりも簡単に手が出てしまった、リーダーとは違い裏社会を見た事のある彼女だからこそ即断即決で殺害を選んだが、本来なら殺人もふまえ浅慮^{効く立場}で許されない事だ。この時だけはアダマンタイト^{ワガママ}級冒険者で良かったと心底思う。

目標達成^{コラテ}の為に生じる^ラ致し方^ダ無い犠牲^{メー}で大体の言い訳は通るのである。

「アイツらと長いこと一緒にいたからかね、堪え性がなくなっちゃまった。

おい、お嬢ちゃん生きてるか？

ひでえやられようだ……」

返事は無い、スタッフアンによって見るも無惨な姿にされた歳若い

娼婦ヘガガーランは戦闘用にいつも持ち歩いている《ヘビリーカパー重傷治療》の込められたスクロールを取り出し、彼女へ使用した。

高価なスクロールを躊躇いなく使用するあたり、彼女の人の良さが伺える。

発動された魔法により放たれた光がみるみるうちに少女の傷を癒し、折れた骨も元通りに修復された。

まだ気を失っているようだが、呼吸が安定したのを確認するとガガーランは彼女を体液まみれのベッドから優しく抱き上げ傍にあつたソファに寝かせ、クローゼットから漁った綺麗な毛布で裸体を隠す。

回復魔法で外傷は癒せても病気や心の傷までは治せない。意識が戻った時彼女が立ち直れるかは本人の気力次第だが…

「ガガーラン」

「おう」

背後からかけられる声、振り向けばそこには双子忍者の片割れ、ティナの姿が。

「地上階は制圧完了、スキルで探った感じ地下室のさらに先に隠し部屋を見つけた。

今鬼リーダーが向かってる。

………そのドレスは」

「ああ、姫さんが着てたモンだ。

着せられてたのは別人だがな、横のコイツは気にすんな」

「私は何も見ていない」

ちらつと壁にぶちまけられた赤い染みと豚のような巨体を一瞥し、興味なさげに視界から外した。

破り捨てられたドレスはラナーのものであると確信できる、但し中身は顔の似た別人で、ならば本物の彼女は何処か別の場所に衣服を剥

ぎ取られた状態で監禁されている可能性が高い。

八本指指揮下の組織とはいえ充分に統制の取れていない犯罪者たちの巣窟で裸を晒すこと、それ即ち……

「……手遅れ、かも」

「ラキユースには辛い思いをさせるな……」

沈痛な面持ちで残酷な真実を予見した2人の眩きと、開け放しの扉の向こうから聞こえたリーダーの悲痛な叫び声が聞こえるのは同時だった。



日は完全に落ち、夜の帳が訪れる。

王城、玉座の間は針一本落としても音が響くような静寂に包まれていた。

貴族たちは皆勢揃いし、頭を垂れ王の言葉を待っている。

しかし当の本人は何も発さず、ただ沈黙だけが場を支配していた。

「……………何故だ」

ぼそり、眩いた王の一言に貴族たちが震え上がる。

「何故だ」

め)、遺体を王城へ搬送。急遽呼び出された法国の神官の手によって検死が行われ、彼女の死亡が決定づけられた。

本来なら王の隣、三兄妹の末妹が座る筈だった1番左側の席は現在空白であり、未来永劫埋まることはないだろう。

ポーシヨンでも治癒できず、損傷の激し過ぎる遺体はもはや復活の余地なしとされ荼毘に伏される予定である。これは土葬が一般的であるこの世界においてかなり異質な決定であった。

皆に愛され、民を愛した悲劇の姫君はその遺体すらこの世界に残せぬまま永遠の眠りに就くことになる。

この事実を悟った第一発見者であるラキユースは現在ショックで宿に引きこもってしまっている。他メンバーと一緒に付いてはいるが、心境は決して穏やかではないだろう。

「父上、今はせめてラナーを弔いましょう。

無事に葬儀を終えれば今度こそ……」

「……………分かっておる。

全ての元凶は犯罪組織、八本指。

もはや一刻の猶予もない、皆殺しだ」

議場からどよめきがあがる。

「奴らは皆、裁判に掛ける必要も無い。

これは王の勅命である、八本指に与する者は誰であれ何であれ即、死刑だ。

関わった者も、その家族も、一族郎党皆殺しに処す。

邪魔する者もまた同様に、関与したものと断定し、相応の罰を与える」

「王よ、流石にそれは……」

「越権行為が過ぎるのではないですか!？」

「いくら犯罪者として法を護らず即殺など……」

いつもの野次、なのだが生憎今の彼…娘を殺され復讐の鬼と化したランポツサ王に対して悪手と言わざるを得ない。

「……そうか、衛兵よ」

「はっ！」

「今しがた儂に野次を飛ばした貴族3人、拘束し尋問せよ。」

八本指の回し者かもしれない。」

「は……はっ？」

「二度は言わん、急げ」

言われるまま、数人の衛兵が先程野次を飛ばした貴族を拘束し廊下へと連れ出す。

突然の拘束にももちろん貴族だって黙ってられない、全力で抗議した。

「王よ、なんのつもりか!?!」

「言ったであろう、儂の邪魔をする者には容赦はせん」と。

儂の言葉を遮り八本指を擁護した、それが罪じゃ」

「横暴な……!許される事では……!」

「ワシを誰だと思ってる?」

抗議のために口を開いた貴族の顔が王と相対し固まる、同様に拘束された貴族達も表情を凍り付かせた。

そこに座るのは、普段の王ではない。

今までの彼は枯れ木のようにやせ細り、白髪で年配特有のくたびれた老人だった筈だ。老齡ゆえ甘い対応しかできず、覇気を失った死にかけの老いぼれだったからこそ貴族たちは虎視眈々とその椅子を狙っていた。

だがどうだ、今の王の姿は。

娘を失い、怨嗟に塗れた幽鬼のような佇まい。

愛情が反転し報復心の塊となったその瞳はギラギラと獰猛に輝い

ており、復讐に燃えるその姿は普段の彼とあまりにもかけ離れている。

そこには鬼が座していた

「知らぬなら教えてやろう。」

儂はこの国を統べる王、三代目ランポツサ。

リ・エステイーズは全て等しく我が庭である、であれば庭を荒らす害虫が出たのなら駆除するのが道理であろう？

よいか、もう一度だけ選択肢をやる」

「貴様は王国の民か、それとも害虫か？」

古参の貴族曰く、現役時代のランポツサ三世は苛烈な王であつたらしい。

暴君と呼ばれるほどではないにしろ嚴格で、規律を破る者や怠惰を見せる者には重い罰を下す。

時には側近や使用人すら処罰するその辣腕っぷりが貴族達からたいていそう恐れられていた。

そんな姿が毎日のように見られたそうだ、それが今まで八本指という国ぐるみの問題を先送りにされてきた王国が彼の代で今日まで国としての体を保っていた理由のひとつでもある。

しかし時が経ち、老化とともに感情の起伏が穏やかになり、婚姻し子が産まれたりなど数々の要因が重なった結果、現在の王がある。

貴族の中でもこの事実を知っているのはほぼ同世代にして彼とも馴染みの深いウロヴァーナ辺境伯と、まだ王国が帝国と元気にドンパチやれていた時代に実力でのし上がったボウロロープ侯くらいのものか。

ほとんどの貴族は世代交代により若い者へと移り変わり、優しく甘い枯れ木のような王しか知らない。

それがどうだ。

地獄の閻魔と見まごう豹変ぶりに情けない悲鳴を漏らし、反論する余裕もなくなった彼らは力なく衛兵に連れていかれた。

同時に、ここにいる全ての人間が理解した。

王は復讐に身を焼かれ狂ってしまった。

最後の歯止めだったラナーが死に、枷の切れた憤怒のまま、冷静に狂っている。

それを嘲笑おうものなら、憤怒の焰は容赦なくこちらへ飛び火するだろう。

それを正しく理解した者たちは今までの態度を続ければ自身の首が物理的に飛ぶであろう未来を想像し、騒がしかった議場も徐々に萎縮し始めた。

が、それすら理解できない、「大した事ないだろ」と侮る者が一定数居るのもまた事実。

「ガゼフよ」

「ハッ！」

「剣を良く研いでおけ」

「……御心のままに」

告げる王と静かに腰剣に手をかける戦士長。

その僅かなやり取りだけで否応にも理解する。

この国最強の男は王の剣、命じれば躊躇いなくこちらを斬り殺すだろう。

物理的な脅威が目の前にある以上、どれだけ腹の底で王を罵倒しようとも今は平伏するしかない。

貴族達は静かなものだ。

この日、就任以来最も静かでスムーズに進行する御前会議だったと長年近衛を務める古参兵は語った。

どんなに怒ろうと王を「所詮は老いぼれ」と顔を隠して舌を出してきた者たちは思い知る事になる。

目先の利益のみに拘って手を付けた麻薬が、先王憎しの浅はかな感情で僅かなりとも関わってしまった八本指が、否応なしにその身を蝕み滅ぼす事になろうとは。

後悔するのは何時だって、手遅れになった後なのだ。



「父上」

「……どうした、ザナツク。

こんな夜更けに」

「あの場では申せませんでした。ラナーより遺言状を預かっています。

この事は長兄にすら内密にして欲しいと、妹は言っておりました」

「……!!そうか、あの娘は最期まで……
見せてくれるか?」

「はい、どうぞ」

「ふむ……」

「………ツ!?!………」

「ザナツクよ」

「なんででしょう」

「王国は、好きか?」

「ツ!ええ、もちろん」

「そう畏まるな、此処には貴族の目もない」

「………わた、俺は……この国が好きだ。」

ずっと育ってきた故郷で、美味しい物や綺麗な景色が沢山あって、そんな物を作る職人や生産できる民は宝だと思う。

王国の誰もが幸せであり続けたいと思ってる。

それがどんなに絵空事で夢物語だとしても、
“そう”望むくらいはしたっていいはずだ」

「………そうか。」

儂の眼も曇ったものだな、こんなにも近くに答えはあったというのに」

「それは…」

「よい、今はラナーを弔い伏せるとしよう。

さすればザナツクよ、お前には成すべき事がある。分かっているな？」

「……はい、父上」

「交渉が滞るようであれば儂の名を出して構わん。

覚悟を決めねばなるまい。

此処に書かれていることが真実であるならば、な」



夜の帳も深く、王都は静寂に包まれている。

日が昇れば活動し、落ちて辺りが暗くなれば寝る。多少のズレはあれどこの世界の人間に染み付いた生活サイクルは一貫していた。

火を焚けば辺りは照らせるが、燃料代だって馬鹿にならない。故に暗くなればほぼ全ての人間が眠り、睡眠をとる。

そんななか、皆の寝静まった王都郊外のレストランにて。

『《枝》から《幹》へ。』

《金融》は予定通り《巢》へと潜った』

『こちら《花》。』

《窃盗》、《密輸》、《賭博》は既に《巢》へ籠って待機中。

《幹》からの命令を請う』

「了解、《花》と《枝》はそのまま監視を続行。

《蜂》を向かわせて出入口周辺を固めて。」

《蟻》、《麻薬》と《奴隷》の同行は？」

『兩名とも到着間近だ、《麻薬》の方は50人ほど護衛を引き連れ、その確認した。』

その中で《暗殺》、《警備》も目視で確認、《麻薬》が囲いこんだらしい。少なくとも30分以内に《巢》へ合流する見込み』

「ま、一番お金を持ってるものね…了解。^{ラジャー}」

《幹》より全部隊へ。

「審判の時来たれり」

合図があるまで待機せよ」

『『『『了解』』』』』

「…中にいる護衛は全部署含めてざっと200人くらいか。」

先輩、あと30分だつて」

「ええ、ええ。問題ありませんわ。」

予定通り事を進めましょう」

《氷帝重機兵団》
レギオン・メビウシス

レイラの手から広がる魔法陣、急に辺りの気温が下がり、空気中の凍結した水分がブロックを積み重ねるように組み上がる。

《制圧部隊》
コンキスタドル

やがて彼女の周りには腰に鎌刀を提げた蒼色の鎧騎士が何組も集い、跪く。

一体一体が芸術品といっても過言ではない作り込み、その中心に佇むレイラはさながら女帝のよう。

夜闇に浮かぶレストランを背景に、残った隊員達の前で彼女は自ら聖書を広げ、諭すように読み上げる。

レイラの言葉に耳を傾け、静かに祈りを捧げる眼前の隊員達はもちろん、通信媒体も兼ねた魔法の聖書を通して各都市に潜む全隊員にも

通達されていた。

“清聴せよ、清聴せよ”

“我等は代行人である”

“ただ伏して御主に赦しを乞い、ただ伏して御主の敵を打ち倒す者なり”

“これは審判である”

“被告、王国貴族”

“被告、犯罪組織『八本指』”

“過誤にその身を蝕まれ、罪に魂を焼かれる哀れな咎人たち”

“その罪が死によって晴れるのならば”

“我等は束の間、嵐となろう”

“一筋の稲妻となろう、逃れられぬ暴風となろう”

“心無く、涙も無い、遍く脅威となろう”

“そう有れるなら、我等は神の道具であればいい”

Amen
そうあれかし

静かにそう締め括り、本を閉じる。

服装は潜入時の地味な衣装ではなく、夜闇に紛れる漆黒のドレスと銀に輝くストールを肩に掛けた本気装備で、さしずめ聖女のような佇まい、隣のセーラー服姿の《占星千里》も相まって異質な雰囲気を作り出していた。

「さあ皆様、肅清の時間です。

赦免も宥恕も此度は不要。

静かに、確かに、存分に主命を全うなさい」

「寝ている羊たちを起こさぬように、ね」

数多の鎧に囲まれて、しいーっと人差し指を口元に当てながら、妖艶な笑みで命令を下す氷の魔女。

悪戯を企む少女のように軽々しく、組織殲滅を言い放つ。整った顔に黄金の瞳がふたつ、見るもの全てを魅了するように輝いていた。

その瞳に脳を焼かれた水明聖典の面々が深く頷く。

隊員達は知っている、漆黒聖典の問題児だなんだと言われているこの娘こそ神の傍らに最も近い、尊き導き手である事を。

決して公にはされないが、彼女が破滅の竜王なる世界を滅ぼさんとする存在を討ち取った張本人だということを。

他者を否応なしに巻き込み魅了する才能。

圧倒的なカリスマを垂れ流すこの女は己の放つ輝きがどれほど周囲に影響を与えるのか自覚もないまま今日も破滅フラグを回避したい一心で笑顔を振りまく。

そのとめどない魅力に惹かれ、或いは比類なき強さに惹かれ、彼等は集った。

真の意味で人類の守護者足る為に。

「六大神の名に誓い」

『全ての不義に鉄槌を』

漆黒聖典第13席次、及び闇の神スルシャーナを祀る筆頭聖女の詠んだ有難い文言を胸に顔を上げ、信心深い隊員たちは一糸乱れぬ動きで四方に散らばり、それに続く氷の鎧達。

満足したようにレイラは隣に控えた《占星千里》へ目を向ければ、彼女は呼応するように頷いた。

「密造施設128箇所、密売施設73箇所、国内全て捕捉、包囲してある。」

夜襲を掛け先に周囲を制圧すれば《獄界絶凍》のゴーレムが…」

「全て片付けるでしょう、そういう風に乗っておきました」

レイラの作ったゴーレム、『征服者』コンキスタドルの名を冠したそれらは今回の

作戦用のため特別に組まれたものだ。

普段使いのゴーレムほど耐久力はなく、鎌刀による攻撃も殆ど見掛け倒しだが、代わりに速力が高く高機動なものと、製作者の合図で外部に向けて強力な冷気を放ち続ける仕様になっている。

王国に流通する麻薬、名を『ライラの黒粉』。ライラというのは土地の名であり、原産は聖王国南部のごく一部に生息する植物だ。

現地の人達はこれを乾燥させすり潰し、粉状にしたものを少量取り込むことで漢方薬や痛み止めに使っていた。効能もさして中毒性の高いものではなく、薬学的にも利便性のある「薬草」として密かに親しまれていたものだった。

それをたまたま手に入れた八本指の密売人が品種改良し、悪用されたのが現在王国に蔓延している違法薬物である。

中毒性の上昇はもちろん度重なる改悪により全体が黒く変色し、毒々しい見た目となったその薬草はすりおろした粉も真っ黒に染まっており、「黒粉」の由来とされている。

そんな「毒草」、実は暖かい聖王国南部で栽培されていた関係上寒さにとっても弱い。

この事実を『占星千里』は流通する麻薬の販売履歴と生産頻度から割り出し、『天上天下』監視のもと販売者から言質も得た。

ならばあとは簡単だ、レイラの作るゴーレムが畑ごと冷やしてしまえば寒気に弱い毒草は根枯れをおこしやがて使い物にならなくなる。

使い物にならなくなった麻薬に最早商品としての価値は無い、それが王国中の栽培所で起これば生産は完全にストップし供給源も絶たれるだろう。

同時に流通も密売施設を襲撃する事で迅速に断ち、例の如くゴーレムが在庫も一掃する手筈。

それら全ての出来事が迅速に、一晩で起こる。

現代の特殊部隊ならともかく、せいぜいが中世並の異世界の組織なら本来到底成し得ることはできないだろう。

作戦を広範囲にかつ確実に遂行できる人的資源と宗教による目的

意識の一本化による統率力、これも法国の持つ強みのひとつだ。伊達に600年人類の裏で暗躍している訳じゃない。

当然、八本指麻薬部門はこの事を知る由もない。

彼等は今『法国の放り投げた金貨100万枚』と『第三王女の死』で頭が一杯。故に『いつもの集会所』で各部門のトップ達が集い、今後の組織運営について話し合う機会を作っていた。

ならばそこを迅速に襲撃、制圧する、それが彼女の仕事だ。

「チンピラとはいえ武装した兵隊が少なくとも150人以上、それに暗殺部門と警備部門の精鋭50人が《巢》の中で待ち構えてる。

……本当に先輩一人でやるのね？」

「ええ。貴女は全体の指揮がありますし、《天上天下》は今も国中を奔走していますから。

おっと、八本指の首魁達は見せしめになってもらわないといけけないので殺してしまわないよう加減しないといけませんわよね」

おほほほほ、と悪びれる様子もなく上品に笑うレイラに《占星千里》、本名ルリ・ヘティス・キスタインは苦笑し、疑問を口に出す。

「ラナー姫のこと、本当に大丈夫なんでしょうね」

「もちろん、ネタばらしは全てが終わった後にお話し致しますとも。

今は悪党を成敗することだけ考えていればよろしくってよ」

「蒼の薔薇……ていうかラキユースからスツゴイ恨まれる気がするわ。予知夢無くても分かる」

「ンッ……ま、その辺はおいおい考えましょう。

さあさあ、Let's大粛清ですわ！」

「天性の人たらし……」

先輩ってばいつもそうじゃない、どうなっても知らないからね」

王国国民が寝静まり、夜の帳が降りた頃、王都中を駆ける影が複数。

フードを目深に被った黒い影、その少し後ろに縋る蒼い影、いくつもの黒と青の集団は夜闇を裂くようにそれぞれ目的の地へと迷いなくひた走る。

雌伏の時を経て、護法国家が手癖の悪い指を切り落とすにやっきた

25 破滅フラグしかない組織を崩壊させてしまつた…

王都近郊、リ・ボウロロープ領

王都に最も近く、流通の拠点となる比較的規模の大きなこの街にも夜はやってくる。

多くの国民が寝静まる中で、娼館や賭博場などの運営を除き夜の帳が降りても活動を続ける者は限られていた。

「ふわあ〜…夜勤なんてやってられねえよ」

リ・ボウロロープ領中心街、栄えた都市内でも一際大きな建物の前。松明を片手に2人組の門番が見回りを行っている。

此処は現世でいうところの役場にあたる施設、貴族から選出されたエリートが働く街の要所だ。

今日も夜遅くまで部屋に明かりが灯っているし、きっと役人が仕事に追われている…という訳では決してなく。

「文句言うな、楽な外回りで稼げてんだから儲けもんだろうが」

「どうせ此処の領民が八本指に逆らってくるわけねえのにさあ、気張り過ぎなんだよ上層部は。」

はあー俺だつて女の股に顔を埋めながら書類作業してみてえ」

そう男が肩を竦める。

はい、ご覧の通り役場とは名ばかりの犯罪組織の施設に成り果てていた。

さすが八本指と最も関わりが深いとされる六大貴族が治める直轄領、都市の役場にすら汚職が蔓延し人目に付かぬ夜遅くに麻薬の裏取

り引きや密輸品を横行させ私腹を肥やす者がいる。

見廻りの彼等はさしずめその下請けの下請け辺りだろうか。

金で雇われた傭兵くずれ、多少腕に覚えのある程度のチンピラだが、夜の警備に抜擢されるくらいには実力があるようだ。

「サカってんなら後で地下室の女を好きだけ抱けばいいだろ」

「あんなやせ細ってガリガリの骨みてえな女に突っ込んで何がイイんだよ！

俺はあ、もつと健康的な娘が抱きたいの！

ホラ、『蒼の薔薇』のラキユースとかぜってえ締まりも良くて最高だろ？」

「高望みが過ぎる…相手はアダマントイト級の冒険者だ。お前なんか目を閉じててもひとひねりだろうよ。」

大体、そんな良い女がいたとしてもとつくに上のお手つきになっている。俺らの所になんか一生回ってこねえよ」

「はあーずりいよなあ、警備部門の下請けなんて割に合わなくてやってらんねえ。どうにか麻薬部門に異動できねえかなー」

「読み書きと計算ができるようになってから文句言え、馬鹿」

なんて無駄話を繰り広げる二人、ふと建物横の雑木林付近を見回っていると木々の間からした小さな物音に気付く。

「あん？なんだ今の音」

「野良犬かなんかだろ、気になるなら見に行けよ」

「もうちよつとやる気出せよお前は、一応警備なんだからよ。」

全く…」

しびしび、と言った感じで片方が茂みの奥へと確認へ向かう。

それを待ちつつ松明持ちながら欠伸をかもし、だらしなく相方が消えていった暗がりを眺めていた。

しかしいつまで経っても帰ってこない、業を煮やし声のひとつでも

掛けようかと思案したその時。

「おいいつまで待たせ……あ?」

視界が真っ赤に染まる。それが自分の喉から吹き出たものと理解するまで数秒、その間に男は白目を剥いて膝から崩れ落ち事切れた。

男の背後には闇に溶ける真っ黒なローブに身を包む集団、袖でナイフの返り血を拭き取ると1人が血塗れの男を森の奥に引き摺りこみ、木の影で既に息をしていない相棒と隣り合わせに並べられる。

5人ほどの彼らはハンドサインでそれぞれに指示を出し四方八方に散っていく。

その後も次々と同じように見回りの兵が闇へ葬り去られ、草葉の陰へ隠蔽していき、彼らの通った後には闇の中で時折か細いうめき声だけが響いていた。

洗練された仕草で淡々と、夜闇に紛れ見張りの数を減らしていく。

「中庭制圧」クリア

「東通用門前制圧」クリア

「正門制圧」

それぞれが建物の窓から侵入し、1階と2階を同時に制圧を行う。

事前調査にてこの時間、この役場に居座る者は皆八本指関係者である。なので加減は一切無用。

淡々と、一方的に、油断しきっている役場の八本指構成員は次々とこの世を去っていった。

《水明聖典》

その存在は魔法による監視を主とする《風花聖典》と同一にされがちだが、かの聖典とは別のスタイルで諜報活動を行う法国の特殊部隊。

それは己が身一つで敵国へと潜入し、周囲へ溶け込み欺き情報を掠め取る原初の間諜である。

600年前、六大神の指導のもと生まれた諜報機関は魔法に頼らない、より広い範囲での情報収集を目的として創設された。

年を重ねる毎に人類の生存圏が拡充し、幾つもの隣接国が誕生してからはその動向を探るための潜入捜査、または作業員として働き、人類繁栄のため尽力しているような。

過去には国を転覆させるような大事件すら内々に処理し、民の誰にも知られぬまま解決した実績もある。

この事は記録にすら残っていないが、600年分の経歴値と人材力には六聖典でも随一の自負があった。

かく言う現職水の神官長も嘗ては凄腕の諜報員であり、現役引退後も優秀な司令塔としてそのコネクションと手腕を振るい、長年人類を影で支え続けている。

彼らが欺くのは人類に限った話ではない。

容姿はもちろん、声、雰囲気、匂い、仕草、癖、凡その外見的特徴から内面の性格に至るまで、レイラ達がマジックアイテムに頼るであろうそれを水明の作業員は自力で矯正、会得する。

特殊部隊なので相応の体力と技術力は当然として、人間関係に違和感なく溶け込むコミュニケーション能力やあらゆる状況で臨機応変に対応する柔軟な思考、孤立無援になろうとも常に最善を掴み取る冷静な判断力、精神力や必要なサイバル知識など、どれも必須事項である。

才能を「持っていない」からこそ彼らには必要な技術。

故に他の聖典とは違い、水明聖典では独自のペーパーテストや面接、適性診断などで「ふるい」にかけて後、更に厳しい試験によって選ばれたものだけが所属できる凡人中の凡人。

漆黒聖典が生まれ持った神器の適性や稀有な異能力持ちで構成された「選ばれた者のみが就ける超人集団」であるならば、水明聖典は血の滲むような努力と鍛錬の末に超人の隣に並び立てるほど精鋭化された「凡人の頂点」なのだ。

その実力たるや、並の組織では到底太刀打ちなどできない。

その気になれば各国の王の首だって誰にも気付かれず持つて来て挙げた首級で展示会ができる、とまで擲揄される特殊部隊の彼等と王国に蔓延るのがせいぜいの悪人集団。

どちらが本当の意味で「ヤバい」のか言うまでもない。

そんな部隊を我らが氷の魔女様は400人規模で動員し、ご丁寧に激励の言葉まで贈って任務へと駆り出した。

「な、なんだお前達!？」

オイ見張りは何をやっ（コキツ）けぺ」

この施設の最重要人物ターゲットの下までたどり着き、正面に気を取られていた男が後ろから突入した部隊になんの逡巡もなくその首をへし折られる。

人ひとり分の重量が石造りの床へ転がって、動かなくなる。天蓋付きの大きなベッドには全裸に体液まみれの女性が5人、皆ヒクヒクと小刻みに身体を引き攣らせ虚ろな表情で伸びていた。枕元には黒い粉末状の物体が少量。

「必要な処置を施した後《蟻》に回しておけ。

貯蔵庫を確保次第周囲を警戒、合図が来るまで待機せよ」

「了解」

それを一瞥した部隊長らしき人物（全員黒づくめで判別つかないが）が飛ばした指示に従い、再び影が役場内を走る。

この世界の人間には想像もつかないだろう。

徹底された統率力、圧倒的な練度、全員がひとつの身体のように意思疎通を行い、音も立てずに影も残さず制圧してくる。

凡人の極みたる特殊部隊スペシャルフォースの存在を。

このような展開が、国内残り72箇所箇所の密売施設と128箇所箇所の密造施設で一晩のうちに繰り広げられるのだ。

それは最早戦いに非ず
一方的な蹂躪に他ならない

「……見捨てる、などしないのだろうか。あの御方なら」

女性隊員によつて介抱される商品達。

黒粉漬けにされ心を壊された女、例え身体が完治しても後遺症によつては社会復帰できるか怪しい。場合によつては自らの手で介錯してやったほうが幸せなのかもしれない。

が、此度の総司令は「全ての商品の回収」を望む。

きつと彼女なりの解決策があるのだろう、我等の司令塔ハンドラーをして「なんなんだいあの娘、アレで最後は全部丸く納まつてるの何かの詐欺じゃないのか」と手にしていた匙を床に叩き付ける程の意外性と独創性を持つ御方だ。

部隊長は悪党の犠牲となつた彼女達に束の間の祈りを捧げ、仕上げのゴーレムを呼び込む準備を整える。

影の進軍は止まらない



暗く湿つた石レンガ造りの廃坑道。

灯りは無く、中は真っ暗、王都地下をどこまでも続く迷路のような地下通路。

その中をまるで見えているかのようにスイスイと進む一人の女の姿があつた。

闇に紛れる漆黒のドレス、肩に掛かる輝く銀のストール、煌めく黄

金の瞳。

彼女が通った足跡は霜が降りたように白く染まり、歩く度坑道内の温度が僅かばかり下がっているように思う。

すると、真つ暗な坑道を進む先に見える松明の灯りが3つほど揺らめいているのが見えた。

恐らく巡回の八本指構成員なのだろう、徐々に近付いてくる灯りにも構わず彼女は歩みを止めない。

「あ？何だ、ありや」

先頭を歩く男が灯りを掲げ目を凝らすと、そこには坑道という薄暗く煤けた場所には明らかに不釣り合いな格好をした淑女の姿が映る。

はて？と男は無い頭を一瞬捻り、背後の仲間と顔を見合わせた。後ろの2人にもちゃんと見えているらしい、どうやら欲求不満を拗らせて幻覚を見ているわけではないようだ。

誰か娼婦呼んだか？

だったら案内も無しにここまで来るのはおかしいだろ

上からの連絡もねえよな？

余りにも場違い感溢れる姿に一瞬思考停止する3人を他所に、女は優雅に堂々と彼らの間を通り抜け先に進もうとする。

「オイちよつと待」

3人組の一番後ろ、一足先に思考停止状態から戻った男の横を通り過ぎようとした時放ったのが彼の最期の言葉だった。

その手が彼女の肩に触れる前に凍り付く。

表情を変える暇もなく、悲鳴を上げる事すら許されず、凍死した足先から髪の毛の一本に至るまで全てが一瞬の出来事。

いつの間にか坑道は暗闇に戻っていた。

3人の持つ松明は極低温に晒されみるみるうちに小さくなり、冷風

に靡かれるまま程なくして完全に鎮火。哀れな男達が凍ったままフランスを崩し、薄硝子を砕いた時のように床に叩き付けられた衝撃でバラバラに砕け散っていく。

残るのは静寂と暗闇

そこに小さな鼻歌を交えながら、淑女は巢穴の奥深くへと進んで行った。



王国地下通路のとある一角、松明に照らされた広間に簡素な机と椅子が並べられただけのスペースには8人の男女が集っていた。

全員とも風貌は：ハツキリ言って悪い。

少なくとも陽の光を浴びて生きているような人間の放つ雰囲気ではなかった。

この場もひりついており、彼らを護っているであろう護衛達はいつでも得物が抜けるように腰に手を掛けている。

『麻薬取引部門』

『奴隷売買部門』

『警備部門』

『密輸部門』

『暗殺部門』

『窃盗部門』

『金融部門』

『賭博部門』

八つの部門からなり、王国に巢食う巨大犯罪組織シンジケートの名を『八本指』

その歴史は古く王国建国時より影で暗躍し続け、何代にも渡って組

織を拡大した。

表立っては言えないが、その力は今や王国内において比類無き程に成長、国の隅々まで広く深く浸透しており、悪辣な手腕と工作で国家を裏で操る悪の組織である。

「集まったわね、皆お元気い？」

急な招集だったケド全員応じてくれて感謝してるわ、早急に話しておかないとイケない話題ができちゃってねエ」

卓にかける者の1人、なよつとした線の細い男が甲高い声で形のみ感謝を述べる。

名をアンペティフ・コツコドール、八本指においてオネエ奴隷売買部門を担当する長であった。

「そりや嫌でも集まるでしょうよ。

大事件が起きた後だもの」

8人の中で紅一点、麻薬部門長のヒルマ・シユグネウスが鼻を鳴らす。

八本指の情報収集能力はそんじょそこらの軍隊とは比にもならない。市井の至る所に間者を潜ませ、耳聰い者はコツコドールの緊急招集の理由に心当たりがあった。

ひとつはスレイン法国による寄付の話題。

嘗て王国と法国、二国間の友好の証として贈られた神官を常駐させる為の教会。

ボヤ騒ぎで焼け落ちてしまったのを法国持ちで再建したいそうだ。その額なんと金貨100万枚。

人類救済を自称する護法国家様が何を考えているのか知らないが、柵から牡丹餅とはまさにこの事。

利益を独占せんがため、八本指も虎視眈々と金に目を光らせている。

「ウチに『建築部門』が無かったのが惜しいな。

建設業まで掌握できていれば中抜きだけでなく再建事業の胴元すら狙えたというのに」

「ま、職業安定所を掌握してるんだから何処の事務所にやらせても仲介料はしっかり頂くつもりだけどね」

「タダで使える労働力なぞ幾らでも調達出来る」

せせら笑う幹部達。

そしてもうひとつ、大きな事件が立て続けに起こった。

「それに厄介だった第三王女もくたばってくれたんだもの、これを期に王国をかつ攫つちまうのも視野に入れないとねエ」

第三王女ラナーの死亡。

王国を揺るがす大事件、まだ国民には秘匿されているが耳聰い彼等には筒抜けだ。

あの手この手で間接的に八本指の邪魔をし続けていた厄介者が居なくなつたとなれば、いよいよもって「国盗り」が見えてくる。

ボウロロー侯を通じ、一番王位に近い第一王子を甘い言葉で釣り上げ癒着させる事で汚職の沼に肩まで浸からせ、いいように操つてきた。

彼が即位すれば王国とは名ばかりの八本指による傀儡政権の出来上がり。

そうなれば今まで闇に潜み行っていた悪行を国家ぐるみで行使し、ますます自分達の懐は潤う事だろう。

まさに金儲けの為だけ、目先の利益の為に国家転覆まで考えるほど突き抜けた8人の悪人共による企みは成就目前であった。

……それが他国から見てどう思われているのか、微塵も考えていません

「警備部門の若いのがボヤ騒ぎを起こした時は肝が冷えたが、金貨100万が返ってくるなら結果オーライか」

「ホント勘弁して欲しいわあ、彼処の神父取り込むのにどれだけ苦勞したと思ってるのよ！」

タダでさえスレイン法国絡みの教会で慎重にならなきゃいけないかったのよオ!?

その分稼ぎは良かったから残念だわ…」

きいいいつ！とハンカチを噛むコツコドールに半目になるヒルマ。

麻薬部門長の彼女だが元娼婦だった経験を活かして違法娼館にも手を出しており、巧妙に表舞台から隠していた。

過去に摘発されたのはコツコドールが経営するものが殆どだった為、運良く生き残ったヒルマの娼館は彼に恩を売る形で譲渡され、以来八本指の中では商売敵でありながらも比較的友好的な関係を築いている。

まあ麻薬漬けからの奴隷娼婦墮ちという地獄のコンボが相性良過ぎて儲けにも繋がってるから止められないというのが本音であろう。

この成果もあって、ヒルマとコツコドールの2人は組織内でもかなり発言力が強く他部門と比べて権力を持っていた。

今日も警備部門や暗殺部門から人を多く雇って護衛として侍らせているし、ここにいる護衛達も今日に限っては八本指の護衛ではなくヒルマとコツコドールの護衛。

組織内のパワーバランスは傾きつつある、それを良く思わない者も勿論いるわけで。

八本指は巨大犯罪組織であるその実、内部でも裏切りや策謀が横行する問題も抱えていた。

他人を食い物にし、隙あらば仲間すら貶めて自らの糧とする。

人道も配慮も捨て去って、自らの利益の為なら他はどうなっても構わない。

八本指はそういう連中の集まりなのだ

どうしようもなく、救いようがない

だからこれから起きることも全て

彼らの自業自得なのである

ドンツ

会議室の扉を強く叩く音。

会議に熱中していた面々にも聞こえた。

この会議は重要なもので、邪魔はするなど待機させている部下たちには既に伝えているはずだ。

鬱陶しそうに賭博部門の長が部下に確認に行かせた。

徐に扉のノブを捻るとそのまま勢い良く開かれ、人一人分ほどの大きさの青い塊が会議室入口にぶちまけられる。

床に落ちた衝撃で硝子の割れるような小気味よい音と共に、粉々に散らばる欠片、それに伴い扉向こうの暗闇から冷たい風が吹き荒れた。

「さっむう!?!」

「オイ扉閉めろ、寒いだろうが!」

「へ、へい!」

怒鳴る上司に言われるがまま、先程開けた扉を閉める。

この時、扉を閉めた彼は目を落とした拍子に床に転がっているナニ

かの欠片、それが『人間だったもの』であり、そのひとつが『凍った人の目玉』だと理解した。してしまった。

ころころと床を転がる目玉と目が合い、脳が理解を拒む異常な光景に背筋を凍らせながらも警備部門の矜持として報告だけはせねばと彼は口を開き息を吸う。

まあ、その口が閉じることは永遠に無かった訳だが。

「あ……かつ……かつ……へ……ッ!？」

男の顔に霜が降りる。

喉元から広がった白い模様がじわじわと身体全体に広がって、男の身体を冷たくしていく。

口が閉じない、息も吸えない、呼吸困難と酸欠が襲い、必死の形相でもがく男の涙すら地面に落ちる前に氷の粒となり、床に転がった。やがて全身が霜に覆われ、苦痛の表情を固定されたまま男はその生を終えることになった。

動揺は広がる。

慄く護衛達が次々と同じ症状を発し始め、同様に苦しみながら苦悶の悲鳴と共にもの言わぬ氷塊に成り果てていく。

「ヒッ!? あっ……あ……助け……」

「いっ……息ッ……がっ……はッあ!？」

三者三様に悶え苦しみながら白くなる。

もがき苦しみ、体勢の悪かったものは完全に凍った後、バランスを崩して床に叩きつけられた。

粉々に砕け散り、床を欠片で汚す様を見て漸く部門長たちは異変を悟った。

「し、襲撃だ!」

「警備部門は何をやってる!? 全員連れて来い!」

賭博と密輸の長が警備部門長を睨み付けながら叫ぶも、その後ろでは次々と護衛が氷漬けにされていき部屋に侍らせていた20人近い護衛は既に半分にまで減ってしまっている。

「部門長、控え室からの通信が途絶しています！」

「外の連中とも一切連絡が……あつ……アツ……カツ」

「ヒイイイ!? 助けてくれえ〜!!」

目の前で同僚が白く染まり、半狂乱になりながら仕事も忘れて別の扉から逃げようとする警備の男がドアノブに掛けた手から徐々に凍り付く。

自らの手が凍っていく様をまざまざと見せつけられながら正気を保っていられるほど男の精神は強くなり、パニックになってドアノブから手を離そうと感覚の無くなった腕を無理矢理に引っ張ってしまった。

ぼきり

と、音を立て男の二の腕から下がへし折れた。

「ぎゃああああああああアツ?!?!」

自らの腕が枝みたいにぽつきり折れてしまった視覚的な衝撃もそうだが、それ以上に感覚が消えて痛みが無かったのが余計にパニックを掻き立て、ゴロゴロと床を転げ回る。

「お俺の……腕……うでがああああ!?!」

「止める触るな! 触るんじやねえ!」

「た、たすけて……! たすけて……たす……け……ア」

縋るように同僚に泣き付くが、肩まで登っていた霜が急速に伸びていき男の顔まで覆い尽くした。

間もなくして全身白く染った氷像がゴロリと床に転がる。

因みに縋り着かれた同僚の男も断末魔の後直ぐに同じ運命を辿ることになった。

ヒルマが周りを見渡せば護衛は全て白い塊に成り果てて、残るはこの部屋にいる八本指の幹部8名のみ。

もう一度、冷たい風が吹く。

身も凍りそうな冷風が幹部達を凍てつかせ、同時に灯り替わりに灯っていた部屋中の松明が一齐に掻き消えた。

「ツ!!灯りが消えたぞ!」

「早く代わりの松明を…(ベリベリベリツ) ツ?!?!」

ぎゃああああああああああ!!」

「クソオ何が起こってる!」

一体何がツ……カツ……!!アア……?!?!」

耳障りな野郎どもの悲鳴など関係なく、危機を察知したヒルマは一人で素早く緊急脱出用の隠し扉へ向けて走り出した。もしもの時に備え連中を出し抜き隠し扉に一番近い席を確保しておいて本当に良かったと思う。

暗闇でも問題ない、場所と逃走ルートは全て暗記しているのだ。

(クソツッ!クソツッ!)

やっぱり嫌な予感当たってた!)

ヒルマは内心できうる限りの罵詈雑言を吐き捨てる。

思えば元々おかしかつたのだ。

第三王女の失踪、そして死亡の報告に至るまでの経緯が不自然なままでに早すぎる。

まるで予め決められていたかのようにトントン拍子で話が進んだ、自分達に都合がいいように事が運び過ぎていた。

第三王女を捕まえてコツコドールの娼館に売り払った？

どうやって警備が厳重な王城から姫を連れ出したのか、何故今攫ったのか、そもそも暗殺部門や警備部門、コツコドールはそんな命令を出していたのか？誰も知らない、構成員すら誰も見ていない。

まるで過程をすつ飛ばして結果だけ残ったみたいだった。

会議中の彼等の話からして、3人の部門長は誰一人としてそんな命令を下していない。邪魔者が居なくなった喜びに浸る彼等は多少の齟齬など構いやしない様子だったが、この時からヒルマは嫌な予感が消えなかった。

疑問は絶えない。

なら次に襲ってくるのは未知の恐怖。

第三王女を攫ったのは八本指の差しがねではない。

なら一体誰がこんな事を？

そもそも第三王女は本当に死んだのか？

ならばこの状況は自分たちを囲う為の……

「ツなんなのアンタ?!?!? なんなのよオ〜〜!!」

コツコドールの甲高い悲鳴を最後に静まり返った議場を背に彼女は走る。

動くべき時に動かない者は餌として食われる。

高級娼婦の身でありながらこの地位にまで実力で成り上がったヒルマの信念は揺るがない。

(とにかく今は隠し扉から逃げて状況を把握しないと。

場合によっては聖王国あたりに雲隠れできるよう手配しなくちや…!!)

あと数歩で手を伸ばせば隠し扉の前まで手が届く。
ヒルマが表情を緩めたその時、がくんと身体が大きく傾いた。

「はっ？ぐう…ッ!?」

受け身も取れずに冷たい床に叩きつけられ呻くヒルマ。
もがこうと脚を動かすが、既に両脚の感覚が無いことに気付く。

「な…なによコレ…」

視界も段々暗闇に慣れてきた。

そんな彼女の目の前にあったのは、闇夜に溶けるような漆黒のドレスとブーツ。

「アンタ…誰…」

どんどん酷くなっていく寒さに凍えながら顔が見えない誰かに服を捕まれ、そのままありえない力で持ち上げられる。

途中バキバキと変な音が鳴った。

そのまま引き摺られ、自分が座っていた椅子に引き戻される。

服越しに当たる椅子は冷たく、今にも凍え死にそうだ。

そんな中マジックアイテムだろうか。唐突に《コンティニユアル・ライト永続光》の光が

卓の真ん中高くに灯り、再び議場が照らされた。

そこでヒルマが目撃したのは……

「ひっ……!!」

もの言わぬ氷塊と成り果てた幹部達の姿。

ほぼ全員が苦悶の表情に塗れ、歪んだ表情のまま固まってしまっている。
いる。

特に酷いのは窃盗部門の長だ、無理矢理立ち上がろうとしたのか椅

子に触れていたであろう背中から腕にかけて服ごと皮膚が霜に張り付いたままめくれ上がり、筋繊維がむき出しの状態で凍り付いている。絶叫したまま固まったであろうその表情に思わずヒルマも目を背けたくなるほどだった。

何故かコツコドールだけは場違いなくらい凄い間抜け面で凍っていたため何とも言えない気持ちになったが…

「あらあら。彼、中途半端に凍った状態で動いちゃいましたか」

声がする。

ヒルマの知らない、幹部の誰でもない第三者の声。

「振り返らない方が身のためですよ。

彼みたいになりたくなければ大人しく座って前だけ向いていなさい」

椅子の後ろから優しく諭すように忠告され、振り向こうとした首を止める。

声の言う通り、現在ヒルマの身体は椅子に張り付いて中途半端に凍っている状態だ。

無理に動かせば…窃盗部門の彼のようになる。

「アンタ、どうやって此処に…一体誰のさしがねよ。

八本指に手を出してタダで済むとでも思ってるわけ…？」

「あらこわい、流石は天下の巨大犯罪組織。

こんな状況でも強気ですね。

嫌いじゃないわ」

その威勢に免じて、顔くらい見せましようか。

ひゆう、と凍える風が吹く。

照り下ろす灯りのもと、可視できるほど白い冷気の束が目の前の卓

の上を集まり、やがて人の形を成していく。

そこにはいつの間にか銀の髪と金の瞳を携えた黒づくめの淑女が脚を組み腰掛けていた。

「初めまして、八本指麻薬部門長ヒルマ・シユグネウス様。

「ご機嫌いかがかしら？」

最悪よ！と言ってやりたいところだが、ヒルマは凍えてそれどころではない。代わりに白い吐息を吐きながら思い切り睨みつけてやった。

「ああそうそう、どうやってここまでやって来たかですが…」

途端、女の身体が溶けるように消えていく。

そのまま白い霧もやになったままヒルマの後ろへ回り込んだ。

「《仇ブライクニル・オブ・ファントムメナスなす凍死の指先》という魔法です。

第9位階、この通り非実体化して物理攻撃を躲したり、広範囲に重度の凍傷を負わせる霜を降ろす事ができますの。

まあ言ったところで貴女には分からないでしょうが」

「第…9位階…？」

馬鹿げてる、そんな魔法この世に存在するワケないじゃない！」

「裏社会のボス気取ってる割には思ったより知見は狭いのね。

金儲けばかり考えているからですよ」

カラカラと笑う彼女にヒルマは特大の悪寒と危機感を覚えていた。

地下道からこの部屋にたどり着くまでに大量の部下を張り巡らせており、連絡手段も用意していたはずだ。なのにただの一度もこちらに連絡は来なかった。

この部屋も、地下道内で数ある部屋のうちの一つ。自分達が居る部屋を見つけ出すのにも時間が掛かるはず。

実際それを想定して警備を組んでいたのだし、地下道内は入り組んだ一本道だ。一度に通れる道幅は3人がそこら、対してこちらは無数の出口を使ってゲリラ戦に持ち込める。

過去にこの地下道を作った王の思惑通り『攻められにくく逃げやすい』構造をした此処は八本指が集会を行うにあたって最適な場所だった。

護衛の足止めによる時間稼ぎと早期発見による情報を得ることに
より、例え軍に正面切つて攻め込まれようとも幹部全員が無事に逃げ
おおせる自信は過分にあつた。

だが蓋を開ければどうだ。

たった1人の侵入者に幹部達は尽く凍らされ、自分の命も風前の
灯。

それだけ相手は手練で、かつ自分達の事も調べ尽くしている。

「と、取り引きしましょう!」

最早組織の体を装う余裕もない。

必死の形相で唾を飛ばしながらヒルマは叫ぶ。

「雇い主はこの際言わなくてもいいわ!

貴女が雇われた金額の2倍…いえ3倍出しましょう!だから私に
雇われなさい!

金の事なら心配しないで、貴女も知っている通り私は麻薬部門の
トップなの。報酬なんて幾らでも上乘せしてあげる!

悪い話じゃないでしょ!?!」

まくし立てるヒルマに非実体化を解いた彼女は再び卓に座り直し、
少し考えるような仕草をとる。

「そうですね、麻薬部門長の貴女ならばした金なんて幾らでも集め
られますものね」

「そうよ！」

王国中に網を張り巡らせて、製造場所が2、3ヶ所潰された程度じゃ利益が落ちることもない。

王国で一番安定したビジネスなの！

勝ち馬に乗るなら私に着いた方がお得よ！」

「勝ち馬…そう、勝ち馬ねえ…！」

正体不明のこの女の目的は分からない、しかし命の危険が迫っているのだ。

どうにか言いくるめて生きなければ！

考え込んでいた女は徐に胸元からマジックアイテムを取り出す。

野球ボールほどの大きさのそれがコロコロと転がって、卓の真ん中で淡く輝き、放たれた光で部屋の壁じゅうに大小様々な『映像』が映し出されていく。

「は…なんなのコレは…」

「見覚えありません？」

…そう、『状況は？』

『《蟻》、該当施設58箇所制圧』

『《こちら》《蜂》、拠点65箇所制圧』

『《花》、42箇所制圧完了』

『《枝》、全目標制圧』

『《こちら》《幹》。』

現時刻をもって全ての目標をクリア、ゴーレムも各自所定の位置へ配置完了よ。

後は先輩が合図を送るだけ』

訳の分からない会話をよそにヒルマは思い出す。

あの映像の向こうにある建物、何処かで見た事があるような。

あの倉庫らしき建物も、あの畑も、直近あるいはかなり前に視察した事があるような。

「うふふ、良いタイミングです。

では…」

『Kyrie eleison』
この魂に憐れみ

ヒルマが口を挟む暇もなく、画面の向こうに異変が起き始めた。

薄明かりに照らされた彫像のようなナニか、それが片膝を着き撒き散らす冷気に周囲が白く凍り始める。

或いは焔のど真ん中で、また或いは倉庫らしき場所の中央で、音を立てて軋む。

「…待って」

思い出した。

「なんでそこに居るの?」

どんだん吐き出す冷気が強くなる。

さつきまで周囲を覆うだけだった白いモヤが瞬きする間に鎧の間から勢いよく漏れ出すようになった。

ギシギシと軋む音が大きく響き、心做しか鎧そのものが膨らんでいくような…

「ばーんっ☆」

零すヒルマなどお構い無しに、全画面ではち切れんばかりに膨らんだ鎧が白く輝き弾け飛ぶ。

画面越しでも分かるような衝撃に小さな悲鳴を上げるが、隣で魔女は楽しそうに画面を眺めていた。

「……『状況を』」

『ちよつと！あんな威力だなんて聞いてないんだけど!？』

『あら？言つてなかったかしら、おほほほ』

『全く…』

エリア1から40まで全ての栽培所及び密売倉庫の消滅を確認。

記憶してた分と照合して、確認班の証明待ちだけど、あの規模なら文字通り草の根一本残らず消失したでしょうね』

ああ、思い出した。

あの画面に映っていたのはヒルマの管轄する麻薬部門の密売所や保管倉庫、そして販売ルートを確認していた密売施設。

会話の内容から察するにその全てが今、目の前で吹き飛んだ？

「と、まあこの通り貴女の資金源は在庫ごと消し飛んでしまいました」
「…は？」

「わざわざ見せる必要はなかったのだけど、やっぱり麻薬部門長の貴女には顛末を見届けて頂かないと。

心残りもあるでしょうし」

残念、雇えなくなっちゃいましたね。

にこにこ微笑みながら言葉を紡ぐ姿を半ば放心状態で眺めるヒルマ。

「ああ、貴女含めて此処にいる8人は殺さない予定なんですよ。

こう見えて全員今も生きてます、意識はありませんが。

八本指の最高幹部なんて大きな看板背負ってる方々をこんな人目の付かない地下で始末してしまうなんてとてもとても」

白々しく喋る彼女の口は止まらない。

此処では殺さない、すなわちこの8人は王国へ突き出され、王命のもと直々に処断されるということ。

ランポツサ王が姫を殺され怒り狂っていることは既に八本指の耳にも入っている、そんな彼の下に下手人を出せばその末路がどうなるか分かりきっている筈だ。

即ち、裁判や拘留の措置すら取られることは無い、
即処刑台が待っている。

「ちよつと…待ってよ…」

ねえ…お願い…」

それを自覚し、自らの末路を悟ると同時に、じわじわと椅子から伝わる冷気を強く感じる。

ヒルマは理解した、全て理解してしまった。

自分たちは罠に嵌められたのだ。

甘い汁を啜ろうと樹木に集る虫のように、集められ、一纏めにされ、後は羽根ごともぎ取られるのを待つだけ。

「お願いします…お願いしますから！」

「……………」

「ふぎ…けんな……！」

なんで私がこんな所でえ…ツ!!」

命乞いなど意味を成さない。

憤りを力に変え椅子を揺らす。

幸運にも皮膚は完全に椅子に張り付いており、倒れても皮ごと剥がれることは無かったが、無防備に冷たい床へ叩きつけられ鈍痛がヒルマを襲った。

そんな事もお構い無しに床を這いつくばりながらなおも彼女は出口を目指す。

両脚は既に凍つてもげ落ちて、這う這うの体でも諦めない。

それを魔女は何も言わずにただ眺めていた。

女の身でありながら、高級娼婦という身の上ながらヒルマは実力で

ここまで上り詰めたのだ。

自ら上の者に取り入ってコネクションを作った、屈辱にも散々耐えてきた、使えるものは全て使ってあらゆる無駄を削ぎ落とし、全ての人間を利用して今の自分がある。

他の連中が自分を羨むのは当たり前前のこと。

それだけ努力してきたのだから。

努力は報われるべきで、苦労は実になるべきなのだ。

だから自分がこんな結末を迎えることなど間違っている、そうに決まってる。

椅子が背中に張り付いたままという滑稽な姿で床を這い、芋虫のように進む。

それがどれだけ無様でも生きていれば勝ちなのだから、生き残ったらどんな手段を使ってもこの女に復讐してやる。

だから今は…

「あっ…はあっ…!!か……ッ」

喉元が急激に冷たくなる。

とうに手足の感覚は無い、音を立てながら身体の動きが鈍くなり、冷たく、眠くなってくる。

「いや…いや…いや…わたし…し…は……ッ」

身体がどんどん重くなる。

最早自分が動いているのか止まっているのかすら分からない。

やがて全身が真っ白に染まり、同時にヒルマの意識はぷつりと途絶えそれっきり動かなくなった。

後に残るのは冷え切って静まり返った会議室と、ヒルマの顛末を見届け卓に腰掛ける氷の魔女のみ。

『《獄界絶凍》より全部隊へ、目標を全て確保致しました。』

現時点を以て全ての作戦行動は終了、各々撤収作業に入りなさい。
後片付けを怠らぬように』

『《蜂》、了解』

『《蟻》、撤収作業に入る』

『《花》、了解、迅速に』

『《枝》、確認した。撤収する』

『《幹》より、千里眼で全てのエリア内目標の沈黙を確認。

本作戦は全て計画通り完遂したものとする』

『ええ、ええ。』

皆様ご苦労さまでした、戻ったら祝い酒でもいたしましょうか』

『ダメよ、水明は禁酒義務があるの。』

漆黑聖典と違って厳しいんだから』

『まあまあ、いいじゃないですかこんな時くらい。』

長期任務だったんですよ？

神官長には黙ってますから。

ちようど販売用に我が領地で取れたりんご酒が届いている頃で
しようし、ついでに祝杯も上げちゃいましょう。

これは部隊長命令、つまり仕事です。

何も問題ありませんわね！』

『《蜂》、了解』

『《花》、大歓迎』

『《枝》、任務なら仕方ない』

『《蟻》、麦酒とエールも所望』

『ええ…？』

あーもーめちやくちやだよ…

何言われても知らないからね』

軽口を叩き通信を落とす。

物理的に冷えきった議場。

仮死状態で生きているとは形ばかりの犯罪組織幹部達が囲うなか、

卓の上に座る氷の魔女は暫し物思いに耽った後、姿を消した。

《永続光》の効果が切れ周囲が再び暗闇に包まれる。

彼女が去った地下通路にもはや人の気配はなく、夜の暗闇と肌を刺すような冷気が支配する静寂のみがそこに残っていた。

まるで時が止まったよう。

そんな空間に勅命を受けた王国戦士長率いる討伐隊が突入し驚愕するまでさほど時間は掛からなかった。



「そうやって、貴女たちの生き汚いところは尊敬してますよ。本当に」

凍ったヒルマを感情のない瞳で眺めながらひとり呟く。

「神の名の下に、なんて。」

所詮殺人を誤魔化す言い訳にしかないのに」

この世界に生まれて20年余り、任務然り防衛然り様々な名目で命を奪って来ましたが、やっぱり同族殺しだけは何度やっても慣れませんわね。

人殺しを忌避するのは私の持つ前世の記憶、21世紀日本に居た頃に培った一般人としての残滓が残っているから。

それとこの世界のシステマ的にカルマ値の高い私は無自覚のうちに人間に対して酷いことをしたくないと思っっているのかも知れません。

けど彼らは犯罪者。弱者を自分の為に使い捨て、何人もの犠牲の上に生きる事を選んだ悪人です。

死んで当然、とは言わないですが相応の罰は与えられて然るべき、なのでしよう。

少なくとも人を裁くのは人で、まかり間違っても絵物語の神などではない、そうでなければならぬのです。

それを『神の名の下に』だなんて脳死で殺人の免罪符にするとか馬鹿の極みだと思いませんか。

殺したのは私、処刑台に送るのも私

どんなにこの世界の倫理観が死んでいて、人の命が羽毛の如く軽くとも

これだけは受け止めて、覚悟しなければ

この作品に世界観呑まれば自分もいつかそうなる。

驕りではなく「慣れ」が破滅フラグを呼び寄せる事になる。

必要な犠牲、とは言いません。

八本指、貴方たちは邪魔だった。

破滅フラグを回避する為、王国の後ろ暗い部分は切除する必要があった。

どれだけ大義名分を掲げて、どれだけ巧妙に誤魔化しても、結局私の我儘エゴの為に貴方たちは死ぬ。

笑っちゃいますわね、人殺しが人類救済を願うなんて。

恨んで下さって構いませんわ、それほどの事をしたのだもの。

まあひとつ言い訳をするならば

貴方たちも散々やった事でしょう？

抵抗できない弱い者を利用して、貶めて、生以外の全てを奪い尽くした。

弱者が強者に食われるなんて日常茶飯事、自分達はやられないなんて確証はどこにもないわけで。

今回は八本指の番が回ってきただけ。

いずれ私の番もやってくるのでしよう。

できる限り足掻きますけどお…

ダメな時はせめて苦しまずに逝きたいですわ…

はあく病むう…殺人が絡む任務の時はつついおセンチになっ
ちやいます。

やっぱ破滅フラグなんて大嫌いですわ…

26 破滅フラグしかないお家騒動が起こってしまつた…

「…………ガゼフよ」

「はっ!!」

「本当にお前が見たもの、聞いたもの、感じたもの全てに、偽りは無いのだな?」

「はっ!」

この剣に誓い、あの場での出来事に一切の嘘は御座いません」

「そうか…ならば此処でもう一度、皆の前で言つて聞かせよ。」

王都地下で何があつたのかを」

エ・ランテル王城。

姫君を失い、失意と復讐の狭間に揺れる王の心情を表したかのよう
な、深い深い曇天の日和。

昼間だというのに陽の光も届かぬほど薄暗い議事の間にて、神妙な
面持ちで戦士長と言葉を紡ぐ王の姿があつた。

先日、勅命のもと戦士長含め少数精鋭で構成された八本指討伐隊。
第二王子ザナツクのもたらした文書、活動拠点を示したものや奴ら
と深い関係にあると予想される貴族のリストをもとに、迅速に襲撃計
画は練られた。

討伐隊はそれぞれの入り口から王都地下の坑道へ侵入。

息白む程の低温のなか、彼等が目撃者したのは大量の凍死体と八本
指の幹部らしき8人の氷像であつた。

凍死体の方は身体の芯まで一瞬で凍らされたのか、なんの抵抗も許
されず殺されたであろう痕跡と運悪く体勢を崩し床に散らばつた者
が多数。

そして更に奥に進んだ先、凍り付いた議場らしき部屋で椅子に座つ
たまま、或いは何かから逃げるように床に這いつくばっている8人分

の氷像を発見。

驚くべきことにこの8名にはまだ息があり、仮死状態であるらしい。

全員の顔を照合したところ、うち一人が過去に逮捕歴がある違法奴隷商アンペティフ・コツコドールであると判明、現状証拠とその後の捜査からこの8名が八本指最高幹部であると断定した。

洩る貴族を殴り付けんばかりに一喝した王の鶴の一声によって国宝によるフル装備で意を決して乗り込んだガゼフであったが、いざ突入してみれば戦闘は始まる前に終わっており、とんだ肩透かしをくらう羽目になった。

「恐らく奴等は別の何者かに襲撃された後だったのでしよう。」

地下道内にも関わらず肌に纏わりつくような湿気は一切なく、まるでアゼルリシアの山中かと感じるような冷気と低温。

その中で凍死していた構成員とみられる者たちの姿はほぼ一瞬でなんの抵抗も許されず殺され、放置されたようでした。

……まるで我々に後片付けを押し付ける形で」

「ふむ…」

自演の線は薄いか。

八本指を憎む第三者によって滅ぼされた可能性が濃厚、という事だな」

「国王陛下、俺からも報告だ」

そう言つて飄々と手を挙げたのは厳正な議場に相応しくない着崩した胸元を晒す、どこかラクユースと雰囲気似た男。

隣では当のラクユースがジト目でその姿を睨み、脇腹を小突いていた。

「ちよつと叔父さん、陛下の指名を受けてから発言してよ…！」

御前会議なんだから！」

「良いだろお別に、こういう違和感はさっさと言うに限る」

アズス・アインドラ

アダマンタイト冒険者『朱の雫』に所属する冒険者であり、ラキュースの叔父にあたる人物。

今回たまたま王都に訪れていたところ、友人を失い失意に暮れていたラキュースに見つかり、何も知らなかった彼は声を掛けてしまったのが運の尽き。

説明を受けたあと半ば強引に此度の事件に付き合わされることになった。

本人は渋々だと言っているが、ラナーを失って亡霊のようだったラキュースのメンタルケアをぶつきらぼうながら買って出て、その後も蒼の薔薇とともになんだかんだ付き合ってくれているのは彼なりの優しさなのかもしれない。

「構わぬ、『蒼の薔薇』のツテでわざわざ来て頂いた身だ。

存分に意見を述べてくれ」

「…へへっ、仰せのままに国王陛下。」

ザナツクの坊ちゃんから依頼された場所を全て飛び回って調べてきたワケだが、既に全部潰された後だった。

現場には何も残ってねえ、あつたのは更地になった地面と異常に気温の下がった大地だけ。

「丁度戦士長サマの言ってた地下道の状況と同じだぜ」

あつけらかんと言つてのけるアズスと目を合わせたガゼフは一瞬気まずい顔をする。

2人のファーストコンタクトがどんなものかは知る由もないが、どうやらガゼフはアズスに苦手意識を抱いているらしい。

まあ立場も性格も正反対な二人なのできもあらん、と王は気にせず話を進める。

「…ラキュースよ、貴殿らには八本指の麻薬施設の偵察を依頼してい

たな」

「はい、結果は先程叔父が言った通りです。

指定された全ての施設、密造所らしき畑も貯蔵庫らしき倉庫も全て僅かに痕跡を残したまま吹き飛んでいました」

「補足しておく、破壊痕から見て施設は全て強烈な爆風と冷氣によって“氷砕”された可能性が高い」

「結果麻薬は全部消し飛んだ、辛うじて残っていても極端な寒さに弱い黒粉はもう商品として機能しない」

横から出てきてサラツと一言加える双子姉妹。

「なら話はカンタンだ、地下道で八本指をとつちめた連中と麻薬施設を吹っ飛ばした連中は同一人物で、事は俺たちがガサ入れをする前に全部終えちまった。

それで俺たちは後からノコノコと事後処理の為にやって来て、その場にいた半生半死の幹部共をとつちめたワケだな」

「黒粉は在庫分とこれからの生産分も含めてほぼ壊滅していると言って良いでしょう。」

これで奴等の影響力は大きく削れました」

「この事件の裏で何者かが動いた、という事か…」

「それもタダの人じゃねえ、相当優秀な魔法詠唱者の仕事だぜ。」

おうラキユ、心当たりあるんじゃないやねえの？」

「うえっ!？」

えっえっ…そう、ね…無いことは……ない、かな…?」

「相変わらず嘘が下手かよお前」

突然振られて慌てるラキユースでなんとなく察したアズスは言葉を続ける。

彼女曰く心当たりはあるが、その人物は八本指の関係者とかではなく、少なくとも王国に害なすものではないとのこと。

それだけは自信を持って語る。

察した王もそれ以上言及するのは避けた。

娘を失った怒りはあれど、ザナツクの持ち込んだ文書や時間を空けた事もあり、現在の彼は一旦ではあるが人並みに落ち着きを取り戻している。

それでも娘を殺された激情は今も奥底でふつつつと煮えたぎっているわけで、協力者によつて既に捕らえた賊共には然るべき時に地獄を見せてやるつもりではあるが。

「…尻拭いをさせてしまった、という事だな」

誰に語るでもなく、呟く。

この国の未来を憂う者、しかし直接的な干渉を避ける必要があり、全て裏方で済ませてしまいたい、そしてそれを秘密裏に、迅速に執り行えるだけの力を持つ組織。

心当たりは、ある

そう結論を出し、この会話をただ突つ立って聞いているだけの地方貴族達を眺め、三者三様の態度で聞き入る六大貴族を眺め、息子達に目をやって、最後に亡き娘が居たはずの椅子が目に留まる。

ならば娘は何故逝ってしまったのだろうか。

いや、全ては己の不徳が招いた結末なのだ。

先代から、先々代から甘えていた負債が漸く自分の代に回ってきただけのこと。

燻った復讐の炎の裏で自罰的な考えばかりが過ぎる。

墓に向かつて「先代の背負った負債なんぞ儂には関係ねえだろクソツタレ！」くらいの悪態は吐いてやりたいところだが、そこは培ってきた矜持と責任感で蓋をしておいて。

「ならば是非もあるまい。

蒼の薔薇、そしてアズス殿、急な依頼にも関わらず対応して頂き感謝する。

冒険者組合を通し報酬は後ほど渡す故、ほとぼりが冷めるまで少し

ばかり待って貰えぬだろうか」

本来なら国に頓着しない冒険者組合。

今回も国事に関わる事故強制は出来ないが、ラキユース達は善意で協力してくれた。その好意に対して金でしか返せないのも歯痒いが、この世で一番手っ取り早い感謝の印だ。

「一応はビジネスだからなア。

貰えりやコツチはなんとでも」

「複雑だけれど、謹んで頂戴致します」

「うむ。

王国全土に触れを出せ。

明日、捕らえた八本指幹部の処刑を執り行うとな」

早い話が「見せしめ」だ。

大勢の民の前で、悪を裁くこと。これが未だ潜む悪党共に対して最初にして最も「効く」特效薬となる。

民の怒りの矛先を八本指という悪に絞るとともに、国全体でそのような真似を容認しないという確固たる意思表示を他国に対しても行う事が出来るからだ。

ザワザワと貴族達が騒ぎ出すが今更王の勅命に異を唱える者もいなかった。

この時既に王によって50名以上の小貴族達が捕らえられており、今も収監されている。

どれもこれも王を軽く見た為に口を滑らせた知能の低い者達だった、しかも反逆罪をチラつかせると他の貴族の情報を売り出す始末。それにより芋づる式にどんどん逮捕者が膨れ上がり、現在に至っている。

せめて貴族としての矜持とか持ってねえのか、と担当した尋問官は元々期待していなかったが想像以上（もちろん悪い意味で）の結果に憤りを通り越し呆れ果て、思わず天を仰いだ。彼もそれほど貴族に対

して落胆していたのだろう。

これを機にランポツサ王は今後の王国の在り方について直面しなければならなくなる。

「そろそろ潮時なのかもしれん」

そう彼は呟き、告げる。

「八本指処刑を機に、此度をもつて儂は玉座を降りようと思う」

それは実質的な退位宣言だった。

もとより考えていたことだ。先々代より放置してきた犯罪組織による民からの不審、甘い対応で貴族たちを増長させ続けてきた責任は取らねばならない。

(後継者の覚悟も決まった様だしの)

唐突だからこそ、この場の者たちにはよく効くのだ。

見ろ、六大貴族達の狼狽えっぷりを。

ある者は正道を以て、ある者は邪道を以て虎視眈々と狙っていた王位の座、それが突然目の前に出されてきつと今頃頭の中宇宙猫だ。

「父よ、とうとう決められたか!」

そんな中案の定と言うべきか、いの一番に大声を上げたのは第一王子であるバルブロだった。

通例通りならば正当な王位継承権は彼にある。

通例通りならば

「そうじゃ、今まで決めかねていたが漸く決心がついた。

お前の存在あつてこそだ、バルブロよ」

「おお……」

父の言葉に目を輝かせるバルブロ。

それを聞いた彼と親しいボウロロープ侯が密かにガッツポーズをとる横で、レエブン侯は王の仕草に違和感を覚える。

派閥を渡る蝙蝠は様々な可能性を巡らせ、考えた結果ある結論に辿り着いた。

きつと結末は、皆の思うようなものとは程遠いと

あと帰って最愛の息子吸いてえなあ、と

「儂の跡を継ぎリ・エステイーゼ王国の新たな王となる者を此処に宣言しよう」

「ザナック・ヴァルレオン・イガナ・ライル・ヴァイセルフ」

「彼を後継者として指名する」

「……………はっ」

ひとしきりの沈黙の後バルブロ、目が点。

言い間違いか、聞き間違いか？

王の言葉を何拍も遅れて意味を理解した貴族達が案の定ざわつき初め、異例の決定に彼らの喧噪はあつという間にピークに達する。

「何も言い間違えてはおるまいよ。」

儂は第二王子ザナツクを次期国王として指名する、これは勅命であり覆しようのない決定じゃ」

「王よー！」

一体どういう事だ!!

何故バルブロ第一王子ではなくザナツク第二王子を王に据えるつもりか！」

天国から地獄に突き落とされ錯乱しつつも唾を飛ばしながら必死に叫ぶボウロロープ侯。

実際、彼の言っていることは尤もで、リ・エステイーズ王国において世襲で次代の頭首を決める場合、長男から順に継承権を得る。これは貴族社会では当たり前前の事であり、王族であってもそれは変わりないはずだ。

故に継承権が二位三位の次男や三男は一位の長男が病気や事故等で亡くなった際に一家としての体裁を整える為の替えのきく「スベア」である。

こと王国においては貴族教育は基本的に跡継ぎたる長男が最も重んじられ、続く弟たちにはマナーもしきたりも碌な教育を施しておらず、結果成人しても世間知らずで礼儀のなっていないボンボンばかり…なんてのはザラなのだが。

閑話休題。

ともかく、「長男が家の跡継ぎとなる」のが王国の常道である。それを覆しわざわざ次男スベアを王に任命したランポツサの考えや如何に。

「言ったであろう、ボウロロープ侯。」

此度の決定に至った原因はバルブロ、お前にある」

「何を……ッ!?!」

じつ……と、バルブロを見つめる。

睨めつけるような、隠さぬ不審感、いや敵意すらある。

凡そ実の息子に向けて良い視線ではない。

「みなまで言わぬと分からぬか、息子よ。

貴様、八本指と繋がっておったな？」

「ッ?!?!」

無駄に大きく育った体躯が思わず跳ねる。

額から脂汗が浮かび、息が乱れているのが傍から見ても直ぐ分かった。

「そそ、そんな訳がある筈無いでしょう！」

あの真面目で勤勉なバルブロ第一王子がよりにもよって八本指と関わりがあるなど……

「そうか、そうか。

…ザナツクよ、例のものを持って」

「こちらに」

言われるままにザナツクが取り出したのは羊皮紙の束。

魔法の込められたスクロールではなく、メモ書きや製図などに用いられる一般的なものだ。

なにやらびっしりと殴り書きがなされているようだが……

そのうちのひとつを手に取り広げ、息をひとつ。

「先日、突入したガゼフらが持ち帰ったこの資料には八本指の収支報告が記されておる。

売上を残すため様々な情報が記帳され、それらは厳重に管理されておった。

誰が、何を、幾らで買ったか、事細かにな」

「特に違法娼館の抱えていた報告書は凄まじい量でな、違法である為に面倒な書類が多い」

「何せ娼館という私有地で内々に従業員を奴隷扱いで買わせ、事に及ぶらしいのお。」

抜け道を知った時は呆れを通り越して感心したわい。
部門同士が協力し法を掻い潜りながら…全く賢しい事よ」

ははは、と生気の伴わない瞳のまま王が嗤う。

誰も喋れない、野次も入れない、入れたが最期容赦無く首を刎ねられる。そうこの場の全員が幻視するほどの笑顔に裏付けされた威圧感。

ヒルマとコツコドールの運営する違法娼館。

利用者はヒルマの経営する娼館という外から見えない敷地内で娼婦という名のコツコドールが用意した奴隷を買い、思うまま使う。

通常ならば娼婦にもそれなりの人権があり、酷い乱暴や強姦紛いの行いは店の信用に関わるため御法度だ。

しかし相手が奴隷という名の商品ならばどんな違法性交ハードプレイも思いのまま、訴えられることも無い。奴隷に人権など無いのだから。

そして娼館へ預けるといふ形で商品を保管し、客は店を後にする。私有地で客が商品を購入し、使い、ペットを預ける感覚で娼館へ保管する。

法と照らし合わせても何の問題も無い、この巧妙な手口で二人は他の部門をぶつちぎってあまりあるほど大儲けしてきた訳だ。

…それだけ王国には表に出せない特殊性癖持ちが多い裏付けになる訳だが、是非もなし。

「じゃが必然、書かねばならぬ物も増える。

契約の関係上、例え違法でも奴隷の売買書などはサインが必要らしい」

「その中に、お前の名があったぞ。バルブロよ」

「はっ…!？」

そ、そのような事があるはずが御座いません！

俺がまさか…よりもよって八本指の息のかかった違法娼館にな

ど…」

「そうですねー！

だいたい、名があっただけで通っていると決めつけるなど王に有るまじき行「筆跡」…は？」

「筆跡、じゃよ。」

何年も共に過ごした家族の書く文字くらい、一目見れば直ぐに分かる」

ボウロロップの目が点になる。

娼館内にて商品を購入するには必ず本人のサインが必要。

これは王国内でまだ奴隷売買が法による取り締まりを受けていなかった頃から決まっていた通例ルティンであり、時代が変わっても取引方法に変更を加えなかった。

変更手続きを面倒臭がった奴隷部門、ひいては部門長コツコードルの怠慢である。

また方が一バルブロが正気を取り戻し（戻るわけ無いのだが）八本指との縁を切りたいなどと申し出た場合に際して、契約書を公にする事で王子の信用を失墜させる為の揺さぶりをかける、脅しの道具として保存していた背景もあつたりするが。

最初は王も疑った。

性格に多少の難あれど、自分の息子がまさか犯罪組織に関わっているはずがないと。

関わっているにしても何かしら弱みを握られて協力を余儀なくされているのだと。

けれど発見した奴隷契約書の中に何枚ものバルブロサインを見つけ、それが本人直筆のものであり枚数からして殆ど毎日足繁く通っている事を確信してしまった。

「ざっと見てさっえこの有様なのだ。

よくよく精査すれば他の協力者との繋がりなど容易く看破できよ

う」

「それら全てを纏め、此度の事件を真実へと導いたのが第二王子ザナックなのだ。」

独自の調査により八本指の潜伏拠点及び麻薬保管庫の位置特定を終え、儂に報告してきよった」

皆の視線がザナックへと注がれる。

彼は目を閉じたまま黙って王の言葉を聞き入っているが。

「問おう、バルブロよ。」

お前は継承権第一位の次期国王候補として何を成すつもりでおった？

一国の王として、どのような大義を掲げ国を導くつもりであったのか？」

「ぐっ…」

「答えられぬか？」

「おっ、俺は…！」

民が俺の統治の元豊かに暮らしていけるような国作りを…」

「その為に犯罪組織に手を染めるか？」

八本指がどのような存在であるか、まさか知らぬわけはあるまい」

バルブロは押し黙る。

だってこの男には掲げる大義も正義も無い。

民は王に尽くすのが当然で、王とは民を好きにできる絶対者、程度の認識しか持ち合わせていない。

隣にランポツサという偉大な父が有りながら、王という存在がどういふものか深く考えもしてこなかった。

長兄だから父の跡継ぎとして決まった地位と権力を得て、長兄だから当たり前のように国王になり、国王だから皆を好きにできる。

当然だ、自分は王であり絶対者なのだから。

生殺与奪の権を握り、豪勢な玉座に座って指先ひとつあれば王国の

全てを動かせると本気で思っていた。

そのような樂觀的な考えで今までを過ごし、ボウロロープ侯の娘を娶った頃からその勘違いは更に加速していくことになる。

王になれば全て意のままに操れる

そんな悪魔の甘言に唆され、あるいは己から進んで、次第に傲慢になつていく彼は遂にある日、懇意にしていた叔父からとある組織を紹介された。されてしまった。

ぬかるみ泥濘に肩までどっぷりと、浸かってしまえばもう逃げ出す術もなく。

彼と八本指の癒着は行き着くところまで行き着いて、最早擁護しようのない程にまで至ってしまったている。

「ザナツクは示したぞ?」

犯罪組織の悪辣な企みを看破し、成果を上げた。

民に対し王としての矜持を示した。

お前はどうかのだ、バルブロ」

「ツう!?…お…」

「それがお前だ」

そうため息と共に視線を外す。

それが犯罪者に身を墮とした息子に対し、親として最後の情であつたと、後に彼は思い返した。

「王とは、民が居らねば成り立たぬ。

どれだけ豪勢に着飾ろうと、玉座に座り胸を張ろうと、それを認める者がいなければただの道化に過ぎぬのだ」

「此処でハツキリと宣言しておこう。

バルブロよ、お前に儂の跡を継がせる気は毛頭無い。

次期国王にはザナツクを据える。

八本指と関わった貴様には例え我が子であれ容赦無く罰を与えよう」

「貴様ら貴族もだ。

これまで儂を舐め腐り、民を蔑ろにした挙句、保身に走り身内で脚を踏み合う事しか出来ぬ愚凶共。

貴様らにはほとほと愛想が尽きた。

調べれば八本指との関わりを持つものは直ぐに分かる、首を洗って待つておれ」

我が身可愛さで汚物に手を染めたこと、存分に後悔するがいい。

冷徹に言い放つ王の言葉が玉座の間を支配する。

ランポツサは本気だ。以前より溜まりに溜まった鬱憤が娘を殺された事により堰が切れ、復讐の鬼と化した彼は大粛清を行う勢いで過激な報復を繰り返している。

さながら暴君の如く振る舞う彼を揶揄する者など居ない。

だつて言つてゐる事は全てどうしようも無い正論なのだ。

殆どの貴族たちは椅子ばかり見て、そこに座る枯れ木の王を内心では蔑んでいる。

本当に国を憂い、正しい方向へ導こうとしている者などひと握りのみで、王前での報告も野次を飛ばし隣の脚を引っ張り合うだけの無為な時間と化していた。

挙句の果てには目先の利益に踊らされ、犯罪組織や他国の間諜として機密情報を流す始末である。

各々の領地経営手腕はこの際問うまい、それを差し引いても正に「何処に出しても恥ずかしい」貴族たち。

為政者としての敬意を忘れ、矜恃を忘れ、上に立つものとしての誇りすら忘れ去った、プライドばかりが肥大した、レイラ曰く「悪性腫瘍」。

挙げられる事実のみが胸に突き刺さる。

もちろん、この中に存在する数少ない「まとも」な貴族たちにとつて精神的なダメージなど殆どない。むしろ率先して間違いを正し、強引にでも導こうとする王に対して畏敬の念すら抱いていた。

反論する意思があるとするならば、それは感情のみに任せた浅ましい癩癩にも等しいもの。

本音と建前を使い分け、相手の手の内を探りながら笑顔の背中で中指立て合うのがこの業界の常道。

正論ぶつけられて口汚くキレるなど権謀術数渦巻く貴族界隈で最も蔑まれる愚行だ。無論、それすら出来ない者も在籍してしまっているのが現在の王国なのだが…

その沈黙を破った者がいる。

「巫山戯るなアツツ!!」

「さつきから黙って聞いていれば…」

素質？矜恃？民への在り方？

そんなものは後から勝手に付いてくる、大事なのは誰が王かだ!」

それがバルブロ・アンドレアン・イエルド・ライル・ヴァイセルフという男。

先程までの権威を保つためとっていた態度は怒りで吹き飛び、手を震わせながら口汚く父を罵る。

「ザナツクのような陰気なデブに王が務まるものか!」

それに俺は八本指に吞まれたんじゃない、従えたのだ!

事実、奴等は全滅しただろう?

俺が先んじて接触し、その存在を知らしめたからさ!

ザナツクは最後の成果をかつ攫ったに過ぎん、八本指壊滅の真の立役者はこのバルブロなのだア!!」

この男、とんでもない事を言い出した。

自分は利用されたのではなく利用したのだと声高に主張する。

誰がどう見てもそれは焦った末に考えた見苦しい言い訳に過ぎず、蒼の薔薇の面々やまともな良識のある者は余りの往生際の悪さに皆思わず顔を顰め、あのアズスですら「おいおいマジかコイツ」と肩を竦める始末。

：なんならバルブロはボウロロープ候、八本指と共に王位を得るためならクーデターすら画策する予定であった。

それが八本指壊滅によりおじちゃんになった事がより彼の焦りを掻き立てる。

そんな中

「いい加減にしてくれ兄上!!」

響く怒声に皆が目を剥く。

声の主は椅子から勢い良く立ち上がり、息を荒くしバルブロを睨みつけた。

「なんだザナツク、貴様は黙っている!」

「いいや黙らん!」

いつまでも見苦しいぞ、大人しく罰を受けろ。

これ以上皆の前で王家の恥を晒さないでくれ!」

血を吐くように叫ぶザナツク。

いつもの彼ならば考えられない事だ、少なくとも貴族たちの知る彼はいつも争い事を避けてのらりくらりと場をいなし波風を立てぬよう振る舞う、王候補とは思えない程の情けない姿ばかり、ましてや継承権を掛けて戦う兄との口論などした事はない。

硝子の向こうに広がる曇天から時折稲光が走る。

ザナツクの心情を表すように、怪しい雲行きのまま。

「親父の言葉一つで継承できて急に態度がデカくなったな貴様ア:」

「ああそうさ、父上は俺を選んだ。

それに此処で兄上を止めなきや大事なものを護れなくなる、それだけは勘弁願いたいからな。

「ラナーの死も報われん」

ザナツクは決断する。

きつと此処が王国のターニングポイント転換期。

妹をラナー失い、八本指壊滅に王手を掛け、法国に目を掛けられている中、甘ちゃんだった父はこの国の改革を望んでいる。

ならば配役的に表に立たねばならないのは自分だ。良かれ悪かれ、スポットライトを浴びなければならぬのは自分なのだ。

面倒だなどと甘い事を言っている場合じゃない。

兄ではいけない、それでは自分の本当の願いは叶わない。

民が安心して暮らせる国、弱き者が救われる国、魔法を軽視しない国、プライドとしきたりで錆び付いたこの国を根底から突崩せるチャンスは今しかないのだ。

その為なら、ザナツクは立ち上がろう。

結果が道化でも端役でもいい、湖面に石を投げ水面に波紋を起こすように。

できるなら大きな波紋を、より大きな変化を。

「もう、譲らない」

曇天の空に稲光が走る。

彼の覚悟を祝つてか、呪つてか、轟く雷鳴は不思議と勇気を与えてくれる。

肥えた身体で兄を指さし、脂肪だらけの喉から出せる限界を、あらんかぎり大きな声で絞り出した。

「兄上、私は……貴方を断罪するッ!!」

すべては、新たな恋路一步の為に

◆
「八本指、壊滅したんだってな」

「知ってるよ、今じゃ王都じゅうその話題で持ち切りだ。」

最高幹部達が軒並み捕らえられて、処刑されるらしい」

「今日の昼一番に中央広場で全員一気に殺るんだろ？」

国王陛下も思い切った事するよな…」

「捕らえたのはガゼフ戦士長、流石王の懐刀だよ」

黄金の輝き亭。

掃除の行き届いた小綺麗なエントランスにて耳をそばだてれば、賑わう客達からそんな話が漏れてくる。

この数日間で王国には大きな変化があった。

市井の民たちの耳に入ってくるのは犯罪組織『八本指』の最高幹部達の投獄をはじめ、その悪質な実態を示す情報の数々。

ある者は借金のカタに攫われたとか、ある者は泡風呂に沈められたとか、凡そ市民の憤るような内容を網羅した胸糞悪いものばかり。

大きな触書きと共に大々的に告知された罪状は今や王都じゅうに広がっている。

そんな悪党共の首領達が逮捕され、処刑されるなら少しは民の溜飲も下がろうもの。

実際はもつと醜悪で、疑いを掛けられた貴族から共犯者を釣り上げ、罪を擦り付けようとする事案が後を立たず担当者が嘆く始末の悪さであったのだが。

このタイミングで国王も代替わりするらしい。

リ・エステイーズの新たな王の名はザナック、継承権第一位の兄を追い落とす形で即位する事となった。

噂では兄であるバルブロは前述した八本指との繋がりがあるとされ、それが原因で継承権を放棄せざるを得なくなっただらう。

いち市民には預かり知らぬ事だが、王族内でも様々な内部争いが繰り広げられているのだと思うと薄ら寒くなる。

新しい王は手始めとして、八本指壊滅と幹部の処刑を手土産に民に対して信頼を得る形となる。

だが喜ばしいニュースばかりではない、胸を裂くような辛い出来事だっけ起こってしまった。

「けれどその過程でラナー様がお亡くなりになった。複雑な思いだよ」

「だなあ、可愛らしい姫さんだったのに残念なあ…」

一度だけ姿を見る機会を賜ったが、優しそうで、皆を慈しむあの笑顔がもう見れないとなると…

「やっぱつれえわ」

第三王女ラナーの死。

その可憐な容姿と無垢な姿で皆に愛されていた姫君が、あろう事か犯罪組織の卑劣な手段を用いて殺害されてしまったと報じられた。

国民の負担が少しでも軽くなるような政策を幾つも提案した才人であり、公道の整備などにも尽力して民からの信頼も篤い人物。

そんな彼女の若すぎる死に国民から悲しみの声が止まない。

先に行われた告別式には王都以外からも多くの国民が訪れ、彼女の死を悼んだ。

「姫様は残念だったが、これでこの国もちつとは良くなってくれれば万々歳なんだがねえ…」

ため息と共に肩を竦める。

ハッキリ言って、国民からみても王国は国としてかなりの末期症状であつた。

横暴な貴族、蔓延る犯罪者、収穫時を狙いやってくる帝国戦に備える徴兵制度、他にも細かい事を挙げれば腐るほどある不満に民は辟易とし、明日に希望も見いだせない。

そんな中、新たに選ばれた王はこの国にどんな変化を齎すのか。

期待3割、諦め7割と言つたところだが、自分達の暮らしが少しでも良くなつて、愚痴の種になつてくれれば幸いだ。と、彼らは冗談交じりに笑うのだった。

27 破滅フラグ？・しかない王国編エピソード：

アダマントイト冒険者グループ、『蒼の薔薇』

王国最強の冒険者グループの1つであり、今回の八本指騒動の裏で密かに活躍した功績を称え、叔父と共にそれなりの報酬を貰った。

しかしリーダーの表情は暗い。

別に報酬の額に不満があるとかじゃない、アダマントイト冒険者に到達した時点で金銭事情に困った事はないし。

「気持ちには分かるがよ、あんま氣い落とすなラキユース」

ガガーランに肩を叩かれるも依然として彼女の表情は暗い。

既に国を挙げたラナーの告別式は終わり、元凶であった八本指の幹部たちも仮死状態から解凍された後新王直々の指示の下8人全員が公衆の面前のもと処刑。

国民の罵声を浴びせられ、無様に喚きながら刑を執行される幹部達の姿はとても巨大犯罪組織の首領とは思えなかった。

組織そのものは残っているものの、麻薬という大きな収入源を失った八本指はもはや嘗てのような影響力を発揮出来るはずも無く。

残った末端の構成員たちも排除されるのは時間の問題だろう。あの地下通路には幹部護衛のため他部門に所属していた腕利きの悪党が何人も居たのだが、例によって全員氷漬けのまま帰らぬ人となった為護衛もろくに出来ない烏合の衆だ。

金と権力と戦力を同時に失った八本指の瓦解は砂山を崩すより簡単だった。

それよりも討伐隊が動くより先に襲撃を察した一部の残党は国外へ脱出してまった事が懸念材料である、海を渡った所で足取りが追えなくなっただけの詳細は不明だ。恐らく聖王国、それも治安の安定してない南部付近と考えられる。

また関わった貴族達、その家族にも相応の罰が下る。

悪党に手を貸した者に慈悲など要らない、とばかりランポッサとザ

ナツクの手によつて今も多くの方がその罪を償わされている。

それが新王の最初の仕事であり、今まで蓄積していた膿を吐き出す王国始まつて以来の大粛清。

これによつて派閥の均衡は崩れ、大きな混乱が訪れると予想していたのだが：そこに歯止めを掛けたのがレエブン侯だ。

このことを見越してかたまたまなのか、彼が事前に選別していた有能な為政者の卵たちが指揮を執り、レエブン侯の名のもとに代理として領内の政務を行った。

いずれも貴族家の次男や三男坊、また商人上がりの一般人出身という世襲や身分に囚われない立場でありながら、頭を使い民を導いていく姿は人々の心の支えとなる。

本来なら家督を継ぐことなく、日の目を浴びる事もないはずの者たちが彼によつて登用され、活躍することで混乱は最小限に抑えられた。

「蝙蝠」と揶揄される彼だったが六大貴族の誰よりも国を想い、入念に準備していたのが功を奏したらしい。それに潔白が証明されたペスパア侯も加わり、ザナツクと共に三大巨頭として今も山のような政務に取り掛かっているのだとか。

因みにランポツサ王と旧知の間柄であり、此度の粛清において息子二人を処罰された古株ウロヴァーナ辺境伯も、息子の愚行を容認しながらも本人は潔白だとして比較的軽い処分で済まされている。

それでも全財産の差し押さえや常に王の監視の目が光っているので殆ど保護観察処分状態である訳だが、罪滅ぼしの意味も兼ねた本人のための希望で辺境伯としての人脈や人徳を駆使し一刻も早い混乱収束のため尽力しているのだそう。

それ以外の貴族達の動向はお察しのとおり。

汚職に手を染めた者を今のランポツサ王が赦しておくはずも無く、財産没収の後当主のクビは文字通り刎ねられ、何もかも失ったボウロロープ、ブルムラシユ、リットンの三名家は悲惨な末路を辿る事になった。

名家から没落まで真つ逆さま、当主の犯した大罪を子孫たちは今後

一生償い続けなければならない。

特にブルムラシュー領にあった鉾山とボウロロープ領の私兵達を王家直轄の下統治できる影響は大きく、今後の王国にとって良い影響を及ぼすはずだ。

私兵達はみな戦士長直々に扱われて、将来はまっとうな王国兵士として活躍してくれる事だろう。また今回の掃討作戦においてガゼフら精鋭部隊の働きが顕著になる事で国有軍の必要性を際立たせる事となり、王国では徴兵以外に專業兵士を育成する：なんて計画も立てられている。

リットン領？特筆すべき事は何も無かった、強いて言うなら領主の評判が頗る悪くて家ごと滅んだ時に領民達が大喜びでお祭り騒ぎになったくらいだろうか。どんだけ嫌われてたんだあの男。

なお、この騒動の裏でも静かに法国は動いており、国内で最高クラスの軍事力を持つとされるボウロロープ領の一部の私兵達による暴徒化を未然に抑えたり、各領地の混乱の鎮圧にも隠れて一役かっているのだが、誰も知る由もない。すべては「見知らぬ善意の一般人」の手によって行われた。

そしてそんな貴族達と八本指に唆され、反逆罪の片棒を担いだ第一王子バルブロ。

彼は今後一生を牢の中で過ごすことになる。

議事の間であの後激昂し、ザナックへ殴りかからんばかりに詰め寄った彼を止めたのはガゼフ戦士長だった。

私欲に走り犯罪者となった兄と国のため勇気を振り絞り立ち上がった弟、どちらを守るかなど言うまでもない。

調査の結果、三名家と八本指まで巻き込んだ大規模なクーデターの計画書まで見つかかり、いよいよ言い逃れ出来なくなったバルブロは投獄。

誰の目にも止められず、緩やかに死を待つだけの終身刑。それが彼に与えられた罰だ。

本来なら幹部ともども処刑されるのが常であったが、新王ザナツ

クの温情により幽閉処分を受ける。

有事が起こった際の首切り要員という側面もあるのだろう。

ともあれ、今後一切表舞台に出てくる事はない。

かくして王都における八本指動乱事件は幕を閉じる。

仇は取った、悲願だった麻葉撲滅も達成し、王国の未来は護られた。なのに親友を失った事実はラキユースの心を今もじくじくと蝕み続けている。

アズスのカウンセリングによって一度は持ち直しつつあった彼女も、全て終わった後には喪失感しか残らない。

「大丈夫鬼リーダー、おっぱい揉む？」

揉ませてくれてもいい」

「……………」

「じゃあ遠慮な…ふぎやっ」

おもむろにラキユースの胸元に手を伸ばすティアにガガーランが拳骨を落とすも、当の本人はどこか上の空。

「痛い、私なりに気を使ってるのに」

「どこがだよ」

「ちゃんと相手に了承を得た」

「得てねえだろ、ラキユース無言だったぞ」

「沈黙は肯定と同じ」

「んなわけねえだろ人の心とかねえのか」

そんな漫才も何処吹く風か、宿の窓から街を眺めるラキユースに2人はため息を吐く。

頼りにしていたアズスは報酬を貰ってさっさと帰ってしまったし、頼る術がない。

抜け殻のような彼女にかける言葉も見つからないと、頭を抱えていたそんな時。

ノックの音が部屋に響く。

ここは安全な宿内なのだが、一応それなりにティアが警戒し、呆けるラキュースの代わりにガガーランが応答する。

「あいよオ、どちらさんで」

「スレイン 法国より参りました使節団の者でございます。

先の事件でご活躍なされた蒼の薔薇の皆様にご挨拶をさせて頂きたく思い、参りました」

「ああ〜…悪いな、今ちよつと立て込んでんだ。

面会は今度にしてくれねえか？」

「そうですか…それは残念です。

我々はもうすぐ国へ戻らないといけませんので。

では…こちらをお渡ししておきますね」

「……？招待状かこりゃ、オレたち5人分の」

「はい。

此度の皆様方のご活躍、総司令様はたいへん満足しておられます。つきましては慰労も兼ねて小規模ですが宴を催しておりますので、

その招待に」

「なるほどねえ、ウチらからすりゃ複雑だが…

一応は受け取つとく、行くかどうかは他の面子と話してからだ」

「参加は自由ですのでお気の向くままにどうぞ。

来ていただけるのであれば、美味しいお酒と料理でおもてなし致します、と総司令様は仰せです。

サプライズも用意しているので楽しみにしていて欲しいとも」

「サプライズう？胡散臭えなあ…」

「ふふふ…それでは、失礼致します」

「はいどーもどーも」

そう告げて去っていく法国の使節、そういえば宿が一緒だったなど頭の隅で思い出した。

「ラキユースはどうする？」

漆黒聖典サマから直々に宴会のお誘いだだよ」

どうするも何も、お通夜状態のラキユースからして行くのは無理な話だ。

会場はおおかた例のレストランだろう、前に食った時の飯はかなり美味かったし自分好みの味付けだったから参加したかったな…と心の隅で思っていたガガーランは肩を竦め、招待状をラキユースへと手渡した。

「……………そう」

ぼーっと窓を眺める。

王都でできた初めての友人。

貴族なのに冒険者になるという自分の突拍子もない提案を笑って了承し、アダマンタイト級に上り詰めた今でも変わらず接してきてくれたラナー。

一緒にお茶を楽しんだり、新しいマジックアイテムを興味深そうに眺めたり、近衛のクライムとの馴れ初めを顔を赤くしながら語ってくれたり。そんな光景ばかりが脳裏によぎる。

(ラナー…やっぱり貴女がいないと、私…)

喪失感に暮れて抜け殻のようだった彼女の手元には、あの漆黒聖典からの招待状。

ふと、中身を出して内容を目で追った。

まだ吹っ切れた訳じゃない、けれど陰鬱なこの気持ちを少しでも切り替えたくて口に出す。

「……………いいわ、行きましょう。」

せつかく催してくれたものを無下にするのも心苦しいし、彼女に

限って罨という事も無いでしょう」

彼女：漆黒聖典の女は言動こそ怪しく、芝居がかった口振りで自分たちを何度も欺いては水面下で勝手に行動してはいたけども、一貫してそれは八本指の撲滅、ひいては初めて話した時からずっと王国の浄化の為だった。

その行動には王国への誠意がある。

地下通路の件もきつとあの人が先んじて制圧していたのだろう。

あの場に居た八本指、普通に王国軍が突入していればその地形と入り組んだ通路で時間を稼がれ、幹部達を取り逃したかもしれない。そのようなミスが万が一にも起こらない為に先手を打たれた。

アズスが御前会議で語ったように、「お膳立てされていた」のだ。

重要人物は生かし、残りの厄介な警備たちのみを葬り去った事により組織は著しく戦力を欠き、王国軍でも対応できるまでに弱まっている。

公開処刑によって高まる国民の支持、麻薬の在庫一斉処分、汚職貴族の摘発など、当初は他国の介入に不安だったものの蓋を開けてみれば王国の大勝利だった。

それもほぼ全て法国が先んじて接待して、いい所だけを王国^{我々}がかつさらう形で。

(計画も作員の手際も超一流、到底王国には真似出来ないレベルの仕事だった。

人類救済を本気で掲げているだけあるわ)

羨ましくない、と言えば嘘になる。

王国が如何に脆いか、600年という国家の重みをラキユースは今回肌で感じる結果となった。

(あとカツコよかったし…)

ミステリアスな氷の魔女…まさにクールな仕事人って感じ、ああい

うスマートなカツコ良さも今後の参考にすべきかしら)

あとレイラを見て変な電波も受信してた、大丈夫かこの女。

「そうと決まれば買い物に出てる2人にも知らせないと」

「おいおい大丈夫かよ、誘った手前お前さんの調子が戻らねえまま行くのは…」

「心配してくれてありがとうガガーラン、でももう平気。

少しでも調子を戻したいから出席するの。

それにあの店の味、気に入ってたのよね」

「ハハツそりや同感だ！」

落ち込んだ時や美味いモン食うに限るぜ」

「お、調子戻った鬼ライダー。」

では慰労も兼ねて胸をひとも…み、っ」

「余計な事してないで早くティナ達に伝えてきなさい！」

「いけずう…」

ラキユース怒りの鉄拳を食らい、頭にたんこぶを腫れ上がらせながらぶーたれるティアは窓から跳ぶ。

それを見送って、彼女もガガーランと共にパーティ出席の準備を始めるのだった。

.....

「ようこそ蒼の薔薇の皆様、お待ちしておりました」

レストランの中はお祭り騒ぎといった様相で、誰も彼もが酒瓶片手に騒ぎあっている。それはレストランというよりは酒場のような雰囲気、蒼の薔薇の面々はそれはそれは歓迎された。

しかしこのレストランに居るのはほぼ全員が工員だということだから素直に喜べない、前みたいに急に黙って見つめられるのは心臓に悪いから勘弁して貰いたい。

「駆けつけ一杯！」と差し出されたグラスをやんわりと断りながらガーランへ流し、彼女が景気よく飲み干して店から歓声上がるのを見届けて、店員に案内されるまま5人は2階の個室へと向かう。

「総司令様、失礼致します。」

蒼の薔薇の皆様をお連れ致しました」

「入って貰って頂戴」

「はい。」

どうぞ皆様」

言われるがまま入室した先には7人ほどが座れる大きな円卓と、それぞれに席が用意されており、軽装にエプロン姿で髪を纏めたレイラとメガネの店員、《占星千里》が出迎えてくれた。

「ようこそ皆様、さあ座って下さいな」

座るよう促され、卓へと腰掛ける。

「あらためまして、この度は任務遂行の為の御協力感謝致します。」

おかげで円滑に仕事を終える事ができました」

「蒼の薔薇の皆様が望まれるなら法国からも相応の報酬をご用意致しますが、どうしますか?」

《占星千里》の問いにラクユースは迷わず首を横に振る。

「いいえ、王家から既に結構な額を貰っているからもうこれ以上は遠慮するわ。」

「お金に困ってるわけでもないし」

因みに、レイラが八本指を釣るために用意した100万枚の金貨は後の謁見の際、正式に王家へ引き渡された。法国はまだ様子見ではあるが、このまま王国が良い治世を保てるのなら嘗てのように支援を続けるつもりらしい。

これは王国のバックに法国が着く、と言外に語ってるようなものであり、今後の近隣諸国との関係構築にも影響を及ぼす事だろう。

今の王国なら邪な貴族に横槍を入れられることも無く、100万の大金も正しい使い方を成すはずだ。

「あらそう、無欲ですよのね」

「何となくそんな気はしてたけど…」

「分かりました、そのように」

「それにしても八本指の処刑はともかく、新王陛下が貴族達の大粛清まで速攻で行うのは予想外でした。」

『鉄は熱いうちに打て』って事かしら。

確かに証拠は抑えましたけれど、そこまで思い切った方針を取るなんてねえ」

「やっぱり貴女達が密かに汚職の証拠を彼へ渡していたのね。」

「どうりで気味が悪いくらいスムーズに粛清が進むと思ったわ」

ラナー経由でザナツクへ、ザナツクからランポツサへと渡った資料は本来ならばレイラが抑えていた貴族達の汚職の証拠。

本国に報告すらしていなかったそれを王国の判断に任せるのは賭けだったが、上手く働いてくれたようで何より。

「うふふ、これでも貴女達には感謝してますのよ？」

「さあ、難しい話はここまでにして。」

目標達成のご褒美として簡単ですが祝賀会と致しましょう！

私、腕によりを掛けて作っちゃいますわよ！」

「えっ!? 貴女が作るの!?!」

「何か問題でも？」

心配しなくても毒や薬なんて仕込みませんから安心なさい。

私、料理には真摯に挑んでますので」

そう胸を張るレイラからは氷のような雰囲気は感じられない。

随分と暖かい、お節焼きの姉のような印象を受けた。

驚くラキユースだがこっちが素のレイラなのだ。

仕事とプライベートは分けるデキる令嬢（自称）。

鼻歌と共に次々と料理を作り上げていくレイラを見ながら、コソコソとガガーランが隣のイビルアイに呟いた。

「なんか随分と雰囲気変わったな」

「油断するな、作業員だぞ。」

それに私が食えない事を分かっている癖にあんない匂いさせやがって、くそう……」

イビルアイは吸血鬼、アンデッドだ。

この世界のアンデッドは匂いは嗅げるが食事ができないルール、どうゆう理屈か分からないが、飲み込んだ食べ物消化出来ず舌の上で灰になる。

なので吸血鬼になってこの方食事など取ったことがないのだ。

普通のアンデッドなら食事の有無など気にしないだろうが、彼女は理性ある吸血姫（特殊個体）ゆえにそれがもどかしい。

「《占星千里》ちゃん、そろそろ完成しますから彼女を呼んで来てくだ

「さいますか？」

「あーはいはい、りよーかい」

そう《占星千里》と呼ばれた少女は奥の部屋へと消えてく、間もなくして大量の料理をレイラが円卓に並べ、大皿に肉料理を中心とした品々が食卓を彩った。

「ほっほっコリヤすげえや、特殊部隊ってのは料理の腕も一流じゃないといけない決まりでもあんのかね」

「淑女の嗜みです、ここのレストランにメニュー提供したの私ですし」

「…マジか」

「マジですわ」

「…？席が1つ空いてるみたいだけど、さっきの娘が座るの？」

「いえいえ、実はもう1人サプライズゲストがおりまして。」

少し前から贅沢な居候が私の所に転がり込んで来たんですよねえ」

呆れたように呟くレイラに首を傾げていると、先程《占星千里》が入っていった扉が開け放たれ中から少女が顔を出す。

パジャマ姿でいかにも寝起き、前髪は垂れ下がり髪留めを使い辛うじて確保した視界から眠たげな瞳を覗かせる、見覚えのある少女。

「ちよつと姫様！…あ、元姫様か。」

「せめて着替えてから出て下さいよ！」

「いいじゃないですか別にい…」

「せっかく王家のしがらみも無くなったのだから今くらい好きにさせ…………て………」

蒼の薔薇の面々が吸い込まれるように少女へ釘付けになる、それに気付いた少女は一瞬跳ねてから猛スピードで《占星千里》を連れ目にも止まらぬ速さで扉の向こうへ舞い戻った。

『…私の見間違いかしら《占星千里》様、どうしてラキユース達が此処にいるのかしら』

『先輩が呼んだんです』

『私の生存は極秘情報ではなかったの!?!』

『貴女が友人に黙って姿を消そうとするからでしょ。』

もう直ぐ王国を旅立つから最後に皆で腹割って話をしようって先輩の計らいです、早く着替えてホラ』

『あの女ツ……』

『初めて会った時と比べてだいぶイメージ変わりましたよね…』

なんだろう、なんか扉越しにブツブツ聞こえる。

それからしばらくして、ドタバタ音が聞こえた後に再び扉がゆつくりと開く。

「え〜つと…ラキユース、久しぶり…?」

死んだはずのラナー姫が、簡素なワンピース姿ではにかむ笑顔と共にそこに居た。



という訳でえ〜つと…本日はスペシャルゲストのラナー様にお越ししいただいております!

わあーパチパチですわー、ドツキリ大成功ですわー

蒼の薔薇の貴重な呆然顔、私でなきや見逃しちゃうね。特にラ

キユース、鳩が機関砲食らったような顔してます。

何を隠そうラナー姫、私と話したその日に連絡を取ってきて「私に良い考えがある」って提案してきたんですよ。

自分は死んだ事にして、ランポツサ王やザナックを焚き付ける作戦は目論見通り大成功。結果として八本指討滅に留まらず六大貴族が崩壊するほどの大戦果、王国始まって以来の大改革を招いて事態は収束しつつあります。

麻薬の脅威も消え、国も浄化されめでたしめでたし……ってんなわきやねえ〜ですわよ!!!

本来なら生かして安全に亡命させる算段だったのに、あの姫様が急に予定捻じ曲げて死ぬとか言い出すもんだから計画を大幅に変更するハメになりましたわ!

なーにが「第三王女死亡のインパクトで王国に揺さぶりをかけて、八本指を誘き寄せるためのさらなる餌になるし、私も重責から解放されて一石三鳥ですね」ですか!

貴女がさつさと逃げたいだけでしょ!

突貫工事で現場と死体偽装するのにどんだけ苦労したと思ってるの!?!納期直前の仕様変更とか現代日本のお排泄物企業だけになさしい!

タダでさえ働き過ぎな水明の皆さんが過労でぶっ倒れちゃうでしょーが!

しかもあの女、私が必死にチャート練り直してる間にこっそり風の巫女ちゃんとマジックアイテムで映像繋げてクライム君を四六時中監視してましたものねえ!?!

巫女の働かせ過ぎだつて風花聖典からクレームが来ましたわよ!

ラナーったら死を偽装して王女の責務から解放された次の日から外出禁止なのをいい事に部屋に引きこもつて、随分楽しそうに『The・無限耐久クライム監視室24時』やってましたし、こまめに水分を補給してると思ったら取り替えるシートが毎回やたら湿ってるってハウスメイドから苦言を呈されたのですが。

サカリ過ぎじゃないですか?この後ラナーは彼を迎えに行くつて

鼻息荒くしてましたけど、王女というタガが外れて理性までトんじやったのかしら。

ハッ!?もしかして原作とは違うタイミングでラナーを自由にしてしまった反動が…?

悪魔に誑かされないルートの彼女から責務としがらみを取り上げたら、後に残ったクライムへの執着心が暴走して、それでも画面越しにしか会えないお預け状態に陥った結果溜まりに溜まった愛欲で『クライム絶対犯すウーマン』が誕生してしまったのか!?

これも人の愛の形ですけど、拗らせ過ぎでしょ!千年先も見通す頭脳がピンクに染まりきってません!?

こんなの解釈違いでは!いや正史通りの完全異形化精神モンスター小悪魔ラナーちゃんもお断りなのですが!

邪悪なデイズオープリンセス化するより全然マシなんですけども!

それにしても生活環境が変わった途端姫だった時の面影は消え失せて、ズボラで生活感丸出しの少女ラナーが爆誕してしまっただ訳ですが、これも彼女のクラススキル『ジーニアス』の影響なのでしょう。

確か原作はほぼずっとクライムと一緒に描写されていまして、姫という皮を被りながら彼のためにずっと演技をしていたのでしよう。

ラナーの『ジーニアス(希少クラス)』は「基本職の置き換え」だったハズなので、『姫君』^{プリンセス}という基本職を得ていた環境が王女の立場を捨てた事により置き換わって『自宅警備員』^{引きこもり}に転じた可能性が微レ存…?

ええ…(困惑)

ゲームの世界って怖いですわ。

「ねえ」

「これはどういう事?」

「詳しく、説明しなさい。」

私は今冷静さを欠こうとしているわ」

おおおお落ち着きなさいラクユース、とりあえずその無表情で構えてるキリネイラムを鞘にお戻しになつて？

「見たままですわ。

実はラナー、死んでませんでした。

王を焚き付けて国を回す為の引鉄になる為に死を偽装したんです、効果はご覧の通り。

王国には劇薬を投入してでも反省してもらう必要があった、それだけですよ」

「…ッなら内通者の私に一言言ってくれても」

「貴女は既に失態を晒した後でしょう。」

あの時点で隠し事には向いてないと悟ったので今回は敢えて知らせずにおきました」

いやー名演技でしたわね。と素知らぬ顔で言つてやるとぐぬぬ顔のラクユース、顔芸の面白れえ女ですわね！

「あまり彼女を責めないでラクユース、元はと言えば私がお願いしたの。

私が表舞台から去る程のショックならお父様はきつと本気になつてくれる、そう確信していたから」

「ラナー……」

「第三王女は死んだ、此処にいる私は名も無い屍。

後悔はないわ、国のため私が望んだ事だもの。

…それに懂れてたのよ、もし『王族のしがらみも第三王女の責務もない、普通の女の子』で居られたらつて。

こんな形で夢が叶うとは思ってなかったわ」

「つじやあクライムとは……」

「ええ、この祝宴が終わったら迎えに行くつもり」

ラナー、ニツコリというかニチャア…って感じの笑い方なんですけど。

ラキュースは感動のあまり細かい所気にしてませんわね。

「そう…：…ッ」

「ごめんなさい、心配かけて。」

私はもう大丈夫だから」

ぎゅつとラナーを抱き締めるラキュース、感動的な友人との再会を堪能して貰いましょう。

これが演技だとしても、良い友人を持ったのですから大事になさ

い。
この祝宴は事前連絡無しなのでラナーにとってもサプライズでしたけど、決してチャート変更の意趣返しとかではありませんよ？だから私だけに見えるように睨みつけてないで下さいまし、おほほほほ。

さあ、これで王国の問題は万事解決！

八本指幹部の処刑風景は議会にリアルタイム中継致しましたし、これで神官長のお歴々やルーファス様もご満足してくださることでしよう。

ヨシっ！

あとはこのまま原作開始後の蒼の薔薇の幸運を祈りながらラキュース達と戯れて、ラナーと一緒に捨てられた子犬ちゃんを回収すればこんな国さつさとオサラバですわ！

そうそう、隊長に渡すよう言っていた聖王国にいるケラルト様宛の招待状、ちゃんと渡してくれたかしら。

聖王国も法国に劣らずの被侵略国家ですし、同盟を通して色々サポートしてあげたいのです。

1番はケラルト様とカルカ様の御身の安全とレメディオス様の精神の安全を守護ってあげたい（切実）。

いやほんとに、書籍読んでて心が痛くなりましたわよ。

聖王国なんも悪い事してないのに！

種族的に主人公とは相容れないだけなのに！

！
たまたま立地と条件がデミえもんのお眼鏡に叶っただけなのにい

あんなやり方○惨様だつてドン引きですわよこのドブカス！

道行く村々がぜんぶ皮剥ぎ羊皮紙工場になってたら私、正気を保てる気がしませんわ！

うう……あの惨劇を思い出すとまた下っ腹がキュウウツとします。本の中の出来事ではなく現実で起こりうる未来なのが余計に…

ふざけるな……ふざけるなツ!!馬鹿野郎ツ!!

うわあああああアツ!!

……………フウ……スつとしたぜえ。

迫る破滅フラグでトチ狂いそうな時は叫んで落ち着くに限ります。

ちゃんと心の中だけで叫んでるので無問題、モウマンタイイマジナリーレイラは今日も絶好調ですわね。

あ、イビルアイにも招待状渡しときましよう。

ツアー様やリグリット様とも連絡する手段を持ってるでしょうし、お誘いして一緒に魔巧同盟に触れてもらっても良いかもしれません。

特に『始原の魔法』についてはツアー様に聞きたい事が山ほどありますし、良い機会ですわね。

… 確か原作では位階魔法が浸透してから使える者が居なくなつたと記載されていたハズですけど、私と《無限魔力》セレスティアの推論が正しければ…

まあ解明出来たところで人の器に収まる規模の魔法では無いのですけど、破滅フラグ回避の可能性のひとつとしてやるだけ試しておかねばなりません。

フールーダ様然り、各々が雁首揃えて語り合う場って超大事です

し、この機会にガッツリ魔法の可能性について談義したいところ！

つーか原作開始前に王国が（多少）マシになってラナーも不在つて、アインズ様どうやって魔導国を建国するつもりなんでしよう…

アレ？

これって原作改変なのでは
!?!?!?
（n回目）



しとしと雨の降りしきる、王都へと繋がる街道の端を行く。

どんよりとした空は分厚い雲に覆われ、昼間にも関わらず薄暗い。

王都へ繋がる道として舗装された街道は 荷馬車が歩くには便利だが、こうして歩いていると何処か冷たい雰囲気を感じさせた。

王都内は未だ新王擁立と八本指壊滅でお祭りムード、外は雨にも関わらず建物に人はいっばいで、酒場なんかは稼ぎ時だと昼から店を開け案の定いっばいだ。

そんな中、人っ子一人いない雨の街道を歩く少年がひとり、雨に濡れるのも構わず幽鬼のような足取りでぼつりぼつりと歩いていた。

かくして悲願の八本指討滅は成った。幹部の首は晒され、復活の余地を無くすため身体は茶毘に伏されることとなった。

汚職貴族たちも次々とその化けの皮を剥がされた（半分くらい自滅だが）後殆どが温情の余地なく罰された。

皆の頭を悩ませていた麻薬も軒並み消滅し、もう王国に蔓延る事は無いのだろう。

民に笑顔が戻り、王国は他国からの信用を取り戻す。生まれ変わった王国はきつと繁栄の道を辿るだろう。

なのに周囲の浮ついた雰囲気には目もくれず少年の胸にはぽっかりと穴が空いたまま、ふらふらと街をさまざまに迷っていた。

着ているのが高価な白金の鎧でなければ浮浪者にでも勘違いされたいだろう。

「……………俺は、何をしていたんだ」

嘗て己を救い、傍で守護し続けてきた存在。

ラナー姫は死んだ。

王国を救う為の代償だと言わんばかりに、犯罪組織の手によって殺された。

自分は何をしていたのだ。

姫専属の護衛と謳っておきながら、いざという時にはなんの役にも立てない。

精々が第一発見者になるのが関の山だった。バルプロの言う通り、近衛を務める自分が有事に側へ居れなかった時点で殺したも同然だ。

問題が解決したあともガゼフ戦士長は自分を気遣い、色々とな配属先や転属の道も示唆してくれたが、王都で自分が自分で居られたのはラナー姫の護衛だったから。

それすら無くなった自分には最早居場所などありはしない、彼の誘いを丁重に全て断って、こうして路頭に迷う。

なのに姫から貰ったこの鎧だけは手放せず、場違いな自分と対照的に雨に濡れてもなお輝き続けるこの鎧を酷く疎ましく思った。

だがこれを捨ててしまえば、姫との大切な時間すら無くしてしまう。

思い出が呪いのようにのしかかり、鎧の重さをいつもの何倍にも感じる。

「ふざけるな……ふざけるなよ……馬鹿野郎……ッ」

雨と一緒に涙がボロボロとこぼれ落ち水たまりに溶けていく。失意に暮れて歩くうちに、いつしか人目の付かぬ場所へ辿り着いていた。

そこは自分とラナー姫が初めて出会った場所。

なんてことは無い、街道沿いの一角だ。

ボロ切れを服のように纏い、文字通りゴミの様だった死にかけの自分をどういふ訳か彼女は拾ってくれた。

不衛生でマナーもなっていないガキを彼女は見捨てずに、文を学ばせ、剣を学ばせ、近衛として傍に置いてくださった。

自分を傍に置く事で貴族達に心無い言葉を吐かれても、兄弟に揶揄われてもなお自分を手放さなかった。

亡くなられてからも皆に愛され、最期まで清廉であらせられた。

なのに自分はどうか

恩を返すどころか近衛として最低限の仕事すら果たせていない。

養われるだけの穀潰しではないか。

幹部は皆処刑され、残党ももう烏合の衆だ。復讐の機会すら失った。

膝から崩れ落ち、街道の隅にずぶ濡れのまま蹲る。

雨で身体が冷え、連日の寝不足と食事不足で身体は鉛のように重い。そこに精神的な負荷が重なって、今にも力尽きてしまいそうだ。

しかし己の無力を、無知を、無能を呪い、いつそのまま凍死しても構わないと本気で考えていた。

ラナーの居ない世界に自分が居ても意味は無い、絶望に囚われた思考と判断力は己が思うより弱く、脆い。

重くなる瞼、雨の音に消えるようなか細い声で嗚咽と共に呟く。

「もう……しわけ……ありません……」

ラナー……様……ッ」

「こんな所で蹲っただけでは風邪を引いてしまいますよ？」

馬車の止まる音。

扉が開き、差し出された傘に思わず顔を上げた。

凶らずもそれは、あの日の自分を救ってくれたのと同じ構図で。

「ラナー…さま…どう？」

夢か幻か、死んだはずの主が目の前で微笑んでいる。
嘗ての時と同じ、天使のような柔らかな表情で。

「迎えに来るのが遅くなってごめんなさい。

さあ、クライム」

今度こそ、私に付いてきてくれる？

差し出されたその手が幻でも構わない。

冷える身体で最後の力を振り絞り、騎士としての矜持も忘れ、縋り着くようにラナーへと抱き着いた。

「らなーさま…ッラナーさまッ…!!」

「あつ…♡うん♡…もう、クライムだったら…♡」

優しく頭を撫でられる、それだけでいい。

これが死に際の幻だとしても今は…

「ラナーさま…俺…は…」

彼女に触れていられる喜びに浸りながら、重くなる頭と意識に思考

が溶けていった。

「……………クライム？」

「どうやらかなり衰弱しているご様子。

手当もしないといけませんし場所を変えましょう。

貴女も馬車の中に戻りなさい、人気が無いとはいえ誰に見つかるか分かりませんわ。」

「はい…」

ああクライム、こんなに冷たくなって…私がない間一人で悩んで、苦しんで…

私が居なくてさぞ心細かったでしょう……………ふひっ

「ニチャニチャ笑ってないで貴女も手伝う。

イチャつくのも彼の体調が戻ってからになさい」

「分かっています、分かっていますよ？

うふふっ……………ふふふふへへ……………♡」

「何このヤベー女（驚愕）」

◆
『止めろ！今すぐ止めさせろ！』

俺は八本指窃盗部門の長だぞオ！』

『クソがア！クソ王族が！必ず殺してやる！』

『ヒィ〜嫌あー死にたくない！』

〜こんな所で死にたくないわアー!!』

広場に特設された処刑場に8人各々の不協和音が響く。
磔にされ、首を晒された彼等の運命など誰が見ても明らかだ。

『死ね！死んじまえ八本指！』

『アンタらのせいでウチの倅（せがれ）は死んだ！』

『ワシの孫もじゃ！報いを受けろ！』

『死んで呪われる人でなし共オ!!』

罵声飛び交う衆人環視の中、現れた新王ザナツクが淡々と罪状を読み上げる。

羊皮紙に纏められたのはごく一部に過ぎず、本当は何巻にもなる程彼等の罪は積み上がっているが、全部数えればキリがない。

読み上げが終われば、あとは簡単だ。

今まで何人の罪人の血を吸ってきたのだろうか、赤錆と鈍色に輝く巨大な斧を引き摺って登場した処刑人に幹部たちは同様に悲鳴を上げ、更に喧しく喚き立てた。

そんなから騒ぎも王による死刑執行の合図まで。

一人、また一人とその首を落とされ、やがて最期まで枷を力づくで抜けようと騒いでいたコツコドールの首が宙を舞ったのを最後にザナツクが声を大にして言い放つ。

『聞け！』

私はあらゆる不義、悪徳を赦さない。

我が心はいつも民と共にある、お前たちの信あるからこそ私がある。

此処に誓おう、新王ザナツク・ヴァルレオン・イガナ・ライル・ヴァイセルフは偉大なる父に代わり、亡き妹の誇りと共に新たなリ・エステイーゼ王国を皆と共に歩むと！

約束しよう、お前達が後の世に王国民であったことを誇れるように！

100年先、1000年先の子孫達に胸を張れるよう、全力を尽くす！』
だから私に付いてこい…ッ!!

そこにおわすはいつもの第二王子ではない、『覚悟』の決まった男の力強く覇気の有る叫びが響く。

父から王の装いを譲り受け、王冠輝く恵体の王がマントを翻した。怒号が歓声に変わる。悪を誅する新たな王の誕生に国民が沸く中、それを映像越しに眺めていた神官長一同は満足そうに頷き、視線は同じく映像を共にするルーファスへと移った。

本来なら同席することすら不敬にあたるが、御身きつての提案で供をする事を許された。それだけで神官長達は皆万感の思いである。

“うん”

響く短い頷きと零れる御言葉。

それだけで名だたる神官長は理解した。

漆黒聖典の仕事はご満足頂けるものだったと。

“《獄界絶凍》らが戻り次第、漆黒聖典全員を集める”

“法国民へ向けて触れを出せ”

「はっ…ルーファス様、それは…」

“私が直に話す”

今まで秘匿されていた神の使徒が表舞台に現れる、それ即ち…

“人を変えるのに600年は充分過ぎた”

“父の遺したお前達を護り、導くのが私の使命”

“500年も遅刻してしまっただけだ”

「全国民に対して演説を行うおつもりですか…!」

使徒の御言葉の途中で口を挟むなど不敬罪で無礼討ちも百も承知だが、それすら忘れる程の驚愕。他の神官長が驚愕に表情を染めるなか、震える声でレイモンの絞り出した眩きにルーファスは首を縦に振った。

使徒の復活、それを全国民に対して発表する。

一般の国民はルーファスの主人であるスルシャーナと共にレプリカが年間行事等で一般公開されている為、詳細は知らずとも偶像の存在として認知しており幸いにして一定の知名度はある。

それよりも現人神として存在するルーファスが表に出る事で、今まで燻ってきたスルシャーナ教がその勢力を増すであろう事が容易に想定できた。

なんせ他の教えと違い、スルシャーナ教に限りそのNo. 2が存命しているのだから。

信徒からすれば永年推してた空想上のアイドルが突如現実に降臨したようなものだろう。

絶対に狂喜乱舞する、各宗派の代表者でもある神官長は信徒の立場を自分に置き換えてみればよくよく理解出来た。

だが同時に他宗派からの反発も予想される、特に真逆の思想が強いアーラ教徒からは強固な姿勢を取られるかもしれない。

それすらも加味してルーファスは表舞台に立つ。

“人外蔓延るこの世界において、ヒトの存在は余りにも小さい”

“けれど私は、それでも前に進む事を止めない者たちを知っている”

“暗闇の中、必死にもがき得た光の尊さを知っている”

“バ：父の惚れ込んだ人類あなたたちを知っている”

“だから私も諦めない”

“お前達は、どーする?”

偉大な父の面影を追い、彼が遺したものを護るため。

手札は決して多くは無い、ユグドラシルとは違い国民一人一人に意思があり、目を覆うような醜態や、背けたくなる邪智も時にはあるだ

ろう。

だが人の輝きが何より尊い事であるとルーファスは知っている。レイラがおり、自分が目覚めた事がその証左なのだ。

その輝きを絶やさぬため、500年前のように理不尽な悪意から皆を護るために彼女は顕現した。

もう何度目かも分からない、脱水症状になるんじゃないかと思うくらい量の涙を床にぶちまけながら、神官長達は深く深く頷いた。

驕りを捨てよ、我等と共に歩め。

神の救いは此処にある。

600年の時を経て、奇跡は我らの下に降りて来てくださったのだと。

その事実を受け、同じ時を生きる事を赦された喜びを噛み締めながら、彼らは嗚咽混じりに肯定の意を示すのだった。

28 破滅フラグしかない原作開始前小話集 上

・新王の憂鬱・

リ・エステイーゼ王国。

麻薬と犯罪組織を巡る一連の大きな動乱の後、一旦は落ち着きを取り戻した王都場内、国王の執務室にて。

豪華な執務机に頬をべったりと突っ伏しながら溜息を吐く肥えた男の姿があった。

「無理だろ…コレ」

虚ろな表情の先にあるのはうずたかく積み上がる書類の山、山 a n d 山。

かのアゼルリシア山脈を彷彿とさせる紙束の霊峰が執務机に…いやそれすら通り越して来客用の卓にまで広がり、鎮座しているではないか。

「くそ…八本指め…！」

面倒事を全て押し付けて死んで退場とか巫山戯やがって…殺したのは俺だが」

そうごちる男こそリ・エステイーゼ王国現国王、ザナック・ヴァルレオン・イガナ・ライル・ヴァイセルフその人であった。

あの大粛清の後、王政府は早急に機能を回復させる必要があった。予めレエブン侯が配置した人材がその役割を果たし、幸いな事に接収した領地で目立った反抗はない。それどころか「あのままクソ領主に搾取され続けるより何倍もマシ」だと現地民から好意的な報告がいくつも上がる始末。

如何に今までが貴族の悪政であったか、そしてそれを見て見ぬふり

していた封建体制の怠慢に憤慨する。

自分が就任したからにはそうはさせない。

処刑場で民に誓ったように、彼の思いは本物だ。

国民が王国民であることを誇りに思えるような国を作り、マトモな状態で次の代へとバトンを繋ぐこと。

それがザナツクの願いであり、憧れであり、使命なのだ。

これには父ランポツサもニツコリ。

なのだ、が。

それはそれとして各領の収支報告、活動記録諸々、確認しないといけない書類が多すぎる。さらに八本指壊滅後の後始末も並行して行わないといけないのだからタチが悪い。

共に王国を立て直すと誓い合ったペスペア侯、レエブン侯、そしてウロヴァーナ辺境伯も今頃自分と同じ業を背負い書類の山と対峙している事だろう。

(レエブン侯なんて家に帰れなさすぎて最近息子の幻覚を見始めたとか給仕の娘達が言っていたな、ああはなるまい……)

虚空に向かって「ああリーたん…会いたかったよお」とか「ほらおいで〜パパでちゅよお」と調度品の壺に向かってのたまう虚ろな瞳のレエブン侯の姿が度々目撃されているらしい。素直に怖い。

それほどのストレスなのだろう、それでもがんばる侯に心の中で合掌。

「家族、かあ…」

書類を捌く手を止める。

ザナツクの家族、つまりヴァイセルフ王族一家。

王家の次男坊として生を授かった彼は本来この椅子に座る事など決して有り得ることはなかった。

本来王位を授かるはずだった兄バルブロは犯罪組織関与の罪で幽

閉、末の妹ラナーは動乱に巻き込まれ帰らぬ人となる。

独りになった自分にのしかかる責任はあまりにも大きい。

隠居した父ランポッサは退位後もその人脈を利用して各領地を周り、国民の生の声を聞きながら改善案を時折提案してくれている。

前王には培った信頼がある、それは今まで王国を土壇場で支え続けてきた手腕の賜物であり、成果だ。王位に就いてからより先代の偉業を実感している。

なら自分はこれから実績を積み上げるしかない、幸い先代からの悪性腫瘍だった八本指は取り除かれ、面倒な貴族達も皆居なくなつた。立て直すにはこれ以上ない好機なのだ。

使命感がザナツクを突き動かす。

一分一秒が惜しい。

国民の為、散っていったラナーの思いに応える為、そして……

「レイン、どの」

思わず口から零れるその名。

ほんのりと胸が熱くなる。

嘗てラナーの友人だった女性、魔法学者だという。

正直に言おう、一目惚れだった。

あの日偶然ラナーと共に渡り廊下ですれ違った時、雷に打たれたような衝撃を受けた。

空に溶けるような蒼い長髪、深い知性を感じさせる紫艶の瞳、何よりの花のように華やかでしおらしい態度がザナツクの目を惹き付けて離さない。

初めて王城に招かれ緊張していたのだろう、恥じらう姿すらいじらしく、愛おしかった。

その身を抱きしめて、全てを奪ってしまいたいとすら思ってしまった。

人生で初めての感情の激流に押し流され、奥手な自分はその時何も言い出せず、ラナーの話すら耳には入っていなかったのだろう。恥ず

かしい限りだ。

自室に戻り、気付けば高鳴る鼓動を抑えられず布団に突っ伏して転げ回っていた。

そしてこれが恋なのだと自覚した。

国を建て直したいと思いい切ったのも使命感半分、もう半分は彼女に立派になった自分を見てもらいたかった、いいカツコしたかったからだ。

想いは人を動かすと言うが、まさかあの兄に大見得切って幽閉まで宣言してしまうとは：我ながら柄でもないことをしたと思う。

だが結果として事態は好転した、一生をスペアで終えるはずだった冴えない次男坊は今や国の頭目としてその任を全うしている。

「今度は我々が返す番だ。

先ずは魔法への意識改革から始めなければ…」

幸い、『王になったらこんなことがしたい』と考えていたアイデアは山ほどある。

王国は永く軍事を司っていたボウロロープ侯が兵力第一主義であったこと、貧富の差による国民の識字率の低さなどの要因から国内の魔法教育を疎かにしていた。

貴族が自分達の利権を守りたいがために意図的に教育水準を下げていた可能性すらある。

うん、クソだな！死ね！というか既に死んでたか！とザナツクは流れるように心の中で罵倒した。

お隣の帝国などは魔法教育を国是として掲げ、国を挙げて教育に勤しんでいるというのに。

王になると見えてくる、いや見ざるを得ない他国との大きな差異。それをどう解消し他国から舐められないようにするかも今後の課題となるだろう。

幸い今は亡きラナーの伝手で使者を送り、法国から魔法教授を派遣して貰える手筈は整った。

死人を交渉材料に使うのは些か心苦しいが、彼女と仲の良かったレイン教授は快く受諾してくれたという。

「法国に脚を向けて眠れないなこれは…」

しかしこれも国の為だ、頭くらい幾らでも下げてやるさ」

決意は堅い。

奴隷制度も煩わしい、この期に王都以外からも完全撤退してしまおう。八本指という悪い見本を国民も目の当たりにした直後だ、反対される事もないだろう。

新兵の教育はガゼフに一任してしまったが大丈夫だろうか、事務机に座るしか能のない俺には兵の割り当てくらいしかできることが無い。

あーでもない、こーでもない、考えているとキリがない。

扉をノックする音と共に走るペンを止め、応答すると大臣3名が慌ただしく次々と入室してきた。

全員が顔が見えなくなるほどうずたかく積み上げられた大量の羊皮紙しごとを抱え、それが客用のテーブルに積み上がる。

執務机は既にいっぱいだった。

「…はあ…はあ、ザナック新王陛下、必要な案件をお持ちしました」

「こちら八本指との癒着が発覚した施設を洗い出したものです、ご照査下さい」

「こちらとこちらは王印が必要な公文書になります、ご要望通り期限は最短の3日でございます。ご確認の程を」

現在の王国は人手不足も甚だしい、更に動乱の余波も相まって王が直接中身をあらた検めなければならぬ案件がそこら中に転がっていた。

それらを選別し、苦勞して此処へ運んで来てくれた臣下達を恨む気など毛頭ない。

「……………御苦労」

が、うんざりはする。

およそ人生で見たことの無い量の書物の山に囲まれながらザナツクは色んな感情を押し殺し、仕事をする為だけのマシーンと化するのだ。

民のため、国のため、気になるあの人がこの国に訪れた際ストレスなく魔法教育を行えるようにする為、ザナツクは今日も机に向かい大量の書類と格闘する。

その果てに何が待つかは、まさしく神のみぞ知るところ

・私と考えた最高に幸せな暮らし・

早朝

差し込む陽射しと朝を告げる鳥の声で目を覚ます。

北国特有の冷えから体温を守る大きく柔らかな毛布に包まれて、一糸まとわぬ姿で寝息をたてる彼の隣に寄り添いながら、幸せに微睡む私。

その寝顔を眺めていたら我慢出来そうにない。

起き抜けに朝の一番搾りを頂こうかと思つたけれど、昨夜は氣絶するまで求めあつたのを思い出しそこはぐつと我慢して、衣擦れの音を響かせながら布団を後にする。

クローゼットから取り出すのは私の装い。

嘗ては毎日のように来ていた豪奢で高価なドレスではなくシンプルで簡素なもの、そこら辺の村娘でも購入出来るような安物だ。けれど不満は何一つない、むしろ彼の前でないならいつも全裸でいたって構わない。

世間体？それ、クライムより重要な事かしら（論破）

もう自分独りで着替えを行うのにも慣れたもの。

さつさと着替えてエプロンを探す……一着しかない、二着用意して貰つたハズなのに。

少し考えて、そういえば巷で噂になつていた淑女の夜の装い『裸工プロン』を一昨日彼の前で試したあと、盛り上がって汚れてしまったのを脱衣所に放り投げたままだったと思ひ出した。

洗濯物が増えたわね……

お気に入りの色だったのだけど、仕方ないから綺麗なもう一着を使いましよう。

私の名前はラナー。

どこにでもいるごく普通の女の子。

糞のような過去を捨て、法国の片田舎で夫と暮らす良妻賢母です。

この街、北方領ローグレンツに落ち延びてから3ヶ月ほど経過した。

あの女により設えられた逃亡先。

母国も全て失つて、2人で暮らすのに苦勞ない程度の一軒家と資金を与えられ、必要最低限の仕事をこなせば残った時間はずっと彼と一緒に居られる夢のような環境。

侍女邪魔者は居ない、貴族無能も居ない、鬱陶しいしがらみは今や尽く消え去つて、漸く私が私らしくある事を許された。

目を覚ませば隣にクライムがいて、農作業に精を出すクライムを視界に収めながら家事をこなし、クライムと食事を共にして、クライムとお風呂に入り、クライムと共に寝る。

生活の全てにクライムがいる、人目を憚ることなくクライムを撮取できる、クライムに集る悪い虫も此処にはいない。

私だけのクライム。

クライムは私の一部で、私はクライムの一部なの。

つまりこの世界はクライムによって廻っている。

証明完了、完璧過ぎて反論の余地は無いわ。論文にして後世に伝えてやってもいいくらい。

これを聞いたあの女は「ついに来る所まで来ましたわね貴女…」って頭を抱えていたけれど、理解力が足りないのね、可哀想に。

やっぱりクライムでない男と付き合っているような奴は駄目なのよ、彼は私のモノだけだ。

王城暮らしで生活力皆無だった当初と比べて、今では家事にも慣れたもの。

慣れた手つきで2人分の朝食を用意して、愛しい彼の起床を待つ。起きてこなかったら起きるまで搾り取ってしまえばいい。

クライムは押しに弱いので、私から攻めると仔犬みたいにキャンキャン鳴いてくれるわ。可愛いでしょう？うふふふ…

「おはようございます、ラナー様」

聞き慣れた筈なのに、私を呼ぶ声を聞くと思考が蕩けてしまいそうになる。

ああクライムしゆき…

「もうっ、捨てた身分なのに貴方はいつまで敬語を使うつもり？」

「す、すいませ…ごめん。」

未だに慣れなくて…

おはよう、ラナー」

「はい、よろしい♡」

ふふふ、おはようクライム。

朝ごはんはもうできてますよ」

2人で過ごす甘い甘いひととき

時々搾りたての牛乳をお裾分けして下さい近所のお婆さまから教えて頂いた秘伝のレシピ、凄く役に立っているわ。

簡単な朝食から男の胃袋を掴む創作料理まで多数を網羅した私にとっての聖書バイブルよ、年の功とはよく言ったものね。

『男をオトすには胃袋からさ。』

いいかいお嬢ちゃん、好いた男に抱かれないなら薬や魔法を使えば一瞬だ。

だが好いた男と添い遂げたいなら料理の腕を磨きな。

食は全ての資本さね、生きてる限りずっと付きまとう。ソコを押さえちまえばもう逃がす事アない。

男共は目が離せなくなるだろうよ。

この私のようにね』

そう不敵に笑う彼女の瞳には信念と実績に裏打ちされた自信が垣間見えた。

間違いない、彼女は恋愛強者。

数々の修羅場を潜り抜けてきた歴戦の猛者なのだ。

そんな彼女に師事できたことは幸運だった、おかげで料理の腕はメキメキと上達し立派な彼の伴侶として成長する事が出来たのだから。

成長、そう。成長している。

城の中では決して味わうことの無い自然の匂い、流れる川の水や草木のせせらぎ、そういった外部からの刺激を受け続けた結果、私は以前より心落ち着く時間が多くなった。

王国にいた時より常に晒され続けていた第三者王女としての責務、

外様の視線や貴族の嫌味から解放されて久しく、私の心境は穏やかだ。

全てあの女の取り計らいなのが唯一の不満点だけれど、彼女の助力がなければこうしてクライムとの蜜月を過ごすことは叶わなかった。その事実が私を悶々とさせる。

「それじゃ今日も畑の手伝いに行ってくるよ。」

そろそろ果物が収穫時期なんだって」

「あら、じゃあジャムを作る用意をしておこうかしら。」

クアイエツセ様の事だからきつとたくさん差し入れて下さるわ」

近頃は作物の収穫時期が近いのも相まって、クライムは他の畑にも駆り出される事がある。

本当はクライムを誰とも知れぬ女の目が届く所に置くなんて許さないけれど、それじゃ仕事の折り合いが取れないとレイラに諭され、派遣先は万が一にもしもの事態が起きないよう彼女の信用できる知り合いのみで妻帯者の家に絞る形で渋々だけ同意した。

クアイエツセ様はレイラの未来の夫であるので大丈夫、他の方々も御挨拶に行った時諸々を調べ、事情は常に把握してある。

一緒に働く若い（あちら基準の）エルフの飼育係達は懸念材料だけど、此処に来る前は皆夫持ちだと会話の中で漏らしていたので問題はないだろう。

長寿故かエルフは皆自身の夫一筋らしい。

栽培主任を自称する口やかましいトレントも生物的には雌个体だろうけど、クライムに寄り付く悪い虫にはなり得ない。

あとは既婚者で老後を農業にあてるおばあ様方だ、クライムに熟女癖が無いことは確認済みなので問題なし。

時々やってくるハーフェルフのあいつは……強者にしか興味のない猪女なので大丈夫ね。

「それじゃあ行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい。あなた♡」

出かける彼には毎度の如く行ってらっしゃいのキス。

新婚だもの、絵物語みたいに馬鹿な夫婦の真似をしても許される。それを咎める者もないのだし。

遠くなつていく彼の背中を眺める度に、胸に込み上げるものがある。

……本当は誰の邪魔も入らないところに閉じ込めて全てを管理してしまいたい

彼の姿が他の女に見られる事すら忌まわしい

指先から髪の毛一本に至るまで、彼が欲しい

例えば人を辞めることになつたとしても

ドス黒い感情。嘗て王城に居た時に何度も感じた、未練と呼ぶに近いそれは未だに燻っていてあのままの環境ならいざれ爆発してしまつていただろう。

そしてその願いがそう遠くない未来で、きっかけさえあれば^{最高}最悪のカタチで実現してしまう事すら、私の頭脳は容易に思い描けてしまった。

けれどそれは、きっと別の世界のお話

(邪魔よ、邪魔。失せなさい。)

この感情は今を楽しむのに不要なものだから)

かぶりを振って不要な感情を追い出す。

彼と私の未来にそんな後暗いものは必要無い。

欲しければ求めればいいのだから。

求めれば好きだけ与えられるのだから。

彼はもうどこにも行かない、私だけのもの。

『愛』の意味をやっと分かり始めたのだから

もう少し生活が安定して、決心が着いたら避妊薬を頼むのはやめましょう。

ずっと不安だった。もし私のクライムとの子供が産まれたとして、私はその子を心から愛せるのか。

クライムに与えるように、クライム以外の存在にも愛情を注ぐ事ができるのかって。

そんな私の不安を見抜いているかのようにレイラは薬師に話を取り付けて、避妊薬を用意してくれていたらしい。腹だたしい限りだけど、その気遣いには感謝しかない。

これのおかげで今日まで心置きなくクライムを求められたのだから。

それに万が一、億が一、彼が私の下を離れようとするなら、嫌という程教えてあげましょう。

私が誰のもので、彼が誰のものなのか

お互い隅から隅まで知ってるその身体に、ゆっくりと時間を掛けてたああくつぷりと。ね？

うへへへへへへへ…♡（元王女とは思えないだらしない表情）



「どうしたクライム君、急に震え始めて。風邪か？」

「……ツいえ、なんでもありません。」

（なんか、今凄い…全身をねっとり舐められるような悪寒が…）」

子犬系騎士の明日はどっちだ

◆

・老兵は死なず、ただ消え去るのみ・

何に忠を尽くすのか

もとより生まれた意味など知らぬ

適正を持つて生まれた時から私の運命は決定づけられ、適正があったからこそ私は今まで生きてきた。

…いや、生かされていた。

国の南端、小さな村落に誕生した私を両親は愛情深く育ててくれた。

決して裕福とはいえない家庭で、国内では珍しい人里離れた寒村といても差し支えない人口200人程の小さな村。

父は農夫で、母は織物をして外貨を稼ぎ明日へと繋ぐ。

村の皆々は同じく貧しいであろうに人当たり良く、困っている者が居たら声を掛けなければ気が済まない性分で、都会の者からよくお節介焼きなどと揶揄されたが、それが彼等の…ひいてはこの村の良い所。

私は童の頃から外で遊ぶのが大好きで、よく山菜採りなどに出かけ、山中を駆け回り背カゴを一杯にして帰ったものだ。

いつも笑顔を絶やさず、他人をも笑顔にできる暖かな両親に影響を受けて、私もいつか「皆の笑顔をまもる救世主」になりたい、なんて無邪気に話していたりもした。

そんな私が15になった頃、神殿よりやってきた遣いの持ち出した話。

とあるアイテムの適正を調べる、と。

当時の私は深くも考えず、試すだけでこの貧しい村を支援して下さるとの仰せを受け、そのまま差し出された着衣を身につけた。

そしてそこらの野ウサギに向かって命令をしろと、頓珍漢な事を依頼するものだから、私もふざけ半分で「逆立ちして木の周りを3週しろ」なんて冗談を言ってしまった。

途端、着衣に刺繍されていた龍の紋章が光り輝いたと思ったたら、それは先程指さした野ウサギへと吸い込まれていく。

そして信じられないことに、野ウサギは前脚2足で逆立ち、木の周りをきつかり3週したと思ったら、まるで命令を待つ兵隊のようにそれつきりその場から動かなくなったのだ。

思えばこれが最初の誤りだったのかもしれない。

私には魔法の才はなく、魔力も毛ほども持つてはいない。

はて？と首を傾げる私の横で狂喜乱舞する遣いの者になされるがまま私は神都へと半ば強引に連れ去られ、この法衣の真の名を知る事になる。

『ケイ・セケ・コウク』

国宝に数えられるスレイン法国でもとびきりのマジックアイテム、伝承に伝わるその能力は『ありとあらゆる者の魅了、洗脳』。

かのマジックアイテムの適合者は100万人に1人、その役を担う者に私が選ばれた。選ばれてしまった。

その時は私も若気の至りというか、調子に乗っていたのだろう。

誰かの役に立てる喜びと使命感で頭がいっぱいだった。

故郷への支援を約束させる代わりに協力を承諾した。山盛りの食材を持って帰り、村のみんなと共に宴を開いた時は本当に幸せだった。

親孝行がやっと出来たと、その時は無邪気に喜んでおったよ。

国宝を唯一使用できる特別な女、その意味をこれから嫌という程実感する羽目になるとは露とも知らずに。

『あらゆる存在の洗脳、魅了が可能』なかの国宝、それが起動できるのは私一人、ならば私を困いこもうとする者が出るのは必然だった。

宗教の派閥同士による、水面下でおきる泥沼の権力闘争、それに何

度加担させられたか数知れない。

最終的に私を勝ち取ったのは、嘗て私に国宝を着せその価値を見出した神殿の遣い。今では元老院議員に名を連ねる程の重役である。

彼の指示のもと、大義の為に多くの人をこの法衣で墮としてきた。時に国を内側から崩壊させようと目論む神官長を秘密裏に始末する為、時に暴力的で手に負えぬ亜人共を同士討ちさせる為、かの議員に叛意を抱く者にすらこの法衣は力を発揮し、彼の地位は磐石なものとなる。

大義の名において、人類存続の為ならば汚れ仕事もまた正義である。そう言い聞かされながら、何度も同胞に手を下した。

その度に私の心はひび割れて、悲鳴を上げていく。

これが主の望んだ救済なのか。

これが私の求めた生きがいなのか。

私はいったいなんの役にたっている？

幼い頃に夢想した、「皆の笑顔を護る救世主」に私はなれたのか？

疑問の答えを見出すには少々遅過ぎたらしい。

皷れた肌、しわくちやの手、叛意を口に出せるほど私ももう若い。い。

このまま国に使い潰され、老いさらばえていく運命、そう納得あきらめてしていた齡70の夏。

彼女に出会った。

『やあやあ我らがスレイン法国の誇る最高の避暑地、ローグレンツへようこそ！』

おばあちゃん、此処は冬場のドカ雪と年中亜人が攻め込んで来る以外はとおつても過ごし易いリゾート地だよ！

ゆっくり疲れを癒して行ってね！』

なんじゃ、この女。

スレインの北端、辺境ローグレンツ。

もとは死の神スルシャーナ様を祀る者たちが興した小さな村、それが時を経て都市にまで発展し、今では国防を担う重要な防衛拠点として機能しているはずの北方領に私は訪れていた。

最近疲れが溜まっていくように見えるからと、若い衆が気遣って手配してくれた慰安旅行。

最近神都でも噂になっていく北のリゾート地なるものに言われるがまま連れてこられた訳じゃが…

もつところ…スルシャーナ様を祀る荘厳な感じの街だったはずなんじゃが？

なんじやあのの気安い女は…は？領主の嫁？

“ほてるのこんしえるじゆ”兼“わかおかみ”？

なんて

『スルシャーナ教？』

ああ、ダーリンが熱心に信仰してるアレかあ。

お参りしたいならこつちだよ』

ちよつと待てい、これがスルシャーナ教の神殿か？

他の六代神様の神殿と全然違…ええ…？（困惑）

全体的に木組みじゃしなんか色合いも茶色と橙が多いし…姫巫女の服装も肌の露出の少ない紅白柄で神都の巫女装束と全く違う…
いったいどうなつとるんじや!?

『風の巫女長から話は聞いてるよ。

日頃の疲れが溜まってるんだって？

なら我が領自慢の天然温泉にどうぞ！

肩までゆつくり浸かれれば溜まったコリも疲れもバッチリさ！

宿と料理も一番グレードの高いやつね、代金は気にしないで。VI

P様々だよ！』

なんじやこの湯船、湯が濁つとるではないか…

へ？アゼルリシア山脈の雪解け水が産んだ天然温泉？滋養強壮、肩こり解消、冷え症対策や貧血対策にもなる？

というかアゼルリシアに活火山なぞなかるうが！

どつからこんな温泉引いて来た？掘ってたら当たった？ええ…

いい湯じゃった？悔しい…でも肩が軽くなっちゃう…

暑い夏にあえて温泉、というのもなかなかオツなものじゃった。

食事も美味しい、神都では清貧を強いられるからの。疲労回復の為にガッツリとした料理は躊躇われる傾向にある。

『旅館から観る星はサイコーだよ！』

私の故郷と違って空気が綺麗だからね、夏でも冬でも夜は露天風呂から見上げれば満天の星が見えちゃう！

高地だからいつそう綺麗だね！』

はあ…癒されるう…：…♡

『またのお越しをお待ちしております!!』

なんか物凄い勢いで一日が過ぎた気がする。

メチャクチャ疲れが取れたわ！

温泉と美味しい飯でここまで改善されるとは！

というかいつの間にか温泉街になってたんじゃ!?

帰りの馬車に揺られ、潤いを取り戻した肌に感動しながら、来月も来ようと決心するのだった。

それが私とカナミの初会合。そこから慰安目的でローグレンツには何度も足蹴く通う様になり、徐々に客と従業員の関係から友人関係に発展していった。

なんというか、聞き上手なんじゃよな。

仕草や雰囲気だったり、こちらが話しやすい流れを作ってくれてい

る感じがする。

ありや相当場数を踏んどるよ。

だからあやつに娘が産まれたと聞いた時、いの一番に祝いに行ったし、あやつが死んだと聞いた時は目の前が真っ暗になった。

カナミはいつもそう、いつも他人に与えるばかりで見返りを求めようとしなない。

挙句勝手に死にましたって？もう返したくても返せないじゃないか、大馬鹿娘め。

娘のレイラはすすくすくと育ち、母親譲りの自由奔放っぷりは健在で今も領主として元気にやっておる。

そんな彼女の所へ時々顔を出して、美味しい飯を食い温泉に浸かりながら林檎酒を嗜むのは月に一度の楽しみじゃった。

カナミの遺したものは此処にあると。

あの地に居る間だけは、国宝の重責も忘れ自由な自分でいる事ができた。

目の前には一枚の指令書がある。

内容を全部読み、掟に従い証拠を残さぬよう焼却処分した。

いつも通り国宝を使用しての極秘任務。

『ローグレンツ領主レイラ・ドウレム・ブラッドレイを国宝を使い魅了し神官長に服従させよ』

長つたらしい言い訳が書き連ねてあったが要約するところだ。

どうやら元老院の“彼”は自らの地位を脅かす存在を許してはおけないらしい。

しかしその個としての力は強大で手に負えない、故に国宝を用いて支配することを選んだ。

レイラの奇天烈な噂は学生の頃からこちらまでよく流れてくる、教

頭のヅラを剥いだだの学友と一緒に高慢ちきな上級生を叩きのめした。ただの好き放題やっているようだ。

卒業後は自領の運営に熱心に務めているそうだが、エルフの奴隷を買収取って従業員として雇用したりはぐれドワーフを引き取って工廠を営ませていたり、法国では類を見ないやりたい放題ぶりは神官長の間でも度々話題になっておる。

あの堅物ゲバルトの娘がのう…カナミの血、強過ぎじやろて。

そんな娘を国宝で洗脳し人類を護る尖兵にしろと？

自我を奪って、言いなりになるだけの人形にしろと？

巫山戯るんじやなあないよ

使命感を押し潰して余りある激情が胸の奥より込み上げる、いっそ命令を下した彼に国宝を使ってやりたいと思つたほどだがそれをやると後が面倒だと早々に思い至り、一先ずベッドに腰掛け頭を冷やすことにした。

しかし老体の私に反抗の術は残されていない。

既に催促の書状は何枚も来ており、察するに彼は相当急いでいるのだろう。

元老院なんて古臭い制度、形骸化が過ぎて近々取り潰しになるんじゃないかと言われていた程だ。

年ばかりくつたお歴々共は何とかして自分たちの保身の為に奔走しているようだけど、その皺寄せが私の所に来るとは…

レイラが「信仰心もロクに無い癖にプライドだけは一丁前な害悪老人とか要るう？ 要らないですわよねええ!!」つてしよつちゆう不満をぶちまけていた気持ちに今になってよく分かるよ。

あの娘はブレないね、と苦笑しつつ物思いに耽る。

脳裏に蘇るのはカナミとゲバルト、娘のレイラの姿。

「方法は、ある。

私が消えればいい、それで全てが丸く収まる」

解決策は私が死ぬ事。

そうすれば国宝は機能不全に陥り、洗脳などという倫理を無視した手段を行使できる者は居なくなる。

適正以外に何も無い私ができる唯一の抵抗。

温泉に何度も通い詰め、心身共に健康で居られたおかげか私の寿命は法国の平均的な女性の寿命より随分と永いようで、もう充分生きた。今更半端な生に頓着する気もない。

もとよりこうすれば良かったのだ。

問題は自殺の手段だった。

六色聖典所属者は皆、情報漏洩を防ぐ為『法国に関する質問に3回応えると発動する自決魔法』の使用と毒薬の携帯を義務付けられている。

魔法が掛かっていないのはそれこそ負ける前提の無い漆黒聖典の精鋭達か、私のような特別な事例のみ。

私の手元にも毒薬はある、が。

これを使えば彼等は「どうして毒薬を飲んだのか」理由を探り回らさう。

魅了、洗脳が国策に組み込まれた法国上層部だ。私が自分の意思で自決した事すら疑い、下手をするとその場で犯人探しの魔女裁判が行われる可能性がある。

居ない犯人を永遠に探し合い、お互い疑心暗鬼になれば組織の崩壊すら招きかねない。それはいかん。

あらためて、この身に不相応な重責にため息が出そうになる。

外で自然死を装おうにもこの老体だし、外出許可なぞ下ろして貰えそうにない。

どうか若い巫女達に日常生活でも世話を焼かれておる有様じゃ、1人で行動など許してはくれまいよ。

その時

部屋の隅に生まれた黒いモヤが大きくなり、そこから現れる影。

「な……なんと……」

スルシャーナ教徒ならば知らぬはずもない、死の神の隣に侍る従属神様のお姿が突然目の前に現れた。

夢か幻か、その真偽を疑う余地もなく。

ルビーのような赫灼の瞳に射抜かれただけで身を焼かれそうになるような焦燥に駆られる、圧倒的な存在が今私の前に立っている。

思わず膝を着き、祈った。

真偽など最早どうでも良い、必要なのは信仰心だけ。

“面を上げよ”

御身の肉声に弾かれるように顔を上げた拍子、再び目が合う。

それだけで御身は全てを理解したかのように頷き、そっと私の頭部へ手を翳した。

“望みを”

ああ、何もかもお見通しなのか。

私が抱えているもの、これから起こる全て。

見通したうえで、その裁量を私に委ねて下さっておる。
ならば

「私はもう、十分に国に忠を尽くしました」

“……”

「ならば最期くらい、私は私に忠を尽くす。

既に抱えきれぬほど与えられました、どうか一思いに」

“ありがとう”

「ツ!?!」

“あなたは 皆の笑顔を 護れてる よ”

頭を撫でられた。

柔らかで舌足らずな言葉と共に。

「…ッはい…はい…ッ!!」

どうか天使の娘に幸あらんことを。

彼女達のこれからに六大神様の祝福を。

ああ、運命の鎖でがんじがらめだった人生だけ最後の最後で報われた。

カイレは幸せでした。

《トウル・デス
真なる死》

“おやすみなさい 救世主”
“どうか 良い夢を”

29 破滅フラグしかない原作開始前小話集 下

・野良犬達の五重奏 クインテット

竜王国、王族専用執務室

「陛下！偵察隊による本日の戦況報告が上がりましたのでご確認を」
「うむ、目を通しておく」

「陛下！先日取り戻した都市内部の安全確認が完全に終了致しました。」

「こちらは住民台帳と照合し生き残った事が確認された民達のリストです、ご確認を」

「よしよし、よくやった！」

宰相よ、慰問の為に彼らの元へ赴く時間を作ってくれい」

「至急、調整致します」

「陛下！再計算の結果今年度確保した予算が前年度より上向いております。」

「以前仰っていた『豪炎紅蓮』の皆様を雇い入れる方針で貴族たちの意見は合致しておりますが、如何致しましょう」

「なるだけ早く彼等と接触し、依頼してくれ！」

「法国の支援があるとはいえ予断を許さぬ現状じゃ、金でどうにかなる問題なら妾のヘソクリだつて切つてやるぞ！」

「戦乙女の稼いでくれた時間を無駄にせぬよう迅速になー！」

「ははあー！」

飛ぶように文官たちが駆けていく。

此処は竜王国王城執務室。

ピーストマンとの生存競争を賭けて、今日も女王ドラウディロンは書類の山と戦い続けている。

戦乙女^{レイラ}の働きもあり戦線は順調とまでは言わずとも復興の猶予を残すまでに回復した。

ビーストマンが潜んでいた森は前回攻略し、威嚇とばかりにレイラが森全体を凍結させたことにより再潜伏されることもないだろう。

今のうちに戦線を立て直し、反撃の準備を整える必要がある。

森を抜ければ2つ目の都市、事前の偵察隊が齎した情報によれば5000を超えるビーストマンがひしめいているようだ。

「次に戦乙女殿がこちらに合流するまで何としても戦線を維持しなければなりません」

「《クリスタル・ティア》、というかセラブレイトに任せるにも限界があるからの……キモイからなるべく頼りきりになりたくはないが。

兵と物資の運搬を整えば2つ目の都市奪還も夢ではない」

都市奪還は女王の悲願。

以前まではほぼ諦めモードだったドラウデイロン。迫り来るビーストマンの圧力に押し潰され滅亡する未来しか見えなかったが、戦乙女の活躍により生存の兆しが見えてきた。

一端の王として、なにより民の為に彼女の前で大見得切ったドラウデイロンは覚悟を決めて全力で国王を遂行する。

次いでに幼女の演技も遂行する。

そっちの方がウケがいいし！

「そういえば前線に出張っておる 彼ら」の様子はどうじゃ？

他とないレイラの要望じゃったから二つ返事で了承してしまっただが、話を聞く限りあの五人は犯罪者だったそうじゃないか」

「 獵犬」の皆様ですか。

今のところは大人しく職務に従事しておられます、戦乙女殿があれだけ念を押した後ですからな」

宰相の呟きにドラウデイロンも思い出す。

国を救ってくれた英雄が先日突然連れてきた5人（厳密には4人と1体）のならず者達。

聞けば更生目的で此処に連れてこられたらしい、到着前にレイラが半殺しにしたから抵抗はしないとの事だがやっぱり心配だ。

今は戦争中。

遊撃隊とはいえ勝手な行動は指揮の乱れにも繋がるし、最前線の戦場では平時よりも犯罪率がどうしても高くなる。

食うか食われるかの極限状態における兵士の精神力の摩耗は計り知れない、竜王国の兵は皆紳士だとドラウディロンは信じているが、兵士による強姦や暴行事件が起きないとも限らない。

よそ者なら尚更だ。

生まれた時から人類と亜人の境界線で戦い続ける北方領のお嬢様から

『娼婦、沢山困っておいた方がいいかもしれません。男性って溜まるものは溜まりますし、戦闘の後はどうしても気持ちが昂るものなので。』

兵士の方々の未婚率も高いですからね、発散出来る場所は多いに越したことはないでしょう。

私の領にもあるのか？

勿論ありますわよ。教義的にはグレーゾーンですけど、個人的に組織して法に触れぬよう監視しながら運営も任せてます。

兵士は前線で命張ってるのに神の教えだけで欲が満たせるかってんですわ！』

『とにかく兵站不足だけは起こさせないようにしましょう。飢えが広がれば犯罪も増える、それは歴史と他国が証明していますから。』

明日の命も危うく、国の為に肉壁となる彼等に不自由などあつてはなりません、その程度工面するのが上に立つ者の甲斐性というもの。

それでも事を起こすような者がいれば私が直々に…ねえ？』

『“みせしめ”って、大事なんですよ（暗黒微笑）』

などのアドバイスのもと国公認の娼館を経営して適度なガス抜きを行っていたりもするが、よそ者の彼らが素直に働いてくれるか一抹

の不安が残る。

「『猟犬』からもたらされる情報は貴重ですから、存分に頑張って頂きたい。」

戦乙女殿のお墨付きとなれば竜王国2つ目のアダマンタイト冒険者として取り立てるのも有りかと」

「でも1人アンデッドおるじゃないか、アリなのかそれは」

「戦乙女殿は器の広い御方ですゆえ、何かお考えあつての事と思いませんが。」

先の連絡会で仰っていた『国を超えた魔法組織』の一員として取り立てたのでは？」

「新しい組織作るから会場工面しろって言ってきたヤツか、どんな事するんじやろうのー？」

ま、生まれた発明は竜王国へ優先的に回してもらおうよう手配して貰えだし、様子見かの」

「会合には陛下もお呼ばれされたのでしたか、公務の都合上あまり時間には取れませんが」

「聞きたいことがあるんじやって、わらわ位階魔法は門外漢なんじやが」



竜王国内、都市部から数km離れたビーストマン生息域にて

「行け行けペシユリアン！」

止まったら死ぬぞー！」

「全身鎧は…マラソンには…向かん…」

「じゃあもつと軽装で来なさいよ！」

「……………嫌だ」

「何その謎のプライド!?」

「ウダウダ抜かさず走れお前ら、追いつかれる」

「テメーは浮いてつから楽だよなあデイバーノック!?」

呑気にしてねえで攪乱はよしろ！」

「チツ…魔力は有限なのだぞ。」

アシッド・ミスト 《酸の霧》、グラストラップ・ツーン 《逆立つ草木》」

側を浮くアンデッド、デイバーノックが新調した大きなフードを翻し、設置型の妨害魔法が発動する。

後方一面に黄色がかつた霧が後方に充満し、変質した地面を撒菱まきびしのような棘草が覆えば、それを確認する暇もなくひたすら走った。

後ろから聞こえてくる獣達の悲鳴に「ざまあみろ」と溜飲せうたんとくを下げるから、男たちは安全な場所まで一直線に駆け抜ける。

「ツ！マルムヴィスト、横から2匹来る！」

「OKOK！ペツシユは左頼む！」

ノンストップで殺るぞ！」

「ぜエ…承…知ぜエ…した……」

横道から飛び出した歩哨のビーストマンが2匹、立ち止まる事無くマルムヴィストは腰の刺突剣を構え呐喊する。

真正面から突っ込む彼の動きを援護するように8枚もの三日月刃シミタが舞い、ビーストマンの四肢を斬り裂いた。

予測不能な刃の雨に傷付き呻くビーストマンを全身鎧のペシユリアンは息を荒くしながらも腰の斬糸剣に手をかけ、脚を止めぬまま振り抜く。

斜めに三枚おろしにされたビーストマン、続くマルムヴィストの刺突剣が呆けた顔した片割れの喉に突き刺さり、勢いのまま後ろに倒れ伏す。

血を拭う手間すら惜しい彼らはそのままの速度を維持し、セーフハウズにたどり着く頃には皆疲労困憊の状態だった。

「ハアアアアアアア……」

「ツ死ぬかと思った！」

「ゼエ……無ゼエ……もう……無理……ゴツホ！オウエツ……」

「オイ吐くなら便所に吐け」

隠れ家に着くなり大の字に寝転がる。

一名兜の中がヤバいことになってそうだが。

そんな人間たちを尻目に、デイバーノックは机に地図を広げ集めた情報を精査し始めた。

アンデッド故に精神的な負荷も無く、体力の限界が存在しない彼はこの部隊において貴重な頭脳労働担当だ。

「……前回から彼奴等きゃつらの分布が変わっている。

歩哨の数も増加、都市から引つ張ってきたか」

竜王国周辺の地理が示された地図に1つ1つマークを付けていく。取り戻した第一の都市より少し離れた場所にひっそりと佇む寂れた一軒家。

もう家主の居ないこの家屋を根城に彼等「獵犬」は活動していた。事の始まりは王国動乱の最中、密かに捕らえられた八本指警備部門の猛者たちはレイラによってそのプライドを完膚無きまでに叩き潰され、更生目的でビーストマン蔓延る生存競争の真っ只中に放り込まれる事になった。

それからというものの、首輪を嵌められた野良犬達は毎日毎日ビーストマンの潜む区域に少人数で乗り込んで奴らの正確な位置を把握、地図に示し報告する。途中で会敵すれば仲間を呼ばれる前に始末して逃亡。

命懸けの毎日に王国に居た時のような余裕は残っていない。

「死ぬ……このままじゃ絶対1年経たないうちに俺たち死んじまうぞ」
「でも逃げられないじゃん、コレのせいだ」

そう呟く褐色の踊り子エドストレームの胸元、扇情的な谷間から覗く黒いペンダントが付いた首飾り。

竜王国へ到着した当初、ここに居る全員へ同じものが強制的に与えられた。

「条件を違えると爆発する強制契約付きペンダント。」

逃亡は諦めろと言ったろう、我々は大人しくこの地で罪を償うしかない。」

何を隠そうこのペンダント、持ち主に対して指定した契約を強制させるマジックアイテムなのである。

わざわざ目の前でその性能を見せ付けられた事もある。用意されたマネキンの首に付いていた同じものが爆発音と共に弾け飛び真っ二つになる様子は彼等の脳裏に今でも焼き付いていた。

洗脳や魅了ではなく、あくまで本人の善意で行わせる為に用いられる安心と信頼の法国産アイテムだ。趣味悪っ。

契約内容は事細かに設定されているが、レイラの口から語られたのはその中のひと握りの情報のみ。

その中のひとつが国外逃亡の禁止という訳だ。

何が地雷か分からない状況の中迂闊に行動も起こせない。

そもそも毎日獣どもから隠れ潜み、時に命のやり取りを繰り返す彼等に今更悪行を企む余裕などとうに失っていた。

「けっ、聞いたかエド。」

「アンデッドが罪を償うだよ」

「でも実際、デイバーノックがあの子に掛け合ってくれなかったら私たち問答無用で殺されてた訳だし。」

命あつての物種だけど、ある意味死ぬよりキツイわね…」

「あのイカレ女、マジで俺達をどうしたいんだよ」

「……………だが、此処に放り込まれてから…」

「俺達は強くなった…」

息を整え落ち着いたのか、ペシユリアンが鎧越しにくぐもった声で呟く。それに渋々マルムヴィストとエドストレームも同意した。

この国へやって来てからはや1週間、ビーストマンとギリギリの死闘を繰り返すうちに彼らの練度は見違えるほどに上昇している、そうハッキリと自覚できるほど成長は目覚ましい。

エドストレームは持ち前の空間把握能力が更に研ぎ澄まされ、操作もより速く正確に、三日月刃の同時操作数も8本に増えた。

ペシユリアンの斬糸剣はより遠くの敵を正確に両断し、三本に増えた糸はそれぞれ操れば三方向を同時に相手取れるし束ねた時の威力はそれなりの厚みがある頑強な柱すら真つ二つにするほど。

散々文句垂れてるマルムヴィストですら自身の刺突攻撃の速度と威力が目に見えて上がった事に困惑を隠せない。

先程の逃亡時の戦闘もそう。

王国に居た時ならばビーストマンを一撃で仕留めることなど到底ではしなかった。

「…………正直、あのまま王国で甘い汁を啜り…墮落するよりも…」

「こちらの方が性に会っているかもしれない…」

「あー…まあね、悔しいけど日に日に成長してくこっちの生活の方が充実してるかも」

「ま、元はと言えば俺達、ゼロの旦那に引つ張られて集まったようなモンだしな」

出時が特殊なデイバーノックを除き、この3人は王国の貧困街出身。

幼い頃より三者三様に苦しみ、飢えを満たすために他者から奪う道

を選んだ犯罪者だった。

そんな彼等の前に現れたのが、強さを求め闘いを繰り返すゼロである。

ある時は拳で語り合い、ある時は利害関係の一致から、先の見えない闇の王都を生き抜く為彼の背中を追うことにした。

悪党云々の前に、3人の根底には誰にも負けない強さへの欲求がある。

悪党にだって仁義があれば矜持もある、幸いな事にゼロはそういった誠意には誠意で返す漢であった。

日陰者には日陰者の誠実さがある、そんなゼロだからこそ3人も彼を認めている。

「それで、肝心の旦那はどうしたよ。」

まさか単独行動で食われちゃったとか…」

「誰が食われたって？」

マルムヴィストの軽口の途中、大きくドアを開け放ち巨漢の坊主頭が帰還した。

「あらおかえりゼロ、遅かったじゃないか」

「……爽健そうでなにより」

「帰還途中で連中から奇襲を受けてな、死体を無駄に増やして警戒されても困るってのに…」

そう舌打ちをし、ゼロは手に持つ地図をデイバーノックへ放り投げると空いている椅子に荒っぽく腰掛ける。

元八本指警備部門のエース、ゼロ。
原作
本来ならこの場の者たちと共に王国の影で暗躍する裏社会の顔役のうちの1人だった男。

レイラの原作破壊によって何を思ったか竜王国くんだりまで運ばれて、こうして強制的に戦役を積みされている。

この中では特に成長著しく、修行僧故に近接戦闘に特化した職業である為か今では同時にビーストマンを5体相手にしても負けない程強くなった。

かつての部下だった者たちも今となつては運命共同体、互いに背中を任せ、時に助け合い、支えていかなければ獣蔓延るこの国では生きていく事などできはしない。

嘘ではない、この作品では猜疑に歪んだ暗い瞳がせせら笑うことは無いのだ（C v 銀〇万丈）

ましてや「俺の為に死ぬ」などと誰が言えようか。

「次いでに飯も獲ってきた。

マルムヴィスト、お前が捌け」

「はいはい分かりましたよつと。

げえ、猪かよ。血抜きが面倒だな…」

「午後からあの女が顔を出すそうだ。

十中八九ロクな事にならないだろうから食って体力だけでも付けておかないとな」

「うげえ」

“あの女”と聞いてマルムヴィストとエドストレームが露骨に嫌な顔をする。かく言うペシユリアンも兜の中で渋い顔しているが。

レイラが此処へ来ると言う事即ち、自分たちの監視と現状報告だ。他にも装備品の手入れや交換なんかも工面してくれる。

「客将として必要最低限のサポートはして差し上げましょう」との言い分だが、来る度に聞いた事のない武技を実践形式で教え込もうとしたり、トレーニングと称してビーストマンの群れに放り込まれたりと散々振り回され、正直あまりいい記憶が無い。

それでも自分達がギリギリ死なないラインを反復横跳びしているのは本人達の実力…だと思いたい。

決して考え無しに放り込まれてる訳じゃない、決して。

「ほう、師が直々にいらっしやるのか。
ならば報告書はその時にお渡しするでしょう」

げんなりする彼等と対照的に明るい声音でそう零すのはデイバー
ノック。

生者を憎むより魔法に没頭する道を選んだアンデッドである彼は
あの日以来随分とレイラに入れ込んで、彼女の事を師と仰いでいる。

表向き、レイラにゼロ他3名の助命を乞い竜王国で奉仕する事を交
換条件に過去の犯罪歴を抹消し、身分を変えて生活できるよう取り計
らった立役者なのだが、本人は魔法を学ぶ打算有りきで3人を生かし
たに過ぎない。

仲間、とそう呼ぶには頭に？はてなマークが浮かぶが、優秀な魔法職ゆえ
に後衛としてチームの生存率を飛躍的に上げているのが現状だ。

「今度はいったい何しでかす気だい。」

前みたい吐くまで武技の訓練やらされるのは勘弁だよ…」

「……《縮地》だったか。」

結局会得まで漕ぎ着けたのはボスだけだったが……」

「会得した？ンな訳あるか、まだ動きのコントロールが効かんから直
線でしか動けん。」

あの女は発動中も直角で曲がりやがるからな、体幹どうなってやが
んだ…イカレてやがる」

「噂じゃ過去に族長クラスのビーストマンを素手で殴り殺したらしい
わ」

「あの姉ちゃん人間じゃねえよ…」

(……なんだかんだ文句言いつつもこの生活で一番活き活きしてるの
はボス)

充実、そう。充実しているのだ。

毎日行われる食うか食われるかの生存競争とそれを乗り越え日に
日に強くなつていく自分達、まっとうな成長を感じる事に満足感を覚

えている。

悪徳の都に浸かり、弱い者を利用し私腹を肥やすよりもずっと。武人としての性か、はたまたなけなしの罪悪感なのか不明だが。

そんなこんなで原作で使い捨てられるハズだった悪党達は生き残り、戦乙女の使いっ走りとして竜王国の端っここで細々と生活を続けている。

バァン!!

『いきげんよう皆様!!』

「「「……げっ!?」」」

うわ来た。

蹴破らんばかりの勢いで開け放たれたドア。

声の主を確認するまでもなく首輪付きの猟犬達はロクな事にならない未来を思い描き、うんざりしながら互いに顔をため息と共に見合わせた。

彼等が竜王国屈指のワーカーチーム《戦乙女の猟犬》と呼ばれ都市奪還の重役を担い、目覚ましい活躍をし後に国中に名を轟かせる事となるが、この時の彼等は知る由もない。



「あの女にはいつか必ず復讐する…リベンジマッチだツ!!」

「……………飽きんな」

「師に勝てる訳なからうが。」

既に何回返り討ちにあつたと思つとる」

「でもなんだかんだ楽しそうよね」

「旦那、もしかしてそういう趣味…?」

「違うわツ!!」

・魔巧のすゝめ【序章】・

「ごきげんよう! 私ですわ!」

「……………集合時間までまだ時間あるけど。」

「っていうか何処向かって叫んでんの?」

竜王国、某所。

本日は記念すべき魔巧同盟の初会合の日!

ドラちゃんに頼んで用意してもらった会場にてお茶会の準備をしております。

持ってきた資料とく美味しくオツ紅茶とく美味しいお菓子を用意して、魔巧の茶会にや地獄の鬼も顔を出すつてえヤツですわ！

……こほんっ。

失礼、私とした事が少々ハシヤギ過ぎました。

本日参加予定の方には前もつてこちらの「招待状」を渡してあります。

招待した方はそれぞれ

蒼の薔薇イビルアイ様

帝国魔法学院長フルーダ・パラダイン様

聖王国神官団長ケラルト・カストディオ様

現在竜王国で服役中のデイベーノック

同伴者は1人まで、現地までの移動方法は招待状をマーカーにルーファス様が《転移門》で直々にタクシーして下さいさるそうです。

神聖存在に何やらせとんねんつて思つかもしれません（私も思つてますが、魔巧の話を持ちかけた際に「ええやん」つて自主的に『跡が残らず誰にもバレない移動手段』として協力して下さいました。

でも頼りきりになるのも申し訳ないので、転移系の魔法も同盟で掘り下げて開発したいですね。

法国からは私と《無限魔力》ちゃんが登場します。

一先ずは偽名のレインとケレスを名乗りますが、必要ならば本名と本来の役職を公開致しますよう。

我ら魔巧は皆が平等、お互い腹ア割らなきや話すもんも話せませんわ！

人類人外問わず魔巧の下に集つた夢のオールスター！

どんな化学反応が起こるか、オラワクワク致しますわね！

何故それほどの大物がこの場に？

そんな疑問は直ぐに吹き飛ぶことになる。

彼女が開いたらしい《転移門》から続けざまに現れる者たち。

女性が2人と仮面を被った子供、そして極めつけはアンデッドが一体、何食わぬ顔で円卓の席へと腰掛けた。

「揃ったようなのでそろそろ…」

御機嫌よう、現代を生きる偉大な魔法詠唱者の皆様がた。

本日は私共の招待に応じて頂き誠に感謝申し上げます」

そう頭を下げる青髪の女性、情報部の調べによれば最近法国で頭角を現し始めた新進気鋭の魔法教授、レイン・エルリク・ホーエンウツド。

魔法地質学という珍しい部門の研究者だ。

「特にカストディオ様。

お仕事もあるでしょうに遠路はるばる聖王国からの御足労、感謝の念に堪えません。

その苦労に見合った対価になるよう、本日は実りある集まりに致しましょうね」

「ええどうも、今日は宜しくお願いします」

人当たりの良い笑顔でそう言われ、こちらも政務官として培ったポーカーフェイスで無難な返事を返す。

「やっ…」

早速お話。といきたいところですが、先ずはそれぞれ自己紹介を致しましょう。

我々は国を越え、種族を越え、魔巧の下に集った同志に違いありません。

この場においてあらゆる虚偽に意味は無く、必要なのは魔法の探究

心と好奇心のみですからね」

そう促したレインの目線の先で老公が「ふむ」と顎髭をひと撫でし、声を発する。

「なら先ず儂から…」

宮廷魔術師及び帝国魔法省頭目、『三重魔法詠唱者』フルルーダ・パラダイン。

隣は従者で付き添い人を務めるアルシエ・フルトである。

此度はレイン殿のご好意にてこの場への参加と相成った。

魔力系、精神系魔法には一家言ある故、本日は有意義な時間を過ごすのではないか」

威厳ある声でそう告げるフルルーダと、その隣で小さく頭を下げる少女。

が、ケラルトは既に先程のやり取りを横目に眺めていたのでフルルーダの事は「偉大な魔法使い」から「やべー魔法キチ」くらいに内心格下げがなされていた。

次に立ち上がったのはケラルトも気がかりだったアンデッド。

「……デイベーノック。

見ての通り種族はエルダーリッチ、アンデッドだ。

我が師より此度の会合の機会を賜った。

主に魔力系、種族柄死霊系の魔法にも縁がある。

自分で言うのもなんだが、生者への害意は持ち合わせていない。安心しろ。」

「彼は本来なら祓われるはずだったのですが、死してなお収まらぬ魔法への探究心を持ってしてアンデッドの特性を克服した剛の者。

その精神力には目を見張るものがあります。

種族問わず多角的な意見を取り入れたくて今回出席して頂きました

た」

すかさずレインからフォローが入った。

アンデッド、それもエルダーリッチクラスのモンスターすらこの会合に参加している。

職業柄、ケラルトはあまりいい気分では無いが許可を得ている事は間違いない為口に出しはしない。

「ローブル聖王国より参りました、最高位神官団長を勤めますケラルト・カストディオと申します。

付き添い人はおりません。

信仰系魔法の知識と経験なら皆様のお役に立てるか」と

席順的に自分の番だと立ち上がり、簡単な自己紹介を行った。

「王国アダマナイト級冒険者『蒼の薔薇』、イビルアイ「仮面とつて下さい、そういう約束ですよね」ぐう：分かった。

エルダーリッチが居るんだしなんとかなるか……」

レインに咎められ唸った少女が仮面を外すと、彼女を纏う気配が一変した。どうやら仮面には認識誤認の魔法が込められていたらしい。

出てきたのは金髪に赤い瞳の少女。

だが、高位の神官であるケラルトには彼女の抱える違和感を見抜いていた。

「吸血鬼……」

「ああそうだ、とある理由で吸ヴァンパイア・プリンセス血 姫として暮らしている。

魔力系、結晶魔法に特化させた魔法を使える。それから転移系や精神系の魔法も少し。

言つとくが、今回はその女が何を企んでいるのか監視しに来ただ。余計な馴れ合いはしないからだ」

素顔を晒し、そう孤高を気取るイビルアイだが小さな身体で胸を張る彼女はどこか背伸びしたがりの子のような面影がある。

「ラキユースさんは連れてこなかったんですね。

付き添い人で来る予定では？」

「急な依頼が入ったからな、その対応に出てる。

あとツアールとリグリットにもこの会合の事は伝えてある、亜人排斥やら偏向的な行動を取れば即報告してやるから妙な真似はしない方がいい」

「あらあら、全然信用されてませんね」

ふんっ！と不貞腐れた表情のイビルアイにレインはまるで年の離れた妹をからかっているようにくすくす笑う。

実際はアンデッドなぶんイビルアイがだいぶ年上なのだろうが：女性に年齢の話はタブーだ、それは人だろうが死者だろうが変わらない。

「最後は私、本日この会合を企画させて頂きました。

スレイン 法国魔法院魔法地質学部門教授、レイン・エルリク・ホーエンウッド。

付き添い人はケレシア・リーズ・マスターク：

いえ、皆様の前で偽りの身分は必要ありませんわね」

レインがウインクすると、呆れたようにケレスもため息とともに掛けていた眼鏡と認識障害の指輪を外す。

すると彼女達が纏っていた雰囲気が一変し、そこには銀の淑女と気だるそうな三つ編みの少女の姿があった。

「ごきげんよう皆様。

改めまして私、スレイン 法国北方要塞都市ローグレンツ領主、並び

に漆黒聖典第13席次を勤めさせて頂いております、レイラ・ドウルム・ブラッドレイと申しますわ」

「…同じく漆黒聖典第9席次、セレスティア・デメチ・エウレシス。職業は神都ではない古本屋やってまーす」

なんとなしに自己紹介する2人だが、ケラルトは驚愕していた。何かのマジックアイテムを使って隠していたのだろう、もはや別人とも言えるほどに変化した仕草や雰囲気、そして風格が違う。

(漆黒聖典って…:フランスの虎の子秘密部隊じゃない!)

それが2人も!?

確かに両名とも只者じゃない…特にレインの方、本気で戦ってる時の姉さんでも歯牙にもかけないような別次元の覇気。

マジックアイテム1つでこんなに誤魔化せるものなの…?)

本職ではないが歴代最強と謳われる騎士を姉に持つケラルトだからこそ分かる、戦士としての格の違い。

彼女達の放つ気はたちまち部屋を飲み込んだ。

「お…おお…」

フルーダもそうだ。

帝国最強と称される御老公も恐らくこの2人には敵わないだろう、フランスの隠された実力者の登場に驚きを隠せない…

「だ、だだだだだいい10位階いいいい!?

貴女はまだ実力を隠しておったのか!!!」

椅子を蹴飛ばす勢いで立ち上がったフルーダがしきりに叫ぶ、第10位階という言葉にケラルトも目を見開いた。

本来なら決して到達出来ることは無く、ごく一部の文献にしか記さ

れていない位階魔法の最上位、第5位階の行使可能な彼女からしてもはや御伽噺の産物である。

一瞬虚偽ではないかと疑ったが、フルーダが異能力タレントで位階魔法を目視で判別可能なのは有名な話だ。この場で嘘を吐くメリットもない。

「申し訳ございませぬ、魔巧同盟を結成するにあたり諸々の事情で身分を隠させて頂いておりました。

ですが魔法にかける情熱は皆様に勝るとも劣らないと自負しておりますのでご安心下さいませ」

「おおおおおおお……わ、儂が求めていた魔導の極地。その一端を貴女は……修めておるのですか……？」

「ならばそれを是非ご教授頂きたい!!!」
「……残念ながらそれはできません。」

位階魔法を極めたと言っても属性を限定させた異能力ありきのものであり私はまだ道半ば、貴方に教えられる事などが知れておりますもの。

けれど! 『ルーン』は違います!」

レイラの言葉に落ち込んだり目を輝かせたり、そろそろ血圧が大変な事になってそうなフルーダ。後ろでアルシエは「お師匠様また腰が……」と心配そうにアワアワと慌てふためくことしかできない。

「フルーダ様もご覧になったでしょう？」

ルーン魔法を通じた魔法の発動過程、そこから見える位階魔法とは明らかに別系統の魔法が」

「た、確かに……あれは我々の知る位階魔法とは些か毛色の違う感じがかった。

あれ以来研究を続けた他の者たちも貴女と同じ事を言っておった。」

「そう。ルーン魔法の根幹、嘗てこの世界で古の竜種達が使用してい

たとえられる生命を糧に発動する始まりの魔法。

またの名を『始原ワイルドマジックの魔法』

「始原の…魔法…：…ッ」

「その謎を解き明かし、我々人類の糧としよう。というのが私の本来の目的なのです。」

そのために皆様をお呼び立て致しました。

この偉業を成すには誰かに教えを乞う必要などありません、この場に居る方々は皆スタートラインは同じ。

共に学び、研鑽し、人類が未だ見ぬ魔導の世界に脚を踏み入れようではありませんか!」

「おお…：…ッおおおおおおおおお…：…」

感極まって滂沱の涙を流しながらもレイラの手をひつしと纏るようになり、フルルータは何度も頷く。

対してレイラは「上手く話を逸らしてうっかり上がっちゃった位階魔法の事は誤魔化せましたわね!セーフ!!」と内心ガッツポーズを決めていた。

「…：…私たちが何を見せられているのかしら」

「…：…知らん(ないです)(なーい)…」

などと外野が呟いているが、老公の呷れた耳には届いていない。今は新たに訪れた魔導の福音にただただ浸っていたのだった。

…：…

こほん、とレイラが咳払いをひとつ。

卓の真ん中に広げたのはいくつかの文言が綴られた小綺麗な羊皮紙だった。

「さて、互いの本名も明かした事ですし。」

皆様は先ずこちらをご覧下さい

私共は国と宗教と種族の垣根を越え集まった魔巧の同志。

全てを始める前に幾つか確認しておきましょう」

一つ、同盟内において一切の戦闘行為の禁止

「この場は新たな魔導を切り拓く為の組織です。竜王国内に存在するこの建物を《聖域》と定め、絶対不可侵の非戦闘領域であると認めて頂きます。

国同士の不和や種族間の軋轢は不要なものであり、自由の名のもとに我々は魔巧を探究せねばなりません」

一つ、同盟内で生まれる知的財産、物的財産の共有

「こちらは任意ですが。

学ぶものは未だ人類の成し得ぬ未踏領域。基礎は私が誠心誠意お教えしますが、そこから先は各々の独創性が魔巧をより深く広い領域へと至らしめることでしょう。

故に、私達が生み出す財産は生み出した者にこそそれを黙秘かつ行使する権利がある。ですが必要ならば互いに共有し合うことで更なる発展が見込めるはず。

勿論、秘匿もまた個人の自由ですが壁にぶつかった際に1人では解決できない問題もありますからね。

そんな時は互いに情報を共有し合い、議論しながら答えを導いていきましょう」

一つ、魔巧における発展とそれに伴う利益の管理

「これについては皆様にお任せします。

魔巧から生まれたものに関して私は一切の著作権等を放棄し、私が基礎を教えた本人だからといって裁判や賠償等で金銭の要求を行わない事を誓いましょう。

あなた方が生み出した物の利益と責任はあなた方のもの。

生まれた魔巧の技術を国で育て、商業化するもよし。

独り粛々と研鑽に打ち込むもよし。

それを国事行為または示威行為等に使おうとも一切の責任を咎めません。

各々が責任をもつて魔巧と向き合い、学び、広げて頂いて結構ですわ。

個人的な意見を述べさせて頂くなら、それが弱き人々を救い、人類が益々の発展を遂げる一助となれば幸いです」

その他にも人道的な面や金銭面で細々とした条項が並べられているが、基本はこの3つに抑えられている。

羊皮紙の一番下には各々の署名欄があり、既にレイラとセレスティアの名と血判が刻まれていた。

「以上の項目に^ご納得頂けるなら^{こちら}に書名をお願いします。

あ、この羊皮紙は契約魔法書ギアススクロールの類では^ごございませんので御安心を」

いわばこれは決意表明のようなもの。

互いを尊重し合い、魔巧という新たな境地で研鑽する為に宣言する意思表示だ。

いの一番に飛びついたのは案の定、フルーダだった。

レイラの話が終わるや否や羊皮紙に飛びつき己の名前を殴り書く。

「兼ねてより話をして頂いていた同盟じや、今更怖気付くものか！
アルシエよ、お前は？」

「わ、私で良ければ喜んで……！」

師のご期待に添えるよう努力します！」

興奮気味な老公の隣で従者も頷き、後押しされる形で血判を押し
た。

「断る理由もない。

元より多くの魔法を学び探究するのが俺の生きがい……いや死にが
いか？

我が師より賜った機会を無駄にする筈がない」

そう躊躇いなくデイバーノックも手を動かし、参加を表明。

「仕方ない、付き合ってやる。

……興味が無い訳じゃ無いからな」

腕組みしながらしかめっ面で、でも興味は隠しきれずにうずうずと
イビルアイはごちて、ペンを走らせた。

「ひとつ、聞いてもいいかしら」

「なんなりと」

「其方の方は？」

先程から隅に座って黙ったままなのだけど」

そうケラルトが視線を向けるのは先程フルーダと成り行きで話
をしていた謎の少女。

女性であるケラルトですら美しいと思ってしまうようなその姿は
まるで精巧に作られた人形のような印象を受ける。

「彼女は……そうすわね、《記録係》です」

「記録係？」

「ええ、連絡役や移動役も兼ねてますが。」

当面の間は彼女の転移魔法で皆様を安全に此処へお招き致します。そして我々の活動を記録し、書物映像問わず後の人類へ伝えていく為に居てくださってますの。

特例中の特例故に詳細は伏せさせて頂きますが、神に誓って皆様に不利益を被るような事は致しませんので御安心下さいな」

無表情のままひらひらと手を振ってくる彼女にケラルトは困惑しつつも視線を羊皮紙へ戻し、少しの間考えた。

（魔巧同盟、始原の魔法、魔法の新しい可能性…

言ってる事はきつと嘘じゃない。

どうして他国を巻き込んでこんなことするのか分からないけれど、彼女が悪意を持っていないのは理解できる。

聖王国を取り巻く環境を打破する為にはカルカの善政に頼りっぱなしじゃ立ち行かないし…)

ケラルトの所属する聖王国では現在大きく2つの派閥に分かたれている。

現聖王であるカルカが治める北部領と歴代初の女性聖王である事に反対した貴族達が治める南部領。聖王女就任から現在まで強い反発を続けており、その険悪ぶりから内戦の勃発まで噂される程だ。

日常的に亜人に攻め込まれる聖王国で、更に本来預けるべき背中をクーデターに怯えなければならぬなど馬鹿らしいにも程がある。

というか南部連中は仮に実権を握った後亜人をどう対処するつもりなのか…いや奴等の事だ、カルカを蹴落として悦に浸ることしか考えていないのだろう。とケラルトは内心クソデカ溜息を吐く。

魔巧が自国の抱える様々な問題の突破口になってくれるかもしれない、そんな夢を見てしまった。

「分かりました、私も魔巧同盟に参加させて頂きます。

このような機会を与えて下さった事に感謝します、ブラッドレイ様」

「こちらこそ、宜しくお願い致しますわ」

かくして此処へ6名の賢者が揃い、魔巧同盟は本格的に活動を開始する事になる。

彼ら彼女らが本編原作に与える影響は如何程のものか……

・賽は投げられた・

スレイン法国、神都中央広場

今日は年に一度、建国記念の式典が行われる日。

六柱の神がこの地に舞い降り、種の絶滅に瀕する人類をその御力で救ってくださった記念すべき日和だ。

晴天の空の下、神都で最も大きな中央広場には多くの信徒が詰め寄り、祭典のみ開放される特設バルコニーより説法を説く最高神官長の話に聞き入っている。

この高説は全国民に向けて発せられるものであり、国に登録されたあらゆる都市、市街地、村落に至るまで風の巫女らによる遠隔の映像共有魔法がその祭典の様子を伝えていた。それほど大きな行事なのだ。

やがて高説も終わり、年間行事もあとわずかとなった頃合い。

気の緩んだ国民の気を引き締めるように、今までより少し強い言葉で壇上より告げる声が響いた。

『……それでは最後に、皆に大きな告げごとがある。

これより起こる全ての事柄は現実であり、今後の我が国における未来をより良いものにする為、御身自ら我等の下へあらせられた。

皆、心して拝聴せよ』

そう最高神官長が告げるなり彼は脇へはけ、膝を突き服従の仕草を取った。

年ごとの交代制ではあるが、この国における最高位の地位に座する彼が跪く存在。民衆の中でも賢い者はその意味に静かに恐れ戦き、そうでない者達は静かながらに動揺を隠せない。

やがて壇上より現れるひとつの影

一言で言うなら「赫銀の聖女」だろうか

軽いウェーブの掛かったどこまでも深い銀を思わせる艶髪

生者とは程遠い色白でありながら、人形のようにシミひとつ無い美肌

神の設えた神器を身にまとい、神々しさすら感じさせるその玉体
蠱惑的に、見るもの全てを魅了する赫い瞳

この世のものではない、完成された一つの「美」の形

そう錯覚させるほど整った

「そうあれ」と創造された人外の美貌がそこにはあった。

ざわめきが更に大きくなる。

スレイン法国には神話として、六大神と彼らに仕える従属神の姿を
童話や絵本で既に見知っていた。

六柱の神々の外見的特徴や、従属の姿も一般的な法国民なら常識

レベルで広がっている。

神々がこの地を去り、主を喪った従属神が狂い果てて世界を敵に回そうとも、民には彼らの偉業は脈々と受け継がれていたのだ。

そんな彼等の脳内で特徴の一致した従属神の姿が今、目の前に広がっている。

“静粛に”

恐怖のオーラL.V.I
“たつた一言。”

彼女が一声放っただけで聞くもの全ての背に凍るような緊張感が走った。

映像越しに聞いている者たちも同様に。

恐怖と魅了が緋い交ぜになった感情に支配され、突然現れた見た目15に満たないほどの少女から目が離せない。

スレイン法国の全国民を釘付けにした彼女は更に言葉を紡ぐ。

“誇り高きスレインの民たちよ”

“父の愛した人類よ”

“汝らの厚き信仰は実を結び 私は蘇った”

“我が名はルーファス”

“建国の祖 六大神が 一柱 死の神スルシャーナ”

“その従者である”

ルーファス

あるいはルフスとも呼ばれるその名を知らぬ者は居ない。

伝承に曰く、主を亡くし狂っていった他の従属神と違い、スルシャーナ亡き後も最後までこの地に遺された忠臣

伝承に曰く、十の神魔を手繰り御身の敵を滅ぼす赫の大総統

伝承に曰く、支配と解放を司りし善なる悪魔

本当に彼女が？

そんな民の疑問を裏付けるように、中央広場を囲うようコの字型に建つ大聖堂の屋根の上に亀裂が生じる。

音立て、硝子のように弾け飛ぶ十の空間から覗かせるのはそれぞれ異形の魔物達。

3つの首に形の違う厳しい角がそれぞれ生えた、禍々しい翼を持つ目の無い巨龍

太陽光すら吸い込むほど黒黒しい巖のような鉱石に全身を包まれた巨人

それぞれ色の違う7つの光を灯す頭蓋骨が周囲を飛び回る首無し
の鎧騎士

ゆらめく流体であり、固体であり、気体である性質を持つ水晶からなる9つの大蛇の首

腰元より燃える4枚の悪魔の大翼を生やし、男を魅了する豊満な肢体とそれを煽るように扇情的な格好で妖艶な笑みを浮かべ屋根に腰掛ける青肌の女悪魔

その他視界に映るどれもこれも、父であるスルシャーナが丹精込めて仕立てあげ、調整を施し、特別な名まで与えた自慢のユグドラシル産最高レベル召喚モンスター達。

見るもおぞましい異形の化物が合計十匹も自分達を見下ろしている。

その圧倒的な存在感に思わず誰もが膝を突く。

我が身の助命を乞うかの如く、生物としての格が違うと、無意識のうちにとつた服従の証だった。

“面をあげよ”

老若男女等しく、ギリギリまで張り詰めていた国民の緊張がルーファスの一言で霧散する。

“これらが危害を加える事は無い”

“お前達が善き人々であり続ける限りは”

彼女の言葉と共に人型のものはその場に跪いて礼をとり、異形はその首を残らず下ろし、服従の姿勢をとった。

化物達は完全にルーファスの制御下にある、その証明のために。その逆も然り、「悪い事しちやダメよ」と釘を刺す意図もある。

“これらは人類を守護する駒として用立てる”

“共に人類を守護する彼等の下で”

ルーファスの横に《転移門》が開くと、黒いフードを被った人物が次々と彼女の背後に並び、膝を突いた。

14人が皆目深に被ったフードで判別は難しい、辛うじて男女が判別できる程度だ。

“スレイン法国六色聖典がひとつ 《漆黑聖典》”

“かの組織の存在を公的に認め 今後は直々に我が指揮下に置く事とする”

そう、彼等こそスレインにおいて秘中の秘である特殊部隊の構成員たち。

国内でも噂の範疇だった組織の存在が公にされ、更なる動揺が民を襲うが蘇った神の前で今更慌てふためく事もできない。

同時に感じるのは御伽噺の神の復活に立ち会えた万感の思いと、その膝元に自分達が居られるという優越感だった。

“五百年もの間寝過ごした我が今更お前達に多くを求めはしない”

“我が望みは変わらず 人類全ての繁栄と発展 その守護である”

“故に今後も変わらず 統治は現行の最高神官長及び神官団に一任するものとする”

その気になれば全てを牛耳る力を持ちながら、あえて彼女は国の意

思を人類に委ねる。「君臨すれども統治せず」と民の前で言つてのけた。

十の神魔が亀裂の向こうへ消えていく。

跪く漆黒聖典を一瞥して、ルーファスは国民に向けて心からの気持ち・を言祝ぐ。

“人よ 強かであれ”

“人よ 賢くあれ”

“されど人よ 傲り謀ることなかれ”

“貴方達が善き人々で有り続ける限り 私も貴方達にこの心臓を捧げよう”

“人類に永久の繁栄と栄光を”

荘厳な雰囲気は一転して、母が子に言い聞かせるような優しい声音。

無表情が一転、柔らかに微笑むルーファスが大画面に映し出され、脳を焼かれた国民は歓喜の雄叫びを抑えられなかった。

伝播した歓声が神都を埋め尽くすなか、彼女は身を翻し漆黒聖典と共に奥へと消えていく。

興奮冷めやらぬ式典を最高神官長に任せ、ルーファスを含めた漆黒聖典はいつもの会議室へと移動して、各々がフードを外し席へ腰掛けた。

「おーっほっほっほー！」

声がデカいぞこの女。

「《獄界絶凍》、はしたないですよ」

「ねーちゃん、基本静かにダンマリとか性格的に無理だからねー。限界だったんでしょ」

「人をタチの悪いお喋り人形みたいに言うの止めて貰えますか？」

まあ、シリアスな雰囲気黙ってられなかったのは事実ですが！」「いつもサボってたから知らなかったけど、レイラって会議中もこうなの？」

「番外席次、コードネームで呼んであげて下さい。」

一応仕事かなもので…」

「ええくめんどくさい。」

そもそも知ってるの彼女と貴方とクレマン 「《疾風走破》です」…しつぷーそーはくらいだし」

「全体行動に向いて無さすぎる…」

相変わらず高笑う13席次にそれを諫める第3席次、実は初めての円卓会議故に疑問を隠せない番外席次を隊長が諫めようと頑張っているがどうにも締まりが悪い雰囲気だ。

「お前達従属神様の御前だろうか！」

静粛にしろ静粛に！」

我慢できずにそう吠えた第2席次《四大精霊》の一喝に番外席次は気だるそうに「ハイハイ」と返し、隊長と第3席次の謝罪に鼻を鳴らした。13席次は何食わぬ顔でお茶の用意をし始めた。

〴〵べつにいいのに〴〵

無表情のまま告げるルーファスの声音は少し残念そうだった。

彼女の公の仕事以外では、畏まられるよりアツトホームな雰囲気話をする方が好きらしい。

〴〵さて〴〵

一変、ルーファスの言葉に皆の気（一部を除く）が引き締まる。

“式典 ごくろうさま”

“せんげんどおり わたしが漆黒の指揮 とるから”

御身直々による劳いの言葉に感動し胸を踊らせる一同。

スルシャーナ教徒としてこれほど名誉な事は無い。

皆今より一層の働きを持ってそれに酬いる事だろう。

“さしあたり みんなにこれ わたすね”

すうーつと各々の下に羊皮紙が滑っていく。

「これは…」

「上級武技の取得方法、俺の会得してねえ奴だ」

「私のは…モンスター討伐記録表？倒せて事!？」

「我々個人に向けたトレーニングメニューって感じですかね」

ん、とルーファスは首肯し肯定の意を示す。

“番外と13席次いがい まだよわいし”

“無理やりにも つよくなつて?”

彼ら自身、プレイヤーの血を分けて神人だと今まで持て囃されてきた訳だがここに来て従属神から弱い、とバツサリ切り捨てられてこの中の幾人かは声にならない悲鳴をあげた。

“前衛には前衛の 後衛には後衛のためにくんであるから”

“支援職には能力をのぼす訓練をしてもらう”

“ぜんたいてきに魂の強度 あげる為にモンスターの討伐もへいこ
うして”

“期間はだいたい2年”

やっつて？

いやそんな無垢な瞳で強いてこられても…

「お待ちください！

御身の言葉を無下にする意図は更々ございませんが、我々が特訓している間聖典の職務は誰が全うするのですか？」

クアイエツセの言い分は最もだ。

漆黒聖典は他の聖典と比べて選り抜かれた者しか所属できない国一番のエリート部隊、普段の任務量を考えると13名（今は1人増えたが）でローテーションを回してもギリギリだった。

案件が特殊な為他聖典でカバーする訳にもいかず、それに特訓を加えるとなると如何に神人だとしても忙し過ぎて再起不能になるのは目に見えている。

「だいじよぶ 駒 つかうから」

ルーファスの横に見覚えのある亀裂が走る。

程なくして現れた、式典でも見た七色の骸骨に彩られた首無し騎士がルーファスの前へ跪いた。

「ルーファス様の召喚モンスターを代用して防衛、その間に漆黒聖典の強化を行うおつもりですね」

「くそとかげとも 国宝わたしたとき ねまわししておいた」

「評議国から落伍して人類圏にながれてくる亜人もすくなくなる

”

「あ、それならちょっと仕事ラクになるかも」

魔樹討伐の際も全員で出撃できなかったのは一部のメンバーが亜人討伐の為駆り出されていたからだ。

人手不足もこれで少しはマシになるだろう。
クソトカゲことツアーがどの程度働いてくれるかにもよるが。

「要するに、修行パートです！」

皆様、2年後にシャ○ンデイ諸島でお会いしましょう！」

「「「「いや何処だそこは」」」」

まーた訳分からん事言ってるよこの女。

正しく神の気まぐれか、こうして唐突に漆黒聖典強化計画は始動した。

王国は麻薬と汚職が取り除かれ、帝国では早くに軍拡が進み、聖王国は法国の物資支援を受けながら亜人の侵略に対抗し、竜王国はビーストマンに対して反撃の準備を整えている。

そして法国は正しい意味で人類の守護者としての道を歩み始めた。

この世を縛る法則すら好奇心の前では意味を成さない

原作とは違う道筋を歩む異世界の未来。

その賽は今、投げられた。



「それと わたしに 秘書 つけるから」
「はいってきいていいよ」

「はい、失礼致します。ルーファス様」

「皆様にこうしてご挨拶させて頂くのは初めてですね。」

「僕は元最高神官長秘書官、現在は御身勅命の下ルーファス様の補佐官を勤めさせて頂きます」

「エンヘラ・リード・ガビー」

「どうぞ宜しく」

破滅フラグしかない原作が始まってしまった：
30 異世界生活は極悪ギルドホームとともに

城塞都市、エ・ランテル

2つの国を隔て、物流の要でもあるこの街。

三つの城壁に囲まれた堅牢な要塞の片隅で、人の集う騒がしい一角。

エ・ランテル冒険者組合には今日も多くの人集りができており、依頼を貼り付けるボードの前にはより簡単に高報酬な依頼を求めて待ち伏せる者も少なからずいる。

その中に一人、異質な雰囲気を放つ大男がいた。

室内だというのに全身真っ黒の鎧甲冑を身にまとい、大人一人分はあろう長さのグレートソードを二本も背中につがえた、真紅のマントを羽織る偉丈夫。

彼はここ数日クエストボードの前に入り浸り、依頼を吟味する常連客だ。

全身鎧ゆえその表情は伺えないが、コツコツと踵を鳴らしながら深く考え込んでいる様子が伺える。

「モモンさん！」

暫く考え込んでいた時、ふと自分を呼ぶ声に思考を中断し顔を上げる。

軽装備に身を包んだ茶髪的好青年が一枚の羊皮紙を握り締め、走ってきた。

彼の名はペテル・モーク。

金級冒険者チーム“漆黒の剣”をまとめるリーダーである。

「ペテルさん、どうでしたか」

「バッチリです、要望通りの依頼を持ってきました」

我が事のように喜ぶ彼が手渡すのは発行されたばかりの依頼書。

依頼内容は『坑道入口を占拠するはぐれトロール群の討伐』である。場所はエ・レエブルの外れ、トブの大森林東方にあるウォー・トロールの縄張り争いに敗れた個体が複数人里へ降りてきて、近隣の街や村を襲っているらしい。

雨風を凌げる場所を求めて街付近の坑道を根城にしてしまったらしく、採掘作業も全面的にストップしてしまっているとの事。

平均より高い依頼料に加えトロールの討伐数に応じて報酬加算との事で、依頼主の力の入れようが伺える。

近年増加する鉱物需要を鑑みて、素早くより確実な討伐を願う。依頼書にはそう付け足してあった。

「必要な階級は金級以上の冒険者チームに限られますが、組合長の口利きでモモンさんとナーベさんも支援部隊という形で同行させてもらえるそうです」

「いつもありがとうございます」

「いえ！お二人が銀級以上の実力を持っているのは知っていますし問題ありませんよ。」

僕らの方こそ、モモンさんの邪魔にならないよう全力を尽くしますね」

「邪魔だなんてそんな事は無いですよ、共に頑張りましょう」

（謙虚だ…その優しさが嬉しくもツライよペテルさん）

屈託のない笑顔でそう答えるペテルにモモンと呼ばれた男は心の中ですらうごちた。

冒険者同士のチームアップはこの業界では珍しくない、報酬は山分けだが依頼の確実な遂行に繋がるし人脈作りにも貢献してくれる。

前世で培ったなけなしの社交スキルに救われたな、と常々思う。

冒険者になって初めての依頼を共にこなした時からペテル達『漆黒の剣』にはお世話になりっぱなしだ。

身元の怪しい自分たちを邪険にすること無く、共に仕事をする先輩としてアドバイスや指導をしてくれる。

おかげでこの世界で冒険者として無事に旗揚げする事ができた。右も左も分からない中、初めて会った先輩冒険者が彼等のような善良な者たちだった事は幸運だろう。

(ペテルさんを出しにしてるみたいで気が引けるけど、今はなりふり構ってられないからな。なぜならば…)

(金が…無いっ!!)

幸い、内心に留めた魂の叫びは誰にも聞かれることは無かった。



目覚めたら異世界だった、って陳腐な常套句はよく聞くけれど、いざ自分が体感すると本当に焦る。

名前は鈴木悟、プレイヤーネームはモモンガ。

10年以上続く元人気ゲーム『ユグドラシル』のサービス終了日、自分のギルドで迎えた最後の時。

目が覚めたらそこは異世界だった。

身体はプレイヤーキャラだったオーバーロードになってるし！

ギルメンが丹精込めて作ったNPC達は自我を持って動き始めたし！

オマケに俺の事を「至高の御方」だとか持て囃して忠誠を誓うんだもの！

「端倪すべからざる」ってどういう表現!?褒められてんのか貶されてんのかわかんねえよ!もっと簡単な言葉で言ってくれ!

あつ…(フワァ)

…この身体はもう人間じゃない、アンデッドだ。

唐突に俺は人間じゃなくなった。

感情が昂るとさつきみたいに強制的に沈静化がかかるようになった。「精神異常耐性」をもつアンデッドの特性だからだ。

そう。様々な検証の結果、あろうことかゲームの設定や物資を全て引き継いだ状態で異世界転生…異世界転移か?をしてしまったらしい。

本当にわけがわからないよ!

ペロロンチーノさんだったら「俺TUEEE!!」とか「どんなだろう系だよ!」とか言ったんだろうか…

ともかく文句を垂れていてもしょうがない、確かめないといけないことは山ほどあった。

身体の検証を色々と済ませた俺はギルド内に配置されているNPCの把握や施設の稼働状況、資源など諸々の確認を終え、気晴らしがてらたち・みーさんの作ったNPCであるセバスの報告にあった外の状況をこの目で確認する事にした。

念の為の変装はデミウルゴスに一発で見抜かれて同行を許すはめになったけど、初めて見る澄んだ空に広がる満点の星には本当に感動したんだ。

ブループラネットさんの力作である六層の天蓋も美しいけれど、本物は迫力が段違い。

リアルじゃ汚染された雲に覆われて見る事のなかった空が一面に広がって、まるで宝石箱みたいだった。

そんな感動に浸っていた時、ふと視界の端に光る物が見えたんだ。《飛行》でかなり高くから見下ろしていたから空ではなく地上に、森の中だというのにそこだけくり抜かれたように白く染まっただけで、星の光を反射してた。

危険かもしれない。

ユグドラシルかも分からないこの世界は俺にとって未知の連続、仮にLv100のプレイヤーでも即死してしまうようなデストラップでもあれば一発でお陀仏（既に死んでるケド）だ。

それでも溢れる興味を抑えきれない。

デミウルゴスがかなり渋ったが無理を言って共に確認に赴くと、そこは一面の雪景色。

辺りには冷気が立ち込めて、その真ん中にドデカイ氷の塊が鎮座していたのだ。これには驚いた。

デミウルゴスが先行し入念な魔法チェックをした結果トラップ等は検出されず、一先ずは安全が確認されたので近寄ってみることに。

デカイ氷の塊はどうやらトレント系のモンスターらしい、その形状から推察するにザイトルクワエという大型モンスターだ。

でも奴には脚の生えた個体なんていなかったし、この世界特有のモンスターなのかもしれない。

生命反応は完全に止まっており、ピクリとも動かないそれを眺めていると、厚着の蜥蜴人から声を掛けられた。

デミウルゴス、警戒するのは分かるけど取り敢えず支配の呪言で押さえ付けるのは止めなさい。敬語とか気にしないから、「平伏しろ」とか初対面の人：人？に絶対やっちゃダメなやつだぞ。

おかげで警戒心を解くのに苦労したよ…

名はザリユース、この付近にある蜥蜴人の村に住んでいて、自身の鍛錬の為に毎日此処へ来ているらしい。

レベルは…かなり低いな、20そこらじゃないのか？

身元は隠しながらこちらの状況を説明して、どうして森のど真ん中にこんな場所があるのか聞いてみると、過去にこのザイトルクワエ（ザリユースは魔樹と呼んでいた）は復活し、暴れようとした所を人間

の勇者達によって討伐され、凍った状態で今も罰を受けているらしい。その影響で討伐されてからずっとこの一帯は冷気と氷に覆われているのだからか。

氷の魔法で？こんな広範囲を？

氷原は見たところ小さな村なら田畑ごとすっぽり収まってしまっただけの面積だし、樹木系モンスターと相性の悪い氷魔法でどうやってここまで威力を出したのか気になるが、樹の平均レベルはたしか80前後、なら少なくともそれ以上のレベルをもつ者がこの世界には複数人いる事になる。

自分の中で警戒レベルがひとつ上がった、自分のように転移してきた高レベルプレイヤーの存在は脅威有り得る。

なにせ『アインズ・ウール・ゴウン』は人間種PKの悪名高きDQNギルド筆頭だとユグドラシル内では有名だ。当時の俺達の評判からして、またあのゲームのPKマナー的に考えても人間種のプレイヤーなら出会えばまず敵対視される事だろう。

ちよつと忠誠心が天元突破してて怖いけど、デミウルゴス達NPCは去っていったギルメンの遺した子供のような存在、そしてギルドホームは俺達の努力の結晶だ。万が一にもそれを破壊されてしまうのは避けたい。護ることのできるプレイヤーは俺一人なのだから。

ザリユースの兄が件の人物達と実際に話したそうなので詳しい話を聞くべく彼の村へと向かいたいところだが、生憎彼は他の街へ交易に出ているらしい。

そしてナザリックに俺が居ないことを察した守護者達がにわか騒ぎ始めているとデミウルゴスから言われたため、ザリユースに連絡用のマジックアイテムを渡し今回は別れる事にした。

異世界に来て初の第一村人だ、この繋がりは維持しておきたい。

『御身自ら未開の土地にて情報を…更に人脈まで構築なさるとは。

流星はモモンガ様、どんな些末な存在にも利用価値を見出されるその御姿。

『このデミウルゴス感服致しました』

帰り道でデミウルゴスが畏まってそんな事を言っていた。君が無駄に警戒心を煽らなきやもつと話せたんですけどね、と心の中に留めておく。

忠誠心が高いのは結構だけど俺がめっちゃ賢くて何もかもお見通しみたいな雰囲気出すの止めてくれよ……ただ無闇に敵を作りたくなかっただけなんだ。

.....

……もうね、疲れた。

ちよつと席を外しただけでナザリックは大騒ぎになってて、それを諫めるのには苦勞したよ。

守護者達も心配していたし、アルベドなんかはニグレドを使って森をしらみ潰しに探させようとしてたし、俺の行動ひとつで皆に氣苦勞をかけてしまった。

皆の忠義は嬉しい、これは本当だ。

けど肩身が狭いよっ！

これが部下を沢山持つ上司の気持ち、なのかなあ……

明くる日。

ザリユースには兄が村に戻った時に連絡を入れて貰うよう言伝えているため、こちらは完全に待ちの状態だ。

今日はセバスと共にマジックアイテムミラー・オブ・リモートビューイング《遠隔視の鏡》の練習

中、たまたま見つけた野盜に襲われている村を助ける事にした。

アンデッドになってからというもの、人間の死生観が薄れてしまっ

ている。人が死んでも虫が死んだ程度の気持ちにしかならない。

それでも襲われている村を助けようと思ったのは、隣に侍るセバスの姿にたち・みーさんの面影を重ねてしまったからだ。

『困っている人が居たら助けるのが当たり前！』

リアルでは警察の職に就いていたという彼がいつも掲げていた言葉。

偽善であれなんであれ、助けるのに理由は要らない、呆れるほど善性だった彼の精神の表れだった。

そうときまればセバスを同伴させる。

ザリユースと接触した時、初手支配の呪言で無駄に警戒させてしまった反省を活かし、今度はNPCでもカルマ値の低くない、少なくとも0以上で人間に対して敵意を抱いていないであろう面子で向かう事にする。

過去のギルメンとの会話を頼りにNPC達のカルマ値を思い出す傍ら、一先ずはたちさんの製作で安心と信頼のカルマ値極善NPCセバスに尋ねた結果、戦闘メイドのユリとシズを同伴させることにした。

ナザリックのトラップ全ての解除方法を知るシズを表に出すのに気が引けるが、他の候補が悪性のナーベラルとソリュシャンだったので不要ないざごぎを避けるためシズに決定。

今思えばルプスレギナでもよかったかもしれない。気さくだしカルネ村が安定したらナザリックと村との橋渡し役として在留させるのもアリだ。

改めて考えてみるとウチのギルドってカルマ値低つくい奴しか居ないな、まあ悪役ギルドだったし仕方ない。

アインズ・ウール・ゴウンの前身『ナインズ・オウン・ゴール九人の自殺点』は狩られる立場だった異形種プレイヤーでも果敢に世界を旅する為のクランだったはずなのに、いつの間にか悪の組織みたいな扱いにされて、それにウルベルトさんや一部のギルメンが乗っかっちゃったから悪の印象が強くなった。ギルマスだった俺は攻略Wikiに『非公式魔王』だとか書き込まれてたつけ。

以前接触したザリユースのレベルを鑑みるに敵はそれほど強くないはず。しかし予想外の事態に備えナザリックには完全武装のアルベド（セバスを同伴させる旨を伝えたらすっげえゴネてこのポジションに収まった）を控えさせ、転移で何時でも呼び寄せられるようスタンバイしてもらおう。

周囲には隠蔽と索敵に長けた《エイトエッジ・アサシン八枝刀の暗殺蟲》4匹を密偵に飛ばし前衛セバス and ユリ、後衛は俺とシズで固める。

パッシブだった《絶望のオーラLv5》を解除するのも忘れずに。異世界に来て初めての戦闘はつつがなく終了した。というかまったくお話にならない。

即死魔法の耐性無し、装備は貧弱、強さも脆弱、護衛用に出したデスナイト（Lv40前後）ですら無双ゲーみたいに暴れ回って敵の兵士をボコボコにしてたし。こちらの損害はゼロに等しかった。

唯一、転移直後に出くわした襲われる寸前の少女たちが俺の骸骨顔を見た時に漏らすほど怖がられ、精神的なダメージを受けた以外は。

「シズ、私の顔はそんなに怖いだろうか」

「……怖くない、です。」

でも、普通の人間は普段見慣れないもの、なので。

びつくりしたんだと、思います」

「そうか……」

デスナイトと共にバッタバタと敵を薙ぎ倒すユリとセバスを眺めながら、隣で護衛するシズと会話しつつ、俺はインベントリから取り出した手頃な嫉妬マスクで顔を隠す事に決めたよ。

『モモンガ様、二点ご報告が』

『どうした』

『ひとつ、村の西側より馬で接近する一団がございます。』

数は15名ほど、安上がりですが鎧甲冑に身を包んでおりいずれかの組織に所属する騎士団の可能性が高い模様』

『もうひとつは?』

『ハッ!南からも謎の一団が接近中。』

数は6名、装備を見る限りこちらは魔法詠唱者の集団かと。

ただ移動手段は馬ではなく、その…形容しがたいマジックアイテムか何かに騎乗し高速で接近中。

距離は遠いですが速さが段違いです、程なくして村へ辿り着くかと思われまます。

如何致しましょう』

え、何?馬はともかく謎のマジックアイテムに乗って高速で接近中ってどういう事だよ。

この世界独自のアイテムか?気になるけど危険だな…

一先ず警戒を続けさせる、ナザリックの戦力による迎撃は最後の手段だ。

ともかく今はこの争いを諫めることが最優先。

生き残った奴らはふんじばり纏めて拘束、亡くなった村人達の葬儀と遺体の処理も簡易的ながら行った。

アンデッド化を避けるため、またアンデッドが多いほどより強力なアンデッドが産まれるそうなのでそんな事態を避ける為に遺体は燃やすそうだ。この世界のアンデッドもあまり良いイメージを持たれていないらしい。

まあリアルで考えても死人が動き出したら怖いもんな。タブラさんがナザリックに寄与してくれたホラー映画の中にもそんな感じの話が沢山あったし。

それにしても戦闘にはレベル差が反映されているのにアンデッドの発生条件は異世界基準なのか。中々にややかしい。

この村には居ないそうだが、後学の為魔法に詳しい人に色々と尋ねてみたいものだ

「俺の名はガゼフ・ストロノーフ。」

リ・エステイーゼ王国にて騎士団長を務めている。

事の次第は概ね村長から聞かせてもらった。

此度はカルネ村の救援、まことに感謝申し上げます！」

そう深々と頭を下げる男、そしてそれに続く屈強な騎士たち。

報告にあった西から来る一団、どうやらこの先にある王国からやって来た正規軍らしい。

：装備の様子を伝え聞いた限り、正直人柄はもつと横柄な感じかと思っていたがそんな事は一切なく、ガゼフさんは王国騎士長に相応しい礼儀正しさを兼ね備えたりーダーだった。例の如くレベルはかなり低いけど。

後ろの騎士達も礼節を弁えているようで、彼等の高潔な信念と高い練度が伺える。とはセバスの言。

ガゼフさんの話を聞く限りだと、俺たちが壊滅させたこの集団はカルネ村に来るまでに他3つほど村を荒らし回っていたらしい。とんでもない荒くれ野郎どもだ。

敵の装備は隣国のバハルス帝国という所の物らしいが、どうにもきな臭い。

そうして俺と村長、ガゼフの3人でこいつらの処遇について話し合っているうちに、もう一方の一団がここまで辿り着いたのだが…

「我々はスレイン法国特別警邏部隊。俺はその部隊長を任されているイアン・アルス・ハイムという者だ！」

近頃我が法国から落伍した没落貴族が身分を偽り、王国領付近で野盗を行っている」と報告があった。

貴公らに話を聞かせては貰えないだろうか？」

ガタイも声もデカイ男が開口一番そう言つて、乗っていた明らかにバイクにしか見えないマジックアイテムから降りた。

いやなんでバイクが異世界にあるんだよ!?

……あつ（フワア）抑制が…

イアンと名乗る男が乗っていたマジックアイテム、見るからにバイクだ。

全体的にゴツゴツしているが、昔たつちさんが画像で見せてくれたハーレーなんとかというイカついヤツにそっくり。

いや、タイヤの部分はすっぽり無くなつて代わりに半透明な薄緑の板の様なものを取り付けられている。それが二枚、さつきまでホバリングのように低空を浮いて滑るように移動してた。

もちろん、そんな物はユグドラシルには存在しない。

ユグドラシルはサービス終盤こそ人気モノに日和つて強化アイマーなんかを実装したりもしたが、基本的に剣と魔法の世界観だった。

リアルだと一部の富裕層が観賞用に所有してたっけ。俺の会社の理事やその上の人達がそんな娯楽をやっていると小耳に挟んだような…

汚染の酷い外で車以外に乗るような物好きは居なかったけど。

イアンさんは同じくバイク（彼等は鉄騎馬と呼んでいた）に乗っていた部下と共に俺たちの所へやって来て、事情を聞いたあとこれまた深々と頭を下げてきた。

話を聞くにこの下手人共、元は貴族だったらしいのだが度重なる不正の横行に爵位を剥奪されたらしい。

そのまま野に下つたあと金にものを言わせ傭兵くずれを雇い、私腹を肥やす為村を襲っていた。

他国である帝国兵の鎧でわざわざカモフラージュしてから襲うあたり無駄に知恵は回るようだ。

「此度は本当に、本当に我が国の者がご迷惑をお掛けした！」

既に犠牲が出ている以上言葉での謝罪に最早意味は無いのは百も承知なのだが…同じ法国の民として謝罪させて頂く！

本当に申し訳ない！」

そう地に頭を擦り付けながら村長とガゼフさんへ何度も謝罪する
イアンさんら法国の人達。

4人で話し合った結果、彼曰く外交問題とかに発展しそうだと
事。

ざつくりと話してもらった感じ、ガゼフさんの所属する王国はイ
アンさんのいる法国に国家レベルの大恩があるらしい。

それも最近仲良くなつたばかりで、新たな軋轢を生むのはとてもよ
ろしくない、と。

なので賊はガゼフさん達王国騎士団が討伐したという事にしてこ
の場を収めたいそうだ。

被害にあつた村にはイアンさんの伝手で補給物資も手配するんだ
とか。

それでも彼は犠牲になった他国の民に申し訳が立たないと拳を握
りしめ悔しがり、怯える下手人達を殺さんばかりに睨み付けている。

根っからの善人なんだなあこの人。

それと手伝った俺たちも功労者としていくらか報奨を貰えるらし
い。

要は「大人の事情」というやつである。

あるある、リアルでもあつたよそんなの。

「法国としてはモモンガ殿にも何かしら褒賞を受け取って頂きたいの
ですが…」

まあぶつちやけてしまうと口止め料ですな。自分の権限で出来る
ことならばなんなりと仰つて下され」

「ふむ…ならば情報を頂きたい。

恥ずかしながら、私は研究に没頭していたせいか最近の俗世に疎

く、人の世に顔を出すのも久しぶりなものでね」

「承知致しました。他にご希望は？」

「イアン殿が騎乗していたあの鉄騎馬とやら、どのようなものか見せて頂いても？」

「おっ！モモンガ殿は鉄騎馬の良さがお分かりになりますか。」

そのご様子ですと魔法界隈の近状にも興味がお有りですか？」

「大変興味深い。是非ともお願いします」

結果として俺は王国と法国の二国に恩を売れたらしい。

この後イアンさんにこの世界の魔法情勢について色々話を聞き、途中から興味深そうに鉄騎馬を眺めていたガゼフさんも加わって鉄騎馬についての講義が行われた。

どうやら本当にここはユグドラシルではないらしい。どの国の名も聞いた事はないし。

……セバス、待機な？この人達に敵意はないし大丈夫だからアルベドは出てこなくていいぞ？

『承知致しました。アルベド様は私めが抑えておきます故、どうか心よりご歓談をお楽しみ下さい』

『下等な人間風情がモモンガ様と馴れ馴れしくしてんじやないわよ：頭吹っ飛ばすわ…』

『アルベド様、どうかここはひとつ』

通信越しでもわかるアルベドの殺意にアンデッドの身体じやなきやチビってたね。

でも貴重な情報収集タイムなんだ、頼むぞセバス！

『《飛行》を超える移動手段』として法国から生まれた鉄騎馬には様々な派生があるそうで、彼の騎乗する【猛る牡牛^{レイジング・ブル}】号は取り付け式の助手席含め最大3人まで乗れる大きな車体と圧倒的な走破性能が売りらしい。

他にも小回りと速度を兼ね備えた【クライング・ファルコン嘶く隼】号や大人数が乗ることを前提とした大型四輪鉄騎馬も存在するのだとか。それって完全に車ですよね分かります。

「『フローティング・ボード浮遊板』という魔法は初めて聞く。実に興味深い」

「元は積載許容量も少なく、使い勝手の悪い魔法だったのですが、ルー魔法と共に改良がなされ、数多の技術者達の試行錯誤の末、使用者の消費魔力を抑えつつ馬にも劣らない速度での走行が可能になりました。」

初心者はず【スマルト・ハウンス粗製の獵犬】シリーズから始めてみるのが宜しいかと。癖のない操作性で走りやすいですぞ」

「馬とは違い揺れは少ないですね。その分類を撫でる風が心地いい」

「以前レイン殿が街で乗り回しているのをチラリと見た事はあったが、実際に乗るのは初めてだ。やはり法国の発展は目覚ましいな。」

惜しむらくは魔法詠唱者でないと動かす事が出来ないことか。
ハハ、魔力が無い事を悔いる時が来るとはな」

助手席に乗せてもらって分かった。完全にバイクだこれ！

でも楽しい！リアルじゃ空気が汚な過ぎてバイクは自殺行為だったし、綺麗な空気の中風を切って走るのは気分爽快だ。胸の奥からワクワクが込み上げてくるよお！

：あつ（フワア）喜びも抑制されるのかこの身体…
でも楽しかったのは本当だ。

なによりユグドラシルには無い完全な未知の乗り物に好奇心を煽られる。

魔法詠唱者なら運転出来るのが尚更に興味をそそった。

「ガゼフ殿、レインとは何方の事でしょうか」

「うむ、先程話した通り王国と法国は友好関係を結んでいてな。」

恥ずかしながら王国ではまだ魔法詠唱者への理解が不十分ゆえ、そ

ここで王が直談判し魔法詠唱者育成のため法国より派遣されたのが彼女なんだ。

王城で何度かお会いしたが【星】^{ステラ}の位階に名を連ねる者に相応しくとても理智的で思慮深い方だった」

「星、とは？」

「それは自分がご説明致しますぞ！」

近年は魔法技術の発展目覚しく、文明開化の年と言われておりまして。

ルーン魔法を初めとした位階魔法を用いる技術を総称し「魔巧」、それを操る者達の階級を新たに「魔巧位階」と呼ぶようになりました。^{ステラ}星はその位階の頂点、世に魔巧を広めた七名の賢者達の位を指します。

ガゼフ殿のお会いした方は《水鏡星》レイン・エルリク・ホーエンウツド女教授ですな。

水魔法の第一人者にして王国内殆どの都市の水路設計に携わる偉大な御方だ」

「助手である《雷冠星》ケレシア女史とも相まって、今では王国の再興に欠かせぬ逸材なのです。

いやあ、我々のような筋肉だけの男共には労働力しか提供できないのが心苦しい」

「因みに自分も日々の努力実ってこのとおり、魔巧位階【雷】^{トニト}を頂いております」

そう誇らしそうに語るイアンさんの法衣の胸には雷を模した親指大のバッチが着いている。

位階魔法を改修したこの世界独自の魔法だって!?

き、気になる…!:

ゲームにはない魔法技術に工夫しだいで変化する位階魔法。この世界には未知が多過ぎるのでは!?

でも楽しそうだなあ!

詳しい話を聞きたいがイアンさんはそろそろ本国へ戻らないといけないそうなので名残惜しいが歓談もここまで。帰り際に鉄騎馬の紹介状を渡してくれた。

「機会があれば法国へお越しくだされ！」

この書状を見せれば法国にも問題なく入れましょう。

ただし鉄騎馬は製作予約待ちで職人が手いっぱいですので手に入るには少々時間と金が掛かりますが…

いや自分が領主様に話を通せばなんとか…

ともあれ鉄騎馬の魅力を語れる同士にお会い出来たのですから誠心誠意ご案内させて頂きますぞ！

それでは御達者で！」

部下を連れてイアンさんは去っていく。

鉄騎馬の後ろに紐で繋がれた下手人の生き残りを引き摺りながら。

「それでは我々もこれにて。

王都にお越しの際はご一報下され。歓迎致します」

ガゼフさんたち王国騎士団は俺たちが始末した下手人の首を幾つか持って、討伐の証拠として王様に報告するそうだ。

そろそろ日が暮れる。

あわよくばこの世界の戦闘がどんなものなのか確認しておきたかったけれど、気になることが多過ぎてそれどころじゃない。

でもやつと自分の中で確信がいった。

この世界はゲームではない。かといって俺が住んでいたリアルの世界でもなく、多くが俺の知ってる法則とは全く異なる世界なんだ。

法国で生まれた鉄騎馬もそうだが、ガゼフさんの腰に佩いていた柄に目立つ赤い宝石がはめ込まれた両刃剣も、ユグドラシルでは見たこ

との無いものだった。

きつと俺の知らない未知の製法で造られたマジックアイテムなんだろう。もつと突っ込んで聞いとけばよかった！

自分の中でコレクター魂がウズウズしているのが分かる。精神の抑制がなされても尽きないほどの興味。初めてユグドラシルを遊んだ時に似たワクワクを思い出した。

惜しむらくはもつと自由な身の上で冒険とかしたかったな…とチラッとセバスに目を向ける。

「セバスよ、ご苦労だった。

こちらの話に付き添わせてしまつてすまないな」

「とんでもございません。

モモンガ様の喜びは下僕の喜びにございますゆえ。

先の歓談がモモンガ様にとってより有意義な時間となれば、それは我々としても喜ばしい事に他なりません」

「そうか、彼等と話す私は楽しそうだったか」

「ええ、とても」

柔らかに微笑むセバスの隣に侍るユリ、シズも嬉しそうに首肯する。シズの方は無表情だからよく分からんけども。

ナザリックの支配者としては相応しくない振る舞いだったかもしれないけれど、後悔はない。

「二度ナザリックへ帰還するぞ。二人から得たものの中には皆に共有しておかねばならない情報が山ほどあるからな。

カルネ村との連絡役にはルプスレギナを指名する。村人との円滑な情報交換が可能になるよう手筈を整えよ」

「畏まりました。迅速に手配致します」

「この世界は私が思う以上の未知に溢れている。

だが恐れることは無い。アインズ・ウール・ゴウンはいつだって未知へと立ち向かってきた。

ならば今回もまた、新たな未知を楽しもう」

「はっ！」

最後に支配者っぽい事を言ったらちよつとオーバーなくらい反応されたので上手くまとまった感じがする。

魔王ロール疲れるなあ…

ナザリックに戻ると案の定アルベドが暴走しかかっており、宥めるのに一悶着。

下僕達を集め情報を共有し、今後の方針について発表した。

今は自室で一人、思考に耽ると言う名目で護衛も部屋には居ない。束の間のリラックスタイム。今のうちに頭の中を整理しておこう。まずこの世界はユグドラシルに似た魔法が存在するがユグドラシルそのものではない。

当初は唐突にユグドラシルIIのオープンβテストでも始まったのかと思ったが、現地の人々と話した感じ彼らはデータなどではなく生きた人間だ。

ユグドラシルは正しくサービス終了した。が、ナザリックは終わっていないかった。

アンデッドの身体になってしまった今では殺人を犯しても虫を潰したような気分にはかならないが、話に出てきた魔巧位階の最上位、【星】の人達が人間である以上友好的な関係を構築するために今後も不要な殺戮は控えた方が賢明だろう。

あわよくば引き抜き…いやいや話が飛躍し過ぎた。

二人に名前を聞かれた時咄嗟にモモンガ・アインズウールゴウンなんて言ってしまったけど、それはそれで通すしかない。

相手がプレイヤーならギルド名で炙り出せるかもしれないし、この世界と一緒に飛ばされたかもしれない他のギルメンの所にまで届けば…なんてのは希望的観測だけど。

ナザリックの防衛機構は問題なく機能する。

マーレの土魔法で誤魔化してはいるけれど、大墳墓が見つかるのは避けられない。

現状、俺たちはガゼフさんの居る王国領にギルドごと転移した形になってしまった。これって不法入国とかになるのかな…

融通効かせられるかは今後の交渉次第ってところか。

そして、鉄騎馬を始めとした未知の要素！

位階魔法と似て非なる新魔法の存在には驚きと喜びを隠せないな！

生産職のNPCに製法を覚えさせればナザリックで鉄騎馬を製作することだって夢じゃないはずだ。幸い資材は山ほどあるのだし。

ユグドラシルとは異なる完全な未知の探求。ナザリックを維持しながら、俺にとっては支配者ヅラしながらの重労働になりそうだけど、初心に帰って頑張るぞ！

そのために情報は何より優先して集める必要がある。

彼らは善良な人達だったけれど、ザイトルクワエを討伐できるレベルの強者が居るのは間違いない。

それに鉄騎馬の見た目は完全にバイクだった。ならそのデザインを考えた者はプレイヤーの可能性が高い。異世界からこっち、Lvの上限が分からない以上出会した場合友好関係を結ぶか、最悪でも不戦条約くらいに留めておきたいところだ。

ナザリックが誇る軍師ぶにつと萌えさん曰く、「戦は始まる前に終わっている」。事前の情報戦が敵を上回る唯一にして最強の手段なのだから。

諜報に長けたモンスターを召喚するのもアリだけど、せっかくの異世界なんだから自分の足で…

と、そこまで考えて2人が話していたこの世界の職業について思い出す。

「…………やるか、冒険者」

そして意気揚々と始めた冒険者生活一日目にして、現地の金銭をひとつも所持していない事に気づき絶望する羽目になるのだけど。

31 いつものアレ

「…セバス、それは本当なのかい？」

「は、このセバス一言一句逃さず記憶しております。」

『未知を楽しむ』、モモンガ様はそう仰っておられました」

玉座の間。先程の集会は終わり、主の居ない椅子の前で階層守護者達は今後の予定を整理する。

ナザリック地下大墳墓。

9つの階層と広大なフロアからなる、ユグドラシルにおける大型ギルドホーム。

サービス終了後において、ギルドマスターであるモモンガと共に異世界転移を果たした折、内部に配備されていたNPCキャラクター達もその全てがこちら側へやってきた。

自動POPモンスターを始め、嘗てのギルドメンバーが丹精込めて作り上げた最高傑作たち。

「そうあれ」と生まれてきた1と0の夢幻^{ゆめ}は、転移によつて現実と入れ替わる。

ナザリックは巨大だ。それ故に各階層の守護者達が代表し、諸事情あつて来れない者以外がこの場に残っていた。

「未知を楽しむって…どういう事でしょう？」

「新しい拠点を探すって事なのかな」

そうお互いに顔を合わせる双子の黒森妖精^{ダークエルフ}、第6階層守護者アウラとマーレ。

「ナザリックヲ、捨テルト？」

首を傾げる蒼い蟲王、第5階層守護者コキユートス。
その言葉に皆がしんと静まり返る。

「それは不敬だよコキユートス。」

モモンガ様のお考えは我々の遙か先を行っておられる、額面通りの言葉として受け取るのは悪手極まる思考だ」

だからその言葉は今すぐ撤回した方がいい。と、友人として忠告するスーツを着た悪魔、第7階層守護者デミウルゴス。

「ソウダナ、モモンガ様ハ最期マデコノナザリツクニ留マツテ下サツタ慈悲深キ御方。」

要ラヌ疑問ヲ抱イテシマツタ、謝罪シヨウ」

「モモンガ様は何故護衛に妾を選んで下さらなかつでありんすか…セバスはともかくユリヤシズより御身を安全に守れたハズなのに…ううっ」

と一人で嘆く吸血鬼、第1〜3階層守護者シャルティア・ブラッドフォールン。

「人間風情がモモンガ様にあんなに近づいて、馴れ馴れしく喋った挙句訳の分からない乗り物に二人乗りなんて許さない許さない許さないユルサナイそこ代われ下等生物が…！」

そんな中全く話の内容と関係ない所でギリリイ…と碎けんばかりに奥歯を噛み締め呪詛を吐く黒翼の淫魔^{サキユバス}、守護者統括アルベド。

その傍らに侍り、先程まで外でモモンガと行動を共にしていたセバス・チャン。

その全て、全員が自身の創造主によって製作され、異世界転移によってテキスト通りの感情を宛てがわれた人形達。その力は1人で国を焦土に変えることすら可能なLV100NPCだ。

今話には影も形も出てこない主人公を悩ませる最大の要因でもある。

「アルベド、シャルティア、物思いに耽るのもそこまでにしましょう。ナザリックは現在謎の転移現象に加え、様々な問題に直面している。

そんな中先の蜥蜴人との接触に続き、先んじて人間との友好関係を構築なされたモモンガ様の外交手腕には頭が上がらないよ。

彼等はLv換算すると20にも満たない些末な存在だが、慈悲深きモモンガ様はそれにすら救いの手を差し伸べられたんだ」

「はアっ!?!弱過ぎんせん!?!」

「なんでそんな弱い連中をわざわざ?」

「そんなもの、決まっているじゃない」

シャルティアとアウラの驚きに、さつきまで恨み言を散々口から垂れ流していたアルベドがようやく調子を取り戻したのか不敵に笑う。

「慈悲深きモモンガ様はどんなに弱くて哀れなモノにも手を差し伸べる寛大な優しさを備えておいでなもの。

不快なのは御身の慈悲を受けておきながら、さも対等かのように振る舞う鬱陶しい人間どもよ」

「そういえば、君も例の村での様子をマジックアイテムで覗いていたんだっただね。

御身があのかの村にどんな利用価値を見出されたのかは私如きの浅知恵では理解しかねるけれど…

それほど不敬な人間が居たのかい?」

デミウルゴスの声がワントーン下がる。

カルマ値極悪、悪魔の種族を持つ彼にとって人間は虫以下の価値しかない存在。良くて素材、ないし面白く鳴く玩具だ。

そんな程度の存在があまつさえ至高の御方と肩を並べ対等に振舞おうなど：

既に100通りほどの拷問を考えながら彼はアルベドの言葉を待った。

「村の連中は問題無いわ、他ならぬ御身自ら救って頂いた恩は忘れる事はないでしょうし。虫なりに相応の敬意を感じたから。」

問題は後から来た男共よ！

初めこそ土下座して感謝していたけれど、モモンガ様が気を良くしたのをいい事に：

大人しく情報だけ吐けばいいものを馴れ馴れしい態度で盛り上がるわ、鉄騎馬だかなんだか訳の分からないマジックアイテムに御身を乗せて村の周りを走り回るわ、敬意の欠片も無い振る舞いでモモンガ様を振り回したのよ!?

私だつてあんな親しく話した事ないのに！

二人乗りもそうよ！あんな近くにモモンガ様を感じるなんてそんなの許さないわ代わりなさい！私が乗るのはモモンガ様だけど！」

騎乗位だつて上手いんです！サキュバスだもの！キイーっ！と再びハンカチ噛み締めながら恨みがましくヒスるアルベド。

後半の感想はさておき、デミウルゴスはふむ…と考え込む仕草をとる。

「喪女の嘆きは放つといて、モモンガ様に無礼を働くなら今からでも追い掛け捕まえてニユーロストあたりに突き出してやればいいのでありません？

拷問の時はわらわも混ぜてもらえると嬉しいであります」

「だあれが喪女だヤツメウナギがあ!!」

ぎゃーぎゃー煩い2人を他所に、考えをまとめたデミウルゴスは先ず咎めるような視線をセバスに向けた。

「セバス、君はモモンガ様の一番近くに居たんだろう？」

御身に無礼を働く人間を処断するのは君の役目だったと思うが」

「モモンガ様より問題ないとのお言葉を頂いておりましたので。」

また御身も新たな未知のマジックアイテムについてたいへん興味を示されておいででした」

2人の視線がぶつかり合う。

片や主を危険に晒していたかもしれない可能性を責めるデミウルゴス。

片や主の意思を尊重し多少の無礼は静観に留めたセバス

創造主からして、セバスとデミウルゴスは意見の食い違ふことが多く度々こうしてぶつかり合う事がある。

なお周りの者は皆Lv100の化け物揃いな為何ともないが、2人の睨み合いは常人なら秒で漏らしてその場から全力逃走するレベルの威圧感がある。

「まあ、良いでしょう。」

モモンガ様が認めたのなら下僕である我々がとやかく言う資格など無いからね」

ただし一度命令が下れば、デミウルゴスは喜んで彼等を捕まえ思いつく限りの悪逆をもってして蹂躪するだろうが。

「という訳でシャルティア、悪いが拷問の件は諦めて……って聞いてないねアレは」

眼下でキャットファイトを繰り広げるサキュバスと吸血鬼に深い溜息を吐きつつ、整理した考えを述べる。

ひとつ、この世界の人類はユグドラシルと比べ格段に脆弱であること

ひとつ、至高の御方でも興味を引くような魅力的なマジックアイテムが存在するということ

ひとつ、御方の最も欲しているものはあらゆる情報であり、その為に先の集会で人員の割り振りを行ったこと

件の村にはルプスレギナを、悪魔を複数体召喚できるデミウルゴスには他国の情報課報活動収集を。

先の見えぬ異世界故に慎重に、丁寧に未知を…

「なるほど、そうでしたか。私とした事が…」

「?ドウシタ、デミウルゴス」

説明を中断し、急に含み笑う友人に問うコキユートス。アウラもマーレもなんのこつちやと首を傾げていた。

モモンガ様は言った。

「未知を楽しめ」と

ユグドラシルではないこの世界において、我々の行く先は未知に溢れている。

ユグドラシルもまた、御方方曰く未知に溢れた世界だったそう。

それら全てを踏破せし者こそ我等がアインズ・ウール・ゴウン、ひいてはモモンガ様だ。

何故素材になるのがせいぜいの木っ端にあれほど手を尽くされたのか、それは御身をもって更なる“未知”を知らんがため。

至高の一人であるペロロンチーノ様は嘗て仰った。「フラグ管理は大事なんですよ!話の本筋と関係ないような所にも巧妙に隠されて、見付けないと即BADENDとかザラですし!」と。

“ふらぐ管理”なる言葉には聞き馴染みはないが、ニユアンスから察するに辿り着かなければならない理想への“通り道”を意味しているのだろう。

「既にモモンガ様は御身自ら人間のもとへと赴き、数々の“ふらぐ”を建てている。

.....

話を戻そう。

御方の行動には全て意味がある、それは下僕如きの思考では辿り着くことなど到底不可能なほど遠く高尚な理想だ。

故に推察の域を出ないが、ナザリック随一の頭脳を持つアルベドとデミウルゴス、その2名が同時に導き出した結論。

それこそが

「世界征服だ(ね)」

サングラスを指でかけ直しながらデミウルゴスは呟く。

したり顔(ドレスはヨレヨレ、髪はボサボサ、片乳見えかけ)でアルベドは呟く。

瞬間、守護者に激震走る。

カルネ村から始まる一幕、その後に残るものは御身への敬意と信頼。

更に他国への足掛かりも完備して、相手に一切の不信を感じさせることなく情報を引き出した。

「ふらぐ」にするには充分だ。

これを皮切りに、御身は人間世界の奥深くへと身を投じるだろう。愚かで矮小な人間達を手指の先で転がす為に。

そしてゆくゆくはこの大陸を、世界を我がものとする！

などと知恵者2人の熱の籠った解説に聞き入る守護者達、完全に場が温まってきた。

「すごい！流石モモンガ様！」

「あくまで推論だがね。」

「そうでもなければ人間如き、わざわざ相手にするメリットが微塵もない」

「同感だわ。」

「先程も冒険者として自ら人間社会に身を投じると仰っていたのだし、本格的に人心掌握を始めるおつもりなのよ」

「じゃ、じゃあ僕達がすべき事は？」

「情報だ、とにかく情報が要る。」

「モモンガ様が欲するのは『未知』、ならば下僕の我々にできるのはその覇道を支え、あわよくば踏み台にして頂くことだ。」

「基本的には待ちになるが：御身の方針が決まっている以上遠からず他の守護者にも指令が下るだろう、それまで待つてくれないかい？」

「もどかしいでありんすねえ…」

「ハッ！もしかしてこれが噂に聞く放置プレイ!？」

「違うと思う」

「仕事力：コノ身ニモ出番ガ来ルノカ？」

「ああ、きつとね。」

「今は雌伏のときコキユートス」

「：ウム、ナラバソノ時マデ爪ヲ研イデオコウ」

「ナザリックでも随一の頭脳を持つ2人が導き出した結論に守護者達は三者三様の反応を示す。」

「その中でただ1人、あの時モモンガと行動を共にしたセバスだけはその胸中に別の思いを抱いていた。」

「そんな表情の変化を見逃すデミウルゴスではない。」

「どうしたんだいセバス。」

「何か思うところもあるのかな」

「(現地の方々と話すモモンガ様はとても上機嫌であらせられた。」

「下僕達の前では見せたことの無い、それこそ他の至高御方とお話されていた時のような明るい雰囲気で)」

たっち・みーより創造された竜人のLV100NPCセバス・チャ
ン。

他の階層守護者と違いナザリックの執事長を務めている彼はユグ
ドラシル時代、霧囲気作りの為にギルメンが揃う円卓の会議に侍り、
幸運にも至高の御方がたの会話を間近で聞く機会が何度かあった。

もつともこれは転移前、セバスが明確に自我を持つ前の話なので彼
としても臆気な記憶に残っている程度の話だが。

その中で浮かび上がるのはモモンガとよく行動を共にしていたペ
ロロンチーノ、そしてウルベルト・アレイン・オードル。

彼らは共に何かしらの「同盟」を組むほど仲が良く、モモンガもそ
んな2人に交じってガチャの結果がどうだの、新しいマップに出たエ
ネミーの性能がどうだのと他愛のない会話を繰り返していた。

その様子を遠巻きながら眺めていたセバスは、先の人間達との接触
の際にモモンガの様子が嘗てのあの時と同じような霧囲気を纏って
いた事に目敏く気が付いている。

だからこそ、デミウルゴスとアルベドの出した結論に心から賛同を
送る事が出来ずにいた。

この中で唯一のカルマ値極善であるNPCであるから故か、あの時
の主の振る舞いは人間を利用してやろうという意図など一切無い、心
から未知を楽しんでいるようにしか見えなかった。

それゆえの違和感。

だが自分は主に仕える執事である。

主の三步後ろを歩き、侍る者。

意見や文句など以ての外だ。

「…いえ、何でもありません。

モモンガ様のお考えがどうであれ、御方の決められた事であるなら
このセバス、身を粉にして奉仕させて頂きます」

だからそんな些細な違和感はこの場に持ち込むべきではない、そう

自分に言い聞かせる。

まあ、当の本人は世界征服なんて一言も言っていないので本作品においては100パーセント混じりつけなしの幻聴、勘違いであるのだが。

アンジャツ○ユでももう少しマシなネタを考えるぞおまえら。

その後も化け物達の会議は続く。

デミウルゴスは調査の先触れとして密偵に長けた影の悪魔を各地に散らし、情報収集を図るらしい。

アウラはナザリツクが転移した場所のすぐ側にあるトブの大森林内の生態調査を行うようアルベドから要請があった。

デミウルゴスの話したザリユースが所属するという蜥蜴人の村も含め、全体的な情勢を把握するねらいもある。

モモンガの救った村の管理は指名によりルプスレギナに託されるが、御方直々の勅命を受けた彼女は密かにアルベドとシャルティアから恨まれていたりもする。

二人とも嫉妬を隠す気が微塵もないからね、仕方ないね。

『ぶえあつくしよんツ!!』

『どうしたのよルプー、風邪?』

『:なんか一瞬すっげえ悪寒が走ったような気がするっす。

こう、二人分くらいのが背中にゾアっと』

『やけに具体的ね』

『ナーちゃんもしなかつたっすか?』

『全く』

『それより、二人とも準備は出来たの?』

ルプスレギナはカルネ村への出立、ナーベラルはモモンガ様と共に冒険者として活動を命じられたでしょう。

いざ当日不備がありました、なんて許しませんからね』

『はあーいつすユリ姉』

『良いなあ〜二人とも御方の為に働けてえ』

『私達にも仕事、回ってこないかしら』

『……むふー（満足げ）』

『なに「ひと仕事終えた」みたいな顔してるのよシズ』
『ずるうい』

なお、このあとナーベラルはモモンガと共に冒険者デビューを果たし、初対面の先輩冒険者に安定の便所虫呼びを炸裂させてモモンガの無い筈の胃を痛ませてしまおうのだが、そこはご愛嬌である。

そして…

「『魔巧』か、以前の世界では聞いた事のない技術だが…」

「所詮人間の浅知恵でありんしょう？」

モモンガ様のお気に召すようなモノが有り得るとは思えないでありんす」

「それよりモモンガ様を差し置いて魔法詠唱者の『星』を名乗るなんて不敬極まりない連中だわ。

敵対したら真っ先に仕留めるべきね」

「それについては同意だがね。

利用できるなら利用して、ナザリックの糧となってもらおう」

人間に使い道は山ほどあるのだから。

カルマ値とは人類への好感度、低ければ低いほどその感情は侮蔑へと変わる。

侮蔑とは嫌いな下に見ること、すなわち『侮り』だ。

自分たちより弱いから、馬鹿だから、下位に位置するから、取るに足らない命だから。様々な理由でナザリックは人間を侮り、軽視するだろう。

それが設定によって「そうあれ」と決められたNPCの宿命だ。

ならば例外だらけのこの世界で辿る彼らの道程は…

さぞ、滑稽なものになるだろう。

仮想世界と現実は切り離せ。
文字通り子供でも分かる思考を生憎彼らは持ち合わせていなかった。

32 鈴木悟の憂鬱

エ・ランテル冒険者組合にて

「はい、お疲れ様でした。」

建設現場の護衛、ゴブリンとオークの追加討伐報酬全部合わせて銀貨30枚と銅貨50枚になります」

「ありがとうございます」

「こちらこそ、モモン様。」

依頼者の方からも感謝の言葉を頂いております。

お二人の実力ならすぐに金級に到達できますよ」

「っそうですか!」

「はい!残念ながら昇格試験に見合うような依頼は今のところございませんので、暫く待ちの状態が続くと思われませんが…」

「あー…分かりました。」

また良さそうな依頼があればお願いします」

「承知致しました」

にこやかな営業スマイルを浮かべる受付嬢と別れ、ナーベラルの居る卓へと戻る。

異世界転移してから少し、カルネ村を賊から救い現地の人達から有益な情報を得た俺は本格的にこの世界で冒険者として活動し始めた。冒険者といっても、回ってくる仕事は商人の乗る馬車の護衛やモンスター討伐が殆どを占めるので傭兵みたいな感じだが…

思ってたのとちよつと違うが、現地の貨幣を稼ぐ数少ない手段だ現在の階級は下から3番目の銀^{シルバ}。

エ・ランテルの冒険者の中では中堅よりちよい下くらい。

なので必然的に依頼も相応のもの、現在は護衛依頼3割の他7割くらいか。

迷い猫探しとかの街中でこなせる小さい依頼で小銭を稼ぎ宿代に

当てている。

ユグドラシルの細々しいサブクエを黙々とこなしている気分だ。でも最初の頃もこんな感じで稼いでいたな、とノスタルジックな気分浸れるのでヨシッ！

『パーフェクトウォーリアー』という魔法がある。

魔法職のレベルをそのまま戦士職に変換し、魔法職のスキル、及び魔法が一切使えなくなる代わりに魔法職では装備出来ない戦士の武装をそのまま纏う事のできる魔法だ。

これにより現在の俺はレベル100相当の戦士職になっている。何故わざわざ職業を変えたのかというと、対プレイヤーへの身バレを防ぐカモフラージュの意図もある。が、本音を言うとなんか始めるなら戦士の視点で冒険するのも楽しいじゃない。なーんて思惑もあつたりするのだけど。

それから、カルネ村でガゼフさんの話してくれた『武技』だっけ？魔巧と同じく、どうもユグドラシルのスキルシステムとは違いこの世界独自の技術のようだ。

あわよくばそれを覚えたい！
戦士状態の俺で習得できるならナザリックでもセバスやコキュートスに覚えさせて戦力アップも狙えるし？

決して興味本位などではない、趣味と実益を兼ねた冒険者なのだ。旅のお供はナーベラルガンマ、彼女はレベルにしては60弱と少し許ないが第8位階まで行使可能なプレアデスキッテの攻撃力を誇る魔法職。

嘗ての盟友『式式炎雷』さんの作ったNPCだ。

前衛は俺、後衛はナーベラルのバランスで良いパーティが組めたと思う。

……まあ、ここまでは良かったんだよ。ここまでは。

『ウジ虫が、スプーンで眼をくり抜かれないの？』

『黙れナメクジ。』

身の程を弁えてから声を掛けなさい、舌を引き抜きますよ?』
『人間ふぜいが…舐めた口を叩くなよ、ゴミがツ!!』

……この数週間、冒険者としてナーベラルガンマと活動を共にする間に彼女が他の冒険者に放ったお言葉を抜粋したものである。
…ウン。

絶 対 人 選 間 違 え ま し た

どおおおおしてだよおおおおツ!!(ネット番組でチラツと見た大昔の俳優さん並感)

マイナス400て! デミウルゴス 極悪の一步手前やん!

なあんで出発前に気付かなかったかなあ…:

もう冒険者登録しちやったから今更交代なんてできないし、これから教えるしかないんだけどさあ!

この子何回言っても態度直さないの!

辛うじて俺の事はモモンガではなく偽名のモモンと呼べるようにはなったみたいだけど、人間への当たりは相変わらずだ。

幸い整った容姿のおかげか最近は「ちよつと当たりのキツイかわい子ちゃん」くらいの反応で済まされているが、初対面の相手に罵倒で返す奴があるかつ!

確かに俺もアンデッドだしカルマ値極悪で人間は虫くらいの価値観しかもてなくなつてるとはいえ、これから信頼関係を築いていこうとする相手にとる態度じゃない事くらい分かるし、良くない事も理解してる。リアルで培ってきた人としての経験があるからかも。

けどNPCにそんな経験は無い、まっさらだ。

テキストによって作り上げられた人格通りに動いているのだからそりやそうなるわ!

学びを得た、彼女に必要なのは経験だ。

ナーベラルだけじゃない、場合によっては他の守護者達にも現地人との対応を教育しないとダメだ。

せめて取り繕うだけの努力はして欲しい、こんなんじゃないか分かったもんじゃない。

悪目立ちは避けたいんだよ！そのためのカモフラージュなの！

でも教育って言ってもな…生憎リアルじゃ部下なんて持った事ないし、仕事も事務処理と軽い接待くらいしか経験がない。

圧倒的な経験不足だ。

これではNPC達に何か教えるなんて夢のまた夢、彼らの忠誠心は本物だけど万が一にも反逆されて戦闘になったらレベル100の俺でも勝ち目は薄い。

シャルティアはもちろん、俺は後衛職だからアルベド、セバス、コキユートスあたりは近付かれただけで終了だ。

PvPの経験は俺の方が上とはいえ、レベル100NPCが束になつたらプレイヤーでも単独じゃ簡単に勝てない。前衛後衛の役割がハッキリしてるナザリツクの守護者達なら尚更だ。

とにかく、先ずはナーベにちゃんとした教育をしてやらないと…でもなあ、言っても直さないし…自我の芽生えたNPCに『学習』する機能は備わっているだろうか？

単純にカルマ値の関係で軽蔑しきってるから取り繕う気も起きないだけなのかも…様子を見る必要があるな。

カランコロン、と冒険者組合の扉の鐘が鳴り思考の海から呼び戻される。

入って来たのは大きな手籠を提げた修道服の女性、中には丸めた羊皮紙がたくさん詰まっていた。

あれはエ・ランテル中央にある法国の教会から冒険者に向けて販売される魔法の羊皮紙だ。中には《重傷治療》が込められていて、驚くべき事に魔力を持たない戦士でも発動可能なスクロール。

『漆黒の剣』の魔法詠唱者、ニヤさんから教わった知識によれば、皮に加えて異世界で採れる植物を魔巧技術で掛け合わせ、込める魔法の条件を絞る事で強度を底上げしているんだとか。

ユグドラシルのスクロールとはまた違う、この世界独自の技術だ。《重傷治癒》は第3位階のしょぼい回復魔法だが、ノーリスクで回復が行えるのは冒険者にとって非常に重宝する。

場合によってはポーションよりも有効だ、この羊皮紙1枚に命を救われた者は数知れない。

まあ、スキルでレベル60以下のダメージを常時無効化する俺には関係のない話だけど。アンデッドだから回復魔法で負傷するし。

そんな生死に直結する回復アイテムを供給している。

それも信仰系魔法を使えるシスター達が善意で作ってくれて、安値で取引してくれるのだから冒険者や組合は教会に頭が上がらない。

「おはようございます、シレーヌ様。

今週分のスクロールをお持ち致しました、アインザック様はいらっしゃいますか？」

「は、はいー直ぐにお呼びしますので少々お待ち下さいー！」

シレーヌ、というのは受付嬢の名前だろう。

慌ててカウンターの奥へ走っていった受付嬢を待っていた彼女は直ぐに別の個室へ通され、部屋の奥へ消えていく。

噂じゃスクロール派とポーション派で軽い論争が起きてるんだってさ。

そういえばこの世界のポーション、青いんだよな。

安宿でベルタとかいう冒険者のポーションを壊して弁償をした際に分かったことだが、どうもポーションの水準はユグドラシルに遠く及ばないようだ。

原理は専門職じゃないから分からないがこの世界でポーションを作ろうとすると赤ではなく青くなる、ベルタへ弁償するのに手持ちのユグドラシルポーションを渡してしまって、それがゆくゆくカルネ村繋がりでンフィーレアに身バレしてしまったのは想定外だったけど……

まあ彼の指名依頼のおかげで漆黒の剣の皆さんとは仲良くなれた

わけだし、結果オーライか。

それと、撃杖というマジックアイテムについて知れたのも僥倖だった。

……一言で言おう。

まんま銃やんけ!!!

かっつっつっつこよッ!!

突然だか俺こと鈴木悟のリアル、生物学的には男性である。

今ではアンデッド、肉も皮も息子（意味深）もいなくなつた全身骨だけ野郎ではあるが、その感性は一般男性そのものと言えるだろう。まだね。

恥ずかしながらこの鈴木悟、小卒故にネットやギルメンから聞きかじつた知識で人生の大半を育つてきた。

その中で大学教授をやっていたギルメン、『死獣天朱雀』さんから聞いた知識に一時期どハマリしていた時期がある。

その知識とはそう、『軍事関係の兵器』について。

俺は社畜だったので関係の無い話だけど、リアルではコロニー同士のいざこぎで紛争のようなものは度々起きていた。

その度に各コロニーの治安維持部隊という名の軍人や、傭兵なんか外でドンパチ争っている。

日本では長い事聞いていないが、海を越えた中国やインドの辺りなどでは宗教観の違いからしょっちゅう紛争が絶えないってニュースで見たことがある。

戦争はダメだ、人が沢山死ぬから。

でも戦争に使われる兵器や銃器には男の子を惹き付けるロマンがあった。

だってカツコイイんだもん!

当時の俺も例に漏れずその界限に片脚を突っ込んで兵器のロマン

にこれでもかと浸ってた。

格好いい、それは男の子にとって大切な事かな（脳内に響く謎の力
ンテレ音）

そうだよ。

特に第二次世界大戦時のドイツ第三帝国軍境界は俺の数少ない心の青春だ。

なんだよメツサーシユミットって、マウザーヴェルゲって、アハトアハトってえ！

ゲシユタポ、シユタージ、アインザッツグルツペン…！当時の組織として悪辣極まりないのは重々承知しているけど、名前の響きは最高にイカしてる。

時を超えて俺を喜ばせるなよチヨビ髭総統閣下！

当時なら不謹慎なんだと言われるだろうが、100年以上後に生まれた俺が歴史のひとつまみをどう思おうと勝手だろ？

だからこそ生まれた黒歴史もある訳だけが…

そして戦争ものに欠かせないのが『銃器』。

流石に本物は見た事が無かったが、画像は何度も見たから形はよく覚えてる。

先日ペテルさん達と向かったンファイーレアの薬草採取の道中、ニヤの使っていた「撃杖」と呼ばれているそれ。

どう見てもマスケット銃じゃねえか！

いや木彫りのストック部分はK a r 9 8 k小銃っぽかったけど（突然の早口）

そいつを構えたニヤは照準をゴブリンに合わせ、引鉄を引くと無詠唱で圧縮された《火球》が着弾と共にエネミーを黒焦げに変えていた。

無詠唱は俺でも使えるが、魔法の圧縮なんて聞いた事がない。ニヤは《魔法口径圧縮》^{マガナライズ・マジック}だと呼んでいた。

見たところどうやら本来放たれるはずの魔法を固めて威力と速度を飛躍的に上昇させているらしい、その代わり相応の反動がありちゃんと狙わないと当たらない。

要は攻撃魔法を弾丸に変えて射出する魔法。

他にも彼は会得していないが、主に高位魔法で行う対物理に特化した《魔法対物理特化》、着弾した魔法を広範囲に爆散させ攻撃範囲を広げる《魔法榴化》、《魔法榴化》の高位魔法版《魔法集束化》マジック・マギア・クラスターが存在するそうだ。

どれもユグドラシルじゃ聞いた事ないんだが!? それを可能にするのが「撃杖」というマジックアイテムという訳だ。

低位の位階魔法しか使えない異世界で少しでも攻撃の選択肢を広げる為に考案された魔法。この世界で生き残る為に人類が生み出した技術。

それを世に出したのはカルネ村でも語られた魔巧同盟で、行使できるのは魔力を有する魔法詠唱者のみ、と。

……………うん

楽しそうだね!!

俺も魔法詠唱者で冒険者登録すれば良かったア!!!

ニヤと話してる間精神抑制がずつとかかりっぱなしだったよ!

挙動不審で変な奴だと思われなかつただろうか…

俺も撃杖使いてえ! 《魔法口径圧縮》してえよ!

どおとおおとして剣士で登録しちゃったかなあ…普段と違うことしてみようなんて思わなきゃ良かった。カモフラージュなんて考えなければ…トホホ。

実は今日、ニヤさんと約束してナーベの撃杖を見繕いに魔巧同盟の経営するマジックアイテム屋に向かう予定を組んで貰った。

撃杖を買う為には魔巧同盟に加入しなくてはならない、この機会にナーベを加入させて未知の情報を手に入れ、あわよくば撃杖を購入し

てみたいが…如何せんお値段がなあ。

「良いかナーベ、これから我々は未知の技術に手を伸ばす。

主体となるのは魔法詠唱者であるお前だ」

「はっ！」

ですがモモンっさーんの方が私などより圧倒的に優れた魔法詠唱者である事は…」

「私は今剣士職だろう。

正体を明かせぬ理由がある以上、お前にやって貰うしかない。

実験台にするように気が引けるが、現状お前にしかできない仕事だ。頼むぞ」

「ツ…!!御身のお役に立てるのならば！」

ヨシ！やる気は充分だな！

店で無礼な態度を取らないようによくよく釘を刺しておこう。

「お待たせしましたモモンさん！」

ちょうど待ち合わせの時間にニニヤも来たようだ。

こらナーベ、睨み付けるのを止めなさい。早速かよ。

漆黒の剣が受領し、俺たちを支援部隊として用立ててくれた依頼。坑道のトロール討伐の出発時刻までまだ一日ある。

今のうちにやれる事はやっておこう。

あと剣士の技術でガゼフさんの言ってた『武技』、どこかに教えてくれる場所はないものか。

「おはようございます、ニニヤさん」

「すみません遅れてしまって、道中でちょっとやつかみを受けてしまっ」

先輩冒険者である『漆黒の剣』は昇格にふさわしい依頼がタイミン

グよく舞い込んで来たので少し前に金級へランクアップした。

気まずそうな彼の顔で何となく察しはつく、十中八九イグヴァルジの仕業だろう。

この街を拠点にする高位冒険者『クラルグラ』、そのリーダーがイグヴァルジという男だ。

上昇志向の強い奴で性格に難アリというか、人格が歪んでるといふか、ミスリル冒険者であることを鼻にかけ、乱暴者の域で収まらないほど素行が悪い。なまじ実力のある剣士だから周囲のメンバーも口を挟めないし、悩みの種だ。

この前も依頼の割り当てでペテルさんと一悶着あったし、俺たちもちよっかいを掛けられた事がある。

こっちは今にも無礼討ちしそうなナーベラルを諫めるので手一杯だったのだが…

「また彼らですか、執拗いですね」

「あはは…金級に上がってからはしよっちゆうでして。

仕事を奪われると思われてるんでしょうけど」

「本当に迷惑なら組合長に相談してみればいいのでは？」

「あれでも彼等はエ・ランテルの治安維持に一役買ってくれていますし、気にしてませんから大丈夫ですよ」

「なら良いのですが…」

「心配してくれてありがとうございます。」

ではモモンさん、ナーベさん、気を取り直して行きましょう！」

《魔女の工房》へ！

33 ウイツチクラフト・ワーカホリック！

むかしくしむかし、世界に魔法がひとつありました

けれどその魔法は人間達には扱えなくて、当時繁栄を極めた一部の竜種のみが使える特別なものだったので

そんなある時、突然生まれた新しい魔法

人も亜人も皆平等に扱う事が出来る画期的な魔法

【位階魔法】と呼ばれたそれは、人々の生活を助け、多くの窮地を救つてきました

けれど時が経つにつれて個体差で劣る人類はじりじりとその生活圏を大陸から追いやられ、このままではやがて絶滅してしまうでしょうそんな時、立ち上がった7人の賢者たち

人も異形も関係なく、ただ魔法探求の為に集まった彼らは知恵と好奇心、時々コネとおカネを駆使し、努力の末に新しい魔法に辿り着きました

名を『魔巧』

魔法と巧たくみの技を合わせて拓く新たな魔導のカタチ

彼ら七つの星はこの世界に新たな道筋を示し、多くの功績を打ち立てました

これからも魔巧の光は人類を照らし、導いてくれるでしょう

さあ、貴方も無限の広がりを魅せる魔巧の知識を学んでみませんか？
今なら会員登録で《重傷治癒》のスクロール三枚と撃杖の割引き手当てが着いてくる！

オトク！

オトク!!

ジツサイ オトク!!!

お問い合わせはお近くの魔巧具販促店まで！

「…なんですか、この…」

最初は昔話口調だったのにいつの間にか胡散臭いビジネスの匂いがする語り文句は「

「そういう触れ込みなんです魔巧って。

皆さま研究熱心な魔法詠唱者なので商業化に不慣れだったんじゃないんですかね」

要塞都市エ・ランテル

3層に囲まれた城塞、その二層目に当たる区画にその店はある。

木材とレンガを合わせた大きな三角屋根から今ももくもくと煙を吐き出す煙突が伸びる、この都市では珍しい造りをした建造物。

「OPEN（異世界文字）」のプレートが掲げている扉の上には横長の切株をあしらった看板、『魔巧の依頼、承ります』と記されていた。

「着きましたよモモンさん！」

此処が王国で3つしかない魔巧関連アイテムを取り扱うお店、通称『魔女の工房』です！」

因みに残り2店舗は聖王国と王国を結ぶ数少ない流通の要、港湾都市エ・ナイウルの一等地と王都リ・エステーゼの2箇所。

初めはエ・ナイウルで聖王国へ向けて魔道具販売を細々とやってい

たのだが、王都に本店を移した際国王の目に留まり、その推薦でエ・ランテルに出張店を構える事になった。

これは現地の魔術師組合が諸手を挙げて誘致したのと他国の情勢を加味した結果である。

「現状、魔巧の取扱品はスレイン法国か竜王国に点在する大工廠からの輸入に頼っています。

なので地理的に取り寄せがしやすいのと、政治的な面もあるんだと思います。

帝国を治める皇帝は野心高いですから」

即ちエ・ランテルという二つの国を隔てるように建つ都市に魔巧同盟支店を置く事は「人類救済」を掲げるスレイン法国が2国へ監視の目を光らせている事に変わりない。

「なるほど、牽制ですか。

国王の政治手腕が見てとれますね」

「王国は魔法教育に疎く、法国に頼りつきりですからね。

どうせ他国から監視されるなら、いつその事国境付近も監視してもらおうという狙いがあるんでしょう。

実際それを気にしてかこの3年間は毎年恒例のカッツエ平原での小競り合いがありませんでしたから」

本来ならば帝国は王国の収穫時期を狙って戦争を仕掛けてくる、作物の収穫時期に合わせ人手を削るいやらしい戦法だがこれが効果的で、王国は徐々に疲弊していった。

それが魔巧が普及し始め法国が王国に手を貸すようになってからは過度な干渉を避け、今も沈黙を貫いている。

「スレイン法国はそれほど強大な国家なのです」

「実際周辺国では一番に歴史の永い国家です。

それと魔巧を普及させた始まりの七賢者のうち3名、《水鏡星》、《雷冠星》、《氷極星》の御三方は法国の出身ですからね。

魔巧の本場といっても過言じゃないですよ！

「僕も一度でいいからローグレンツの鉄騎馬に乗ってみたいなあ…」
「良いですよね鉄騎馬。私も一度相乗りさせて貰う機会を得ましたが、風を切るあの感覚はとても良い」

「モモンさん乗ったことがあるんですか!?羨ましい…」

移動に最適ですし、大型種ならパーティー全員を楽に遠くまで運べるので是非とも欲しいんですが、如何せんお値段が…

撃杖もオーダーメイドだと一本で結構な額を張るので、ナーベさんもよくお財布と相談して下さいね」

「……善処します」

なお、ナーベはモモンと馴れ馴れしく話すニニヤを陰で殺さんばかりに睨み付けている模様。

殺害予告が出ないだけ我慢した方なのでモモンも溜め息を吐く程度に留めた。

扉を潜ればほのかに香る木と薬品の匂い。

見回せば明るく清潔感のある店内に所狭しとマジックアイテムが並んでいる、魔巧同盟公認店舗という事もあり品揃えは豊富なようだ。

ユグドラシルでは見たことの無いマジックアイテムも多数存在し、モモンの精神抑制が止まらない。

「えへへ…いらっしやいませ、魔女の工房へようこそ…」

カウンターに立つのは水色の髪が特徴的なちよっぴりダウンナーな雰囲気をかもしだす短髪のエルフだった。

何日も寝てないのか隈もある、服装も作業着と呼べるような格好で、素は白であったろうに様々なインクがぶちまけられたような汚れ

が所々に付着した使用感のあるエプロンを身にまとっている。

「こんにちはソーラさん、予約してたニニヤですけど」

「えへ、承ってます…」

撃杖の購入見積もりと新規登録ですよね、準備しますのでお待ち下さい…

クーちゃん、ウルちゃん、お客様にお茶をお願いしますねえ…」

「はーい！」

と、店の奥から元気よく少女の音がすると思ったら、パタパタと靴の音を響かせ子供服にソーラ同様のエプロンをまとった瓜二つの少女達が顔を出す。

「いらつしやいませ、おきやくさまー！」

「そちやですが、おかまいなくどうぞー！」

「その言葉使い間違えてないか？」

双子らしいその子達に差し出されたお茶は飲めない（アンデツド故に）のでナーベに代わりに飲むよう伝え、モモンは待ち時間に店内を見回してみる。

ふと、店内の片隅に佇み此方を見つめる全身甲冑鎧の剣士と目が合った。

咄嗟にナーベが前に出て警戒するも、ニニヤは笑って「大丈夫ですよ」と声をかける。

「彼はこの店の用心棒なんです。」

最新鋭のマジックアイテムを取り扱うお店なので、それを狙う盗難や荒事も多いそうで。

そこで彼のような用心棒を雇って抑止力になってもらってるんですよ。」

「……………俺の事は気にするな、おかしな事をしない限りお前たち

に危害は加えない。

……………買い物を楽しめ」

そう壁にもたれながら微動だにしない彼、名はペツシユというらしい。

もとは竜王国を拠点におくワーカーチーム《戦女神の猟犬》から派遣されてこの街まで来たそう。

「この子達は？」

「グーデリカです」「ウレイリカです」

「2人とも立派な店員です。」

魔巧は誰にでも開かれてますから、その気があればこの子達みたいな幼少の頃からでも勉強する事ができるんですよ。

お師匠様…《水鏡星》の教えが上手なのもあるんでしょうけど」

「幼少教育まで行っているのですか、凄いですね」

「本人の気質ややる気も必要ですが…」

実はお2人の姉は帝国の《灼魔星》フルーダ翁のお弟子の一人、アルシエ・フルト女史なんです」

フルーダと聞いてモモンも思い出す、ガゼフの語ってくれたこの世界の国々の近状。

その中に登場するのがお隣の国バハルス帝国に仕える魔巧七賢者の一人にして帝国最強の魔法詠唱者、フルーダ・パラダインの事を。要はこの少女二人も姉の例に漏れず、魔法詠唱者として才のあるサラブレッドという事だろう。

姉であるアルシエ・フルトは現在王都本店の方へ出張しているそう

だ。
『最強』とか名の着いているものは無意識で良く記憶出来てしまう男心を密かに恥入りながらもモモンは次の言葉を待つ。

「この子達も【雲】^{ヌボラ}を修めた立派な魔巧技師なんです、この歳で凄い事

ですよ。

僕なんかはまだ基礎を終えたばかりの【風】ヴェントですから」

「クーデリカ、すごいよー!」

「ウレイリカも、ね! いっぱいぬりぬりできるよー!」

「ぬ、ぬりぬり…?」

「ああ、彼女達が修めているのは《水鏡星》レイン教授が考案した…」

「ニニヤさん、準備できました…」

今変えますのでそのまま座ってお待ち下さい…」

「あ、はい!」

2人ともそのまま座って下さい、変わりますよ」

「二変わる…?」

いつの間にか傍に寄ってきたペツシユの姿を確認した店主がカウンター裏の大きなレバーを引くと、ガコンという音を立てながら建物全体が揺れる。

途端に四方の壁が真ん中を軸に畳返しのように裏返し、さつきまで観葉植物の置いてあった棚には壁を埋め尽くさんばかりの撃杖が所狭しと架かっていた。

それだけではない、陳列してあったマジックアイテムも陳列棚ごと床に沈み、新たに生えてきた重厚感のある黒塗りの棚の中にはルーン文字の込められた武器、防具、ルーン石などが並ぶ。

ものの数秒の間にシツクで落ち着いた店内は物々しい武器工房アミュネーションへと変貌してしまった。

最後に自分たちの目の前にあったテーブルから見たこともない魔法の装置がせりあがってきたのを目の当たりにしたモモンは

(かつ…かつっつけえええええええ!?)

テンション爆上がりだった。

普通の内装だった店舗が一転、変形と共に秘密基地じみた武器屋に変わるさま。

壁にこれでもかと並べられているのは全て種類の違う撃杖。

それで目の前にある見たこともない魔法の工作台。

全てユグドラシルには存在しない未知の数々。

男の子の夢が全て詰まったような情報の濁流に年甲斐もなくワクワクが止まらない。

「えへ、登録者名はナーベさん。でお間違いないですね？」

「チツ…そうよ」

「つとお、じゃあこの水晶に手を当てて見て下さい…」

魔力の量と適性を計りますからあ…」

言われるがままナーベは右手を近付け、水晶から淡い輝きが放たれる。

暫くそれを観察していたソーラは驚きの声を上げた。

「はええ!? 魔力量は平均値の3倍、第8位階相当の魔法が行使可能なんですかあ!？」

その答えにモモンはしまったと後悔する。

そういえば組合にはナーベの魔法詠唱者としての実力を偽って報告していたんだった。

というかちゃんと偽装用のアイテムを着用しているのに魔力量と行使可能な位階すら看破したこの装置に畏怖を覚える。

どう誤魔化したものかと考えていると、目を輝かせながら隣のニヤが笑った。

「そうなんです！」

ナーベさんは僕なんて遠く及ばない程卓越した魔法詠唱者なんですよ。

けれどかなり遠くからいらつしやつて、混乱を避ける為に色々と力量を誤魔化していたみたいで…

なんとかならないでしょうか？」

「え、ええ。」

「そうだな、ナーベ」

「……………はい、モモンソーさんの仰る通りです」

嬉々として語るニニヤのフォローが入るがちよつと苦しいか？と思っただが思いのほかすんなりソーラは納得してくれたようだ。

「た、確かにこの魔力量だと色んなトラブルに巻き込まれそうですし……………」

「ご利用者様の個人情報是我々で固く管理させて頂きますけど、営利目的で漏洩する事はないので安心して下さいねえ…」

魔力量と発動可能位階は撃杖や鉄騎馬を購入する際、ご本人様確認の為に必要な記録ですからあ……………」

「助かります」

思ったより情報の管理しっかりしてるんだな……………と異世界らしからぬプライバシーの尊重に関心するモモン。

下手するとリアルよりしつかりしてるかもしれない……………」

次にナーベの魔巧同盟登録に向けての説明がざつくりと行われる。

「といっても規約など堅苦しいものはなく、口頭で魔巧を扱う際の注意点だったり最寄りの魔術師組合でこんなサービスが受けられるよ、といった情報が殆どだったけど。」

「どうやら文盲でも後から勉強する形で登録は可能らしい、まあ魔巧位階を上げる以上文字を覚えて勉強しないといけないのは当然の事なのでこれに関しては今後のナーベの頑張り次第だ。」

「登録の方はこれで完了です……………」

「ナーベさんにはこのバッチを差し上げますねえ……………」

手渡されたのは魔巧を使う者がみな着用する銀製の証。

階級は【華】^{フィオーレ}、全ての魔巧習得者はここから始まる。

「これで晴れて撃杖の購入ができるようになったわけですけどお…どうします?」

「お願いします」

男心をこれでもかと刺激されたモモン、即答である。

彼の勢いに遅れてナーベも頷いて、再び水晶へ手を翳すように促された。

ソーラが操作すると水晶が淡い光を放ち、大小様々な光の板のようなものが皆の周りに現れる。

ホログラムウインドウとしか思えない光の枠にはそれぞれ撃杖に使われるパーツが幾つも映し出されており、それを慣れた手つきで指をスイスイと動かしながら操作していく。

やがて一丁の撃杖がホログラム上で組み上がった、これが基本の形なのだろう。

パーツひとつひとつにはそれぞれ違いがあり、個人に合った撃杖を製作するには相応の知識と技術が必要だ。

一見ダウナーで頼りない雰囲気ソーラだが、今まで何人もの撃杖を製作してきた紛れもない「職人」なのだ。モモンは心の中で彼女の評価を上方修正する。

そんな彼女はナーベに幾つか質問を投げかけた。

「ナーベさんはあ…戦闘中は後方からの魔法支援が主な戦法で間違いないですよねえ…」

「ええ、そうね」

「他者への支援魔法は使われますかあ?」

「いいえ、自己強化のみよ。」

攻撃魔法の絨毯爆撃で叩き潰すのが私のやり方」

「えへっ了解ですう…」

だったら突撃型をベースにして銃身は長めにとってえ、不意の近接戦でも取り回しやすいように軽めの木製ストックを使いましょうねえ…

排熱は中折れ式が初心者の方でも使いやすいんですけどお、長期利用を考えると冷却速度重視でボルトアクションかレバーアクションをお勧めしてますう…

コッキング式とスピッコック式どちらにしますかあ?」

「す、すび…何?」

「撃杖は連射するとルーン石に熱が溜まって排熱が必要になるんですけど、その冷却方法の違いですねえ…

通常の中折れ式は文字通り銃身の根本をパカッと開けて中のルーン石を放熱するんですが、手間が要らないぶんちよつと時間が掛かります…

これをオプションでレバーアクションに変えるとその工程を省略できて、再発射までの時間を短縮出来るんですよ…」

「因みに僕のは中折れ式です、癖がなくて使いやすいですよ」

参考資料ですう、と流れてきた三枚のホログラムにはそれぞれの冷却方法が映像で公開されている。

モモンはもちろん、ナーベも興味深そうに一連の映像を眺めていた。

「なるほどな。」

ナーベはどれがいい、好きに決めろ」

「で、ではこのスピッコック式とやらに致します。

よく分かりませんが動作が一番しつくりきました」

スピッコック式はその名の通り撃杖を引き金を軸に一回転させることによって排熱を促す冷却方法である。

一般的な撃杖に用いられる中折れ式の冷却方法とは違い、より空気に触れる事で急速冷却が可能であるが回転動作に慣れが必要だ。

「ならそれにしよう」

（俺はコッキング式かなあ、レバーを引く動作が撃ってるって感じがするし）

「はいはい、それからあゝ…」

得意な属性とかありますかあ？」

「……」

「構わん、正直に話せ」

「はっ、雷系統の魔法を主に習得しているわ」

「なるほどなるほどお…」

ホログラムが入れ替わり立ち代わりモモンの前を交差する。やがて重なり合った時、再び一丁の撃杖が絵になってナーベの前に差し出された。

「こちらがナーベさんの撃杖、の完成図面ですう…」

元の型番は三式い…第三世代型って事ですねえ、の突撃型撃杖

ファイアボルト
【炎 雷】長銃身タイプ。

ストック部分は取り回し重視で軽い竜王国産黒株の新木、ルーン石は雷属性を含む【風】。

その他細々とした事は試し撃ちしながらナーベさんに合うよう調整していきますので、ご了承くださいい…」

【炎雷】…」

「えへ…も、もしかしてお気に召しませんでしたあ？」

第三世代の撃杖は2つ前の型落ちなので在庫も多くて直ぐご用意できるお手頃価格の商品なんです。

最新式は高額ですしローグレンツの本工廠から取り寄せになるので時間かかっちゃいますけどお…」

「いいえ、これがいいわ。これにしない」

「はい、ではこれからご用意させて頂くんですけど、予算は大丈夫ですかあ？」

レバーアクション含め素の状態からカスタムしていくとお値段張りますよお?と問われナーベの視線はモモンへと向くが、モモンも正直心配だ。

基本の構成パーツひとつひとつがいい値段しているので全部足すとモモンの予想していた金額より上回りそうになっている。

悩みに悩んだ末、モモンは…

「……会員割引きとかありますか?」

およそ異世界モノで言わない台詞ベスト5くらいにノミネートしそうな言葉をなんとか絞り出した。



「はい、お待ちどうぞさまですう…」

こちらナーベさん専用の撃杖になりますので、使用感を確認するために試し撃ちとかしましょうねえ…」

目の前に差し出された出来たてホヤホヤの撃杖。

黒の木製ストックに鈍色に輝く銃身と撃鉄、引鉄。

弾を込めるはずの部分にはくり抜かれたルーン石がすっぽりと収まっている。

地下の射撃場へ案内された俺たち。

ナーベは一通りの動作を教えられ、片手で撃杖を構えながらその引鉄に指を掛けた。

「使いたい魔法を無詠唱で発動する」為のマジックアイテム、撃杖。

間近で見るのは2度目だが、やっぱりカッコイイ！

俺も、冒険でづがいだがっだ：：ナア!!

試しにナーベは《雷撃》を撃とうとするのだが、筒先に生まれた魔法陣が歪な形に変形してあらぬ方向に飛び出た《雷撃》が直線上の壁を焦がした。

結構な反動があるらしく、ナーベ自身も思わずよろけてしまうほどのものらしい。

「ありやー：：まあ最初はそうなつちやいますよねえ：：

てか片手撃ちで肩も外れないなんて、ナーベさん力強お：：

えへ、ちよつとルーン石を拝借して：：」

ソーラは銃身からルーン石を抜き取り、傍にあった加工台の上へ乗せると首のゴーグルを掛け直し弄り始めた。

削り形を整えるだけじゃない、中に刻まれたルーン文字にも装置を使つて手を加えている。

結構繊細な作業なんだな：：

「硬度も中のルーン文字も正常に機能してるので、問題は魔力の透過率でしょうかあ：：

人によつては内魔力とルーン石の波長を合わせてあげないとさつきみたいに歪んだ魔力陣が生まれて真つ直ぐ魔法が飛ばないんですよえ：：

加えてナーベさんの魔力つてとっても澄んでるんですよ：：

だから石の回路も純正に近いものにしてあげないとすぐ魔力が根詰まりして放熱周りが大変な事になつちやいますう：：」

「魔力が澄んでる、ですか」

「です、普通の人は大なり小なり魔力に淀みっていうかあ：：遊びがある筈なんですけど、ナーベさんのはまるで作り物みたい魔力の純度が高く透き通つてて：：

魔巧技師ミスになつて結構経ちますけど、魔力透過率がここまで高すぎる

方は初めてですよお：

おかげで調整が大変なんですけど、私が《雷冠星》の弟子で良かったですねえ…」

雷系統の調整は一番得意ですからあ…と装置をつつきながらぼやいているが、動きに迷いはない。技師としての腕前は一流だ。

ルーン石について詳しくはないが取り扱いに相応の専門性を要するのは理解してる。

あまのひとつさんのような鍛冶職を修めたビルドを組んでいるんだろうか…？いやいやここは異世界だ、どんな外部スキルがあってもおかしくない。

隣にいるニニヤだって『異能力』というユグドラシル外スキルを持つているのだし。

普通の人間と比べて魔力が澄んでいる、か。

ナーベラルガンマがNPCなのも起因しているんだろうか。

この世界の人達と俺たちの決定的な違いはそこだ。

彼女は造られたNPC、生まれた時からレベルを割り振られ与えられた使命を全うする人形のようなもの。

それが自我を得るなんてユグドラシル時代じゃ考えられなかった。けど勝手が違うからって放っておく訳にもなあ。

ギルメンが遺した忘れ形見だと思っているけど、自我がある以上成長して貰わなきゃだし。

問題はNPCは自分の意思を持っているとして、ゲーム外の法則を覚えられるかどうか。

簡単なものだとさつき魔巧の説明でもあった語学力。

転移した俺達は異世界の言葉は何故か翻訳されて聞こえるが、文字についてはさっぱり分からない。だからこそ依頼を受けるのにもペテルさん経由で受けてもらったり、初回でやった芝居じみた行動で最適な依頼を引き出すしかなかった。

宝物庫を漁ればそれらしい翻訳アイテムが眠っているだろうか…幾つか心当たりはあるけどイベント専用アイテムとかで数が少ない

んだよなあ。

ナーベラルにはその辺りの学習も兼ねて魔巧の勉強に励んでもらおう。

それに魔巧に関わるなら俺だって勉強が必要だ。

いつまでもゲーム気分でないでいい。

仕事の片手間に勉強させられるよりモチベーションはよっぽど高いぞ！

「今度はこちらで…」

透過率も限界まで上げてますのでさつきより銃身を通る魔力の流れがマシになってるはずですよ…

それと銃床にもちよっぴり荷重を加えて銃身のバランスを取りましたので片手撃ちも安定するかと…」

俺が考え込んでる間にナーベはソーラの指示に従って撃杖の調整を続けている。

相変わらず片手撃ちだがLv60相当の筋力で無理やり取り返し、無詠唱で放つ《雷撃》はさつきよりも的の近くを掠めた。

的からの距離は20メートルほど。

どうやら透過率云々は解決して、当たらないのはナーベラルの射撃センスが原因のようだ。

ここから《魔法最大化》を無詠唱で重ねがけするとその分さらに反動も大きくなるらしい。

至近距離ならともかく、中遠距離の戦闘に備えるなら命中率も必要になるだろう。

ナザリツクに戻ったらそれも特訓だな。

あっあっあっ…(精神抑制)レバーアクションのクイックリロードはやっぱ格好良いなあ…

スピッコクリロードといえばナザリツクに保管されてる大昔の版權切れアクション映画の中にも登場している作品があったな。

当時有名だったアクション俳優がハーレーに乗りながらウインチエスターライフルを撃ちまくって、あのクルッと回すロードが堪らないんだってアクション映画好きな武人建御雷さんや式式炎雷さんも賞賛してたっけ。

最期、主人公の未来を守る為に自ら溶鉱炉に沈んでいくシーンは涙無しには語れない。

あれだけ寡黙な役を演じてた俳優さんが別の作品では公衆電話を素手で持ち上げたり、筋肉モリモリモリマッチョマンの変態呼ばわりされるんだから、昔の映画は本当に面白い。

タバラさんも「これもギャップ萌えですよ」ってホラー映画以外で珍しくご満悦だったし。

「えへ：本来だったらナーベさんクラスの魔力量と発動可能位階なら本工場で取り扱うような等級の高いルーン石が必要なんですけどお：

雷属性は私の得意分野なので在庫のルーン石をちよちよいつと弄ればお値段据え置きで何とかありましたあ：

その代わりこの撃杖で無詠唱発動可能なのは雷属性に限定されちやいますけど、大丈夫ですかあ？」

「助かります。」

ナーベ、構わないな？」

「問題ありません。」

あと、あのガガンボが使っていた《魔法口径圧縮》はこの杖で撃てないの？」

「ガガ：何い：？それはご自分で習得して頂くのをお勧めしますよお：

ルーン石に予め魔法式を刻印しておけば発動魔法は自動的に口径圧縮されますけど、流石に魔法式一式を石内部に後入れて刻むのは王都のお師匠様くらいじゃないとできない作業ですし、かなーりお金が掛かりますからあ：」

「そう、思ったより役に立たないのね」

コラっ！なんてこと言うんだこの子は！

無神経なことを口走るナーベに思わず拳骨を見舞ってしまったが、幸いソーラはとくに気にしている様子もなさそうだ。

そういう所だぞナーベラルガンマ！反省しろ！

「まあ《魔法口径圧縮》はさほど難しい魔巧でもないですし、片手間に覚えられますよお…」

それに駆け出しの【華】で石に口径圧縮の文字刻んじやったら『私は魔巧の初歩の初歩もできない馬鹿です』って言ってるようなもんですう…」

えへ…見る人が見ればおのぼりさんだと思われちゃいますよお…」

「は？人間如きに出来ることが私にはできないと言いたいのか？」

「でもでもお…第8位階まで修めたナーベさんならすぐモノにしちゃうでしょうし大丈夫ですよお…」

へらへらと笑うソーラだけど、これはもしかしてナーベラルの学習能力が問われているのでは!？」

よく勉強するよう言つとかないと！

その後何発か試し撃ち、納得のいく出来に仕上がった撃杖を俺達は無事に購入した。

ちなみに何とか予算内に抑えることはできた。

ルーン石が特にお高くて、この街にいる職人が彼女でなかったらナーベの魔力に適した純正の高級品を買わざるを得なかったらしい。良かった良かった、これで買えなくてナーベが「じゃあ奪います」とか言い出したらいよいよ冒険者生活が終わってしまう。

…冗談じゃないのが怖いよ。

購入した後、あの少女ふたりに撃杖の『色変え』^{ペイント}を勧められたので初回無料サービスということもあり了承。

カタログを渡され、眺めていたナーベはあるページでふと手を止めた。

「どうした、決まったか」

「…はい、この色にしようと思います」

指さしたのは少しくすんだ鉄紺色、この色合いには見覚えがある。

『式式炎雷』さん、ナーベラルを創造したギルメン。

「ザ・ニンジャ！」を自称し特大火力の一撃離脱戦法を得意としたかつての仲間がよく身にまとっていた頭巾と同じ色だった。

それを狙って選んだのか、偶々なのか…

「ぬりぬりするのにはストックだけでいい？」

「ほかにも替えたいところはある？」

「無いわ、分かったら手早く済ませなさい。」

失敗したら承知しない」

「まっかせてー！」

できたばかりの撃杖を持って工房の奥に駆けていく2人に若干の不安を覚えるも、ソーラに「大丈夫ですよ、『塗り』に関しては私よりあの子達の方が上手なんでえ…」と補足され取り敢えず納得しておく事に。

それから撃杖の塗り作業が終わるまで変貌した店内を見て楽しんでいると、店の扉を勢いよく開け放ち魔法詠唱者らしき男が飛び込んできた。

首のプレートは【鉄】、何度か組合で見た事がある顔だ。絡みは全くないが、確カンファイーレアに身バレする原因になった件でポーションを渡したブリタという女冒険者と一緒にいた気がする。

「おい！店主はいるか!?!」

「はいはい…なんでしょお…」

「どうやら随分と急いでいるようだが…」

手に持つのはニヤと似たタイプの撃杖だ、銃身は少し短めでリアルで言うソードオフショットガンのような外見をしている。

「急に動かなくなっただんだ！」

明日の夜には依頼に出なきゃいけないのに困るんだよ、早く直してくれ！」

「ちよつと見せて下さいねえ…」

……あゝ……撃鉄が熱で溶けてるう…

もしかしてえ、魔巧同盟非認可のお店でルーン石を買いましたあ？」

ソーラの問いに男の顔色が曇る、どうやら凶星らしい。

「そ、それがどうしたんだよ」

「粗悪品のルーン石を使ってますねえ…」

排熱量がこの撃杖の許容範囲を超えちゃって、一部のパーツが溶けて変形してますう…」

「はア!?マジかよ、あのオヤジ…!」

「どうやら男は粗悪品のルーン石を掴まされたようだ。」

安物ゆえに正規品との噛み合いが悪く、熱を逃がしきれずに周りの金属が変形して動作不良を起こす…」

「こんな事も起きるのか。」

「二応ルーン石は同盟公認の既製品をお勧めしてるって購入時にご説明したんですけどねえ…」

「うっ…しよ、しようがないだろ安かったんだから」

「変形したパーツの交換費考えたら既製品のルーン石買った方が安くつくのにい…」

「偽物、という事ですか？」

「最近多いんですよお…」

魔巧をちよろつと齧っただけの未熟な魔巧技師が安値で粗末なルーン石や撃杖のパーツを売り付けて、買っちゃった人が動作不良でウチに文句言いに来るんですう…

注意喚起はしてるんですけどねえ…

売った本人はだいたいが露店商で報告を受けた次の日にはトンズラこいてますし、足が付かないから取り締まりもままならなくて困ってますよお…」

また無駄な仕事があ…と虚ろな瞳でぼやくソーラ。

結局粗悪品を買わされた鉄級の魔法詠唱者は既製品との差額よりだいぶ高額なパーツ交換をする羽目になり、泣く泣く修理を依頼することになったようだ。

高い勉強料だったな。

彼には悪いが、そういった事案を先に見る事ができたのは幸運だった。

やっぱり公式が最大手なんだなって。

「モモンさんも気を付けて下さいねえ…」

基本的に王国内だと此処と王都、それからエ・アナセルの湾口都市にしか魔巧同盟の取扱店舗ありませんからあ…

露店で売ってるようなのは間違いなくパチモンの粗悪品なのでえ…絶対に買わないように…

ナーベさんのやつなんて特にですよお…ルーン石がカスタム品の特注なんで、おかしなパーツ組み込んだら波長がズレて最悪暴発、なんて可能性もありますからあ…

不具合を感じたら面倒臭がらずウチに持ってきてくださいねえ…割引きも効きますしい…」

「肝に命じます、分かったなナーベ。

異常があれば直ぐに知らせるように」

「承知致しました」

本当にな！割引なかったら金欠で冒険者人生（骨生）終わってるところだよ！

「因みに暴発、という撃杖そのものが駄目になるという事でしょうか」

「そうですよお、撃杖のルーン石は魔力の通り道と同時に貯蔵の役割も果たしますからあ…

ちやうど粗悪品もありますし、暴発するとどうなるかお見せしましょうかあ…」

てくてくと俺たちは店の外へ招かれ、隣接する井戸のような施設へたどり着く。

重厚感のある土管のような入口に底の見えないほど深く縦に伸びる穴。

井戸、というには水気がない。というかだいぶ煤けているし、爆破実験でもやったのかつてくらい辺りは黒焦げだ。

「ルーン石は宝石で作られてるって話はしましたよねえ？

宝石は自然から生まれた鉱物ですので外魔力の通り道として最適ですよ…

それにルーン文字を刻む事で鉱物内部に魔力を蓄積し、内魔力と外魔力を上手い具合に掛け合わせて放つ事が可能なわけですよ…

要するに無詠唱化してるのは撃杖本体で、魔力の流れや波長の管理は全てルーン石で行ってるって事です…その方がルーン石と本体の役割を明分化して量産も簡単になるのでえ…

第三世代から後の撃杖は殆どコレに該当しますねえ、第二世代、一世代は試行錯誤の時代だったので出力の問題とか、機構がかなり複雑化してましたから生産数も少なく流通してるのはほんの僅かですよ…

持ってるのは【星】の方々とお…教会の『暴力聖女』様くらいじゃないですかあ？」

リアルでいうところのモニターとソフトウェアみたいな感じか…魔法の制御はルーン石が主に担っているんだな。

っていうか撃杖の歴史深過ぎないか？

最新が第五世代ってことは既に何度もアップデートを繰り返されて今の形を得てるんだ。

イアンさんの話では魔巧が生まれてから異世界時間で3年と少しだと聞いていたけど、それにしたって技術の開発速度が異常だ。

この世界の人々の発展への意欲を凄い事だと思おうと同時に、脅威になり得るかもしれないという危機感も覚える。

ナザリックには存在しない技術、初見殺しの技なんかがあったらと考えると気が気でない。

敵対しなきゃいい話なんだけど、やっぱりアンデッドになった影響なのか期待8割危機感2割くらいってところだ。

本当に、魔巧って異世界でホットな話題なんだな…

「つて、暴力聖女…？とは？」

「法国からエ・ランテルに派遣されて来た神官団の筆頭聖女様ですね。なんとというか凄い方でして。

神官団の『ケツ持ち』だって本人は仰ってましたけど…

依頼すれば武技とか護身術を教えてくださいさるんです」

「ほう、武技もですか」

「ただ教え方が結構厳しいそうで…

ナンパ目的で尋ねたルクルットが翌日ズタボロになって帰ってきた事もありましたね。

アレはルクルットが全部悪いんですけど」

「クレア様は魔巧装備の使い方も荒っぽいですからねえ…

修理するこっちの身にもなって欲しいですよお…

話が逸れちゃいましたあ…

で、魔力の波長処理をする時、ルーン石は熱を伴いますう…

粗悪品のルーン石は大概の場合、素になる宝石をケチって形だけ整える為に硝子とかの不純物を多く含んでるんですよ…

不純物が多いと処理速度も遅くなるし、技師の腕にも左右されて熱の逃がし方が追いつかなくなるんですう…

だから石に過度な負荷を掛けたり、ましてや傷つけちゃうところのようない…」

クレアという聖女の話も気になるが、今はルーンだ。

ソーラは傍にあったハンマーでルーン石を叩き、欠けさせる。

それを急いで縦穴の中に放り込んで少し、爆音と振動が響き縦穴から勢い良く伸びた火柱が空へ登った。地面はもちろん、鎧越しにも腹にズシンと響く振動が爆発の威力を物語る。

「どっかーん、ですう…」

規模にもよりますが、だいたい人の半身くらいは消し飛ぶ威力ですねぇ…」

「つまり俺が異変に気付かずあのまま使い続けてると…」

最悪、彼の手元であの規模の爆発が起きていた、という事だ。

俺がそう答えるとソーラは無言で頷いた。

とんだヒヤリハットだな…

さつきまで渋面だった男も青ざめて目を白黒させているぞ。

「撃杖が変形するだけで幸運でしたあ…」

「…俺、次からはケチらずに既製品を買おうよ。

いや買わせて下さい！」

「えへ…まいどありい…」

モモンさんも、粗悪品の交換なら受け付けてますけど、明らかに意図的な破損や改造は保証対象外になっちゃいますのでお気をつけて

…

中には中途半端な技術のまま自分で改造しちゃう人もいますけど、損害は自己負担でお願いしますう……」

「……本当に、肝に命じておきます。それはもう」

結論、撃杖は精密機器と同じだ。

あらゆる部分が計算され尽くしている情報の塊、下手に素人が弄るとロクな事にならない。

餅は餅屋、撃杖は専門家にメンテナンスしてもらうのが一番だつてコト！

ホント、先に気付けて良かったア!!

このあと出来上がった撃杖の塗り具合に大満足しながら宿へ戻った。

人間に作らせた物なのに思ったよりもナーベラルが大事そうに抱えているのが印象的だったけど、そんなに気に入ったんだろうか。

だったら大枚をはたいた甲斐があったかな。



「……以上、私が冒険者とした得た情報だ。

疑問は恥ずべき事では無い。何か質問があるなら述べよ、私の知る範囲であれば答えよう」

玉座の間を静寂が支配する。

偉大なる御方の言葉に打ち震え、下僕達は涙を潤ませながら顔を上げた。

あのあと無事に撃杖の塗装も終わり、ニニヤと軽く明日の予定を確

認して心做しか満足気なナーベと共に宿に戻ったモモンガはドツペルゲンガーに代わりを任せ、ナザリックへと帰還する。

不在の間の、下僕たちの動きを確認するためだ。

各階層守護者の定時報告から始まり、消費資材の確認、カルネ村に派遣したルプスレギナから伝わる村の復興状況、デミウルゴスが召喚した影の悪魔シャドウデーモンによる各国への密偵。

ナザリックの支配者として頭に入れておかねばならない事は山のようにある。

それらを聞くより先に、先ずは自分の報告からだともモンガは冒険者として得た情報を開示していくが、下僕たちは感極まってそれどころじゃないようだ。

(まあ、魔巧の知識に関してはソーラの言ってたことそのまま伝えただけなんだけど)

「手に入れた撃杖は現在ナーベラルガンマに所持させている。

今後の冒険者活動で利用し、ゆくゆくはナザリックでも生産できるか試すつもりだ。

デミウルゴスよ」

「はっ」

「このマジックアイテムを見てどう思った」

モモンガ的には軽いノリで「どう？カッコよくない？」くらいの

ニュアンスで問うた。

よりにもよってデミウルゴスに。

「人間が作ったにしては精巧な作りかと。

…成程、御方の目に留まるだけの価値はある、と言う事ですね」
「だろっ？」

この世界の人類はなかなかやる。

興味が尽きんよ」

ナーベラルに手渡された撃杖を何度か取り回し、納得したようにそれを彼女に返した後再び列に戻り跪く。

「アウラ、マーレ、後でコロッセオの一角を借してほしい。

ナーベラルの訓練を行いたいからな」

「はい！大丈夫です、幾らでも使って下さい！」

元氣よく返事するアウラにつられるようにマーレも何度も頷いた。借りるも何もナザリックは至高の御方のものだからわざわざ聞く必要ないのだが、律儀に問うて下さるモモンガに下僕達の畏敬の念がストツプ高である。

「では私の話はこれくらいにして…

お前達の報告を聞こう、アルベド」

「はっー！」

そこから始まるのはアルベド主導による下僕達の報告会。

ルプスレギナによるカルネ村の監視は順調。

かつて助けたエンリにモモンガが渡したマジックアイテム《ゴブリン將軍の角笛》によるモンスター召喚も相まって復興は順調に進んでいるようだ。

これに関してはモモンとして訪問した際に様子を見ているので別段驚くような内容はなかった。

それと、かねてより話していたスレイン法国からの支援物資も届いたらしい。

衣類や食料など、生活必需品が大型馬車いっぱい詰め込まれて運ばれて来たそう。切り詰めた生活を強いられる村人達にとってありがたい限りだ。

「それから、法国の救援物資と共にルプスレギナ経由でこちらの書状が届いております。

魔法による入念なチェックも行いましたが我々を害するトラップなどはございませんでした」

アルベドから手渡されたのは上等な作りの手紙、法国の蠟印が押されたものだ。

開封して確認：しようと思っただがモモンガはまだこの世界の文字を心得ていないため、翻訳用のマジックアイテムを持ってこさせた後これを確認。

ふむ、と一息吐き懐へそれをしまい込む。

「僥倖だな、これは先日知り合ったイアンという御仁から送られてきたスレイン法国への紹介状だ。

前に貰った分と合わせ、役に立つだろう」

「…なるほど、流石はモモンガ様です。

既に手を打たれていたのですね」

(…ん?)

何度も頷くデミウルゴスに若干の疑問符を浮かべながら、下僕の報告は続く。

影の悪魔による各国への密偵の件。

事前情報により判明した王国、帝国、竜王国、聖王国、法国の5カ国の人類国家に偵察を行った結果をつらつらと述べていく。

まずはナザリックから一番近い王国。

肥沃な大地に生まれ、身を脅かす敵対種族も隣国に存在しない恵まれた土地にあるこの国は歴史も古く、数年前に代替わりした新王のもと人類圏の流通路として整備と発展を遂げている最中だ。

また魔巧の知識や魔法詠唱者の数において他国に劣るため講師を招き術者育成に励んでいる模様。

カルネ村で出会った彼、ガゼフ・ストロノーフが表向きの王国最強と謳われており、その他冒険者の最高位であるアダマンタイト級の者たちが複数王都へ居を構えている。

次に帝国。

表向き王国とは敵対関係にあり、《鮮血帝》とも称される国王による辣腕で繁栄を勝ち取ってきた。

戦力も組織化された重装部隊や飛竜による騎乗兵部隊などバリエーション豊かで、皇帝直々に選び抜いた帝国四騎士と呼ばれる実力者に加え、《灼魔星》と称される魔巧位階【星】の持ち主にして帝国最強の魔法詠唱者フルーダ・パラダインが在籍する戦争強国。

聖王国は地理的にナザリツクから最も離れた国で、後述する法国とは宗教的対立関係にありながらも隣接する亜人との戦争において共同戦線を張りながら交流を持つ。

【星】の位階を持つ者が一名在籍しており、国の軍事責任者として様々なマジックアイテムや魔法戦略を考案し八面六臂の活躍を見せているのだとか。

他の国々とは毛色が違い、存亡の危機を迎えているのが竜王国。

竜の血を引くという女王が治める国で、現在進行形でビーストマンという亜人種から侵攻を受けている。

冒険者の最高位、アダマンタイト級に相当する冒険者チームとワーカーチームの力を借りながら、更に他国の助力も得る形で一進一退の攻防を繰り返している一方、魔巧同盟のマジックアイテムを生産する大工廠を国内各所に揃えており、経済力は他国に勝るとも劣らない模様。

そして…

「最後にぐ報告なのですが…

スレイン法国についての情報は、得られませんでした」

「…何？」

「偵察に飛ばした影の悪魔は全て都市付近に近付いた瞬間に蒸発し消滅。」

地形の把握はできれど各都市、村々に至るまで内部に近寄る事は叶いませんでした。

《遠隔視の鏡》またはニグレドの遠視を用いての試みも思案していましたが：相当に強力な阻害結果が張られている模様です」

「遠視の類は止めておけ、カウンターを仕込まれていたら被害を受けるのはこちらだ。」

しかしそうか…」

モモンガは顎に手を当て物思いにふける。

スレイン法国。

カルネ村で恩を売ったイアンが所属する国家であり、会話の端々から察するに魔巧技術の総本山と言っても過言ではない。

彼の言を信じる限り、六大神という神を信仰する宗教国家。現在の人類圏で一番栄えているであろう場所だ。

悪魔を瞬時に滅するような結果を各地に張り巡らせる用心深さなら遠隔視の類は全て対処していると見て間違いない。ならこれ以上の詮索は悪手。

深追い禁物、ユグドラシル時代に何度もあつた事だ。

経験則からくる判断でデミウルゴスの提案を一蹴する、彼も疑問を呈す事無く即座に了承し頷いた。

（イアンさんのお誘いもあるし、直接行きたいなあスレイン法国。

そこで鉄騎馬：あわよくば俺用の撃杖を…

金どうしよう…あーあー欲しい物が多過ぎる。

また金欠のスパイラルに…）

「流石は至高の御方にあらせられます。

二手三手先を読むその智謀、やはり我々如きでは遠く及ばない」
（いまデミウルゴスが意味深な発言をしたような…

ああそれよりも金だ金！

現地の金貨の質を見る限り手持ちのユグドラシル金貨じゃ物が違い過ぎて換金は不可能だろう。

…さてよ、ルーン石の原料は宝石だ。

宝石ならデイリー消化で有り余った鉱石が大量に眠ってる！

宝物庫の宝石を幾らか持ち込んで換金するか材料にしてもらうかすれば代金はかなり浮くんじやないか!? 相場のバランスとか質とかの問題はあるだろうが可能性はある!

そうと決まれば早速宝物庫に…あ。

パ
ン
ド
ラ
に
会
わ
な
い
と
い
け
な
い

金欠具合を嘆き明滅を繰り返すモモンガは下僕の発言に気付かないまま、報告会は終了。

下僕達に下った新たな指令は「『武技』なる技術の扱える存在の確保」、「ナザリックに住まう者の為、居なくなってもいい人間の調達」、そして「魔巧技術に関する情報、人材を見繕う」だ。

采配はナザリックの誇る知恵者であるアルベドとデミウルゴスに任せておけば問題ないと判断したため一任する事になった。

「では私は所用につき宝物庫へ向かう。

シズ、ユリ、ナーベラルと伴をせよ」

「…はい、モモンガ様」

「かしこまりました」

「お待ちくださいモモンガ様！」

私！アルベドも伴をしとうございます！」

「貴女は先程勅命を頂いたばかりでしょうアルベド。

守護者達と会議です、少しばかり根を詰める必要がありますからね。

逃がしませんよ」

「ご同行願います、アルベド様」

「あああああああなんでメイド達ばかりいいいい…」

「年増の断末魔は聞くに耐えないでありますねえ。

さっ、モモンガ様♡共に宝物庫へ参りましょ「才前モ守護者ダロウ、シャルティア」おいッ！コキュートス離すであります！離せッ…いやあああああああ…！」

セバスとデミウルゴスの2人がかりで肩を掴まれ引つ張られるアルベドと、コキュートスの巨体に担がれながらシャルティアが連行され、それをアウラが白い目で眺めている横で「ご、ご迷惑をおかけしました!」とマーレがペコペコと何度も頭を下げながら別室の扉を閉じた。

「う、うむ。

他の者も随時解散して構わない。

ナーベラル、ユリ、シズ、行くぞ」

ナザリックは今日も平和だな!

34 ノーゲーム・ノーアンデッドライフ

「お、っ♡…おっ♡おっほお…♡」

びたんびたんとして軟体が跳ねる。

形を保てなくなっても尚狂喜と興奮で床をのたうち回るその姿はさながら杵の中で突かれる突き立ての餅さながらで、モモンガの脳内では嘗て映像資料で見た100年以上前の日本の正月の様子が思い起こされた。現実はそのような綺麗なものではないが。

「おほお…♡ああ…恍惚とは正にこの事オ…♡」

息を荒らげ、ビクビクと痙攣しながら本来の形を保てなくなっても、それでも謎の根性で預かったマジックアイテムだけは優しく取り扱う。鑑定職を持つ者の鏡。

（これが本当の鏡餅…）

って俺は何下らない事考えんだ！

「あー…パンドラ、そろそろいいか？」

「…」

モモンガ自身もここまでやるとは思っていなかったが、それにも増して伴に連れてきた女性陣の目が白いこと白いこと。

初対面のはずなのに養豚場の豚でも見るかのような視線で事の成り行きを眺めている。

「も…もう少々お待ちくださいませモモンガ様…♡」

ふう♡少々昂り過ぎて…擬態能力にまで影響が…はあ♡

この曲線美♡機能美♡外観♡どれをとっても素晴らしい出来栄え

♡ひとつひとつのパーツに職人の Seele^魂が込められた珠玉の一品…

分かります、分かりますよオ！是なる一品には作り手の思い！拘り！その他諸々の愛情友情血と汗と涙の込められた技術の結晶だと言う事がア！

何より…何よりアアツ~~☒~~???:!!

私の鑑定スキルをもってしても解析不能に陥る程の情報量を持つルーン石と呼ばれる触媒の計り知れなさ、W^{なんて}i^素e^暗 w^{らしい}u^のn^でd^しe^よr^うv^うo

!! 私めの奥底に眠りし抗えぬコレクターとしてのリビドーが今ツ！全身をこれでもかと駆け巡っておりますれば!!

はあああ…見たい触れたい分解^{バラ}したああああい！
ンンンンンホオオアアアアアアアアツ♡

びったん！びったん！びったーん！

「うわあ」

再び荒ぶる姿に一同困惑。

あのシズが無表情ながら声を漏らしここまで引くレベルの悶えっぷりにモモンガも思わず天を仰ぐ。

全ては一丁の撃杖から始まった…

………

ほんの数分前

『かくて汝、全世界の栄光を我が物とし、暗きものは全て汝より離れ去るだろう』

重苦しい音を立てながら巨大で豪華な扉が開く。

ナザリツク地下大墳墓。

ギルドシステム「アリアドネ」によって一本に繋がっているはずのギルドホームにおいて唯一隔絶された場所に位置するこの宝物庫には、嘗ての栄誉を誇った極悪ギルド『アイズ・ウール・ゴウン』その全ての財が眠っている。

ギルドが半ば空中分解した後もコレクターであるモモンガの涙ぐましい努力によって、最低限の補填はされてきた。

そして開かれた扉の少し奥、談話室らしきスペースには…

『ンンンおっ久しぶりうございませすモモンガ様ツ!!』

このパンドラ、一日千秋の想いで再びお会いできる瞬間^{とき}を心待ちにしておりましたツ!!』

／バーン!!／

JOJOだったらこんな効果音が付いてきそうなポーズと共にソファから立ち上がり、モモンガに敬礼を示すNPC。

某国親衛隊とそっくりの軍服を着込むハニワ顔。

名はパンドラズ・アクター

種族はナーベラルと同じ二重^{ドッベルゲンガー}の影にして、他ならぬモモンガが直々に創造したLv100NPCである。

こんな出で立ちをしているが、ギルドメンバー全員に化けその八割程の戦力を再現できる超優秀なキャラクターだ。

加えてアルベド、デミウルゴスに次ぐ頭脳の持ち主。戦闘に投入してもよし、参謀としても無類の強さを発揮出来るときた。

そんな竹中○兵衛と本多忠○を足して割った様な超強力ユニットをモモンガはなんで出し渋っているのかというところ……

『おう……久しいな、パンドラよ……』

私もお前に会えて嬉しいぞ』

『あアツ!!再びこうして創造主にお会いできるとは!』

このパンドラ望外の喜びにございます!

それでモ☒? ?モオン☒???ガ様!

…本日はツ(マントバサアツ!)どのようなご要件で此方へ?(軍帽クイツ)』

(ぬっぐふう…ツ)ピカピカピカ

当時のモモンガが「これカッコイイだろ」と感じたものを詰め込んで作製した「ぼくのかんがえたさいきょうのNPC」それがパンドラ。

芝居がかった語り口調!親衛隊の軍服!無駄に発音の良いドイツ語!そしてオーバーリアクション!

異世界転位した結果、前世白衣のマッドサイエンティストだったり円卓の騎士だったり伝説の配管工だったりするような無駄に良い声を持つてパンドラは爆誕した。

過去の自分を突き付けられているようで、見るだけでモモンガは心がチクチクします。おお、黒歴史黒歴史。

そんな文字通り『歩く黒歴史』ことパンドラの下へわざわざ訪れたのには理由がある。

『状況説明は後だパンドラよ。』

お前に鑑定して欲しい物がある』

『ほう…鑑定、でございますか。』

お任せ下さい!

このパンドラズ・アクター、どんなアイテムでも大歓迎!丸裸に致しましょうッ!』

談話室のソファに案内される。

『して…本日はどのような品をお持ちで？』

ああッ！栄光あるナザリックにまた1つ、新たなマジックアイテムが刻まれる…素晴らしいッ！

現存する財宝はあらかた磨き終えてしまいましたので最近では金貨を一枚一枚丁寧に拭き直していたのですが、そんな生活とも今日でお別れです！』

(マジか、それだけ俺が外に出さずに放置してた結果だよなあ…)

ちよつと罪悪感があるぞ)

『ああ、きつとお前の鑑定眼に叶う物だろう。』

これから見せる物は我々の世界には存在しなかった完全なる未知の代物だ。

お前の能力に期待している』

『ッ！Wen^我nes^がmei^神nes^のGot^望tes^みWil^あle^らば^ぼ!!』

(おっふう…)ビカビカビカー！

『な、ナーベラル。あれを』

『はっ』

被せていた布を剥ぎ、テーブルの上へ撃杖^{ツレ}を差し出す。

一目見たパンドラが一瞬固まって、視線だけがモモンガと撃杖を交差した。

しばし、沈黙。

ピツシヤアアアアアン!!とパンドラの背に落ちる特大の稲妻をモモンガは幻視する。

同時に「やっべ」と本能的に察した。

だが奴は、弾けた

「んっほおおおおおおおッ♡」

途端、水風船が弾け飛ぶようにパンドラの身体が四散するのを彼等
は見ている事しか出来なかった。

擬態の機能不全に陥っているようだ。即座に精神安定の発動した
モモンガはそう判断したがメイド達は何事かと臨戦態勢を取ろうと
し、それを上擦った声のパンドラが制した。

スライムと見まごう程本来の形を保てなくなった1人分の白い塊
は、自身の軍服すら気直せぬほどにうによくと激しく痙攣するパ
ンドラその人。

時折聞こえてくる恍惚の悲鳴が宝物庫に木霊する度にユリとナー
ベラルの表情も先程までとは違う理由で曇っていく。

おそるおそる、そういった様子でモモンガは彼に声をかけた。

『ど、どうだパンドラ。』

何か分かる事は…』

『O, Freude …』

『……………何だつて?』

『Freude, schönere Götterfunken!』

Tochter aus Elysium!

Wir betreten feuertrunken

Himmelsche, deine Heiligum!!!ツ…』

『ど、どうしたパンドラ。おい!』

『Seid umschlungen, Millionen!』

Dieses Kusder ganzen Welt!

Bruder, uberm Sternenzelt

Musein lieber Vater wohnen!!!』

『おい!おーい!!!パンドラア!!』

戻って来い!』

『Ahnest du den Schöpfer, wer?』

Such ihn, uberm Sternenzelt!

Uber Sternen muss er wohnen!』

『待て待て待て!!!』

落ち着くのだパンドラ!

気持ち分かる!わかるのだが!

それ以上ドイツ語で喋られると俺が辛い!!

頼むから落ち着いてくれエ!!』

『Bessen get nichthhhhhhh???'
』

????!!』

~~~~しばらくお待ちください~~~~

そして、冒頭に戻る

「おっ♡…おっ♡」

うん、きたない

c v 宮○真守の声で喘ぐ文章を書くこちらの身にもなって欲しい。

そんなこんなで不定形になってしまったパンドラ。

モモンガはもうなんか恥も外聞もかなくなり捨てて骨の顔を覆って俯いている。蛍光灯かっくらいいその背は光り輝いていた。

「「うわあ」」

そんな役者の痴態を初見で目の当たりにしたメイドたちの心境は如何程のものか想像に難くない。

ユリなんて普段の言動が嘘みたいにゴミを見るような目で役職的



には上司であるはずの守護者を眺めてた。

役者（アクター）だもんね、この痴態も役者の名演技だと言ってよ  
バー〇イ。

ところがぎつちよん、現実是非情である。  
素なんだなあこれが。

「大変失礼致しましたモモンガ様」

「うわあ急に落ち着くな！」

「一周まわって冷静になりました。」

そちらのお嬢様方も、先程はお見苦しい姿をお見せしてしまい申し  
訳ありません。平に謝罪致します」

「え、ハイ」

「ええ…こんなのが私の同胞？」

「うわあ」

なんて大真面目に喋ってはいるが、まだ身体は完全には戻っておら  
ず、辛うじて生成した声帯で冷静に言葉を紡ぐ。

メイドたちもお嬢様扱いされたことすら大して気にしない程度に  
は困惑していた。

シズなんてもう「うわあ」と言うだけの機械になってしまったよ。

「先ずこちらのマジックアイテムですが、パーツひとつひとつに等級  
が別れております。」

低いものはこちら基準で言うところの【最上級】、高いものなら  
【遺産級】<sup>レガシー</sup>のレア度を保有しております」

「遺産級…我々基準だと少し物足りないが、ひとつひとつにレア度が  
別れているとは。」

俺の鑑定スキルでは計れないわけだ」  
「ですが性能は侮れません。」

私の見立て通りなら組み合わせ次第でその精巧さ、精度の高さは  
【聖遺物級】<sup>レリック</sup>以上に匹敵するかと。

何よりこのフオオオルムツ!!

杖である事を逆手にとったこの画期的な形状オ<sup>?</sup>??!

内部の排熱機構に至るまで計算し尽くされた機能美イ<sup>?</sup>??!  
中心部の石に秘められし神秘の香穂<sup>かほ</sup>りイア<sup>?</sup>??!

正に完璧、魔法詠唱者の為に製錬された杖の完成系<sup>?</sup>!!  
え無いでしょう!!

「お、おう…そうか…(ピカピカ)

だいぶ私見がこもってないか?」

「いいえッ…そのような事は決つてございません!

かのマジックアイテムからは造り手の滾らんばかりに熱い情熱が垣間見えます。

有り体に言つてしまえば匠の技というヤツですね。

型番を見るにこれは量産が可能なタイプなのでしよう、できるなら是非ッ!ワンオフ品をこの目で見てみたいものです!

どんな変態機構が見られるのかワクワクでこの胸がツああつ!また四散しそうです!ごさいます!」

「止める、落ち着け。な?」

ではナザリックで複製は可能か?」

「無理ですね」

先程までの歓喜の雄叫びから一転、そうキツパリと唱えるパンドラにユリとナーベラルは一目で分かるくらいに顔を顰めた。

ナザリックとはユグドラシル内でも有数の巨大ギルド、過去には鉞山を丸ごと占拠だつてした事がある。その財力でもってして、たかがアイテム生成に不可能などあるものか。

「不敬では?」

たかが人間の作ったアイテムがナザリックの力をもつてしても生成できないなんて…」

「そうは仰りましてもお嬢様<sup>フロイライン</sup>。

分からないのです」

「ほう、分からないか。

ナザリックの宝物庫、そのすべてを把握し素材まで詳らかに記憶するお前が」

「素材は木材と鉄、こちらの綺麗な石は別として、判明しているのはそれくらい。

それが何故か魔法を発動し、筒先から放出する。

その結果だけしか理解できません。

全くの未知。このパンドラ、鑑定スキルでレア度と素材の善し悪しは把握できますがそれぞれのパーツがどのような意味を成し、どういった過程で魔法が発動できているのかさっぱりでして。

「パーツごとに等級が別れている故なのでしょう、それとも…」  
「結果しか分からない、か。  
なるほどな」

モモンガは考える。

パンドラは自分の付け合わせのような安物とは違い、専門職の鑑定スキルを所持している。

一芸秀でれば強いユグドラシルにおいて専門職の鑑定ほど信頼できるものはない。

その鑑定が素材とレア度しか判別できず、かつ『杖』であるということしか理解できないのなら、いよいよもってユグドラシル外のアイテムは完全なる未知の領域だ。

（いや、違う。恐れるな。

未知だからこそ覚えなければ。

ゲームじゃない異世界だからこそ学習し身につけないとこの世界じゃやっていけない。

パンドラにもナーベラルと同じく魔巧の知識を付けてもらうのはどうだ？

アイツの性格上喜んで勉強するだろうけど…反応がなあ…)

「パンドラよ、宝物庫を出て『未知』を学ぶ気はあるか？」

それはそれは良い返事が宝物庫を揺らしましたとき



## 第6階層 コロツセウム

「ああつ！ナーベラル殿素晴らしい！」

そう片手でリロード放熱をツツくう！！

銃口をそう！もう少し上に！ああその角度！

イイですねえ最高ですねエ！！ツエーイ☆

モモオオンガ様！アレ私も欲しい！使いたいです！」

「俺だつて欲しいさ。イイよな、撃杖」

「ええ…それはもう…」

「「イイ…」」

「モモンガ様と馴れ馴れしく話してるの、アレ誰？」

「宝物庫の領域守護者であらせられるパンドラズ・アクター様です。

これ以上はボク…私からはちよつと」

「えー宝物庫番なんて凄いいじゃん、ちよつと言動がおかしいけど。

なんでユリは気まずそうに目をそらすの、凄いい奴なんですよ？」

「…ハイ。おそろく、たぶん、きつと」

「ええ…でもモモンガ様とっても楽しそう」

「アレがモモンガさまが持ち帰った物…

ちよつとかつこいいかも…」

「…ん、マーレ様もアレの良き、分かる？」

「は、ハイ！」

「なんだか心の底を擦られるような不思議な気持ちになります…なんだろうこれ」

「…形状、私の魔道銃に似てる、けど。」

「魔法詠唱者にしか、撃てない。残念」

「えー…そうなんですか!？」

「えへ…じゃあ僕も…使えるかなあ…」

「…別室にて…」

「もういいでありんしょう!？」

「妾もモモンガ様について行きたいでありんす！」

「チビ助達は解散なのになんで妾だけ!？」

「駄目だ、実働部隊のシヤルティアには覚えておいて貰わないといけない事が山ほどあるからね。」

「モモンガ様の為に働きたいと豪語したのは君だろう」

「そうよく頑張って覚えなさい。」

「じゃあ後は頼むわデミウル「君もだアルベド、守護者統括が会議の最前線にいらなくてどうする」しゅん…」

「イト、哀レナリ」

「モモンガ様の命令通り、完璧に目標を確保しなければ」

「疲れを知らぬ守護者達の会議は夜明けまで続いた…」



「モモンさん、此方は終わりました！」

「了解です。」

気配から察するに、入口周りはこれで片付いたようですね」

王国エ・レエブル領の資源地帯。

都市部より少し離れた村から出発する事少し、辿り着いた件の坑道で俺たちと漆黒の剣の皆さんは戦っている。

現地までは領主であるレエブン侯爵直轄の鉄騎馬が迎えに来てくれて、俺たちはそれに搭乗し領地まで楽々辿り着いた。

馬と違って休ませる必要も無いから到着も速い、日が明るいうちに目的の領地へ到達してしまっただけでそのまま坑道へと赴く。

長引きそうだと踏んで野営の準備もしているのだし。

周囲の炭鉱夫たちは現場から離れているか既に死んでいるのでこの辺りにはターゲツトとなるトロールしかいない。

一番近い村へ続く道にはレエブン侯爵の側近、元冒険者のロックマイーアーさん達が予防線を張ってくれているので安心してトロール退治にうちこめるワケだ。

鉱夫達の簡易拠点だった建物を荒らしまわり、自分たちの住処にしていた見張り番を三枚おろしにして背後を警戒しながら坑道内部へと突入する。

一晚練習したナーベラルの撃杖の具合も上々、パンドラの熱心なレッスンの結果か命中率もかなり上がってきた。

《魔法口径圧縮》についてはまだ座学が必要だけど：

奥に進むほど臭ってくる土に混じった血と肉の合わさった腐臭に無い鼻が振れそうになるが、不快感で吐く胃もないからな。

入ってすぐに酷く四肢や頭の欠損した大量の遺体も見つけた。

漆黒の剣の皆さんはかなり渋い顔をしているが：

こういう時アンデッドで良かったと思ってしまう。

「うっ…」

「おそらく炭鉱作業中に襲われたのでしょう。

気の毒ですが埋葬している暇はありません」

「モモン殿、冷静であるな。」

簡単ではあるが自分が吊っておこう」

正式な聖職ではないがドルイドであるダインさんが彼等を吊い、自分達は先へと進む。

最奥に近付くにつれ、呻き声と共に現れるひとつの影。

…なんだ、これは。

「なんか…様子がおかしくねえか？」

野伏<sup>レンジャー</sup>だからか、鋭敏な聴覚で感じ取った異変にルクルツトが声を上げる。

坑道の奥からヨタヨタと現れた1匹のトロール。

サイズは通常個体より少し大きい程度で本来緑色に近いはずの体色は薄気味悪い紫に変色し、片手には人の腕力では到底扱えない大きさの棍棒、空いた方の手には同胞であるはずのトロールの死体の脚を血糊と一緒に引き摺りながら、幽鬼のような佇まいで此方へ近付いてくる。生気の欠片も感じさせない虚ろな瞳が場違いなほどグルグルと動き回り、更に不快感を加速させた。

「これは…一体…」

おかしい、明らかにおかしいのだ。

異様な見た目もおかしな動きもそうだが、何故こいつから…

アンデッドの気配がする？

忙しなく動く血走った目玉が間もなくぎよろりとこちらを睨む。

目玉のひとつひとつがそれぞれニヤとナーベラルに向けられているのに気が付いたその時。

「闇ヲ纏励〈闇ヲ纏励〉谿コ纏励※谿コ纏励※ツツツ!!」

放たれた血を吐くような叫び声。

これは…ッ！

「ひっ…!？」

「…ッ!？」

途端、それを耳にした2人が震え始め間もなくして腰を抜かしたのか膝をついた。

極寒にいるのかと見間違うほどに身体は恐怖に震えていて、こちらに聞こえるほどガチガチと歯を鳴らし顔色もすこぶる悪い。

ニニヤはともかく、ナーベラルまでが…!？」

「《ファイアー・クラライ恐怖の雄叫び》か!？」

「ゴイツ狙って魔法詠唱者だけを…!？」

ニニヤ！ナーベちゃん！

「ナーベ、どうした!？」

「モ…モンさッ…あ…

なんで…私…ッ!？」

思わず呼びかけてみるもその瞳は涙目になっており焦点が定まっておらず、宙を泳いでいて呼吸もままならないのか息も荒い。酷く困惑しているのか必死に自分を抱き締め弱々しく震えていた。

明らかに精神状態に異常をきたしている、普段のナーベラルならありえない程怯えた表情だった。

おかしい。

冒険者活動における事前準備として俺とナーベラルには考えうる限りの状態異常における耐性をアイテムによって獲得しているはずだ。

そもそもレベルの低いこの世界では俺たちに通用する状態異常の方が少ないだろう。

《恐怖》状態への対処なんて初歩も初歩、きちんと対策はしているはずなのに…何故ナーベラルまで動けない!？」



「これもゲーム外スキルの影響…なのか？」

「俺とモモンさんが前に！」

ダイン、彼女達に《獅子の如き心》ライオンズ・ハートを！

「了解である！」

「…了解！」

内心焦る俺とは対照的に予想外の事態でも冷静な判断を下すペテル。

流石長年リーダーを務めるだけはある。

後方は既にルクルットが確保しいつでも脱出できるようにしてくれているようだ、なら俺は目の前の不屈き者を叩き切るだけ…

ギルメンの娘同然の存在によくもやってくれたな！

苛立ちに任せトロールの胸を薙ぐ。

案の定上と下が泣き別れたトロールの上半身は吹っ飛んで坑道の壁に臓物と共にぶちまけられた。

よく見ると腹の辺りにナイフで切りつけた跡の様なものが見える。文字のようだが勉強中の異世界文字とはまた違うものだ。

やっぱりレベルは低い、なら何故ナーベが…

「さ、流石モモンさん。凄いパワーだ…

ツ!!まだ動くのか!？」

驚愕するペテルの声につられて顔を向けると、衝撃で無惨に潰れたトロールが上半身だけで這いつくばって向かってくる。

そうか、アンデッドだもんな。

ユグドラシルなら体力が切れれば消滅するハズなのだけど、こつちでは仕様が違うのか？なんて精神安定が働いて妙に冴え渡った頭で考える。

「丁度いい、一度殺したくらいじゃ斬り足りなかったところだ」

今度は縦に真つ二つにしてやった。

飛び散った破片を散らしながら飛散するトロールだったもの、これで終わり…

「ッまだ動くのか！執拗いぞ！」

なんと飛んだ腕はのたうち回って執拗にナーベラルとニニヤに掴みかかろうとしている。

しかも切り飛ばした勢いを利用して2人へ向かって一直線に飛んで行くじゃないか！

「ッこの！」

ダインの魔法によって回復したニニヤはいち早く撃杖の先を向け、《火球》で燃やし尽くす。

対するナーベも撃杖を残った腕に向けようとして…

「あ…」

取り落とした。

まだ震えている手を抑えながら自分自身に驚愕している、そんな表情でナーベラルは動けない。

それでも腕はナーベラルに触れようと眼前まで迫ったその時。

「ッ危ねえ!!」

動けないナーベを突き飛ばし、素早く動いたルクルットが入れ替わるように腕に触れた。

「なっ!?!」

その瞬間。

掴みかかる腕から紫の光が迸り、ルクルットから腕に向かって何か  
が流れ出しているのを幻視する。

いや、吸い取られている…!?

「うおおおおああ気持ち悪いんだよこの野郎オ！」

見てわかるほどの異常事態にルクルットは大声を上げながら力を  
振り絞り、「俺のそばに近寄るなアアツ！」とばかりに掴み取った腕  
を壁に向かって叩き付けた。

そこにすかさずニニヤが《火球》を撃ち込み、今度こそ炭になった  
トロールの腕は沈黙した。

「な、なんだったんだ今のは…」

「ルクルット無事か!？」

「ああ、俺はなんとも…」

「ッそれよりナーベちゃん、大丈夫か!？」

「……………」

ナーベはまだ軽く震えている。

「ナーベ、声は出せるか？」

「落ち着いてからでいい」

「ツいえ…大丈夫です…」

「震えも収まりました」

「そうか、身体に異常があれば遠慮なく言え。

ルクルットさん、ありがとうございました。

ほらナーベ、お前も」

「な、何故「いいから言え」ッ…………助かったわ(ボソツ)」

こんな所までカルマ値の弊害がア：

だが今回は助けられたんだからお礼くらい言っただけで当然だ、頼むから礼くらい述べてくれ。

「いーのいーの！」

ナーベちゃんが助かったならそれで良かったじゃん！

咄嗟に割って入った時のオレ、格好良かっただろ？」

「調子に乗るな死ね」

「流れるように罵倒!？」

「あはは…探知にもこれ以上モンスターへの反応はありません。

ペテル、そろそろ坑道を出しましょう」

「ああ、モモンさんもそれでいいですか？」

「了解です。」

それにしてもなんだったんださっきのアンデッドは…」

とにかく気色悪いトロールだった。

アンデッド特有の雰囲気はあったが「質」が俺の知っているものと全く異なる。ランクの上下ではなく完全に別物のアンデッドだ。

「腹に刻まれていた文字も気になるな…」

「アレは…僕もチラッと見えただけなんですけどがたぶん…」

「話はあとあと！とつとつと下山だ、こんな気色悪い場所にいつまでもいてらんねえよ」

妙に急かすルクルツトに従って、いくつもの疑問を残したまま俺たちは坑道を後にする。

.....

坑道を下山し、ロックマイアーさん達と合流後、俺たちは鉄騎馬の迎いでエ・レエブルの都市まで戻り、領主に事の顛末を伝えた。

ロックマイアーさんのチームが確認したが俺たちの働きの甲斐あつて坑道のトロール達は全滅していた。

遅延していた炭鉱作業は死骸の撤収作業、焼却処分の後、折を見て再開する予定なのだそうです。

魔巧が流行っている今、鉱山資源は貴重だから復興は急ピッチで進めたいらしい。

最後に出てきたトロールについても報告する。

俺とニヤが見たトロールの皮膚に切りつけられていた文字。

あれは魔巧を発動する為に刻む『ルーン文字』だった。

それが原因でアンデッド化したのかは分からないが…

「実は…ルーン文字の刻まれたアンデッドは他の領地にも出没しているね。」

今まではゴブリンや野<sup>ローン・ウルフ</sup>狼程度だったのだが、遂にトロールにまで刻まれていたのか。

どの個体もかのモンスター同様、首だけになっても動き回り炎で完全に燃え尽きるまで動き続けたそうだ」

「マジかよ、タチ悪いな」

「他に我々から出せる情報としては…」

魔法詠唱者のみを対象にした《恐怖の雄叫び》の発動、でしうか」  
「ニヤさんもナーベも耐性を持つアイテムを所持していたにも関わらず精神への負荷が掛かったようです。

耐性を貫通するほど強力なスキルか、他の魔法によるブーストなのか…」

「魔法詠唱者を対象に絞ることによって条件付きで強化されるスキルなのかも知れません…」

「だとしてもそんな高度な技術をアンデッド化したトロールが使用するのには異常だ」

「何か意図的なものを感じるのであるな。」

「不吉の予兆でなければよいのであるが…」

「兎に角俺たちはエ・ランテルに戻って組合長に事の顛末を報告します」

「ああ、助かった。依頼は完了だ。」

報酬はギルド経由で支払ってある。

アンデッドの異変に関しては私の方でも貴族間で情報を集め、注意喚起をしておこう。

君たちも…えーと、モモンくんだったか？

銀級にしておくには惜しい実力だ、益々の活躍を期待しているよ」

冒険者組合の金払いが悪くなったら雇われに来たまえ、良い金額を提示しよう。と領主に軽口を叩かれ俺たちはエ・レエブルをあとにする。

相手はお偉いさんだったんだよな？

思ったよりフレンドリーな人だったな、仕事も斡旋してくれるって言うってたし。『漆黒の剣』のオマケ扱いだと思っていたけれど、存外俺たち評価されてるみたいだ。

「というか比較対象が横柄な態度のリーダーで有名な『クラルグラ』だから余計俺たちや漆黒の剣の皆さんが好意的に思われてるのかも。」

「そう言えば、モモンさんはパーティ名は考えないんですか？」

「生憎と2人ですからね、そうだなあ…」

『モモンとナーベ』とか」

「そのまんまであるな」

「モモンは黒の鎧着てるし『黒騎士』とかどうよ。」

ナーベちゃんは『麗しの姫君ナーブ』『死んでください早急に』せめ

て最後まで言わせてえ!？」

「僕らと黒が被っちゃいますね…」

でもお2人の力なら銀級なんてすぐに飛び越してオリハルコン…  
いえ王国最高位のアダマントタイト級だって夢じゃありませんよ!」

屈託のない笑顔でそう言うニニヤ。

薬草採取任務の夜では突き放すような事を言ってしまったが、暫く  
過ぎすうちに彼等にも愛着が湧いている。

といつても友人のように、とかではなくアンデッド補正でペットを  
飼っているような気分だが。

…いけないな、この差異に慣れてしまったらいよいよ歯止めが掛か  
らなくなるだろう。

『仕事仲間』：『戦友』でもいいな。高く飛べそうだ。

初対面でも好意的に接してくれたイアンさん、ガゼフさんもそう  
だ。

都合のいい情報源ではない、こちらを信用してくれたビジネスパー  
トナー。

信用には信用をもって応えるべきだ。

「ツ!?おいペテル、あれ!」

鉄騎馬の後部座席からルクルットが叫ぶ。

視線の先には我々の帰る先、エ・ランテル城塞都市の北部入口付近  
から黒煙が上がってるのが見えた。

それから地鳴りのような轟音と、モンスターの叫び声。

「この音量…かなりの大型モンスターであるな!」

「大型モンスターが城塞都市に直接攻めてきたってのか!?無茶苦茶だ  
ろ!」

「運転手さん、急いで下さい!」

「俺達が先行します、行くぞナーベ。」

《飛行》で着いてこい」

「……ッはい！」

鉄騎馬から飛び降り、脚に力を込める。

城門までの距離はさほど離れていない、ならもう鉄騎馬より走った方が早いな。

Lv100戦士職の脚力は尋常ではないのだ。

スタミナもアンデッドなので無尽蔵、やろうと思えばトップスピードのまま一日中走っていられる。

踏み込みと同時に土が派手に抉れ飛ぶが今はそんな事に構ってられる状況ではないからな！

「モモンさん、お気を付けて！」

「ええ、そちらも増援が来ないか警戒しつつ急行して下さい」

…今思えば、この行動は軽率だったと思う。

柄にもない突出をしてしまった。

「行っちゃった…」

「っーか速つや！鉄騎馬よりよっぽど速度出てるぞ!？」

「やはり規格外の御仁であるな…」



エ・ランテル城塞都市北門前。

いつもなら行商人の通行管理と検問程度の仕事しかなく、人も疎らでのかなエリアであるのだが、今回ばかりは勝手が違う。

けたたましい雄叫び

炸裂する破壊音

潰れ荒れ果てた検問所

城門は既に固く閉ざされており、非戦闘員は既に避難していた。

それでも周囲には少なからず被害は出ている。

運悪くその場に居合わせた衛兵の無惨な遺体は損傷の激しいまま転がされており、中には砕けた人型の石像も転がっている。

(石化魔法…スキルか?)

だとしたら敵は大型のコカトリスかナーガの上位種、バジリスク…むっ!?)

素早くその場を飛び退くモモンガ。

さつきまでいた場所には枯れ草のような色合いの巨大な尻尾が叩きつけられ、派手に土を巻き上げた。

もうもうと立ち込める土煙の中から獰猛な唸り声と共に現れたのは、血の滴る牙を剥き出しにする大型モンスター。

名をギガントバジリスク。

「大きいな、ユグドラシルなら金冠クラスだぞ」

ゲーム時代の記憶を手繰り、思い出すのは序盤に登場するモンスターだ。

ギガントの名の通り、バジリスク種の亜種にして始めたばかりのプレイヤーが最初にぶち当たる大型モンスターの壁である。

ユグドラシルではモンスターの個体ごとに大きさに差異があり、その中でも特別大きい、又は小さい個体は過去に存在した狩猟ゲームになぞらえて『金冠』という呼称で親しまれている。

モモンガの持つ石化耐性を付与するマジックアイテムが反応したのを感じる。

不安要素はあったが耐性は確実に機能しているようで胸を撫で下ろす。

(タイムしたバジリスクの大きさ比べ大会ってイベントもあつたなあ、懐かしい。

：おっと、ノスタルジックに浸っている場合じゃない。

視線による石化スキルは対策済みだ、ならあとは叩ききってしまったえ

ばどうとでもなるハズ…

「オイ！そこの黒鎧！

確か銀級のモモンだったよな!？」

名前を呼ばれ振り返る。

閉ざされた城壁の上、物見台からこちらを見つめる視線を感じた。

あの男は確か、ミスリル級冒険者チーム『クラルグラ』に所属していた盗賊<sup>シーフ</sup>だったはずだ。

リーダーの暴走を同じ所属の魔法詠唱者と2人で諫めている姿を何度か見た事がある。イグヴァルジよりはマシンな印象、程度の認識だが。

「そいつに近づくな、石にされるぞ！」

「分かっている、マジックアイテムで耐性はあるから問題ない！」

「そうじゃねえ血もだ！」

斬った傍から吹き出して触れたら鎧も何もかも石にされちまう！」

通常個体は血に猛毒をもつ筈だが、石化付与する血液をもつギガントバジリスクはユグドラシルに居なかつた個体だ。

細心の注意を払わなければいけない。

「情報感謝する、ナーベー！」  
「はっー！」

撃杖から撃ち下ろした《雷撃》<sup>ライトニング</sup>がバジリスクに降り注ぐ。

口径圧縮魔法が使えていればもつと火力が出せたのだろうが、今は詮無きこと。

苦悶の悲鳴を上げた後、そのヘイトはナーベラルへと向くのは必然だった。

おどろおどろしい爬虫類の瞳が妖しく輝く。

ナーベは一瞬怯むが、それ以外の異常は起きていない。マジックアイテムは問題なく機能したようだ。

続けざま、直接触れないよう細心の注意を払いながらグレートソードで斬りつける。

鬱陶しい尻尾を切り飛ばし、前脚を片方根本からもいで、腹には幾つもの斬撃痕を刻んでやった。

Lv100戦士職の力だ、大概のモンスターは即死するはずなのにギガントバジリスクはそれでも石化する血を吹き出しながら暴れ回り、一向に死ぬ気配は無い。

「やはりあの時のトロールと同じか！」

ナーベ、もう一度だ。雷でも駄目なら火を使え！」  
「はっー！」

いい加減くたばりなさい！」

再びナーベが撃杖を構えようとしたその時

「蜉ウ纏代※闇ヲ纏励◇ 谿コ纏励※谿コ纏励※ツ!!」

「ツうあ…!?また…?…」

あの時のトロールに酷似した咆哮。

ナーベに向けて放たれたそれは彼女に致命的な隙を与える。

《飛行》の効果も消え、受け身も取れないまま落下するナーベを見兼ねたモモンガは即座に攻撃を中止、剣を放り捨て落下する彼女を受け止めた。

「無事かナーベ!？」

「う……あ……」

顔を青くして震える彼女の状態は先のトロール戦と同じ。

未知の状態異常に侵されたナーベは最早戦いを続行できる状況にない。

そして今度の相手はウスノロのトロールとは違う、特大サイズのギガントバジリスクだ。

「ツチイ！」

ナーベを庇いながら巨体に弾き飛ばされる。

痛みを恐れぬバジリスクは戦いの中で負った傷から血が溢れ出し、クラルグラの彼が言ったように触れた地面が灰色に変色し石になっていく。

このままではジリ貧だ。

犠牲になった衛兵の痕跡を見るに石にされてしまえば鎧であろうとも容赦なく破壊されてしまう。

現に先程まで使っていた2本のグレートソードは返り血を浴びて刀身の半分以上が石化してしまった。

もう使い物にならないだろう。

(不味いな、鎧がやられてしまえば正体が…幻術では誤魔化しきれなくなるぞ。

ナーベラルを抱えたままでは戦闘もままならない)

それよりも、この化け物はここを越えれば都市内部に雪崩込む。それはよろしくない。

エ・ランテルはモモンガの大事な活動拠点だ、荒らされるのは嫌だし腹が立つ。

「俺にも『愛着』がちゃんとあるじゃないか」

日に日にアンデッドの精神に近づいていく自覚のあるモモンガだが、冒険者としての日々は確実に彼の心に彩りを与えているようだ。いや、人であった頃の『鈴木悟』にモモンガがしがみついているという方が正しいか。

ナザリツクに籠っていたらこの心情はきつと逆転していたのだろうな、と心の中でごちる。

しかし状況は好転しない。

いつそパーフェクトウォーリアーを解いて魔法で一掃してしまうか、そんな考えも頭に過ったその時。

『足止めゴクロー、新人クン』  
「!?!?」

戦士職で強化された聴覚でもギリギリ聞き取れた。

一陣の風と共にモモンガの横を黒い修道服が走り去る。

「《流水加速》、《虚空縮地》、《雷鳴疾駆》。

そんで『38番』、『39番』」

轟と、更に速度を上げた修道女は両袖から取り出した銃剣パヨネットで両脚を斬りつけ、バランスを崩し倒れるバジリスクの下から虚空を蹴って

直角に3次元移動しながら背後へと回り込む。

物理的に不可能な高速移動、例えばLv100の戦士でもユグドラシル基準なら不可能な立体機動にモモンガは無い眼球を瞬いた。

「あく石化めんどくせー…燃やすかあ！

『77番』。汝、その身を浄め給え！」

修道女が何かの番号を呟いた途端、その右手に巨大な十字架型の鉄杭が出現した。

投げ下ろす十字架が重力に従ってバジリスクの首元に突き刺さり、藻掻く巨体を地面に縫い付ける。

モモンガの前に着地し、アンデッド化し尚も暴れるモンスターを一瞥した修道女は心底面倒臭そうに一言。

この魂キリエに憐れレイみをソん

胸の十字架クロスにキスをする。

その一句に呼応するように鉄杭の四方に込められていたルーン文字が起動し、紅蓮の炎がバジリスクを火だるまに変えた。

余程の火力を注がれたのか血も肉も、腐った巨軀があつという間に燃え尽きて黒煙を上げるそのさまを、ナーベラルを抱えたまま呆けた顔で眺めるモモンガに彼女は緊張感の無い笑顔でヘラヘラ笑う。

「はいお仕事しゅーりよー」。

新人クンもごころーさん。

さー帰って一杯やろーつと」

これが冒険者モモンと、エ・ランテルに名高い「暴力聖女」の出会いであった。